

第二次大戦期 日本語教育振興会の活動 に関する再評価についての基礎的研究

報告 2

平成18年度～平成20年度科学研究費補助金 基盤研究（B）
（課題番号 18320085）

平成22（2010）年3月

研究代表者	財団法人 言語文化研究所	長谷川恒雄
連携研究者	東京外国語大学大学院 総合国際学研究院	河路由佳
連携研究者	北海道大学 留学生センター	中村重穂
連携研究者	天理大学 国際文化学部	前田均
連携研究者	九州大学大学院 比較社会文化研究科	松永典子

目 次

1	まえがき	河路 由佳	1
2	日本語教育振興会時代の日本語教育活動記録		5
2-1	日本語教育振興会活動資料 『日本語』目次一覧		5
2-2	日本語教育振興会活動資料 『日本語』彙報一覧		33
2-3	日本語教育振興会 会議録 (1941年8月25日—1945年12月27日)		101
3	1940年代の日本語教育史研究の意義——「あとがき」に代えて	河路 由佳	242

まえがき

本報告書は、科学研究費補助金の助成を受け、長谷川恒雄先生を研究代表者として取り組んだ研究課題「第二次大戦期日本語教育振興会の活動に関する再評価についての基礎的研究」の報告書3分冊のうちの2冊目に当たる。

「日本語教育振興会」という名前の組織は、当初1940年12月に民間機関である日語文化協会の中に置かれたが、これを引き継いだ形で1941年8月に文部省内に改めて設置された。1944年3月には財団法人の認可を受け、「財団法人日本語教育振興会」となった。終戦後の1945年12月、長沼直兄が理事長に就任し、その解散を決定、その財産および事業を引き継ぐ財団法人言語文化研究所の設立の準備を進めた。外務大臣・文部大臣による財団法人日本語教育振興会の解散許可の日付は翌1946年の5月31日、文部省・外務省共管の財団法人言語文化研究所の設立認可は同年の7月8日である。

本研究の報告書は3分冊にして刊行される。「報告1」は前田均氏の編集によって当時の日本語教育関連文献目録を中心に、「報告2」は河路の編集で、「日本語教育振興会の日本語教育活動記録」として、「日本語教育振興会編『日本語』目次一覧」「日本語教育振興会編『日本語』彙報一覧」そして「日本語教育振興会 会議録一覧」によって構成する。「報告3」は長谷川先生の編集による研究の総括となる。

1941年4月の創刊号から1945年1月号まで全33冊が発行された日本語教育振興会編『日本語』は1988年に冬至書房より復刻版が刊行されている。日本語教育振興会は当時の国内外の日本語教育を統括する役割を帯びていたことを反映し、当時の日本語教育にかかわる広い範囲の関係者が、さまざまな報告や意見を寄せている。本研究では、その目次を一覧にして検索等しやすいように電子データ化した。また、毎号の『日本語』に載っている「彙報」は、当時の日本語教育関係の動向を如実に伝える資料である。これもあわせてデータ化した。本冊子はその印刷版となる。

本冊子の「『日本語』目次一覧」は、雑誌『日本語』の目次を、そこに並べられている順番どおりに入力したものである。原本では創刊号から第四巻第二号（1944年2月）まで、扉の1ページ分の巻頭言の次の見開き2ページが目次である。上部にカットが入り、レイアウトや文字の大きさやデザインに変化がある工夫の凝らされたものである。本資料では、それらが反映できないが順番は原本のとおりとした。最初から順番に並んでいるわけではない。なお、原本も第四巻第三号（1944年3月）からは目次が巻頭言の右側の1ページとなり、カットがなくなり簡素になる。

同じく「彙報」一覧は、雑誌『日本語』の「彙報」を入力したものだが、実際に「彙報」という項目が定期的に掲載されるようになるのは『日本語』の発行所が財団法人日語文化協会（第一巻第六号まで）から文部省の日本語教育振興会に移ってからの第一巻第八号（1941年8月）以降である。それ以前については、「彙報」という項目はないが、日本語教育の動向は「通信」という欄にまとめられていたり、それとは別に日本語教育振興会の設

立等に関する内容が掲載されているので、こうした部分を適宜ぬきだして収めた。

さて、上記の2種は複製版があるのに比べ、「日本語教育振興会会議録一覧」については、未だ一般の目に触れることはなく、本報告書で初めて公開されるものである。1941年8月25日の「日本語教育振興会設立準備委員会」に始まり、1941年10月15日の「日本語教育振興会第1回常任理事会」から1944年3月17日の同第80回まで、そして財団法人化後、1944年3月24日の「財団法人日本語教育振興会第1回理事会」から1945年12月27日の同第64回までの会議録を中心に議場配布の資料を含めて日付の早い方から順に並べた。

日本語教育振興会の財産を引き継いだ財団法人言語文化研究所でも、原本は確認できておらず、複写が確認されているばかりである。西尾實氏の所蔵されていたものとされ、手書きの書きこみなどの残るものである。それも完全ではなく、欠けている部分がある。伝説のベールの奥にあるかと思われた日本語教育振興会の活動の実態が、これによって明らかになる。今後、これを活用することで、資料の少なさから憶測による記述がなされることの多かった戦中戦後の日本語教育史研究がより実証的かつ具体的なものになるであろうことが期待される。本報告の眼目のひとつである。

会議録の資料には、開催日の前に出された「開催通知」、当日配布資料、開催後にまとめられた「要録」の三種類がある。開催通知は、開催日の3日ほど前の日付で宛名（今回の資料では多くが長沼直兄に宛てられたものである）の書かれたもので主たる議題が書かれている。初期の資料にはこれが残っているものが多い。そして、会議当日に配布されたと思われる別紙の「報告及議題」には詳細が、ほかにも当日配布資料がある場合もある。そして、議事録にあたる会議の「要録」は、初期には開催日の5日ほど後の日付が付され（付されていないものもある）事後に関係者に送付されたようだが、やがて会議の頻度が多くなると、次回の会議の席上配布資料となる。

初期のもので、開催通知と要録の両方がそろっている場合には、情報が重なるので、要録の方を載せ、備考欄に「開催通知あり」と書いた。当日配布資料は、「要録」につづけて「別紙」として載せた。要録が存在せず、「開催通知」のみがある場合は、開催通知に記された開催の日時や場所、そして主たる議題を資料とし、備考に「要録なし」と記した。1943年の半ば以降、「要録」にタイプミスが手書きで修正されたものと、その修正が反映されたものとの二種が存在する場合があります、この場合は、修正済みの方を採用した。

会議録は和文タイプで印刷されたもののコピーであるが、手書きによる取り消し線や書き込みもあり、印刷が悪く、字画がぼやけて解読不能な箇所や、薄く消えて見える箇所などもある。これらについては他資料をも援用して解読に努め、文字を埋めることをした。取り消し線はこれを再現し、その脇に手書きで加えられた文字は【 】で囲んで示した。

例：日語文化教【協】會

なお、原本はすべて縦書きである。今回は、資料の整理の都合上、横書きにしたが、その関係で、数字が読みにくい箇所が生じた。予算や出版計画や実績報告も、原文はすべて漢数字が縦に並べられている。これをそのまま横書きにすると「三、五〇〇部」といった表記になるが、表になっている部分等、これを「3,500部」としたほうが読みやすいと思われる、このような場合には算用数字に置き換えた。（「四萬五千部」といった表記はそのまま

とした。)縦書き専用の繰り返し記号についても、これを用いない表記に改めた部分がある。

特に会議録については、手書きの書きこみ等のほか、印刷されたものにも誤りと思われるものもあった。その場合は、(ママ)と加えた。

縦書きの文をそのまま横書きに置き換えた関係から、「同上」とあれば、本資料では「左」にあるものと同じ、すなわち「同左」の意味になるなどの不都合も生じているが、これについては原本が縦書きであることをふまえて、置き換えて利用していただきたいと思う。

漢字の字体は、できるだけ原本通りにしようと務めたが、コンピューターの関係で写し取ることのできない字体もあり、それらは現在使われている字体に直すほかなかった。

大志万準治氏の姓や岡本千万太郎氏の名は、「大志萬」「千萬太郎」と印刷されているものもあるが、本会議録では「万」の字が使われていることが多い。原本どおりとした。

おそらくはもとの印刷そのものの問題と思われる文字の薄れやぼやけによって、解読不能な文字は、文脈や周辺の他の資料を援用し、埋められるものは極力埋めたが、判断に迷いのあるもの、どうしても解読できなかった文字については□に置きかえた。

ひとつ、原稿作成段階で、字画はわかるのに□にせざるを得なかった文字があった。興亜院文化部長、大東亜省参事官等の肩書で、初期から日本語教育振興会主催の講習会の講師や役員としてそのお名前が繰り返し現れる松村氏のお名前である。手書きで書かれる一文字で、字形がはっきり見えるにもかかわらず、データとして入れることができなかった。この漢字の説明をすると、上の部分は「書」に似ている。「ヨ」の中央の横棒が右側に突き出したものを、左右半分に分けるかのように中央を貫く縦棒を下の方まで伸ばし、「ヨ」のすぐ下から「八」のかたちに左右に払い、できあがった左下の空間に「心」、右下の空間に「巳」の字を書くという、全体で13画の文字である。この複雑な文字を、印刷に際して(株)国際文献印刷社の笠井健さんにご相談したところ、これについても綺麗に整えていただくことができ感謝しているが、読み方はなおわからない。ご存知の方にはぜひ教示いただきたいと願っている。

データの入力には、東京外国語大学で日本語教育を学んでいる学生の力を借りた。長谷川先生の監督・ご指導の下、2006年から2008年まで3回の夏に、留学生6名を含む次の15名が分担して取り組んだ。

張善実(2006年度修士2年)、黄慧(2006年度修士2年)、黄恵君(2006年度修士1年)、金国花(2006年度修士1年)、岡田さやか(2006年度学部3年)、馬香蘭(2006年度学部3年・2007年度学部4年)、黄美花(2007年度学部3年)、黒岩しづ可(2007年度学部3年)、河原新(2007年度学部3年)、佐藤千秋(2008年度学部3年)、溝口さやか(2008年度学部3年)、小島めぐみ(2008年度学部3年)、高田祥子(2008年度学部3年)、柴本智代(2008年度学部3年)、水野綾乃(2008年度学部3年)

学生諸君は暑さの中、地味な作業に根気強くとりくんでくれた。蛇足ながら、上海外国語大学での春の日本語教育実習のための資金をこの作業によって準備した学生もいる。実習指導者の私にはその意味でも助かった。科研の助成をいただいたおかげである。

15名の学生が入力したデータをエクセルファイルに統合する作業は、溝口さやかさんをお願いした。河路はそれをもとに書式を整え、原本と照合し、確認作業を行った。必要な

修正を加え、字体を含めて文書全体の整備を行った。本資料についての責任は河路にある。

雑誌『日本語』の原本もさることながら、会議録のコピーの束を発見し、これを初めて手に取ってめくったときの感動は忘れられない。こうしてデータを整理し公開することのできるの大きな喜びである。

なお、巻末に新旧漢字対照表を掲げておく。学生の入力作業は新字体でよいとしたので、そのあと全体を見ながら確認作業をするときに作成したものである。したがってこれらはすべて本資料に使われている文字である。入力作業を学生に手伝ってもらう中で、若い世代が康熙字典体、いわゆる旧字体に親しむ機会がなく、漢字の同定に手間取ったのを目の当たりにし、これを掲げておくのも意味のないことでもなさそうだった。できる範囲で原本の漢字の字体に近付けようとしたが、「産」の上部が交差しているとか、「冬」の下の二水の向きの違いなど、字形の似ているもので通常のコンピューターでは変換できないものも少なくなかった。この表はその意味で決して完全なものではない。学生たちが同定できなかったものには「鹽（塩）」、「廳（庁）」、「與（与）」など、字形の違いの大きいもので、細かい違いであれば読むのに問題はなかった。この資料に関心をもった若い世代がこの先、第一次資料に当たることを考えると、この機会に字体に慣れることも意義あることかと思う。必要のない方も多いであろうこの字体対照表を巻末に載せるのはそうした思いからである。

2010年3月 「報告2」編集責任者 河路 由佳

2-1 日本語教育振興会活動資料 『日本語』目次一覧

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
創刊號	1941年4月	カット	水平讓	
		發刊の辭	松尾長造	4
		東亞文化圏の今日及び明日	松村 隼	6
		日本語の海外發展策	小倉進平	12
		話言葉と書言葉	吉澤義則	20
		日本語教授のあと	松宮彌平	36
		外國人の日本語研究 (ハンガリー)	波番伊江能	63
		國語、國字問題の展望	倉野憲司	30
		「ハナシコトバ」と發音符號	各務虎雄	41
		外地に於ける日本語教授の現況		
		日本語教授に関する二三の感想	加藤春城	48
		滿州國に於ける日本語教授の動向	堀 敏夫	52
		臺灣に於ける國語教育	金丸四郎	59
		通信		44
		○日本語教育振興會		
		規則		30
		事業報告		68
		日本語教授参考文献	長沼直兄	34
		〔隨筆〕 鷺江と西湖	佐藤春夫	64
		原稿募集		71
		執筆者紹介		43・69
雜誌「日本語」刊行要旨		63		
編輯後記		70		
第一卷第二號	1941年5月	カット	水平讓	
		日本語の進出と日本語の教育	安藤正次	4
		北支に於ける日本語教育の特殊性	山口喜一郎	11
		教壇人の立場から	益田信夫	35
		第二回國語對策協議會を中心として		
		文部省に於ける國語對策の根本方針	松尾長造	17
		日本語普及の使命と議題		
		國語の學校教育と社會教育	島田牛稚	20
		語法と語彙の問題	小林正一	24
		三つの困難とその對策	大石初太郎	29
		協議會而して次は？	神保 格	49
		日本語教師の資格	東條 操	57

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		國語對策に就いての希望（ハガキ解答） 山根藤七 森田孝 島田牛稚 米田龜太郎 森田梧郎 石黒修 岡崎常太郎 小林正一 松坂忠則 加藤春城 大石初太郎 金丸四郎 鎌田專之助 黒野政市 岡本千万太郎 笥五百里		38
		現地に於ける日本語教授の現況		
		國語の歴史的現實	森田梧郎	44
		字音假名遣私考	市川三郎	47
		通信		50
		日本語教育參考文獻(二)	長沼直兄	56
		〔隨筆〕 從軍の思ひ出	深田久彌	58
		執筆者紹介		54
		編輯後記		60
第一卷第三號	1941年6月	表紙	水船三洋	
		カット	水平讓	
		國語教育と日本語教育	久松潛一	4
		日本語教師論 —日本語教育の文化史的意義—	白木喬一	9
		外國語教授に於ける母國語の位置	長沼直兄	17
		國民學校國民科の國語	松田武夫	48
		國語教育の深化擴大	志田延義	53
		外地に於ける日本語教授の現況		
		大陸に於ける日本語教授の概況	大出正篤	22
		青島特別市に於ける日本語教育	古川原	34
		日本語教授の方法的實踐	中村忠一	39
		朝鮮・臺灣に於ける國語教育機關紹介		32
		通信		57
		原稿募集		52
		日本語教育參考文獻(三)	長沼直兄	46
		〔隨筆〕 嘉興站とペントー賣り	釘本久春	60
		執筆者紹介		64
		編輯後記		表紙ノ三
第一卷第四號	1941年7月	表紙	水船三洋	
		カット	水平讓	
		文化語と生活語—特に日本語の特徴について—	長谷川如是閑	4
		生活語としての日本語	佐久間鼎	15

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		國語教育の立場から見た生活語と文化語	西尾實	22
		標準語教育に関する二三の問題	東條操	26
		敬讓語を造る接辭の用法	湯澤幸吉郎	30
		東京語のアクセント	三宅武郎	39
		國語教育参考文献(一)	大久保正太郎	62
		〔特輯〕日本語と日本文化(座談會)	方紀生 永島榮一郎 長沼直兄 佐藤春夫 大岡保三 大志萬準治 奥野信太郎 釘本久春 松宮一也	64
		通信		60
		現地		
		松宮彌平著「日本語教授法」を讀みて	日野成美	45
		全滿日語朗讀大會	今井榮	53
		〔隨筆〕語源閑話	大岡保三	85
		日本語教育振興會新委員・顧問		82
		執筆者紹介		59
		編輯後記		
		第一卷第五號	1941年8月	表紙
カット	水平讓			
言語の歴史的形成	柳田謙十郎			4
中國知識人と日本古典	齋藤清衛			11
日本語における漢字と漢語	吉田澄夫			16
東京語の問題	中村通夫			19
國語教育参考文献(二)	大久保正太郎			26
通信				51
東亞學校の内容				25
現地特輯				
滿洲に於ける日本語教育の私觀	前田熙胤			28
滿洲雜觀	森田孝			34
現地の日本語教育	松尾龍吉			37
教員養成所生活の回想	林米子			41

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		最近中支の日本語教育	菊沖徳平	45
		随筆		
		日本の年中行事（一）	三村清三郎	60
		語源閑話（二）	大岡保三	56
		執筆者紹介		24
		編輯後記		
第一巻第號六號	1941年9月	國語政策の意義	保科孝一	4
		國語自覺史の一頁	遠藤嘉基	14
		中國に於ける日本語教育の現状とその振興	關野房夫	20
		アクセントとイントネーション	石黒魯平	25
		日本語教科書と分別書き方	眞下三郎	33
		東京語の問題（二）	中村通夫	39
		國語教育参考文献(三)	大久保正太郎	44
		通信		67
		東亞に於ける諸國語の進出		
		獨逸語	吹田順助	46
		英吉利語	井上思外雄	50
		佛蘭西語	中平解	56
		露西亞語	八杉貞利	63
		随筆		
		日本の年中行事（二）	三村清三郎	70
		語源閑話（三）	大岡保三	76
執筆者紹介		38		
編輯後記		80		
第一巻第號七號	1941年10月	文字と言語	金田一京助	4
		假名の發達	松尾捨治郎	11
		「ひらがな」と「カタカナ」	戸田吉郎	19
		中國と日本に於ける漢字の相違	工藤篁	25
		漢字のよみかへについて	伊藤彌太郎	31
		國語教育参考文献	大久保正太郎	56

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		華北に於ける日本語教育（座談會）司會 藤村作	笈五百里 勝又憲治郎 久保田藤麿 小泉藤造 國府種武 高木千鷹 佐野憲之助 四宮春行 篠原利逸 錢稻孫 松下喜信 山口喜一郎	38
		日本語教育振興會の設立		37
		東京語の問題（三）	中村通夫	51
		〔隨筆〕日本の年中行事（三）	三村清三郎	58
		執筆者紹介		50
		編輯後記		64
第一卷第號八號	1941年12月	卷頭言	松尾長造	
		日本語の論理性と情操性	長谷川如是閑	4
		日本語の東亞進出に關する一感想	吉田三郎	14
		海外で感じた日本語の問題	西本三十二	18
		戦争と言葉	坂部重義	22
		〔書評〕支那文化の紹介文獻（一）	岩村忍	44
		中國日本語研究文獻（一）	菊沖徳平	56
		日本語教室		
		或る會話教授の批判	日野成美	26
		一つの報告	森田梧郎	37
		カナダにおける日本語教育	佐藤傳	40
		日本語の美しさの根柢	佐藤春夫	50
		日本の小鳥	中西梧堂	53
		隨筆		
		日本の年中行事（四）	三村清三郎	62
		言葉談義（一）	各務虎雄	72
		彙報		76
		〔讀者欄〕設置について		49
		執筆者紹介		49

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
第二卷第一號	1942年1月	卷頭言	大岡保三	
		日本語の語法の諸問題	佐久間鼎	4
		華北に於ける日本語教育について	柯政和	14
		日本語教授法序説	山口喜一郎	21
		日本語教室		
		日本語教室漫言(一)	大出正篤	50
		直接法による日本語の教授を參觀して	筧五百里	54
		臺灣に於ける國語教育	金丸四郎	60
		支那のキリスト教に関する文献(二)	岩村忍	46
		書齋		
		日本文化の東亞進出に就いて	久松潜一	27
		進出日本語の後續性	土岐善麿	29
		日本文化の大陸普及について	玉井茂	32
		文化戦士に對する銃後施設	湯山清	34
		反省を要する事ども	大西雅雄	35
		[教材] 日本の山	逗子八郎	38
		中國日本語研究文献目録(二)	菊沖徳平	65
		随筆		
		日本の年中行事(五)	三村清三郎	68
		言葉談義(二)	各務虎雄	77
		彙報		49
執筆者紹介		64		
編輯後記				
第二卷第二號	1942年2月	卷頭言	西尾實	
		日本語教室特輯		
		日本語教授に於ける讀みの基本工作	松宮彌平	4
		日本語教室漫言(二)	大出正篤	30
		臺灣に於ける國語教授の實際問題	加藤春城	62
		日語教授の問題二三	古川原	66
		隣邦留學生に對する日本語教授	有賀憲三	9
		聴方指導の實際(一)	前田熙胤	34
		初級中學日語教授細目	深澤泉	39
		日本語教育に関する感想二つ	堀敏夫	71
		支那のキリスト教に関する文献(三)	岩村忍	25
		日常生活の雄辯	内藤濯	46

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		臺灣の國語教育參觀記	春山行夫	49
		誤り易き發音に関する調査 (一)	來島眷吾	16
		中國日本語研究文獻目録(二)	菊沖徳平	58
		隨筆		
		日本の年中行事 (六)	三村清三郎	80
		言葉談義 (三)	各務虎雄	89
		彙報		73
		執筆者紹介		45
		編輯後記		
第二卷第三號	1942年3月	卷頭言	佐藤春夫	
		日本語のむづかしさ	安藤正次	4
		自國語と外國語—日本語教授法その二	山口喜一郎	12
		醒睡笑と女房詞・東國方言	岩淵悦太郎	18
		蒙古人教育の實情 (一)	關野房夫	25
		臺灣に於て使用される國語の複雑性	川見駒太郎	32
		日本語教育と日本文化	岡本千万太郎	40
		日本語教室 四分科中の一分科として聴方指導の實際 (二)	前田熙胤	45
		支那のキリスト教に関する文獻(四)	岩村忍	52
		語り易き發音に関する調査 (二)	來島眷吾	57
		中國日本語研究文獻目録(五) (ママ)	菊沖徳平	65
		〔教材〕新しき日本文化	岸田國士	66
		隨筆		
		日本の年中行事 (七)	三村清三郎	70
		言葉談義 (四)	各務虎雄	80
		彙報		56
執筆者紹介		31、64		
編輯後記		84		
第二卷第四號	1942年4月	卷頭言	松村 隼	
		日本語と東亞諸言語との交流	小倉進平	4
		外國語教習の可能である根據 —日本語教授法序説 その三	山口喜一郎	16
		日本語をひろめるために考ふべき若干の問題	志田延義	22
		蒙古人教育の實情 (二)	關野房夫	52
		臺灣に於て使用される國語の複雑性 (二)	川見駒太郎	60

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		誤り易き發音に関する調査 (三)	來島眷吾	66
		[教材] 臺灣からの手紙	眞杉静枝	50
		日本語教室		
		日本語を教へてみて—中國人とアクセント	鈴木正藏	30
		ある日の日本語教室 (一)	篠原 利逸	37
		日本語教授の實際	大本 克己	44
		隨筆		
		日本の年中行事 (八)	三村清三郎	73
		言葉談義 (五)	各務虎雄	81
		彙報		29
		執筆者紹介		28、65
		編輯後記		
第二卷第五號	1942年5月	卷頭言	長沼直兄	
		南洋語と日本語	小倉進平	4
		南方の諸言語		
		タイ族の言語	佐藤致孝	14
		東亞に於ける和蘭語の普及	朝倉純孝	25
		安南語及びモン・クメル語	松本信廣	38
		ビルマ語	矢崎源九郎	45
		日本語の南進と對應策の急務	大出正篤	58
		民族力の發動について (一)	徳澤龍譚	65
		共榮圏文化の擴充と日本語	松宮一也	72
		滿洲國の國語政策と日本語の地位	森田孝	79
		★日本語教授法參考文獻紹介	長沼直兄	84
		南方建設と日本語普及 (從軍記者座談會)	石橋恆喜 高原四郎 清水彌太郎 成田穰 大屋久壽雄 俣野博夫 柞木田龍善 小山東一	86
		★南方共榮圏參考文獻目錄(一)ビルマ 印度	編輯部	138
		書齋		
		科學技術用語の整備	鈴江康平	124
		戦争と日本語	榎垣實	127

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		星港・比島・蘭貢	實藤惠秀	131
		一対一の言葉	山口正	135
		〔教材〕自然に親しむ	深田久彌	122
		〔日本語教室〕ある日の日本語教室（二）	篠原利逸	105
		第一回日本語教育講座をかへりみて		145
		随筆		
		日本の年中行事（九）	三村清三郎	151
		言葉談義（六）	各務虎雄	159
		彙報		121
		執筆者紹介		83・120
		編輯後記		
第二卷第六號	1942年6月	卷頭言	釘本久春	
		大東亞戦争と世界史の動向		
		大東亞史の構想	吉田三郎	4
		西力東進の史的段階	鈴木俊	14
		幕末先覺者の東亞經綸策	向井淳郎	24
		民族と植民—民族力の發動について その二	徳澤龍譚	32
		日本語教授の効果に就いての考察	大出正篤	50
		直接法と教材（一）	益田信夫	57
		對譯法の論據	日野成美	64
		★南方共榮圈參考文獻目録(二) マレー・東印度・フィリッピン	編輯部	82
		日本語教室		
		國音字母と日本語教授	深澤泉	39
		後期に於ける讀方科指導過程の研究	久保一良	43
		〔教材〕じゃんけんぼん	釘本久春	76
		南京日語研究會報告		74
		日本語學習者作文募集		88
		随筆		
		日本の年中行事（十）	三村清三郎	89
		言葉談義（七）	各務虎雄	100
		彙報		87
		執筆者紹介		81
編輯後記		104		
第二卷第七號	1942年7月	卷頭言	笈 勝	

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁		
		日本語教育精神	伊東延吉	4		
		オリエントの歴史的意義	杉 勇	12		
		日野氏の「對譯法の論據を」を讀みて	大出正篤	19		
		直接法と教材(二)	益田信夫	29		
		山西音と日本語	平部朝淳	61		
		〔日本語教室〕作文を通して見たる助詞の一考察	來島脊吾	68		
		畫人鄭板橋の思想	八幡關太郎	52		
		康遇聖の捷解新語	岩淵悦太郎	42		
		支那のキリスト教に關する文獻(三)	岩村忍	74		
		★南方共榮圈參考文獻目錄(三)	日本語編集部編	82		
		〔教材〕真珠灣攻撃	編集部	80		
		隨筆				
		日本の年中行事(十一)	三村清三郎	86		
		言語談義(八)	各務虎雄	96		
		彙報		95		
		執筆者紹介		67		
		編輯後記		100		
		第二卷第八號	1942年8月	卷頭言	榎谷秀夫	
				日本文化の使命と大東亞戰	長與善郎	4
				民族と戰爭-民族力の發動 その三	德澤龍譚	11
直接法と對譯法(一)	山口喜一郎			18		
日本語の優等生と劣等生	大出正篤			25		
滿洲の日本語	保井克己			31		
聾啞學校の日本語教育	若生精一			38		
日本語教室						
日本語教授法の平易化	堀 敏夫			64		
日本語教室の外	小川健二			71		
日本に於ける外國語教育	中野好夫			46		
朝鮮に於ける國語政策	時枝誠記			54		
支那のキリスト教に關する文獻(五)	岩村 忍			80		
〔詩〕野に記されたもの	室生犀星			78		
隨筆						
茶の字の音	伊藤彌太郎			90		
鍊成隨感	山口 正			85		
彙報				75		
執筆者紹介				63・75		

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		本會刊行圖書目錄		74
		編輯後記		
第二卷第九號	1942年9月	卷頭言	長谷川如是閑	
		日本語教育の基礎	釘本久春	4
		直接法と對譯法（二）	山口喜一郎	14
		日本語教室		
		數教材の特徴とその指導案	日野成美	26
		速成日本語教授私見	堀 敏夫	31
		發音指導考	久保一良	40
		日本語教育に於ける教材論—北支座談會—	一谷清昭 小泉藤三 國府種武 篠原利逸 四宮春行 秦 純良 日野成美 藤村 作 古田 擴 益田信夫 山口喜一郎	48
		日本語普及と英語教師	佐久間鼎	66
		翻譯と日本語	高橋義孝	73
		中支戦線より歸りて 日本文化普及の問題について〔座談會〕	窪川稲子 眞杉靜枝 釘本久春 長沼直兄	78
		近刊の支那關係書（一）	岩村 忍	96
		隨筆		
		蔓荊と時鳥	森山 啓	102
		永光寺街（「北京の想ひ出」その一）	奥野信太郎	108
		彙報		114
		執筆者紹介		101
		購讀者諸氏へ		115
		編輯後記		
第二卷第十號	1942年10月	卷頭言	佐藤春夫	
		言語教養の意義と方法	長谷川如是閑	4

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		日本語の性格	新屋敷幸繁	16
		擬聲語	戸田吉郎	23
		支那人の見たる日本語	實藤惠秀	30
		大東亞風物誌（一）		
		蒲州の雨	宮本敏行	39
		江北秋晴	荻原井泉水	44
		日本語の南進に就いて	大出正篤	49
		日本語教授の特性	大石初太郎	54
		無名の日本語教師	内田克己	65
		東亞風物誌（二）		
		臺灣一周記	春山行夫	70
		南支紀行より	吉田謙吉	75
		日本語教室		
		數教材の特徴とその指導案（二）	日野成美	79
		東亞風物誌（三）		
		被統治民族の姿	大屋久壽雄	92
		安南斷想	成田 穰	97
		近刊の支那關係書（二）	岩村 忍	101
		日本語教授法の文献	長沼直兄	110
		隨筆		
		陶房雜記	塚原正志	112
		俳句道	室生犀星	118
		彙報		108
		本會刊行圖書目録		69
		購讀者諸氏へ		78
		執筆者紹介		101・107
		編輯後記		120
第二卷第十一號	1942年11月	卷頭言	大志万準治	
		言語の道義性—大東亞建設途上の一反省として	竹下直之	4
		子供の言葉	松原至大	12
		フランス語史概説	エミール・リットレ 田島讓治	16
		日本語のアクセント	平山輝男	27
		初等教育に於ける日本語教育の困難性	大出正篤	42
		日本語教授の特性	大石初太郎	50
		留學生の日本語教育	丸山キヨ子	57

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		一本會の語彙調査に就いて 基本語彙調査の方法	淺野鶴子	63
		日本語教室		
		日本語教授に於ける初期發音訓練	松宮彌平	68
		日本語教授の實際	鶴見 誠	75
		數教材の特徴とその指導案 (その三)	日野成美	80
		讀物		
		木匠齊白石	八幡關太郎	93
		野 尻	石井柏亭	103
		彙報		106
		執筆者紹介		26・62
		受贈圖書雑誌		56
		編輯後記		
第二卷第十一號 (ママ 12月號)	1942年12月	卷頭言	相良唯一	
		大東亞建設の思想的基礎	玉井 茂	
		日本語の世界觀	岩澤 巖	17
		言語の本質	ハインツ・フリュゲル 鶴川義之助抄譯	25
		古代に於ける話言葉	湯澤幸吉郎	30
		現代日本語の主語の省略	白石大二	38
		漢和字典論	伊藤彌太郎	45
		漢字檢索法	長沼直兄	54
		中學生の國語教室より一語法の誤と表記の誤—	三井政雄	63
		日本語教室		
		南方現住民に擬聲語を教えて	宮本要吉	77
		日本語教師の鍊成	大出正篤	82
		「日本語指導論」に就いて	大石初太郎	88
		讀物		
		支那關係書解題	岩村忍	93
		北京の廟會	岩村成正	99
		彙報		103
		執筆者紹介		62
		受贈圖書雑誌		53・76
		編輯後記		
第三卷第一號	1943年1月	卷頭言	釘本久春	
		東亞文化圏建設の倫理	志村陸城	4

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		科學政策に於ける國語の問題	鹽野直造	13
		日本語總力戰體制の樹立	西尾 實	20
		國語の将来と反省		
		國語の将来と反省	長谷川如是閑	23
		近代語に就いての若干の反省	志田延義	26
		國語雜感	氷室吉平	31
		國語の将来と反省	石黒魯平	35
		女性語の将来と反省	眞下三郎	38
		漢字檢索法	長沼直兄	49
		フランス語史概説	エミール・リットレ 田島讓治譯	56
		特輯 関東州日本語教育研究會	加島福一 打田正雄 坂本弘教 前田熙胤 喜代原友治 久保一良 藤村 一 沈 景富	67
		讀物		
		初富士	中村一良	128
		言語散歩	内藤 濯	132
		彙報		135
		執筆者紹介		135
		受贈図書雜誌		19・48
		編輯後記		136
第三卷第二號	1943年2月	卷頭言	長沼直兄	
		南方の宗教生活	清水幾太郎	4
		國語愛護のために	井上 赳	12
		日本語の表現形式の一つ	佐々木 達	21
		日本語教授の特性 (三)	大石初太郎	29
		泰國人に日本語を教へる	柳澤 健	39
		戦争と言葉と女	松永健哉	44

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		座談會 戦時下の國語生活	岩淵悦太郎 高橋健二 釘本久春 内藤 濯 崎山正毅 松田武夫	50
		教材 火消の楨	三井政雄	49
		日本語教室		
		語法教授私見	深澤 泉	73
		日本語教育研究の態度について	林 克馬	76
		讀物		
		バリ物語(一)	ミゲール・コバルビナス 二宮行雄譯	80
		風化の顔	豊田三郎	88
		彙報		87
		執筆者紹介		72
第三卷第三號	1943年3月	卷頭言	相良惟一	
		大東亞文化建設の課題	鶴見祐輔	4
		比較言語學といふもの	高津春繁	11
		日本語教授の特性 (完)	大石初太郎	18
		言語の場の構成について	篠原利逸	27
		座談會 國語の反省	長谷川如是閑 佐藤春夫 湯澤幸吉郎 西尾 實	38
		詩の朗讀運動についての辯	内藤 濯	57
		日本語教授者の讀むべき書物	廣瀬泰三	78
		日本語教室		
		日本語教室雜感	大出正篤	63
		東亞語としての日本語教材觀	工藤哲四郎	66
		日本語教室雜考	太田義一	72
		讀物		
		バリ島物語(二)	ミゲール・コバルビナス 二宮行雄譯	84
		彙報		92

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		執筆者紹介		91
第三卷第四號	1943年4月	卷頭言	釘本久春	
		國語學と言語學との関係	小林英夫	4
		女性の手紙の言葉	眞下三郎	18
		話し言葉に於ける 文の倒置の研究	白石大二	32
		若い同志に希望する	上甲幹一	39
		南方派遣日本語教員の銓衡を終りて	森田 孝	44
		日本語教育をおもふ	森田梧郎	49
		支那人の日本語研究	菊沖徳平	54
		フランス語史概	エミール・リツレ 田島讓治譯	67
		☆本會主催京都講演會		78
		日本語教授三ヶ月 泰國招致學生の學習狀況	國際學友會	80
		日本語教室		
		異民族に對する日本語讀み指導	太田幸善	91
		聾啞學校に於ける 綴方への初期指導の實際	奥田 實	106
		日本語教授者の讀むべき書物	廣瀬泰三	100
		☆南京日語研究會		112
		讀物		
		言葉の調子といふこと一言語散歩の二一	内藤 濯	114
		南方で開いた日本語	櫻田常久	117
		彙報		124
執筆者紹介		31		
第三卷第五號	1943年5月	卷頭言	東光武三	
		比島の言語問題と日本語	三木 清	4
		教育と文化	小沼洋夫	12
		國語か日本語か	小林英夫	19
		特輯 マライの日本語 (對談)	中島健藏 神保光太郎	27
		日本語教授の諸問題	國府種武	48
		南阿の和蘭語と二國語併用制	村松 薫	59
		東京女子大學特設豫科參觀記	編輯部	66
		日本語教室		
		話方指導の實際	前田 熙胤	68
		生徒の見たる 臺灣の國語	川見駒太郎	75
		日本語教授の讀むべき書物	廣瀬泰三	84

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		讀物		
		精神病者の言葉 —特に精神分裂病の新作言語に就いて—	宮城音彌	90
		日本の美	金原省吾	98
		彙報		108
		執筆者紹介		47
第三卷第六號	1943年6月	卷頭言	西尾 實	
		日本語普及の将来	安藤正次	4
		特輯 現代語の反省と醇化		
		日本語の成長 —デスの整理	小泉荃三	15
		標準語の育成	白石大二	24
		現代語の反省と醇化のために (葉書回答)	諸 家	64
		言の葉の道	房内幸成	31
		兼好法師とことば	氷山 勇	40
		フランス語史概説	エミール・リットレ 田島讓治	50
		日本語教授の讀むべき書物(四)	廣瀬泰三	58
		日本語教室		
		日本語教室雜感(其の二) —正しい日本語、日本語の難しさ	大出正篤	75
		教材のほぐし方	益田信夫	79
		讀物		77
		國語の道 (短歌)	片桐頭智	38
		日本の女性	高瀬笑子	85
		日本語教授者名簿		47
		彙報		83
		執筆者紹介		30
第三卷第七號	1943年7月	卷頭言	關野房夫	
		思想戦と日本語	釘本久春	4
		蒙疆特輯		
		蒙疆に於ける日本語教育の諸問題	曾我孝之	13
		滿蒙の國語	保井克己	18
		侮蔑語の問題	佐々木達	23
		兼好法師とことば (完)	永山勇	27
		日本語教授者の讀むべき書物 (五)	廣瀬泰三	34
		國際學友會日本語學校參觀記	編輯部	70

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		大東亞指導者としての日本人 野村大佐を圍む座談會 司會 釘本久春 陸軍大佐 野村恭雄	鎗田龜次 東光武三 戸田吉郎 大岡保三	40
		日本語教室		
		話方指導について (二)	前田熙胤	60
		華北に於ける日本語の品位	太田義一	66
		讀物		
		黄土生活	小池秋羊	72
		民謡と山草	半田雄三	76
		日本語教授者名簿 (2)		79
		彙報		59
		執筆者紹介		58
第三卷第八號	1943年8月	卷頭言	藤井重雄	
		特輯 語感について		
		語感の持續と變遷	長谷川如是閑	4
		語感について	吉川幸次郎	12
		語感に於ける主觀性と客觀性	小林英夫	18
		語感の心理學的考察	宮城音彌	24
		語感と語調	内藤濯	28
		語感と音楽	高木卓	31
		國語教育に於ける語感	垣内松三	62
		外國語教育に於ける語感	佐々木達	65
		日本語教育に於ける語感	長沼直兄	70
		現代の語感	佐藤春夫	42
		万葉の語感	北住敏夫	47
		古典と語感	久松潜一	36
		古典の語感再現について	島津久基	38
		泰國及佛印に於ける日本語教育の現況 (一)	關野房夫	51
		日本語の成長 (二)	小泉荃三	73
		日本語教授者の讀むべき書物 (六)	廣瀬泰三	86
		日本語教授者名簿 (3)		85
		讀物		
		詩二篇	室生犀星	60
		ロマノフカなど	湯浅克衛	94
		彙報		92

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		執筆者紹介		98
第三卷第九號	1943年9月	卷頭言	長沼直兄	
		異民族教育論	玉井茂	4
		滿華留學生と古典教育	五味智英	11
		中國の學生に俳諧史を教へてみて	上甲幹一	16
		現代日本語の用例研究 (一)	榎垣實	22
		現代日本語の辭書的研究	白石大二	29
		泰國及仏印に於ける日本語教育の現状 (二)	關野房夫	40
		日本語教室		
		反省すべきこと	日野成美	50
		話方指導について (三)	前田熙胤	56
		★「日本語」合本總目次		72
		〔讀物〕 東洋最古の貴賓 一石鼓に就いて	八幡關太郎	62
		彙報		71
		執筆者紹介		70
第三卷第十號	1943年10月	卷頭言	西尾實	
		外地の日本語について	中島健藏	4
		對支新政策と文化施策	相良惟一	10
		日本語教育の基礎的問題	篠原利逸	17
		映畫と日本語	時岡茂秀	28
		現代日本語の用例研究 (二)	榎垣實	33
		五十音圖の解説	三宅武郎	39
		日本語教育參考文獻	長沼直兄	46
		兒童讀物の語彙調査を終って	淺野鶴子	50
		私たちの日本語 (日本語作文) 朝鮮 臺灣 滿洲 北支 中支 安南 ビルマ マライ		56
		大東亞共栄圏の友へ		
		滿洲の友へ (滿洲)	春山行夫	76
		南の青年への手紙 (マライ)	神保光太郎	79
		阮進朗様への手紙 (佛印)	森三千代	82
		ビルマの友に與ふ (ビルマ)	豊田三郎	85
		★日本語教育者名簿 (4)		89
		彙報		75
		執筆者紹介		55

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
第三卷第十一號	1943年11月	卷頭言	釘本久春	
		外地に於ける日本人の態度	淺野晃	4
		日本人の南方發展	入江寅次	11
		南方社會の特殊性	熊倉美康	16
		表記法について		
		國語の表記法の問題 その一	湯澤幸吉朗	23
		古事記と句讀法	藤井信男	30
		南方向國語教科書に使用せる發音符號について	三井政雄	32
		仮名遣の切換へに就いて	堀内武雄	39
		現代日本語の用例研究 (三)	榎垣實	57
		現代語の記録 (一)	春山行夫	64
		フランス語史概説 (五)	エミール・リッ トレ 田島讓治 譯	74
		華北に於ける日本語教育の新段階 座談會	藤村作 片岡良一 佐藤幹二 上甲幹一 篠原利逸	46
		〔日本語教室〕 特殊な日本語教室	大出正篤	67
		〔教材〕 孫文の思ひ出		72
		讀物		
		インドネシアの日本語	窪川稻子	84
		大陸の墓標	釘本久春	87
		彙報		92
		執筆者紹介		56
第三卷第十二號	1943年12月	卷頭言	相良惟一	
		國語史の課題	遠藤嘉基	4
		言文一致の歴史	柳田泉	14
		國語の表記法の問題 その二	湯澤幸吉郎	21
		「こ」「そ」「あ」に就いて	有賀憲三	31
		現代日本語の用例研究 (四)	榎垣實	37

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		外國語の仮名表記に就いて 福原麟太郎 渡邊一夫 米川正夫 吹田順助 大和資雄 阿部知二 呉 茂一 泉井久之助 山田珠樹 岡澤秀虎 田中美知太郎 神田盾夫 大西雅雄 石黒修 芳賀檀 八杉貞利 會田由 高木卓 西村孝次 中村光夫 秋山六郎兵衛 大久保康雄 中村一男		44
		現代語の記録(二)	春山行夫	70
		フランス語史概説(完)	エミヨル・リットレ 田島讓治 譯	74
		大東亞共栄圏と日本語(講演會要録)		82
		本會新刊図書		30
		日本語教室		
		新入生に日本語初歩指導をしてみても	日野成美	58
		蒙疆に於ける日本語教室	日野静子	64
		(和歌) 世代の健兒に	加藤将之	43
		(隨筆) 語調再考	内藤濯	89
		彙報		69
		執筆者紹介		73
第四卷第一號	1944年1月	卷頭言	高木 覺	
		日本語の調子	土居光知	4
		國語の一時相に就いて	戸田吉郎	14
		國語表記の問題	湯澤幸吉郎	23
		現代日本語の用例研究	榎垣 實	30
		現代語の記録(3)	春山行夫	86
		日本語の旅(1)	皆川三郎	90
		フィリッピンに於ける 日本語教育の現況	蒲生英男	37
		泰國に於ける言語上の諸問題	山縣三千雄	45

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		日本語教育の根本問題（座談會）	岩淵悦太郎 近澤道元 橋本進吉 大岡保三 東光武三 林 和比古 釘本久春 西尾 實 原 元助	53
		日本語教室		
		復習と應用	松宮彌平	72
		分つてもらふ氣持	打田正雄	79
		★在外邦人子弟教育協會について	平山日出男	100
		讀物		
		柬埔寨序話	高木 卓	108
		美しい言葉	林芙美子	103
		彙報		85
		執筆者紹介		111
第四卷第二號	1944年2月	卷頭言	大岡保三	
		最近に於ける 國語問題の動向と國語學	時枝誠記	4
		日本釋名と東雅とに就いて	松尾捨治郎	15
		「なし」といふ言葉について	西尾光雄	21
		國語表記法の問題	湯澤幸吉郎	35
		徴兵制度と日本語	島田牛稚	39
		現代語の記録(4)	春山行夫	46
		日本語の旅(2)	皆川三郎	50
		現地の日本語		
		現地日本語教員よりの手紙	蒲生英男	66
		海外邦人第二世と日本語	高瀬笑子	69
		★書 評	内田克巳	44
		日本語教室		
		中萃民國留學生のための高等學校教育	木村 新	54
		日本語教授雜感	柴田明德	58
		★國際學友會紹介	金澤 謹	62
		★現 地 通 信		53
冬景色（隨筆）	豊田三郎	76		

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		彙報		65
		執筆者紹介		80
第四卷第三號	1944年3月	卷頭言	郡司喜一	
		比較言語學と民族の研究	高津春繁	2
		國語と精神	西村孝次	9
		中國人に誤り把握せられてゐる日本語の發音〔1〕	笈 五百里	18
		中國人の日本語研究	菊沖徳平	23
		「日本文法教本」について〔座談會〕	湯澤幸吉郎 林 和比古 時枝誠記 長沼直兄	40
		〔日本語教室〕 助詞の異同について	松村 明	33
		日本語の旅(3)	皆川三郎	52
		長谷川如是閑著 「言葉の文化」について(書評)	中村光夫	50
		燕京二景(隨筆)	奥野信太郎	67
		日華學會紹介	砂田 實	64
		彙報		62
		執筆者紹介		71
		編輯後記		72
第四卷第四號	1944年4月	卷頭言	近藤壽治	
		大東亞文化の道—文化交流と統一	玉井 茂	2
		日本語教師の處遇に関する諸問題	相良惟一	28
		生活と教習	山口喜一郎	8
		日本釋名と東雅とについて	松尾捨次郎	16
		假名遣の諸問題(一)	湯澤幸吉郎	21
		★現代語の記録(5)	春山行夫	66
		現地特輯		
		〔日本語教室〕 日本語學習於ける母國語語法の影響 〔その具體例と克服案〕	日野成美 久保一良 平部朝淳 堀 敏夫 篠原祐一 秦 純乘 辻 權次郎 築貫一正 坂本弘教	42

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		現地の聲		38
		★本會研究部事業報告	山口 正	70
		★「日本語」合本總目次		64
		梅 花 (詩)	室生犀星	75
		秋山參謀と子規 (讀物)	井上弘介	76
		彙報		72
第四卷第五號	1944年5月	卷頭言	長沼直兄	
		滿洲國に於ける日本語教育の現状	松尾 茂	2
		日本語より國語へ—關東州の場合—	大石初太郎	11
		中世のてにをは觀の地盤	松尾 拾	17
		古事記訓註に現はれたる宣長の國語觀	白石大二	23
		★わが國語觀	諸 家	32
		假名遣の諸問題(二) —明治以來の假名遣—	湯澤幸吉郎	38
		中國人に誤り把握せられてゐる日本語の發音〔2〕	筧 五百里	43
		★現代語の記録 (完)	春山行夫	56
		土居光知著「日本語の姿」(書評)	西村孝次	50
		日泰文化會館紹介	額 彦四郎	52
		現地通信		55
		彙報		29
		編輯後記		
第四卷第六號	1944年6月	卷頭言	久松潜一	
		日本語の優秀性	吉川幸次郎	2
		「さうだ」と「すぎる」	岩淵悦太郎	11
		明治以降の假名遣 (二)	湯澤幸吉郎	15
		大東亞の日本語に於ける音量の活用	寺川喜四男	26
		中國人に誤り把握せられてゐる日本語の發音〔3〕	筧 五百里	32
		硫黄文字の研究	岩井芳雄	20
		日本語教室		
		ある研究教授の記録	篠原祐一	38
		作文指導	久保一良	42
		日本語生活 (フィリピン ジャワ 中支)		47
		小泉荃三著 「日本語文の性格」	中島唯一	50
		在佛印日本文化會館紹介	土田金雄	52
		澳門の日本人	内田克己	54
		彙報		37
		編輯後記		

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
第四卷第七號	1944年7月	卷頭言	長谷川如是閑	
		日本語學校論	釘本久春	3
		教育戦力化の施策と目標	伊藤日出登	10
		標準語とアクセント(一)	服部 四郎	14
		假名遣問題拾遺	湯澤幸吉郎	22
		少年兵と日本語	松田武夫	28
		成人用速成日本語教科書の諸問題 (座談會)	浅野鶴子 岩淵悦太郎 長沼直兄 西尾 實 林 和比古	32
		〔日本語教室〕 教材の性格と指導の要領	日野成美	44
		江湖山恒明著 敬語法(書評)	大久保正太郎	48
		國際文化振興會紹介	稲垣守克	41
		〔讀物〕 南方の日本語	佐藤春夫	52
		彙報		50
		編輯後記		
		第四卷第八號	1944年8月	卷頭言
戦争と國語生活	稻富榮次郎			2
佛印特輯				
佛印に於ける日本語教育	蘆原英了			10
南部佛印に於ける日本語學校の問題	小關藤一郎			12
標準語とアクセント(二)	服部四郎			17
日本語教室				
敬語の誤用	森田梧朗			28
比較文法の問題	深澤 泉			30
寺川喜四男・日下三好 共著 標準日本語發音大辭典(書評)	三宅武郎			34
東亞研究所紹介				36
〔讀物〕				
ジャワ日本語學校建設記	大江賢次			40
南の土(一)	釘本久春			44
彙報				38
編輯後記				
第四卷第九號	1944年9月	卷頭言	中島唯一	
		日本語の弘通	廣濱嘉雄	3

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		泰國の普通教育について	鈴木 忍	6
		中南米に對する合衆國の文化政策	坂西志保	12
		日本語普及と文化政策		
		新聞	松原至大	26
		映畫	川名完次	28
		放送	水川 清	30
		中國人に誤り把握せられてゐる日本語の發音〔完〕	筧 五百里	16
		長沼直兄著 「日本語の初歩」(書評)	淺野鶴子	24
		南洋協會紹介	池田 膝	33
		讀物		
		マンダレーの營舎	小田嶽夫	38
		南の土(二)	釘本久春	42
		彙報		36
		編輯後記		
第四卷第十號	1944年10月	卷頭言	佐藤春夫	
		學徒勤勞動員教育	西尾 實	3
		東亞民族觀と教育問題	海後勝男	9
		南方より歸りて 對談	佐藤春夫 釘本久春	13
		マライの日本語教育	勝呂 弘	24
		いゝ顔、嫌な顔	白石大二	27
		日本語教室		
		主語に附く場合の助詞「が」と「は」の用法	有賀憲三	31
		指導過程の問題	篠原利逸	39
		矢部春著 日本語教師(書評)	相良惟一	45
		フィリピン協會紹介	岡本久吉	47
		南方語學漫談(隨筆)	田中克巳	51
		彙報		49
		編輯後記		
第四卷第十一號	1944年11月	卷頭言	大澤長俊	
		國語と國民生活	志田延義	2
		敵性文化の査問 アメリカ イギリス	中野好夫 玉井 茂	14 17

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		大陸戦力化と文教の課題(座談會)	長沼直兄 相良惟一 釘本久春 丁宇尚 羽田隆雄 曾我孝之 腰原 仁 小倉好雄	20
		比島の日本語と日本語問題	内山良男	9
		教材に何を選ぶべきか(葉書回答)	諸 家	32
		藤原與一著 日本語の問題(書評)	中島唯一	36
		日泰學院・興亞同學院 紹介	井阪三男	38
		〔讀物〕 南方の日本語	新田 潤	41
		彙報		40
		編輯後記		
第四卷第十二號	1944年12月	卷頭言	大岡保三	
		日本國民生活と海外發展	藤原咲平	3
		古加點方針	吉澤義則	6
		日本語教室		
		常體と敬體	林 和比古	12
		二つの教授案について	中村忠一	16
		滿鮮の日本語教室	大西雅男	20
		昭和十九年の成果		
		思想界の展望と回顧	渡邊義晴	24
		國語關係圖書論文集	松村 明	26
		ビルマ協會紹介	金子豊治	32
		「日本語」第四卷總目次		32
		讀物		
		思ひ出	矢澤邦彦	38
		南の土(三)	釘本久春	42
彙報		37		
編輯後記		46		
第五卷第一號	1945年1月	卷頭言	村上俊亮	
		大東亞の教育		
		大東亞の教育	伏見猛彌	2
		北支の教育	小倉好雄	13

日本語教育振興会『日本語』目次

巻號	刊行年月	内容	著者・参加者	頁
		ビルマの教育	飯田 忠	8
		回民社會の教育についての雜感	岩村 忍	17
		先覺者列傳其一 臺灣に於ける伊澤修二先生	山口喜一郎	44
		生産増強と文教施策【座談會】	澤登哲一 大岡保三 岡本終吉 釘本久春 西尾 實	21
		音韻と語法	佐久間 鼎	39
		善隣協會紹介	三好季雄	50
		讀物		
		山村慰問行	崎山正毅	53
		南の土(四)	釘本久春	58
		彙報		49
		編輯後記		

(注) 本文と照らし、「目次」の表記が明らかに誤りであると判断できた場合は、本文の情報を優先した。

例：第一卷第三号 「外国語教授における母国語の位置」
 原本の「目次」には、「外国語教授における母国の位置」とある。

本文では「・・・母国語の位置」とあり、内容も「母国語」を問題にしていることが確認できたので、「母国語」を採用した。

2-2 日本語教育振興会活動資料 『日本語』彙報一覽

卷號（刊行年月日）

創刊號

1941（昭和16）年4月

發刊の辭 pp. 4-5

我々現代日本人が、何をなすべきかは、既に明らかである。それは、全世界の苦惱が、内奥の聲として、現代日本の上に切に要請してゐる課題であり、我々の民族的活力と矜持とが敢へて應ぜんとする世界史的使命である。即ち、恆に恆に進展して熄まざる我が國民文化の根源的性格を樞軸として、先づ東亞の全地域に共榮圏を確立し、世界新秩序建設の進行過程に、確固たる道標をうちたてることこそ、現代日本人にとって、當面の第一義的ないとなみでなければならない。

我々は、もとよりこの光榮ある使命が、艱苦に満ちた大事業であることを知悉してゐる。しかしながら、艱苦と光榮とは、民族的體驗の本質に於て、常に同義語であり、古くして新しき我が民族的生命の最も愛好する主題である。しかもまた、悠久三千年の皇國の歴史が、現代日本人にその可能を確證するところである。我々は、決してたぢろぎはしない。我々は、課題の困難を以て、寧ろ實踐的意志を昂揚せしめる機縁とするのみである。我々はたゞ、如何になすべきかの方法的思考に、そして實踐に、向ふのみである。

實に、我々の前には、抽象的談議に時を藉すを許さない實踐の方途のみが、存してゐる。そして、かゝる實踐的身構へに於て、課題の本質を剔抉すれば、現代日本の意志と責任とによる東亞共榮圏の確立とは、即ち東亞文化圏の定立を意味することとなるであらう。換言すれば我々の課題は、東亞文化圏の定立を本質的規定して要求してゐるのである。

この方途を見出すとき、やがて日本の言葉のひろがり、我々の實踐の最初に位し、最後まで續く重要な要件であることを、我々は思はずには居られないのである。實に、日本語の普及、日本語教育の振興こそは、我々の絶えざる努力のうち、最大なるものでなければならない。

我々は、かくの如き意義と位置とに於て、東亞に於ける日本語の問題を考へ、有識の士と相はかり日本語教育振興會を興して、日本語普及・日本語教育のための凡ゆる實踐に出發すると共に、その一機關として雑誌「日本語」を發刊することとなつた。

我々の力は、もと小なりと雖も、ひろく東亞各地域に在る具眼・熱誠の士、國內の同憂・達見の士の協力を得、相携へてこの事業達成のための一礎石たらんことを期するのである。

雑誌「日本語」は、熱誠・達識の士が、日本語及び日本語教育のために行ふ凡ゆる實踐の、刻々の記録となるであらう。そしてこの記録の成長は、東亞文化圏建設の進捗を、最も明快に物語る筈である。それ故に雑誌「日本語」が月に月に充實し、光輝をましてゆくことは、我々の切なる希願でありまた確く信ずるところである。

切に諸賢の御協力を願ひ、發刊の辭に代へる。

昭和十六年四月

日本語教育振興會

委員長 松尾長造

通信 pp. 44-47

議會報道

○一月二十七日、貴族院に於ける下村宏氏の質疑……「日本ノ將來ハ、大東亞ニ於テ相近キ者、相隣レル者、相似タル者ガ手ヲ握ツテ行カナケレバイケナイ、日本ト民國ノ民族ガ互ニ結託シテ行カナケレバイケナイト云フコトガ大キナ標的デアラナラバ、此ノ民國ト我が國トノ間ニ意見ノ疎通ガ正確ニ行ハレナケレバナラナイ」と云ふ立場から、國語と國字の現在の亂雜を指摘し、その對策の緊急なることを説く。「生」といふ字が百六十五通りの讀み方がある現状では「日本ノ文字ヲ東洋ノ民族ニ押シ擴メヨウ、」と言ふ企ての困難を述べ、「政府ハ徹底的ニ各省ヲ動員シテ或成策ヲ樹テテ、此ノ簡易化ノ運動ニ是非著手シテ戴キタイ」と意見を述べた。なほ支那語の普及、その他の外國語及科學振興に關する所信の開陳があつた。

右に對する橋田文相の答辯……下村氏の意見に對しては全く同感、文部省としても事變以前より、又事變になつてからは勿論、其の方面に力を盡して來た。殊に國語問題は「一日モ早ク整理統合ノ行ハレムコトヲ目指シテ畫策シタイ」旨の答辯あり、「國語ノ問題、外國語ノ問題或ハ科學振興ト云フヤウナ問題ガ、唯所謂利世、効用、實利ト云フ目的ノ為ニダケ行ハレテハナラナイ、」「是等ノモノガー丸トナツテ我が國威ヲ宣揚シ、我が日本精神ヲ海外ニ宣布スル為ニ十分役立ツヤウナ方策ノ下ニ行ハレナケレバナラヌ」と結んだ。

○一月三十日、田中館愛橘博士の質疑に對する政府委員松尾圖書局長の答辯……「國語國字ノ整理統一ハ國民精神ノ統一振作上、又教育ノ能率増進上、極メテ重要ナル問題」であり、現下の錯雜混亂の状態を整理することは焦眉の急ではあるが、この解決は學術的調査の上に立つことと同時に實際に即せしむる要がある。且つ「國語ノ歴史的傳統並ビニ將來ヘノ發展性ヲ併セ

考慮致シ、慎重ニ行フコトガ肝要」であり、文部省に於ては國語審議會擴充と國語課設置とを行ひ、兩者協力の上調査研究を促進し、成果を得次第實行に着手する旨を述べた。なほ古來の傳統から、又文字使用の現状から考へて今俄かに音素文字に改めることの適當ならざる旨を答へ「ローマ」字に就いては國民學校高等科卒業まで習得を可能ならしめるやうに、又國語の「ローマ」字綴り方に關する内閣訓令の趣旨は今後とも徹底方に十分努力するとの答辯があつた。

第二回國語對策協議會

○ 一月二十日—二十三日、文部省に於て行はる。
 (第一日) 文部大臣の挨拶に續いて、松尾圖書局長より「文部省ニ於ケル國語對策ノ根本方針」に就いて説明あり、次いで議事に移る。議題「各地ニ於ケル日本語普及ノ狀況ニ關スル件」、各地の發表があり、質疑應答が行はれた。
 (第二日) 大岡國語課長より「本省ニ於ケル國語調査及ビ日本語教科用圖書編纂ノ現状」に關して説明があつた。議事、議題「日本語教授上困難ナル諸問題ト其ノ對策並ニ實績ニ關スル件」。發表、質疑應答が行はれる。
 (第三日) 議事、議題「日本語教育ニ關スル希望並ニ意見」。これに就いても各地の發表と質疑應答が行はれる。續いて「國語對策案協議取纏メノ件」に就いて協議が開かれた。
 (第四日) 教學局長官の挨拶に次いで、(イ)「東亞諸國ニ於ケル教學上ノ諸問題ニ關スル件」(説明、近藤指導部長)(ロ)「日本諸學振興委員會ニ關スル件」(説明、堀池企畫部長)に關して懇談が遂げられた。

出席者〔文部省側〕大臣次官始め各局長、課長及び圖書局全員。企畫院、情報局、興亞院、大政翼贊會文化部各員。學者及び外地の實際家等。

閣議申合わせ

○ 二月二十五日、定例閣議の席上橋田文相より發言、次の如き申合わせを行つた。
 一、文部省で國語國字の調査研究並に整理統一を促進し、内閣及び各省はこれに協力すること。
 一、文部省の整理統一したる事項は閣議の決定を経て、内閣及び各省は速かに實行すること。
 國語國字の整理統一は國民精神の作興國民教育の能率増進、並に大東亞の共通語としての醇正なる日本語の普及上、現下緊急の問題として、速かなる實施が求められてゐたが、文部省では今春四月から國民學校の實施を見る實情に鑑み、醇正なる國語の尊重と、並に單なる便宜主義や傳統拘泥に墮さぬ歴史的現實の正確な認識に基く國內の國語教育、及び大東亞に於ける日本語普及の基礎確立といふ見地から積極的活動を企圖して居り、右の如き閣議申合せが行はれたものである。

更に文部省國語課ではこの目的に基づき常用漢字の制定、假名遣の整理に着手、既にかんりの成果を見てゐるが、左記の如き國語國字問題全般に亘る懸案を網羅し、學者、學界、教育界、操孤界、放送局等朝野の協力が要望されてゐる。

字音語、外來語、漢字の音訓、熟字熟語、當字、假名書にすべき語彙、學術用語、敬語法、送り假名法、字體、活字體、分ち書、横書に於ける右書・左書、文體の整理統一、標準語の制定、基本語の設定、方言辭典の編纂、方言の調査、方言辭典の編纂、口語・文語の文法書、國語大辭典の編纂……

教科書二つ

○ ハナシコトバ……東亞共榮圈に於ける日本語の進出といふ重大使命を果す教科書「ハナシコトバ」上巻、及び「學習指導書」が、朝野の待望裏に愈々二月末日出來上り、外地に進出することゝなつた。目下は大陸の需要に應ずるだけで増刷に大童の由。何れ内地にも行き亘つて識者の批判を俟つことゝならう。(本誌創刊號、各務虎雄氏の解説参照)

○ 國民學校用教科書「ヨミカタ」……全部で四巻、一年・二年で各二冊づゝ。その編纂趣旨の大體は東京朝日新聞三月二日三日の朝刊所載の圖書監修官松田武夫氏の解説によつて明らかである。なほ國民學校教科書全般に亘つては、三月四日午後八時四十分JOAKから「國民學校制度を前にして」なる題目の下に、松尾圖書局長の話があつた。なほ今月二十五日より四月十日頃まで、文部省ではラヂオを通じて編纂趣旨の解説を行ふ豫定である。

東亞教育協議會

○ 二月二十四日午前十時から教學局では文部省第三會議堂にて開催。文部省各局長、外務省・興亞院・陸海軍等、東亞教育に深い關心をもつ關係官出席。東亞共榮圈に對する日本の指導力確立と共に、國內教育の色彩を外地に於ける教育理念との歩調を整へ、東亞教育の指導原理となすべき基本概念の確立を期し協議を重ねた。これは教育調査部で行はれてゐる興亞教育協議會が現實の學校教育に就いて具體案作製を期してゐるに比し、根本的理念的原理の確立に邁進

	するものである。
	日本語教育振興會第一回委員會
	○ 三月七日午後五時半、丸の内中央亭に於て開催。松尾委員長以下、在京せる殆ど全部の委員・顧問出席の上、委員長より事後報告があつた後、各委員、顧問間に種々意見の交換があつて、散會は午後八時。（日本語教育振興會に就いては別項参照）
	ニュース二つ
	○ 東亞カナの試み……約五年前康德五年二月民生部で滿語の整理統一を圖る為に教育司長を委員長として日滿兩國人の教育者による滿語調査委員會を創設し、この委員會が中心となり文盲撲滅策として難しい漢字に代る音標文字の研究を進め日本語の五十音によつて滿語を標記する東亞カナを創案した。勿論日滿兩語夫々の特質があるので片假名五十音で完全に滿語の正しい發音を記すことは不可能である。そこで滿語の音韻構成に基づいて特別に片假名の使ひ方を定め、工夫をこらしてゐる。
	○ 南濠の日本語熱……東亞共榮圏に日本語普及が叫ばれてゐる折柄、今度は英領南濠の主都アデレード、メルボルンに日本語熱が昂まり、國際文化協會の稲垣氏の通信教授を受けてみた熱心な三、四十名の人々を中心とする日本語研究會が組織され、この程當地大學、文部省を動かし來春からアデレード、キャンバラ市の三大ハイスクール、大學等五校で教授科目に日本語を加へることゝなつた。
	大陸關係その他文化事業消息
	○ 和田・中村兩教授、廣東大學にて文化講義……東亞共榮圏運動の活發化と共にわが國と大陸との間の文化交驛は次第に眞劍に行はれるやうになり、今般興亞院の招聘により、東大文學部の和田清（東洋史）・中村孝也（日本史）兩教授が渡支し、廣東大學にて左記題目に就き、一ヶ月の講義を行ふ。二月中旬出發。 一、和田教授「支那を主とする東洋文化」 一、中村教授「明治維新を中心とする日本の近世史」
	○ 佛印へ日本文化紹介……東亞共榮圏に於ける日本の指導力伸張に伴ひ、世界に於て優れた獨自の特質を有する日本文化を東亞の諸國に明確に認識せしめることは喫緊の要事であるが、國際文化振興會では佛印との間に學者、學生の交換、日本語教師の派遣等を行ふことに決定しなほ近く癩の研究の一人者太田正雄教授（筆者木下空太郎氏）の佛印行と共に、佛印側からは考古學の大家ゴルベーフ氏の來朝が實現するが、更に情報局等の贊助の下にトレ・ヂュニオン誌の日本特輯號を企畫、現代日本の眞に力強い姿を紹介することゝなつた。百二十頁、菊倍判。三月中旬發行。
	興亞團體の統合
	○ 大政翼賛會では既存の政治、思想興亞諸團體の統合に種々折衝を續けてゐるがまづ東亞聯盟協會、大亞細亞協會、興亞義會、大化會、東亞協會、興亞滅共聯盟對支同志會、東亞建設同志會、黑龍會等を對象としてその統合を行ふことゝなり方法としては翼賛會の新外郭團體を創設し、これに順次諸團體を包括統合することゝならう。
	日本語教育振興會規則 pp. 30—33
	—規則— 第一條 日語文化協會ニ日本語教育振興會ヲ置ク 第二條 本會ハ日語文化協會ノ左記事業實施ヲ掌ル 一、日本語ノ普及ニ關スル調査研究 二、日本語教授法ノ研究 三、日本語教育資料ノ作成頒布 四、日本語教育ニ關スル講習會、講演會等ノ開催 五、日本語教育振興ニ關スル機關誌ノ發行 第三條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク 委員長一名、顧問若干名、委員若干名（内常任委員若干名） 委員長、顧問及委員ハ日語文化協會理事長之ヲ委囑ス 第四條 本會ニ研究員若干名ヲ置クコトヲ得研究員ハ委員長之ヲ委囑ス 第五條 委員長ハ本會ヲ代表シ會務遂行ヲ掌ル 委員長事故アルトキハ日語文化協會理事長ノ指名スル委員其ノ職務ヲ代理ス 顧問ハ委員長ノ諮問ニ應ジ意見ヲ開申ス

卷號（刊行年月日）

委員ハ委員會ヲ組織シ第二條ノ事業ニ付審議ス
 常任委員ハ委員長ノ命ヲ受ケ企畫、立案ヲ掌ル
 研究員ハ委員長ノ命ヲ受ケ第二條ノ事業ヲ分擔研究ス

—役員—

委員長 松尾 長造 文部省圖書局長 日語文化協會理事

委員（五十音順、○印ハ常任委員）

井上 赳 文部省圖書局編修課長

内田 英二 興亞院華北聯絡部事務官

○大岡 保三 文部省圖書局國語課長

○大志万 準治 興亞院囑託

小關 紹夫 文部省教學局事務官

小田久五郎 日語文化協會内 日語文化學校長

大出 正篤 大出日本語研究所長

各務 虎雄 文部省圖書監修官

加藤 春城 臺灣總督府文教局編修課長

○釘本 久春 文部省圖書監修官

熊木 捨治 高岡高等商業學校長

倉野 憲司 文部省圖書監修官

阪本 一郎 東亞同文書院教授

神保 格 東京文理科大學教授

島田 牛稚 朝鮮總督府學務局編輯課長

○關野 房夫 興亞院事務官

辻田 力 興亞院調査官

辻 吉太郎 興亞院華中聯絡部事務官

寺田喜治郎 滿洲國民生部編審官

堂ノ脇光雄 興亞院調査官

土岐 善磨 日本放送協會囑託

○長沼 直兄 文部省囑託

西尾 實 東京女子大學教授文部省囑託

久松 潜一 東京帝國大學教授

保科 孝一 東京文理科大學名譽教授 文部省國語審議會幹事

松宮 彌平 日語文化協會内 日本語教授研究所長

松下 寛一 文部省圖書局發行課長

榊谷 秀夫 興亞院文化部第二課長

○松宮 一也 日語文化協會主事

山本 有三 文部省日本語教科用 圖書調査會委員

山口 巖 興亞院廈門聯絡部事務官

山口喜一郎 北京國立新民學院教授

湯澤幸吉郎 文部省囑託

顧問（五十音順）

赤間 信義

安藤 正次

荒川 昌二 對滿事務局次長

伊藤 隆治 興亞院華中聯絡部文化部長

鹽谷 温 東京帝國大學名譽教授

鹽原時三郎 朝鮮總督府學務局長

鶴見 祐輔 衆議院議員

東條 操 學習院教授

伯爵林 博太郎 文部省日本語教科用 圖書調査會會長

松村 隼 興亞院文化部長

松井 眞二 興亞院華北聯絡部 文化局長代理

宮原 民平 拓殖大學教授

梁井 淳二 臺灣總督府文教局長

<p>卷號 (刊行年月日)</p>	<p>近藤 駿介 南洋廳長官 以上</p>
	<p>「日本語教育振興会」事業報告(二月末日現在) pp. 68-69</p>
	<p>一、委員会ノ組織 本協會阪谷理事長ヨリ理事松尾長造氏(文部省圖書局長)ヲ本會委員長ニ委嘱シ、興亞院、文部省ノ援助ニヨリ昭和十五年十二月二十三日付ヲ以テ委員及ビ顧問ヲ委嘱シタル結果別紙通りノ承諾ヲ得タリ</p>
	<p>二、常任委員会 (イ) 松尾委員長ヨリ左記諸氏ヲ常任委員ニ委嘱セリ 大岡保三(文部省圖書局國語課長) 關野房夫(興亞院事務官) 釘本久春(文部省圖書監修官) 大志萬準治(興亞院囑託) 長沼直兄(文部省囑託) 松宮一也(財團法人日語文化協會主事) (ロ) 常任委員会ハ屢々會合シ今日迄ソノ開催數九回、本會規則第二條ニ基キ着々事業ノ企畫・立案ヲ進捗サセ決定事項ヲ實施シツヽアリ</p>
	<p>三、事業 (イ) 日本語ノ普及ニ關スル調査研究 大陸ニ於ケル日本語教育狀況調査ノタメ左記二氏ヲ調査員ニ委嘱シ、朝鮮・關東州・滿洲國並ニ中華民國ヘ派遣ス 文部省圖書監修官補 古川 久 文部省國語調査官補 井之口有一 (ロ) 日本語教授法ノ研究 客年度ニ於テ研究決定ヲ見タル「日本語教授要綱」ノ再檢討ヲ行ヒ、ソノ説明書ヲ作成シ發表スルコトニ決定ス (ハ) 研究事業 東亞諸國ニ對スル日本語教育ノ振興ニ關係アル諸問題ニ關スル檢討ヲ行ヒタル結果、本年度ニ於テハ左記問題ノ研究ニ着手スルコトトセリ (1) 諸外國ノ植民地ニ於ケル國語政策 (2) 外國語教授法ノ史的研究 (3) 漢字ノ音訓ノ整理 (ニ) 日本語教育資料ノ作成 文部省編纂「ハナシコトバ」教授用掛圖ノ作成準備ニ着手ス (ホ) 日本語教育講習會ノ開催 本年二月十五日ヨリ同二十二日迄名古屋市東新小學校ニ於テ文部省・名古屋市・名古屋商工會議所ノ後援ヲ得テ開催シ、日本語教育ニ關スル基礎的知識並ニ興亞教育ノ涵養ニツキ講習ヲ行ヒタリ派遣講師七名、講習生七十五名 (ヘ) 雜誌「日本語」ノ發刊 大東亞ニ於ケル日本語教育振興ノ目的ヲ以テ、日本語ニ關スル權威者ノ研究等ノ紹介並ニ日本語教育者ノ聯絡ヲ圖ルタメ機關誌「日本語」ノ刊行ヲ計畫シ三月發刊ノ豫定ナリ (ト) 文部省主催「國語對策協議會」出席者招待會 本年一月二十日ヨリ文部省ニ於テ開催セラレタル同協議會出席者及ビ關係官七十名ヲ同月二十三日芝公園三緣亭ニ招待シ、出淵理事ノ挨拶並ニ本會事業ニ關シ松尾委員長ノ説明アリタリ</p>
<p>第一卷第二號 1941 (昭和16) 年5月</p>	<p>通信 pp. 50-54</p>
	<p>臺灣の國語運動 從來嘉義郡では皇民鍊成の捷徑は國語からといふモットーの下に、國語運動に特に力を盡して來たが、現在同郡に於ける國語解者は、國語講習所終了程度以上の者が五九・二六パーセント、公學校卒業程度以上の者が二七・六パーセントとなつてゐる。しかし郡當局は國語普及に更に一段の拍車をかけるべく、百五ヶ所の國語講習所の外、新年度に於ては新たに二十ヶ所を設置、専任講師十七名の補充も終り、陣容整備の上全郡國語化を目指して邁進することゝなつた。</p>
	<p>中國人の高等學校 いままで中國留學生が日本の官立大學に學ぶ方法としては、一高の特殊豫科で二年修學し、更</p>

に高等學校の第一學年に再入學してみたが、それでは結局大學卒業までには八ヶ年もかゝる不自由さであつた。

日華學會では日本を正しく認識させ、日華提携の大きな楔にしようとして、中國人だけの三ヶ年制の高等學校を計畫、この程文部省からの認可も得たので、神田東亞學校内に新設、四月中旬より開校の運びとなり、既に中國大使館を通じて新政府に留學生推薦手續も完了した。

内容は、細川侯を校長とし、一般の高等學校と同じく文科理科各四十名、日本語の教授と平行して普通高校の全課程を修了せしめ、不自由なく官立大學に進學しうるやうになつてゐる。

文化事業

一、わが駐獨大使館では、日本側の文化活動を一層敏活にするため、文化部を新設、佐久間公使を顧問とし、矢口書記官等がこの方面の仕事を担当することになつた。三月二十日午後には在ベルリン文化關係者を集め、今後の方針につき第一回の會合を行つた。

一、日蘭印の通商も開かれ、兩國間の文化交換が漸く活發にならうとしてゐる時、永くインドにあつて、事變勃發以來は大陸にあつて宜撫に従事し、最近ジャワバンド市に移住した民族研究家榊源次郎氏の主唱で同市に日蘭印文化協會が設立された由、藝能文化聯盟の堀内敬三氏に通知があり、同時に、同地に送る日本文化に關する文獻の蒐集斡旋と協力を依頼して來た。

一、紀元二千六百年記念事業として、國際文化振興會が世界各國から懸賞募集した「日本文化に關する論文」は昨年十一月卅日締切つたが、應募總數四九九篇のうち、アメリカ=九六、オーストラリア=四二、中華民國=三一、獨乙=二七、ブラジル=二二、滿洲=二一、印度=一九、イタリー、アルゼンチン、メキシコ=一八、英國=三、ニゼリア(アフリカの一角にある黒人國)=六、その他ガイ、ゴールドコーストあたりからもよせられてゐる。當選發表四月二十九日。

その内容は藝術方面では、文學美術等の一般論から歌麿、光琳、或は茶の湯、俳句等の研究に及び、また皇道、日本道德、大乘佛教、儒教、武士道、日本精神、中には吉田松陰の研究もあり、その他風俗の研究、華道、庭園、建築などの廣範圍に渡つてゐる。

一、盟邦ハンガリーがブタペスト大學やツラン協會などで、定期的に日本語講座或は日本研究を行つて、日本語熱の盛んなことは、本誌創刊號のハバーン氏の言葉にも既に明らかであるが、それにも拘らず、わが國ではハンガリー語の辭書も讀本もない有様であつた。關西の日洪協會ではこの不備を補ふべく、昨年末來同協會の野崎一彌氏等四氏を選任、適當な獨習書を編輯中のところ、この程やうやく脱稿、ハンガリー國人キシ・ラヨス氏(同協會員)の校閲をうけることになつた。

座談會「日支文化の提携」

三月下旬、東京日日新聞社主催のもとに南京に於て、中國の文化人を招き、支那文化の現状、日支文化提携の問題などに關して座談會が行はれた。出席者は、秦墨晒氏(南京新報社長、支那新聞界の先達)、張資平氏(作家、農墾部の技正で新支那に文名高い)、湯孤芳氏(教育部國立翻譯館)、孟梓氏(詩人、農墾部)、朱右白氏(詩人、中央大學教授)、劉敏君女士(女流作家)

座上、南京の復舊未だ充分ならず、もともと北支、滿洲から比べても教養が低い都では、書籍、雜誌なども低級なもの多く、怪奇小説などが、人々の心を捉へてゐるといふ話から、文化の水準を高めるため、大學・圖書館の設立が必要であること、又中日文化の交流といふ目的から兩國の古代・近代の優秀な文學作品を翻譯紹介しあふ意義、殊に日本を眞に認識する為に、先づ日本文學に依らねばならぬといふ建前から、汪主席などもこれに非常な關心を寄せ、中日文化教會に毎月五千元支給を行ひ、中日文化譯叢の出版にあて、林宣傳部長がこれを支持してゐる、一方中央大學あたりでも日本と交換講義を始めねばならぬなど、東亞文化圏の完成に向つて、種々眞摯な意見の交換が行はれた。

醫學語を日本式に整理統一

東亞新秩序建設、東亞共榮圈確立に伴ひ、日本醫學の大陸、海外への進出は目ざましく、既に滿洲北支方面の醫學校の教授は全部日本語で行つて居り、又内地各醫科大學も最近殆ど日本語で講義をなし、各學會共日本語で研究發表をなしてゐるが各醫學博士、教授、助教授は夫々勝手な翻譯語、用語を使用し、日本語、ラテン語、獨乙語入り亂れ、複雑混迷を來たしてゐる。一方日本國家にて行ふ醫師試験も今だに受験者の自國語を使用せしめてゐるのに鑑み、日本醫學會では世界に冠たる日本醫學會に統一せる日本語の醫學用語のないことは國辱であるとなし、いよゝゝこれが最後の統一に乗出することゝなつた。

從來各大學の醫科は總て獨乙語で講義をしてみた他、現在厚生省で行つてゐる醫師試験も獨、英佛語等夫々外國受験生の自國で施行してをり、排外思想と共に外國依存の弊害が強く叫ばれるに至つたが、なほ學者が著述、講義、講演等に用ゐる用語の亂雑さは、例へば—
 ヴイタミン、ビタミン。卒中、腦溢血、腦インボレー、中氣。肋膜炎、胸膜炎。トラホーム、トラコーマ。レブラ、癩、アウスザツツ。初生兒、新産兒、新生兒。X光線、レントゲン。瘡瘡、面皰。悪心、嘔氣。酒渣鼻、赤鼻。双胎、ふたご。品胎、三つご。要胎、四つご。周胎、五つ子。顛髑骨、こめかみ。

以上の如く、又

振頭譫妄（虚脱した如く身をふるはし謔言をいふ精神病）、嗜楽殺人（殺人に快感を覚える變態性）、完穀下痢（消化不良の結果食物をそのまま排泄する病氣）、癡譫多幸（人を傷けて快感を覚える精神病）

などの如き難解語も多く、何等の統一もない處から、昭和九年四月第九回日本醫學大會以來學界の緊急問題として取上げられ、數十名の委員を設け、續いて昭和十三年四月第一回大會に於ては、東亞新秩序建設、日本醫學の海外發展の見地から、益々用語統一の必要が迫り、三十餘の各分科學會代表の用語整理委員を選び、爾來三年を経、各學會共五、六千語から成る統一用語集を完成した。この學會用語集を日本醫學會整理委員が各分科學界より代表者を選任、毎月三回づゝ學士會館に審議會を開催し、各學會に共通し得る用語を討議統一して明春四月の大會までに暫定案を作製することゝなつた。用語は殆ど日本語に統一簡易化され日本醫學用語として、五十萬語位に決定を見る豫定である。かうした積極的な整理統一は、日本の凡ゆる學會に必要なことで夫々漸次行はれて行くだらう。

外國語假名遣の統一

假名づかひの統一につき、文部省では近く問題を（一）國語假名遣、（二）字音假名遣、（三）外國語假名遣の三部門に分け、逐次方針を定め、閣議を経て國家的に統一することとなつてゐるが、この中（三）の外國語假名遣は原音に従ふよりは、國語化された音、つまり國語音に據るやう見透しがつけられてゐる。例へば、ラヂオはラジオ（わが國の假名遣ではヂの場合は非常に稀である）となり、ビルディングはビルジグが適當と見られ、プラツトフォームもプラツトホームでよいことになる。なほヅはズ、ヰはイへ統一されてゆく。

外地行き教員の制限

大陸や外南洋など外國にある日本人の中等學校及び國民學校に奉職する教員の派遣方法については文部省と關係官廳との間で密接な聯絡をとり、（一）内地でも教員不足の場合であるから外地側から、勝手に引抜きに來ないこと、（二）内地側で本當に外地に適切な優良職員のみを送ること、などの建前から、その需給調節に腐心してゐるが、四月四日の閣議で「教育職員の外國及び外地派遣に關する件」を橋田文相から説明、決定した。なほ今年度の派遣職員は、初め外地側からの需要四千名に對し、各府縣に割當て推薦を求めて二千名を送ることゝなり、原則としては再び内地に戻り、交流を行ふ筈である。

翼賛會興亞團體の聯絡強化

前號本欄記載の如く、翼賛會では既存興亞團體を統合、翼賛會傘下に新統一團體を結成する意圖を以て、組織大綱もほぼ決定されてゐたが、改組後の翼賛會に於ても當然これが問題となり、東亞局長に永井柳太郎氏の起用を見て、愈々その實行にのり出すことゝなつた。しかし改組前に纏つた具體案の如き既存の興亞團體の全面的解消といふことは、明治以來の長い運動の歴史をもつた各團體の傳統を輕視した傾きありと、各方面に指摘されて來たので、各團體の聯絡提携を密にし、局長の指導を強化して各團體の根強い背景を組織に立脚する運動を個別的に展開せしめることに再編成すべしとする方針に變つて來た。

國語文化講座の發刊

國語を取巻く問題が今日程眞剣に考へられる時はない。今般、朝日新聞社が國語問題の全面的展望に依る「國語文化講座」（全六冊）の刊行を企てたのも、國語・國字の醇化、統一の明日への方向に寄與する一翼とならう。

岸田國士、新村出、橋本進吉、保科孝一、柳田國男五氏の下に、第一卷「國語問題篇」、第二卷「國語概論篇」、第三卷「國語教育篇」、第四卷「國語藝術篇」、第五卷「國語生活篇」、第六卷「國語進出篇」といふ構成で、執筆者は學術、文化各界の百數氏により、殆ど國語問題の全領域に互つて完璧を期してゐる。

日本語教授講習會二つ

一、日語文化協會（四月十四日より六月二十日まで、月水金の午後四時半—六時半。芝公園九

卷號（刊行年月日）

	<p>號地三、於日語文化學校）日本語教授法（松宮彌平氏）、國語講習の變遷（久松潜一氏）、日本語標準語法（湯澤幸吉郎氏）、標準語の理論と實際（神保格氏）、國語政策（保科孝一氏）、その他 石黒魯平、吉田澄夫、石黒修、松宮一也諸氏の小團研究指導や、堂ノ脇光雄氏、鶴見祐輔氏の特別講演などがある。</p> <p>一、青年文化協會（四月十四日より七月十一日まで、月水木金の午後六時—八時半、西神田一ノ二、同盟會館内）日本の發展と日本語（保科孝一氏）、言語教育理論（興水實氏）、日本音聲學（大西雅雄氏）、日本現代語法（今泉忠義氏）、日本語教授法（黒野政市氏）の基本講座の外、補助講座、特別講座等がある。</p> <p>兩者共に大東亞共榮圏に於ける日本語教師養成の緊急なる要求に應じて立つたもの。</p>
第一卷第三號 1941 （昭和16）年6月	<p>通信 pp. 57-59</p>
	<p>周作人氏等來朝・東亞文化協議會</p> <p>五月十一、十二兩日京都で開く東亞文化協議會に出席の為、中國文化部代表として華北政務委員會教育總署督辦周作人氏ほか玉石之北京藝術專科學校長、朱華新民學院教授、柯政和北京師範學院藝術科主任、劉承燾教育總署文化局調查課長、錢稻孫北京大學校長、蘇民生北京女子師範學院教授等一行十八名が、永川興亞院華北連絡部調査官に附添はれ、九日朝大連から門司入港の日滿聯絡線あるぜんちな丸で來朝、海路神戸へ向つた。</p> <p>周作人氏始め七氏は十一日午前十時から京都帝大本部樓上大會議室にて開かれた東亞文化協議會第三回文學部會に出席し、日本側からは岡部長景子、羽田京大總長、伊藤、宇野、鹽谷の東大及び狩野、松本京大名譽教授等十三氏が出席したが、席上活撥な意見の交換が行はれ</p> <p>一、中國大辭典の編纂促進 一、北京附近の文化遺跡保存 一、良書の普及（特に支那青年層へ）</p> <p>などの諸件を採擇、午後は京大文學部史學科陳列室その他學内を見學した。</p> <p>なほ周作人氏一行は十四日朝東京入り、同日午後四時帝國ホテルに到着した。直ちにロビーにてステートメントを發し、教育の振興に當つて日本との教育事業の合作により日支親善の實を更に擧げ、大東亞建設に向ふ意志を表明した。引續き五時より一ツ橋學士會館にて東亞文化協議會前會長故湯爾和博士の追憶會が催されたが、一行は旅装を解く間もなく出席、席上湯爾和博士嗣子湯器氏に中澤弘光畫伯の故湯博士の肖像が贈られ、周作人氏の追憶談などあり、慌たゞしい一行の旅程にも到着した一夕が和やかに閉ぢられたのであつた。</p>
	<p>各國學生の訪日</p> <p>一、滿洲國立中央師道訓練所生徒四十餘名は五月上旬上京、日本各地を見學の上六月初旬に歸滿の豫定であるが、この機會に東亞の盟主たる眞の日本の姿を認識し、力をあはせて東亞共榮圏確立の決意を鮮明にしようといふのである。</p> <p>一、四月二十九日バンコック出帆のバンコック丸にて日本訪問の旅に上つたバンコック日本語學校生徒十名は、五月十八日神戸入港、二週間の滞在豫定であるが、この間に向上日本の姿を眞に認識しようとはりきつてゐる。</p> <p>一、天津愛善日語學校第四回日本見學團男女二十二名の一行は、愛善日支協會事業部長野口竹次郎氏を團長として四月二十四日來朝、熊本にて支那語學校生徒らと交驩、關西、東京等を見學した。</p>
	<p>日本語教育振興會研究員歸國</p> <p>三月初旬日本語教育振興會の依囑により、現地外地に於ける日本語教育實情調査の為、北支・中支方面に古川久氏が、朝鮮、滿洲、北支方面に井之口有一氏が夫々おもむかれたが、兩氏は月餘の旅程を了へて四月中旬歸國した。日本語教育の根本的指針の要望される現在、兩氏の視察調査が有力な礎石の一部となることは言を俟たない。</p>
	<p>臺灣に報國推進大隊編成</p> <p>花蓮港廳鳳林郡下に報國推進大隊の設置を見、五月三日編成式が舉行された。その服務要項「職令」から二、三抜粹してお知らせする。</p> <p>第一二條 勤勞奉仕に率先し浪費を防ぎ進で國債購入を為す等戰時下國民の正道に邁進すべし。</p> <p>第一六條 常に部内の出入者に注意し、諜者、不逞漢、其の他舉動不審者潜入の見込あるときは直に警察官憲に通報すると共に之が檢索其他には積極的に協力すべし。</p> <p>第一七條 部民に於て流言蜚語を聽知したるときは之を正しく是正し、其の顛末を警察官憲に通報すべし。</p>

なほこの要項第一條には「隊員相互間は勿論、私生活内と雖凡て國語を常用すべし」とあり、國語の常用普及に一つの役割を果さんとしつゝある。

國語普及功勞者表彰

臺灣日日新聞社では昭和十二年以來、五月一日を期して毎年國語普及功勞者を表彰して來たが、皇民鍊成運動昂揚の最も必要とされるとき、第五回の國語普及功勞者として左の八氏を表彰することになった。

臺北州鶯歌街長	蔀 辰太郎氏
新竹大溪郡溪西 國民學校教員	北村 チヨ氏
臺中州北斗郡 臺中州巡查	福田 賢一氏
臺南州虎尾郡二 崙庄協議會員	廖 大氏
高雄州屏東市 小川町區書記	岡田福次郎氏
花蓮庫廳鳳林街 農業	除 秀春氏
臺東廳寶國民學校長	岡崎 泰彦氏
澎湖廳馬公街 澎湖廳書記	小池 永彦氏

共榮圈留學生座談會

日本で學ぶ大東亞共榮圈各國の留學生たちは盟主日本をどう見るか、その意見をききたいと情報局、國際學友會共同主催の「大東亞留學生座談會」が四月十四日午後五時半から星ヶ岡茶寮で開かれた。東大法學部のタイ國プラシツト君、昨年商大を卒業し、現在日本に關する本を執筆中の蘭印のオマル・ヤデイ君、ビルマのツンニエン君（桐生高工）佛印の呉文孟君（國際學友會日本語學生）をはじめ、フィリッピン、蒙古、滿洲國、中華民國の留學生十一名が出席、日本の青年も交つて互ひに胸襟を開いて感想を述べ、相互の親密を期して午後九時散會した。

日本語學校三題

一、皇軍入城後の福州は日を経るに従つて明朗色を取り戻してゐるが、早くも嘗つて日本に留學した林逢氏は五月五日附で日本語學校の設立を申出で、軍當局も閩江圖書館を校舍に開放して協力することゝなつた。

一、出征以來足掛け五年ぶりに四月上旬歸還した齋藤部隊彙野隊花井一男兵長によつて明らかにされた話題一つ。

一昨年春、中支の要衝信陽に新生中國の少年達を目標として信陽日本語學校が創立されてゐる。これは當時僅か〇〇名（マ）を率ゐて々難（マ）の一安に當つてゐた藤田警備隊長や、少數の在留部隊の將兵たちが軍陣の餘暇に廢墟の街に種を蒔いたのである。藤田校長を始め皇軍の有志が宣撫班も特務部も未だ來てゐない十四年二月、日本語を通じて東亞共榮圈の理想を新しき中國人達の胸に傳へてゐたのであつた。

一、日立鑛山では半島の従業員のため大雄院電車道脇に日語學校を開設し、半島出身の三井隆雄氏を教師として日鑛編輯の協和會讀本により簡易な日本語より教授してゐる。日本語を知らぬ不自由を日頃痛感してゐる人々は誰も熱心に聽講、著しい進境を示し、同校開設の目標たる日本人鍊成の趣旨も自然に達成されんとしてゐる。

臺灣國語關係文獻目録

臺灣國語研究會文獻蒐集整理委員の手により、臺灣に於ける國語普及に關する過去の文獻目録が殆ど完璧（マ）に近いまでに整理された。かうした着實な基礎調査は、國語普及の精神と技術を歴史的側面から明かにして將來の方向を確立せんと欲する人々の為に大なる利便を齎すであらう。

國語協會の「日本語普及」懸賞論文

國語協會（神田區西神田一ノ二）では兼ねてより「日本語普及」に關する原稿募集を行つてゐたが、なほ廣く各方面からの應募を俟つべく、締切期日を六月二十日に延期して優秀な成果を期してゐる。詳細は同協會に問ひ合せられたい。

略規（題目）大東亞建設と日本語

（長さ）四百字詰五十枚以内

（審査員）幣原坦、下村宏、鶴見祐輔、牧野良三、保科孝一の五氏

（賞品）一等 百圓、二等 五十圓

訂正

本誌先月號本欄の記事「外國語假名遣の統一」は只新聞記事に依り報導致したもので、文部省の公文に従つたものではありません。茲に訂正致します。この問題に就いての當局の意向は、今後確定の上發表される筈です。

卷號（刊行年月日）	
第一卷第四號 1941（昭和16）年7月	<p>日本語教育振興会新委員・顧問 p. 59</p> <p>藤野 進氏（委員）興亞院蒙疆連絡部事務官 丸尾 美義氏（〃）興亞院厦門連絡部調査官 白井 康氏（〃）興亞院華北連絡部 青島出張所調査官 久保田藤磨氏（〃）興亞院華北連絡部事務官 吉田 澄夫氏（〃）文部省國語調査官 藤村 作氏（顧問）北京國立師範學院名譽教授</p>
	<p>通信 pp. 60-61</p>
	<p>教科用圖書調査會設置</p> <p>文部省では、各種委員會並に調査會の整理統合に關する閣議決定方針に基き、從來文部省に設けられてあつた</p> <ul style="list-style-type: none"> 一、教科書調査會 一、中等學校教科書調査委員會 一、日本語教科用圖書調査會 一、青年學校教科書協議會 <p>の教科書に關する四調査會を統合し、新に文部大臣を會長とする「教科用圖書調査會」を設置することゝなつた。この程委員の顔觸れも漸く決定を見たので、右官制は愈五月廿日官報を以て公布、即日施行することになつた。</p> <p>本調査會は會長一名、委員六十名以内を以て組織され、調査會に三部を置き、第一部は國民學校教科用圖書、第二部は中等學校及び青年學校教科用圖書、第三部は日本語教科用圖書の編纂に關する事項を分掌し、第一部長には永田秀次郎氏、第二部長には林博太郎氏、第三部長には野村益三氏が夫々就任した。</p>
	<p>日本語教育振興会第二回委員會</p> <p>五月二十九日午後六時より、丸の内會館にて日本語教育振興会第二回委員會が開催され、現在に至る迄の事業報告並に昭和十六年度事業計畫の説明があつた後、晚餐。引き續いて井之口有一、古川久兩氏の日本語教育實狀調査報告が行はれた。</p>
	<p>學生國際會議は一先づ中止</p> <p>諸外國との親善、及び相互の正しい認識を目標として、日本英語學生協會が誕生してから七年、その間日比學生會議、日米學生會議を開催して來たが、今や緊迫した世界情勢に即應して、學生協會では取敢へず今春四月日本で開催される筈であつた、日比學生會議を中止し、七月廿九日からワシントン大學で開かれる豫定の第七回日米學生會議も参加中止と決定、なほ同協會の顧問會では、今後は若人の海外鍊成といふ精神的方面も十分に考慮し、派遣學生は語學の達者なものと云ふより、人物本位とし、原則として日本學生は日本語で意見を述べるやうに導き、漸次日本語普及に資さうといふことになつた。</p>
	<p>訪日教育視察團二つ</p> <p>一、舟山列島定海縣聯合自治委員會はこれまで日支親善、和平建國に力を竭して來たものであり、今や中學校二、小學校二十八、教師百六十八、生徒六千の多きに達し、その効果盡大なるものがあるが、この程海軍囑託高橋稔氏に引率されて、教師二十二名が來訪した。六月十日東京着、海軍省、興亞院、文部省を訪ね、東京帝大、慶大、市立一中、水産講習所等を見學、十四日には日光、十六日熱海に遊び歸國する豫定である。</p> <p>一、北京の華北教育總署直轄師資講肆館では現職の中等教員を召集し、六ヶ月の鍊成を経て、この度館長劉駿氏、教導長子享氏講師大西貞一氏引率の下に、團員五十三名の訪日視察團を形成、六月十一日東京着興亞院、文部省に挨拶、帝大、青山師範内原訓練所、文理大、東京女高師、聾啞學校、放送局、東京日日新聞社、帝國博物館、玉川學園、理研、市國民學校を普ねく見學した上、十九日歸國の豫定である。</p>
	<p>タイ國へカナ文字普及</p> <p>カナ文字を、東亞共榮圈の共通文字にしこれにより輝かしい日本文化を共榮圈諸國に傳へようと、カナ文字會が七日午後一時から大日本生活館で種々討論を續け、結論は日本語の進出については、漢字を常用とする大陸とは異なるタイ國へはカナ文字進出を必要とするといふ觀點から、今までは主として日本美術について紹介したが、今後は日常生活に必要な家庭醫學、通俗科學についてカナ文字書籍をタイ國に送り出すことを申合せた。</p>
	<p>“雪氷寒冷”に關する用語統一</p> <p>同じ「なだれ」といふ言葉でも種類に應じて「雪崩」「顔雪」「そこなで」「地こすり」さ</p>

卷號（刊行年月日）

	<p>ては「全面雪崩」「ほう」等なほ様々な呼び方があり、「雪氷寒冷」に関する用語は、勝手な譯語や方言俗語が入り混つてその正確な使用に迷ふ状態にあるので、日本雪冷協會では學術用語統一に関する企畫院からの通牒に基づき、これを統一する為、五月三十一日理化學研究所講堂に協議會を開催、取敢へず用語統一委員會を同協會内に設置し、各方面の材料を網羅して用語統一の公正を期することを申合せた。</p> <p>日本語教授法講義開催</p> <p>日本語教授研究所(芝區芝公園九號地三)では七月二十五日より三十一日まで毎日午前九時から正午まで、所長松宮彌平氏獨講の下に、日本語教授の具體的方法について夏期講習會を行ふ豫定である。</p> <p>國語教育學會第三回夏期講座</p> <p>來る八月三日より七日迄、東大文學部教室にて、左記により國語教育學會第三回夏期講座が開催される。</p> <table border="0"> <tr><td>日本語教授と國語問題</td><td>藤村 作氏</td></tr> <tr><td>題未定</td><td>橋本 進吉氏</td></tr> <tr><td>標準語の諸問題</td><td>東條 操氏</td></tr> <tr><td>本居宣長と日本の學問</td><td>久松 潜一氏</td></tr> <tr><td>題未定</td><td>西尾 實氏</td></tr> <tr><td>能樂の文學史的意義</td><td>能勢 朝次氏</td></tr> <tr><td>表現の問題</td><td>務臺 理作氏</td></tr> </table> <p>なほ詳細は本郷區駒込林町駒込中學氣付同學會研究部に問合せられたい。</p>	日本語教授と國語問題	藤村 作氏	題未定	橋本 進吉氏	標準語の諸問題	東條 操氏	本居宣長と日本の學問	久松 潜一氏	題未定	西尾 實氏	能樂の文學史的意義	能勢 朝次氏	表現の問題	務臺 理作氏																																		
日本語教授と國語問題	藤村 作氏																																																
題未定	橋本 進吉氏																																																
標準語の諸問題	東條 操氏																																																
本居宣長と日本の學問	久松 潜一氏																																																
題未定	西尾 實氏																																																
能樂の文學史的意義	能勢 朝次氏																																																
表現の問題	務臺 理作氏																																																
<p>第一卷第五號 1941（昭和16）年8月</p>	<p>通信 pp. 51-55</p> <p>日本諸學振興委員會國語國文學會</p> <p>六月十九日より三日間に亘り、敎學局に於ては日本諸學振興委員會第二回國語國文學會を文部省に開催し、國體の本義に基き、國語國文學に関する諸問題を研究討議した。委員を始め全國諸學校からの參加者傍聽者は、八百名を超える大會であつたが、その内容は次の如きものである。</p> <p>（第一日）</p> <table border="0"> <tr><td>わが國の學問に對する呼稱について</td><td>藤田徳太郎氏</td></tr> <tr><td>物語の日本的性格</td><td>森岡 常夫氏</td></tr> <tr><td>日本文獻の對象規定</td><td>池田 龜鑑氏</td></tr> <tr><td>日本美の普遍性</td><td>齊藤 清衛氏</td></tr> <tr><td>皇國の道現成の學としての國文學</td><td>志田 延義氏</td></tr> <tr><td>古代信仰に胚胎せる文藝</td><td>次田 眞幸氏</td></tr> <tr><td>支那の日記</td><td>玉井 幸助氏</td></tr> <tr><td>國文學に於ける隨筆の地位と其の特質</td><td>岩本 堅一氏</td></tr> <tr><td>荒木田久老に就いて</td><td>伊藤 正雄氏</td></tr> </table> <p>（第二日）</p> <table border="0"> <tr><td>國語音調の研究</td><td>平山 輝男氏</td></tr> <tr><td>國語の長母音について</td><td>有坂 秀世氏</td></tr> <tr><td>國語音韻の特質といはるものにつきて</td><td>池上 禎浩氏</td></tr> <tr><td>國語に於ける入聲 t の歴史と外來音の問題</td><td>岩淵悦太郎氏</td></tr> <tr><td>語法に於ける緊密性弛緩性</td><td>今泉 忠義氏</td></tr> <tr><td>國語の音節構造と母音の特性</td><td>橋本 進吉氏</td></tr> <tr><td>本居宣長の國語研究</td><td>笹月 清美氏</td></tr> <tr><td>日本語の傳統と敎育</td><td>藤原 與一氏</td></tr> <tr><td>日本語敎育に関する若干の問題</td><td>長沼 直兄氏</td></tr> <tr><td>「女流著作」に就いて</td><td>佐藤 幹二氏</td></tr> <tr><td>國語と國語敎育</td><td>西尾 實氏</td></tr> </table> <p>（第三日）</p> <table border="0"> <tr><td>萬葉集と古今集との間</td><td>風巻景次郎氏</td></tr> <tr><td>源氏物語を中心とする平安文學に於ける美の様式</td><td>關 みさを氏</td></tr> <tr><td>新古今集と菅贈太政大臣の歌</td><td>小島 吉雄氏</td></tr> <tr><td>世阿彌の能藝論の體系</td><td>能勢 朝次氏</td></tr> </table>	わが國の學問に對する呼稱について	藤田徳太郎氏	物語の日本的性格	森岡 常夫氏	日本文獻の對象規定	池田 龜鑑氏	日本美の普遍性	齊藤 清衛氏	皇國の道現成の學としての國文學	志田 延義氏	古代信仰に胚胎せる文藝	次田 眞幸氏	支那の日記	玉井 幸助氏	國文學に於ける隨筆の地位と其の特質	岩本 堅一氏	荒木田久老に就いて	伊藤 正雄氏	國語音調の研究	平山 輝男氏	國語の長母音について	有坂 秀世氏	國語音韻の特質といはるものにつきて	池上 禎浩氏	國語に於ける入聲 t の歴史と外來音の問題	岩淵悦太郎氏	語法に於ける緊密性弛緩性	今泉 忠義氏	國語の音節構造と母音の特性	橋本 進吉氏	本居宣長の國語研究	笹月 清美氏	日本語の傳統と敎育	藤原 與一氏	日本語敎育に関する若干の問題	長沼 直兄氏	「女流著作」に就いて	佐藤 幹二氏	國語と國語敎育	西尾 實氏	萬葉集と古今集との間	風巻景次郎氏	源氏物語を中心とする平安文學に於ける美の様式	關 みさを氏	新古今集と菅贈太政大臣の歌	小島 吉雄氏	世阿彌の能藝論の體系	能勢 朝次氏
わが國の學問に對する呼稱について	藤田徳太郎氏																																																
物語の日本的性格	森岡 常夫氏																																																
日本文獻の對象規定	池田 龜鑑氏																																																
日本美の普遍性	齊藤 清衛氏																																																
皇國の道現成の學としての國文學	志田 延義氏																																																
古代信仰に胚胎せる文藝	次田 眞幸氏																																																
支那の日記	玉井 幸助氏																																																
國文學に於ける隨筆の地位と其の特質	岩本 堅一氏																																																
荒木田久老に就いて	伊藤 正雄氏																																																
國語音調の研究	平山 輝男氏																																																
國語の長母音について	有坂 秀世氏																																																
國語音韻の特質といはるものにつきて	池上 禎浩氏																																																
國語に於ける入聲 t の歴史と外來音の問題	岩淵悦太郎氏																																																
語法に於ける緊密性弛緩性	今泉 忠義氏																																																
國語の音節構造と母音の特性	橋本 進吉氏																																																
本居宣長の國語研究	笹月 清美氏																																																
日本語の傳統と敎育	藤原 與一氏																																																
日本語敎育に関する若干の問題	長沼 直兄氏																																																
「女流著作」に就いて	佐藤 幹二氏																																																
國語と國語敎育	西尾 實氏																																																
萬葉集と古今集との間	風巻景次郎氏																																																
源氏物語を中心とする平安文學に於ける美の様式	關 みさを氏																																																
新古今集と菅贈太政大臣の歌	小島 吉雄氏																																																
世阿彌の能藝論の體系	能勢 朝次氏																																																

近世戯曲に於ける整理形式としての二種對立 守隨 憲治氏
 蕉風俳諧に於ける輕みの問題 穎原 退藏氏
 なほ二十一日には午後六時から、神田の共立講堂に於て左記により公開講演が行はれた。
 挨拶 文部大臣 橋田 邦彦氏
 講演
 文學の味ひ方いろいろ 五十嵐 力氏
 紫式部の藝術を憶ふ 島津 久基氏
 古人を尊重せよ 吉澤 義則氏

教科用圖書調査會第三部委員決定

前號本欄にて報導した教科用圖書調査會第三部の委員は次の諸氏と決定した。

委員 森山銳一 中島清二 鹽谷 温 松村 泰
 赤間信義 宮原民平 山本熊一 山本勇造
 田中隆吉 松宮彌平 徳永 榮 橋本進吉
 男爵 稲田昌植 神保 格 久松潜一 鶴見祐輔
 臨時委員 松崎健吉 榊谷秀夫 眞方 勲 橋瓜恭一
 （なほ第三部は日本語教科書を對象とするものである。）

大日本興亞同盟結成大會

六月十日の閣議決定に基き、國內興亞諸團體の統合をみることにとなり、こゝに大日本興亞同盟を設立することとなり、大政翼賛會東亞局に於て、思想啓蒙運動團體、事業團體、學術研究團體等に對して加盟方折衝中のところ、左記五十三團體の加盟を得たので、七月六月（マ）午後一時から日比谷公會堂で結成大會を開催、翌七日の支那事變四周年記念日には、東京市内五ヶ所で演説會を開催して、發足の第一聲を擧げ、國內興亞運動の統一ある活動を展開することになった。

[加盟團體] ○日滿中央協會○日本印度支那協會○日華學會○日華實業協會○日泰學院
 ○東方文化學院○東洋協會○東洋婦人教育會○東洋精神研究會○東南亞細亞民族解放同盟
 ○東亞法曹協會○東亞同文會○東亞調査會（東日）○東亞聯盟協會○東亞協會○東亞研究所
 ○東亞建設協會○東亞新秩序研究會○東亞振興會○東亞問題研究會（讀賣）
 ○同盟東亞研究會 ○同仁會○中央調査會東亞班（朝日）○中央滿蒙協會○中華民國法制研究會○海洋政策研究所○回教圈研究所○學徒至誠會○大日本同志會○大日本回教協會
 ○大日本經國聯盟 ○大東文化協會○大東亞開拓工業者協會○大東亞協會○東亞青年隊
 ○臺灣南方協會 ○大亞細亞協會○對支同志會○南方調査會（報知）○南洋經濟研究所
 ○南方栽培協會○興亞運動同志會○興亞研究所○興亞滅共聯盟○興亞青年運動本部
 ○黑龍會○愛國社○北支那協會 ○斯文會○新興（マ）亞會○政教社○善障（マ）協會
 ○東方文化研究所

當日（六日）は加盟各團體の役員、會員各種團體の代表者を始め、大政翼賛會柳川副總裁のほか各役員、政府側東條陸相、及川海相、鈴木企畫總院裁、及川興亞院總務長官心得、來賓としては滿洲國李紹康大使中華民國褚民誼大使等出席の上、國民儀式において、支那事變一周年に際して賜りたる勅語を柳川委員長捧讀、水野鍊太郎氏を座長として議事に入り、永井翼賛會東亞局長から経過報告あり、綱領、規約を決定し近衛總裁推戴の後、總裁告辭（委員長代讀）あり、次いで役員、誓、宣言を發表して議事終了、各閣僚、來賓側より祝辭があつた後、萬歳三唱して結成式を閉ぢ、陸軍省馬淵報導部長情報局高瀬中佐の記念講演があつて散會した。この日、國內興亞諸團體は一丸となつて統一ある運動展開への第一歩を踏出したのである。

顧問 一條實孝 柳川平助 八田嘉明 兒玉秀雄 頭山 滿 伍堂卓雄
 小川平吉 小磯國昭 大井成元 荒木貞夫 永田秀次郎 菱刈 隆
 總務委員長 林 銑十郎
 總務委員 石渡莊太郎 葛生能久 井田盤楠 山岡萬之助 本庄 繁 松井石根
 太田耕造 阿部信行 大藏公望 安達謙藏 高橋三吉 津田靜枝
 坂西利八郎 水野鍊太郎
 理事長 永井柳太郎

大日本興亞同盟初總務委員會

大日本興亞同盟では七月十六日翼賛會本部に初の總務委員會を開催、理事長、總務委員長を始め、本庄、阿部、水野、葛生、津田、大藏、山岡、坂西、松井、高橋、石渡の總務委員出席、同盟内部機構の整備、並に今後の具體的運動方針につき協議し左の事項を決した。

- 一、同盟の行動力を強化するため約五十名の特別委員を擧げて方法を審議せしめる。
- 二、同盟の内外に對する活動方針に即應する企畫、情報、研究等の各委員會を設置する。
- 三、興亞運動に關し政府、翼賛會および興亞同盟の擔當する部門を決定するため三者の間に協議會を設置し九月より實際活動を開始する。
- 四、八月中に同盟の内部機構を完成するとともに、活動の基本たるべき人事を決定すること。
- 五、協議會議員、常任理事、理事および委員等の役員は、各團體より候補者を選出せしめ、次回總務委員會において決定する。
- 六、同盟の庶務ならびに設置さるべき協議會、理事會、委員會等に附屬すべき職員のため理事長室を設け、東亞局と緊密なる連絡を保ちつゝ事務の處理に當らしめる。
- 七、舊興亞團體聯合會の機關誌「興亞」を同盟において繼承する。なほ各團體において發行してゐる興亞關係雑誌はこれを統合することとし、特別委員會を設けてその方法を研究せしめる。
- 八、總務委員會は當分毎週火曜日に開催する
- 九、來る七月二十四日大阪中ノ島公會堂に講演會を開催、關西方面での第一聲をあげる。

第一回興亞青少年運動聯絡會議

日準（マ）支青少年運動を通じて、わが不動の國策を貫くべく、現地青少年層には景秋來鬱勃たる「興亞青年運動」の底流がうごきそめてゐたが、この方向を鮮明にする為、「第一回興亞青少年運動聯絡會議」が七月九、十兩日明治神宮外苑大本日（マ）青少年團本部で開かれた。大陸から馳せ參じた若人は、在華日本人青年團天津の十名を筆頭に北京、濟南、青島、蒙疆、太原、廣東、上海、南京、抗州、蘇州、無錫、蚌埠、蕪湖、安慶、鎮江、九江、漢口の各地青年團それぞれ二名乃至三名づゝ計五十名、滿洲國代表二名で、會議は大日本青年團側二十五名と文部省、興亞院關係者が出席して圓卓式懇談に入り、現地報告を基礎に今後如何に興亞青少年運動を展開して行くかを協議した。

訪日見學團三つ

一『天津特別市立女子中學校』では從來も日本の女學校と交通連絡（マ）を計り、將來中國の子女教育を擔當すべき同校生徒の吾が國情に對する認識強化に意をもちてきたが、この際なほ一層の認識を深める為日本及日本人に接觸し、兼ねて今までの文通で識つてゐた友人達と交りを新にせんと目的にて、校長陳蔭佛氏、教官林克馬氏の引率の下に十一名が來朝、七月十日東京に到着した。學校、公共機關見學の後青山女學院も訪れなどして十四日離京、箱根、熱海、奈良、京都、大阪、四國、九州まで遊歴し、眞の日本の自然・風俗に親しまうとの計畫である。

○『崑山青年日本見學團』今事變に於て最も激しい戰闘の行はれた所とて、從來崑山住民は、欧米崇拜の念が強かつたが、宏大無辺の聖恩と現地當局者の恩情明下に大に覺醒、この際直接日本に接觸し、吾が尊嚴なる國體並に吾が國の東亞新秩序建設の擔當者としての實力を認識し、以て崑山住民思想の指導明安確保の推進力たらんといふ目的で來朝。團員十二名悉くが教員、教會關係或は公職にある指導階級の人々よりなる。七月七日東京看（マ）、興亞院、理研、帝大、國民學校、新聞社等を視察、鎌倉、箱根、熱海、伊勢、關西、九州を経て二十二日歸國の豫定である。

○『北京市小學校教員視察團』は北京市小學校教員の再教育を目的とせる教員訓練所第一回卒業生中の優秀者よりなり、日本の眞の姿を認識して北京教育の改善に寄與せんと目的で、武内安治、三上鷹鷹兩氏を補導者とし、訓練所主任張紀生氏を團長とし、以下十二名の教育諸氏が大阪、奈良、伊勢を経て、七月四日東京着にて來朝した。興亞院、文部省、その他各種學校を見學し、九日東京發、箱根、熱海、京都、九州に遊んで十八日歸着の豫定。

○『中央日本語學院生徒』は卒業生の大部分が小、中學校日本語教員となる實情に鑑み、學生をして日本の社會、人情に觸れしめんと目的を以て、教授倉橋義博、呂易兩氏に伴はれ、二十歳から三十歳位までの男女團員二十五名が來朝した。七月九日東京着、興亞院、文部省に挨拶の上、國際文化振興會、國氏（マ）學校、東亞學校等を見學十二日には日本語教育振興會主催にて芝三緣亭に懇談會が催され、大岡、釘本、長沼、關野、大志方（マ）、松宮の各常任委員出席、日本語學習についての希望や意見が交換された。

日本語教師養成講習會終了

本誌第二號本欄既報の青年文化協會主催第一回海外進出日本語教師養成講習會の修了式が七月十一日午後六時から學士會館で行はれたが、修了者は國民學校訓導五十名、專門學校出身者五十二名、計百二名で内女子十名であつた。その好成績に力を得た同協會では來る八月一日よ

卷號（刊行年月日）	<p>り十日間第二回講習會を東京文理大で行ふことゝなつた。資格は廿八歳より四十歳までの男女國民學校訓導並に同資格者定員二百名である。詳細は神田西神田一二同盟會館内同協會宛紹介（ママ）されたい。</p> <p>議題と講師は次の如くである。</p> <table border="0"> <tr> <td>日本語教授法</td> <td>黒野 政市氏</td> </tr> <tr> <td>日本語標準音</td> <td>大西 雅雄氏</td> </tr> <tr> <td>日本語標準語法</td> <td>今泉 忠義氏</td> </tr> <tr> <td>言語教育理論</td> <td>與（ママ）水 實氏</td> </tr> <tr> <td>日本語政策</td> <td>保科 孝一氏</td> </tr> <tr> <td>日本語共榮圈</td> <td>石黒 修氏</td> </tr> <tr> <td>外地の日本語教育</td> <td>安藤 政次氏</td> </tr> <tr> <td>日本語教材編</td> <td>大岡 保三氏</td> </tr> <tr> <td>日本文章論</td> <td>百田 宗治氏</td> </tr> </table>	日本語教授法	黒野 政市氏	日本語標準音	大西 雅雄氏	日本語標準語法	今泉 忠義氏	言語教育理論	與（ママ）水 實氏	日本語政策	保科 孝一氏	日本語共榮圈	石黒 修氏	外地の日本語教育	安藤 政次氏	日本語教材編	大岡 保三氏	日本文章論	百田 宗治氏																					
日本語教授法	黒野 政市氏																																							
日本語標準音	大西 雅雄氏																																							
日本語標準語法	今泉 忠義氏																																							
言語教育理論	與（ママ）水 實氏																																							
日本語政策	保科 孝一氏																																							
日本語共榮圈	石黒 修氏																																							
外地の日本語教育	安藤 政次氏																																							
日本語教材編	大岡 保三氏																																							
日本文章論	百田 宗治氏																																							
第一卷第六號	通信 pp. 67-69																																							
1941（昭和16）年9月	黄在江氏來朝																																							
	<p>上海日語專修學校の教授として、又その他中支に於ける日華親善に種々力をつくして居られる黄在江氏のこの度の來朝に際して、日本語教育振興會では七月十八日常任委員關野、大志方（ママ）、松宮三氏、及び興亞院の杉浦、平松兩囑託、松宮彌平氏出席のもとに、氏を招いて午餐を共にした。席上、日本語教授の實際に就ていゝ意見の交換があり、上海に於ける日本語學習熱の盛んな狀況が語られ、根本原理の確立の必要を痛感した。なほ、同氏は現在中國語による日本語文典を執筆し終り、近く上梓の運びにある。</p>																																							
	山口喜一郎氏の來朝																																							
	<p>北支に於ける日本語教授の第一人者である山口喜一郎氏は、七月中旬來朝したが現地に於ける實情と、中央に於ける根本方針との緊密化に向つて、この度同氏の來朝は大きな意義あるものとして喜ぶべきことである。なほ、七月二十二日には麻布光悦に於て氏を中心とし、日本語教育振興會常任委員との懇親會があり、大岡、釘本、長沼、關野、大志万、松宮の委員全部出席和やかな懇談の裡に日本語教育の實踐に關する意見が情熱と誠實とを以て交されたのであつた。又二十五日には山王ホテルに於て「コトバ」の同人諸氏が山口氏を招いて懇談會を催し、種々有益なる意見の開陳があつた。</p>																																							
	日本語普及に關する協議會																																							
	<p>七月二十一日午前九時半より興亞院主催、同會議室に於て「日本語普及に關する協議會」が開催され、</p> <p>(イ) 日本語教材並教授法に關する件 (ロ) 日本語教員養成に關する件 (ハ) 日本語教育振興に關する件</p> <p>等について、各出席者から自由な意見が提出された。出席者は次の如くである。</p> <table border="0"> <tr> <td>文部省</td> <td>圖書局長</td> <td>松尾 長造</td> </tr> <tr> <td></td> <td>國語課長</td> <td>大岡 保三</td> </tr> <tr> <td></td> <td>圖書監修官</td> <td>各務 虎雄</td> </tr> <tr> <td></td> <td>圖書監修官</td> <td>釘本 久春</td> </tr> <tr> <td></td> <td>囑 託</td> <td>西尾 實</td> </tr> <tr> <td></td> <td>囑 託</td> <td>長沼 直兄</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>島津 久基</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>土岐 善麿</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>様（ママ）本 進吉</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>藤村 作</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>保科 孝一</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>山根 藤七</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>山本 勇造</td> </tr> </table>	文部省	圖書局長	松尾 長造		國語課長	大岡 保三		圖書監修官	各務 虎雄		圖書監修官	釘本 久春		囑 託	西尾 實		囑 託	長沼 直兄			島津 久基			土岐 善麿			様（ママ）本 進吉			藤村 作			保科 孝一			山根 藤七			山本 勇造
文部省	圖書局長	松尾 長造																																						
	國語課長	大岡 保三																																						
	圖書監修官	各務 虎雄																																						
	圖書監修官	釘本 久春																																						
	囑 託	西尾 實																																						
	囑 託	長沼 直兄																																						
		島津 久基																																						
		土岐 善麿																																						
		様（ママ）本 進吉																																						
		藤村 作																																						
		保科 孝一																																						
		山根 藤七																																						
		山本 勇造																																						
	日本語學會 小倉 進平																																							
	日本方言學會 東條 操																																							

卷號（刊行年月日）

日本音聲學協會	神保 格
	大西 雅雄
日本音聲學會	小幡 重一
	田口 柳三郎
國語協會	颯田 琴次
	石黒 修
國語教育學會	岡崎 常太郎
國語文化學會	大久保正太郎
	松尾 捨治郎
	輿水 實
	湯山 清
	熊澤 龍
日本青年協會	缺 席
カナモジ會	松坂 忠則
青年文化協會	今泉 忠義
	黒野 政市
國學院大學語法研究會	堀江 秀雄
	高崎 正秀
國際文化振興會	長崎 喜三
	梅本 克巳
日華學會	有賀 憲三
	永崎 榮一郎
國際學友會	岡本千萬太郎
日語文化協會	松宮 彌平
	石黒 魯平
	松宮 一也
善隣協會	織本 重義
	神崎 清
	佐久間 次彦
聲音協會	家水 英吉
日本心理學會	城戸 幡太郎
	波多野 完治
興亞院側	文化部長 松村 肅
	政務二課 森調査官
	文化部第二課長 榭谷 秀夫
	調査官 辻田 力
	事務官 關野 房夫
	事務官 小林 與三郎
	囑託 大志萬 準治
	囑託 平松 龍英
	廣東事務所事務官 小沼 享

東亞新聞記者大會開催

八月四日廣東に於て國民政府宣傳部主催東亞新聞記者大會が午前八時三十分より、汪行政院長を始め、我が南支陸海軍首脳、獨伊兩國領事等臨席、日滿支三國新聞代表者全員出席のもとに、中山記念堂に開催された。汪精衛氏はその第一日の四日に新聞代表者を前にして、日華基本條約、及び日、滿、華共同宣言の根本精神を説き孫文の遺志を傳え、以て東亞共存共榮完成の為に東亞新聞人の進むべき道を明かにした。なほ第二日には中山記念堂に於て東亞共存圈設立に關する政治、經濟、文化三部門に就いて座談會を開き、三時間餘に互り熱心に意見を披瀝したが、その中文化部座談會に於ては、

(一) 言語相違の不便を補ふ為最大の努力を払ひ、三國は各地の國語を學校の必修科目とすること。

(二) 日本の漢字制限三千字までにすること。

卷號（刊行年月日）

(三) 三國の實情紹介のため視察團の派遣交換等を勵行すること。
 (四) スポーツ及び文獻紹介等により文化交流に努むること。
 の四項に互（マ）つて眞剣な討議が行はれた。かくして多大の収穫を得て、この歴史的大會は七日午後二時から閉幕式が舉行され、次回の會合を新京に約して散會した。

日本語教員懇談會

中國側學校に於て日本語を擔當してゐる日本人教員の中今夏休暇を利用して歸國した者多數の中、東京並にその近郊に居る者の參集を求めて、八月六日午後三時より興亞院に懇談會を催した。松村文化部長の講話の後、各地に於ける實情や希望を卒直に語り合ひ、苦心談と共に使命感に強く生くべき自覚を更に深めた。引續き午後六時より興亞院關係官と麹町寶亭に晚餐を共にし、酷暑の一夕を歡談に送つた。出席者は左の通りである。

保定女子師範學校	阿部 文治
河北省立樂縣師範學校	小松崎英男
天津商工學院附屬中學	井澤 喜吉
江蘇省立蘇州實驗小學	池田 求
天津究眞中學校	小野松五郎
天津市立師範學校	池永 胖
江蘇省立常州中學	小野 文星
安徽省崇正中學校	大竹 誠
江蘇省立太倉中學校	加藤 菊一
無錫縣立女子中學校	柿崎長一郎
江蘇省立蘇州中學	風間幸二郎
南京市立第二中學	菊地 一三
江蘇省立鎮江師範學校	中牧 隆忠
浙江省立杭州女子中學	鈴木 昌隆
抗州市立第一模範小學校	酒井 浩
南京市立女子中學	林 米子
安徽省立模範中學	宮原 輝彦
江蘇省立無錫高級工業職業學校	田中 信一
安徽省蕪湖中學校	眞下 政安
南京市國立師範附屬小學校	渡邊 定則

第一卷第七號
 1941（昭和16）年10月

日本語教育振興會の設立 p. 37

東亞に於ける日本語普及の緊急且重要なことは今更いふまでもない。唯、問題は之が指導の機關にあり、その組織にある、このために文部省と興亞院とは豫て協力の下にこの事業の進展を圖つて來たが、愈その外郭團體の結成を意圖し、八月二十五日を以て日本語教育振興會の設立を見るに至つた。

かくて本會は日本語教育に關する研究、日本語教科書の編纂、日本語教師の養成、雑誌の發行、及び從來の日本語教育に關係ある諸團體の連絡並にその事業の調整等、凡そ日本語普及に關する緊要な任務を遂行することとなつた。

ここに、本會が既設諸團體との密接な聯繫に挺身し、銳意事業の調整に當つたならば、鞏固な一致協力のうちに各々の獨自性を生かしつゝ日本語普及の大事業を完遂しうるに至るであらう。

本會の組織は役員としては、文部大臣を會長文部次官、興亞院文化部長を副會長、文部省圖書局長を理事長とし、顧問・理事・監事・評議員各若干名、職員としては總主事・主事・書記・研究員を置き、庶務・會計・研究・指導養成・圖書・雑誌・普及の七部を設け、學界及び諸團體の積極的援助を得て目的の完遂を期することになつたが、その詳細は近く整備のうへ本誌上に發表の豫定である。雑誌「日本語」は從來の日本語教育振興會が發展的に新團體の一翼を擔ふことになつたと同時に、引續き發行の筈であるが、機構の擴大強化に伴ひ、次號以下面目を新にして更新と飛躍とを以て讀者諸氏の前に現れるであらう。

本會の執務は、文部省内の一室に於て行はれることになりその陣容も整ひ、諸設備も既に完成に近づきつゝある。過日來、役員職員の會合を催し、諸規定を設け、準備を整へつつあるが、

<p>卷號（刊行年月日）</p>	<p>ある部に於ては既にその活動を開始してゐる。本會の誕生は興亞事業の基底である日本語普及の實をあげ、東亞文化振興の基礎を確立するために、各方面からその發展を期待せられてゐる。</p>
<p>第一卷第八號 1941（昭和16）年12月</p>	<p>彙報 pp. 76-84</p> <p>○本誌第七號既報の如く八月二十五日、朝野の期待裡に設立を見た本會は、その後着々諸般の準備を整へ、各部において實際の事業に着手してゐる。</p> <p>九月一日、松尾理事長の名において新聞紙上に次の如き趣意書を發表し、本會今後の進路を明確に示した。</p> <p>日本語教育振興會設立趣意書</p> <p>大東亞共榮圈内ニ日本語ヲ普及シ、日本語教育ノ振興ヲ圖ルハ刻下ノ急務ナリ。從來モ此ノ事業ニ着手セル團體尠シトセザレドモ、時局ノ進展ハ個別的の局部的施設ニ止マルヲ許サザルモノアリ。茲ニ此ノ事業ノ組織的發展ヲ期センガ為、興亞院及文部省ノ意ヲ承ケテ本會ヲ創設シ、必要ナル各般ノ施設ヲ講ズルト共ニ、廣ク各種團體ノ事業ヲ調整シテ統制アル事業ノ促進ヲ圖リ、以テ焦眉ノ急務ニ備へ、目的ノ完遂ニ萬遺憾ナキヲ期セントス。</p> <p>本會創設ニ當リ、其ノ趣意ヲ述ベテ御指導御鞭撻ヲ仰グヤ切ナリ。</p> <p>併セテ別紙本會規則御高覽ニ供ス。</p> <p>昭和一六年九月一日 日本語教育振興會（本會規則八十一頁參照）</p> <p>○十月十三日夜六時より神田一ツ橋學士會館に於て本會創設披露會が催された。會長・副會長・理事・監事を始め、顧問・評議員の大多數出席、期界朝野の名士一同に會して本會の前途を祝福し、激勵、示唆の言葉が交はされ、ここに日本語普及事業の重大さが愈々自覺された。</p> <p>橋田會長挨拶</p> <p>今回大東亞共榮圈ニ日本語ヲ普及シ日本語教育ノ振興ヲ圖ルタメニ日本語教育振興會ガ創設セラレマシタ 本日御挨拶ヲ兼ネテ御懇談ヲ願ヒマスタメ茲ニ各位ノ御參會ヲ得マシタコトハ私ノ欣幸トスルトコロデ御座イマス</p> <p>今ヤ聖戰五年御稜威ノ下忠勇ナル皇軍將兵ガ勇敢奮闘陸ニ海ニ赫々タル武勲ヲ建テテオリマスコトハ吾々ノ感謝感激措ク能ハザル所デアリマス銃後國民亦ヨク一致團結シテ國策ノ完遂ニ協力シマシテ大東亞共榮圈確立ノ偉業ガ日ニ進捗ヲ見ツツアルコトハ洵ニ慶賀ニ堪ヘナイトコロデ御座イマス</p> <p>シカシナガラ今次聖戰ノ使命ノ重大ナルヲ稽ヘマス時申スマデモナク今後愈々堅忍持久ノ覺悟ヲ新ニシ所期ノ目的ニ向ツテ邁進致サナクテハナラナイト存ジマス コレガタメニ必要ナ方策施設ハモトヨリ多イノデ御座イマス（マ）ガ別ケテモ日本語ノ徹底的普及ヲ地盤トシ日本文化ヲ中軸トシタ大東亞文化圈ノ樹立ヲ今日カラ圖ルコトハ最モ急務デアルト信ジマス</p> <p>從來モコノ種ノ事業ニ着手シタ團體ハ尠クアリマセンガ時局ノ進展ハ個々別々ナ施設ニ止マツテ居テハ所期ノ目的ヲ完遂スルコトハ出來ナイ情勢ト相成リマシタノデ茲ニ本事業ノ組織的發展ヲ期スルタメニ興亞院及ビ文部省ノ意ヲ承ケテ本會ガ創設セラレタノデアリマス カクシテ本事業ノ遂行ノタメ緊要ナ各般ノ施設ヲ講ジマスト共ニ廣ク關係諸團體ト協調連絡シテ事業ノ促進ヲ圖リマシテ興亞大業ノ完遂ニ萬遺憾ナキヲ期シタイト存ズルノデアリマス 各位ニオカセラレマシテハ右ノ趣意ヲ御諒承下サイマシテ御鞭撻ト御協力ト賜ハラントコトヲ切望シテヤマナイ次第デ御座イマス</p> <p>コレヲモチマシテ後挨拶ト致シマス</p> <p>なほひきつゞいて宮本武之輔氏（企畫院次長）、鈴木美通氏（善隣協會理事長）、永井松三氏（國際文化振興會理事長）、長谷川如是閑氏（評論家）の挨拶があつた。次に要旨を抄録する。</p> <p>宮本武之輔氏——醇正ナル日本語ヲ東亞ニ普及スベキデアリ須ク不必要ナル外來語ヲ排除シ日本語ヒイテハ日本民族ノ傳統的ナ美シサヲ衛ラネバナラナイ</p> <p>鈴木美通氏——日本語教科書ニ適當ナノガナイノハ日本語ヲ外人ニ教ヘル場合甚ダ不便デアリ日本語普及上甚ダ遺憾ナ點ガ多クツタガ今回日本語教育振興會ガ發會セラレ先ヅ立派ナ日本語教科書ヲ編纂サレタイ</p> <p>永井松三氏——日本語教育振興會ノ設立ハ東亞ニ於ケル日本語ノ普及ヲ趣旨トシテ居ラレルガ國際文化振興會ニ於テハ滿洲中華ヲ除ク海外ニ我ガ文化ヲ宣揚スルタメ先ヅ日本語ヲ通シテ日本文化ヲ認識セシメ日本語ノ學識ガ如何ナル程度ニ進ンデ居ルカヲ研究スル要ガアリ又中華滿洲ニハ觸レズ日本語ノ國際的普及ノ準據ヲ示ス要ガアリ藤村博士ヲ會長トシテ委員會</p>

ガ出来ソノ研究ノ結果基本語彙ノ研究ヲ進メテキル コレハ外國人ニ日本語ヲ教育スルノニ如何ナル程度ノ語彙ガ必要カヲ調べル要ガアリソレカラ日本語ノ文法ヲ研究スル要ガアリ純粹ノ日本語ノ文法特ニ日本語ヲ學ブ外人ニ適當ナル文法書ト共ニ辭典ヲ作ルコトガ必要ニナル ソシテ文法書ヲ英獨佛何レカノ語デ作ツテ置クトソレカラ西班牙語ポルトガル語ニモ和蘭陀語ニモ應用出來ル 然シ東亞ガ中心トナル以上中樞ノ事業ハ日本語教育振興會デ指導的ニヤツテ頂タイ 獨乙ニオイテハベルリン ライプチツヒ フランクフルト各大學デ日本語講座ガアル 其他伊佛英和ニモ大學ニ日本語ノ講座ガアル 亦北米ニ於テモ各地ノ主ナル大學ニハ日本語講座ガアル 南米ブラジルニ於テモ研究機關ガアル 特ニ注目スベキハ濠州ガ日本語研究ニ熱心デ各大學ニソノ研究機關ガアル ソノ他私立ノ研究機關ガアル 欧米ニハ何ノ程度ニ行ハレテ居ルカトイフ調査モ出來テキル カク欧米デハ日本語ヲ非常ニ稱揚シテキル 昨年十周年記念日ニ懸賞論文ヲ募集シタ中ニ洪牙利人ガ一等賞ヲ取ツタガソノ人ハ勿論自國語デ書イテキルガソレニ日本語ノ翻譯ヲツケテキル ソレガ立派ニ出來テキテ而モ自筆デ書カレテキル コノ人ハ日本ニ來タコトモナク學者デモナイ 大藏省ノ官吏僚デアル 非常ニ熱心デ研究シタ人ニ違ヒナイ コレヲ更ニ進メルタメニハ立派ナ教科書ガ必要デアリ振興會デハ特ニコノ方面ニ充分カヲ竭サレタイ

長谷川如是閑氏——國語ノ研究ガ起ルノハソレヲ海外ニ普及セシメントスル時ニ始マル 發音ヤ文法ヨリモ國語ノ文化面ヲ發展サセナケレバナラナイノダガ佛蘭西デハソレニ三百年モカカツテキル 佛蘭西語ヲ海外ニ普及セシメル背景ニハカクノ如キ文化面ノ伸長ガアツタノデアル 日本語ヲ支那ニ教ヘルノニ正確ナ日本語ヲ教ヘ文化面ニ正シイ言葉ヲ用キ傳統的ナ格調ノ高イ言葉ヲ傳ヘネバナラナイ 簡便主義ヤ拙速主義ノタメニ道ヲ過ツテハイケナイ ソレニハ先ヅ吾々日本人自ラガ高イ文化性ヲモツタ國語ヲ育テ用キルヤウニ努力シ日本語ヲ美シイモノニ高メルヤウニ努メナケレバナラヌ 日本語ハアクマデ藝術的ナモノデアル シカシ現代ノ如ク日常生活ト藝術トガ掛離レテキルノデハ到底ソレハ望ミ得ナイコトデアルガ元來日本語ハ常ニ生活ト文化トノ高イ一致ノ中ニ洗練サレテキタ 近ク江戸時代ニオイテモ現代ヨリソノ點シツクリ行ツテキタと思フ ダガ今ハ凡ユル艱難ヲ排シテ佛蘭西人ガ三百年カカツテヤツタコトヲ吾々ハ十年二十年デナシトゲネバナラナイ

この後で大西雅雄氏起ち本會に對して好意的な示唆と激勵の辭を與へられ、九時盛會裡に散會した。

○日本語教科書編纂の事業は、本年初頭に刊行を見た「日本語教科用ハナシコトバ」上中下三卷の後を承けて、「日本語讀本」卷一乃至卷五の編纂に着手し、その卷一は、十月十五日に發行された。

「一 アサヒ」以下「三十七 フジノ 山」に至る三十七課から心り、A列5號版で本文九十一頁、ほかに五十音圖等を添へた。「ハナシコトバ」同様四度刷の美麗な繪畫を多數挿入し、口繪には、わが國民學校兒童生活の一段面をアート写真版として掲げた。本書は、「ハナシコトバ」上中二卷から續くものとして、主として初等教育に於ける日本語の正規學習者で、話言葉を一通り習得した者を對象として編纂したのであつて、文章は片かな及び小數の漢字を以て表記した。またかなづかひは、國定教科書に準じ、全部歴史的かなづかひを用ひた。

○「日本語讀本」卷二の原案は九月二十九日教科用圖書調査會第三部會に於て可決された。平がなの學習に進む段階として、かなは大半分かなを使用し、平がなは一應學習せしめる程度に止めた。卷一同様四度刷の美麗な繪畫を多數挿入することとして目下その揮毫を急いである。

○「ハナシコトバ學習指導書」下卷は、九月下旬脱稿、その後教科用圖書調査會第三部委員の意見を徴してゐたが、十月末確定したので、十一月八日、これが印刷發行方の手配を了した。本文約二百頁、上中兩卷に比して分量は約百頁少い見込みである。

○本年度から約三箇年の繼續事業として編纂に着手した日本文化讀本十冊の中、その第一冊「大學の學生生活」は九月脱稿、同月二十九日の教科用圖書調査會第三部會の議に上し、慎重審議の結果可決された。これはわが大學の性格と學生の勉學態度等を東京帝國大學に例を求めて記述したもの。B例6號約五十頁の豫定で、目下挿畫とすべき写真等の整備に當つてゐる。

○「日本語讀本」卷三及び日本文化讀本第二冊「さくら」（假題）は、前者は十月下旬、後者は十一月上旬にほど成案を得た。ともに十一月中に教科用圖書調査會第三部會に諮る豫定で、着々これが整備に努めてゐる。

○「新送り假名法案」（假稱）の第一回審議行はる。文部省圖書局國語課においてはかねて國語の語查研究並びに整理統一事業の第一着手として、新送り假名法の制定に努力中であつたが、このほど大體の成案を得たので、九月四日午前九時半より省内第二會議室において、その

第一回の審議を行つた。出席者は圖書局長を始め、國語・編修・發行各課長及び關係各圖書監修官・國語調査官・囑託等十九名で、「第一篇、從來の送り假名法に關する調査研究」、「第二篇、從來の送り假名に關する調査研究」、及び「第三篇、新定送り假名法案」の三部から成る議案について慎重審議を行つた。

○文部省においては國民學校初等科第三學年及第四學年用國民化教科書原案を教科用圖書調査會に諮問し、同調査會第一部會は十月三十一日午前九時より二日間に亘り、本省に開會、部長永田秀次郎、黒田委員外十六委員出席、本省より橋田文部大臣、菊池次官、松尾圖書局長以下關係官出席調査審議の結果原案に多少の修正を加へ可決十一月一日午後三時閉會した。

右可決されたものは明十七年四月以降國民學校初等科第三、四學年用として使用せしめる國民科の諸教科書にして、「初等科修身」一、二、「初等科國語」一、二、三、四の計六冊となつてゐる。なほ併せて第四學年に於ける「(マ) 郷土の觀察に關する要綱が附議された。

國民科教科書は今春より使用せしめてゐるものに「ヨイコドモ」と「ヨミカタ」とがあるが、今度審議された第三、四學年用教科書は新しく「初等科修身」「初等科國語」といふ名稱を附して、兒童の心身發達に即應させつゝ、名實共に科目の分化を明らかにしてゐる。第三學年用の教科書は低學年に於ける未分化的情況から、理智的段階に進む過渡期のものとして編纂され、第四學年の教科書からはそれぞれの科目が組織的になるやうに考慮されたところに大きな苦心が存する。

修身、國語を通じて、編纂上特に注意されたのは、第一に表現に於て二者の區別を撤廢し、國語の手法を修身の教育材料に及ぼし、修身教材をして一層情操的感激的ならしめたことである。随つて修身と國語とが外見上區別し難いものが多くなつた。第二に、修身、國語の科目が分化したが、教材相互に緊密な聯關を圖つてあり、一體的といふことが、一見してわかるやうになつてゐる。第三に、總合的に高度國防體制の樹立に適切ならしめる教材が多く選擇された。國體、國防海洋、産業、東亞に關する教材が目立つてゐる。

新教材の數は極めて豊富で「初等科國語」一、二、三、四を通じて新教材は五十七、舊教材は三十九となつてゐるが、舊教材も國民學校の新編纂方針に従つて可成に修正を加へてある。修身では舊教材の残つたもの少く、新教材は一、二を通じて三十二、舊教材は八となつてをり舊教材についても表現上の苦心が多分に見える。

○滿洲國政府民生部内に國語調査委員會（假稱）が創立されたので、昭和十六年九月三十日付にて滿洲國語研究會は解消した。

日本語教育振興會規則（抄録）

第一條 本會ハ日本語教育振興會ト稱シ事務所ヲ東京市麹町區文部省内ニ置ク

第二條 本會ハ東亞ニ於ケル日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第三條 本會ハ前條ノ目的ヲ達成スル為政府ノ方針ニ基キ左ノ事業ヲ行フ

- 一、日本語ノ普及ニ關スル諸般ノ調査及研究
- 二、日本語教科用圖書ノ刊行及頒布
- 三、日本語教育資料ノ作成及頒布
- 四、日本語教師ノ養成及指導
- 五、日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ニ關スル各種會合ノ開催
- 六、日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ニ關スル雜誌ノ發行
- 七、日本語ノ普及又ハ日本語教育ノ振興ニ關係アル内外諸團體トノ聯絡及之等團體ノ行フ諸事業ノ調整
- 八、其ノ他日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ニ關シ必要ナル事項

第四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

其ノ任期ハ二年トス但シ重任ヲ妨ゲズ

- 一、會長 一名
- 二、副會長 二名
- 三、理事長 一名
- 四、理事 三十名以内（内常任理事若干名）
- 五、監事 二名以内
- 六、顧問 若干名
- 七、評議員 若干名

役員名簿（五十音順） 昭和十六年十月十日現在

一、會長 文部大臣 橋田 邦彦

卷號（刊行年月日）

一、副會長	文部次官	菊池 豐三郎	
	興亞院文化部長	松村 素	
	一、理事長	文部省圖書局長	松尾 長造
	一、常任理事	文部省圖書監修官	大岡 保三
	文部省圖書監修官	釘本 久春	
	興亞院事務官	關野 房夫	
	興亞院書記官	榭谷 秀夫	
一、理事	陸軍省軍務課員陸軍大尉	赤池 春夫	
	東亞同文會常務理事	一宮 房治郎	
	文部省圖書監修官	井上 赳	
	興亞院囑託	大志万 準治	
	善隣協會常任理事	大島 豐	
	文部省圖書監修官	各務 虎雄	
	國際文化振興會專任常務理事 伯爵	黑田 清	
	文部事務官	小林 行雄	
	海軍大佐	島 峯次	
	興亞院囑託	田中 末雄	
	日華學會理事	近澤 道元	
	興亞院調查官	辻田 力	
	青年文化協會常務理事	豊田 久二	
	文部省囑託	長沼 直兄	
	國語教育學會常任理事	西尾 實	
	拓務事務官	野口 俊一	
	情報局情報官	廣瀬 節男	
	文部省圖書事務官	松下 寛一	
	日語文化協會主事	松宮 一也	
	對滿事務局事務官	森田 孝	
國際學友會專務理事	矢田部 保吉		
國語協會理事長	築田 欽次郎		
一、監事	文部書記官	柴沼 直	
	興亞院書記官	華山 親義	
一、顧問	東亞同文會理事長	阿部 信行	
	外務次官	天羽 英二	
	對滿事務局次長	荒川 昌二	
	臺北帝國大學總長	安藤 正次	
	東京帝國大學名譽教授	宇野 哲人	
	興亞院總務長官心得	及川 源七	
	東亞研究所副總裁 男爵	大藏 公望	
	興亞院華中聯絡部長官	太田 泰治	
	東京日日新聞社社長	奥村 信太郎	
	九州帝國大學名譽教授	春日 政治	
	青年文化協會理事長	河原 春作	
	拓務次官	北島 謙次郎	
	陸軍次官	木村 兵太郎	
		日本放送協會會長	小森 七郎
	海軍次官	澤本 頼雄	
	興亞院華北聯絡部長官心得	鹽澤 清宣	
	東京帝國大學名譽教授	鹽谷 温	
	讀賣新聞社社長	正力 松太郎	
	京都帝國大學名譽教授	新村 出	
	善隣協會理事長	鈴木 美通	

卷號（刊行年月日）

	日本出版文化協會會長 公爵	鷹司	信輔
	興亞院蒙疆聯絡部長官	竹下	義晴
	衆議院議員	鶴見	祐輔
	國際文化振興會理事長	永井	松三
	帝國教育會會長	永田	秀次郎
	教科用圖書調查會第三部長 子爵	野村	益三
	教科用圖書調查會第二部長 伯爵	林	博太郎
	情報局次長	久富	達夫
	興亞院廈門聯絡部長官	福田	良三
	教學局長官	藤野	惠
	國語教育學會會長	藤村	作
	同盟通信社社長	古野	伊之助
	東京文理科大學名譽教授	保科	孝一
	國語審議會副會長男爵	穂積	重遠
	企畫院次長	宮本	武之輔
	神官皇學館大學長	山田	孝雄
	帝國藝術院會員	山本	勇造
	京都帝國大學名譽教授	吉澤	義則
一、評議員	文部書記官	有光	次郎
	東亞學校教授	有賀	憲三
	國語審議會委員	安藤	正純
	早稻田大學教授	五十嵐	力
	情報局部長	石井	康
		石黑	修
		石黑	魯平
	文部省圖書監修官	石森	延男
	京都帝國大學助教授	泉井	久之助
	東京帝國大學教授	市河	三喜
	國民精神文化研究所長	伊東	延吉
	興亞院調查官	伊東	隆治
	教科用圖書調查員 男爵	稻田	昌植
	國學院大學教授	今泉	忠義
	關東局在滿教務部長	岩松	五良
	カナモジ會理事	上野	陽一
		大出	正篤
	興亞院調查官	大西	敬一
		大西	雅雄
	東京高等師範學校教授	魚返	善雄
	國語協會理事	岡崎	常太郎
	國語審議會委員	緒方	竹虎
	興亞院調查官	緒方	眞記
	國語審議會委員 子爵	岡部	長景
	同盟通信社社會部長	岡村	二一
		岡本	千万太郎
	東京帝國大學教授	小倉	進平
		尾崎	士郎
	東京帝國大學教授	小幡	重一
	京都帝國大學教授	澤瀉	久孝
	慶應義塾大學教授	折口	信夫
	東京高等師範學校教授	垣内	松三
	臺灣總督府編修官	加藤	春城
	文部省圖書監修官	加藤	將之
	文部事務官	金丸	三郎

卷號（刊行年月日）

東亞研究所常務理事	唐澤 俊樹
奈良女子高等師範學校教授	木枝 増一
大政翼賛會文化部長	岸田 國士
法政大學教授	城戸 幡太郎
東京帝國大學助教授	金田一 京助
興亞院事務官	久保田 藤麿
東京高等師範學校教授	熊澤 龍
京都帝國大學教授	倉石 武四郎
文部省圖書監修官	倉野 憲司
	興水 實
興亞院事務官	小沼 亨
京城帝國大學教授	小林 英夫
東北帝國大學教授	小林 好日
教學局部長	近藤 壽治
外務省南洋局長	齋藤 音次
文部省督學官	坂井 喚三
東亞同文書院大學教授	坂本 一郎
九州帝國大學教授	佐久間 鼎
	佐藤 春夫
國民精神文化研究所長	志田 延義
國語審議會委員	幣原 坦
東京帝國大學講師	島津 久基
屋（マ）鮮總督府編修官	島田 牛稚
讀賣新聞社文化部長	清水 彌太郎
國語審議會委員	下村 宏
興亞院調查官	白井 康
興亞鍊成所鍊成官	白木 喬一
東京文理科學大學教授	神保 格
興亞院調查官	鈴樹 忠信
日本放送協會業務局長	關 正雄
興亞院調查官	曾我 孝之
朝日新聞社學藝部長	多賀 博
九州帝國大學教授	高木 市之助
東京帝國大學教授	高田 眞治
國語審議會委員	高橋 雄豺
興亞院書記官	武内 龍次
國語審議會委員	竹越 與三郎
國學院大學教授	武田 祐吉
帝國教育會專務理事	武部 欽一
國語審議會委員	竹村 勘悉
國語審議會委員	田澤 義鋪
國語審議會委員	田中 都吉
國語審議會委員	田中 齊
文部書記官	田中 義男
	谷川 徹三
日本放送協會國際部長	頼母木 眞六
東京外國語學校教授	千葉 勉
拓殖大學教授	土屋 申一
東北帝國大學教授	土居 光知
廣島文理科學大學教授	土井 忠生
學習院教授	東條 操
	土岐 善麿
京城帝國大學教授	時枝 誠記

卷號（刊行年月日）		
	海軍省教育局長海軍勲將 教科用圖書調査會委員 東京日日新聞社文化部長 文部省普通學務局長	徳永 榮 中島 清二 永戸 俊雄 中野 善教
	日本放送協會教養部長 興亞院事務官 拓務書記官 東京帝國大學教授 東京文理科大學講師 東京帝國大學講師 關東局在滿教務部編修官 東京帝國大學教授 興亞院事務官 國語審議會委員 教學局部長 興亞院調査官 國語審議會委員 興亞院華北聯絡部文化局長 國學院大學教授 對滿事務局事務官 文部省圖書監修官	西本 參十貳 野尻 清彦 野村 市次郎 橋爪 恭一 橋本 進吉 長谷川萬次郎 波多野 完治 服部 四郎 林 フミコ 原 元助 久松 潜一 深田 久彌 藤野 進 星野 行則 堀池 英一 眞方 勲 増田 義一 松井 眞二 松尾 捨次郎 松崎 健吉 松田 武夫
	教科書圖書調査會委員 日本出版文化隅會文化局長 國語審議會委員 國語審議會委員 東京外國語學校教授 興蒙學院教授 拓殖大學教授	松宮 彌平 松本 潤一郎 三木 武吉 三宅 正太郎 宮越 健太郎 宮島 英男 宮原 民平
	陸軍省軍務局長陸軍勲將 國語審議會委員 國語審議會委員 臺灣總督府文教局長 東京文理科大學教授 新民學院教授 外務省東亞局長 文部省囑託 東京高等農林學校講師 興亞鍊成所鍊成官 文部省國語調査官 日本放送協會報道部長	武藤 章 森岡 常藏 森山 鋭一 梁井 淳二 柳田 國男 山岸 徳平 山口 喜一郎 山根 藤七 山本 熊一 湯澤 幸吉郎 湯山 清 吉田 三郎 吉田 澄夫 横山 重遠
第二卷第一號 1942（昭和17）年1月	彙報 p. 49 ○教科用圖書調査會	
	東亞共榮圏内の友邦諸民族に正しい日本語を習得させるための「日本語讀本卷三」と、日本人の性格・趣味・國民性、日本文化等を知らせる「日本文化讀本さくら」の原案を審議すべき教科用圖書調査會第三部會は、十二月五日午前九時半から、部長野村益三氏以下各委員出席、文部省第三會議室で開かれ、同十一時半原案のとほり決定の上閉會した。	
	○日本語讀本卷三	

卷號（刊行年月日）	
	我が國民學校初等科四年程度の東亞諸民族を對象とするもので、日本精神乃至國民性、日本事情の認識理解に資し、且日本民族を中心とする友邦諸民族との善隣友好に役立たせようとするものであるが日本語の的確な語學的習得に遺憾なからしめるやうに意が用ひてある。A列5號約百頁、四度刷の美麗な挿畫が多數挿入される豫定である。全卷二十八章、日本の明朗な家庭生活、風習などが興味深く描かれ、日本の少年と中華民國の少年との和かな親善のありさまも色濃く點綴されてゐる。
	○日本文化讀本さくら
	日本の國花さくらを通して、東亞諸民族に日本古來の文化、日本精神、國民性等を理解させようとするもので、大學・専門學校等に於て日本文學・日本語學を修める學生と、これと同程度の日本語力を有する知識層を對象とするもので、B列6號約五十頁、櫻の写真、繪畫等が多數挿入される豫定である。その内容は、櫻の名所たる吉野山・嵐山・東京（上野その他）を紹介することに始まり、源義家の勿來關の雅懷以下上野の秋色櫻にまつはる秋色女の逸話等、雅趣ゆたかな傳承を多く織りこみ、櫻餅とか特急さくら等、櫻と密接な關係のあるものを解説して日本人の生活に觸れ、最後に櫻に因む「敷島の大和心」が説いてある。
	○日本語教育振興會理事會（第一回）
	十二月十二日午後五時より日比谷東洋軒に日本語教育振興會第一回の理事會が開かれた。特に松村副會長を始め、松尾理事長その他殆ど大半の理事出席の下に、まづ理事長の挨拶について西尾總主事より昭和十六年度事業遂行に關する説明あり、つづいて各部主任の詳細な報告が行はれた。その後に松村副會長、大岡、親澤、一宮、松宮、森田、野口、島、辻田、井上、松下の各理事より好意に溢れた激勵と共に細部に互つて懇切な示唆が與へられ、折柄灯火管制下の夜、皇軍の大捷を背景として今後益々東亞に於ける日本語普及事業の喫緊と、同時に日本語教育振興會の責任の重大性を自覺しつゝ、午後八時半一同盛會裡に開散（マ）した。
第二卷第二號	彙報 pp. 77-79
1942（昭和17）年2月	○興亞院派遣教員第二回協議會
	昭和十六年十一月二十一日、二十二日兩日に互つて興亞院派遣教員第二回協議會が上海興亞院華中連絡部大會議室に於て行はれた。議事は次の如くである。 一、指示事項 二、研究題目 （1）日語教育普及本來ノ使命タル日本認識、理解、親和、協力ノ醸成ニ對シ採リツヽアル方策及其ノ影響 （2）「ハナシコトバ」ヲ使用シテ如何ナル程度マデ所期ノ成果ヲ上げ得タルカ同書使用上特ニ留意スベキ諸點及同書ニ改善ノ餘地アリヤ 三、個人研究發表 四、日語教育ニ關スル協議事項 五、其他ノ連絡事項
	○第一回日本語教授者懇談會
	昭和十六年十二月十五日午後五時ヨリ日本語教育振興會主催にて、第一回日本語教授者の懇談會が麹町の法曹會館に於て行はれた。參加者四十七名に達する盛會で、種々眞摯なる意見の交換があり、今後相互の懇親と啓發とが期待された。 西尾總主事の開會の辭、松尾理事長の挨拶に引きつゞき、次の如き意見の發表と申合事項があつた。（要録） 西尾 コノ會合ヲ繼續開催ニツキ御意見承リタシ 大岡 北京ニ於テ辻田興亞院調査官ナドノ御配慮ニテコノ種ノ會合アリタリ。研究教授ナドヲ中心トシテ親睦的ニ行フガヨカラシ。 山根 顔ヲ知合フダケニテモ有意義ナラン。 辻田 コノ事業ハ對外事業ユエ特ニ協力が必要、ソノタメニハ繼續開催ガ必要ナリ。 松宮 日本語教授ニ従事スルコト四十數年、獨立獨行シ來リテコノ氣運ニ會シ感慨無量ナリ。年二三回ハ必ズ開キ、現地トモ連絡ヲトリ協力發達ヲ計リタシ。本會ニ於テ主催ノ勞ヲトラレタシ。 關野 孤立セズ協力シー丸トナリ當ル要アリ。 針本 教科書編纂ト實際教授トノ連絡ヲ緊密ニシタシ。 西尾 繼續開催ニハ御賛成ノ趣ナルヲ以テ、方法ニ關シ御意見承リタシ。例ヘバ、授業參觀ノタメニハソノ都度當番校ヲ定メ、各團體・各學校ノ連絡ノタメニハ各一名以上ノ委員御

卷號（刊行年月日）

選出ヲ願フコト如何。
 岩崎 日本語教授ニ關スル先輩ノ體驗談ヲ聽キタク、又青年教授者ノ悩ミヲ解決シ、ソノ熱意ノ伸展ヲ計ラレタシ。
 西尾 コノ會ノ事業トシテハ教室ノ共同參觀ノ外ニ體驗談ヲ加ヘルコト適當ナラン。日本語教授上ノ難問題ハ本會ニ於テモ研究部ヲ設ケ調査研究シ解決ニ努メソツアリ。又長期講習モ計畫中ナリ。御協力願ヒタシ。
 長沼 （研究部ノ授業計畫ニツキ説明）。
 随守 外國人ノ日本語學習ノタメニ標準トスベキ日本語辭典及ビ初歩國語文法書ヲ國家ノ補助ニヨリ日本語教育振興會ナドニテ編纂スルコト肝要ナラン。
 松宮 各團體各學校ヨリ委員ヲ選出シ、日本語教育振興會ノ肝入りニヨリ今後ノ運営ヲ計ラレタシ。
 西尾 本席ノ御協議ノ成果トシテ大體次ノ三點が（ママ）決定セラレタルモノト思惟ス。

(一)コノ會ノ繼續開催ノコト
 (二)事業トシテハ差當リ日本語教室ノ共同參觀、日本語教授體驗談ヲ聽クコト等トスルコト。
 (三)方法ニツキテハ委員會ヲ設ケ協議ノコト。
 最後に大志万理事の閉會の辭があり、午後九時散會。日本語教育に人の和が要望され、教授方針についても相互聯絡を最も必要とする時、この日本語教授者懇談會に俟つべきもの大なるを思はしめた。なほ参加者は次の諸氏である。
 (東亞學校) 有賀憲三、太田定康、鈴木正藏、小川正一、山根藤七、猪川清、徳山眞二郎、高仲善二
 (國際學友會) 岡本千萬太郎、永鳥愛子、武宮りえ、松村明、秋田喜男、水野清
 (東京工業大學) 柴田明德
 (東京女子大學) 丸山キヨ子
 (善隣協會) 入江龍雄、佐久間次彦、岩崎重喜
 (日語文化協會) 松宮彌平
 (恵泉女學院) 弓削田萬壽美、松本光枝
 (青年文化協會) 小川健二、松浦孝作、石黒修
 (第一高等學校) 湯地孝、守隨憲治、五味智英
 (其ノ他) 横塚昌明、大本克巳、野村剛
 (興亞院) 榎谷秀夫、辻田力、關野房夫、大志万準治、小林隆助、太田哲三、杉浦齊、平松龍英
 (文部省) 松尾長造、大岡保三、釘本久春
 (本會) 西尾實、長沼直兄、福田恆存、岩崎直吉

○日本語教育講座開催

日本語教育振興會に於ては左記により文部省後援の下に日本語教育講座を開催し、會員の募集を行つてゐる。

一、趣意

大詔を拜し奉り 皇軍の輝かしき戰果に接して感激に堪へず 我等銃後に在り文化の事に携はる者 亦思ひを大東亞の全域に致し 日本文化を中軸とせる新東亞文化の確立に挺身せざるべからず 茲に本講座を開設し 東亞新秩序の建設に對する熱意と識見とを養ひ大東亞文化圈に於ける日本語の位置及び使命の自覺に資し 日本語教育の方法を習得せしめんとす 此れ本會が 日本語教育の振興を急務とする刻下の要請に鑑み 眞にその中堅たるべき人材の育成に寄與せんとする所以なり

一、題目及び講師

第一部 興亞問題（十時間）

大東亞ノ建設ト文化	興亞院文化部長	松村 隼
大東亞文化ト日本語	文部省圖書局長	松尾 長造
大東亞戰爭ノ意義	興亞院調査官	堂ノ脇光雄
大東亞ノ經濟事情	興亞院經濟部第一第四課長	久保 文藏
大東亞ニ於ケル教育事情	興亞院調査官	辻田 力
大東亞ニ於ケル宗教事情	興亞院事務官	關野 房夫

卷號（刊行年月日）

第二部 基本問題（三十二時間）

國語ノ特質	東京帝國大學教授	橋本 進吉
國語ノ構造	東京帝國大學教授	金田一京助
國語ノ歴史	文部省囑託	湯澤幸吉郎
日本語教科書論	文部省圖書監修官	各務 虎雄
日本語教授法概説	日本語教育振興會理事	長沼 直兄
日本語教授ノ實際	日本語教授研究所長	松宮 彌平
中國人ニ對スル日本語教授	東亞學校教授	鈴木 正藏

第三部 關係問題（十七時間）

國語問題ノ所在ト方向	文部省圖書局國語課長	大岡 保三
國語ノ表記ニツイテ	文部省圖書監修官	倉野 憲司
文化工作トシテノ日本語教育	文部省圖書監修官	釘本 久春
日本語ノ海外進出	國語協會主事	石黒 修
日本語教授ト音聲學	日本音聲學協會幹事	大西 雅雄
日本語教育科學ノ樹立	東南アジア學院教授	輿水 實
言語政策	東京文理科大學名譽教授	保科 孝一
討議（二回） 司會	興亞院囑託	大志万準治

- 一、會期 昭和十七年一月十九日ヨリ三月六日マデ
- 一、時間 毎週月水金三回、毎回午後六時ヨリ九時マデ
- 一、會場 東京市神田區神保町二丁目二十番地 東亞學校（市電神保町下車）
- 一、會員 五十五名

○日本語教育振興會役員異動（昭和十七年一月十日現在）

	(新)	(舊)
理事	興亞院囑託 杉甫 齊	
顧問	日華學會理事長 赤間 信義	
	對滿事務局次長 竹内 新平	荒川 昌二
	興亞院蒙疆聯絡部長官 岩崎 民男	竹下 義晴
	情報局次長 奥村喜和男	久富 達夫
評議員	文部省國語調査官 廣田榮太郎	
	情報局部長 堀 公一	石井 康
	興亞院調査官 田中 穰	大西 敬一
	外務省南洋局長心得 塚本 毅	齋藤 音次
	日本出版文化協會業務局長 田中 四郎	
	南洋廳内務部長 堂本 貞一	
	拓務書記官 栢原 依郎	橋爪 恭一
	興亞院書記官 別所孝太郎	松井 眞二

第二卷第三號
1942（昭和17）年3月

彙報 p. 56
○日本語教授者懇談會委員會

昨年十二月十五日日本會主催にて行はれた第一回日本語教授者懇談會席上にて決定された委員會が、二月十二日午後五時より法曹會館に於て開催された。その席上當懇談會に於て行ふべき事業について種々有益なる提案が行はれたが、さしあたつて、次回懇談會までに各學校別、日本語教授上未解決の諸問題をもちあひ、相互に研究討議することとなつた。

なほ出席者は左記の如くである。

- [委員] 東亞學校（正科） 有賀 憲三氏
 〃（高等科） 木村 新氏
 國際學友會 岡本千万太郎氏
 東京工業大學 柴田 明德氏
 善隣協會 入江 龍雄氏
 日語文化協會 松宮 彌平氏
 瑞穂學園 鶴見 誠氏
 恵泉女學院 弓削田万壽美氏
 青年文化協會 小川 健二氏

卷號（刊行年月日）

	<p>第一高等學校 守隨 憲治氏 早稲田國際學院 名取 順氏 東京女子大學 丸山 キヨ子氏 ドイツ大使館 大本 克巳氏</p> <p>〔本會側〕 關野 房夫氏 大志万 準治氏 西尾 實氏 長沼 直兄氏 伊藤 彌太郎氏</p> <p>〔來賓〕 北京華北聯絡部文化局興亞院調査官 西田 匠氏 天津市立師範學校 篠田 清之助氏 天津日語專修學校 岩永 胖氏 北京師範大學 篠原 利逸氏 小野 松五郎氏</p>
	<p>○北京張家口日本語教育講習會</p> <p>北京（二月二〇日—二六日）、張家口（二月二五日—三月三日）に於て開催される日本語教育講習會に文部省より圖書監修官倉野憲治氏、本會より主事長沼直兄氏が出張し、夫々左記題目により講義を行ふ筈である。</p> <p>國語問題について 倉野憲治氏 日本語教授法概論 長沼直兄氏</p>
	<p>○哈爾濱日本語教育研究會</p> <p>一昨年十月北滿に於ける日本語教育の振興をめざして、師道學校の中村忠一氏が中心となつて生れ出した哈爾濱日本語教育研究會は、その後順調に發達し、パンフレットを出すこと四回、毎學期の研究發表會及教授研究會、なほ毎月一回の研究者の集まりなどなかゝ盛り澤山な仕事をして來たが、今年は滿洲建國十周年に當るので、「建國精神の開拓は日本語により」、「英米打倒は皇道の宣布から」といふ二大目標を以て日本語を武器としてその實踐運動をつづけることゝなつた。</p> <p>なほ本會の會員は哈爾濱市内及省内の國民學校の日系滿系の有志、それに中等學校、大學の日本語擔任教師を以て組織し、縦に一貫して、日本語の教授法の研究を主なる任務としてゐるものである。</p>
第二卷第四號	彙報 p. 29
1942（昭和17）年4月	<p>○「新定語彙表記法」（案）の審議</p> <p>文部省圖書局國語課に於ては、二月六日及び七日の両日に亘り、國語課長室に國語課長・編修課長・關係各圖書監修官・國語調査官等參集の上、六百頁に達する尠大な「新定語彙表記法」（案）に就いて審議を行つた。續いて九月午後一時半より省内第四會議室に於いて、國語課囑託柳田國男・吉澤義則・金田一京助・東條操の四氏（橋本進吉氏缺席）國語課長・關係圖書監修官會同、「第一篇、從來の送り假名法に關する調査研究」「第二篇、從來の送り假名に關する調査研究」及び「第三篇、新定語彙表記法」（案）に就いて慎重審議を行つた。</p>
	<p>○本會新刊圖書</p> <p>豫て印刷中であつた文部省編纂「ハナシコトバ」學習指導書下巻は二月十九日、文化讀本「さくら」は同二十日、それぞれ刊行した。</p> <p>また本會編纂支那學童用繪本は近く十種を刊行する豫定であるが、次の四冊は三月二十日刊行の運びになつた。</p> <p>ガクカウ ヨイ コドモタチ ハナ・ヤサイ・クダモノ オホゾラ</p>
	<p>○日本語教育講座終了式</p> <p>本年一月十九日開講した日本語教育講座は、滞りなく豫定の計畫を實施し、三月七日午後五時文部省内青年學校教室に於て終了式を舉行、松尾理事長から次の五十三名に對して修了證書を授與せられた。（○印は皆出席者）</p> <p>南大路潮瑞 佐藤庄造 花山知 ○五味田高一 金城唯謙 木村敏 岡本正次</p>

<p>卷號 (刊行年月日)</p>	<p>大畑茂富 吉田義則 岩田貞夫 石田明 ○森田滋江 眞保清 藤澤忠之助 齋東正輝 岩本龍太郎 ○大島久二 ○奥田實 平林正木 池田信子 松尾彌太郎 武田幸一 隅田富美恵 宮下俊彦 近藤正美 宮崎倉司 森口清 草場繁市 栗城豊義 高木正孝 鶴岡仁一 石井輝雄 ○富田八郎 竹内三一郎 生江犬千代 ○成田信一郎 中西章 桑原健 杉本勝矢 藤田利雄 齋藤定雄 太田文雄 ○兒王眞二郎 長南藤四郎○齋藤銀次郎 城山庄造 富宿三善 ○片倉藤次郎 田邊マツ 佐野貞雄 ○下瀬正子 淺野鶴子 ○板倉正一</p> <p>舉式後引續いて懇談會を開催し、日本語教育の振興及び本會並びに會員相互の聯絡等について打合はせるところがあつた。</p>
	<p>○釘本常任理事の南京出張</p> <p>文部省圖書監修官本會常任理事釘本久春氏は、國民政府教育部に於ける日本語教科書編纂指導のため、三月九日出發、四月下旬まで同地出張の筈である。</p> <p>○興亞同盟理事會</p> <p>二月二十日、本會加盟團體たる大日本興亞同盟理事會開催、本會よりは西尾總主事が同會理事として出席した。</p>
<p>第二卷第五號 1942(昭和17)年5月</p>	<p>彙報 p. 121</p> <p>○標準漢字表の内定</p> <p>三月三日文部省第三會議室に於いて、國語審議會總會が開催され、文部省側からは圖書局長・國語課長等出席し、主査委員作製の標準漢字表に關して協議の結果内定を見たが、今後各方面の意見を糺した上四月末までに確定することとなつた。</p> <p>○國語の横書に關する打合せ會の開催</p> <p>三月十三日文部省第二會議室に於いて國語の横書に關する打合せ會が開催され、内閣統計局を始め各官廳及び大政翼賛會・出版文化協會の各代表者を招き、文部省側からは圖書局長・國語課長・編輯課長等出席の上、大體左横書の原案が承認されたが、なほ決定までには慎重審議する筈である。</p> <p>○本會新刊圖書</p> <p>豫て印刷中であつた日本語讀本卷二は四月六日刊行した。なほ卷三及び文化讀本「さくら」は近日刊行の豫定である。</p> <p>○本會役員の異動</p> <p>先頃興亞院に於ける事務分擔變更の都合上、關野興亞院調査官は本會常任理事を辭され、同氏の後任兼同院調査官が同氏の後任として會務に盡力せられることになつた。尚、關野調査官は今後も本會理事として盡力せられる筈。</p> <p>○日本語の南方進出計畫</p> <p>日本語の南方共榮圈進出の第一歩として二月以來情報局主催の協議會が催され、小委員會を設けて具體案を進めて來たが、近日中簡易會話用小冊子刊行の筈である。</p>
<p>第二卷第六號 1942(昭和17)年6月</p>	<p>彙報 pp. 87-88</p> <p>○南方進出「ニッポンゴ」の發行</p> <p>情報局の編纂になる南方共榮圈日本語普及の為の手引書「ニッポンゴ」は近日中に本會より發行の運びとなつた。</p> <p>○支那派遣教員第六回鍊成開始</p> <p>支那派遣教員第六回鍊成は興亞院指導の下に本會主催にて左の通り實施されることになつた。</p> <p style="text-align: center;">支那派遣教員第六回鍊成實施要領</p> <p>主 催 日本語教育振興會 指 導 興亞院 期 間 昭和十七年五月十三日—三十日 (十八日間) 場 所 東京府下小金井町浴恩館 入所者 六十二名</p> <p>實施要領</p> <p>一、大東亞新秩序建設ヲ顯現スルニ必要ナル情熱、氣魄、識見、體力ヲ練磨シ、指導的人物タルノ資質ヲ鍊成ス。 二、行的修練ヲ中心トシ興亞教育家トシテノ實踐力ヲ涵養セシメル為メ合宿團體的訓練ヲ行フ。</p>

卷號（刊行年月日）

三、日語教員トシテノ識見ト技術的能力ヲ啓培ス。

1 指導員		
主任指導員	興亞院囑託	大志萬準治
指導員	興亞院囑	吉田 一郎
指導員	日本語教育振興會主事	山口 正
指導員	同 書記	林 博
補助員	興亞院雇	海老塚弘國
2 訓育講師		
(精神訓話)	文部大臣	橋田 邦彦
	興亞院總務長官心得	及川 源七
	興亞院文化部長	松村 叅
	文部省教學局長官	藤野 惠
	文部省圖書局長	松尾 長造
(日本精神)		
惟神ノ大道	宮内省祭事課長	星野 輝興
團體ノ本義	文部省教學局指導部長	近藤 壽治
(行)	興亞院囑託	大志萬準治
3 術科講師		
(教 練)	善隣高等商業學校教官	小林 茂助
(體 操)	厚生省體育官	栗本 義彦
(救急法)	興亞院技師	仁平 弘夫
(作 業)		指導員一同
4 學科講師		
(思想戰史)	興亞鍊成所鍊成官	吉田 三郎
(大東亞新秩序建設論)		
—概論（軍事・政治）	興亞院政務部第一課長	田中 讓
—經濟	同 經濟部第一課長	野田 卯一
—文化	同 文化部第一課長	森本 雅雄
—技術	前興亞院技術部長技術院部長	本多 靜雄
—大東亞ト世界情勢	興亞院文化部第二課長	榎谷 秀夫
5 大東亞事情		
(支那事情)		
—東亞史概説	東京帝國大學教授	和田 清
—支那政治事情	興亞院事務官	服部比左治
—支那産業經濟	同 調査官	宮川新一郎
(支那文化事情)		
—教育	興亞院調査官	關野 房夫
—宗教、學術	同 事務官	相良 惟一
—社會事業	同	小林與三次
—大陸衛星	同 技師	仁平 弘夫
6 日本語教育		
—東亞ニ於ケル日本語	興亞院囑託	大志萬準治
—日本標準語	東京文理科大學教授	神保 格
—國語問題ト日本語教育	文部省國語課長	大岡 保三
—日本語教材論	同 圖書監修官	釘本 久春
—日本語教授法	日本語教育振興會理事	長沼 直兄
—日本語教師論	同 理事兼總主事	西尾 實
7 支那語	興亞院通譯官	柳原 敏一
8 特別講演		
—題未定	國民精神文化研究所長	伊東 延吉
—同 右	興亞鍊成所長代理	田中 武雄
—興亞教育ノ基本問題	東京文理科大學教授	檜崎淺太郎

卷號（刊行年月日）	
第二卷第七號 1942（昭和17）年7月	<p>彙報 p. 95</p> <p>○小林理事辭任 本會理事・文部省事務官小林行雄氏は今般海軍司政官として現地に赴任せられるにつき本會の理事を辭任せられた。</p> <p>○本會現時委託を依囑 今般マレー地方に於ける本會の會務を長沼守人氏に、フィリツピン地方に於ける本會の會務を田端利夫氏にそれぞれ依囑した。</p> <p>○本會事業計畫に關する協議 本會第十二回常任理事會は五月二十一日（金）午前十一時より興亞院文化部長應接室に於いて開催、本年度の事業計畫に關し種々協議するところがあつた。</p> <p>○田端利夫氏歡送會 本會フィリツピン方面現地囑託田端利夫氏の歡送會を五月二十八日麻布光悅に於いて開催した。本會からは松村副會長、榭谷、大岡、關野の三常任理事を始めとし、筧調査官、西尾總主事、長沼主事出席、懇談のうちに、種々打合せが行はれた。</p> <p>○「ハナシコトバ」レコード 前々よりコロムビア・レコード會社に作成を依囑してあつた「ハナシコトバ」上中下のレコードがこの度ひとまづ完成したので、六月一日午後一時より文部省レコード審査室に於いて、大岡國語課長を始め文部省各關係官出席、本會より西尾、長沼両氏出席し、その試聴を行つた。席上、それについて意見あり、今後の完成を期することゝなつた。</p> <p>○支那派遣教員第六回鍊成終了式 前號彙報欄記載の本會主催支那派遣教員第六回鍊成は去る五月二十八日豫定の通り終了、翌二十九日左の通り終了式を行つた。 午前九時—松村興亞院文化部長訓話 同十一時—終了式舉行 一、敬禮 一、開式の辭 一、遙拝・黙禱・祈願 一、君が代齊唱 一、修了證書授與 一、日本語教育振興會會長挨拶 一、興亞院總務長官訓示 一、文部次官祝辭 一、所生總代答辭 一、合唱「海行かば」 一、閉式の辭 一、敬禮 なほ式後晝食の後、宮城奉拝、明治神宮靖國神社參拝、興亞院、文部省を訪問、夜は六時より興亞院主催の壮行會に出席し、盛んな歡送の辭をうけ、八時半散會した。</p>
第二卷第八號 1942（昭和17）年8月	<p>彙報 pp. 75-77</p> <p>○日本語普及協議會開催さる 六月五日午前九時より文部省第三會議室に於いて、企畫院・情報局・對滿事務局・興亞院・外務省・陸軍省・參謀本部・教育總監部より各關係官を、日本語教育振興會・國際文化振興會・善隣協會・青年文化協會・國際學友會・日語文化協會より各代表者を、及び神保格・金田一京助・山本勇造の各氏を招き、本省側よりは、大岡國語課長を始め總務課長・第一・第二編輯課長その他關係官出席の上、大東亞南方共榮圈に於ける日本語の普及に關し協議を遂げた。</p> <p>○日本語普及に關し徳川義親侯と懇談 六月十二日午前十時半より文部省圖書局長室に、徳川義親侯を迎へ、本省側より大岡國語課長を始め、各課長その他關係官會同の上、マレーに於ける日本語教育の問題を中心に懇談を遂げた。</p> <p>○外國語地名人名の呼稱並びに表記の調査に關する會議開催さる 文部省圖書局國語課に於いては、六月十二日午後一時半より國語課囑託橋本進吉・金田一京助・東條操の三氏（柳田國男・吉澤義則の両氏缺席）の參集を求め、外國語地名人名の表記に關する原則に就き打合せを行ひ、原案を作製した。</p>

○外國語地名人名に関する協議會開催

六月二十六日午後一時半より文部省第二會議室に於いて、企畫院・情報局・外務省・陸軍省・海軍省・逓信省・及び拓務省より各官係官、國際文化振興會・國語協會・日本放送協會及び同盟通信社より各代表者、地理學・西洋史學及び言語學關係より權威者（辻村太郎・内田寛一・石田龍次郎・今井登志喜・山中謙二・龜井高孝・新村出・市河三喜・小倉進平・松本信廣）、總べて二十一名（三名缺席）の出席を求め、本省側からは國語課長始め各課長、吉澤・橋本・東條の各國語課囑託（柳田國男・金田一京助缺席）並びに關係官會同の上、外國語地名人名の呼稱並びに表記の統一に関する第一回協議會が開催された。今回は原則に関する國語課案を議題として審議が行はれ略々決定を見たので、今後は地名・人名の兩部會制により協議を繼續し、具體的に個々のものにつき決定される筈である。

○西尾總主事・釘本常任理事徳川義親侯訪問

六月二十三日、本會總主事西尾實氏及び常任理事釘本久春氏は徳川生物研究所に徳川義親侯を訪ね、種々懇談を行ひ、南方日本語普及に就いておほいに期するところがあつた。

○「ハナシコトバ」レコード決定

かつて審査中であつた「ハナシコトバ」レコード（前號本欄記事参照）はその後部分的訂正を經、六月二十七日文部省のレコード審査室にて各關係官試聽の上、いよいよ最後の決定をみ、遠からず完成の見込みである。

○第二回日本語教育講座

さきに第一回日本語教育講座を開催して効果をあげた本會は、語學教育研究所の後援を得て、外國語教師のための講座を設けることになり、主として六大都市のある六府縣の中等學校以上の諸學校に對し會員募集を發送した。

實施要領

- 一、主催 日本語教育振興會
- 一、後援 語學教育研究所
- 一、會期 昭和十七年七月二十六日—七月三十一日（午前中、六日間）
- 一、會場 東京文理科大學
- 一、會員 主として外國語教師 一〇〇名
- 一、會費 金參圓也

一、趣意

御稜威の下大東亞新秩序も愈々建設の基礎を成就しようとする時、大東亞文化圏に於ける日本語の位置と使命は一段とその重きを加へて來ました。本會は時代の要請に鑑み今春長期に亘り日本語教育講座を開講して主に國民學校と中等學校國語科の教員に對し日本語教育上の諸問題を解明したのでありますが、今回更に外國語科教員のための日本語教育講座を開講することになりました。

日本語海外進出のためには幾多の應急措置を講ずると共に、更に根本に遡つて國內の國語教育を刷新することが肝要であります。そして何よりも大切なものは立派な人格と勝れた技術とを具へた教員の育成であります。

國語教育の刷新と優秀な日本語教員の育成、この重要なしかも急を要する仕事を達成するについては、國語科教員の努力に俟つこと多いのは勿論であります。外國語教員がこの際日本語教育に對して持つ役割の重要性をも認めねばなりません。日本語の教育は異國民に對する場合外國語教育となります。従つて多年國內にあつて外國語の教育に盡して來られた外國語科教員の體驗と研究とが非常に役立つことは申すまでもありません。

外國語教育上の諸問題につき研鑽され來つた技術を整理し統一して日本語教育の方法の上に生かすことはこの際極めて有意義なことであり、外國語教育に經驗を積み識見と技術とを磨き來た多數の同志が日本語教員として異民族の中へ進出し、日本語普及の實績をあげられるのを希望してやみません。之が本講座開設の趣意であります。

一、題目及び講師

開講の辭	文部省圖書局長、本會理事長	松尾 長造
日本語の構造（外國語として見た日本語）	東京帝大教授、本會評議員	金田一京助
日本語の音聲	東京外語教授、本會評議員	千葉 勉
日本語普及の理念及び東亞に於ける日本語教育の現状	文部省圖書監修官、本會常任理事	釘本 久春
國語教育の諸問題	東京女子大教授、本會總理事	西尾 實

卷號（刊行年月日）	現代語法の諸問題 日本語と外國語 標準日本語について 題未定 ヨーロッパ人を対象とする日本語教育 終講の辭	文部省圖書監修官、本會評議員 東京帝大教授、本會評議員 東京文理大教授、本會評議員 東京帝大講師 東北帝大教授、本會評議員 文部省國語課長、本會常任理事	湯澤幸吉郎 市河 三喜 神保 格 佐々木 達 土居 光知 大岡 保三
	○日本語普及研究會		
	財團法人青年文化協會では、左記により日本語普及研究會（第一期）を開催することになった。		
	期日 七月十三日—九月十一日 毎週月・水・金の三日 午後六時より八時半まで（三单元）		
	資格 （一）青年文化協會講習會修了者 （二）教員免許狀所有者 （三）現在學校教育にたづさはるもの （四）一般篤志者（特に詮衡の上）		
	會費 金五圓—七月五日までに同會宛（神田區西神田一ノ二同盟會館内） 略歴・志望大要に會費を添えて申込むこと		
	講師 保科孝一氏・大西雅雄氏・今泉忠義氏・石黒魯平氏・石黒修氏・松宮彌平氏・興水實氏等		
第二卷第九號	彙報	p. 114	
1942(昭和17)年9月	○第二回日本語教育講座		
	前月號に豫告した第二回日本語教育講座は豫定の通り、七月二十六日より東京文理科大學に於て開催されて六日間の課程を終へ、七月三十一日に修了式を行つた。參集した會員七十八名は何れも外國語教育に當つてゐる人々で終始熱心に聴講されて盛會であつた。日本語教育の問題につき眞摯な關心と研究との糸ぐちを把握されたことと信ずる。		
	第一日、釘本常任理事「開講の辭」、神保格講師「標準日本語について」、 長沼直兄講師「英語で書かれた日本語研究書」		
	第二日、土居光知講師「ヨーロッパ人を対象とする日本語教育」、 湯澤幸吉郎講師「現代語法の諸問題」		
	第三日、千葉勉講師「日本語の音聲」、次いで「ハナシコトバ」のレコード試聴。 （レコードはコロムビア蓄音機會社で發賣の豫定）		
	第四日、釘本久春講師「日本語普及の理念及び東亞に於ける日本語教育の現状」、 西尾實講師「國語教育の諸問題」		
	第五日、金田一京助講師「日本語の構造」、佐々木達講師「表現の問題から見た語學と文學」		
	第六日、市河三喜講師「日本語と外國語」、佐々木講師續講、大岡常任理事「終講の辭」、 次いで修了證書授與式あり、大岡常任理事より六十四名に對し證書を授けた。 終講後、海外進出の希望を有する會員十二名本會に參集し、釘本常任理事の司會で座談會を開いた。歸省中の篠原利逸氏（北京）林米子氏（南京）両氏も出席され、現地の事情について應答説明などあつて有意義であつた。		
	○標準漢字表その他		
	國語審議會では六月十七日第六回總會開いて、文部大臣諮問に對する答申案として標準漢字表を決定した。常用漢字、準常用漢字、特別漢字の三通りに分けた漢字表で、近く閣議に上程される筈。		
	なほ同會では新字音假名遣表として、發音通りに近い字音假名遣を研究中であつたが、七月十七日第七回總會に於て左横書の問題と共に決定を見た。		
	○日本語普及に關する懇談會		
	七月二十八日文部省圖書局主催の日本語教育懇談會が開催され、本會代表として西尾總主事出席、諸團體に於ける日本語普及事業の連絡に關する件及び海外に於ける日本語（特に南方共榮圈に於ける）表記統一に關する件につき懇談を遂げた。		
第二卷第十號	本會刊行圖書目録	p. 69	
1942(昭和17)年10月	ハナシコトバ 上・中・下	定價	各 二〇錢
	同學習指導書 上・中・下	定價	各一五〇錢
	日本語讀本 卷一・二	定價	各 五〇錢
	日本語文化讀本		

卷號（刊行年月日）

さくら	定價	二〇錢
大學の學生生活	〃	〃
支那學童用讀本		
ヨイ コドモたち	定價	各 五〇錢
ガクカウ		(臨時定價二〇錢)
オホゾラ		
ハナ ヤサイ クダモノ		
ドウブツ		
コドモノ セカイ		
ニツボンノ タテモノ		
ノリモノ		

彙報 pp. 108-109

○支那派遣教員鍊成

支那派遣教員第七・八・九回鍊成を左記の如く實施することになった。

主催 日本語教育振興會

指導 興亞院

期間 昭和十七年九月二十一日-三十日（十日間）

同年十月五日-十四日（十日間）

十月十六日-十月二十五日（十日間）

場所 渋谷區原宿三丁目東郷神社側 東亞報徳會東京會堂

入所者 一回五十名（北支及中支ニ派遣スベキ日本人教職員）

實施要領

- 一、大東亞新秩序建設ヲ顯現スルニ必要ナル情熱、氣魄、識見、體力を鍊磨シ、指導の人物タルノ資質ヲ鍊成ス。
- 二、行的修鍊ヲ中心トシテ興亞教育家トシテノ實踐力ヲ涵養セシムル為メ合宿團體訓練ヲ行フ。
- 三、日本語教員トシテノ識見ト技術的能力ヲ啓培ス。

(鍊成科目)	(時間數)
訓 育	六二
精神訓話	五
日本精神	二
行	三五
個別指導、懇談會、自習	二〇
術 科	一四
教 鍊	八
體 鍊	六
學 科	五〇
思想戰	三
大東亞新秩序建設論	一〇
大東亞諸問題	一六
大陸衛生	六
日本語教育	一六
計	一二六

指導員

興亞鍊成所鍊成隊長	松本 七郎
興亞院囑託	大志 万準治
同	太田 哲三
日本語教育振興會主事	山口 正
興亞鍊成所 屬	小島 藤仲
興亞院 屬	砂田 敏雄

訓育講師

精神訓話	興亞院總務長官心得	及川 源七
	興亞鍊成所長	川岸文三郎

卷號（刊行年月日）			
	日本精神 行 術科講師 教錬 體操	興亞院文化部長 文部省教學局指導部長 興亞錬成所錬成隊長 興亞錬成所講師 同	松村 肅 近藤 壽治 松本 七郎 衣川 福二 同
	學科講師 思想戰 大東亞新秩序建設論概論（軍事・政事） 經濟 文化 技術 大東亞ト世界情勢 大東亞諸問題 東亞史概説 支那文化事情 興亞教育論 日本教育ノ動向 大東亞戰爭ノ意義・現狀 東亞民族問題 大陸衛生 日本語教育 東亞ニ於ケル日本語 日本語教育概況 日本語標準語 日本語教材論 日本語教授法	興亞錬成所錬成官 興亞院調査官 興亞院經濟部第一課長 興亞院文化部第一課長 興亞院技術部長 興亞院文化部第二課長 東京帝大教授 興亞院調査官 東京文理大教授 文部省督學官 陸軍省指導部 興亞錬成所錬成官 興亞院技師 興亞院囑託 文部省圖畫（マ）局國語課長 東京文理科大學教授 文部省圖畫（マ）監修官 日本語教育振興會理事	吉田 三郎 常脇 光雄 野田 卯一 藤井 重雄 三浦 七郎 榎田 秀夫 和田 清 關野 房夫 樽崎淺太郎 前田 隆一 石田達春（少佐） 白木 喬一 仁平 弘夫 大志万準治 大岡 保三 神保 格 釘本 久春 長沼 直兄
第二卷第十一號	彙報 pp. 106-108		
1942(昭和17)年11月	○本會職員海外出張		
	<p>本會主事福田恆存氏、囑託水船三洋氏は興亞院囑託として鮮滿經由蒙疆北支中支に日本語普及状態の視察、派遣教員との連絡並びに本會發行各種出版物の編纂に資するため先月末、約二ヶ月間の豫定にて出發した。</p>		
	○南方派遣陸軍司政官と連絡會議		
	<p>さきに發令を見た陸軍司令官のうち文教關係者三十數氏を招待、十月六日文部省第二會議室に於て連絡會議を開催した。本會側よりは松尾理事長以下釘本常任理事並びに長沼總主事代理出席、南方共榮圏に於ける日本語普及に就いて今後緊密なる連絡を保つべく種々協議を遂げた。</p>		
	○現地囑託の依頼		
	<p>今回文部省より南方に派遣されることゝ決定した横濱高等商業學校教授渡邊輝一氏に囑託として本會の會務を依頼した。</p>		
	○支那派遣教員錬成		
	<p>興亞院指導、本會主催の支那派遣教員錬成は渋谷區原宿の東郷神社側に新築された報徳會々堂で實施された。</p>		
	○大連の日本語教育研究會		
	<p>大連に於ては在滿日本教育南部會並びに大連初等教育會の主催の下に州廳、大連市旅順市の後援を以て十月十四日より三日間に亘り日本語教育研究會を開催する。講師は付近各學校の日本語教師、會員は州内初等中等教育關係者その他約二百名で講義の他種々研究討議が行はれる。</p>		
	○國民學校教科書編纂		
	<p>文部省圖書局内の各課では昭和十八年度用の國民學校教科書の編纂を一部終了した。何れも忠勇なる日本國民として又將來大東亞共榮圏の中核たるべき人材たらしめんとして少國民を育まうといふ意圖の許に編纂されたものである。次に今日迄に編纂の完了した各課の教科書に就いて編纂の大綱を略記する。</p>		

卷號（刊行年月日）

初等科國語卷五・六・七・八（初等科五六年用）新教科書は一口で云ふと國語文化財を中心として國家的自覚を促すやうに編纂されてある。これを少しく説明すれば即ち國體を明かにするたゆ（マ）に「大八洲」「木曾の御料林」以下の新教材が、大東亞建設の國家的使命を感得させるものとして「大地のオボ」、「黒龍江の解氷」、「ジャワ風景」、「サラワクの印象」、「アツツ島の六月」等の新教材が配されてある。又今次の大東亞戦争を通じて新たなる國民的感激を深めるものとして「戦地の父から」「飛行機の整備」「不沈艦の最後」等豊かに新教材が盛られ、産業、交通、科學の面からも「漁港」、「海底に行く」「世界一の織機」等が新しく取扱はれてある。なほ國語教材として特に言葉への思考を深めるために「ことばと文字」「文字の音訓」、「國語の力」等を設けたことは新教科書の著しい特色の一つと云ふことができやう。（國民課第一室）

初等科修身三・四（初等科第五、六年用）

この二冊は心身發達の第二期にある兒童を対象とするもので、専ら兒童の自覚を促し道德的判斷及び實踐の能力を助長する一面、やうやく深まらんとする情意的方面を男女その他の特質に應じて鍊成すると云ふところに重點を置いてある。「二」以後特に修身としての體系を整へることに意を用ひたが、この「三」「四」を以て初等科に於ける修身教育に一段落が與へられることになつたのである。即ち「四」では「大御心の奉體」及び「青少年學徒の御親閲」といふ聖訓を正面から取上げた教材があり、「三」には「大日本」「よもの海」等國體觀を切實に把握させる教材を多く提出してある。さうして特に第五學年、第六學年と發達して行く子供の程度に應じて禮法の教材のほか、所謂公民教材、國民生活に必須の心構を與へようとする教材が漸次作成されてある。（國民課第二室）

「初等科算數」五・六・七・八（第五、六學年用）

數に関する事項としては第五・六學年では珠算の乗除及び分數・小數の計算を取扱ふ。
量に関する事項としては、尺貫法度量衡が初めて登場する。國民學校理數科では度量衡法により、メートル法を基本としてあるのであるが、實際生活との關聯を考慮して、第五・六學年で、日常生活に重要な尺貫法度量衡の單位はすべて提出し、高等科を終るまでには、尺貫法が相當よくわかるやうにすることを期してある。

圖形教材としては、角柱、圓柱、角錐、圓錐、球などに關する考察、處理を指導すると共に、相似形・回轉體・對稱形などに關する見方考へ方を取り入れ、簡単な測量をも課する。

なほ、こんどの教科書でこれまでと特に變つた點は、從來理科で取扱つてゐた「重さと力」に關する（マ）考察・處理を算數で指導することになつたことで、重心・テコ・滑車などを、兒童の遊びの中からとり上げて理詰に發展させ、かやうな「重さと力」に關する知識技能がしつかり身につくやうにしてある（理數課第一室）

「初等科理科」二・三（第五・六年用）

今度新たに理數科理科の兒童用教科書のうち、第五學年用の「初等科理科二」と第六學年用の同三が編纂された。根本方針は科學知識の注入に終る傾向を脱して兒童の經驗を尊重する所にある。且教材は生物より物象がずっと多くなつてある。

各冊から一例を擧げてみると、油シボリの課では、ナタネをとり入れて、種から種油をしぼらせる。しぼつた油は燈心を入れて火をともしさせる。二宮金次郎の話を実際に體驗させる譯である。飛行機の課では、まづ、タコ揚げから始め、工作で作つたグライダーを用ひて翼に風の當り具合を實驗させる。

要するに、これらの五・六年の各課を通じて、単に科學的知識を與へるのではなく、すべて兒童の必要と興味に基き、子供ながらに、目的をもつて仕事をやり、心身を一體とした働きを通じて、少國民としての正しい、物の見方、考へ方、扱ひ方を修練することをねらつてあるものである。（理數課第二室）

藝能科第五六學年用教科書

初等科第五・六學年は第四學年に始まる第三期の段階にある。この期は前期の過渡期を承けて兒童の理智的批判力の發達著しい時期であるから、それに即して物を客觀的に見る態度や合理的に製作する態度を益々鍊成しこれを確立するに力める。特に用具材料の合理的處理や表現技術の修練を重視し、工夫創案の力を養ふことに留意する。（藝能課）

國史卷上（國民學校五六年用）

一、神國 高千穂の峯、櫃原の宮居、

卷號（刊行年月日）

- 二、大和の國原 かまどの煙、法隆寺、大化のまつりごと
- 三、奈良の都 都大路と國分寺、遣唐使と防人
- 四、京都と地方 平安京、大宰府、鳳凰堂
- 五、鎌倉武士 源氏と平家、富士の卷狩神風
- 六、吉野山 建武のまつりごと、大義の光
- 七、八重の潮路 金閣と銀閣、八幡船と南蠻船、皇民と國民

今度の國史上卷は建國の肇から室町時代の終りまでを右に示した如く一つの主題の下に二つ乃至三つの小題を設けて編纂した。新教科書は何よりも読み易く親しみ易く、いはゞ國史讀本である事が特長である。従來の教科書が人物羅列式であり、例へば長い事であるが天皇の御事蹟と臣下の事蹟とが形の上で並列して掲げられてゐるといふ缺陷を有つてゐたに反し、新教科書は國運の進展を示す項目を重點的に選び、日本國の生ひ立ちが目次を見たゞけでも直觀的に把めるやうに考へられている。而もさりとして抽象的な文化史ではなく天皇の御事蹟は素より偉人の事蹟は従來以上に克明に描いてある。又題目は、修身、國語及び地理等との密接な連絡を考へてある點でも意義深いものと思はれる。（中等教科書編纂室）

第二卷第十二號
（目次は十一號）
1942(昭和17)年12月

彙報 pp. 103-104

○南方派遣日本語教師の養成開始

今回文部省圖書局では、先に厳正なる銓衡を通過した南方派遣教員に對し學術心身とも現地の日本語教師としての萬全の資質を賦與すべく左記の要綱に依つて養成を開始した。

主旨

大東亞戰爭の進展に即應し南方諸地域に日本精神を扶植し現地住民をして日本語に通曉せしむると共に皇國の眞意を理解せしめ以て大東亞共榮の根基を培養せしむる為優秀なる教育職員を現地に派遣し現地住民の教育指導の任に當らしめんとす

主催 文部圖書局

期間 自本年十一月十四日至十二月二十六日（約六週間）

場所 神田町錦町三丁目 東京高等齒科醫學校第二附屬病院構内
南方派遣日本語教育要員養成所

職員

所長	文部省圖書局長・本會理事長	松尾長造
主事	文部省圖書局國語課長・本會常任理事	大岡保三
所員	文部省圖書監修官・本會常任理事	釘本久春
同	文部省囑託本會總主事	西尾 實
同	文部省囑託本會理事	長沼直兄
教務	本會主事	山口 正
庶務	同	鹿島 豊
會計	文部屬	神谷誠之
同	本會研究員	宮脇長定

○張我軍氏招待座談會開催

大東亞文學者大會に出席の為來京中の國立北京大學教授張我軍氏を十一月七日招待、本會より大岡、釘本兩常任理事以下長沼理事、伊藤主事出席し北支に於ける日本語普及の實情今後の方策、並びに同氏の日本語文法研究等に就き種々忌憚なき懇談を遂げた。

○華北日本語教育研究所秋山氏と連絡懇談

華北日本語教育研究所と本會事業の協調連絡のため、十月二十四日來京中の同研究所庶務長秋山博氏を招待、本會側より釘本常任理事及び長沼總主事代理出席種々連絡懇談を遂げるところがあつた。

○文部省の唱歌歌詞集

文部省圖書局では國民學校並びに中等學校に於て従來「卒業の歌」及び「送別の歌」は種々の歌曲が行はれてゐたものを、時代の趨勢と音楽教育の進歩とに鑑み一層國民的なる歌曲を新作する要ありとして、左の要項により遍く歌詞を募集する。

一、歌詞（修了の歌及び送別の歌）

- イ、内容は各題目に相應し、新時代の感覺を盛ること。
- ロ、新鮮明朗にして莊重なるもの。

卷號（刊行年月日）

- ハ、章節は四行二節以内とすること。
 ニ、格調は自由なるも、各節の字脚を揃へること。
 ホ、國民學校兒童にも理解し得ること
 ヘ、歌詞中の漢字には必ず振假名を明記すること。
 二、締切期日 昭和十七年十二月十五日
 三、採用したる歌詞に對しては薄請を呈す。
 四、採用歌詞の著作権は一切文部省に歸屬す。歌詞は訂正することあるべし。
 五、應募原稿の用紙は半紙大とす。又、原稿には必ず現住所及び氏名を明記すること。一人各篇に應募することを得但し應募原稿は返戻せず。
 六、宛名 東京市麹町區霞ヶ關 文部省圖書局宛。封筒に「應募歌詞」と朱書すること。
 七、審査 文部省。

○南方向日本語教科書編纂

南方共榮圏各地の澎湃たる日本課（マ）學習熱に就いては今更云ふ迄もないことであるが、適切なる日本語教科書を供給する事は刻下の急務なりとし、今回文部省圖書局國語課では先的要綱に依り編纂に着手した。而して本教科書の編纂は年内に略々終了を見る豫定である。

- (一) 初等學校用日本語教本
初等學校ニ於ケル日本語科教育圖書ニシテ學童の日本語學習ニ適セシム
- (二) 同教授書
- (三) 中等學校用日本語教本
中等學校ニ於ケル日本語科教育用圖書ニ適セシム
- (四) 同 教授書
- (五) 成人用速成日本語學習書
實用日本語ノ學習ヲ急速ニ必要トスル商店銀行會社等ノ従業員ヲ對象トシ速成的ニ日本語ヲ習得スルニ適セシム
- (六) 同 學習指導書
- (七) 簡易日本語文法書
日本語文法ヲ極メテ簡潔平易ニ叙述シ日本語初學者ニ便ナラシム
- (八) 簡易日本語會話書
日常生活ニ必須ノ日本語會話ヲ集録シ之ニ泰語安南語ビルマ語馬來語タガログ語ノ譯文ヲ附シタル五種類ヲ編纂シ泰・佛印・ビルマ・馬來・ジャワ及比律賓地方民の日常必須ノ簡單ナル日本語會話習得ニ便ナラシム
- (九) 教授用掛圖
前記各種ノ教科書ノ學習ヲ容易ナラシム

第三卷第一號

彙報 p. 135

1943(昭和18)年1月

○大東亞省創設

曩に、大東亞省は政府の英斷に依って飛躍的創設を見たが、今後本會が事業の遂行上最も緊密なる連絡、助成を受くべきは、支那事務局（局長、宇佐美珍彦氏）並びに南方事務局（局長、水野伊太郎氏）となつた。同省が今後大東亞全域に對して一元的に、強力なる諸般の政務を司るに伴ひ、本會の諸事業も愈々活潑に展開されて行くであらう。

○南方派遣日本語教育要員養成所終了式

去る十一月十四日より神田錦町の南方派遣日本語教育要員養成所に於ては、種々鍊成・講習を施した同所々生六十九名が、所期の課程を完了したので、十二月二十六日修了式を行つた。なほ本養成所終了者は本年一月中旬に、南方諸地域に派遣される豫定である。

○北京新民學院山口教授來會

新民學院生を引率して來京中の同學院教授本會評議員山口喜一郎氏は十二月七日本會を來訪、松尾理事長以下職員一同と華北に於ける最近の日本語教育の實情に就き種々懇談するところがあつた。

○福田主事・水船囑託歸京

昨年九月末東京を出發、興亞院囑託として北・中支に於ける日本語普及の實情を視察中であつた、本會主事福田恆存・囑託水船三洋の兩氏は十一月下旬と十二月上旬それぞれ恙なく歸京した。

第三卷第二號

彙報 p. 87

卷號 (刊行年月日)																	
1943(昭和18)年2月	○本會現地囑託の依頼																
	<p>今般、現地に於ける會務の遂行並びに本會と現地各派遣教員の連絡のため、左の如く現地囑託を依頼した。</p> <table border="0"> <tr> <td>山西省</td> <td>青 崎</td> <td>速</td> <td>太原市布弓街十一號</td> </tr> <tr> <td>山東省</td> <td>工 藤</td> <td>哲四郎</td> <td>濟南市院西大街省立教員訓練所</td> </tr> <tr> <td>河北省</td> <td>小 倉</td> <td>房 二</td> <td>保定市省立教員研究所</td> </tr> <tr> <td>北京省</td> <td>武 内</td> <td>安 治</td> <td>北京市内五區黑芝麻胡同五號</td> </tr> </table>	山西省	青 崎	速	太原市布弓街十一號	山東省	工 藤	哲四郎	濟南市院西大街省立教員訓練所	河北省	小 倉	房 二	保定市省立教員研究所	北京省	武 内	安 治	北京市内五區黑芝麻胡同五號
山西省	青 崎	速	太原市布弓街十一號														
山東省	工 藤	哲四郎	濟南市院西大街省立教員訓練所														
河北省	小 倉	房 二	保定市省立教員研究所														
北京省	武 内	安 治	北京市内五區黑芝麻胡同五號														
	○三木清氏招待本會職員研究會																
	一月十六日、本會職員一同は今般現地より歸還された陸軍報道班員三木清氏を招待、比島に於ける言語問題並に日本語普及の實情に就き研究會を催した。																
	○淺野晃氏招待本會職員研究會																
	一月二十五日、本會職員一同は今般現地より歸還された陸軍報道班員淺野晃氏を招待、ジャワに於ける言語問題並に日本語普及の實情に就き研究會を催した。																
	○柳澤健氏招待懇談會																
	今般歸朝された在盤石日本文化會館館長柳澤健氏を招待、本會より各常任理事出席して泰國に於ける日本語普及の實情に就き種々懇談するところがあった。																
	○國際學友會に本會職員を派遣																
	今般國際學友會からの依頼に依り、同會日本語教師として本會山口主事、鶴川研究員の兩名を派遣することに決定した。																
	○大東亞南方共榮圈派遣教育職員募集要綱																
	<p>一 主 旨 大東亞南方諸地域に對し日本語を普及し現地住民をして皇國の眞意を理解せしむる爲優良なる教育職員を現地に派遣し現地住民の教育指導の任に當らしめんとす</p> <p>二 派遣先 ビルマ・マライ・ジャワの各地</p> <p>三 任 務 1. 現地住民の日本語教授並に其の指導 2. 現地住民の訓育指導</p> <p>四 應募資格及び募集人員 一、中等學校教員の資格を有する者 一、國民學校教員の資格を有する者 一、青年學校教員の資格を有する者 一、專門學校卒業程度以上の學力を有する者 各項を通じ年齢滿四十五歳以下の男女（男子にありては徴兵検査を終了したる者） 約六〇〇名</p> <p>五 應募手續 1. 公立學校の現職教員に付ては道府縣に於て適任者銓衡の上文部省に推薦するに付公立學校の現職教員たる應募者は二月五日迄に左記書類を道府縣内政部長宛送付すべし (イ) 採用願 一通 (ロ) 履歷書 四通 2. 公立學校の現職教員以外の者に付ては文部省に於て銓衡するに付應募者は二月四日迄に到着するやう左記書類を文部省總務局涉外課長宛送付すべし (イ) 採用願 一通 (別紙様式とす) (ロ) 履歷書 三通 (同) 私立學校教員は校長の應募承諾書添附を要す</p> <p>六 鍊 成 道府縣推薦者及銓衡合格者には一定期間日本語教育要員として鍊成を行ふ</p>																
第三卷第三號	彙報 p. 92																
1943(昭和18)年3月	○南方派遣日本語教育要員養成所第二回第一次講習會終了																
	さきに文部省の銓衡を経て養成所に入所した所生は、このほど南方に於ける日本語教授者としての諸般の教育を完了、二月十七日閉所式を終へた。																
	○同第二回第二次講習會開始																
	今般文部省の嚴正なる銓衡を通過した南方派遣日本語教育要員志願者は、二月二十二日入所式を終へ、心身共に南方に於ける日本語教授者としての諸般の教育を受けるため、神田一ツ橋の同養成所に入った。																
	○北京大學學生招待午餐會																
	本會は今般小和田武紀氏引率のもとに、來朝中の國立北京大學日文系學生五名を招待、二月二十二日午餐會を開催した。																

卷號（刊行年月日）

	<p>○北京師範大學、外語專科學校學生招待午餐會</p> <p>二月十七日、本會は今般片岡良一氏引率のもとに來朝中の國立北京師範大學並びに國立北京外語專科學校學生四十六名を招待午餐會を開催した。</p> <p>○陸軍報導班員招待懇談會</p> <p>二月十六日、本會は今般南方現地より歸還した陸軍報導班員中島健藏氏並に神保光太郎氏を招待、本會側より西尾、大岡、釘本三常任理事出席、南方共榮圏に於ける日本語普及の實情及び今後に於て施すべき方策に就て種々懇談をとげた。</p> <p>○京都にて講演會開催</p> <p>本會は國內一般の日本語教育に對する認識並に國語意識の昂揚のため、左記の如く講演會を開催した。</p> <p>一、講演會名義 「大東亞共榮圏の日本語」</p> <p>一、日時 二月二十七日、自午後一時至五時</p> <p>一、場所 京都市烏丸通り新聞會館</p> <p>一、講演會の内容</p> <p>第一部</p> <p>「日本語教育の諸問題」 本會常任理事 西尾 實</p> <p>「日本語の普及と國語の反省」 本會評議員 澤 湯 久 孝</p> <p>「比島より歸りて」 歸還陸軍報道班員 三 木 清</p> <p>第二部 映 畫</p> <p>「英國崩るゝの日」</p> <p>一、主催 本 會</p> <p>一、後援 文部省・大東亞省・情報局 大政翼賛會京都支部・京都新聞社</p>
第三卷第四號 1943(昭和18)年4月	<p>彙報 p. 124</p> <p>○第二回日本語教授者懇談會開催</p> <p>二月二十七日本會は日本語教授者懇談會委員會を開催、日本語教授用教材の編纂に就き種々協議するところ(マ)があつた。出席者左の如し。</p> <p>守隨憲二、石黒魯平、有賀憲三、木村新、柴田明德、林和彦、丸山キヨ、松宮彌平（敬稱略）</p> <p>本會側 長沼總主事 山口主事 鹿島主事</p> <p>○第三回日本語教授者懇談會開催</p> <p>三月十七日本會は第二回と同様の趣旨に基き第三回日本語教授者懇談會委員會を開催、前回に於ける協議の結果に基き中級用副讀本編纂方法に關し更に具體的なる協議を遂げた。出席者左の如し。</p> <p>有賀憲三、木村新、柴田明德、丸山キヨ、松宮彌平、岡本千萬太郎（敬稱略）</p> <p>本會側 長沼總主事 山口主事 鹿島主事</p> <p>○南方派遣日本語教育要員養成所第二回第三次講習會終了</p> <p>さきに文部省の銓衡を経て神田一ツ橋の南方派遣日本語教育要員養成所に入所した所生一同はこのほど諸般の受講を完了、三月十八日各關係官列席の下に終了式を舉行した。</p> <p>○第二回本會理事會開催</p> <p>三月二十二日本會は午前十一時より理事會を開催、本會十七年度事業經過に就き報告並びに日本語教育に關して種々懇談を遂げるところがあつた。出席者は左の如し。</p> <p>松尾理事長、大岡、西尾、釘本、相良、東光の各常任理事、鹽野、高瀬、田中、松宮、大志萬、鵬原、井上、近澤の各理事。</p> <p>○野村陸軍大佐招待職員修養會開催</p> <p>三月二十四日本會は陸軍大佐野村泰雄氏を招待、職員一同出席の上南方共榮圏に於ける日本語普及の實情並びに方策、その他一般文化政策に就き種々教示を受けるところがあつた。因に同大佐は南方某要職に在つてこのほど歸還、現に陸軍豫科士官學校の教官である。</p> <p>○野村陸軍大佐招待座談會開催</p> <p>三月二十四日本會は職員修養會終了の後同大佐を招待、座談會を開催した。本會側の出席者は西尾、大岡、東光、相良、釘本の各常任理事並に、長沼總主事、福田主事である。</p>
第三卷第五號 1943(昭和18)年5月	<p>彙報 p. 108-113</p> <p>○第一回本會顧問會開催</p>

三月二十五日本會は會長橋田文部大臣官邸に於て第一回本會顧問會を開催した。當日定刻午後五時より會長橋田文部大臣、顧問側代表宇佐美大東亞省支那事務局長、理事長松尾文部圖書局長の各氏の挨拶のあつた後、長沼總主事より本會事業経過の報告あり、つづいて大東亞共榮圈に於ける今後の日本語普及の方策に關して各顧問に諮問、交々審議を遂げるところがあつた。

因に當日の出席者は左の如くである。

會長 橋田邦彦

副會長 菊池豊三郎

顧問 今吉敏雄 宇佐美珍彦 宇野哲人 河原春作 小森七郎 津田靜枝

鶴見祐輔 野村益三 保科孝一 穂積重遠 松岡忠一 松村 隼

理事長 松尾長造

常任理事 大岡保三 西尾實 相良惟一 藤井重雄 釘本久春

總主事 長沼直兄

主事 上村茂次郎 伊藤彌太郎 山口正 鹿島豊 (敬稱略)

○南方派遣日本語教育要員養成所第二回第四次講習會終了

先般文部省の銓衡を経て神田一ツ橋の南方派遣日本語教育要員養成所に入所した第二回第四次の所生一同は日本語教員としての諸般の受講を完了、四月二日各關係官列席の下に終了式を舉行し間もなく現地に派遣されることゝなつた。

○支那派遣日本語教員第九回鍊成開始

支那に派遣すべき日本語教員に就ては兼て大東亞省に於て銓衡中のところこの程その人員を決定、四月十日嚴肅なる開所式を舉行のうへ日本語教員として身心學術共に萬全の資質を賦與さるべく直ちに鍊成に入った。今回鍊成を受ける教員の中には現地より再鍊成のため参加者のあることは新しい試みである。次に今回鍊成の要項を略記すれば左の如くである。

場所 府下北多摩郡三鷹町中仙川與亞 (マ) 鍊成所仙川道場

主催 本會

指導 大東亞省

期間 昭和十八年四月十日-二十日(十一日間)

指導員 主任指導員 本會理事大東亞省囑託 大志万準治

同 大東亞省囑託 清水幸平

同 同 金光建道

○中國向日本語讀本卷四・卷五編纂完了

文部省では東亞に於ける日本語普及の目的を以て編纂せる日本語讀本卷四同卷五、日本文化讀本(「日本の紡織」、「日本の女性」、「日本の年中行事」)等の各原案を教科用圖書調査會に諮問し、多少の修正を加へて之を可決した。その編纂要項を列記すれば左の如くである。

日本語讀本卷四・同卷五について

一、日本語讀本卷四・同卷五は中華民國の初等學校第五學年、第六學年の兒童を對象とする教科書であり、この二卷の編纂完了によって本省の著手した中華民國兒童初等學校六ヶ年間の學習に對する基準的な日本語教科書の編纂は完了した。

二、日本語讀本卷四・同卷五の二卷は約一千四百語の新語を掲載してゐる。ハナシコトバ上、中、日本語讀本五卷による六ヶ年學習の結果、中華民國兒童は基礎的な語彙約三千二百、基礎的な表現形式の略々全部、片假名、平假名の全部、漢字約一千を習得し、専門書にあらざる一應の書物は之を理解することを得ることとなる。

三、本書は語彙、語法、表記法のすべてに互つて、醇正にして基礎的な日本語の中華民國兒童に學習せしめることを期し、また教材の選擇については日本事情、日本人の生活、日本文化の特質等を傳へること、又日華提携の必要を感じせしめて善隣友好に資すること等を期してゐるが、特に卷四・卷五の教材について著しい特色を述べれば次の如くである。

日本語讀本卷四・同卷五の教材

1、大東亞戰爭の進展、殊に中華民國參戰の現段階に鑑み、東亞人たるの自覺にめざめ日華相携へて大東亞戰爭の完遂に邁進するの心組を中國兒童に喚起せしむることを期する教材。即ち「岡倉天心」(卷五)「十二月八日と一月九日」(卷五)「こうげきやめ」(卷四)の如きが其であり、又「鐵道と少年」(卷四)の如この趣旨に出でたものである。

2、日本の傳統、日本人の衣食住の生活様式等について適確な知識を與へ、平和にして親しさに満ちた日本の家庭生活、社會生活を紹介する教材。その著しきものを示せば「日本の年

卷號（刊行年月日）

- 中行事」（巻四）「客間」（巻四）「おかあさん」（巻四）「お手玉」（巻五）「着物」（巻五）「寒稽古」（巻五）「いけ花」（巻五）「誕生日」（巻五）の如き其である。
- 3、現代日本の精神文化並びに科學技術文化の優秀さを示した教材。「展覧會」（巻四）「織物工場を見て」（巻四）「つばめに乗って」（巻四）「科學博物館」（巻五）「月」（巻五）「叔父さんの講演」（巻五）の如きは何れも其である。
- 4、中國の自然、並びに偉人を敘述し、中國兒童の學習意欲の増進につとめた教材。「北京の秋」（巻四）「黄河の冬」（巻四）「揚子江の筏」（巻四）「孔子」（巻四）「始業式」（巻五）「江南の春」（巻五）の如きが其である。
- 5、日本語の特質に対する認識を深め、日本語の音韻、語彙、語法、表記法、文體等に関する習得を的確ならしめんとした語學的教材。「周禮秀さんの日記」（巻四）「日本の敬語」（巻四）「日本語の文體」（巻五）の如きは其である。尚又日本語の慣用句、成句にして重要なるものは隨時之を示した。

日本文化讀本について

日本文化讀本は日本文化についての知識を與へると共に日本語學習に便したものである。「日本の紡織」は現代日本の産業及び科學技術文化の躍進せる状態を示すものであり、「日本の女性」は上古より現代に至る日本女性の生活を紹介し、慈愛深くして忍耐強き日本女性の眞價を紹介したものである。「日本の年中行事」は日本に於ける主要なる年中行事を紹介し、萬邦無比の國體と美しい風土の下に培はれ來つた日本人の生活的傳統を理解せしめようとしたものである。以上三冊は高等専門學校程度の學習者を對象とする日本語教材として使用せられることを期してゐる。

○南方用日本語教科書編纂完了

文部省に於ては昭和十七年八月十八日の閣議決定に基き陸海軍大東亞省と緊密なる連絡のうへ日本語を大東亞共榮圏の共通語たらしむべく鋭意諸般の事項に互つて力を注ぎつゝあるが、今般南方現地の諸學校に於て使用さるべき日本語教科書十二種二十二冊の編纂を完了した。その編纂要項を列記すれば左の如くである。

一、編纂方針

- 1、醇正なる日本語を授け、内外一如の状態に於て日本語の普及を圖らんとすること。
- 2、日本事情、日本精神の理會に導くと共に大東亞民族としての自覺及團結を育成せしめる。
- 3、音聲言語の教授、訓練を基礎とし、漸次正確なる文字言語の習得に至らしめる。
- 4、身邊事物、日常生活の言表に習熟せしめ進んで日本精神の理解に至らしめる。

右の他各教科書は各々學習目的、學習者の心理的發達、學習能力の程度を顧慮して之に適應し、且學習興味を増進せしむべく編纂してある。従て速成用日本語教本・初等日本語教本・中等日本語教本の三種に於て語彙・表現形式文學の提出數及び提出順序並びに題材等につき夫々若干相違してゐるのは何れも如上の配慮に依るものであり南方事情に関する題材を挿入してあるのも亦こゝに出づるものである。

一、各教科用圖書の内容**1、成人用速成日本語教本 上巻、下巻**

A5判 各巻約二〇〇頁

社會活動に従ふ成人（官公吏、會社員等）

乃至六ヶ月（學習時數毎週六時間）の間に日常必須なる日本語の音聲音語を一日一通り理解し且發表する能力を得しめんとするものである。

語彙—約一五〇〇の基本語彙を收載した

表現形式—日本語の音聲音語の基本的表現形式略全部を收載

文字—片假名、平假名の全部、漢字約一五〇を收載

2、初等學校用日本語教本 卷一、卷二、卷三 A5判 各巻約一八〇頁

初等學校の兒童に對し日常必須なる音聲音語の習得より始めて漸次平易なる文字言語の習得に至らしめんとするものである。毎週六時間の學習時數を豫想して編纂した。

語彙—卷一に約六〇〇、卷二に約七五〇 卷三に約六〇〇を收載した。

表現形式—卷一、卷二の前半に於て音聲音語の基本的表現形式の大部分を收載した。

文字—卷一に於て片假名の全部、卷二に於て平假名の全部と漢字約五〇、卷三に於て漢字約一〇〇を收載した。

3、中等學校用日本語教本 卷一、卷二、卷三 A5判 各巻約一八〇頁

初めて日本語を學習する中等學校の生徒に對し、日常必須なる音聲音語の習得より始めて漸

次平易なる文字言語の習得に至らしめんとするものである。毎週六時間の学習時数を豫想して編纂した。

語彙一卷一 約六〇〇、巻二 約八五〇 巻三に約九五〇を収載した。

表現形式一卷一に於て音聲言語の基本的表現形式の大部分を収載した。

文字一卷一に於て片假名、平假名の全部及漢字約一〇字、巻二に於て漢字約一〇〇字、巻三に於て約一五〇を収載した。

4、日本文法教本

日本語を母語としない異民族の學習者に重要な文法的事實についての的確な知識を與へること。又、日本語を運用する力をつけることに留意したものである。平易な國語に對して一應の知識を持つものに対する適切な文法教科書であり、異民族が疑問を抱き易い點（日本人にはさして問題にならなくとも）明確な指示を與へるべく配慮してある。

5、成人用速成日本語教本學習指導書 上巻、下巻

6、初等學校用日本語教本學習指導書 巻一、巻二、巻三

7、中等學校用日本語教本學習指導書

何れも夫々の教科書によつて日本語を教授するに當り、指導上必要な事項、特に發音、語彙、語法その他音聲言語の指導上必要な事項を懇切に示し、教授上の明確な指示を與へんとするものである。之等の指導書によれば日本人ならざる日本語教師でもかなりの教授効果をあげ得るやう配慮してある。

8、日本語文法教本學習指導書

日本文法による教授に當り指導上必要な事項をあげて教授者の參考に資せんとすること。

9、成人用速成日本語教本教授用掛圖

10、初等學校用日本語教本教授用掛圖

11、中等學校用日本語教本教授用掛圖

何れも各教科書による教授に當り指導に便するやう編纂した。教本掛圖は教育資料たるのみならず廣く日本人の家庭生活、社會生活の各方面、日本の風土等をしらしめることを期し、美しい寫眞・繪畫を多數収録してある。

12、簡易日本語會話書

簡易なる會話の自修書であるが會話の指導を目ざすのみならず、會話に於ける日本人の態度、作法等をも照會せしむるやう配慮した。

一、南方諸地域用日本語教科用圖書の題材に就て

各教科書の題材は編纂の根本方針に基き且各教科書の特殊性に即應するやう配意して取材したことは勿論あるが、その注目すべきものに就き略述しよう。

1、日本的教材ともいふべきもので、平和にして親しさに満ちた日本の家庭生活、學校生活、社會生活を知らしめ、又清く美しき日本の風土を紹介して日本の傳統、日本精神を生き生きと理會させることに努めた教材。日本語を學習せしめることの根本的にして且究極的な目的は日本を知らしめることにある。従つていはば日本的教材といふべき此種の教材が取材の中心をなしてゐることはいふまでもない。その著しきもののみをあげれば

(1) 成人用速成日本語下巻に於ては

一、日本 十八、ふじ山 二十四、日本の季節 十三、はうもん 二十、ひるごはんにまねく、の如き

(2) 初等學校用日本語教本に於ては

巻二、九、ワタクシノオカアサン、十六、トウキヤウノエハガキ、二九、コモリウタ、三一、ウンドウクワイ、三二、オキヤクサマアソビ、三六、シヤシン、四二、おしやうぐわつ、四五、ゆめ、四七、きげんせつ、四九、かんしんないぬ、五二、ももたらう
巻三、一、日の丸の旗、六、なつのゆふがた、一九、おはかまゐり、二三、うさぎ、二六、國民れんせいたいくわい、二七、とりいれ、三六、ラジオあそび、四二、がくげいくわい、四三、うらしまたらう、四四、さくら

(3) 中等學校用日本語教本に於ては

巻二、一七、しんるゐ。二九、をのたうふう。三〇、しんねん。四〇、東京。四一、日本のしるし。

巻三、二、こひのぼり。四、きせん。八、軍犬「とね」。九、牛わか丸。十二、まつりにまねく。一九、科學博物館。二〇、織物工場。二五、日本の正月。二七、豆まき。三〇、はごろもの如きである。

	<p>2、南方教材ともいふべきもので、南方の風俗、自然等に取材し、學習慾の増進に資せんとした教材。各教科書に提示せる動物、植物等一切の物につき學習者の身邊にあるものを採ることに努めたが特にその著しきものをあげれば</p> <p>(1) 成人用日本語教本下巻に於ては 八、いろいろのどうぶつ。十七、みなみの國から。二十、ゴム。の如き</p> <p>(2) 初等學校用日本語教本に於ては 卷二。七、ヤシノキ。一一、メヅラシイクダモノ。三三、エイグワ。四〇、サルトバナナ 卷三。九、スクール。一六、うき家。二五、つなひき。三四、マライのお正月。 三五、たこあげ。四一、大とかげたいぢ</p> <p>(3) 中等學校用日本語教本に於ては 卷二。二三、なんやうのうみ。二五、かつをとまぐろ。二六、みなみじふじせい。 三、ざう。 卷三。一三、つばめ。 の如きはその著しいものである。</p>
	<p>3、大東亞戰爭の目的實現に資すべき教材。即ち日本を中心として互に親しみあひ大東亞諸民族が相互に提携しかたく團結するの自覺を深めんとする教材である。何れの教科書に於ても日本人と現地人とが相親しみあふ場面をゑがき大東亞民族としての自覺と團結とを暗示するに努めてあるがその著しいものを列擧する。</p> <p>(1) 成人用速成日本語教本下巻に於ては 三、大山先生。二五、手がみ。二六、田中さんとパブロさん。の如き</p> <p>(2) 初等學校用日本語教本に於ては 卷二。六、トモダチ。一二、ガクカウアソビ。一五、オマールサンノテガミ 三八、ササブネ。 卷三。四、しりとり。一五、カセムさんのに(マ) んじやうび。二八、おとめ。 二〇、一二月八日</p> <p>(3) 中等學校用日本語教本に於ては 卷二。一八、はうもん。二二、ぐんかん。三一、マライのしんねん。 三七、ラジオのことは。 卷三。六、せん水鑑。二八、こうげきやめ。三一、アジアは一なり。三二、大東亞。 の如き何れもそれであり、オマールさん、カセムさん、レンくん等の南方の青少年が活躍する。</p>
	<p>4、日本語の特質に注目させ學習を確實ならしめんとした語學教材。</p> <p>(1) 成人用速成日本語教本に於ては 下巻。二、日本語。四、はつおん。五、日本語のけい語。七、あいさつのことば。 等。</p> <p>(2) 初等學校用日本語教本に於ては 卷二。一、日本語の本。一三、イサムサンノ一ニチ。二五、ミチジュン。二六、カナ。 卷三。一一、勇さんの日記。三一、かんだんけい。三九、でんぱう。</p> <p>(3) 中等學校用日本語教本に於ては 卷二。三、けうしつ。七、あんざん。八、かぞへ方。二〇、いそぎのようじ。 二一、おはなし。 卷三。一二、まつりにまねく。二九、日本語の敬語。 等はその著しきものである。 尚何れの教材に就ても單に文字言語の學習に終らざるやう教材を中心としての的確な問答練習を行はしめるやう學習指導書に指示し、語學教材たるの實を失はしめざるやう配意してある。</p>
<p>第三卷第六號 1943(昭和18)年6月</p>	<p>彙報 p. 83-84</p> <p>○西田大使官調査官と連絡懇談 四月十六日、歸朝中の西田大使官調査官（在北京大使官事務所）は第三十八回本會常任理事會に出席、擔當事項たる華北に於ける日本語普及の現状に就き説明、今後の方策に關し交々懇談を遂げるところがあつた。</p> <p>○國語・國文學會開催</p>

文部省に於ては日本諸學振興委員會主催の下に五月三日より三日間省内第一會議室に於て今年度の國語國文學會を開催した。今學會の講演中日本語普及並國語研究に關するものを擧げれば左の如くである。

「日本語普及史の諸問題」 文部省圖書監修官・本會常任理事 釘本久春

「對話に於ける言語活動の特徴」 北京新民學院教授・本會評議員 山口喜一郎

「デアルの沿革」 第四高等學校教授 山本正秀

「訓點語について」 京都帝國大學助教授 遠藤嘉基

「命令形について」 東京文理科大學助教授 佐伯梅友（敬稱略）

なほ右の中釘本久春氏の講演は、先づ日本語普及が本質に於て教育事業であることから説き起し、日本語普及政策は日本語の本質と傳統とに深く鑑みると共に、國家發展の凡ゆるいとなみに切實に結合し、また寄與し得るやうに現實的、綜合的に考案さるべきことに論及された。かゝる立場からつゞいて特に明治以降の臺灣、朝鮮、關東洲に於ける日本語普及の歴史を日本民族・日本文化史の對外發展史に裏づけて、全體的に明らかにされたのであるが、今後の日本語普及政策確立に多大の示唆を與へるものであつた。

山口喜一郎氏の講演は、正しい日本語は正しい教材と正しい方法すなはち直接法を以て教習されなければならないことを前提とし、かゝる所以を對話に就いて立證されたものである。先づ音聲言語活動を獨話と對話に分け更に對話を問答と會話と討論の三種に分類し、日本語教習に最初から方法となる一回生起的生活的な會話は徒らに器械的反覆を強ひるべきものではない。教習生活の日本語化により談話讀方作文等の教習の裡に會話をすることによつて不知不識の中に習熟せしめるのが鐵則でなければならないことを力説されたものであつた。

氏は周知の如く領有直後の臺灣を始めとして爾後約五十年の間朝鮮、關東洲、華北等各地に於て常に率先して日本語教育に盡瘁されて今日に及んでゐるのであるが、右の講演には、古稀を越えられた老體にもかゝらず、延長三十分及び熱辯をふるはれて來場中の岡部文部大臣以下滿場の聽衆を魅了し、正に今學會全期間を通じての壓巻であつた事を特に附記するものである。

○第三回實際家懇談會開催

五月七日、本會は來朝中の北京新民學院教授・本會評議員山口喜一郎氏にその永年の日本語教育の經驗を訊くため第三回實際家懇談會を開催した。出席者は左の如くである。

日語文化學校關係 松宮彌平 村井一 竹内博 久保田久子 松下幾子

國際學友會關係 弓削田ますみ 永島愛子 武部りゑ 村岡成美

善隣高等商業學校關係 織本重義

早稻田國際學院關係 名取順一 島田初子 宇治光雄

東亞學校關係 有賀憲二 泉喜一郎 太田定康 渡邊三男 猪野清美

東亞高校高等科關係 木村新 酒井森之介 金田一春彦

東京女子大學關係 丸山キヨ 生田目彌壽

東京工業大學豫備部關係 柴田明德 前田利通

東南アジア學院 石黒魯平 大本克巳

第一高等學校特設科關係 守隨憲二（敬稱略）

本會側 長沼總主事 山口主事 鹿島主事（敬稱略）

○陸軍省、大東亞省招待懇談會開催

五月十日本會は陸軍省、大東亞省の日本語普及關係官を招待、來朝中の北京新民學院教授・本會評議員山口喜一郎氏に日本語教育上の意見を聴取するため懇談會を開催した。出席者は左の如くである。

陸軍省側 郡司司政長官 松尾少佐

大東亞省 東光南方事務局文化課長 關野調査官 鈴木調査官 小笠原囑託

本會側 大岡常任理事 釘本常任理事 長沼總主事 鹿島主事（敬稱略）

○第三回日本語教育講座開始

大東亞共榮圈に於ける日本語並に日本文化の普及に資するため、本會は日本語教育講座を開催することに既に二回に及んだが、今回更にその強化徹底を計る目的を以て、左の要項に依りその第三回を開始することとした。

期間 前半 六月三日—六月二十八日 毎週月・火・木・金（十六回）

後半 九月六日—九月二十三日 毎週月・火・木・金（十一回）

會場 神田區神保町東亞學校

卷號（刊行年月日）	<p>題目及び講師</p> <p>第一部</p> <table border="0"> <tr> <td>大東亞文化建設の問題</td> <td>文部省圖書局長</td> <td>本會理事長</td> <td>松尾 長造</td> </tr> <tr> <td>泰・佛印の文化事情</td> <td>大使館調査官</td> <td>本會常任理事</td> <td>關野 房夫</td> </tr> <tr> <td>支那の文化事情</td> <td>大東亞事務官</td> <td>本會常任理事</td> <td>相良 惟一</td> </tr> <tr> <td>軍政治下の文化事情</td> <td>陸軍司政長官</td> <td></td> <td>郡司 喜一</td> </tr> </table> <p>第二部</p> <table border="0"> <tr> <td>言語學、音聲學</td> <td>東京文理大教授</td> <td>本會評議員</td> <td>神保 格</td> </tr> <tr> <td>日本語概説</td> <td>文部省圖書監修官</td> <td>本會評議員</td> <td>湯澤幸吉郎</td> </tr> <tr> <td>日本語の諸問題</td> <td>文部省國語課長</td> <td>本會常任理事</td> <td>大岡 保三</td> </tr> <tr> <td>日本語普及史</td> <td>文部省圖書監修官</td> <td>本會常任理事</td> <td>釘本 久春</td> </tr> <tr> <td>日本語教師、教材論</td> <td>東京女子大學教授</td> <td>本會常任理事</td> <td>西尾 實</td> </tr> <tr> <td>日本語教授法</td> <td>本會總主事</td> <td></td> <td>長沼 直兄</td> </tr> </table> <p>第三部</p> <p>歸還報道班員講演（交渉中）</p>	大東亞文化建設の問題	文部省圖書局長	本會理事長	松尾 長造	泰・佛印の文化事情	大使館調査官	本會常任理事	關野 房夫	支那の文化事情	大東亞事務官	本會常任理事	相良 惟一	軍政治下の文化事情	陸軍司政長官		郡司 喜一	言語學、音聲學	東京文理大教授	本會評議員	神保 格	日本語概説	文部省圖書監修官	本會評議員	湯澤幸吉郎	日本語の諸問題	文部省國語課長	本會常任理事	大岡 保三	日本語普及史	文部省圖書監修官	本會常任理事	釘本 久春	日本語教師、教材論	東京女子大學教授	本會常任理事	西尾 實	日本語教授法	本會總主事		長沼 直兄
大東亞文化建設の問題	文部省圖書局長	本會理事長	松尾 長造																																						
泰・佛印の文化事情	大使館調査官	本會常任理事	關野 房夫																																						
支那の文化事情	大東亞事務官	本會常任理事	相良 惟一																																						
軍政治下の文化事情	陸軍司政長官		郡司 喜一																																						
言語學、音聲學	東京文理大教授	本會評議員	神保 格																																						
日本語概説	文部省圖書監修官	本會評議員	湯澤幸吉郎																																						
日本語の諸問題	文部省國語課長	本會常任理事	大岡 保三																																						
日本語普及史	文部省圖書監修官	本會常任理事	釘本 久春																																						
日本語教師、教材論	東京女子大學教授	本會常任理事	西尾 實																																						
日本語教授法	本會總主事		長沼 直兄																																						
第三卷第七號 1943(昭和18)年7月	<p>彙報 p. 59</p> <p>○南方派遣日本語教育要員養成所 第三回實施</p> <p>大東亞共榮圈に於いて日本語教育のことに當るものは、眞に日本の世界史的立場を自覺し、同時に日本語教授の實際に於ける技術を體得したものでなければならぬとともに、また異民族の教化指導に従事するものとして人格識見に缺くことなきものでなければならぬ、との主意にもとづき、今般文部省の主催で第三回南方派遣日本語教育要員養成が、六月十五日より七月十九日まで、青山梅窓院にて行はれることになった。期間中所生は終始、知行合一を目ざし、合宿起居を共にし、同士の結合を深からしめ、興亞教育の指導者として人格の確立を期さんとしてゐる。なほ學課講師は左の如くである。（敬稱略）</p> <table border="0"> <tr> <td>岩淵悦太郎</td> <td>神保 格</td> <td>大岡 保三</td> <td>西尾 實</td> <td>長沼 直兄</td> <td>釘本 久春</td> </tr> <tr> <td>志村 陸城</td> <td>渡邊 保</td> <td>吉田 三郎</td> <td>松尾 長造</td> <td>關野 房夫</td> <td>郡司 喜一</td> </tr> <tr> <td>相良 惟一</td> <td>上山 顯</td> <td>岡 正雄</td> <td>深田 益男</td> <td></td> <td>(順不同)</td> </tr> </table> <p>○永田秀次郎氏招待懇談會</p> <p>陸軍軍政顧問永田秀次郎氏の目下上京中を機とし、五月二十一日夜本會では同氏を招待し、理事長、常任理事出席、軍政治下に於ける日本語普及並に一般文化工作の實情について種々懇談をとげるところがあつた。</p> <p>○大東亞留學生招待懇親會</p> <p>五月二十二日午後二時より、興亞教育團體協力會興亞文化事業團體協力會の共同主催による大東亞留學生懇親會が、青山根津美術館に於て開催された。本會からは鹿島主事が出席した。</p> <p>○相良常任理事歡迎會</p> <p>今般、大東亞事務官本會常任理事相良惟一氏南支觀察の旅より歸任されたので、六月四日正午第四十五會（マ）常任理事會を同氏歡迎の意をかねて麹町寶亭に開催、席上、相良氏より中南支方面に於ける日本語普及狀況並に本會對する現地の希望等の報告があつた。</p> <p>○前會長招待晚餐會</p> <p>前文部大臣橋田邦彦氏は第一回會長として創立當時より本會のため大いに盡瘁されるところがあつたが、今般文部大臣更迭と共に會長の職を辭任されたのについて、六月七日夜築地八百善に於いて理事長、常任理事出席のもとに晚餐會を催した。なほ同氏は今後本會顧問に就任を承諾された。</p>	岩淵悦太郎	神保 格	大岡 保三	西尾 實	長沼 直兄	釘本 久春	志村 陸城	渡邊 保	吉田 三郎	松尾 長造	關野 房夫	郡司 喜一	相良 惟一	上山 顯	岡 正雄	深田 益男		(順不同)																						
岩淵悦太郎	神保 格	大岡 保三	西尾 實	長沼 直兄	釘本 久春																																				
志村 陸城	渡邊 保	吉田 三郎	松尾 長造	關野 房夫	郡司 喜一																																				
相良 惟一	上山 顯	岡 正雄	深田 益男		(順不同)																																				
第三卷第八號 1943(昭和18)年8月	<p>彙報 p. 92-93</p> <p>○日本語普及問題調査委員會第一部會</p> <p>本會に於ては、日本語普及問題の全般に互つて調査審議するため日本語普及問題調査委員會を設け、官民各方面に委員を委嘱することになった。第一部會は主として政策的方面のことに屬する根本的並に具體的諸問題を審議する機關とし、之に對する本會側の準備を完了したので、去る七月九日その第一回委員會を開催した。現實の要請に應へ且は大東亞共榮圈建設のための永久的方策につき熱心に協議するところがあつた。第一部會委員は左記の通りである。</p> <p>委員</p> <table border="0"> <tr> <td>企畫院</td> <td>上山書記官</td> </tr> </table>	企畫院	上山書記官																																						
企畫院	上山書記官																																								

卷號（刊行年月日）

情報局 井澤情報官
 陸軍省 松尾少佐
 海軍省 小關中佐
 文部省 久保田書記官、大岡國語調査官、釘本圖書監修官、西尾囑託
 大東亞省 宇山事務官、腰原事務官、相良事務官、關野調査官

○ビルマ訪日視察團招待懇談會

六月二十四日、本會は來朝中のビルマ訪日觀察團を招待、ビルマにおける日本語普及の状態並びに將來の振興方策に就き種々説明、隔意なき懇談を遂げるところがあつた。

因みに當日該懇談會に出席の視察團一行の氏名、陪賓及び本會側出席者の氏名は左の如くである。

ビルマ渡日視察團團員名簿

團長	ウバルウイン	蘭貢市學務部長
副團長	ウエインハン	ベグー縣知事
	ソウバウジ	辯護士
	ウラモン	東亞青年聯盟國際部長
	モンタンゼン	ドバマシニタ黨財務部長
	ウテンラ	ビルマ民防衛委員長
	ウニ	交通部次官補
	ウテントン	内務部次官補
	ウトンセン	蘭貢市土木技師
	ドクターバタン	蘭貢市國立病院長
	ウバトン	檢事
	ソウセンテン	森林局次長
	タキンボ	實業家
	ウヨンモン	鉄道技師
	タキンバヘン	勞務局次長
	ウラペ	郵政局長
	タキンキンオン	ドバマシニタ黨地方部長
	ウバテン	行刑局長
	ウエモン	鉄道運輸部長
	ウラ	森林部鑛山局長
	タキンワテン	ドバマシニタ黨地方部長
	ウゾウエ	東亞青年聯盟ビルマ體育部長
	ウサンヂョ	オツタマ日本語學校幹事
	モンモンルウイン	中央警察訓練所幹事
	タキンサンウエ	ドバマシニタ黨宣傳部長

—写真—（ビルマ訪日視察團）

引率者 緬甸軍政監部

陸軍司政官 湯谷 勝俊

同 窯田 作次

陸軍局 千葉 孝一

文部省 藤野總務局長、伊藤總務局總務課長、久保田涉外課長、
大谷東京外語教授

陸軍省 軍務局松尾少佐

本會 松尾理事長、大岡常任理事、西尾常任理事、釘本常任理事、東光常任理事、
相良常任理事、長沼總主事、伊藤主事、鹿島主事

○南方特別留學生に就いて

南方諸地域に帝國と協力して原住民を指導し大東亞共榮圈建設に延身（マ）すべき人材を要望することは甚だ切なるものがある。大東亞省に於てはかゝる要望に應ずる為南方諸民族より優秀なる青年子弟を簡拔し之を我國に於て育成すべく先般來より陸軍省、海軍省、文部省並情報局と充分なる協議をなし次の如き要領に依り我國に留學せしむることとなつた。

尚之等留學生は全員六月三十日東京着、直ちに所定の教育を受けつゝある。

要領

卷號 (刊行年月日)	
	<p>一、人員概數 百十餘名</p> <p>内譯 ビルマ 十五名 フイリツピン 二十名 ジヤバ(ママ) 二十名 スマトス(ママ) マライ 十五名 セレベス ボルネオ 二十名 其他 二十名</p> <p>二、學歷及年齡 概ネ中等學校卒業以上ノ男子ニシテ年齡二十歳迄ヲ標準トス</p> <p>三、渡日後ノ指導 大東亞省ハ陸軍省、海軍省、文部省及情報局其ノ他關係官廳ト緊密ナル協力ノ下ニ之ガ指導ニ當ル</p> <p>ロ、(ママ) 専攻科目ニケ年乃至三カ年 日本語、工學、農學、理學、醫學、藥學其他</p>
<p>第三卷第九號 1943(昭和18)年9月</p>	<p>彙報 p. 71</p> <p>○第三回南方派遣日本語教育要員養成所終了式 文部省に於てはさきに詮衡を経て入所せしめたる第三回南方派遣日本語教育要員養成所々生に對して諸般の教育を施しつゝあつたが、この程完了したので、七月十九日松尾同養成所々長以下各關係官列席のうへ厳肅なる終了式を舉行した。</p> <p>○第三回南方派遣日本語教育要員養成所終了生招待懇談會 七月十九日本會に於ては特に將來の連絡の緊要なるに鑑み第三回南方派遣日本語教員要員終了生を招待、種々懇談を遂げるところがあつた。</p> <p>○鹿島主事・谷口研究員渡南 本會庶務部主事として昨年來種々盡瘁されるところ多大であつた鹿島主事は今回北部佛印日本語普及會教授として近く現地に赴くことゝ決定、日本語普及に盡力することゝなつた。 同時に本會研究員として特に欧米各國の言語政策を鋭意研究し來つた谷口陸男氏は日泰文化會館付屬日本語學校教授として現地に赴任することとなつた。因に本會に於ては鹿島・谷口兩氏に現地囑託を依頼し、相俱に緊密な連絡を保つ豫定である。</p> <p>○柳澤健氏招待懇談會 八月五日本會は要務を帯びて歸朝中の日泰文化會館々長柳澤健氏以下館員稲葉正凱子、同石丸東京出張所長招待、本會側よりは松尾理事長以下各常任理事並びに總主事が出席して、南方現地に於ける日本語の普及振興に關し交々討議・懇談を遂げるところがあつた。</p> <p>○日本語普及問題調査委員會 前月號本欄に於て報告した日本語普及問題調査委員會は第一回到引續き毎週開催し既に第五回に至つたが、諸官廳の各委員は炎暑を排して熱心に協議を重ね日本語普及に關する國策はほゞ具體的な成案を見ようとしてゐる。</p> <p>○第四回南方派遣日本語教育要員養成開始 文部省に於ては銓衡を経たる第四回南方派遣日本語教育要員の志望者を參集せしめ、來る二十三日より一ヶ月間、芝増上寺を會場として所定の養成を開始することゝなつた。</p>
	<p>『日本語』合本出來 『日本語』合本がこのほどやうやくできあがりましたので、お知らせ致します。今後の既刊御注文はすべて合本でお願いします。</p> <p>第一冊（第一卷第一號—第一卷第八號）定価二圓四十錢 送料二十錢 第二冊（第二卷第一號—第二卷第六號）定価一圓八十錢 送料二十錢 第三冊（第二卷第七號—第二卷第十二號）定価二圓四十錢 送料二十錢 第四冊（第三卷第一號—第三卷第六號）定価二圓四十錢 送料二十錢</p>
<p>第三卷第十號 1943(昭和18)年10月</p>	<p>彙報 p. 75</p> <p>○マライ・スマトラ訪日視察團招待懇談會開催 七月二十七日、本會は來朝中のマライ・スマトラ訪日觀察團の有志、ヤコブ・ビン・ヒタム氏（ジョホール州教員訓練所助教）ザイスデザイン氏（スマトラ・メダン訪日視察員）シャフエイ氏（實業學校長）を招待、本會側より西尾・大岡・釘本・關野・相良各常任理事出席、日本語</p>

卷號（刊行年月日）

普及の現状並に將來の普及方策に關し、交々懇談を遂げるところがあつた。ヒタム氏は日本語學習一年に滿たぬにもかゝらず、われわれの話を自由に理解し、一同を驚かせたが、きけば自分の州の人々に日本語を教へてゐること、なほ日本語學習の必要とその必しも難しくないことを述べ、たゞ難關は教科書その他の日本語書籍と日本人教師の不足にあるとなして、その對策を求めた。

またシャフェイ氏はオランダ政府の懷柔と壓迫にもかゝらず、永年それらに反抗して實業教育に所信を貫徹してきた人、永田町國民學校を參觀して、日本の教育が歐洲のそれと異なり、智と共に心の教育であり、精神の鍛鍊であることに打たれた事實を情熱的口調で語った。

ザイヌデイン氏はやはり國民學校教育に於ける自習時間や京橋圖書館を見學して、自發的な研究態度に教へられるところ多きをのべ、本會に對しても教科書編纂と同時に、このやうな教育精神を基調とする學校を現地に設立することも考へてもらひたいと結んだ。

その他三氏から本會の事業、日本語普及の根本指針等につき熱心な質問が行はれ、盛會裏に閉會した。

○サイゴン大使府佐藤醇造氏と連絡懇談

七月三十一日本會は要務を帯びて歸朝中のサイゴン大使府支部領事兼情報部長佐藤醇造氏を招待、本會側より大岡・關野・釘本各常任理事出席して佛印に於ける日本語普及の現状並に將來の普及方策に就き種々連絡懇談を遂げるところがあつた。

○第三回日本語教育講座後期開始

去る六月豫定の如くその前期を終了した本講座はひきつゞいて左の日程に依り後期を開催した。

九月六日（月）	國語要説	東條 操
七日（火）	マライ事情	中島 健藏
九日（木）	音聲學	神保 格
一〇日（金）	國語要説	東條 操
一三日（月）	國語要説	東條 操
一四日（火）	タイ・佛印文化事情	關野 房夫
一六日（木）	音聲學	神保 格
一七日（金）	國語史	湯澤 幸吉郎
二〇日（月）	國語史	湯澤 幸吉郎
二一日（火）	國語史	湯澤 幸吉郎
二三日（木）	座談會修了式	

第三卷第十一號

1943（昭和18）年11月

彙報 p. 92

○文部省南方派遣日本語教育要員養成所第四回修了生招待懇談會

本會では、八月二十三日より一ヶ月間、青山梅窓院にて所定の養成を終つた文部省南方派遣日本語教育要員養成所第四回修了生を九月二十三日に招待、現地赴任について種々連絡懇談をとげた。

○第四回日本語教育講座終了式

去る九月六日より二十三日にわたる第四回日本語教育講座は充實せる講義内容により想像以上の効果をあげて二十三日終了、同日七時より本會常任理事大岡保三氏により、受講者四十九名中二十九名に對して、修了證を授與した。

○マカツサル軍政監部文教課員三浦勇助氏連絡懇談會

本會では、九月二十七日、目下要務を帯びて歸朝せられたマカツサル軍政監部員三浦勇助氏を招待、本會側より理事長・常任理事出席の上、現地に於ける日本語教育事情を聴取、なほ今後の方針について種々連絡懇談をとげるところがあつた。

○文部省南方派遣日本語教育要員第五回養成開始

文部省に於ては今回あらたに銓衡を経たる第五回南方派遣日本語教育要員の志望者を參集し、十月九日より向ふ一ヶ月間の豫定にて青山梅窓院に鍊成を開始した。

○海軍司政官前田隆一氏招待會

今般、前文部省教學官前田隆一氏の海軍司政官として南方現地に赴任せられるに際して、本會今後の事業・方針につき緊密なる連絡を必要とするに鑑み、十月七日、本會より理事長、常任理事出席のもとに懇談會を開始した。

○本會主催講演會「大東亞共榮圏と日本語」

<p>卷號 (刊行年月日)</p>	<p>本會では日本語普及の重大性について一般國民の自覚を喚起せんとの目的をもつて十月十六日東京共立講堂、十月二十四日仙臺齋藤報恩會講堂に於いて講演會を開催することにした。講師は左の通りだが、なほ詳細については次號要録筆記を参照されたい。</p> <table border="0"> <tr> <td>東京</td> <td>東光 武三氏</td> <td>中島 健藏氏</td> </tr> <tr> <td></td> <td>豊島 與志雄氏</td> <td>大岡 保三氏</td> </tr> <tr> <td>仙臺</td> <td>長沼 直兄氏</td> <td>高見 順氏</td> </tr> <tr> <td></td> <td>關野 房夫氏</td> <td>釘本 久春氏</td> </tr> <tr> <td></td> <td>土居 光知氏</td> <td></td> </tr> </table>	東京	東光 武三氏	中島 健藏氏		豊島 與志雄氏	大岡 保三氏	仙臺	長沼 直兄氏	高見 順氏		關野 房夫氏	釘本 久春氏		土居 光知氏																																																	
東京	東光 武三氏	中島 健藏氏																																																														
	豊島 與志雄氏	大岡 保三氏																																																														
仙臺	長沼 直兄氏	高見 順氏																																																														
	關野 房夫氏	釘本 久春氏																																																														
	土居 光知氏																																																															
<p>第三卷第十二號 1943(昭和18)年12月</p>	<p>本會顧問永田秀次郎氏御逝去</p> <p>大東亞戰爭以來、陸軍軍政顧問の要職にあつて粉骨碎身、南方文教行政につき盡瘁されきたつた永田秀次郎氏はまた本會顧問として日本語普及、並に日本語教育振興のためその良識と造詣とを傾けられ、熱心に御指導を賜つてきたのである。</p> <p>御逝去にあたり、謹んで深甚なる哀悼を捧げる。大東亞戰爭もいよいよ決戦段階に入つた現在、氏を失つたことは國家として大いなる損失であることは言を俟たないが、本會にとつてその悲しみはまた深いものがある。</p> <p>九月二十二日、青山齋場の御葬儀には代表として長沼總主事參列の上御弔意を申し述べた。以上、お悔み申し上げるとともに、會員諸氏にその旨御報告する次第である。</p> <p style="text-align: right;">日本語教育振興會</p>																																																															
<p>彙報</p>	<p>p. 69</p>																																																															
<p>○文部省南方派遣日本語教育要員養成所第五回講習會を終る</p>	<p>文部省の南方派遣日本語教育要員養成所では十月九日より一ヶ月間青山梅窓院に於いて所定の講習を終へ、十一月八日修了式を舉げた。ひきつゞき軍人會館にて壮行會を行つたが、所生一同意氣軒昂、ひたすら現地赴任を待つてゐる。</p>																																																															
<p>○文部省南方派遣日本語教育要員養成所第六回講習會開始さる</p>	<p>右第五回講習會終了と共に、文部省にては次の要領に基き、第六回講習會を開始した。</p>																																																															
<p>一、主旨 日本世界觀ニ透徹セシメ大東亞ノ現在及未來ニ活眼ヲ開カシムルト共ニ日本語教育要員タルノ知識及技能ヲ體得セシメ南方諸民族ニ對スル指導者タル人材ヲ養成セントス</p> <p>一、主催 文部省</p> <p>一、期間 自昭和十八年十一月六日(土曜日)至同十一月三十日(火曜日)</p> <p>一、場所 東京都赤坂區神宮外苑霞ヶ丘口日本青年館構内 南方派遣日本語教育要員養成所</p>	<p>一、講義題目及講師</p> <table border="0"> <tr> <td>大東亞文化建設ノ理念</td> <td>文部省總務局長</td> <td>藤野 惠</td> </tr> <tr> <td>興亞精神</td> <td>文部省教學局長</td> <td>近藤 壽治</td> </tr> <tr> <td>日本文化史要説</td> <td>司法省 囑託</td> <td>渡邊 保</td> </tr> <tr> <td>日本語要説</td> <td>第一高等學校教授</td> <td>岩淵 悦太郎</td> </tr> <tr> <td>日本文法要説</td> <td>東京帝國大學講師</td> <td>東條 操</td> </tr> <tr> <td>標準語演習</td> <td>東京文理科大學教授</td> <td>神保 格</td> </tr> <tr> <td>日本語教育概説</td> <td>文部省教學局國語課長</td> <td>大岡 保三</td> </tr> <tr> <td>日本語普及史概説</td> <td>文部省圖書監修官</td> <td>釘本 久春</td> </tr> <tr> <td>日本語教師論</td> <td>東京女子大學教授</td> <td>西尾 實</td> </tr> <tr> <td>日本語教授法概説</td> <td>日本語教育振興會總主事</td> <td>長沼 直兄</td> </tr> <tr> <td>日本語ノ諸問題</td> <td></td> <td>大出 正篤</td> </tr> <tr> <td>大東亞諸言語要説</td> <td>元東京帝國大學教授</td> <td>小倉 進平</td> </tr> <tr> <td>大東亞近世史要説</td> <td>民族研究所員</td> <td>岩村 忍</td> </tr> <tr> <td>大東亞文教政策</td> <td>大東亞事務官</td> <td>相良 惟一</td> </tr> <tr> <td>南方民族要説</td> <td>民族研究所員</td> <td>岡 正雄</td> </tr> <tr> <td>南方衛生</td> <td>陸軍軍醫中佐</td> <td>深田 益男</td> </tr> <tr> <td>南方事情</td> <td>陸軍司政長官</td> <td>郡司 喜一</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>陸軍少佐</td> <td>松尾 次郎</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>大使館調査官</td> <td>關野 房夫</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>東京帝國大學講師</td> <td>中島 健藏</td> </tr> <tr> <td>訓話</td> <td>文部省總務局涉外課長</td> <td>高木 覺</td> </tr> </table>	大東亞文化建設ノ理念	文部省總務局長	藤野 惠	興亞精神	文部省教學局長	近藤 壽治	日本文化史要説	司法省 囑託	渡邊 保	日本語要説	第一高等學校教授	岩淵 悦太郎	日本文法要説	東京帝國大學講師	東條 操	標準語演習	東京文理科大學教授	神保 格	日本語教育概説	文部省教學局國語課長	大岡 保三	日本語普及史概説	文部省圖書監修官	釘本 久春	日本語教師論	東京女子大學教授	西尾 實	日本語教授法概説	日本語教育振興會總主事	長沼 直兄	日本語ノ諸問題		大出 正篤	大東亞諸言語要説	元東京帝國大學教授	小倉 進平	大東亞近世史要説	民族研究所員	岩村 忍	大東亞文教政策	大東亞事務官	相良 惟一	南方民族要説	民族研究所員	岡 正雄	南方衛生	陸軍軍醫中佐	深田 益男	南方事情	陸軍司政長官	郡司 喜一	同	陸軍少佐	松尾 次郎	同	大使館調査官	關野 房夫	同	東京帝國大學講師	中島 健藏	訓話	文部省總務局涉外課長	高木 覺
大東亞文化建設ノ理念	文部省總務局長	藤野 惠																																																														
興亞精神	文部省教學局長	近藤 壽治																																																														
日本文化史要説	司法省 囑託	渡邊 保																																																														
日本語要説	第一高等學校教授	岩淵 悦太郎																																																														
日本文法要説	東京帝國大學講師	東條 操																																																														
標準語演習	東京文理科大學教授	神保 格																																																														
日本語教育概説	文部省教學局國語課長	大岡 保三																																																														
日本語普及史概説	文部省圖書監修官	釘本 久春																																																														
日本語教師論	東京女子大學教授	西尾 實																																																														
日本語教授法概説	日本語教育振興會總主事	長沼 直兄																																																														
日本語ノ諸問題		大出 正篤																																																														
大東亞諸言語要説	元東京帝國大學教授	小倉 進平																																																														
大東亞近世史要説	民族研究所員	岩村 忍																																																														
大東亞文教政策	大東亞事務官	相良 惟一																																																														
南方民族要説	民族研究所員	岡 正雄																																																														
南方衛生	陸軍軍醫中佐	深田 益男																																																														
南方事情	陸軍司政長官	郡司 喜一																																																														
同	陸軍少佐	松尾 次郎																																																														
同	大使館調査官	關野 房夫																																																														
同	東京帝國大學講師	中島 健藏																																																														
訓話	文部省總務局涉外課長	高木 覺																																																														

卷號（刊行年月日）	
	<p>○國語課、教學局へ</p> <p>今般、文部省圖書局と國民教育局とが廢止されるに當り、國語課は、國語對策の重要性に鑑み一般國民教學の問題たるべしとの觀點から、教學局内に移管されるに至り、海外日本語教育を所管し來たつた圖書局國語課第二室は教學局國語課第三室として從來通り、事務を遂行する。なほ、第一・第二編輯課は新たに設けられた國民教育局内に移管されることとなつた。</p> <p>現地日本語教育事情に關し本會と連絡懇談されし方々の御芳名左の如し。 （自十月十六日至十一月十五日） 陸軍司政官（フィリッピン派遣） 蒲生 英男氏 旅順高等公學校教諭 附屬公學堂主事 大石 初太郎氏</p>
第四卷第一號	彙報 p. 85
1944(昭和19)年1月	○ 南方派遣日本語教育要員養成所の所管移動
	從來文部省圖書局の所管であつた南方派遣日本語教育要員養成所は、この度の行政機構改革によつて總務局に移管され、従つて同所所長は總務局長である藤野惠氏となつた。
	○ 第六回南方派遣日本語教育要員養成所所生 土浦海軍航空隊見學
	第六回養成所所生は十一月二十五日同所官脇所員引率の下に土浦海軍航空隊を見學、晩秋の空に亂舞する若鷺の姿、地上に火花散る豫科練の猛訓練狀況を目のあたり見て、今更ながら前線將士の姿を偲び、決死報國の覺悟を一層新にした。
	○ 第六回南方派遣日本語教育要員養成所終了式
	文部省に於ては、さきに銓衡を了し待機中であつた南方派遣日本語教育要員候補者に對し日本青年館に於てその教育要員として必須なる教育訓練を施しつゝあつたが、この程完了したので十一月三十日藤野同養成所所長以下各關係官列席の上嚴肅なる終了式を舉行した。因に終了生は九十三名であつた。引續き全員日本語教育振興會主催の壯行會に出席した。
	○ 國語課囑託會議
	十一月二十五日（木）午後一時半、國語に關する調査囑託會議を教學課分室に於て開會。出席者古澤義則、金田一京助、橋本進吉、東條操各囑託（柳田國男氏缺席）及神保格氏の外、本省側より大岡國語課長、湯澤、關各監修官、廣田、吉田各調査官、西尾、長沼、三宅、大塚各囑託出席、發音記號に關する件を議し午後五時半散會。
	○ 南方向日本語教本編纂會議
	十二月十日（金）、午後一時半教學課分室に於て開會、出席者清水重道、神保光太郎、岩淵悦太郎、森村三郎、林和比古、福田恒存、淺野鶴子の各編纂囑託及大岡國語課長、釘本監修官等出席、午後四時閉會した。
	○ 本會理事長更迭
	本會創設以來二年餘、理事として本會のために盡瘁、日本語教育振興の上に多大の貢獻を惜しまれなかつた松尾長造氏は、この度文部省圖書局長を辭し大日本育英會理事長に就任されるに當り、本會理事長の職を退かれた。依つて十二月三日付、本會の新理事長には文部省教學局長近藤壽治氏の就任を見た。
	○ 本會常任理事釘本久春氏渡南
	文部省圖書監修官・本會常任理事釘本久春氏は今般南方に於ける日本語普及狀況視察のため、大體一ヶ月半の豫定で十二月下旬内地出發、佛印・泰を始めとしてビルマ・マライ・ジャワ・フィリッピン等南方諸地域をめぐり、諸事連絡の上二月歸朝の豫定である。
	○ 人事移動
	本會總主事長沼直兄氏は本會常任理事を兼任・圖書局總務課長・本會理事松下寛一氏は在滿教務事務官兼關東局事務官に轉任、本會理事を辭任。
	現地日本語教育事情に關し本會と連絡懇談されし方々の御芳名左の如し。 在マカツサル司政官（東京外語校長に轉任） 大畑文七氏 在マカツサル司政官 小林行雄氏
第四卷第二號	彙報 p. 65
1944（昭和19）年2月	○ 發音符號に關する協議會
	十二月十六日（木）午前九時半から國語課長室に於て開會、調査囑託橋本進吉、金田一京助

卷號（刊行年月日）

	<p>及神保格諸氏の外、大岡國語課長、湯澤、關各監修官、廣田、吉田各調調（マ）査官、三井、白石各官補、長沼、三宅、大塚各囑託并國民教育局第二編修課藤井監修官出席第二次訂正案を檢討して正午散會した。</p>
	<p>○國語審議會主査委員會</p>
	<p>十二月十六日（木）午後一時半文部省第三會議室に於て國語審議會主査委員會を開き、漢語讀み方整理に關する件を議し午後四時閉會した。出席者南會長、穗積副會長、築田主査委員長、諸橋外九主査委員、保科幹事長及近藤教學局長、大岡國語課長等。</p>
	<p>○日本語教本編纂委員囑託會議</p>
	<p>十二月二十八日（火）午後一時から國語課長室に於て、南方向初等日本語教本編纂委員囑託會議を開く。 神保光太郎、石井庄司、岩淵悦太郎、清水重道、川崎鐵太郎、鶴川義之助各委員囑託及大岡國語課長、三井調査官補、細井囑託等出席、協議の午後七時散會した。</p>
	<p>○國語課初常會</p>
	<p>一月六日（木）午前十時から正午まで、國語課長室に於て本年初常會を開き、課長外各關係官出席。當日の指示事項及話題は左の通りであった。 一、課長指示事項 國語對策協議會開會に關する件 一、話 題 軍人に賜はりたる勅諭の讀み方について 尚、國語課常會は一月十三日（木）十四日（金）連續課長室に開催、發音符號に關し協議、檢討を重ねた。</p>
	<p>○大東亞史上卷圖版審查會議</p>
	<p>教育局内東亞史概説編纂部に於ては目下鋭意大東亞史（上下二卷）を編纂中であるが、一月十七日在京の調査囑託を招集して上卷に収録すべき圖版審查會議を開催した。尚大東亞史の上卷は本年五月頃、下卷は今秋刊行の豫定である。</p>
	<p>○人事</p>
	<p>大東亞省支那事務局司政課長（大東亞書記官）根道廣吉は本會理事及常任理事に就任した。</p>
	<p>現地日本語教育事情に關し本會と連絡懇談されし方々の御芳名左の如し。 南京大使官通譯官 麓 保高氏</p>
	<p>本 會 新 刊 圖 書 一 日本文法教本 A5・一四六頁 定價五十五錢 一 日本語讀本・卷四 A5・一〇七頁 定價七十錢 一 日本語讀本・卷五 A5・九七頁 定價七十錢 一 日本語讀本學習指導書・卷一 A5・二六四頁 定價二圓 一 日本語讀本學習指導書・卷二 A5・二一五頁 定價二圓 一 成人用速成日本語教本・上（南方向）A5・一七五頁 定價一圓二十錢 一 初等學校用日本語教本・卷一（南方向）A5・一八九頁 定價一圓二十錢 一 日本語教授法の原理 B6・一七九頁 定價一圓三十錢 一 標準漢字便覽 A6・一〇九頁 定價五十錢 （右希望の方は振替東京一七三八〇〇番を御利用くださると便利です。）</p>
<p>第四卷第三號 1944（昭和19）年3月</p>	<p>彙報 pp. 62-63</p>
	<p>○文部省南方派遣日本語教育要員養成所第七回講習會開始さる</p> <p>文部省の南方派遣日本語教育要員養成所では左の如き要項により第七回講習會を開始することになり、二月五日嚴肅なる開所式を行ひ圖南の意氣に燃える講習生は勇躍鍊成講習の日程に入った。</p> <p>實 施 要 項</p> <p>一、主旨 日本世界觀ニ透徹セシメ大東亞ノ現在及將來ニ對シ活眼ヲ開カシムルト共に日本語教育要員タルノ知識及技能ヲ體得セシメ以テ南方諸民族ニ對スル指導者タル人材ヲ育成セントス</p> <p>一、主催 文部省</p> <p>一、期日 二月五日ヨリ三月五日マデ三十日間</p> <p>一、場所 東京都杉並區和泉町明治大學豫科構内 南方派遣日本語教育要員養成所</p> <p>一、講義題目及講師</p>

卷號（刊行年月日）

大東亞文化建設ノ理念	文部省總務局長 藤野 惠
興亞精神	文部省教學局長 近藤 壽治
日本文化史要説	法政大學教授 渡邊 保
日本語要説	第一高等學校教授 岩淵 悦太郎
日本語文法要説	學習院教授 東條 操
國語問題ト日本語普及	文部省教學局國語課長 大岡 保三
現代語ノ諸問題	文部省圖書監修官 湯澤 幸吉郎
標準語演習	東京文理科大學教授 神保 格
日本語普及史概説	文部省圖書監修官 釘本 久春
日本語教師論	東京女子大學教授 西尾 實
日本語教授法	日本語教育振興會總主事 長沼 直兄
日本語教授ノ諸問題	大出 正篤

大東亞諸言語要説	小倉 進平
大東亞近世史要説	民族研究員 岩村 忍
大東亞文教事情	大東亞事務官 相良 惟一
南方民族要説	民族研究所員 岡 正雄
南方衛生	陸軍軍醫中佐 深田 益雄
南方事情	陸軍司政長官 郡司 喜一
同	同 尾崎 卓郎
同	陸軍中佐 松尾 次郎
同	大使館調査官 關野 房夫
同	東京帝國大學講師 中島 健藏
訓話	文部省國務局涉外課長 高木 覺
同	明治大學豫科長 小林 秀穂

一、演習 各講師ノ指導ニヨリ演習ヲ實施シ且ツ必要ト認ムルトキハ研究發表、論文作成等ヲナサシム

一、見學 國際學友會見學、同上批評及指導（長沼講師）、南方關係映畫觀覽其ノ他ノ行事ヲ行フ

一、鍊成 養成期間中ハ終始合宿起居ヲ共ニシ切磋琢磨シテ自ラヲ鍊成スル生活態度ヲ確立セシメ以テ興亞教育者タルノ資質ノ育成ヲ期ス

○古典編修部在京編修會議員、編修囑託聯絡打合せ

文部省に於ては昨年教學局に古典編修部を設置し歴代尊詔勅の謹輯、古事記、日本書記の基本的定本の審定の事業に着手したが二月十四日文部省第三會議室に於て在京の編修會議員、編修囑託連絡打合せを開催して當局より事業の進捗状況を報告し種々意見の交換を行つた。出席者近藤部長（教學局長）、小沼主事（教學官）、原教學課長外關係官辻善之助、久松潜一、橋本進吉、宮地直一、坂本太郎、加藤虎之亮、武田祐吉、竹下直之、中村一良、松田武夫の各編修會議員、次田潤、丸山二郎、森末義彰、福尾猛市郎、小島小五郎の各編修囑託等。

○海外向日本語教科書打合せ

一月十八日午後三時より國語課長室に於て海外向日本語教科書に關する情報局と文部省との打合せを開き、情報局第三部對外事業課長根岸國藏氏及情報官井澤實氏大東亞省大使館調査官關野房夫氏、高木涉外課長、大岡國語課長、關監修官、長沼囑託等出席、文部省起草の原案に付協議の午後六時散會した。

○國語課研究會

國語課に於ては一月十九日午後一時半より五時まで課長室に第一回研究會を開き、佐伯功介氏の「ローマ字ノ呼名ニツイテ」の講演を聞いた。

○國語審議會主査委員會

一月二十日午後一時半から四時五分まで文部省第三會議室に於て開會、漢語の讀み方整理に關する件を議した。出席者南會長、穂積副會長、築田委員長、東條、神保、諸橋、五十嵐、前田、赤坂、竹村、宇野、河合、大岡、幣原、横山各委員、保科幹事長、廣田、吉田、關各關係官等。

○國語課囑託會議

一月二十八日午後一時から五時まで發音符號制定に關する會議を課長室に開き、橋本進吉、東條操、神保格、西尾實各囑託及大岡國語課長、湯澤、關各監修官、吉田調査官の外、國民教

卷號（刊行年月日）

	<p>育局より藤井監修官が出席協議した。</p> <p>○國語課常會</p> <p>二月二日午前十時課長室に開會、外國語地名人名の表記に関する方針の原則並細則を検討午後三時散會した。</p> <p>○本會研究部例會</p> <p>本會研究部では、日本語教育の諸問題（政策をのぞく）について、種々研究調査のため研究部例會を開催することになり、第一、第二回の例會は左記の如く神田事務所において催した。</p> <p>第一回—一月二十二日 「慣用読み方について」</p> <p>第二回—二月十二日 「朝鮮における日本語教育」 岡本好次氏を中心として</p> <p>○長沼總主事出張</p> <p>長野縣教育會では教員の教養啓發のため從來屢々講演會・研究會など開催し來つたが、この度日本語普及の諸問題について本會に講演依頼あり、左記の如く長沼總主事の講演が行はれた。</p> <p>題目 大東亞に於ける日本語普及の現状</p> <p>日時・場所 二月十日・於上田市</p> <p>現地日本語教育事情に關し本會と聯絡懇談されし方々の御芳名左の如し。（二月十五日現在）</p> <table border="0"> <tr> <td>北京師範大學附屬女子中學校教官</td> <td>符原利逸氏</td> </tr> <tr> <td>同 附屬中學校教官</td> <td>三武達氏</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>柴田寛一氏</td> </tr> <tr> <td>厦門總領事</td> <td>政本寅夫氏</td> </tr> <tr> <td>京城法學專門學校教授</td> <td>岡本好次氏</td> </tr> <tr> <td>北京師範大學教授</td> <td>岡本千萬太郎氏</td> </tr> <tr> <td>北京大學教授</td> <td>佐藤幹二氏</td> </tr> <tr> <td>蒙古自治邦政府内政部教學官</td> <td>岩永胖氏</td> </tr> </table> <p>本會顧問 伊東延吉氏</p> <p>同評議員 小倉進平氏 御逝去 謹んで御哀悼申し上げます</p>	北京師範大學附屬女子中學校教官	符原利逸氏	同 附屬中學校教官	三武達氏	同	柴田寛一氏	厦門總領事	政本寅夫氏	京城法學專門學校教授	岡本好次氏	北京師範大學教授	岡本千萬太郎氏	北京大學教授	佐藤幹二氏	蒙古自治邦政府内政部教學官	岩永胖氏
北京師範大學附屬女子中學校教官	符原利逸氏																
同 附屬中學校教官	三武達氏																
同	柴田寛一氏																
厦門總領事	政本寅夫氏																
京城法學專門學校教授	岡本好次氏																
北京師範大學教授	岡本千萬太郎氏																
北京大學教授	佐藤幹二氏																
蒙古自治邦政府内政部教學官	岩永胖氏																
第四卷第四號 1944（昭和19）年4月	<p>彙報 pp. 72-73</p> <p>○國語課常會</p> <p>二月十四日（月）午前九時五十分より國語課長室に於て常會開催、課長、湯澤、關各監修官、廣田、吉田各調査官、保科、三宅各囑託出席、發音符號制定に關する件を協議した。</p> <p>○國語審議會</p> <p>二月十七日（木）午後一時より文部省第三會議室に於て主査委員會を開き、漢語の整理に關する件を議し午後四時五分閉會した。出席者南、穂積正副議長、築田委員長、諸橋、幣原牧野（マ）、竹村、宇野、五十嵐、前田、赤坂、清水、荒木、大岡各委員、保科幹事長並に關監修官、廣田吉田各調査官等。</p> <p>○日本語關係者懇談會</p> <p>二月二十三日（水）午後一時半より發音符號制定に關する標記の懇談會を文部省第三會議室に於て開會、情報局第三部對外事業課井澤情報官代理豐田榮次郎氏、大東亞省南方事務局行政課關野調査官、同滿洲事務局總務課腰原事務官、東京工業大學窪澤武夫氏、東京高師玉井幸助氏、日本女子大上村悦子氏、東京女子大丸山きよ子、東亞學會有賀憲三氏、日本語教育振興會長沼直兄氏、國語協會石黒修氏、國際文化振興會那須卯之助氏、日本出版協會堀賢之助氏、國際學支會林和比古氏、日語文化協會松宮一也氏、善隣協會織本重義氏、青年文化協會石黒魯平氏等、本省側より大岡國語課長、東條操氏、金田一京助氏、湯澤、關、藤井各監修官、廣田、吉田各調査官及西尾、三宅、大塚各囑託等出席、午後五時閉會した。</p> <p>○教科書調査會</p> <p>三月四日（土）教科用圖書調査會委員並幹事等、二日附左記の通發令になつた。</p> <table border="0"> <tr> <td>委員</td> <td>情報局情報官</td> <td>井口貞夫</td> </tr> <tr> <td>臨時委員</td> <td>大東亞書記官</td> <td>根道廣吉</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>情報局情報官</td> <td>根岸國義</td> </tr> <tr> <td>幹事</td> <td>情報局情報官</td> <td>井澤實</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>大使館調査官</td> <td>關野房夫</td> </tr> </table> <p>○佛印總督府内日本語講習會本年度初級科開講</p> <p>客年開設された佛印總督府官吏に對する日本語講習會では、本年度初級科を來る十月八日よ</p>	委員	情報局情報官	井口貞夫	臨時委員	大東亞書記官	根道廣吉	同	情報局情報官	根岸國義	幹事	情報局情報官	井澤實	同	大使館調査官	關野房夫	
委員	情報局情報官	井口貞夫															
臨時委員	大東亞書記官	根道廣吉															
同	情報局情報官	根岸國義															
幹事	情報局情報官	井澤實															
同	大使館調査官	關野房夫															

り東京理事廳内に於て開講し、毎週三日（月、水、金）午前七時より八時迄授業することとなった。

○日本語學校第四期生修業式

海防市「ナムシン」街女子小學校教室で、講師の講習した安南人日語講習生第四期生十一名に對し、十二月十五日午後八時半より同教室に於て關係者及講習生約百五十名會合の上修業式を舉行した。式次第は左の通り。

- 一、一同敬禮
- 一、開式之辭
- 一、修行證書授與
- 一、賞品授與
- 一、日本語普及會海防支部長訓示
- 一、來賓祝辭
- 一、修業生答辭
- 一、閉式之辭
- 一、一同敬禮

此の機會に四期生を始め一、二、三期の優良生十五名に對し賞品を授與し、次に領事能見英一氏より「日本語は日本人と同文同種の安南人にとって佛語等より習ひ易く親しみもあり習い甲斐のある言葉であるから大東亞共榮圈の確立に先立って充分習得する」様激勵の辭があった。

○北部佛印日本語普及會第二回修了式

北部佛印日本語普及會主催の日本語講習會は第二回修了式を十二月十日午後五時半より映画館「エデン」に於て舉行した。當日午前九時四十五分河内市内最初の空爆を受け午後三時三十分より四時三十分まで再度空襲警報があったが、豫定通り決行し無事終了した。其の次第は次の通りである。

修了生八十八名（男八〇女八）及び夜間部第一、二、三期特別科生晝間部第一、二期生合計七三九名及修了生の父兄の參列を求め、大使府、陸海軍渉外部、日本人會側より其の首腦部の臨席を得、又佛印側より文部局長代理シヤバス氏及び日佛安各新聞記者、佛安名士參列當文化會館及び日本語普及會より全員出席し極めて盛大に舉行した。

修了生には修了證書を授與し、特に優良な者六名（男六）に各賞状及び賞品を授與した。尚夜、晝、第一、二、三期及び特別科生よりその約一割七十一名の可良者を選んで賞状及び賞品を授與した。

又修了生中より特に優良なる二名を選び賞品を授與した。

- 一、挨拶 横山本會長
- 一、學事報告 坂根副會長
- 一、會長より各證書、賞状、賞品授與及び誨告
- 一、來賓祝辭 日本人會長中川正金支店長

修了式後は小學藝會映畫會に移り、出演者一同良く日頃の勉學振りを發揮して來賓を讃嘆させた。以上の如く今回の修了式も前回同様非常な成功で、安南人間に多大のセンセーションを起し、日本語學習熱を煽り、各方面に當市に於ける日本語講習會が如何に盛大に行はれて居るかを如實に示し、本邦宣傳としても多大の成果を収めた。

なほ在海防領事能見英一氏より青木大東亞大臣宛左の如き報告があった。興味深く、且つ示唆にとむ内容であるので、許可を得てその大要をかゝげる。

○海防日語講習會安南人生徒の感想、動勢

一、客年十二月二十三日、本官主催の下に海防支部日語講習會安南人講習修了生第四期生を中心に第三、二期生計十三名を海防市興亞ホテルに於て日本料理にて招宴した。

この會合は、各自日本語で意志の交換を行ひ、日語講習生の日語習得後日本、日本人、日本語、日本文化等に關した感想を聞く爲で、この種の試みは當地では最初の事であり、有意義であると思ふ。以下その情況を述べる。先づ本官挨拶に際し、日本語で「浦島太郎」のお伽話を出来るだけゆつくり聞せ、生徒の理解力を試問したが、略ぼ其の大意を理解したやうである。次に北村海防日本人會長、奥村日本人會教育部長、埴日語講習會講師が日本語の重要性を説明し、次で會食中に生徒達と對話したが、其の口調に多少不自然な所があるが大體夫々簡単なことは話し、亦邦人の話でも案外細いこと迄聞き取れ得るといふことがわかつた。當日の會席膳部は焼魚、茶碗蒸、吸物、蝦のてんぷら等の皿を黒塗りの膳に列べ、これに日本酒及ビールを

出したものであったが、生徒等にとって皆日本料理の宴席は初めてのことであったので珍しく感じたらしく、且安南料理に比して見た目に美しく食器類も安南人當用のものより佳良なもの多く各人満悦の様子だった。その感想をきくと、日本式招待は懇懇であり、料理の味付けの好い旨を述べ、三時間に互り種々談合して散會した。以上の如く和やかな會合であつたが、その時本官より生徒に對し各自の感想を日本語で述べる様申渡したところ、夫々の感想があつたがそのうち特記すべきものを左に掲げる。

「本夕の御鄭重なる御招宴を深謝致します」「私が平生感じてゐる所は、日本人は佛蘭西人に比し親切であること従つ好感が持てますし更に益々日本語の勉強に興味を持てます。それですから日本の方と話をすることが何よりの楽しみであります」「日本のお伽話の本を多く讀みたい故取寄せて下さい」「日本留學の許可を得てゐますが、何時頃日本へやつてもらへますか」「私が日本語を習ふのは日本へ行きたいからです」「早く日本語を覚え一日も早く留學し、お國の事情を知りたいと思つて居ります」「今日私共の日本語勉強に不便を來してゐることは、日本語の良い本が手に入りませんからです。どうか早く良い本を作つて下さい」「私は何時も振假名付きの日本語新聞を讀むのを楽しみにしてゐます」「今晩は御馳走になり有難うございました。皆美味うございましたが特に私の好きだつたものは蝦のてんぷらでした」云々
なほ「安南の歌を列席の皆様へ御聞かせ致し度い」と云つて歌つた者もあつた。更に引續いて其の習得した日本軍歌三曲を合唱した。

二、新年に際し、前記日語講習生約五十名は午前九時頃打揃つて領事館に來て、本官に對し日本語で新年の挨拶を述べ、尚花籠の贈呈を受けた。これに對し本官より其の好意を謝すと共に本年は尚一層日本語を一生懸命に勉強するよう慫慂した。

三、前記日語講習生の約半数は海防市に在る約三十の本邦商社の書記及び使傭人で、夜間日語講習會に通學してゐるものであるが、熱心に學習するのはもとより出席率も良好である。

四、因に從來佛印官憲の採用して來た安南語のローマ字綴政策の結果、安南人で自己の姓名さへ漢字で署名の得る者が少い實状であるが、比等日語講習生中にも安南語のローマ字綴を以てでは其の學習に尠からず困難を感ずることがある外、不自然な點並に其の使用上に不便が多いこと等を述べて居た。

現地日本語教育事情に關し本會と連絡懇談されし方の御芳名在(マ)の如し。

在上海日本大使館事務所 野村大使館調査官

大東亞屬・本會書記 大塚季夫氏は長く大東亞省支那事務局に於て本會の爲盡粹され來つたが、先般出張、上海に上陸されると同時に發病、つひに逝去された。三月九日逗子の自宅に於いて告別式舉行、本會からは上村主事參列し弔意を表した。こゝに御通知を兼ね、讀者諸氏と共に謹んで御哀悼申上げる。

彙報 pp. 29-31

○國語審議會主査委員會

三月十六日（木）午後一時より本省第三會議室に於て主査委員會を開き漢語の整理に關する件を議し午後四時五分散會した。出席者は南會長、穂積副會長、築田委員長、幣原、宇野、五十嵐、前田、神保、河合、大岡各委員 保科幹事長、吉田調査官等。

○外國語地名人名に關する協議會

三月三十日（木）午前午後互り課長室に於て外國語地名人名の呼稱等に關する調査の整理統一方針につき協議した。

○補習教材に關する關係官廳聯絡會議

三月三十一日（金）午後二時より國語課長室に於て南方地域向日本語教科書補習教材に關する關係官廳との連絡會議を開き、陸軍省軍務局松尾少佐、大東亞省關野調査官、情報局井澤情報官、大岡國語課長、日本語教科書編纂委員長沼、福田、森山諸氏出席、午後四時協議を了して散會した。

○國語課常會

四月五日（水）及十二日（水）いづれも午前十時より午後三時まで課常會を課長室に開き、外國語地名人名の呼稱等に關する件（整理統一の趣旨、並にその經過、統一案の取扱方針）について協議を重ねた。

○佛印に於ける日本語教育の現状

四月十日（月）午後一時佛印ハノイ駐劄領事渡邊耐三氏、在佛印日本文化會館東京事務所長土田金雄來室。高木渉外課長、關野大使館調査官及大岡國語課長列席して、渡邊領事のハノイ

に於ける日本語教育の現状に関する談話を聞いた。

○教科用圖書調査會第四部會

四月二十日（木）及二十一日（金）兩日に互り本省第三、第四會議室に開會、文部大臣の諮問に答へる爲、十八年度編纂の南方地域向日本語教科書中、日本語入門（假稱）一冊、初等學校用教本卷四、卷五、卷六三冊、中等學校用教本卷四、一冊、成人用教本上下二冊等につき調査検討して原案を可決しその旨答申することゝなつた。

○日本語學振興委員會國語國文學部専門委員會の開催

文部省教學局内日本語學振興委員會では、去る三月三十一日午後一時三十分より文部省委員室に於て國語國文學部専門委員會を開催して、昭和十九年度の國語國文學部事業運営に關し協議して午後四時散會した。

尚本委員會に於て、本年度の國語國文學會は六月二十二日、二十三日の兩日宇治山田市神宮皇學館大學に於て開催されることに決定した。

○第七回南方派遣教育要員養成所終了式

二月五日より明治大學豫科構内に於て實施中であつた文部省南方派遣教育要員養成所の第七回講習會は其の鍊成講習の全課程を終へ三月五日所長代理高木文部省總務局渉外課長以下各關係官列席の下に嚴肅なる終了式を舉行した。終了者八十二名。終つて一同日本語教育振興會主催の壯行會に出席した。

○文部省總務局高木渉外課長蒙疆へ出張

蒙疆地區に於ける現地採用教育職員を派遣教育職員として銓衡の爲、高木文部省渉外課長は三月初旬張家口に出張したが、銓衡終了後蒙疆各地の教育狀況を視察三月下旬歸國した。

○財團法人日本語教育振興會設立

大東京（マ）戦争の展開にともなひ、日本語普及の重大性は愈々その度を加へつゝある。この時に當つて、日本語それ自體の考究、日本語教育方針の確立、教科書その他教授資料の作製頒布、教授者の養成指導等、本會の使命は一としてこれを忽せになしうるものはない。こゝにその事業の進展に即應し、財團法人日本語教育振興會の設立を見ることゝなつた。以下その寄附行爲をかゝげる。

財團法人日本語教育振興會寄附行爲

第一條 本會ハ財團法人日本語教育振興會ト稱ス

第二條 本會ノ事務所ハ之ヲ東京都神田區三崎町一丁目二番地三ニ置く

第三條 本會ハ政府ノ方針ニ基キ大東亞圏内ニ於ケル日本語ノ普及並ニ日本語教育ノ振興ニ關スル諸事業ヲ行フヲ以テ目的トス

第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達スルタメ左ノ事業ヲ行フ

一、日本語ノ普及並ニ日本語教育ノ振興ニ關スル諸般ノ調査・研究及ソノ推進

二、日本語教科用圖書・教育資料ノ刊行又ハ作成頒布並ニ日本語ニ關スル雜誌ノ發行

三、日本語指導者ノ養成・指導並ニ之ニ必要ナル施設ノ設置運営

四、日本語ノ普及並ニ日本語教育ノ振興ニ關スル各種會合ノ開催、關係諸團體トノ連絡・調整

第五條 本會ノ資産ハ左ニ記載シタルモノヨリナル

一、設立當初ノ資産（別紙目錄ニヨル）

二、政府補助金

三、寄附金品

四、事業収入

五、其他ノ収入

第六條 本會ハ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル

第七條 資産ハ之ヲ郵便官署・銀行若ハ信託會社ニ預入レ又ハ有價證券トシテ保有スベシ

前項ノ銀行、信託會社及有價證券ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經ベシ

金銭以外ノ資産ハ理事會ノ定ムル適當ナル方法ニ依リ之ヲ保管利殖シ又ハ換價ス

第八條 本會ノ事業運営ニ關シ必要アルトキハ理事會ノ議決ヲ經テ特別會計ヲ置くコトヲ得

第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置く

ソノ任期ハ二年トス但シ重任ヲ妨ゲズ

一、會長 一名

二、副會長 二名

三、理事長 一名

四、理事 若干名（内一名ヲ常務理事トス）

卷號（刊行年月日）

- 五、監 事 二名
- 第十條 本會ハ顧問・參與・評議員各若干名ヲ置クコトヲ得
ソノ任期ハ二年トス但シ重任ヲ妨ゲズ
- 第十一條 會長ハ理事ノ中ヨリ理事會ノ決議ニ依リ大東亞大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム
會長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統裁ス
- 第十二條 副會長ハ理事ノ中ヨリ會長之ヲ委囑ス
副會長ハ會長ヲ輔佐シ、會長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代行ス
- 第十三條 理事長ハ理事ノ中ヨリ會長之ヲ委囑ス
理事長ハ會長ノ命ヲ承ケ本會事業ノ企畫立案竝ニ會務ノ遂行ヲ掌ル
- 第十四條 會長、副會長、理事長タル理事ヲ除キ理事ハ會長之ヲ委囑ス
理事ハ理事會ヲ組織ス
理事會ハ理事長ヲ招集シ本會ノ事業ノ企畫立案竝ニ會務ノ遂行ニ付審議ス
理事會ノ議長ハ理事長之ニ當ル
理事會ハ理事半数以上出席スルニ非ザレバ開會スルコトヲ得ズ
議事ハ出席理事ノ過半数ニ依リ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ議長ヲ決ス
常務理事ハ理事ノ中ヨリ會長之ヲ委囑ス
常務理事ハ理事長ヲ輔佐シ專ラ會ノ常務ヲ執行ス
- 第十五條 監事ハ會長之ヲ委囑ス
監事ハ民法第五十九條ノ職務ヲ行フ
- 第十六條 顧問ハ會長之ヲ委囑ス
顧問ハ會長ノ諮問ニ應フ
- 第十七條 參與ハ會長之ヲ委囑ス
參與ハ參與會ヲ組織ス
參與會ハ理事長之ヲ招集シ重要ナル會務ニ參與ス
- 第十八條 評議員ハ會長之ヲ委囑ス
評議員ハ評議員會ヲ組織ス
評議員會ハ會長之ヲ招集シ會長ノ諮問ニ應ジ意見ヲ開申ス
- 第十九條 本寄附行爲ノ施行ニ關シ必要ナル細則ハ理事會ノ議決ヲ經テ別ニ之ヲ定ム
- 第二十條 本寄附行爲ハ理事ノ發議ニ基キ理事三分ノ二以上ノ同意アルトキ之ヲへ變更スルコトヲ得

附記 猶本會設立當所の役員は左の如くである。

會 長	文部大臣	子爵 岡部 長景
副會長	文部次官	菊池豊三郎
同	大東亞次官	山本 熊一
理事長	文部省教學局長	近藤 壽治
理 事	文部省教學局國語課長	大岡 保三
同	文部省圖書監修官	釘本 久春
同	大東亞事務官	相良 惟一
同	大使館調査官	關野 房夫
同	大東亞省南方事務局政務課長	東光 武三
同（常務）	文部省囑託	長沼 直兄
同	東京女子大學教授・文部省囑託	西尾 實
同	大東亞省支那事務局司政課長	根道 廣吉
同	文部省會計課長	柴沼 直
同	大東亞省會計課長	華山 親義

○プノンペン日本語講習會

要目

名稱	プノンペン日本語講習會
場所	プノンペン市シソワット高等中學内
期日	昭和十八年十月十一日ヨリ三ヶ月
生徒	一〇〇名（安南人七〇名、東支人三〇名、内女一〇名） 生徒の教育程度は大體中等學校卒業以上、佛國留學醫學博士、學士其他一般官吏商社

卷號（刊行年月日）	
	<p>使用人等地方に於ける現地人側の知識層多く集る。 當地方に於ける日本語熱は地理的状況、在留邦人の數、或は現地佛當局の施策等の原因から、河内、西貢方面より若干遅延して出現し始めたやうに見うけられたが、一般現地人の中には獨學で相當程度の學習をしてきたものもあり、昨秋あたりから一般の日本語學習熱が急速に上昇し、西貢にわざわざ出かけて行くものまで出て來たので、右の如く講習會を開くことになつたものである。</p>
第四卷第六號	彙報 p. 37
1944（昭和19）年6月	○釘本圖書監修官歸朝
	<p>昨年十二月二十一日より南方諸地域へ出張中の釘本監修官、四月二十二日（土）歸朝、同日午後三時半登省した。</p>
	○國語課常會
	<p>四月二十六日（水）午後一時半より四時まで國語課常會を課長室に開き「軍人勅諭の讀方」について協議した。次で五月三日（水）には、午後二時半より釘本監修官の南方視察談を聴き午後三時半閉會、同じく六日（土）には午後一時半に開會、三宅囑託提案の「科學局翻譯の用語・用字について」協議し午後三時閉會した。</p>
	○教科用圖書調査會
	<p>四月二十八日（金）午後三時より第三會議室に於て第四部會の懇談會を開き、先般歸朝の釘本監修官より南方視察談を聴收した。</p>
	○廣田國語調査官渡支
	<p>四月二十九日（土）天長節祝賀式を第一會議室にて舉行、全省員參集して 聖壽の萬歳を仰ぎ奉つた。この日廣田調査官中華民國へ出張を命ぜられて東京驛を出發した。滞在は六十餘日間の豫定である。</p>
	○外地向教科書に對する海軍側希望意見
	<p>五月九日（火）午前十時、海軍省教育局の海軍教授官島夏樹氏來室、南方諸地域及支那向各日本語教科書編纂に關する海軍側の希望意見を述べられ、釘本監修官生として之に應接した。</p>
	○文部大臣招待會
	<p>五月十一日（木）午後六時より文部大臣南方諸地域に於ける日本語教育其他一般教育に關する海軍側關係官を官邸に招待して懇談し午後八時半散會した。出席者は林大佐、橘中佐、田邊主計大尉、セレベス軍政監部秘書課長等で、本省側より大臣、次官の外總務局長、教學局長、文書課長、涉外課長、國語課長、釘本監修官、長沼囑託等が出席した。</p>
	○日本諸學振興委員會國語・國文學會研究發表者
	<p>來る六月二十二日（木）及二十三日（金）の兩日宇治山田市所在神宮皇學館大學に於て開催せらるる標記學會の研究發表者は左の十氏に決定した。因に公開講演會は都合により中止せられる。</p>
	<p>日本諸學振興委員會國語・國文學會研究發表者一覽</p>
	1、東京帝國大學教授 時枝 誠記
	2、九州帝國大學助教授 吉町 義雄
	3、神宮皇學館大學助教授 佐藤喜代治
	4、早稻田大學教授 本間 久雄
	5、國學院大學教授 藤野 岩友
	6、立命館大學教授 清水 泰
	7、東京高等師範學校教授 熊澤 龍
	8、福岡女子專門學校教授 井出 恆雄
	9、東京商科大學豫科教授 龜井 孝
	10、第六高等學校教授 西下 經一
	○華北日本語普及協會山西省支部發會
	<p>從來存在してゐた日本語研究會を全面的に改組し、新機構のもとに發足、四月二十一日發會式を舉行した。</p>
	【役員】 顧問 大江太原陸軍連絡部長
	田中太原總領事
	王山西省兼教育廳長憲太原日本語專科學校長
	支部長 甲斐山西省政府顧問
	【主たる事業】 太原日本語專科學校の經營、其他日本語教育、日本語普及に關する諸般の事

卷號（刊行年月日）	
	業。
第四卷第七號 1944（昭和19）年7月	<p>彙報 pp. 50-51</p> <p>○本會研究部主催講演會 本會研究部に於いては廣く日本語普及方策一般、乃至は日本語教授法の諸問題につき、職員 の啓發を目的とし、併せて東京在住の實際教授者諸師の参考に資すべく、小講演會の開催を企 畫してきたが、このたび五月八日、二十五日の兩日左の如く南方諸地域に於ける日本語普及状 況につき講演會を主催した。 五月 八 日 文部省圖書監修官・本會理事 釘本 久春氏 五月二十五日 在盤谷日本文化會館 鈴木 忍 氏 同 在佛印日本文化會館 蘆原 英了氏</p> <p>○大東亞省輔導室との連絡懇談會 大東亞省輔導室に於いては大東亞共榮圏内日本留學生の生活指導の任に當つてきたが、これ は本會の事業とも緊密なる聯關を必要とするため、五月二十四日連絡懇談會を催し、相互に意 見を交換、今後の方針その他につき種々打合せを行った。</p> <p>○「學習日本語」の創刊 南方共榮圏諸地域に於ける日本語學習熱の熾なるに鑑み、日本語を通じて現代日本の動態 を、ひいては大東亞戦争の眞意を現地住民に理解せしめることの急務は今あらためて論ずるま でもないが、教科書は本來その性質上教材にある種の制限と固定化とをまぬかれぬため、一に は各地の實情に即應し、一には時局の推移に歩調を合せ、新鮮適切なる教材を提供して、現地 日本語學習者の意欲に應へねばならない。この觀點から文部省教學局國語課に於いては、かね ての陸軍當局の要望にもとづき、「學習日本語」を編纂し、本會に於いてこれが發行に當るこ ととなり、このほどマライ、ビルマ、ジャワ、フィリピンの各篇第一冊がそれぞれ完成し、五 月三十日發行の運びとなつた。</p> <p>○國語課常會 五月二十七日（土曜）午前十時から十一時まで臨時常會を課長室に開き、教育總監部第一課 精神教育班より送付された「軍人勅諭奉讀に際しての發音に就て」の内容を検討した。 次で三十日（水曜）及六月七日（水曜）午前十時より十一時十五分まで引續き開會した。</p> <p>○日本語普及に関する海軍當局との懇談 同日海軍當局の要望により釘本監修官午前九時半より十二時まで海軍省軍務局に於て南方 地域日本語教育並日本語普及に関する件につき海軍側と懇談した。</p> <p>○文部大臣招待會 六月一日（木曜）午後六時より南方諸地域に於ける日本語教育其他一般教育に関する陸軍側 關係官を大臣邸に招待懇談し午後九時散會した。出席者は陸軍側佐藤軍務局長、郡司司政長官、 軍務課員大西大佐、高橋中佐、松尾少佐、榊原少佐及法制局三橋書記官、本省側岡部文部大臣、 菊池次官、有光秘書課長、藤野總務局長、近藤教學局長、高木涉外課長、大岡國語課長、釘本 圖書監修官等。</p> <p>○送假名法に関する海軍側との懇談 六月三日（土曜）午前十時、海軍兵學校教官三木少尉及海軍省教育局宮島海軍教授、海軍兵 學校に於ける送假名法制定に関する用務を以て來室、關監修官應接し、次で五日（月曜）午前 午後に互り關、釘本兩監修官と懇談した。</p> <p>○文部省南方派遣教育要員養成所第十一次講習會開始さる 文部省南方派遣教育要員養成所に於ては左記要項により第十一次講習會を開催することと なり、五月三十日所長藤野文部省總務局長主事高木涉外課長、大岡國語課長以下各關係官列席 の下に厳肅なる入所式を行ひ、入所生一同直に鍊成講習の日程に入つた。</p> <p>記 一、場所 千葉縣千葉市浪花町東京帝國大學鍊成道場講内（マ） 南方派遣教育要員養成所 一、期間 五月三十日一六月二十八日 一、講義題目、講師、演習及鍊成要綱、職員等概ね前回到同じ。但し今回より期間中毎日農耕 に關す勤勞作業を実施し、勤勞を通じて身心を鍛鍊すると共に、南方に於て農耕指導も行ひ 得る資質を涵養することとなり、又講義中にも南方農業の課目を加へ、佐々木東大教授に講義 を委嘱すると共に、山田東大農學部助手に農耕實習の指導を委嘱することとなつた。 一、講義課目及講師 大東亞文化建設の理念 文部省總務局長 藤野 恵</p>

卷號（刊行年月日）			
	興亞教育論 日本文化史要説 日本語要説 日本文法要説 國語問題と日本語教育 現代語の諸問題 標準語演習 日本語普及史 日本語教師論 日本語教授法 日本語教授の諸問題	文部省教學局長 法政大學教授 第一高等學校教授 學習院教授 文部省國語課長 文部省圖書監修官 東京文理科大學教授 文部省圖書監修官 東京女子大學教授 日本語教育振興會常務理事	近藤 壽治 渡邊 保 岩淵 悦太郎 東條 操 大岡 保三 湯澤 幸吉郎 神保 格 釘本 久春 西尾 實 長沼 直兄 大出 正篤
	大東亞諸言語要説 大東亞近世史要説 大東亞文教政策 南方民族要説 南方衛生 南方事情 同 同 同 南方農薬要説 訓 語 農耕作業 體操教練	慶應大學教授 文部省民族研究所 大東亞事務官 文部省民族研究所 陸軍軍醫學校教官 陸軍少佐 陸軍司政長官 大便宜調査官 東京帝國大學講師 東京帝國大學教授 文部省總務局涉外課長	松本 信廣 中島 敏雄 相良 惟一 岡 正雄 深田 益男 松尾 次郎 郡司 喜一 關野 房夫 中島 健藏 佐々木 喬 高木 覺
	○大東亞教育事情講習會開始さる		
	東京都下青年學校、國民學校教職員に對し、最近の大東亞諸地域に於ける教育事情に對する認識を與へ、興亞教育の振興に資せんが為左記の如き講習會が開催された。		
	記		
	一、主催 東京都教育局、大日本教育會		
	二、後援 文部省		
	三、期日 六月十日より七月八日迄毎土曜		
	四、場所 神田區一ツ橋教育會館		
	五、聽講者 都下青年學校、國民學校教職員		
	六、講師		
	泰佛印	釘本文部省圖書監修官	
	セレバス及南ボルネオ	大畑東京外事専門學校長（前海軍司政官）	
	ジャワ	尾崎大阪外事専門學校長（前陸軍司政長官）	
	フィリピン	内山文部書記官（前陸軍司政官）	
	ビルマ	飯田陸軍司政官（前文部省社會教育官）	
	マライ、スマトラ	岩田東京都視學官（前陸軍司政官）	
	中華民國	水川放送局教養部長（前大使館調査官）	
	滿洲國	羽田文部省中等教育課長（前在滿教務事務官）	
	蒙古	曾我文部省教學官（前大使館調査官）	
	最近御上京本會と連絡懇談をとげられた方の芳名は左のとほりである。		
	在上海日本大使館事務所	内山調査官	
	比島派遣軍	伊東陸軍司政官	
第四卷第八號	彙報 pp. 38-39		
1944（昭和19）年8月	○日本諸學振興委員會國語・國文學會の中止		
	去る六月二十二日及二十三日の兩日神宮皇學館大學に於て開催の豫定であつた標記學會は時局の逼迫に鑑み中止の己むなきに至つた。同學會に於て研究發表する事になつてみた十氏に對し同委員會機關誌「日本諸學」第六號に發表課題に關する論文の執筆方を交渉することになつた。		
	○文部省南方派遣教育委員養成所第八回養成講習會終了式		

	五月三十日より千葉市検見川東京帝大錬成道場内に於て実施中であつた文部省南方派遣教育委員養成所の第八回講習會は所期の成果を収め全課程を終了六月二十八日所長代理高木文部省總務局渉外課長、主事大岡文部省國語課長以下各關係官列席の下に嚴肅なる終了式を舉行した。當日終了證書を授與された者は三十一名であつた。
	○海軍軍政地域に於ける日本語教科書
	六月十五日(木)午後三時、セレバス在勤前田海軍司政官來室、標記の件に關し、大岡國語課長、釘本監修官、長沼振興會常務理事と懇談、湯澤監修官、大塚調査囑託列席、午後五時過ぎ退出した。
	○國語審議會主査委員會
	六月十六日(金)、七月二十日(木)、同二十一日(金)いづれも午後一時半より本省第三會議室に於て開會、漢語の整理に關する件を議し、午後四時散會した。
	○教科書配送連絡會議
	六月十六日(金)午後一時半、課長室に於て南方諸地域に於ける日本語教科書の配送に關する連絡會議を開いた。出席者はビルマ平松陸軍司政官、スマトラ米澤陸軍中尉、マライ金谷陸軍司政官、大東亞省關野調査官、日本出版會坂本教育厚生課長心得、萩谷渉外課主事、花島同課員、日本出版配給株式會社田中東亞課長、中等學校教科書株式會社稻葉管理部次長。本省側からは、高木渉外課長、大岡國語課長、釘本監修官及長沼振興會常務理事出席、協議を進めて午後五時散會した。
	○國語課常會
	六月二十一日(水)、二十三日(金)、二十九日(木)、七月三日(月)、四日(火)、十二日(水)、以上いづれも課長室に於て開會、決戦下國語浄化指導面の具體的方策について協議した。
	○滿洲國に於ける日本語普及の強化
	滿洲國に於ける日本語普及の強化問題に關して上京せられた滿日文化協會理事杉村勇造氏と懇談連絡が大東亞省滿洲事務局の主唱により六月十三日華族會館に開催せられたが、文部省よりはる大岡國語課長、本會よりは長沼常務理事が出席して、種々懇談した。
	○海外同胞中央會附屬海外中央訓練所に於ける日本語普及問題に關する講演
	本會長沼常務理事は海外同胞中央會附屬海外中央錬成所に於て日本語普及に關する講演の後同會理事今村常務理事と懇談協議し、爾後引續き毎週一回講演を行つてゐる。
	○本會事務所移轉
	本會は事業擴張に伴ひ、今般東京都神田區三崎町一丁目二番地三崎會館を買収して、これに移轉した。但し文部省内の事務所は從前の通りである。
	○本會理事關野房夫氏比島出張
	本會理事關野房夫氏は公務を以て比島に向け六月二十日出發した。
	○「現代語法の諸問題」、「現代敬語法」、及び文部省制定「發音符號」發刊
	日本語教育叢書として「現代語法の諸問題」及び「現代敬語法」の兩書、並びに文部省制定「發音符號」が發刊せられた。
	一、現代語法の諸問題
	現代の口語を代表するものは東京語であり、標準語制定の基礎となるべきものは東京語であるといふことは既に定説であるが、然らばその東京語についてどれほどの考察が今迄加へられて來たかといへば、遺憾ながら甚だ寥々たるものである。事實、音韻の部面に於ても、語法の部面に於ても、まだ一定せぬ事柄が多い。一例を語法の上にとつて見よう。「 <u>人才が足りない</u> 」がよいか「 <u>人才が足らない</u> 」がよいか「 <u>講演ををはる</u> 」か「 <u>講演ををへる</u> 」か、「 <u>雨が漏れて來る</u> 」か「 <u>雨が漏つて來る</u> 」か、「 <u>用を済ませて</u> 」か「 <u>用を済まして</u> 」か、かうした問題は非常に多い。そのほか「 <u>誰もが暑いといふ</u> 」といふやうな用法は正しいか、「 <u>日本語を上手に話す</u> 」「 <u>日本語が上手に話したい</u> 」の如く如何なる場合に「を」を用ひ如何なる場合に「が」を用ひるか、これ等については、殊に日本語教育に携る人々の困惑する所で、而も從來明快に説明した著書が全くない。
	文部省圖書監修官湯澤幸吉郎氏は、かの名著「室町時代の言語研究」「徳川時代の言語研究」等の著者であるが、かゝる問題にもまた眞摯な考察を續けること二十餘年、今般本會の囑を快諾して、その貴重な資料を盡く提供し、執筆せられたのが本書である。動詞、形容詞、助動詞、助詞の全般に亘つて、剩す所なく、苟くも問題となるものは盡く採り上げ、七十餘種の作品、雜誌類からその實例を引用して、それに明快な解説を加へてゐる。日本語教育に携る者の最良の指導書であることはもとより苟も國語に關心を有する人々の必讀の書である。

<p>卷號（刊行年月日）</p>	<p>(B六判三〇五頁、定価二圓三十錢)</p>																																							
	<p>二、現代敬語法</p> <p>本書は本會が文部省囑託三宅武郎氏に執筆を委嘱したもので、現代敬語法の一般に亘つて詳述した書である。従來敬語法に關する著書としては、山田孝雄博士著「敬語法の研究」丸山林平氏著「日本語敬語法」江湖山恒明氏著「敬語法」等があるが、本書の特徴は、著者が實際の日常生活の作法に即して、それと一致したところに眞の敬語法を見出さうとしてゐることである。著者は敬語法の根本精神を、長上の名と、それに伴ふ行動とを直指直稱しないことにあるとし、その精神が種々の場に顯現せられたとき、その精神と言葉遣が一致してゐるか否かによつて敬語の正否を判定してゐる。従つて「家族の呼び方」「他家の家族の呼び方」「電話の作法」「質問の禮儀」「挨拶語」等の各章の如き具體的實際的の説述が多く、直に以て我々の日常の指針とすることが出来る。さればといつて、これは單なる實用の書ではない。著者は一切の文を基體の部と話題の部との二層に分けて、それを敬語法の立場から理解することが出来るとなし、これを敬語法の二重構造と稱してゐる。即ち基體の層に於ては、話者と對者との待遇關係を決定し、話題の層に於ては、その話題の主人公を中心としてそこに展開する各種の待遇關係を決定する。而して基體の部に於ては、その待遇關係によつて平話體がとられるか、敬語體がとられるか、話題の部に於てはその話題の主人公(著者はこれを人格詞と稱してゐる)を主體として、それに付屬する敬稱の使用と述語の呼態との適否によつて敬語の用法の正否が決定せられるとなし、それをあらゆる場に於て明快に説明してゐるが如き、「答の法則」を考究してゐるが如き學問的にも獨創的な卓論に富んでゐる。要するに本書はすぐれたる學術書であると同時に實用書であり、従つて學究にも、實際家にもすべての人々に多大な裨益を與へる書である。</p> <p>(B六判三六二頁 定価二圓五十錢)</p> <p>三、文部省制定「發音符號」(B六判二五頁、非賣品)希望の向は一部實費十五錢を添へて本會に申込まれたい。</p> <p>最近御上京本會と連絡懇談をとげられた方の芳名は左のとほりである。</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td>スマトラ軍政監部</td> <td>米澤陸軍中尉</td> </tr> <tr> <td>ビルマ派遣軍</td> <td>平松陸軍司政官</td> </tr> <tr> <td>セレベス海軍民政府</td> <td>前田海軍司政官</td> </tr> </table>	スマトラ軍政監部	米澤陸軍中尉	ビルマ派遣軍	平松陸軍司政官	セレベス海軍民政府	前田海軍司政官																																	
スマトラ軍政監部	米澤陸軍中尉																																							
ビルマ派遣軍	平松陸軍司政官																																							
セレベス海軍民政府	前田海軍司政官																																							
<p>第四卷第九號 1944(昭和19)年9月</p>	<p>彙報 pp. 36-37</p>																																							
	<p>○日本語學研究助成昭和十九年度國語・國文學部研究課題並に研究者の決定</p> <p>文部省教學局に於ては今回決戦下愈々國體・日本精神に基く學問文化の創造發展に資し、以て戦力增強の根基に培ふ為日本語學研究の助成促進を圖ることとなつた。右日本語學研究助成は教育學、哲學、國語・國文學、歴史學、經濟學、藝術學、法學、自然科學及地理學の九部門に亘りそれぞれ研究課題並に研究者を選定し指定研究をせしめるものであつて、昭和十九年の國語・國文學部關係は左の十一項に決定した。</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td>日本漢文學の史的的研究</td> <td>東京文理大教授</td> <td>山岸 德平外</td> </tr> <tr> <td>古事記諸本の研究</td> <td>静岡師範講師</td> <td>植松 茂</td> </tr> <tr> <td>皇典文彙の註釋</td> <td>神宮皇學大教授</td> <td>倉野 憲司</td> </tr> <tr> <td></td> <td>同 助教授</td> <td>高橋 峻</td> </tr> <tr> <td>古事記の用字法</td> <td>廣島文理大教授</td> <td>土井 忠生外</td> </tr> <tr> <td>漢字漢語の撰取に基づく國語上の諸問題</td> <td>東京帝大教授</td> <td>時枝 誠記</td> </tr> <tr> <td></td> <td>一高教授</td> <td>岩淵 悦太郎</td> </tr> </table> <p>日本語に關する問題</p> <p>日本語と各異民族語との關係、各國の言語政策の過去及び現在調査、日本語の發音</p> <p style="text-align: right;">日本語教育振興會研究部 長沼 直兒外</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td>國學の地方分布の研究</td> <td>國學研究會</td> <td>久松 潜一外</td> </tr> <tr> <td>古代文學に於ける九州</td> <td>九州帝大教授</td> <td>高木市之助外</td> </tr> <tr> <td>産靈信仰の研究</td> <td>慶大・國大教授</td> <td>折口 信夫</td> </tr> <tr> <td></td> <td>國大講師</td> <td>加藤 守雄</td> </tr> <tr> <td>アイヌ生活の記述的研究</td> <td>東亞考古學會</td> <td>金田一京助外</td> </tr> <tr> <td>日本書紀研究の沿革に關する調査研究</td> <td>教學鍊成所鍊成官</td> <td>中村 光</td> </tr> </table> <p>○國語醇化に關する懇談會</p> <p>七月十四日(金)午後四時半より姉崎正治博士を本省委員室に招き、歐文の語脈語法の國語侵</p>	日本漢文學の史的的研究	東京文理大教授	山岸 德平外	古事記諸本の研究	静岡師範講師	植松 茂	皇典文彙の註釋	神宮皇學大教授	倉野 憲司		同 助教授	高橋 峻	古事記の用字法	廣島文理大教授	土井 忠生外	漢字漢語の撰取に基づく國語上の諸問題	東京帝大教授	時枝 誠記		一高教授	岩淵 悦太郎	國學の地方分布の研究	國學研究會	久松 潜一外	古代文學に於ける九州	九州帝大教授	高木市之助外	産靈信仰の研究	慶大・國大教授	折口 信夫		國大講師	加藤 守雄	アイヌ生活の記述的研究	東亞考古學會	金田一京助外	日本書紀研究の沿革に關する調査研究	教學鍊成所鍊成官	中村 光
日本漢文學の史的的研究	東京文理大教授	山岸 德平外																																						
古事記諸本の研究	静岡師範講師	植松 茂																																						
皇典文彙の註釋	神宮皇學大教授	倉野 憲司																																						
	同 助教授	高橋 峻																																						
古事記の用字法	廣島文理大教授	土井 忠生外																																						
漢字漢語の撰取に基づく國語上の諸問題	東京帝大教授	時枝 誠記																																						
	一高教授	岩淵 悦太郎																																						
國學の地方分布の研究	國學研究會	久松 潜一外																																						
古代文學に於ける九州	九州帝大教授	高木市之助外																																						
産靈信仰の研究	慶大・國大教授	折口 信夫																																						
	國大講師	加藤 守雄																																						
アイヌ生活の記述的研究	東亞考古學會	金田一京助外																																						
日本書紀研究の沿革に關する調査研究	教學鍊成所鍊成官	中村 光																																						

	害、漢語漢學の悪用等を中心とする國語醇化に関する博士の意見を聴き、後博士を中心として國語醇化の方速具體化につき懇談午後六時散會した。出席者は近藤教學局長、大岡國語課長、關、湯澤、釘本各監修官、吉田調査官、細井・白石各官補、保科、三宅、長沼各囑託等。
	○南方地名に関する調査（第三號）
	七月十五日（土）陸地測量部より標記の調査書類を寄贈された。
	○國語審議會主査委員會
	七月二十日（木）及二十一日（金）の両日午後一時半より第三會議室に於て「漢語讀方に關する整理案」を議し午後四時散會した。
	○新舊文部大臣の挨拶並訓示
	七月二十三日（日）午後二時五十五分、全省員第一會議室に參集、新舊两大臣の懇切なる挨拶と訓示とを受けた。
	○豫算編成に関する件
	七月二十六日（水）本日豫算編成に關し上司より重要指令あり、國語課に於ても明年度豫算の再検討に着手した。
	○國語課常會
	七月二十六日（水）八月二日（水）八月七日（月）八月九日（水）午後三時より一時間餘、課長室に於て常會を開き、主として決戦下國語浄化指導に關する要綱について協議した。
	○廣田國語調査官歸朝
	曩に大東亞省の依囑により中華民國に出張中の廣田調査官には、八月五日（土）歸朝登省された。
	○決戦下國語の浄化統一促進に関する件
	八月七日（月）午後三時より四時半まで國語課長室に臨時常會を開き、標記の件につき、慎重協議を進めた。
	○海軍々政地域用日本語教科書の編纂
	六月十日（木）海軍々政地域に於て使用すべき特殊教科書の編纂に關し、海軍省より文部省宛至急善處方の依頼状を受理した。
	○在外教育功勞者の表彰
	在外邦人子弟教育協會に於ては、多年異域に在つて黙々として在外邦人の子弟の教育に挺身し、在外同胞をして安んじて其の重責に邁進せしめる為に蔭となつて活躍しつつある多數の在外指定學校教職員中永年勤續し其の功勞顯著なる者を顯賞し其の勞を犒ふこととなり、八月九日大東亞會館に於て文部次官藤野惠氏大東亞省支那事務局局長等關係官列席の下に其の披露式が行はれ、同協會々長岡部前文相が遙か異境の空のもとにある四七八名の功勞者への感謝を披露した。今回表彰される四七八名の内譯は
	◇滿洲國 十年以上一四五名、十五年以上一一三名、三十年以上八三名。
	◇北支 十年以上四一名、十五年以上二四名、二十年以上九名。
	◇中支 十年以上二一名、十五年以上一二名、二十年以上七名。
	◇南支 十年以上七名、十五年以上五名、二十年以上二名。
	◇蒙疆 二十年以上一名。
	◇南洋 十年以上八名。
	○南方教育事情懇談會
	大日本教育會に於ては目下在京中の前田海軍司政官を中心とし、南方行政を擔當して先般文部省に歸任した内山書記官、飯田教學官並びに先般南方を視察した釘本圖書監修官の出席を得南方教育事情を聴取することとなり、八月十二日午後三時より文部大臣官邸に於て二宮文相、藤野次官以下文部省首脳部及び大日本教育會側多數出席の下に懇談會が開催された。
	○「學習日本語」卷二發刊
	南方各地の實情と時局の推移に即應し、新鮮撥刺（マ）たる教材を提供するため、曩に創刊せられた「學習日本語」の卷二が今般本會より發刊せられた。
	○本會會館の新名稱「日本語會館」
	曩に神田區三崎町一丁目二番地ノ三所在の舊三崎會館を買収して移轉を完了した本會は、今般會館名を「日本語會館」と命名した。
	○文部省教學局より本會對する指定研究

卷號（刊行年月日）

	<p>別項所載の如く、今般文部省教學局より本會に對し、「日本語に關する問題」の課題の下に研究を指定せられた。本會研究部に於ては從來の研究を更に促進強化し、大體次の如き豫定を以て研究を行ふこととなつた。</p> <p>一、各國言語政策の研究</p> <p>第一年度 ○佛印に於けるフランスの言語政策 ○比島に於けるアメリカの言語政策</p> <p>第二年度 ○蘭印に於けるオランダの言語政策 ○馬來に於けるイギリスの言語政策</p> <p>第三年度 ○各國言語政策の總的研究</p> <p>二、日本語と各異民族語との關係(三年繼續)</p> <p>○學習者の母國語の日本語學習に及ぼす影響 イ 學習者の誤り易き語音の地域別調査 ロ 學習者の誤り易き語法の地域別調査</p> <p>三、日本語の發音</p> <p>第一年度 ○日本語標準音の實驗音聲學及生理學的研究</p> <p>第二年度 ○日本語標準音と異民族語音との比較研究</p> <p>第三年度 ○學習者の陥り易き訛音矯正法の研究</p>								
	<p>○本會山口主事の轉出</p> <p>昭和十七年三月以來、本會研究部長心得として活躍して來られた主事山口正氏は今回海軍司政官に就任、南方に轉出せられることゝなつた。今後一般文教並に日本語普及における氏の活動は大いに期待される。</p> <p>最近御上京、本會と連絡懇談されし方々の芳名左のごとし。</p> <table border="0"> <tr> <td>マライ軍政監部文教課長</td> <td>勝 呂 司政官</td> </tr> <tr> <td>北京師範大學教授</td> <td>片 岡 良 一氏</td> </tr> <tr> <td>同</td> <td>岡本 千万太郎氏</td> </tr> <tr> <td>同 付屬女子中學校教諭</td> <td>篠 原 利 逸氏</td> </tr> </table>	マライ軍政監部文教課長	勝 呂 司政官	北京師範大學教授	片 岡 良 一氏	同	岡本 千万太郎氏	同 付屬女子中學校教諭	篠 原 利 逸氏
マライ軍政監部文教課長	勝 呂 司政官								
北京師範大學教授	片 岡 良 一氏								
同	岡本 千万太郎氏								
同 付屬女子中學校教諭	篠 原 利 逸氏								
<p>第四卷第十號 1944(昭和19)年10月</p>	<p>彙報 pp. 49-50</p> <p>○文部省總務局涉外課長更迭</p> <p>文部省總務局涉外課長高木覺氏は八月十六日付を以つて總務局附專任教學官に轉任せられその後任には同局總務課長西崎惠氏が兼任課長として就任せられた。</p> <p>○南方派遣日本語教育要員發令</p> <p>本年五月千葉市檢見川帝國大學千葉鍊成道場に於いて實施した南方派遣日本語教育要員養成講習の愛(マ)講者約〇〇名(マ)は八月夫々任官の發令があつたが本月中には現地に勇躍赴任せらるる豫定である。</p> <p>○日本語教科書に對する現地側の希望</p> <p>八月十五日午後一時三十分、馬來軍政監部勝呂文教課長來室、文部省國語課長及釘本監修官と日本語教科書に關し懇談、その際現地馬來側の希望意見をも述べられた。</p> <p>○國語課常會</p> <p>八月十六日、二十三日、三十一日、九月六日、十三日、以上いづれも午前九時半から十一時半まで文部省國語課長室に於て常會を開き、主として外國語地名人名調査整理の件について協議を重ねた。</p> <p>○馬來文教事情</p> <p>八月二十三日正午、日本語教育振興會主催の下に、滯京中の馬來文教課長勝呂司政官を大東亞會館に招請して、午後四時半まで、馬來文教事情を聴取した。文部省より近藤教學局長、大岡國語課長、湯澤、釘本各圖書監修官、大東亞省より相良事務官、陸軍省より郡司司政長官、日本語教育振興會より長沼、西尾各理事及び中島主事が出席した。</p> <p>○溫知新氏歸國</p> <p>八月二十四日長らく滯京中の北京教育總署編審溫知新氏は今度歸國されるに付、挨拶の為來室、大岡國語課長と會見、中華民國との連絡事項について懇談された。</p> <p>○地方長官に賜はりたる御言葉の奉讀式</p>								

卷號（刊行年月日）

八月二十八日午前十時、地方長官に賜はりたる御言葉の奉讀式を全省員參集の下に本省第一會議室に於て舉行。二宮文部大臣御言葉を奉讀し、終つて大臣の時局に關する重要訓示があつて十一時に式を閉ぢた。

○松村圖書監修官補新任

八月二十八日文部省圖書監修官補に新任された松村明氏は今後主として南方向日本語教科書の編纂事務を擔當の豫定である。

○長沼本會常務理事大東亞省囑託就任

財團法人日本語教育振興會常務理事兼總主事文部省囑託長沼直兄氏は今般大東亞省囑託にも就任せられた。

○支那派遣教員第十一回鍊成

支那派遣教員第十一回鍊成は大東亞省の指導の下に興亞教育會及び日本語教育振興會共同主催を以て九月十一日より二十四日まで十四日間施行せられた。一同は神田區一ツ橋大日本教育會一橋寮に合宿し、學科は同區三崎町日本語會館の講堂及び教室で行ひ、一意鍊成に努めた。その要領とする所は次の通りである。

一、大東亞新秩序の顯現に必要な信念、識見、體力を鍊磨し、指導的人物たるの資質を鍊成す。

一、興亞教育家としての實現力を涵養せしむるため合宿訓練を行ふ。

一、日本語教員としての識見並に技術的能力を啓培す。

尚訓育及び學科は次の如く行はれた。

精神訓話	大東亞次官	竹内 新平氏
同	大東亞省支那事務局長	杉原 荒太氏
同	文部省教學局長	近藤 壽治氏
日本精神	文學博士	紀平 正美氏
大東亞史要説民族研究所員		岩村 忍氏
日本對外發展史要説	東大教授	板澤 武雄氏
支那政治事情	大東亞省支那事務局總務課長	堂ノ脇光雄氏
支那經濟事情	大東亞省支那事務局理財課長	秋之 順朝氏
支那文化事情	大東亞省支那事務局司政課長	大澤 長俊氏
支那文化事情	大東亞事務官	相良 惟一氏
大東亞民族問題	民族研究所員	小山 榮三氏
日本教育の動向	文部省總務局總務課長	西崎 惠氏
興亞教育問題	東大助教授	海後 宗臣氏
大東亞戰爭の現況と國民の覺悟	海軍報導部	大宅 大 佐
大陸衛生及救急法	大東亞技師	仁平 弘夫氏
現下國語問題	文部省教學局國語課長	大岡 保三氏
日本語要説	文部省圖書監修官	湯澤幸吉郎氏
日本語教授法要説	日本語教育振興會常務理事	長沼 直兄氏
日本語普及史	文部省圖書監修官	釘本 久春氏
日本語教育の諸問題	東京女子大學教授	西尾 實氏

指導員は興亞教育會主事大東亞省囑託小倉好雄、外務書記生吉田一郎、文部省囑託伊藤夫の三氏である。

第四卷第十一號
1944(昭和19)年11月

彙報 p. 40

○教育職員の外國及び外地派遣に就いて

今般文部省に於いては滿洲國及び中華民國に在る日本人學校へ派遣する教育職員を詮衡推薦せしむべく都道府縣に之が要員を配當した。現在公立學校に奉職中の方であつて希望の向は關係道府縣廳の教學課又は學務課に出頭し、詳細手續方を問合せられたい。現在公立學校に奉職し居らざる方で、就職希望の向は文部省總務局涉外課に照會せられたい。

現在支那に於いては物価が内地に比し、非常に高いが、現地關係官廳の盡力に依り、何等不自由のない程度の収入が支へられ、必需物資の配給も廣範圍に行はれて居る。又滿洲國に於いても同様、物価等に比し相當額の手當等が支給せられ、物資の入手も容易であるから、安んじて外國在留邦人子弟の教育に盡瘁することが出来る故、有為の人士の進んで職に就かれんことを希望して止まない。

○國語に關する調査囑託新任

	<p>九月七日附を以て鹽田紀和氏に對し、國語に關する調査囑託の發令があり九月二十二日教學局長から辭令を交附された。同氏は今後主として支那向日本語教科書の編纂に従事する豫定である。</p>
	<p>○軍人勅諭の読み方に關する質疑</p>
	<p>九月二十五日午後二時教育總監部附陸軍教授西内雅氏來訪、國語課長に會見して、軍人に賜はりたる勅諭の読み方について種々質疑の後、四時過ぎ退出された。</p>
	<p>○海軍地區用日本語教科書の編纂</p>
	<p>曩に海軍省南方政務部長より教學局長宛、海軍々政地域用日本語教科書の編纂に關し依頼狀を寄せられたのに對し、回答案經伺中の處、二十一日文部次官の決裁を経たので、九月二十六日右に關しては本省に於て目下準備中の旨を回答した。</p>
	<p>○國語課常會の新運営</p>
	<p>十月十一日午前十時より十一時四十分まで國語課長室に於て常會開會、保科囑託より常會の運営につき意見の開陳があつた。即ち格別の議題の無い時は當番幹事その擔當事業の現況について説明し之を中心として各自所見を開陳し研究を加へるやう致し度、從來とても各擔當官の事業進捗狀況の報告、説明はあつたが今後は一層研究的雰囲気にならうと行ひ、常會をより有意義なる會合たらしめたいとの意見で、一同異議なく可決。さし當り此の日の當番幹事釘本監修官より日本語教科書の編纂狀況について説明があつた。</p>
	<p>○本會役員更迭</p>
	<p>本會副會長菊池豐三郎氏は文部次官を退官せられたため、副會長を辭任せられ、文部次官藤野惠氏が新に副會長の任に就かれた。菊池氏には多年日本語普及並に日本語教育振興のために盡瘁せられ、その功績の多大なる誠に感謝に堪へぬ次第である。今後は本會顧問として、引續き御盡力下さることとなつたのは、斯道のため大に喜ぶべきことである。又本會副會長山本熊一氏は今般全權大使に榮轉し、泰國に赴任せられたため、副會長を辭任せられ、新に大東亞次官竹内新平氏が副會長の任に就かれた。山本氏にも今後顧問を御委嘱し、引續き御盡力を願ふこととなつてゐる尚柴沼直氏は文部省體育局長に榮轉せられたため監事を辭任せられ、新に會計課長伊藤日出登氏が監事に就任せられた。</p>
	<p>○本會事務所移轉披露</p>
	<p>曩に東京都神田區三崎町一丁目二番地に本部事務局を移轉した本會は、財團法人設立の挨拶を兼ねて、十月十八日午前十時より左の次第を以て、移轉披露會を開催した。</p> <p>國民儀禮 開會の辭（近藤理事長） 事業報告（長沼常務理事） 會長挨拶 來賓祝辭（永井文部省總務局長） 萬歲三唱（菊池豐三郎氏發聲） 閉會の辭（長沼常務理事）</p> <p>終つて、晝餐を共にし、來賓より種々高話を拝聴し、まことに盛會であつた。當日來臨せられた方々は約百名に及んだ。尚文部省内の事務所は従前の通りである。</p>
<p>第四卷第十二號 1944(昭和19)年12月</p>	<p>彙報 p.37</p>
	<p>○内地以外の地域に於ける學校の生徒・児童卒業者等の他の學校へ入學及轉學に關する文部省令改正</p>
	<p>南方諸地域中陸軍の行ふ占領地軍政施行地域内に於いて本邦人子弟の教育の爲設置した學校は、陸軍省在外指定學校として本年一月二十日より夫々指定されることとなつたが、今般文部省に於いて其の指定學校に在學する児童及び同校卒業者に對し他の學校への入學及び轉學の關係につき、内地の學校に在學する生徒、児童及び同校卒業者と同一の取扱を爲す如く文部省令を改正し十月二十六日之を公布した。故に今後は南方占領地にある陸軍省在外指定學校の生徒児童及び同校卒業者は内地の中等學校、國民學校へ自由に入學又は轉學出来るやうになつたのである。</p>
	<p>○國語審議會主査委員會</p>
	<p>十月十九日午後一時半から四時過まで文部省第三會議室に於て南會長以下各主査委員出席、前から續けてゐる漢語の整理について協議した。</p>
	<p>○國語課研究會</p>
	<p>十月二十日午後一時半より五時まで民族研究所員岩村忍氏を招聘して、文部省第三會議室に</p>

卷號（刊行年月日）																																																	
	<p>於て回教事情に関する講演を聴いた。</p> <p>○白石圖書監修官補出張 十月二十三日より六日間白石圖書監修官補に對し日本語教科書編纂資料収集に関する用務を帯び岡山香川愛媛三縣下に出張を命ぜられた。</p> <p>○南方向教科書編纂打合せ 十月二十六日午後二時から文部省國語課長室に開會、十名の編纂委員並に大岡國語課長、湯澤、釘本各監修官出席、午後五時閉會した。</p> <p>○海軍主擔當區域向教科書編纂打合せ 十月二十七日午後五時から海軍主擔當地域向日本語教科書編纂に関する打合會を日本語會館に於て開催、海軍側から南方政務部の林大佐以下四名、文部省側から近藤教學局長以下五名、日本語教育振興會から長沼常務理事以下五名出席、懇談の後七時半散會した。</p> <p>○海軍主擔當地域用日本語教科書編纂費 標記の編纂に要する經費については豫てから本年度第二豫備金よりの支出方を交渉中の處、十月二十八日大藏省に於て承認査定され次で十一月四日閣議上程、可決確定した。</p> <p>○大岡國語課長出張 十一月二日より十日間學徒動員本部視察委員として勤勞學徒の狀況視察の為四國地方に出張せられた。</p> <p>○南方及海軍地區教科書編纂會議 十一月六日午前十時半より南方地域向教科書の編纂會議を文部省國語課長室に於いて開く。午後一時半より海軍主擔當地域向教科書の打合會を同じく國語課長室に開き、南方政務部から柴田中尉が出席され五時閉會した。</p> <p>○國體護持に関する國民教化方策懇談會 十月二十六日午後一時より文部省大臣官邸に於て、文部省主催の下に、同省關係三十團體の幹部參集し、國體護持に関する國民教化方策懇談會が開催せられた。文部省より藤野文部次官、近藤教學局長、其の他關係官出席せられ、本會よりは中島主事之に出席し、中央教化團體聯合會會長野村吉三郎氏を座長に推し、決戦下國民教化に関する根本目標及具體的方策に就て種々協議を行つた。</p>																																																
第五卷第一號 1945(昭和20)年1月	<p>彙報 p. 49</p> <p>○國史編修事業の整備 昨年八月國史編修の準備に關し閣議の決定を見、同年十月國史編修準備委員會が設置せられたが、同委員會は文部大臣の諮問に對して過般國史編修準備に關し實施上留意すべき重要事項に關する答申をしたのである。爾來この答申に基いて文部省に於いて着々準備を進めて來たが、差當り文部省に臨時職員として國史編修官七名(内勅任一名)、國史編修官補六名、屬二名を置き國史編修に關する企畫並に史科の調査及蒐集に當らしむることとなり、十二月十五日勅令が公布せられた。又國史編修準備委員會は一應其の目的を達成したので之を廢止し、新に文部大臣の諮問に應じて國史編修に關する企畫並に史科の調査及蒐集に關する重要事項を調査審議する為、同日國史編修調査會が設置せられ委員が任命せられた。同調査會の會長は文部大臣で委員は左の通りである。</p> <table data-bbox="507 1541 925 1937"> <tr> <td>宮内次官</td> <td>男爵</td> <td>白根</td> <td>松介</td> </tr> <tr> <td>内閣書記官長</td> <td></td> <td>田中</td> <td>武雄</td> </tr> <tr> <td>法制局長官</td> <td></td> <td>三浦</td> <td>一雄</td> </tr> <tr> <td>總合計畫局長官</td> <td></td> <td>植場</td> <td>鐵三</td> </tr> <tr> <td>情報局次長</td> <td></td> <td>三好</td> <td>重夫</td> </tr> <tr> <td>外務次官</td> <td></td> <td>澤田</td> <td>廉三</td> </tr> <tr> <td>内務次官</td> <td></td> <td>山崎</td> <td>巖</td> </tr> <tr> <td>神祇院副總裁</td> <td></td> <td>飯沼</td> <td>一省</td> </tr> <tr> <td>大藏次官</td> <td></td> <td>松隈</td> <td>秀雄</td> </tr> <tr> <td>陸軍次官</td> <td></td> <td>柴山</td> <td>兼四郎</td> </tr> <tr> <td>海軍省教育局長</td> <td></td> <td>大西</td> <td>新藏</td> </tr> <tr> <td>文部次官</td> <td></td> <td>藤野</td> <td>惠</td> </tr> </table>	宮内次官	男爵	白根	松介	内閣書記官長		田中	武雄	法制局長官		三浦	一雄	總合計畫局長官		植場	鐵三	情報局次長		三好	重夫	外務次官		澤田	廉三	内務次官		山崎	巖	神祇院副總裁		飯沼	一省	大藏次官		松隈	秀雄	陸軍次官		柴山	兼四郎	海軍省教育局長		大西	新藏	文部次官		藤野	惠
宮内次官	男爵	白根	松介																																														
内閣書記官長		田中	武雄																																														
法制局長官		三浦	一雄																																														
總合計畫局長官		植場	鐵三																																														
情報局次長		三好	重夫																																														
外務次官		澤田	廉三																																														
内務次官		山崎	巖																																														
神祇院副總裁		飯沼	一省																																														
大藏次官		松隈	秀雄																																														
陸軍次官		柴山	兼四郎																																														
海軍省教育局長		大西	新藏																																														
文部次官		藤野	惠																																														
	<table data-bbox="486 1937 925 2038"> <tr> <td>東京帝國大學總長</td> <td>内田</td> <td>祥三</td> </tr> <tr> <td>京都帝國大學總長</td> <td>羽田</td> <td>亨</td> </tr> <tr> <td></td> <td>竹越</td> <td>與三郎</td> </tr> </table>	東京帝國大學總長	内田	祥三	京都帝國大學總長	羽田	亨		竹越	與三郎																																							
東京帝國大學總長	内田	祥三																																															
京都帝國大學總長	羽田	亨																																															
	竹越	與三郎																																															

卷號（刊行年月日）

	<p>西田直二郎 山田 孝雄 中村 孝也 平泉 澄 内ヶ崎作三郎 伯爵 酒井 忠正 侯爵 佐佐木行忠 龍 肅 矢野 仁一 辻 善之助 安岡 正篤</p>
	<p>○南方地域向教科書編纂委員</p> <p>今般、長沼直兄氏外二十六名に對し、十一月二十九日付を以て、文部省より、本年度南方地域向教科書委員任命の發令があつた。</p>
	<p>○大東亞地圖編纂に關する委員會</p> <p>大東亞省監修の下に、本會に於て大東亞掛圖を編纂することになつたので、該地圖に記載する地名等の呼稱、表記等に關する委員會が、十一月二十一日及び十二月四日の兩日文部省教學局國語課長室に於て開催せられた。 委員は左の諸氏である。</p> <p>相 良 大東亞事務官 米内山 外務書記官 大 岡 文部省國語課長 渡 邊 文部省圖書監修官 松 尾 文部省圖書監修官 白 石 文部省圖書監修官補 内 田 東京文理科大學教授 辻 村 東京帝國大學助教授 多 田 東京帝國大學助教授 飯 本 東京女子高等師範學校教授 青 野 東京女子高等師範學校講師 松 本 慶應大學教授</p>
	<p>○朝鮮に於ける國語教育</p> <p>十二月二十八日午後一時より本會に於て朝鮮總督府編修官森田梧郎氏を聘して朝鮮に於ける國語教育事情について講演を聽き、終つて同氏を中心として主事、研究員一同同事情について座談會を開催した。</p> <p>最近御上京本會と連絡懇談されし方々の芳名左のごとし。 北京師範大學付屬女子中學教諭 篠原 利逸氏 朝鮮總督府編修官 森田 梧郎氏 前蒙疆教學官 岩永 胖氏 前海軍司政官 久保田秀麿氏</p>

2-3 日本語教育振興会 会議録 (1941年8月25日—1945年12月27日)

會議名・年月日・時・場所	(本文)
日本語教育振興會設立準備委員會 昭和十六年八月二十五日(月)午後一時 於 文部省圖書局長室	日本語教育振興會準備委員會出席者 松尾圖書局長 大岡國語課長 關野事務官 釘本監修官 西尾囑託 長沼囑託 大志萬囑託 議 題 一、本會規則ノ件 一、本會役員及職員人選ノ件 一、本會庶【處】務規定ノ件 一、理事ノ擔當事項ニ關スル件 一、本會各部ノ事務細則作成ニ關スル件 一、本會設立ニ伴フ事務打合ノ件
日本語教育振興會第二回事務打合會 昭和十六年九月十七日(水) 於 文部省第二會議室	(議題) 一、會計細則ノ件 二、實行豫算ニ關スル件 第二回事務打合會出席者 松尾理事長 關野興亞院事務官 西尾總主事 大志萬興亞院囑託 伊藤主事 柴沼監事 橋本主事 小林理事 宮内主事 大岡常任理事 鈴木主事 釘本常任理事 眞下書記 長沼理事 上村書記 安田書記 林 書記 岩崎書記 福田研究員 渡邊美恵子
(第三回 欠)	
第四回打合會要項 (昭和十六年)十月三日 午後二時半開會、同四時閉會 於 文部省國語課長室	一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 大志萬理事 長沼理事 西尾總主事 宮内主事 鈴木主事 鶴田屬(マ) 一、配布書類 日本語教育振興會委任事項(案) 一、打合要項 (一) 日本語教育振興會委任事項ニ關スル件 1 日本語教育振興會委任事項(案)ニツキ逐條審議決定ス。 2 右條文中ニ於ケル「圖書」トハ、本會刊行以外ノ書籍・雜誌等ノ刊行物ヲ斥【サ】シ、「出版物」トハ専ら本會刊行ニカカルモノヲ斥ス。 一、右打合會ニ引續キ、松尾理事長・大岡常任理事・釘本常任理事・大志萬(マ)理事・長沼理事・西尾總主事、「日本語教育振興會研究調查事項」ニツキ審議シ、次回ニ於テ早速實行ニ著手スベキ具體案ニツキ協議スルコトトス。 以上
日本語教育振興會第一回常任理事會 昭和十六年十月十五日(水) 自午後三時二十分至同六時 於 文部省國語課長室	一、出席者 松尾理事長 關野常任理事 田中理事 大岡常任理事 釘本常任理事 長沼理事 西尾理事兼總主事 一、配布書類 (一) 日本語教育振興會研究調查豫定案(但、昭和十六年度) (二) 雜誌「日本語」昭和十六年十一月號、十二月號、昭和十七年一月號編輯企畫案 一、協議打合要項 (一) 本會刊行圖書・雜誌所要用紙配給申請等ニ關スル件 1 ハナシコトバ學習指導書ハ下卷刊行(3,500部)準備用紙ヲ一時流用シテ上卷1,000部、中卷500部印刷、下卷ハ不取敢2,000部刊行シ、用紙請求ノ上各卷共7,500部宛印刷スルコトトス。 2 日本語讀本卷二、卷三刊行所要用紙ハ已ニ東亞同文會ニ於テ申請ヲ了シ、割當數量2,616連(内845連ハ請取濟)ノ權利ヲ保有セルヲ以テ、之ヲ本會ニ引繼グ手續ヲ速カニ行フコト。 3 文化讀本(大學生ノ生活)刊行所要用紙配給方申請ノコト。 4 「日本語」刊行所要用紙配給申請手續ヲ取急グコト。 右ニ關シ、本會ガ文部省ノ外郭團體タル證明申請手續ヲモ併セ行フコト。 (二) 「研究調查豫定案」ニツキ長沼理事ヨリ詳細説明アリ、各項ニツキ審議ス。 (日語文化協會ヨリ引繼ノ研究物「日本語教授法要綱」刊行ニツキテハ、本會ニ於テ考慮ノ上必要アラバ適當ニ修正シ刊行スルヲ可トスルコト、及ビ之ガ為

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>ニハ發行ニツキ多少ノ時日ノ猶豫ヲ興亞院ニ於テモ認メルコト)</p> <p>(三) 用紙配給申請ニ關連シテ普及部事業案ニツキ、編纂ノ主眼、刊行物ノ種目等ニ關シテ西尾總主事ヨリノ協議アリ。</p> <p>イ、本年度ハ主トシテ程度ノ低キヲ目指シ、來年度ハ稍々高キ程度ヲネラフ。</p> <p>ロ、掛圖 (但、現行ノ分ヲモ併セ利用スルコト) ・繪本・童話讀物・幼稚園向カード類・寫真帳・繪入唱歌ノ本、其ノ他。</p> <p>是等ハ何レモ教科書ノ補助ノ使用ヲ豫定シ、副讀本トシテノ性格ヲ持タシムルコト。</p> <p>(四) 日語文化教【協】會ヨリ、同協會ニ於ケル支那人ニ對スル日本語ノ普及振興ニ關スル事業竝ニ之ニ關スル財産引繼ニ關スル件</p> <p>明日十六日、文部省國語課長室ニ於テ興亞院事務官關野房夫氏立會ノ上、標記引繼ヲ行フコト。</p> <p>(五) 雜誌「日本語」編輯計畫 (本年十一、十二月號、昭和十七年一月號) ニツキ釘本常任理事ヨリ詳細説明アリ、審議決定。</p>
<p>第二回常任理事會 (昭和十六年) 十月二十日 自午後一時至同四時半 於 興亞院文化部長室</p>	<p>一、出席者</p> <p>榎谷常任理事 關野常任理事 大志万理事 田中理事 大岡常任理事 釘本常任理事 長沼理事 西尾理事兼總主事</p>
	<p>一、財團法人日語文化協會ニ於ケル支那人ニ對スル日本語ノ普及振興ニ關スル事業竝ニ之ニ關スル財産引繼ニ關スル件</p> <p>前記ノ本會役員及ビ日語文化協會主事松宮一也氏、立會官吏關野興亞院事務官出席、午後二時、曩ニ十月十六日付ヲ以テ引繼ヲ了シタル書類ニ會長印ヲ押捺ス。引繼事務ハ全ク完了ス。</p>
	<p>一、協議打合事項</p> <p>(一) 研究調査豫算案ニ關スル件</p> <p>長沼理事ヨリ各研究調査項目ニ付逐條説明アリ。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 本案ニ於ケル研究調査題目ハ夫々支那ニ對スル日本語ノ普及竝ニ日本語教育ノ振興上必須ニシテ可及ノ速ニ着手ノ必要アルコトヲ確認シタリ。 2 尚本研究ハ日本語教材 (教科書・教育資料等) 作成上ノ資料トシテ必須ナルコトヲ確認ス。 3 研究調査ノ成果ハ之ヲ刊行スルコトトス。 <p>(二) 日本語讀本卷一配送頒布ニ關スル件</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 興亞院宛至急配送先ノ指令伺出ノ手續ヲトルコト。 2 第一版 (四萬五千部) 分ハ興亞院各連絡部ノ所要部數ヲ見本トシテ無料頒布ノコトトス。 <p>其ノ後ノ分 (五萬五千部) ハ配給會社ヲシテ取扱ハシムルコトトシテハ如何ノ議アリ。頒布定價ハ追而決定ノコト。</p> <p>尚占據地用トシテ相當豫備部數ヲ保有シオクコト。</p> <p>(三) 其ノ他</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 青年文化協會黑野政市氏ヨリ西尾總主事宛日本語教師養成講習會開催ニツキ援助方申出アリ。之ニ對シテハ、各團體ニ委囑スベキ研究調査又ハ講演・講習會等ニツキテハ目下計畫立案中ノ旨回答ノコトトス。 2 釘本常任理事ヨリ機關誌刊行ニ關シ日本出版文化協會へ加入スル必要アル旨説明アリ。同會へ加盟手續ヲトルコトニ決定。 3 本會刊行物ヲ在外關係公館ニ送附スルコト。 4 機關誌「日本語」ヲ興亞院派遣教員 (約五百名) ニハ直接配送スルコトトス。 5 次回ハ本月二十五日 (土) 午前十一時ヨリ文部省ニ於テ開催ノコト。
<p>第三回常任理事會 (昭和十六年) 十月二十二日 自午後二時至同四時五十分</p>	<p>一、出席者</p> <p>松尾理事長 關野常任理事 大志万理事 大岡常任理事 釘本常任理事 長沼理事 西尾理事兼總主事</p> <p>一、協議打合事項</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
於 文部省國語課長室	<p>(一) 松尾理事長ヨリノ協議事項 青年文化協會東南アジア學院教頭黒野政市氏ノ申出トシテ、京都・福岡・東京ノ各地ニ於テ十二月末ヨリ一月初旬ニ亘リ日本語教師養成講習會開催ニ關シ本會ノ協力ヲ求メ來レル旨報告ノ後、方法ニツキテハ十分考究ノ上、協力ノ實ヲ舉ゲタシトノ希望アリ。 理事長ガ本會顧問青年文化協會理事長河原春作氏ト電話ニテ打合セノ結果、同協會主事秋葉氏ノ來訪ヲ求メ、本會側ト種々打合セヲナサシムルコトトセリ。同協會トノ打合事項ノ内容ニツキテハ種々協議ノ結果大體左ノ如ク決定、大岡常任理事ヨリ交渉ノ筈。</p> <p style="text-align: center;">記</p> <p>一、 本會指導部ノ事業タル日本語教師養成講習ノ企畫ニツキテハ大體二種類ニ分チ第一種ハ長期ニ亘ル本格的講習會トシ、第二種ハ短期ノ速成ノ性格ヲ有スル講演會トス。 青年文化協會ノ申出ニ關シテハ、本會トシテハ之ヲ第二種ノ性格ヲ持つモノト認メ、此ノ際トシテハ此ノ種講演會ノ一元的統制ヲ圖リ關係團體ノ事業調整ノ意味ニ於テ、本會及ビ青年文化協會・日語文化協會三團體ノ合同主催トスル方針ノ下ニ秋葉主事ト交渉ノコト。</p> <p>(二) 釘本常任理事ヨリノ協議事項 松宮彌平氏、本日松尾理事長ヲ訪ネ、研究調査ソノ他事業ニツキテモ委囑ヲ受ケタシト希望シ來リシ旨報告アリ。此ノ點ニ關シ、前項ノ如ク講演會ヲ合同主催セシムルノ外、研究委囑ノ具體案ニツキテモ適當ニ考慮セラレタキ旨、及ビ可及ノ速ニ全理事ヲ招集シ理事會ヲ開催セラレタキ旨提言アリ。</p> <p>(三) 理事會開催ニツキ取急ギ準備スルコトニ決定。 イ、右ノ理事會ニ於テハ、本會ノ事業ノ説明、殊ニ關係團體ノ事業調整ニ當リタキ旨ヲ本會側ヨリ説明、ソノ趣旨ノ徹底ニ努ムルコト。 事業ノ委囑ソノ他ノ調整ノ方法ニツキテモ協力ヲ求ムルコト。 ロ、右ノ目的ノタメ各團體旅【施】行中ノ事業ニツキ報告ヲ求ムルコト</p>
<p>第四回常任理事會 (昭和十六年)十月二十五日 (土) 自午前十一時二十分至午後二時 於文部省第二會議室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 榎谷常任理事 關野常任理事 大志万理事 平松書記 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾理事兼總主事 長沼理事兼主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>(一) 日本語教育振興會資料作成案 (二) 指導部事業遂行ニ關スル件 (三) 日本語讀本卷一配布先及部數 (四) 日本語教育振興會普及部事業計畫(案)</p>
	<p>一、協議要項</p> <p>(一) 研究部事業ノ企畫竝遂行ニ關スル件 「日本語教育振興會資料作成案」ニツキ長沼理事兼主事ヨリ詳細説明アリ。逐條審議ノ上、出席ノ各理事何レモ此ノ企畫ノ重要ナル意義ヲ確認シ、本立案ノ方針ニ據ツテ事業ヲ進捗スルコトトス。但助成金ニ關シテハ興亞院ノ都合上、出版費・事務費・人件費以外ノ流用支出及研究費ノ支出ニツキテハ一應興亞院ノ承認ヲ得ル手續ノ必要アリ、助成金下附セラレテ後ハ本會ニ於テ右ノ手續ヲ適當ニトルコトトセリ。 尚、此ノ事業ノ成果ハナルベク三月末迄ニ刊行ヲ了スルヤウ努力スルコトヲ申合セタリ。</p> <p>(二) 指導部事業ノ企畫ニ關スル件 「指導部事業遂行ニ關スル件」ニツキ大志万(マ)理事ヨリ詳細説明アリ、逐條審議決定。 1 本會及ビ財團法人青年文化協會及財團法人日語文化協會トノ共同主催ニヨリ短期講習會ニツキテハ取急ギ準備ニ著手スルコトトス。 2 本會独自ノ企畫ニ依リ、本會单独主催ノ講習會終了者ニ對シテハ何等カノ特典ヲ附與シタキコト、</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)																												
	<p>3 本會主催ノモノト他團體トノ共同主催ノモノトヲ問ハズ講習終了者トノ聯絡ニツキテハ、機關誌「日本語」ヲ中心トスル會員組織ノ方法ヲモ考慮スルコト、等ノ意見アリ。</p>																												
	<p>(三) 教科書用圖書ノ頒布方法ニ關スル件 「日本語讀本卷一配布先及部數」ニツキ關野常任理事ヨリ内示アリ。</p>																												
	<p>(四) 雜誌「日本語」ノ發行ニ關スル件 1 釘本常任理事ヨリ發行日ヲ嚴守スベキ狀況トナリ、且印刷所ノ【仕事】輻【輳】等ノタメ雜誌「日本語」十一月號休刊ノ止ムヲ得ザル旨説明アリ、右休刊ト決定。 2 尚、新年號ヨリハ、主ナル處ヘハ寄贈トスルモ、他ハ有料トスルガ至當ナリ等ノ意見アリ。配布ノ方法ニ關シテハ次回ニ於テ協議スルコトトス。 3 安藤顧問ヲ招待シ座談會開催ノ計畫アル旨ヲ報告シ贊成ヲ得タリ。</p>																												
	<p>(五) 普及部事業ノ企畫ニ關スル件 「日本語教育振興會普及部事業計畫(案)」ニツキ西尾理事兼總主事ヨリ詳細説明アリ、逐條審議決定。 尚、定價ヲ廉クスルコト、又本年度ハ一種類ヲ多量ニ刊行スルヨリモ寧ロ各種ニ亘ツテ種々刊行スルヲ可トスル等ノ意見アリ。</p>																												
	<p>一、閉會後、引續キ文部省國語課長室ニ於テ、榊谷常任理事・關野常任理事・大志万理事・大岡常任理事・釘本常任理事、西尾理事兼總主事・長沼理事兼主事、左ノ諸件ニツキ協議ス。(自午後二時四十分至同四時十分)</p>																												
	<p>(一) 大講演會開催ニ關スル件 1 目的 本會創設ノ趣旨□□宣傳ヲ主眼トス。 2 場所 十一月下旬東京ニ於テ開催ノコト。 3 講師 橋田會長・及川總務長官心得・長谷川如是閑・佐藤春夫諸氏ノ講演。 4 其ノ他 映畫。支那事情紹介映畫及適當ナル劇映畫。</p>																												
	<p>(二) 短期講習會開催ニ關スル件 1 目的、2 會場及會期、3 聽講者等ニツキテハ「指導部事業遂行ニ關スル件」中ニ擧ゲラレタル通ナレドモ、主催ニ關シテハ飽クマデモ本會ガ主體性ヲ保チ本會トシテ企畫案ヲ持ツテ青文協、日文協ト接衝ノ上適當ニ之ヲ具體化スルコトトセリ。</p>																												
	<p>5-【42】講師及題目ニ關スル決定。</p> <table border="1" data-bbox="582 1332 1380 1568"> <thead> <tr> <th>(題目)</th> <th>(東京)</th> <th>(京都)</th> <th>(福岡)</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>東亞新秩序ト文教</td> <td>松村素</td> <td>松尾長造</td> <td>松尾長造</td> </tr> <tr> <td>東亞ニ於ケル日本語</td> <td>大岡保三</td> <td>大岡保三</td> <td>關野房夫</td> </tr> <tr> <td>國語教育ト日本語教育</td> <td>西尾實</td> <td>釘本久春</td> <td>高木市之助</td> </tr> <tr> <td>日本語教授法</td> <td>松宮一也【弥平】</td> <td>長沼直兄</td> <td>黒野政市</td> </tr> <tr> <td>日本語標準語法</td> <td>湯澤幸吉郎</td> <td>吉澤義則</td> <td>佐久間鼎</td> </tr> <tr> <td>東亞事情</td> <td>興亞院側</td> <td>同上</td> <td>同上</td> </tr> </tbody> </table>	(題目)	(東京)	(京都)	(福岡)	東亞新秩序ト文教	松村素	松尾長造	松尾長造	東亞ニ於ケル日本語	大岡保三	大岡保三	關野房夫	國語教育ト日本語教育	西尾實	釘本久春	高木市之助	日本語教授法	松宮一也【弥平】	長沼直兄	黒野政市	日本語標準語法	湯澤幸吉郎	吉澤義則	佐久間鼎	東亞事情	興亞院側	同上	同上
(題目)	(東京)	(京都)	(福岡)																										
東亞新秩序ト文教	松村素	松尾長造	松尾長造																										
東亞ニ於ケル日本語	大岡保三	大岡保三	關野房夫																										
國語教育ト日本語教育	西尾實	釘本久春	高木市之助																										
日本語教授法	松宮一也【弥平】	長沼直兄	黒野政市																										
日本語標準語法	湯澤幸吉郎	吉澤義則	佐久間鼎																										
東亞事情	興亞院側	同上	同上																										
	<p>(三) 大日本興亞同盟ニ入會スルコト。 以上</p>																												
<p>第五回常任理事會 (昭和十六年)十一月七日 (金)自午後三時至同五時 四十分 於文部省國語課長室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 關野常任理事 大志万理事 興亞院囑託杉浦齋【齊】氏 平松書記 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾理事兼總主事 長沼理事兼主事</p> <p>一、配布書類 昭和十六年度資料作製實行案</p> <p>一、協議要項 (一) 研究部事業ノ遂行ニ關スル件 「昭和十六年度資料作製實行案」ニツキ 長沼【同部】主任ヨリ詳細説明アリ。逐條審議決定。 尚、作製費ノ支出ニツキテハ興亞院ノ承認ヲ得ル必要アルニヨリ、至急右ニ關スル手續ヲナシ、實行方法ニツキテハ部主任・大岡常任理事・及ビ西尾總主事ニ於テ協議進捗ノコト。</p>																												

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>(二) 普及部事業ノ遂行ニ關スル件 西尾同部主任ヨリ目下進行狀態ノ報告アリ。 尚、繪本ノ大キサハ其ノ性質ニヨリテ四六倍版或ハ四六版トシ參考資料ハ取 急ギ購求蒐集スルコトニ決定。</p> <p>(三) 指導部事業ノ遂行ニ關スル件 大志万同部主任ヨリ、青年文化協會 (黒野政市氏) ・日語文化協會 (松宮一 也氏) ト協議シタルトコロ衷心ヨリ協力ノ實ヲ舉ゲタシトノ希望アリシ旨報 告アリ。 短期講習會ハ大體原案通り開催スルコトトス。(但、東京開催ヲ省ク) 長期 講習會開催ハ東京ノミトシ、講師・題目・時日等ニツキテハ大志万主任原案 作成ノウヘ協議ノ筈。 ○松宮・黒野兩氏ハ「昭和十六年度日本語教育振興會講習會事務囑託」トシ テ協力ヲ求ムルコト。 ○長期講習會ハ文部省後援トシ、講習會終了者ニハ何等カノ特典附與ヲ考慮 スルコト。</p> <p>(四) 役員委囑ニ關スル件 關野常任理事ヨリ、興亞院ニ於ケル事務分擔ニ變更アリタルニツキ大志万理 事ノ後任トシテ興亞院囑託杉浦齋【齊】氏ヲ本會理事ニ委囑セラレタキ旨提 案アリ。(但、大志万理事ハ講習會開催準備等ノ關係上、暫時指導部主任留 任ノコト。) 釘本常任理事ヨリ、文部省國語調査官廣田榮太郎氏、日本出版文化協會業務 局長田中四郎氏、興亞院華北連絡部文化局長代理別所書記官ヲ本會役【評議】 員トシテ委囑セラレタキ旨提案アリ。 杉浦・廣田・田中・別所四氏、及ビ新タニ教科【用圖】書調査會委員ニ任命 セラレタル【栢】原依郎氏ヲ、何レモ本會評議【役】員トシテ委囑ノ手續キ ヲトルコトトス。</p>
	<p>(五) 其ノ他</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 關野常任理事ヨリ、興亞院各連絡部長官及ビ文化局長、其ノ他臺灣・滿洲・ 南洋等關係方面各長官宛、本會創設ノ趣意ヲ陳ベ援助協力ヲ得度キ旨ノ捺 摺狀ヲ發送スベキ必要アル旨ノ提案アリ。至急捺摺狀ヲ發送スルコトト ス。 2 釘本常任理事ヨリ、全理事會開催準備ニツキ報告アリ。可及的速カニ開催 スルコトトス。 3 西尾理事兼總主事ヨリ、日本語讀本卷一發送ノ件ニ關シテ協議アリ。(讀 本ハ本月八日出來上ル豫定) A 發送ノ都合上、本會ヨリ興亞院ヘ寄贈ノ形ヲトリ興亞院ヨリ發送ノ名儀 トスルコト。 B 便船ニツキテハソノ都度興亞院平松書記ヨリ通知ヲ受クルコト。 4 雜誌「日本語」ノ發送ニツキテハ、(一) 購讀者ニ直送、(二) 興亞院各 連絡部ヘ送達、(三) 直接現地書店ニ取扱ハシムル等ノ方法ニヨリ適當考 究ノコトトス。 教科書頒布ニツキテハ、本會保管分中約五千部内外ヲ殘シ他ノ殘分ハ現地 書店ニ取次販賣 セシムルコト、右頒布定價ハ追而立案協議ノコトトス。 5 本會今後ノ經營ニ關シ、基金募集等ニツキテノ意見發表アリ。 <p style="text-align: right;">以上</p>
<p>第六回常任理事會 (昭和十六年) 十二月二十 三日 (火) 自午前十一時半 至午後二時 於文部省圖書局國語課長室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 榎谷常任理事 關野常任理事 田中理事 杉浦理事 平松書記 大岡常任理事 釘本常任理事 松下理事 西尾理事兼總主事 長沼理事兼主事</p> <p>一、配布書類 (一) 議案 (二) 報告要項</p> <p>一、協議打合要項 (一) 時局ノ進展ニ備フベキ事業及ビ事務 (議案第一號)</p>

會議名・年月日・時・場所 (本文)

東亞ノ新情勢ニ對應スベキ諸法案ニツキ協議。

1 政策方面

- イ、陸海軍、拓務當局トノ連絡 (教科書ノ現地送附)
- ロ、情報局・報道部等關係官トノ連絡
- ハ、國際文化振興會トノ折衝
- ニ、關係官ノ現地派遣
- ホ、南方進出研究會開催

2 資料方面 (必ズシモ本會ニ於テ編纂スルヲ要セズ)

- イ、速成自習書 (英佛文ニテ書ケル教材竝ニ文法解説)
- ロ、會話書 (初歩及ビ中級)
- ハ、成人用教材
- ニ、ラジオ放送用教材ノ作成
- ホ、蓄音器レコードノ作成及ビ文句カード
- ヘ、英及佛日辭典 (主トシテ會話用)
- ト、日本寫眞帳

(二) 明年度事業計畫竝ニ豫算立案ニツイ(マ)ノ方針 (議案第二號)
専ラ總主事ニ於テ立案ノウヘ協議スルコトトス。(一月中)

(三) 教授資料作製【成】委囑ニ關スル件 (議案第三號)

左記教授資料作成決定。

- 一、入門期及ビ初學年ノ指導法
- 一、聽方及ビ話方指導法 日語文化協會

(松宮彌平)

費用概算 金2,000圓

- 一、内地留學生ニ對スル日本語教授法 東南アジア學院

(小川健二)

費用概算 金 300圓

- 一、テニヲハの教授法 國際學友會

(岡本千万太郎)

費用概算 金 300圓

- 一、蒙人ニ對スル教授法 善隣協會

費用概算 金 300圓

一、報告事項

(一) 用紙配給申請ノ經過 (釘本常任理事)

本會所要用紙ハ之ヲ一括シテ直接商工省纖維局長ニ對シ配給方申請手續ヲトルニ至リタル經過。

(二) 各部事業

1 庶務部・會計部 (西尾理事兼總主事)

- (1) 全理事會 十二月十二日 副會長・理事長外理事20名出席
- (2) 日本語讀本發送狀況 (十二月二十二日調)

華中	20,000	8日
蒙【疆】	20,000	14日
華北	12,000	14日
廣東	200	某日
青島	200	某日
【厦】門		未發

2 研究部 (長沼研究部主任)

事業進捗狀況

- イ、日支音韻ノ比較及ビ口形圖ノ作成 (千葉教授) (委囑濟、目下進捗中)
- ロ、各種教授法ノ研究 (黒田教授) (執筆中、一月上旬完成ノ豫定)
- ハ、東亞言語地理 (小倉教授外十四氏) (委囑濟、スペイン語分一名増加立案中)
- ニ、日本語教授法理論 (市河教授) (英語教授研究所長ニ委囑、市河・神保・檜崎三教授ニヨリ執筆中)
- ホ、學習者ノ誤リ易キ語音ノ地域的調査

會議名・年月日・時・場所 (本文)

へ、學習者ノ誤リ易キ語法ノ地域的調査 (田中教授外三氏)
 ト、訛音矯正法ノ研究 (田中・武政ノ兩教授並ニ有賀・鈴木兩氏ニテ分科會ヲ組織シ
 記入用原案作製【成】中)
 チ、語彙調査
 リ、連語成句調査 (淺野研究員) (調査進捗中)
 ス、漢字音訓調査 (伊藤研究員) (調査進捗中、明年二月下旬第一期完了ノ豫定)
 ル、國語讀癖、慣用音ノ研究 (各務監修官) (取纏メ中)
 ヲ、日華辭典 (藤波研究員) (資料蒐集、カード作成準備中)
 ワ、標準口語法 (適當ナル執筆ナキ為保留中)
 尚原稿完了ノ上考慮スベキモノ左ノ如シ
 イ、敬語法 (三宅氏)
 ロ、會話必携 (長沼氏)
 ハ、日華會話書 (大本・横塚・長沼氏)
 ニ、動搖シツアル文法上ノ問題 (湯澤氏)

3 指導部 (西尾理事兼總主事)
 日本語教授者懇談會 十二月十五日、法曹會館ニ於テ開催
 日本語教育講座

第一部 興亞問題 (十時間)
 大東亞ノ建設ト文化 松村憲
 大東亞文化ト日本語 松尾長造
 大東亞戦争ノ意義 堂脇光雄
 大東亞ノ經濟事情 久保文藏
 大東亞ニ於ケル教育事情 辻田力
 大東亞ニ於ケル宗教事情 關野房夫

第二部 基本問題 (三十五時間)
 國語ノ特質 橋本進吉
 國語ノ構造 金田一京助
 國語ノ歴史 湯澤幸吉郎
 國語問題ノ所在ト方向 大岡保三
 日本語教科書論 各務虎雄
 日本語教授法概説 長沼直兄
 日本語教授ノ實際 松宮彌平
 中國人ニ對スル日本語教授 (東亞學校) 鈴木正藏

第三部 特殊問題 (十四時間)
 言語政策 保科孝一
 國語ノ表記ニツイテ 倉野憲司
 文化工作トシテノ日本語教育 釘本久春
 日本語ノ海外進出 石黒修
 日本語教授ト音聲學 大西雅雄
 日本語教育科學ノ樹立 輿水實

座談會 (二回) 司會 大志万準治
 期間 昭和十七年一月十【九】日-三月六日
 時間 毎週 (月水金) 三回 (午後六時-九時)
 會費 三圓 (但、學生ハ半額)
 會場 神田區神保町二丁目二〇番地 東亞學校教室
 定員 五十五名
 申込 文部省内日本語教育振興會宛 昭和十七年一月十五日締切 (但、締
 切前ニテモ定員ニ達スルト同時ニ締切ノコト)
 主催 日本語教育振興會 (文部省内)
 後援 文部省

4 圖書部 (大岡圖書部主任)
 ハナシコトバ學習指導書下巻 印刷
 日本語讀本卷二 印刷

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>日本文化讀本（大學ノ學生生活）完稿 〃 （さくら）</p>
	<p>5 雜誌部（釘本雜誌部主任） 6 普及部（西尾普及部主任） ハナシコトバ教授用掛圖 一月末原畫完成 繪本十種 水船【三洋】畫伯監修 外七名委囑 一月十五日原畫完成 レコード</p>
	<p>一、其ノ他</p>
	<p>(一) 本會助成金ニ關シ榊谷常任理事ヨリ、時局ニ即應シ廣ク大東亞共榮圈ニ本會事業ヲ進展セシメンガ為ニモ、情報局ニ對シ助成金交附方依頼如何トノ提案アリ。右ニ基ツキ十二月二十四日、松尾理事長・釘本常任理事、情報局ニ對シテ交渉スルコトニ決定。</p>
	<p>(二) 田中理事ヨリ、本會ノ如キ團體ニ對シテ國家ノ會計法ト同様ナル規定ヲ適用スルコトハ會ノ運用上不適當ナラントノ意見開陳アリ。</p>
	<p>(三) 興亞院ニ對シ至急資料作成費・指導費ノ支出方承認手續ヲナスコト。</p>
	<p>(四) 興亞院同盟加盟ニツキ同會ニ對シ理事竝ニ委員ニツキテノ内報ヲナスコト。</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)																												
日本語教育振興會第七回常任理事會 昭和十七年一月二十三日 (金) 午後三時 於文部省圖書局國語課長室	<p>一、議題</p> <p>(一) 「日本語教育講座」ニ關スル件 (二) 募金計畫ニ關スル件 (三) 新規事業計畫ニ關スル件 (四) 刊行物保管ニ關スル件</p>																												
(第八回・第九回・第十回)	欠)																												
日本語教育振興會第十一回常任理事會 昭和十七年四月十日(金) 午前十一時三十分 於興亞院文化部長應接室	<p>一、議題</p> <p>(一) 左記刊行物配送ニ關スル件 日本語讀本卷二 日本語文化讀本 さくら 大學の學生生活 繪本 ガクカウ ハナ・ヤサイ・クダモノ ヨイコドモタチ オホゾラ ドウブツ コドモノセカイ ニツボンノタテモノ 四季(假題) (二) 本會議事業基金募集著手ニ關スル件</p> <p>二、報告 別紙 別紙「報告」</p> <p>一、本會助成金交付方申請ノ件 三月三十一日附興亞院ニ對シ昭和十七年度本會助成金參拾八萬參千九百七拾圓也交付方申請ヲ了シタリ。</p> <p>二、本會職員ニ關スル件 二月廿六日附書記岩崎直吉病氣ノタメ退職。 三月卅一日附左記ノ通り夫々發令アリタリ。 研究員兼事務囑託ヲ免シ主事ヲ命ス 伊藤 彌太郎 主事ヲ命ス 山口 正 事務囑託ヲ免シ主事ヲ命ス 上村 茂次郎 研究員ヲ免シ主事ヲ命ス 福田 恆存</p> <p>三、大日本興亞同盟ニ關スル件 三月廿日附大日本興亞同盟理事長ヨリ本會會長ニ對シ、同同盟改組ニツキ個人會員或ハ團體會員何レノ立場ヲ以テ入會スルヤ其ノ態度決定通告方照會アリタルニツキ、本會ハ團體會員トシテ入會ノ旨同報シタリ。 尚右改組ニツキ同理事會ノ申合セニ基キ西尾總主事ハ同同盟理事辭任願ヲ提出シタリ。</p> <p>四、南方ニ對スル日本語普及ニ關スル件 情報局企畫ノ簡易日本語ハ成案ヲ得、「情報局編纂、日本語教育振興會發行」トシ、民間書肆發賣ノ形式ニテ頒布スルコトニ決定。</p> <p>五、本會刊行圖書寄贈概數(自二月廿二日至三月末日)</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th>書名</th> <th>文部省</th> <th>北京師範大學</th> <th>鍊成所</th> <th>懇談會(二回)</th> <th>其他</th> <th>計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>ハナシコト バ上中下</td> <td>50(上)</td> <td>10</td> <td>11</td> <td>21</td> <td>15(13)名</td> <td>107</td> </tr> <tr> <td>同學習指導 書上中</td> <td></td> <td></td> <td>11</td> <td></td> <td>12(11)名</td> <td>49</td> </tr> <tr> <td>日本語讀本 卷一</td> <td>30</td> <td>11</td> <td>21</td> <td></td> <td>11(10)名</td> <td>73</td> </tr> </tbody> </table>	書名	文部省	北京師範大學	鍊成所	懇談會(二回)	其他	計	ハナシコト バ上中下	50(上)	10	11	21	15(13)名	107	同學習指導 書上中			11		12(11)名	49	日本語讀本 卷一	30	11	21		11(10)名	73
書名	文部省	北京師範大學	鍊成所	懇談會(二回)	其他	計																							
ハナシコト バ上中下	50(上)	10	11	21	15(13)名	107																							
同學習指導 書上中			11		12(11)名	49																							
日本語讀本 卷一	30	11	21		11(10)名	73																							
日本語教育振興會第十二回常任理事會 (昭和十七年)五月二十二日 (金) 午前十一時ヨリ午後一時ニ至ル 於興亞院文化部長應接室	<p>一、出席者</p> <p>松尾理事長 榎谷常任理事 笈常任理事 大岡常任理事 田中理事 杉浦理事 西尾理事兼總主事 長沼理事兼主事 上村主事 伊藤主事</p> <p>一、配布書類 報告書</p> <p>一、報告</p>																												

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>當日配布シタル報告書ニ基キ西尾總主事ヨリ次ノ諸項ニ關シテ夫々報告</p> <p>(一) 情報局編輯本會發行ノ南方普及用「ニッポンゴ」ノ發行ニ關スル費用ハ大東亞出版文化株式會社ノ支辯ナルヲ以テ本會ノ歳入歳出外トシテ取扱フコト (承認)</p> <p>(二) 本會刊行繪本配布ノ範圍ハ、本會役員全部及び文部省・興亞院ノ本會關係者ニ贈呈スルコト (決定)</p> <p>(三) 掛圖ノ印刷八月未完了ノ筈</p> <p>(四) 支那派遣教員第六回鍊成ハ興亞院指導ニヨリ目下實施中ナルモ來ル三十日終了ノ筈</p> <p>(五) 陸軍需品本廠ヨリ「ハナシコトバ」上卷五千部、同學習指導書一千部注文アリ急需ニ應ズル為、本會ニ於テ現在保管セル「ハナシコトバ」上卷3,600部ヲ差當リ陸軍ニ提供スル手筈 (承認)</p> <p>(六) 本會刊行物頒布並ニ保管部數 (別紙)</p> <p>(七) 本會用紙割當品目並ニ數量 (別紙)</p> <p>(八) 成人用速成日本語教科書上下ノ編纂</p> <p>(1) 陸軍省・參謀本部ノ委囑ニヨリ南方向キノモノ作製中</p> <p>(2) 興亞院ノ助成ニヨリ接收租界ソノ他ノ日本語學校及各種學校使用ノモノヲ刊行シタシ</p>
	<p>一、協議事項</p>
	<p>(一) 日本語進出普及ノ基本トナシ標準トスベキ語彙調査促進ノタメ研究員増置ノ件 必要ヤムヲ得ザル範圍ニ於テ承認。但臨時ト常置トヲ適切ニスルコト</p>
	<p>(二) 水船畫伯及ビ福田主事ヲ興亞院囑託トシテ現地派遣ノ件 右ハ興亞院ニ於テ事務囑託ヲナスニ足ル事由アレバ可ナリト認ム。但時期ニツイテハ會ノ希望ノヤウニ運バヤ否ヤ疑問</p>
	<p>(三) 國民政府編纂高級中學校用日本語教科書編纂助成ノ件 興亞院現地連絡部ヨリ連絡アリ次第本會ニテ草案ヲ作成スルコトトシタシ (承認)</p>
	<p>(四) 關係團體事業調整ノ件</p>
	<p>(一) 本年度指導養成部ノ長期講習會トシテ「外國語教師ニ對スル日本語教授法講習會」ヲ主催シ、ソノ事務一切ヲ語學教育研究所ニ委囑シタキコト 實行豫算決定ノ際之ニ要スル費用ヲ支出シ得ル項目ヲ立テ得レバ可ナリト認ム</p> <p>(二) 本會教育資料作製ノタメノ實驗學級トシテ日語文化協會ニ留日學生ノ日本語指導學級ヲ委囑シタキコト 實行豫算決定ノ上之ニ要スル費用ヲ支出シ得ル項目ヲ立テ得レバ可ナリト認ム</p>
	<p>(五) 本年度事業計畫ニ關スル件</p>
	<p>以上ノ外各種會合トシテ</p> <p>(イ) 日本語教授者懇親會ヲ前年度ニ引續キ開催ノ件承認</p> <p>(ロ) 留學生問題ニ關シ關係官廳並ニ研究者ト連絡ノ為會合ヲ開催ノ件 適當ナル時期ニ計畫ノコトニ承認</p> <p>(ハ) 日本語普及政策希望ニ關スル問題ニツキ協議スルタメソノ方面ノ權威者ノ會合主催ノ件 文部省ノ方針ニ應ジテ立案スルコト</p>
	<p>六、(マ) 基金募集ノ方法ニ關スル件 具體法案ヲ樹立シテ進捗ヲ計ルコト</p>
<p>日本語教育振興會第十三回 常任理事會 (昭和十七年)六月廿日(土) 午前十一時ヨリ午後一時ニ 至ル 於興亞院文化部長應接室</p>	<p>一、出席者 榊谷常任理事 笈常任理事 大岡常任理事 釘本常任理事 杉浦理事 田中理事 西尾理事兼總主事 長沼理事兼主事 上村主事 山口主事 並木書記</p> <p>一、配布書類 昭和十七年度日本語教育振興會實行豫算案</p> <p>一、協議 「昭和十七年度日本語教育振興會實行豫算案」ニツキ審議。</p>
	<p>左ノ諸項ヲ除キ議案ヲ承認</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>(一) 歳入第一款第二項賣上収入及び第三項雑収入ハ實狀ニ即シイツレモ収入見積リ減額ノ要アラン</p> <p>(二) 歳出第三項研究調査費ハソノ實ハ第五項第二目教育資料ノ編纂作成費ナルヲ以テソノ項目ニ繰替ヘルコト</p> <p>(三) 陸海軍省其ノ他ノ委托ニ依ル圖書ノ作成刊行及頒布ヲナスタメ其事業經費ハ特別會計トシテ處理スルコト</p> <p>(四) マレー方面ニ於ケル日本語普及ノタメ陸軍軍政顧問侯爵徳川義親氏ヲ本會顧問ニ委囑ノコト</p>
<p>日本語教育振興會第十四回 常任理事會 (昭和十七年)八月七日(金) 午前十一時ヨリ午後一時ニ 至ル 於興亞院文化部長應接室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 榊谷常任理事 相良常任理事 關野理事 大岡常任理事 釘本常任理事 杉浦理事 大志万理事 西尾理事兼總主事 長沼理事兼主事 田中理事 橋本主事 山口主事 上村主事 並木書記</p>
	<p>一、配布書類</p>
	<p>(一) 報告書</p>
	<p>(二) 昭和十七年度第一次事業計畫</p>
	<p>一、報告</p>
	<p>配布シタル報告書ニ基キ長沼總主事代理ヨリ夫々報告アリ</p>
	<p>一、協議決定事項</p>
	<p>(一) 常任理事會定期開催ノ件</p>
	<p>毎月第一金曜日 興亞院ニ於テ</p>
	<p>〃 第三金曜日 文部省ニ於テ</p>
	<p>(二) 役員委囑ノ件</p>
	<p>笈氏第一課へ轉出ニ付相良氏ニ常任理事就任方委囑</p>
	<p>(三) ハナシコトバ用掛圖定價ノ件</p>
	<p>一部ニツキ製作費十六圓一錢ノ所頒價拾圓トス</p>
	<p>(四) 昭和十七年度事業計畫ノ件</p>
	<p>配布書類ニ基キ審議決定</p>
	<p>但シ研究部第六□日本語普及問題研究會ノ名簿ヲ再考スルコト</p>
	<p>指導部ノ講演會ハ支出ノ費目ヲ考慮シテ二千圓トスルコト</p>
	<p>(五) 「ハナシコトバ」レコードノ件</p>
	<p>レコードハ文部省ノ事業ニ属スル故許可ノ手續ヲトリ置タコト</p>
	<p>報告</p>
	<p>一、本年度實行豫算書(總額140,700圓興亞院助成金130,000圓)ヲ七月二日興亞院ニ提出セリ</p>
	<p>二、七月十五日西尾總主事病氣靜養中長沼主事ニ總主事代理ヲ命ジタリ</p>
	<p>三、七月二十五日昭和十八年度豫算額ヲ429,500圓ト決定【、】助成金419,500圓ヲ同年度ニ於テ交付方興亞院ニ申請セリ</p>
	<p>四、七月二十六日ヨリ三十一日迄六日間(自午前八時至正午)第二回日本語教育講座ヲ東京文理科學ニテ開催【、】講座修了者六十四名ニ證書ヲ授與セリ</p>
	<p>五、七月二十八日文部省圖書局主催ノ左記懇談會同省第二會議室ニ於テ開催ニ付本會代表トシテ西尾總主事出席セリ</p>
	<p>(イ) 諸團體(マ)ニ於ケル日本語普及事業連絡ニ關スル件</p>
	<p>(ロ) 海外ニ於ケル日本語(特ニ南方共榮圈ニ於ケル)表記統一ニ關スル件</p>
	<p>六、陸軍省ヨリ本會刊行物八種ノ複製刊行ノ件依頼アリ目下印刷中</p>
	<p>七、日本文化讀本「さくら」七月二十日刊行、「大學ノ學生生活」ハ近日中ニ出來ノ豫定</p>
	<p>昭和十七年度第一次事業計畫</p>
	<p>研究部</p>
	<p>一、誤リ易キ語音、語法ノ地域別調査(繼續) 1,000</p>
	<p>二、日蒙標準音ノ比較 1,000</p>
	<p>三、日支漢字【漢語】ノ異義調査 1,000</p>
	<p>四、語彙ノ調査(繼續) } 10,000</p>
	<p>五、日華辭書ノ編纂(繼續) }</p>

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	<p>六、日本語普及問題研究會【委員】(指導部ト協力) 2,000 第一部會 (普及方策ニ關スル研究) 第二部會 (日本語自体ニ關スル研究) 第三部會 (教育ニ關スル研究) 指導部 日本語教授者懇談會 1,300 總會 九月 委員會 (豫算内ニテ可及的多ク) 講演會 二回 2,000 第一回 京都ニ於テ 十月 第二回 東京ニ於テ 十一月</p>
	<p>圖書部 日本語讀本學習指導書 卷一 卷二 文化讀本 第三 (名稱未定) 文化讀本 第四 (名稱未定) 文化讀本 第五 (名稱未定) 日本語讀本 卷四 日本語讀本 卷五</p>
	<p>普及部 日本語教授法ノ原理 東亞ニ於ケル西歐語ノ普及 日常生活ニ於ケル敬語法 各種教授法ノ研究 現代語ノ諸問題 東亞ニ於ケル諸民族語 日支標準音ノ研究</p>
日本語教育振興會第十五回 常任理事會 (昭和十七年)八月二十一日 (金)午前十一時半ヨリ午後 一時ニ至ル 於文部省第五會議室	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 杉浦理事 長沼理事兼總主事代理 上村主事 伊藤主事 鹿島主事</p> <p>一、配布書類 報告及議題</p> <p>一、報告 當日配布シタル報告書ニ基キ長沼總主事代理ヨリ次ノ諸項ニ關シテ夫々報告ス</p> <p>(一) 興亞院ヨリ本年度第一回補助金指令ヲ受ケタルモ未ダ現金ハ受領セズ何レ近日 中ニ入手ノ筈</p> <p>(二) 外務省調査部ヨリ本會刊行物 (ハナシコトバ上中下各1,200部、ハナシコトバ指 導書下100部、日本語讀本卷一同卷二各400部、掛圖10部) 頒布ニツキ依頼アリ、 無料ニテトノ話アリタルモ數量多キタメ原價 (事務費約一割含メタルモノ) ニ テ頒布スルコトニ協定ス</p> <p>(三) 「ハナシコトバ」レコードハ從來文部省ノ許可ヲ受ケ日本コロムビア蓄音器株 式會社ニテ發行スルコトニナリキタリシモノヲ今回本會監修ノ奉【下】ニ發行 スルコト、ナリタリ本日午後一時ヨリ試聽會ヲ開ク豫定ナリシモ出席者少キタ メ中止セリ (本件ニ關シ文部省ノ許可ヲ受ケアリヤナキヤ總務課ニテ確メルコト)</p> <p>(四) 文化讀本「大學の學生生活」ハ表紙用紙ナキタメ發行オクレタルモ山口主事ヲ 通ジ情報局ト交渉與附通り四月十日發行ト決定セリ</p> <p>協議事項 (一) 支那ニ於ケル本會刊行物頒布ノ件 最近北支ヨリ「ハナシコトバ」850部注文アリタルモ發送ニ困難ナル為華北連絡 部又ハ新民印書院【館】ヲ通ジテ頒布スルヲ得バ便ナラン 850部ハ興亞院ノ指令ヲ仰ギ取急ギ發送スルコト、尚新民印書館ニ對シテモ若 干ノ在庫品ヲ常置スル様取計方依頼スルコト</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>(二) 本會刊行物奥附代表者ノ件 理事長名ヲ本會刊行物奥附ニ代表者トシテ記載スルコトニ關シ著作者トシテ文部省名ヲ出スコトヲ不可トス支那側意見ニ對シ【圖書局長名ヲ出】スルコトニツキテハ考究ノ餘地アリ然ラバ會專務ノ總主事ガ名ヲ以テスルヲ可ナリトスベキモ本件ニツキテハ後刻杉浦理事ヲ通ジ興亞院側意見ヲ取纏メ本會ニ通報方依頼スルコト、シテ決定ヲ留保ス</p> <p>(三) 松宮彌平氏ヨリ補助依頼アリタル旨大岡常任理事ヨリ發言アリ右ニ本會事務當局ニ於テ考究スルコト、セリ</p> <p>別紙 「報告及議題」</p> <p>一、 報告 イ、興亞院總裁ヨリ本月十四日附ヲ以テ昭和十七年度第一回分補助金四萬圓交付ノ指令アリタリ ロ、外務省調査部ヨリ本會刊行物 (ハナシコトバ、同學習指導書、日本語讀本等)ノ頒布ニツキ依頼アリタリ (原価ニテ頒布ノコトニ協定ス) ハ、ハナシコトバ用蓄音器レコードハ今般本會監修ニテ日本コロソビア蓄音器株式會社教育部ヨリ發行ノ運トナレリ【總務課ニテ確メルコト】</p> <p>二、 議題 支部ニ於ケル本會刊行物頒布ノ件【850ノ□金ヲ願フコト新民印書館ニ渡スコト】 【署名者名義ノ件 興亞院ハ當局ト相談シテ貰フ事】</p>
<p>日本語教育振興會第十六回 常任理事會 (昭和十七年) 九月十八日 (金) 午前十一時半ヨリ午後一時ニ至ル 於文部省第三會議室</p>	<p>一、 出席者 松尾理事長 相良常任理事 釘本常任理事 杉浦理事 大志万理事 田中理事 西尾理事兼總主事 長沼理事兼總主事代理 上村主事 橋本主事 鹿島主事</p> <p>一、 配布書類 報告書(マ)及議題</p> <p>一、 報告 當日配布シタル報告書ニヨリ長沼總主事代理ヨリ夫々報告アリ</p> <p>一、 協議決定事項</p> <p>(一) 研究依頼の件 中級ノ日本語指導法 讀方及綴方指導法 日語文化協會 松宮彌平 費用概算 金 2, 0 0 0 圓 右決定ス</p> <p>(二) 特別會計設定具體案ノ件 【推】名義雄氏寄附金參萬圓ノ内貳萬圓ヲ基金トシ壹萬圓ヲ資金ニ充當、本資金ヲ特別會計トシテ現會計規定ニ據ラズ別個ニ適用シ便宜適切ナル規定ヲ設クルコト 基金貳萬圓ノ保管ノ方法ニ關シ定期豫金・信託ノ何レニスルヤハ事務當事者ニ一任スルコト</p> <p>別紙 「報告及議題」</p> <p>一、 報告 イ、八月廿五日内閣會計課ヨリ本年度第一回分補助金四萬圓ヲ受領セリ ロ、七月十六日三菱銀行虎ノ門支店ヨリノ借入金壹萬圓也ヲ八月二十六日返還セリ ハ、本會刊行物奥附ニ記載スベキ代表者名ハ總主事名ヲ以テスルヲ可トスルトノ興亞院側意見通報アリタリ</p> <p>二、 「ハナシコトバ」レコードニ關シ圖書局總務課ニ問合セタルニ昭和十六年三月中作製許可方申請アリ三月中作製許可セル旨回答アリタリ</p> <p>ホ、九月十日水船三洋氏並ニ福田主事ノ支那蒙疆方面派遣ニ關スル手續ヲナシタリ</p> <p>へ、平松書記興亞鍊成所入所ニツキ解職、ソノ後任トシテ大塚氏ヲ任命許可方九月八日興亞院總務長官宛願出デタリ</p> <p>【ト、ニッポンゴ發行ノ件】 【チ、鍊成委嘱セラレタル件】</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>議題</p> <p>イ、研究委囑の件 一、中級ノ日本語指導法 一、讀方及綴方指導法 日語文化協會 松宮彌平 費用概算 金2,000圓</p> <p>ロ、特別會計設定具体案ノ件 【金壹萬圓ヲ資金トスルコト】</p>
<p>日本語教育振興會第十七回 常任理事會 (昭和十七年)十月二日(金) 午前十一時半ヨリ午後一時 四十分ニ至ル 於興亞院文化部長應接室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 榎谷常任理事 相良常任理事 大岡常任理事 釘本常任理事 關野理事 大志万理事 田中理事 大塚書記 長沼理事兼總主事代理 上村主事 山口主事 鹿島主事</p> <p>一、配布書類 報告及議題 日本語普及委員會構成試案</p>
	<p>一、報告 當日配布シタル報告書ニヨリ長沼理事兼總主事代理ヨリ夫々報告アリ</p>
	<p>一、協議決定事項</p> <p>イ、ハナシコトバ品切對策ノ件 ハナシコトバ上ノ印刷ハ賣上金收入モアルコト故約二萬部印刷スルコト但シ 少部數ノ印刷ハ不利ナル為適當ナル機會ヲ見テ刷リオクコト</p> <p>ロ、日本語普及委員會ノ件 大東亞省設立後此ノ種審議機關ノ設立ヲミル見込ナレバソノ性格ヲ見定メタ ル後ニオイテ再審議スルコト</p>
	<p>別紙 「報告及議題」</p>
	<p>一、報告 イ、曩ニ支那ニ出張ヲ命ゼラレタル本會囑託水船三洋氏ハ九月二十五日、本會主事福田 恆存氏ハ九月二十八日出發セリ ロ、横濱高等商業學校教授渡邊輝一氏佛印ニ於ケル高等商業學校設立ノタメ派遣セラ ル、コトニナリタルニツキ本會現地囑託ヲ委囑セリ</p>
	<p>二、議題 イ、ハナシコトバ品切對策ノ件 ロ、日本語普及委員會ノ件</p>
	<p>別紙 「日本語普及委員會構成員試案」</p>
	<p>第一部會 (政策的方面)</p> <p>企畫院 上山【、】氷室 情報局 大郷 大東亞省 (假称) 支那局 (假称) 南方局 (假称) 陸軍省 海軍省 文部省 前田 國際文化振興會 坂部、黒田 放送局 崎山、片桐 民間【大政翼贊會】玉井 (東亞研究所) 比屋根 (語學教育研究所)</p>
	<p>第二部會 (國語調査)</p> <p>湯澤幸吉郎 (文部省) 岩淵悦太郎 (一高) 戸田吉郎 (陸士) 木村新 (東亞) 松田武夫 (文部省) 五味智英 (一高) 吉田澄夫 (文部省) 松宮一也 (日語文化)</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	丸山キヨ子 (女子大) 夫西雅雄 (法政大學) 【神保格】
	第三部會 (教育方面) 文部省 前田 企畫院 大東亞省 陸軍省 海軍省 【大政翼贊會】 國際學友會 國友 青年文化協會 石黒 東亞學校 【善隣協會 入江】 東京高師 村岡
日本語教育振興會第十八回 常任理事會 (昭和十七年)十月二十三日 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室	一、報告 イ、十月十四日內閣會計課ヨリ本年度第二回分補助金四万圓也ヲ受領セリ ロ、十月二十二日內閣會計課ヨリ日華辭典編纂【補助】金一万圓也ヲ受領セリ ハ、日本語讀本卷三八十月二十三日刊行ノ運トナレリ ニ、支那派遣教員第七回鍊成ハ九月三十日、同第八回鍊成ハ十月二十日無事終了セリ ホ、左ノ通り研究員ヲ命ジタリ 森山重雄 (九月三十日附) □川 □之助 (十月十日附) 二、議題 一、圖書刊行ノ件 二、華北日本語教育研究所トノ連絡ノ件 三、其ノ他 【一、雜誌頒布ノ件】
日本語教育振興會第十九回 常任理事會 (昭和十七年)十一月二十日 (金)午前十一時半ヨリ午後 一時ニ至ル 於文部省第五會議室	一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 關野大東亞省調査官 相良大東亞事務官 西尾理事兼總主事 長沼理事兼總主事代理 上村主事 伊藤主事 鹿島主事 一、配布書類 報告書及議題 一、協議決定事項 イ、本會役員選任ノ件 大東亞省新設ニ伴ヒ興亞院側本會役員ハ自然其ノ役員タルノ資格ヲ喪失セルヲ以テ新ニ大東亞省該當事務關係者ヨリ選任スル必要ヲ生ジタリ。因テ協議ノ結果關野調査官及ビ相良事務官ニ常任理事ヲ依囑スル件ヲ決定、爾餘ノ大東亞省側役員ハ關野調査官相良事務官並ニ本會常任理事ニ於テ具體案ヲ作成ノ上理事長ニ提出スルコトニ決定セリ。 ロ、文理科大學教授神保格氏ニ對シ日華辭典編纂ニ關シ具體的交渉ヲ進ムル件 神保氏ガ既ニ兩三年來繼續中ナリシ言葉ノ組合セ其他ニ關スル調査ヲ本會ニ於テノ委讓を受ケ、過去ニ於テ該調査ニ要セシ費用 (約五百圓位) 並ニ今後該調査ニ要スル費用 (助手給料其他) ヲ本會ヨリ支出シテ、依囑事業トシ、日華辭典編纂ノ資料トスルコトニ關シ具體的交渉ヲ進メタキ件ハ交渉ヲ進ムルコトニ決定、尚交渉ノ結果ハ常任理事會ニ報告協議スルコトトス。 ハ、其他 一、松村前副會長、榎谷前常任理事等ニ對スル慰勞方法ノ件ハ種々意見ノ提出アリシモ尚ヨク考究協議スルコトニ決定。 二、文部省主催南方派遣日本語教育要員養成所修了者ノ為ニ本會ニテ壯行會ヲ催シ

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>タキ件ハ開催スルコトニ決定。 三、本會常任理事會ハ今後毎週金曜日午前十一時ヨリ開催ニ決定。大東亞省廳舎移轉迄ハ文部省ニ於テ開催ノコト。</p> <p>別紙 「第十九回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告 イ、支那派遣教員第八回第九回鍊成事業補助金トシテ金九千圓ヲ十月二十八日ニ興亞院ヨリ受領セリ。 ロ、文部省主催南方派遣日本語教育要員養成所ハ十一月十四日ヨリ開所シ、本會山口主事・鹿島主事及宮脇研究員其ノ所員ニ任ゼラレタリ。 ハ、興亞院連絡部ヨリ本年度ニ入り左ノ如ク教科書賣上代金送金アリタリ。 6,135圓 十一月十二日 張家口大使館理事官ヨリ 1,800圓 十一月十二日 華北日本語普及協會理事長ヨリ 1,025圓 十一月十八日 興亞院厦門連絡部ヨリ 計8,960圓 ニ、本會職員ニ對シ十一月ヨリ戰時勤勉手當並ニ臨時家族手當支給ノ件</p> <p>二、議題 イ、本會役員選任ノ件 ロ、文理科大學教授神保格氏ニ對シ日華辭典編纂ニ關シ具体的交渉ヲ進ムル件 ハ、其他</p>
<p>日本語教育振興會第二十回常任理事會 (昭和十七年)十一月二十七日(金)午前十一時ヨリ午後一時半ニ至ル 於文部省第五會議室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 相良大東亞事務官 西尾理事兼總主事 長沼理事兼總主事代理 上村主事 伊藤主事 鹿島主事</p> <p>一、配布書類 第十九回常任理事會協議要録</p> <p>一、協議決定事項 イ、ハナシコトバ増刷ノ件 ハナシコトバ上卷ハ全ク品切れ、中卷下卷モ殘部僅少ナルヲ以テ本會トシテ増刷ノ必要アレドモ、目下ノ本會ノ資金關係ヲ顧慮シ、特別會計壹萬圓ノ範圍内ニテ豫算七千五百圓ヲ以テ上卷五萬部ヲ最初ニ増刷スルコトニ決定。其ノ頒價ハ定價通り貳拾錢トシタキ希望ナリ。 ロ、前役員慰勞方法ノ件 松村前副會長、榊谷前常任理事ニ對シ謝禮金ヲ贈呈スルコト、シ、榊谷前常任理事ニハ特ニ其ノ希望ニ依リ右謝禮金ヲ以テ水船三洋畫伯ニ作畫ヲ依頼シ、其ノ作品ヲ贈呈スルコトニ決定、尚慰勞宴ヲ開催スルコトトス。 ハ、研究部室移轉ノ件 本會事務室研究室共ニ【狹隘】ニシテ事業遂行ニ不便ヲ感ズルヲ以テ當分ノ間文部省ニテ借用セル神田一ツ橋東京高等齒科醫學校附屬醫院ノ一部ニ研究室ヲ移轉スル件ハ文部省用度課及ビ東京高等齒科醫學校ノ諒解ヲ得レバ移轉シテ可ナリト決定。</p> <p style="text-align: right;">以上</p>
<p>日本語教育振興會第二十一回常任理事會 (昭和十七年)十二月十一日(金)午前十一時ヨリ午後一時半ニ至ル 於文部省第六會議室</p>	<p>一、出席者 大岡常任理事 釘本常任理事 相良大東亞事務官 西尾理事兼總主事 長沼理事兼總主事代理 上村主事 伊藤主事 福田主事 水船囑託</p> <p>一、配布書類 第二十回常任理事會協議要録</p> <p>一、協議決定事項 イ、常任理事會ヲ隔週開催(月二回)トシタシトノ希望ノ件 右ハ第十九回常任理事會ニテ毎週開催ト決定シタル直後ナルヲ以テ其ヲ變更スルハ面白カラズ、依テ【毎週】金曜日【十一時ヨリ】ヲ定日トスル點ヲ改メ、毎週水曜日開催スルコトニ決定。 ロ、本會ニテ研究委囑セル著作物ニ對スル報酬及ビ出版ノ際ノ著作権ノ件 右ハ本會ヨリ其ノ研究ヲ委囑シタル建前ナルニ付其ノ著作権ハ本會ノ所有ト</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)																																							
	<p>シ、出版ノ際ハ奥付著作者名儀ハ本會トス。又其ノ報酬ニ關シテハ本會ヨリ適當額ヲ一括シテ支給スルカ、或ハ又出版ノ際ニ印税式計算法ニヨリテ支給スルカハ當該著者ノ希望ニ委ヌルコトニ決定。</p> <p>ハ、常任理事及理事ノ件 大東亞省廳ノ希望トシテ副會長ヲ大東亞次官ニ、常任理事ヲ既定ノ關野調査官、相良事務官以外ニ更ニ支那事務局文化課長及ビ南方事務局文化課長ニ、理事ヲ田中囑託、大志万囑託、及ビ滿洲事務局總務課腰原事務官ニ委囑シ、松村參事官ニ顧問、榎谷書記官ニ評議員ヲ委囑スルコトニ決定。尚其他前興亞院關係役員ニ異動アルベキヲ以テ本會役員ノ改正委囑案ヲ總主事ニ於テ作製スルコトトス。</p> <p>ニ、本會會務ニ關シ現地大東亞省機關ト連絡ノ件 右ニ關シテハ大東亞省ノ本省該當事務局ヲ經由シテ連絡スルコトニ決定。</p> <p>一、報告 水船囑託及ビ福田主事ヨリ滿洲支那出張歸任ノ報告アリ。</p>																																							
<p>日本語教育振興會第二十二回常任理事會 (昭和十七年)十二月十八日 (金)午前十一時ヨリ午後一時ニ至ル 於文部省第五會議室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 關野大東亞省調査官 相良大東亞事務官 西尾理事兼總主事 長沼理事兼總主事代理 上村主事 伊藤主事</p> <p>一、配布書類 第二十二回常任理事會協議要録</p> <p>一、協議決定事項 常任理事會開催日ヲ前回ニ水曜日ト決定シタルモ種々ノ事情ヲ考慮シ改メテ金曜日トスルコトニ決定。</p> <p>備考 本日一般協議ニ入ル前約一時間理事長及常任理事並ニ關野調査官相良事務官ノ五氏ニテ會議スル所アリタリ</p>																																							
<p>日本語教育振興會第二十三回常任理事會 (昭和十七年)十二月二十五日 午前十一時半ヨリ午後一時ニ至ル 於文部省第六會議室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 關野大東亞省調査官 相良大東亞事務官 西尾理事兼總主事 長沼理事兼總主事代理 上村主事 伊藤主事</p> <p>一、配布書類 第二十三回常任理事會議題</p> <p>一、協議報告事項 イ、本會役員異動原案ニツキ審議スル處アリ ロ、總主事更迭ニ關シノ手續ヲトルコトヲ決定ス</p> <p>別紙「第二十三回常任理事會議題」</p> <p>イ、本會役職員異動ノ件 官制異動ニヨリ新(再)任セラルベキ大東亞省側役職員</p> <p>【大東亞省ニテ調査スルコト】 【滿州國駐在特命全權大使重光葵】 【特命全權大使 坪上】 【 全權士 芳沢謙吉】</p> <p>記</p> <table border="0" data-bbox="539 1579 1420 2004"> <tr> <td>副會長</td> <td>大東亞次官</td> <td>山本熊一【滿州支那事務局長南方事務】</td> </tr> <tr> <td>顧問</td> <td>大東亞省參事官</td> <td>松村素</td> </tr> <tr> <td>〃</td> <td>特命全權公使(上海)</td> <td>田尻愛義</td> </tr> <tr> <td>〃</td> <td>特命全權公使(張家口)</td> <td>岩崎民男</td> </tr> <tr> <td>〃</td> <td>特命全權公使(北京)</td> <td>鹽澤清宜</td> </tr> <tr> <td>〃</td> <td>大東亞省總務局長</td> <td>竹内新平</td> </tr> <tr> <td>〃</td> <td>總領事(厦門)</td> <td>赤堀鐵吉</td> </tr> <tr> <td>評議員</td> <td>大東亞書記官 榎谷秀夫</td> <td></td> </tr> <tr> <td>〃</td> <td>大使館參事官(南京大使館文化部長)</td> <td>伊東隆治</td> </tr> <tr> <td>〃</td> <td>總領事(青島)</td> <td>喜多長雄</td> </tr> <tr> <td>〃</td> <td>大使館調査官【(廣東)】</td> <td>小沼【亨?】</td> </tr> <tr> <td>〃</td> <td>大使館調査官【(青島)】</td> <td>白井康</td> </tr> <tr> <td>〃</td> <td>大東亞省調査官兼興亞院鍊成所鍊成官</td> <td>白木【喬】一</td> </tr> </table> <p>【順序ハ大東亞省ニ見セン】</p>	副會長	大東亞次官	山本熊一【滿州支那事務局長南方事務】	顧問	大東亞省參事官	松村素	〃	特命全權公使(上海)	田尻愛義	〃	特命全權公使(張家口)	岩崎民男	〃	特命全權公使(北京)	鹽澤清宜	〃	大東亞省總務局長	竹内新平	〃	總領事(厦門)	赤堀鐵吉	評議員	大東亞書記官 榎谷秀夫		〃	大使館參事官(南京大使館文化部長)	伊東隆治	〃	總領事(青島)	喜多長雄	〃	大使館調査官【(廣東)】	小沼【亨?】	〃	大使館調査官【(青島)】	白井康	〃	大東亞省調査官兼興亞院鍊成所鍊成官	白木【喬】一
副會長	大東亞次官	山本熊一【滿州支那事務局長南方事務】																																						
顧問	大東亞省參事官	松村素																																						
〃	特命全權公使(上海)	田尻愛義																																						
〃	特命全權公使(張家口)	岩崎民男																																						
〃	特命全權公使(北京)	鹽澤清宜																																						
〃	大東亞省總務局長	竹内新平																																						
〃	總領事(厦門)	赤堀鐵吉																																						
評議員	大東亞書記官 榎谷秀夫																																							
〃	大使館參事官(南京大使館文化部長)	伊東隆治																																						
〃	總領事(青島)	喜多長雄																																						
〃	大使館調査官【(廣東)】	小沼【亨?】																																						
〃	大使館調査官【(青島)】	白井康																																						
〃	大東亞省調査官兼興亞院鍊成所鍊成官	白木【喬】一																																						

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	“ 大使館調査官	曾我孝之 【丁字尚】
	“ 大東亞省調査官【“】	田中穰一
	“ 【イキ】大使館調査官	野村南次【治】郎【上海文化部長ヲ □ジ入レン】
	“ 大使館一等書記官	別所孝太郎
常任理事	大東亞書記官 (支那事務局文化課長)	藤井重雄
“	大東亞書記官 (南方事務局文化課長)	東光武三
“	大東亞省調査官	關野房夫
“	大東亞事務官	相良惟一
理事	大東亞省事務囑託	大志万準治
“	大東亞省事務囑託	田中末雄
“	大東亞事務官	野口俊一
	【大東亞省調査官	堂脇光雄】
	【□□事務	荻原徹】
	【大東亞書記官 (總ム局 “ 課長	水原若太郎】
理事	大東亞事務官	腰原仁 【評議員鍊成課長】
監事	大東亞書記官	華山親義
書記	大東亞囑	大塚孝夫
	文部省關係本會役員ノ官職上異動アル者	
理事	圖書局總務課長	高瀬五郎 松下寛一
“	涉外課長代理 森田孝 (前ニハ對滿事務局事務官トシテ本會理事ニ就任)	
	【第二編輯課長	塩原直道】
“	涉外課長	久保田藤磨
顧問	前教學局長官 (文部省總務局長)	藤野 惠
	(教學局長—近藤壽治 (前ニハ教學局部長トシテ評議員ニ就任)—	
	【退任】	
評議員	文部事務官 (文藝課事務官)	金丸三郎
“	文部省國民教育局長	【額瀨】彌三
“	文部省普通事務局長	中野善敦
“	(前教學局部長) 總務局勤務ヲ命ゼラル	堀池英一
	官制異動其他ニヨリ選任セラルベキ役員	
副會長	興亞院文化部長	松村 恭
常任理事	興亞院書記官	【×】 榎谷秀夫
理事	興亞院囑託	杉浦齋
“	文部省圖書事務官	松下寛一
“	對滿事務局事務官	【×】 森田孝
顧問	拓務次官	植場鐵三
“	興亞院總務長官心得	及川源七
“	興亞院華中連絡部長官	太田泰治
“	興亞院厦門連絡部長官	福田良三
“	教學局長官	藤野惠
評議員	興亞院調査官	緒方眞記
“	文部事務官	金丸三郎
“	拓務書記官	柏原依郎
“	興亞院書記官	武内龍次
“	興亞院事務官	藤野進
評議員	興亞院調査官	眞方勲
“	對滿事務局事務官	松崎健吉
“	外務省東亞局長	【×】 山本熊一
	ロ、文理科大學教授神保格氏トノ交渉ノ件	

會議名・年月日・時・場所	(本文)
日本語教育振興會第二十四回常任理事會 (昭和十八年)一月七日午前十一時ヨリ午後一時二十分ニ至ル 於文部省圖書局長應接室	一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 關野大東亞省調査官 長沼總主事 上村主事 鹿島主事
	一、配布書類 第二十四回常任理事會議題
	一、協議決定事項
	1、各部主任ノ件 從來ノ各部主任制ヲ廢【中止】シ總主事ヲシテ本會ノ事務一切ヲ統括セシムルコト。 但シ會計部ノミハ金錢ノ保管上主任ヲ殘置スルモ書類ハ會計部主任ヨリ更ニ總主事ヲ經由セシメ總主事ニ於テ金錢ノ出納狀態ヲ知悉シ得ル如クスル事。
	2、役員異動ノ件 大東亞省側役員ハ大東亞省案ニ對シ興亞鍊成所鍊成官吉田三郎氏ヲ加ヘ原案通り決定手續ヲトルコト。
	3、國際學友會ヨリ教師派遣方申出ノ件 國際學友會ヨリ教師派遣方申出アリタルタメ研究部ヨリ山口主事・鶴川研究員ヲ派遣スルコト。
	4、ソノ他
	イ、主事分擔ノ件 庶務鹿島主事、會計上村主事、圖書伊藤主事、研究山口主事、雜誌福田主事、普及、指導ノ兩部ハ當分主事ヲオカズ
	ロ、部屋ノ件 省内ニ於テ工夫スルヲ第一トスルモ敵産家屋ヲモ考慮スルコト。
	ハ、徳川頼貞侯(比島軍政顧問)トノ懇談會ヲ開催ノコト。
別紙「第二十四回常任理事會議題」	
一、報告	
イ、十二月三十一日付ヲ以テ長沼主事兼總主事代理ヲ總主事ヘ【ニ】西尾總主事ヲ常任理事ヘ【ニ】任命ノ件發令アリタリ	
ロ、本會顧問赤間信義氏舊臘逝去セラレタルニ付長沼總主事本會ヲ代表シテ弔問セリ	
二、議題	
イ、各部主任ノ件	
ロ、役員異動ノ件 【會計以外置カズ】	
副會長 大東亞次官	山本熊一
顧問 特命全權大使(滿洲)	梅津美治郎
〃 〃 (支那)	重光葵
〃 〃 (タイ)	坪上貞二
〃 特派大使(佛印)	芳澤謙吉
〃 大東亞省總務局長	竹内新平
〃 〃 滿洲事務局長	今吉敏雄
〃 〃 支那事務局長	宇佐美珍彦
〃 〃 南方事務局長	水野伊太郎
〃 大東亞省參事官	松村隼
〃 特命全權公使(上海)	田尻愛義
〃 〃 (北京)	鹽澤清宜
〃 〃 (張家口)	岩崎民男
評議員 大東亞書記官	榎谷秀夫
〃 大東亞書記官【(總務局鍊成課長)】	島津久太
〃 大使館一等書記官(北京)	別所孝太郎
〃 〃 調査官(北京)	丁字尚
〃 總領事(青島)	喜多長雄
〃 大使館調査官(張家口)	曾我孝之
〃 大使館參事官(上海)	伊藤隆治
〃 大使館調査官(上海)	野村市次【治】郎
〃 〃 【厦門】	
評議員 大東亞省調査官兼興亞鍊成所鍊成官	白木【喬】一

會議名・年月日・時・場所

(本文)

	<p>【興亞鍊成所鍊成官 吉田三郎】</p> <p>〃 領事 (河内) 箕輪三郎</p> <p>〃 在盤谷日本文化會館々長 柳澤健</p> <p>常任理事 大東亞書記官 (支那事務局文化課長) 藤井重雄</p> <p>〃 〃 (南方事務局文化課長) 東光武三</p> <p>〃 大東亞省調査官 關野房夫</p> <p>〃 大東亞事務官 相良惟一</p> <p>理事 大東亞書記官 (總務局總務課長) 杉原荒太</p> <p>〃 大東亞省調査官 (支那事務局總務課長) 堂脇光雄</p> <p>〃 大東亞書記官 (南方事務局政務課長) 【荻】原徹</p> <p>〃 〃事務官 腰原仁</p> <p>〃 大東亞省事務囑託 大志万準治</p> <p>〃 〃 田中末雄</p> <p>監事 大東亞書記官【(會計課長)】 華山親義</p> <p>書記 大東亞屬 大塚季夫</p> <p>ハ、國際學友會ヨリ教師派遣申出ノ件</p> <p>ニ、ソノ他</p>
	<p>別紙「文部省關係役員(案)」</p> <p>會長 文部大臣 橋田邦彦</p> <p>副會長 文部次官 菊池豐三郎</p> <p>理事長 文部省圖書局長 松尾長造</p> <p>理事(常任) 文部省國語調査官(圖書局國語課長) 大岡保三</p> <p>〃 〃 文部省圖書監修官 釘本久春</p> <p>〃 文部事務官 田中 彰</p> <p>文部事務官(總務局涉外課長代理) 森田孝</p> <p>〃 (總務局涉外課長) 久保田藤磨</p> <p>〃 文部書記官(圖書局總務課長) 高瀬五郎</p> <p>文部省圖書監修官(圖書局第一編修課長) 井上起</p> <p>〃 (圖書局第二編修長) 鹽野直道</p> <p>文部省囑託 長沼直兄</p> <p>海軍中佐 鹿江隆</p> <p>監事 文部書記官 柴沼直</p> <p>顧問 總務局長 藤野惠</p> <p>【國民鍊成所長 松岡】</p> <p>評議員 文部書記官(秘書課長) 有光次郎</p> <p>文部省圖書監修官 松田武夫</p> <p>〃 石森延男</p> <p>湯澤幸吉郎</p> <p>文部省國語調査官 吉田澄夫</p> <p>〃 廣田榮太郎</p> <p>文部省教學官兼國民精神文化研究所員 志田延義</p> <p>文部省教學官兼國民鍊成所指導官 木下一雄</p> <p>國民鍊成所指導官 市谷信義</p> <p>文部省教學官(華北政務委員會教育總署總編纂)長岡彌一郎</p> <p>文部省圖書監修官(〃 【副編纂】) 森下眞男</p>
<p>日本語教育振興會第二十五回常任理事會</p> <p>一月十五日午前十一時三十分ヨリ午後一時ニ至ル於文部省圖書局長應接室</p>	<p>一、出席者</p> <p>松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事</p> <p>長沼總主事 上村主事 鹿島主事</p> <p>一、配布書類 第二十五回常任理事會議題</p> <p>一、協議決定事項</p> <p>イ、ハナシコトバ増刷ノ件</p> <p>日配ヨリハナシコトバ上50,000 中10,000 下5,000注文アリタルニ付 上ハ前回決定50,000 (第二十回常任理事會) ト合セ上【10】0,000【(内40,000分ハ支拂延期ヲ</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	交渉ノコト】中50,000増刷スルコトニ決定下ハ目下手持アルタメ増刷ノ要ナシ
	ロ、京都ニテ講演會開催ノ件 準備ニ萬全ヲ盡シ効果ノニ實施スベク努力スルコトトシテ原案通り決定
	ハ、研究囑託ノ件 囑託制ハアルコト故原案ヲ作製ノ上次ノ理事會ニ提出ノコト
	ニ、用紙申請ノ件 尚ヨク實需數量審議ノ上考慮スルコト
	ホ、ソノ他
	1、放送局ヨリ短派(マ)放送依頼ノ件 放送協會國際局ヨリ非公式ニタイ向短波放送ヲ毎土曜夜十分間日本語放送ヲナシ日本語的【雰】圍氣ノ中ニ日本語ニ興味ヲ持タセル計畫ヲ本會ニ依頼シタキ旨ノ申出アリタル件ハ本會トシテ有意義ナルニ付話ヲスメルコト
	2、國際學友會トノ懇談ノ件 本會ヨリ講師派遣等ニヨリ國際學友會ト一層關係深クナリタルタメ懇談シタキ件ハ開催ト決定
	3、支那派遣講師ノ件 華北日本語教育研究所ヨリ申出ノ本會ヨリノ派遣講師ノ件總主事ニ於テ原案作製ノコト
	4、軍務局員トノ懇談ノ件 日本語普及並ニ日本語教員派遣ニ關シ軍務局トノ懇談シタキ件ハ開催ト決定
	別紙「第二十五回常任理事會報告及議題」
	一、報告 イ、田中理事母堂逝去ニツキ一月八日山口主事弔問九日長沼總主事會ヲ代表シテ弔問セリ ロ、一月十六日如水會館ニ於テ陸軍報道班員三木清氏ヲ講師トシテ南方日本語普及上ノ諸問題ニ關シ本會職員ヲシテ聽講セシムルコトトナレリ ハ、國際學友會ハ一月十八日ヨリ山口主事鶴川研究員ヲ講師トシテ派遣スル運トナレリ
	二、議題 イ、ハナシコトバ増刷ノ件【上50,000 中50,000】 ロ、京都ニテ講演會開催ノ件 (案) 一、目的 大東亞共榮圈ニ對スル日本語普及ノ問題ニツキ一般ノ關心ヲ昂メルタメ 一、日時 昭和十八年二月十三日(土曜)午後五時 九時 一、會場 京都烏丸夷川上ル新聞會館 一、次第 一部 講演挨拶(又は常任理事又ハ總主事) 講師 學者一(京都) 報道班員一(東京) 二部 映畫 文化映畫一 劇映畫一
	一、經費概算 會場費 7,000 廣告料 15,000 上映料 5,000 旅費 30,000 (三名) 講師謝禮 25,000 雜費 5,000 合計 87,000
	ハ、研究囑託ノ件 神保格——湯澤幸吉郎——岩淵悦太郎 ニ、用紙申請ノ件 ホ、ソノ他
日本語教育振興會第二十六回常任理事會 (昭和十八年)一月二十二日午前十一時三十分ヨリ午後一時ニ至ル	一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 關野常任理事【大東亞省調査官】 相良常任理事【大東亞事務官】 西尾常任理事 長沼總主事 鹿島主事 一、配布書類 第二十六回常任理事會議題 一、協議決定事項

會議名・年月日・時・場所	(本文)
於文部省圖書局長應接室	<p>イ、華北派遣講師ノ件 先ヅ神保格氏ニ交渉シ同氏受諾セザルトキハ岡本千万太郎氏ニ交渉スルコトニ決定</p> <p>ロ、役員 (文部・大東亞兩省關係以外ノ分) ノ件 原案ニツキ審議ソレゾレ決定 尚大東亞省關係分追加トシテ大東亞書記官 (人事課長) 山中徳二氏及ビ大使館一等通譯官【麓】保孝氏ヲソレゾレ評議員ニ委嘱ノ件決定</p> <p>ハ、京都ニ於ケル講習會ノ件 原案ニツキ審議ノ結果講師トシテ澤瀉久孝氏西尾常任理事ニ委嘱スルコトトシ軍關係講師ハ陸海軍報道部ニ交渉スルコトトス 尚諸般ノ準備ノタメ伊藤主事ヲ京都ニ派遣スルコトト決定</p> <p>ニ、「コトバ」同人研究會ノ件 大岡常任理事ヨリ輿水實氏來訪セラレ補充教材ノ編纂教授法叢書ノ刊行現地教員トノ連絡等ニツキ提案アリタル旨ノ發言アリ、右ニ對スル回答ハ本會ノ態度決定マデ留保スルコトトス</p> <p>別紙「第二十六回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告 1、在青島日本帝國總領事館白井課長ヨリハナシコトバ同指導書賣上代金第二回分金壹千拾五圓八拾五錢也 (昭和十七年十二月末日現在) 送金アリタリ</p> <p>二、議題 1、華北派遣講師ノ件 イ、常任理事 西尾實 ロ、評議員 神保格 ハ、評議員 東條操 ニ、岩淵悦太郎 ホ、評議員 岡本千万太郎 ヘ、五味智英 【大東亞書記官 人事課長 山中徳二】 【大使館一等通譯官 麓保孝】 2、役員 (文部省大東亞兩省關係以外ノ分) ノ件 3、ソノ他</p>
日本語教育振興會第二十七回常任理事會 (昭和十八年)一月二十九日 於圖書局長應接室	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 關野調査官 相良大東亞事務官 長沼總主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 第二十六回常任理事會協議要録及ビ第二十七回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議決定事項 イ、理事會開催ノ件 右ハ三月下旬開催ノコトニ決定 ロ、簡易學習辭典編纂ノ件 支那ニ於ケル日本語學習者ノ便ヲ考慮セル簡易日華辭典ノ編纂ノ必要ニツキテハ異議ナク且十七年度豫算中ヨリ支出可能ナルモ更ニ具體案ヲ練リ次回理事會ニ提出スルコト</p> <p>別紙 「第二十七回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告 イ、京都ニ於ケル講演會準備ノタメ一月二十六日伊藤主事ニ京都出張ヲ命ジタリ ロ、一月二十二日午後三時柳澤健氏、國友、石丸兩氏ヲ帶同タイ國事情ノ説明並ニ午後ノ連絡ノタメ來訪、圖書局長應接室ニ於テ懇談セリ ハ、本會前副會長松村憲氏及ビ前常任理事榎谷【秀夫】氏ヲ招待シ一月二十六日午後五時半白水ニ於テ慰勞會ヲ開催セリ ニ、第一回南方派遣教育要員ノ集結ヲ機トシ今後ノ連絡ヲ圖ルタメ懇談會ヲ兼ネ壯行會ヲ一月二十六日午後五時半ヨリ京橋富士アイスニ於テ開催セリ ホ、陸軍省・文部省・大東亞省トノ關係ヲ緊密ニスルタメ陸軍省關係官三名文部省關係官七名大東亞省關係官一名ヲ招待シ一月二十七日午後五時半白水ニ於テ連絡懇談會ヲ開催セリ ヘ、華北及ビ蒙疆ニ派遣スベキ本會側講師ニツキ神保氏ニ交渉ノ結果同氏ノ内諾ヲ得タリ</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)																								
	二、議題 イ、理事會開催ノ件 【三月下旬開催トス】 ロ、其他																								
日本語教育振興會第二十八回常任理事會 (昭和十八年)二月五日 於文部省第五會議室	一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 關野調査官 相良大東亞事務官 長沼總主事 上村主事 伊藤主事																								
	一、配布書類 第二十七回常任理事會協議要録及ビ第二十八回常任理事會報告及議題																								
	一、協議決定事項																								
	イ、簡易日本語學習辭典(假稱)編纂ノ件 右ハ編纂費1,500圓、【翻】譯料1,000圓、整備並ニ連絡費 1,000圓ノ概算ニテ着手ニ決定、原稿ハ三月一杯ニ完成ノ豫定トス 擔當者ニ就テハ更ニ具體案ヲ作成シ協議スルコト ロ、掛圖配布ノ件 ハ、青島ヘノ日本語讀本送附ノ件 ニ、講演會講師ノ件 以上ハ時間不足ノ為次回理事會ニテ協議スルコト																								
	別紙「第二十八回常任理事會報告及議題」																								
	一、報告 イ、一月二十九日午後五時半ヨリ白水ニ於テ比島軍政顧問徳川頼貞侯及ビ本會囑託田端利夫氏ヲ招待シ比島ニ於ケル日本語普及ノ諸問題ニ關シ懇談セリ ロ、二月二日正午法曹會館ニ於テ國際學友會幹部トノ連絡懇談會ヲ開催セリ ハ、一月三十日午後三時ヨリ文部省第五會議室ニ於テ前陸軍報道班員清水幾太郎氏ヲ講師トシテビルマニ於ケル日本語普及ノ諸問題ニ關スル講演ヲ本會職員ニ聽講セシメタリ ニ、陸軍需品本廠ヨリ曩ニ注文セル「ハナシコトバ」上、中、下各拾參万貳千、中上ハ參万貳千ノ誤ニツキ陳謝ト共ニ訂正方ノ申込アリタリ。 ホ、曹洞宗興亞鍊成道場主任齋藤泰全氏ヨリ日本語教育ニ關シ十五時間以上ノ講義方依頼アリ。本會ヨリ大岡、釘本兩常任理事、長沼總主事、山口主事出講ニ決定セリ 尚右講義ハ本月十日ヨリ開始ノ豫定																								
	一、議題 イ、簡易日本語學習辭典(假稱)編纂ノ件 収録語彙 費用概算 約10,000語 【費用概算】 一、編纂費 一語15錢宛 1,500圓 二、【翻】譯料(校閱料共) 1,000圓 三、整備並ニ連絡費 1,000圓 ロ、掛圖配布ノ件 ハ、青島ヘノ日本語讀本送附ノ件 ニ、講演會講師ノ件																								
日本語教育振興會役員名簿	無印ハ 異動ナキモノ ◎ ハ 目下手続中 ○ ハ 近日手続ノ豫定 △ ハ 目下調査中																								
	<table border="0"> <tr> <td>會長</td> <td>文部大臣</td> <td>橋田邦彦</td> </tr> <tr> <td>副會長</td> <td>文部次官</td> <td>菊池豐三郎</td> </tr> <tr> <td></td> <td>◎大東亞次官</td> <td>山本熊一</td> </tr> <tr> <td>理事長</td> <td>文部省圖書局長</td> <td>松尾長造</td> </tr> <tr> <td>常任理事</td> <td>文部省國語調査官</td> <td>大岡保三</td> </tr> <tr> <td></td> <td>文部省圖書監修官</td> <td>釘本久春</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>西尾實</td> </tr> <tr> <td></td> <td>◎大東亞書記官</td> <td>藤井重雄</td> </tr> </table>	會長	文部大臣	橋田邦彦	副會長	文部次官	菊池豐三郎		◎大東亞次官	山本熊一	理事長	文部省圖書局長	松尾長造	常任理事	文部省國語調査官	大岡保三		文部省圖書監修官	釘本久春			西尾實		◎大東亞書記官	藤井重雄
會長	文部大臣	橋田邦彦																							
副會長	文部次官	菊池豐三郎																							
	◎大東亞次官	山本熊一																							
理事長	文部省圖書局長	松尾長造																							
常任理事	文部省國語調査官	大岡保三																							
	文部省圖書監修官	釘本久春																							
		西尾實																							
	◎大東亞書記官	藤井重雄																							

會議名・年月日・時・場所

(本文)

	◎ “	東光武三
	◎大東亞省調査官	關野房夫
	◎大東亞事務官	相良惟一
理事	陸軍省軍務課員陸軍大尉	赤池春夫 【井上起】
	東亞同文會常務理事	一宮房治郎
	善隣協會理事長	大島豊
	國際文化振興會專任常務理事伯爵	黒田清
	日華學會理事	近澤道元
	青年文化協會常務理事	豊田久二
	日語文化協會主事	松宮一也
	○情報局情報官	田付景一
	國際學友會專務理事	矢田部保吉
	國語協會理事長	【築】田欽次郎
	文部事務官	田中彰
	文部省囑託	長沼直兄
	○文部事務官	森田孝
		【久保田藤磨】
	○文部書記官	高瀬五郎
理事	○文部省圖書監修官	鹽野直道
	◎大東亞書記官	杉原荒太
	◎大東亞省調査官	堂脇光雄
	◎大東亞書記官	萩原徹
	◎大東亞事務官	腰原仁
	◎大東亞省囑託	大志万準治
	◎ “	田中末雄
	○海軍省海軍中佐	鹿江隆
監事	文部省書記官	柴沼直
	◎大東亞書記官	華山親義
顧問	△日華學會理事長	
	企畫院次長	阿倍源基
	○東亞同文會理事長	津田靜枝
	○外務次官	松本俊一
	台北帝國大學總長	安藤正次
	東京帝國大學名譽教授	宇野哲人
	東亞研究所副總裁	大藏公望
	情報局次長	奥村喜和男
	毎日新聞社長	奥村信太郎
	九州帝國大學名譽教授	春日政治
	青年文化協會理事長	河原春作
	陸軍次官	木村兵太郎
	日本放送協會會長	小森七郎
	海軍次官	澤本頼雄
	東京帝國大學名譽教授	鹽谷温
	讀賣新聞社長	正力松太郎
	京都帝國大學名譽教授	新村出
顧問	日本出版文化協會々長 公爵	鷹司信輔
	國際文化振興會理事長	永井松三
	衆議院議員	鶴見祐輔
	教科用圖書調査會第三部長	子爵 野村益三
	“ 第二部長	林博太郎
	國語教育學會々長	藤村作
	同盟通信社社長	古野伊之助

會議名・年月日・時・場所

(本文)

	東京文理科大學名譽教授 國語審議會副會長 男爵	保科孝一 穂積重遠
	國語協會副會長 國際學友會理事長 神官皇學館大學長 帝國藝術院會員 △帝國教育會々長 都帝國大學名譽教授 軍政顧問 侯爵 ○軍政顧問 ○ " 侯爵 ◎特命全權大使 ◎ " ◎ " ◎ " ◎大東亞省總務局長 ◎ " 滿洲事務局長 ◎ " 支那事務局長 ◎ " 參事官 ◎特命全權公使	南 弘 宮川米次 山田孝雄 山本勇造 吉澤義則 德川義親 永田秀次郎 德川頼貞 海津美治郎 重光葵 坪上貞二 芳澤謙吉 竹内新平 今吉敏雄 宇佐美珍彦 松村耒 田尻愛義
顧問	◎特命全權公使 ◎ " ○總務局長 ○國民精神文化研究所長 ○國民鍊成所長 △朝日新聞社長	鹽澤清宜 岩崎民男 藤野惠 伊藤延吉 松岡忠一 村山長□
評議員	東亞學校教授 國語審議會委員 早稻田大學教授 京都帝國大學助教授 東京帝國大學教授 教科用圖書調查會委員 男爵 稻田昌植 國學院大學教授 教科用圖書調查會會員 カナモジ會理事 ○每日新聞社文化部長 東京高等師範學校教授 國語協會理事 國語審議會委員 子爵 國語審議會委員 同盟通信社社會部長 東京帝國大學教授	有賀憲三 安藤正純 五十嵐力 石黒修 石黒魯平 泉井久之助 市河三喜 今泉忠義 入江俊郎 上野陽一 黑崎貞治郎 大出正篤 大西雅雄 魚返善雄 岡崎常太郎 岡部長景 緒方竹虎 大屋久壽雄 岡本千万太郎 小倉進平 尾崎士郎
評議員	東京帝國大學教授 京都帝國大學教授 慶應義塾大學教授 東京高等師範學校教授 臺灣總督府編修官	小幡重一 澤瀉久孝 折口信夫 垣内松三 加藤春城

會議名・年月日・時・場所

(本文)

教科用圖書調查會委員	龜山孝一
東亞研究所常務理事	唐澤俊樹
奈良女子高等師範學校教授	木枝增一
大政翼贊會文化部長	高橋健二
法政大學教授	城戸幡太郎
東京帝國大學教授	金田一京助
東京高等師範學校教授	熊澤龍
京都帝國大學教授	倉石武四郎
	黒野政市
	輿水實
京城帝國大學助教授	小林英夫
東北帝國大學教授	小林好日
東亞同文書院教授	坂本一馬
九州帝國大學教授	佐久間【鼎】
	佐藤春夫
國語審議會員	幣原坦
東京帝國大學講師	島津久基
朝鮮總督府編輯官	島田牛稚
讀賣新聞社文化部長	清水彌太郎
國語審議會委員	下村宏
東京文理科大學教授	神保格
日本放送協會業務局長	關正雄
朝日新聞社學藝部長	多賀博
九州帝國大學教授	高木市之助
東京帝國大學教授	高田眞治
國語審議會委員	竹越與三郎
國學院大學教授	武田祐吉
帝國教育會專務理事	武部欽一
國語審議會委員	竹村勘【恣】
國語審議會委員	田澤義輔
日本出版文化協會業務局長	田中四郎
國語審議會委員	田中齋
關東局在滿教務部長	田中義男
	谷川徹三
日本放送協會國際部長	中郷孝之助
東京外國語學校教授	千葉勉
拓殖大學教授	土屋申一
	土岐善磨
東北帝國大學教授	土居光知
廣島文理科大學教授	土井忠生
學習院教授	東條操
南洋廳內務部長	堂本貞一
京城帝國大學教授	時枝誠記
○海軍省教育局長海軍少尉	矢野志加三
日本放送協會教養部長	西本參十貳
	野尻清彦
東京帝國大學教授	橋本進吉
	長谷川萬次郎
東京文理科大學講師	波多野完治
東京帝國大學助教授	服部四郎
	林フミコ
關東局在滿教務部編修官	久世誠一
東京帝國大學教授	久松潛一

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	深田久彌
國語審議會委員	星野行則
情報局部長	堀公一
國語審議會委員	牧野良三
○朝鮮總【督府】學務局長	大野謙一
國語審議會委員	增田義一
國學院大學教授	松尾捨治郎
教科用圖書調查會委員	松宮彌平
國語審議會委員	三木武吉
國語審議會委員	三宅正太郎
東京外國語學校教授	宮越健太郎
興蒙學院教授	宮島英男
拓殖大學教授	宮原民平
陸軍省軍務局長陸軍少將	佐藤賢了
國語審議會委員	森岡常藏
臺灣總督府文教局長	西村高兄
	柳田國男
東京文理科大學教授	小岸德平
新民學院教授	山口喜一郎
	山根藤七
東京高等農林學校講師	湯山清
日本放送協會報道部長	橫山重遠
◎大東亞事務【書記】官	榭谷秀夫
◎大東亞事務【書】官	島津久夫【大】
◎大使官【館】一等事務【書記】官	別所孝太郎
◎大使官【館】一等書記官【調査官】	丁字尚
◎總領事	喜多長雄
◎大使官【館】調査官	曾我孝之
◎大使官【館】參事官	伊藤隆治
◎大使官【館】調査官	野村市次郎
◎興亞鍊成所鍊成官	吉田三郎
◎大東亞省調査官 興亞鍊成所鍊成官	白木【喬】一
◎領事	箕輪參郎
◎在盤谷日本文化會館長	柳澤健
文部書記官	有光次郎
文部省圖書監修官	松田武夫
文部省圖書監修官	石森延男
文部省圖書監修官	湯澤幸吉郎
文部省國語調査官	吉田澄夫
文部省國語調査官	廣田榮太郎
文部省教學官	志田延義
○文部省教學官並國民鍊成所指導員	木下一雄
○國民鍊成所指導官	市谷信義
○文部省教學官	長岡彌一郎
○文部省圖書監修官	森下眞男
◎大東亞書記官	山中德二
◎大使館一等通譯官	【麓】保孝
日本語教育振興會第二十九回常任理事會 (昭和十八年) 二月十二日 於文部省圖書局長應接室	一、出席者 松尾理事長 西尾常任理事 相良大東亞事務官 長沼總主事 上村主事 鹿島主事
	一、配布書類
	第二十八回常任理事會協議要録及ビ第二十九回常任理事會報告及議題
	一、協議決定事項

會議名・年月日・時・場所	(本文)																				
	<p>イ、海軍ヨリ日配ヲ通ジテ掛圖三百部讓渡方依頼アリタル處右ハ日本語普及上効果大ナルベキニヨリ本會設立ノ趣旨ニ鑑ミ依頼ニ應ズルコトニ決定、尚頒價ハ海軍ニ於テ使用スルハナシコトバヨリ生ズル益金モアルコト故一部金拾圓ト決定</p> <p>ロ、簡易日本語學習辭典編纂擔任ノ件 比屋根安雄氏ヲ本會囑託トシ同氏ニ編纂ヲ委嘱シ委員人選ハ同氏ト相談ノ結果決定スルコト</p> <p>別紙「第二十九回常任理事會報告及課題」</p> <p>一、報告 イ、前陸軍報導班員淺野【晃】氏ヲ講師トシテジャワニ於ケル日本語普及ノ諸問題ニ關スル講演ヲ本會職員ニ聽講セシメタリ ロ、日本語讀本卷一【、】千部、卷二【、】千三百部卷三【、】千部青島總領事宛送附スルヤウ支那事務局長ヨリ通牒アリタリ ハ、日本語教師名簿一號(蒙古教育會編)張家口大使館ヨリ四部送附アリタリ</p> <p>二、議題 イ、掛圖頒布ノ件 ロ、簡易日本語學習辭典編纂擔任ノ件</p>																				
日本語教育振興會第三十回常任理事會 昭和十八年二月十九日 (金)	欠(資料なし)																				
日本語教育振興會第三十一回常任理事會 (昭和十八年)二月二十六日 於文部省第五會議室	<p>一、出席者 大岡常任理事 釘本常任理事 關野大東亞省調査官 相良大東亞事務官 長沼總主事 上村主事 鹿島主事</p> <p>一、配布書類 第三十回常任理事會協議要録及第三十一回常任理事會議題及報告</p> <p>一、協議事項 イ、理事長缺席ノタメ報告事項本會豫算収支等ニ關シ懇談セリ ロ、相良大東亞事務官ヨリ現地ヨリノ要望ニヨリ大東亞調査官西田匠氏ヲ評議員ニ追加セラレタキ旨申出アリタリ</p> <p>別紙「第三十二回常任理事會議題及報告」</p> <p>一、報告 イ、京都ニ於ケル日本語普及問題講演會ハ二月二十七日午後一時ヨリ京都烏丸通り新聞會館ニ於テ左記ノ如ク決定之ガ準備ノタメ伊藤主事ハ二月二十二日出張、福田主事ハ二十六日京都へ出張ノ豫定 講演【會】講師 本會常任理事 西尾實、本會評議員 澤瀉久孝 歸還報導班員 三木清 映畫 「英國崩るるの日」 ロ、海南島海軍特務部北畠現映氏ノ斡旋ニヨリ雜誌「日本語」二百餘名現地博文館ヨリ日配ヲ通シテ講讀セシムルコトトナリタル旨通知アリタリ ハ、北京大學日文系學生六名二月二十日午後五時ヨリ明治生命館地下室マープルニテ招待晚餐會ヲ開催セリ</p> <p>二、議題 イ、本會豫算収支ニ關スル件</p> <p>収支一覽表 昭和十八年一月分</p> <table border="1"> <thead> <tr> <th colspan="3">収 入</th> <th colspan="3">支 出</th> <th rowspan="2">現在高</th> </tr> <tr> <th>前月迄累計</th> <th>本月分</th> <th>計</th> <th>前月迄累計</th> <th>本月分</th> <th>計</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>109,995 圓 800</td> <td></td> <td>109,995 圓 800</td> <td>67,382 圓 180</td> <td>5,315 圓 060</td> <td>72,697 圓 240</td> <td>37,298 圓 560</td> </tr> </tbody> </table> <p>収入計算書</p>	収 入			支 出			現在高	前月迄累計	本月分	計	前月迄累計	本月分	計	109,995 圓 800		109,995 圓 800	67,382 圓 180	5,315 圓 060	72,697 圓 240	37,298 圓 560
収 入			支 出			現在高															
前月迄累計	本月分	計	前月迄累計	本月分	計																
109,995 圓 800		109,995 圓 800	67,382 圓 180	5,315 圓 060	72,697 圓 240	37,298 圓 560															

會議名・年月日・時・場所 (本文)

昭和十八年一月分						
科目	豫算額 圓	収入額			豫算残高 圓	備考
		前月迄累計 圓	本月分圓	計 圓		
日本語教育振興會收入	140,700 000	109,995 800	0	109,995 800	30,704 200	右+ハ 豫算額 ニ比シ 収入増
政府助成金	130,000 000	90,000 000	0	90,000 000	40,000 000	
興亞院助成金	130,000 000	90,000 000	0	90,000 000	40,000 000	
賣上収入	4,000 000	12,548 260	0	12,548 260	+8,548 260	
教科書賣上代	2,500 000	10,948 100	0	10,948 100	+8,448 100	
教育資料賣上代	500 000	0	0	0	500 000	
雜誌賣上代	1,000 000	1,600 160	0	1,600 160	+600 160	
雜収入	200 000	935 910	0	935 910	+735 910	
雜収入	200 000	935 910	0	935 910	+735 910	
前年度繰越金	6,500 000	6,511 630	0	6,511 630	+11 630	
前年度繰越金	6,500 000	6,511 630	0	6,511 630	+11 630	
支出計算書						
科目	豫算額 圓	支出額			豫算残高 圓	備考
		前月迄累計 圓	本月分圓	計 圓		
日本語教育振興會費	140,700 000	67,382 180	5,315 060	72,697 240	68,002 760	
俸給	12,180 000	12,029 660	412 530	12,442 190	△262 190	
總主事俸給	3,000 000	1,980 000	199 300	2,179 300	820 700	
主事俸給	3,480 000	4,283 210	213 230	4,496 440	△1,016 440	
書記俸給	1,200 000	456 450	0	456 450	743 550	
諸手當	4,500 000	5,310 000	0	5,310 000	△810 000	
事務費	15,050 000	12,007 110	826 130	12,833 240	2,216 760	
廳費	7,850 000	3,723 230	0	3,723 230	4,126 770	
交通通信費	900 000	491 700	58 450	550 150	349 850	
旅費	1,400 000	3,463 580	0	3,463 580	△2,063 580	
會議費	1,800 000	1,609 240	332 990	1,942 230	△142 230	
雜給及雜費	3,100 000	2,719 360	434 690	3,154 050	△54 050	
□□□□費	5,850 000	1,291 580	0	1,291 580	2,558 420	
講習及講演會費	2,550 000	947 500	0	947 500	1,602 500	
□□□□費	1,300 000	344 080	0	44 080	955 920	
出版費	99,400 000	33,724 850	3,545 900	37,270 750	62,129 250	
教科書出版費	50,000 000	15,377 910	274 580	15,652 290	34,347 710	
教育資料出版費	18,400 000	220 000	0	220 000	18,180 000	
豫備出版費	19,000 000	15,035 720	3,271 520	18,305 240	694 760	
豫備頒布費	12,000 000	5,095 220	0	3,095 220	8,906 780	
日華辭典編輯費	10,000 000	8,528 980	550 500	8,859 480	1,140 520	
日華辭典編輯費	10,000 000	8,528 980	550 500	8,859 480	1,140 520	
豫備費	220 000	0	0	0	220 000	
豫備費	220 000	0	0	0	220 000	
日本語教育振興會第三十二回常任理事會 (昭和十八年)三月五日午前十一時ヨリ 於文部省第五會議室	一、出席者					
	松尾理事長 藤井常任理事 東光常任理事 相良常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 長沼總主事 上村主事 鹿島主事					
	一、配布書類					
	第三十二回常任理事會議題及報告					
	一、協議事項					
1、日本語教材編纂ノ件 日本語教授者懇談會ヨリ日本語學習用教材編纂協力方申出アリタル件ハ本會事業計						

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>畫ノ全般ヨリ考慮シ更ニ折衝ノ上豫纂化シ更ニ常任理事會ニ圖ルコト</p> <p>2、總理事會ニ關スル件 三月二十二日又ハ二十三日午前十一時ヨリ開催ノコト 顧問會ハ二十三日以後ニ於テ會長副會長ノ都合ノヨキ日ヲ選ブコト</p> <p>3、ハナシコトバ (特別會計ニテ増刷分) 賣證【價】ニ關スル件 助成金ニテ印刷ノ分ハ大東亞省ノ指令ニヨリソノ他ノ分ハ日配ニ對スルト同様ニ取扱フコト 尚厦門ヨリノ注文ニ對スル分ニツキテハ相良常任理事ヨリ一應照會ヲ乞フコト</p> <p>別紙 「第三十二回常任理事會議題及報告」</p> <p>一、報告 1、二月二十七日午後三時ヨリレインボーグリルニテ日本語教授者實際家懇談會委員會ヲ開催セリ 2、京都ニ於ケル日本語普及問題講演會ハ豫定通り無事終了セリ 聽衆者六百餘名アリ</p> <p>二、議題 1、日本語教材編纂ノ件 2、總理事會ニ關スル件 3、ハナシコトバ (特別會計ニテ増刷ノ分) 定【賣】価ニ關スル件 【理事會二十二日又ハ二十三日】</p>
<p>日本語教育振興會第三十三回常任理事會 (昭和十八年)三月十二日 午前十一時ヨリ 於文部省第五會議室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 藤井常任理事 相良常任理事 西尾常任理事 長沼總主事 鹿島主事</p> <p>一、配布書類 第三十一回常任理事會協議要録、第三十二回常任理事會協議要録、第三十三回常任理事會議題及報告</p> <p>一、協議事項 イ、日本語普及問題調査委員會ノ件 原案中第三部會「留學生の日本語教育及生活指導ノ問題」ヲ「留學生ノ日本語教育ノ問題」ト訂正ノ上原案通り實施スルコトニ決定ス ロ、日本語常識叢書編纂ノ件 常識叢書トイフ名稱ハ更ニ考慮シ具體的内容ハ追テ研究スルコトニシテ編纂發行スルコトニ決定ス ハ、ハナシコトバ等日配ヨリ注文ノ件 (追加) 本會ノ能力ニ應ジテ極力應諾スルコト</p> <p>【昭和十八年度支那事務局助成豫定】 【成人用日本語讀本 卷一、二、 各三萬部】 【日本語讀本學習指導書 三、四卷 各四千】 【文法書 一冊 五萬部】 【地圖 五千部】</p> <p>別紙「第三十三回常任理事會議題及報告」</p> <p>一、報告 昭和十七年度補助金第三回分金四萬圓也交付ノ指令アリタリ</p> <p>二、議題 (イ) 日本語普及問題調査委員會ノ件 (ロ) 日本語常識叢書編纂ノ件 (ハ) 日本語常識叢書編纂ノ件普及問題調査委員會ノ件 第一部會 普及方策ニ關スル研究 (日本語教育ニ關スル一般文化工作其他普及等ニ關スルモノ) 企畫院 陸軍省 情報局 海軍省 大東亞省 文部省 支那【事務】局 南方【事務】局 【滿洲事務局】</p> <p>第二部會 日本語自体ニ關スル研究 (文法上ノ問題ノ如キ日本語自体ニ關スルモノ) 湯澤幸吉郎 岩淵悅太郎 戸田吉郎 木村新</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>松田武夫 五味智英 吉田澄夫</p> <p>第三部會 教育ニ關スル研究 (留學生ノ日本語教育及生活指導ノ問題日本語教師養成ノ問題ノ如キモノ)</p> <p>文部省 企畫院 大東亞省 陸軍省 海軍省 國際學友會 東亞學校 青年文化協會 東京高師</p>
日本語教育振興會第三十四回常任理事會 (昭和十八年) 三月十九日 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室	<p>一、出席者</p> <p>大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 相良常任理事 田中理事 長沼總主事 上村主事 鹿島主事</p>
	<p>一、配布書類</p> <p>第三十三回常任理事會協議要録、第三十四回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、理事會及顧問會ニ提出スベキ昭和十七年度事業報告書ノ件 原案中ノ一部ヲ訂正シテ作製スルコト</p> <p>ロ、「日本語常識叢書」名稱及内容ノ件 「名稱ハ日本語普及叢書」トシ内容ハ廣ク日本語普及ニ資スル各般ノ問題ヲ包含セシメ執筆者ニツキテハ總主事ニ於テ適宜選定立案スルコト</p> <p>ハ、大東亞省支那事務局關係豫算ニ關スル件 (追加) 大東亞省支那事務局關係來年度事業豫算ニ關シ田中理事ヨリ報告懇談セリ</p>
	別紙「第三十四回常任理事會報告及議題」
	(三月十九日午前十一時半ヨリ於文部省第五會議室)
	<p>一、報告</p> <p>イ、三月十七日大政翼贊會興亞教育事業團體會議ニ長沼總主事本會ヲ代表シテ出席セリ</p> <p>ロ、教授者懇談會第三回委員會ヲ三月十七日午後三時ヨリ如水會館ニ於テ開催セリ</p> <p>二、議題</p> <p>イ、理事會及ビ顧問會ニ提出スベキ昭和十七年度事業報告書ノ件</p> <p>ロ、「日本語常識叢書」名稱及内容ノ件</p> <p>【掛圖ヲ持參スルコト】 【雜誌□記ス】 【圖書ヲ展覽ス】 【學友會、タイ向放送】 【養成所・講師・資料ノ件】</p>
	<p>(イ) 日本語普及問題調査委員會ノ件 常識叢書編纂ノ件</p> <p>一、○東亞ニ於ケル西歐語ノ普及 【日本語の指導書】</p> <p>二、○東亞ノ諸民族語 【日本語の書き方】</p> <p>三、日本語常識【普及】叢書 【日本の文字】</p> <p>1、【大東亞と】日本語普及の理念 9、標準【漢】字の話</p> <p>2、日本語の教へ方 10、あて字の話</p> <p>3、標準語の話し方 11、【漢】字の字体</p> <p>4、日本語の發音【(アクセント)】 12、送り假名の話</p> <p>5、日本語のアクセント 13、分別書と句讀法</p> <p>6、かなとかな遣 14、慣用音の話</p> <p>7、日本語の書き方 15、國語教育と日本語</p> <p>8、【()發音符號の話()】 16、日本語の特質</p> <p>【2 現地事情 (支那、滿洲、南方)】 【3 日本語要説】</p>
第二回理事會 (昭和十八年) 三月二十二日 午前十一時半ヨリ 於大東亞會館	<p>一、出席者</p> <p>松尾理事長 大岡 釘本 東光 相良 西尾各常任理事 井上 鹽野 高瀬 腰原 大志万 田中 近澤 松宮各理事 長沼總主事 上村 伊藤 鹿島各主事</p>
	一、次第

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	1、挨拶 松尾理事長 2、昭和十七年度事業報告 長沼總主事 3、總主事辭任ノ挨拶 西尾常任理事 4、懇談
	近澤理事 最近支那の學生に日本語が普及して留學生は大體七八割は日本語で日常の用が達せられるやうになつてきた。大東亞戰の結果日本語普及が廣く大東亞に廣げられるやうになつてきたのは當然で結構であるが大東亞戰の成否は支那を如何に處理するかにあるのであるから依然として支那に中心をおいて貰ひたい。殊に資源關係から南方にすべてのことが集中されてゐるが、從來の支那に對する日本語普及に對して傾けてきた力を抜かないやうお願ひしたいと思ふ。
	東光常任理事 言葉は國民のながい傳統精神を集積したものであるので、これを教へ込むことが文化工作の捷徑である。南方占領地は別として大東亞省管内の泰佛印においては現在に【か】うした氣運に向つて進んでゐる。そこで會にお願ひしたいことは日本語普及の根本的方面について研究立案していただきたい。 現地ではともすれば便宜主義にもなれば又誤りもおかし易い。そこでながい目でみて間違ないやう根本的なことに深く目をそそいで欲しい。そ【さ】うした方面への研究の費用もと【つ】てあるのでどしどし利用して欲しい。言葉を知ることは【そ】の國に對する親愛の情を覺えるものである。 そこで日本語を覺えると知らず知らずの内に親日的になつてくるものである。 か【こ】のやうに【このやうに】いろいろのことで日本語の普及といふことが文化工作の基礎になると思ふ。
	別紙「昭和十七年度事業報告書 日本語教育振興會」 一、日本語教育ニ關スル編纂事業【刊行】概況 【最後へ回ス】 イ、情報局編纂本會刊行物 ニツボンゴ 六種 昭和十七年九月 - 昭和十八年一月 (半島マレー語、島(嶼)マレー語、安南語、タイ語、ビルマ語、タガログ語)
	ロ、文部省編纂本會刊行物 日本語讀本 卷四 日本語讀本 卷五 日本語讀本學習指導書 卷一 (印刷中) 日本語讀本學習指導書 卷二 日本文化讀本 三種 「日本の紡績」 「日本の年中行事」 「日本の女性生活」
	ハ、本會編纂刊行物 日本語教授法の原理 (印刷中) 日常生活に於ける敬語法 (印刷中) 東亞に於ける西歐語の普及 (原稿完成) 東亞に於ける諸民族語 (原稿完成) 各種教授法の研究 (原稿完成) 日支標準音の比較及口型圖 (原稿完成) 現代語の諸問題 (印刷中)
	二、前年度刊行物中本年度増刷ノ分 ハナシコトバ 上 五、〇〇〇部 昭和十七年十月 一三二、〇〇〇部 昭和十八年二月 ハナシコトバ 中 一八二、〇〇〇部 昭和十八年三月 ハナシコトバ 下 一三二、〇〇〇部 昭和十八年二月 ハナシコトバ學習指導書 上 一、〇〇〇部 昭和十七年十月 ハナシコトバ學習指導書 中 一、〇〇〇部 昭和十八年一月 ハナシコトバ學習指導書 下 一、〇〇〇部 昭和十八年一月 日本語讀本 卷一 三二、〇〇〇部 昭和十八年二月

會議名・年月日・時・場所	(本文)						
	<p>日本語讀本 卷二 三二、〇〇〇部 昭和十八年二月</p> <p>二、日本語教師養成ニ關スル事業概況</p> <p>イ、第二回日本語教育講座</p> <p>期間 自昭和十七年七月二十六日至七月三十一日</p> <p>場所 小石川大塚東京文理科大學ニ於テ 實施</p> <p>講義時間 計二十四時間 受講人員七十名</p> <p>ロ、支那派遣教員鍊成</p> <p>第六回鍊成</p> <p>自昭和十七年五月十三日至五月三十日 十八日間</p> <p>府下小金井町浴恩館ニ於テ實施 受講人員五十八名</p> <p>第七回鍊成</p> <p>自昭和十七年九月二十一日至九月三十日 十日間</p> <p>澁谷區原宿東亞報德會東京會堂ニ於テ實施 受講人員五十三名</p> <p>第八回鍊成</p> <p>自昭和十七年十月十日至十月二十日 十一日間</p> <p>澁谷區原宿東亞報德會東京會堂ニ於テ實施 受講人員六十二名</p> <p>日支漢字ノ異義調査</p> <p>日本語語彙ノ調査</p> <p>【標準】日華辭典ノ編纂</p> <p>簡易日本語學習辭典ノ編纂</p> <p>ロ、日本語教授者懇談會ノ開催</p> <p>第二回總會 昭和十七年九月十八日 於雅絃園 出席者四十三名</p> <p>第二回委員會 昭和十八年二月二十七日 於レインボーグレル 出席者八名</p> <p>第三回委員會 昭和十八年三月十七日 於如水會館 出席者六名</p> <p>ハ、日本語普及問題調査【研究】委員會ノ開催 (目下準備中)</p> <p>第一部會 普及方策ニ關スル研究</p> <p>第二部會 日本語自体ニ關スル研究</p> <p>第三部會 日本語教育ニ關スル研究</p> <p>ニ、日本語普及叢書ノ刊行 (目下準備中)</p> <p>ホ、日本語普及講演會</p> <p>昭和十八年二月二十七日京都市新聞會館ニ於テ開催 聴衆者【約】六百名</p> <p>講演</p> <p>日本語教育の諸問題 西尾 實</p> <p>日本語普及と國語への反省 澤瀉 久孝</p> <p>フィリッピンより歸りて 三木 清</p> <p>他ニ映畫 「英國崩るるの日」</p>						
<p>日本語教育振興會第三十五回常任理事會 (昭和十八年)三月二十六日午前十一時半ヨリ於文部省第五會義室</p>	<p>一、出席者</p> <p>大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 相良常任理事 村田大東亞屬</p> <p>長沼總主事 鹿島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第三十四回常任理事會協議要録、第二回理事會要録、第三十五回常任理事會協議要録【報告及議題】</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、役員異動ノ件</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center;">前任者</td> <td style="width: 50%; text-align: center;">後任者</td> </tr> <tr> <td>顧問 陸軍次官 陸軍中將 木村兵太郎</td> <td>陸軍中將 富永 恭次</td> </tr> <tr> <td>理事 渉外課長 文部事務官 森田 孝</td> <td>文部事務官 久保田藤麿</td> </tr> </table> <p>ロ、日本語普及叢書刊行書名ノ件 (追加)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 大東亞と日本語 2 日本語の教へ方 3 現地事情 支那 滿洲 	前任者	後任者	顧問 陸軍次官 陸軍中將 木村兵太郎	陸軍中將 富永 恭次	理事 渉外課長 文部事務官 森田 孝	文部事務官 久保田藤麿
前任者	後任者						
顧問 陸軍次官 陸軍中將 木村兵太郎	陸軍中將 富永 恭次						
理事 渉外課長 文部事務官 森田 孝	文部事務官 久保田藤麿						

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p style="text-align: center;">南方</p> <p>4 日本語要説 5 日本語の發音 6 日本の文字 7 日本語の書き方 8 日本語の指導者</p> <p>ハ、懇談事項 ○ 用紙配給申請ニ關シ手續ヲナセル旨相良常任理事ヨリ報告アリ ○ 大東亞省總務課宇山氏ヲ役員ニスル件ニ關シテ懇談セリ ○ 物品會計整理ニツキ倉庫事務室等ニツキ懇談セリ</p> <p>別紙「第三十五回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告 イ、三月二十二日午前十一時半ヨリ第二回理事總會ヲ大東亞會館ニ於テ開催セリ ロ、三月二十四日午後三時ヨリスマトラヨリ歸還サレタル陸軍大佐野村恭雄氏ヲ招待本【會】職員修養會ヲ開催セリ ハ、三月二十五日午後五時半ヨリ文部大臣官邸ニ於テ顧問會ヲ開催セリ</p> <p>二、議題 役員異動ノ件</p>
<p>日本語教育振興會第三十六回常任理事會 (昭和十八年)四月二日午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事、釘本常任理事、西尾常任理事 相良常任理事、 村松大東亞省一等通譯官、村田大東亞屬 長沼總主事、鹿島主事、上村主事</p> <p>一、配布書類 第三十五回常任理事會協議要録、第三十六回常任理事會議題及報告</p> <p>一、協議事項 イ、相良常任理事ヨリ支那派遣教職員ノ互助、共濟、研究、鍊成ノ機關トシテ大日本興亞教育會(假稱)ヲ組織シ今後鍊成ハ興亞教育會ヲシテ實施セシメ日本語教育普及ニツキテハ接觸セシメザルヤウスベキニヨリ諒承方申出アリ之ニ對シ理事長ヨリ本會トシテ鍊成ハ從來通り本會ニ於テ實施ナシ得ルヤウ盡力セラレタク尚今後ノ推移ニツキテハ隨時連絡方希望スルトコロアリタリ</p> <p>別紙「第三十六回常任理事會議題及報告」</p> <p>一、報告 イ、支那派遣教員第九回鍊成ヲ四月十日ヨリ四月二十日迄十一日間三鷹町中仙川興亞鍊成所仙川道場ニ於テ實施スルコトナレリ</p> <p>【在支日本人教師一、〇〇〇名 鍊成ハ大日本興亞教育互助會ヲシテ之ヲ實行セシム 資料ノ□□□行 支那派遣教職員ノ指導連絡ヲ圖リ併セテ興亞教育ノ普及振興ニ寄與スル目的ニテ互助共濟研究鍊成 認定証ハ發行 政治獨立 經濟合作 軍事同盟 文化交流】</p>
<p>日本語教育振興會第三十七回常任理事會 (昭和十八年)四月九日午前十一時ヨリ 於文部省圖書局長應接室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 相良常任理事 村松大東亞省一等通譯官 村田大東亞屬 長沼總主事 鹿島主事 上村主事</p> <p>二、配布書類 第三十六回常任理事會協議要録、第三十七回常任理事會報告及議題</p> <p>三、協議事項 イ、用紙ノ件 企畫院ノ物動計畫トノ關係ヲ別ニシテ用紙統制委員會ニ分割申請ヲナスコト ロ、總主事委員事項ノ件 會計規定ノ第二十四條【及ビ二十五條】ノ一部ヲ修正シ二千圓ヲ限度トシ總主事ニ前渡スルコト</p> <p>ハ、特別會計ノ件 規定立案ノ後審議スルコト</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>二、主事任命ノ件 監査官内主事後任ニツキテハ田中理事ト懇談ノ結果ニヨリ更ニ審議スルコト</p> <p>別紙「第三十七回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告 ナシ</p> <p>一、議題 イ、用紙ノ件 ロ、總主事委員事項ノ件 ハ、特別會計ノ件 二、主事任命ノ件 【岡本律平氏】</p>
<p>日本語教育振興會第三十八回常任理事會 (昭和十八年) 四月十六日 午前十一時ヨリ 於文部省第二會議室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事、釘本常任理事、西尾常任理事 相良常任理事、村松大東亞一等通譯官、西田大使館調査官 (來賓) 田中理事 長沼總主事、鹿島主事、上村主事、橋本主事</p> <p>一、配布書類 第三十七回常任理事會協議要録、第三十八回常任理事會報告及議題 日本語教育振興會用紙報告 (一八、四、六、現在)</p> <p>一、協議事項 イ、宮内主事後任トシテ岡本律平氏ヲ任命スルコトニ決定ス ロ、會計部主任田中理事ヨリ前會協議事項ニツキ種々ノ意見具申アリ 會計上ノ諸問題ニツイテハ總主事、田中主事【會計主任】トノ間ニ於テ更ニ研究スルコトニ決定ス ハ、本會出版方針ニツイテ 都合ニヨリ次回ニ延期ス</p> <p>一、西田調査官報告概要 華北ニ於ケル派遣教員四八〇名 (内小中學校配屬三百四五十名) ハ今年中ニ五百四五十名マデ増加ノ豫定ナリ尚從來特務機關ニテ取扱ヘル身分關係ハ今年七八月頃ヨリ大使館【ニテ】取扱フコトトナリタリ 尚派遣教員ノ統制機關トシテ各省興亞教育會——華北教育連合會 (假稱) 大日本興亞教育會 (假稱) ノ如キ組織体(マ)系ガ考慮セラレツ、アリ 華北ニ於ケル日本語普及ノ狀況 日本語ニツキテハ支那ノ參戰以來極メテ積極的ニナリツ、アリ 日本側ニテ設立セル中央日本語學院ハ北京天津開封ニアリ八月頃ヨリ太原ニ創設ノ豫定ナリ尚雨後ノ【筈】ノ如ク開設セラレタル日本語學校モ修業年限修業課程等ヲ規定シタル訓令【令】ヲ出シタル為メ次第ニ軌道ニノリ來タリツツアリ 又支那側ニ於テモ日本語教員タルモノハ他ヨリモ速ニ校長ニ拔擢シ得ルヤウニナリ天津市ノ如キ師範卒業生ヲシテ更ニ一ヶ年日語教員トシテノ研究ヲセシメツ、アリ 華北ニ於ケル教科書、學習書ニツイテノ所見 一般學習書 三三種 日本語讀本 八五種 文法書 三三種 會話書 四四種 等多數行ハレ居【ル】モ就中日本語教育振興會發行ノ「ハナシコトバ」及ビ日本語讀本ハ内容トイヒ印刷トイヒ定價トイヒ何レノ點ヨリモ群ヲ抜キ一般ニモ正規ノ教科書トシテ採用サレツ、アリ 辭書ハ言【苑】、辭【苑】、ポケット日華辭書等ガ一般ニ使用セラレ、又王玉泉ノ口語文法正則日本語講座等行ハレツ、アリ 華北ニテ困難ヲ感ジツ、アル點 輕便ナル學習用日本語辭書ノナキコト 青少年向ノ平易ナル日本語讀物ノナキコト ニシテ其ノ對策トシテ 「ハナシコトバ」日本語讀本ヲ大量ニ頒布セラレタキコト</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>將來ニ對スル參考書 日本語讀本編纂ニ際シ單ナル語學ノミヲ對象トシテノ日本語教授ノ外中國人ノ教養ヲ高ムル方法ヲ十分考慮サレタシ、カカル觀點ヨリ或【ハ】中國人自身ヲ反省セシメ或【ハ】日支文化ノ交流ヲ跡附ケ或ハ日本人教師ノ自己鍊成ニ資シ單ナル語學教師トシテ終ラシメザル如ク工夫サレタシ</p> <p>別紙「第三十八回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告 イ、本會用紙使用明細別紙ノ通り報告ス</p> <p>二、議題 イ、本會出版方針ニツイテ</p>
<p>日本語教育振興會第三十九回常任理事會 (昭和十八年) 四月二十三日 日午前十一時ヨリ 於文部省國語課長室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事、釘本常任理事、西尾常任理事、相良常任理事 村松大東亞省一等通譯官 村田大東亞屬 長沼總主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 第三十八回常任理事會協議要錄 第三十九回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議決定事項 イ、本會出版方針ノ件 大東亞出版株式會社ヨリ本會出版事業代行方申出デアリタル所右ニ關シテハ文部省編纂ノモノ及ビ助成金ニヨル出版物ニツキテハ總テ本會ニ於テ出版シ右以外ノモノニツキテハ前例モアル事ユエソノ都度本會ニ於テ出版スベキヤ否ヤヲ決定スルコト</p> <p>ロ、日本語普及及問題調査研究委員會第一部會人選ノ件 原案通り決定</p> <p>ハ、日本語普及叢書執筆者ノ件 原案通り決定但シ「現地事情」ニツキテハ支那ハ相良常任理事南方ハ東光常任理事ニ委囑スルコトトシ滿洲國ニツキテハ追テ考究スルコトトス</p> <p>二、其他 相良常任理事ヨリ理事長ノ現地視察並ニ總主事ノ南方地域視察ヲ要望シ發言アリ適當ノ機會ニソノ實現方ヲ考慮スルコトトス</p> <p>別紙「第三十九回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告 イ、支那派遣教員第九回鍊成會ハ四月二十日無事完了セリ【(五十一名)】</p> <p>二、議題 イ、本會出版方針ニツイテ 1、文部省編纂ノモノ【本會ニ於テ行フ】 2、助成金ニヨル出版物【本會ニ於テ行フ】 3、右以外ノ本會編纂物【ソノ都度決定スル 日本語講座ノ如キ前例アリ】</p> <p>ロ、【日本語普及問題】調査研究委員會第一部會人選ノ件【三月十二日】 大東亞省(總務局、支那事務局、南方事務局、滿洲事務局) 文部省(渉外課)陸軍省(軍務課)海軍省(【軍務局】)情報局 (第三部對外事業課)企畫院(第三部)</p> <p>ハ、日本語普及叢書執筆者ノ件 【百頁内外】 1、大東亞と日本語(釘本) 2、日本語の指導者(西尾) 3、日本語要説(岩淵) 4、日本の文字(大岡) 5、日本語の書き方(延期) 6、日本語の發音(佐久間) 7、日本語の教へ方(長沼) 8、現地事情(支那)【相良】 9、" (滿洲國) 10、" (南方)【東光】</p> <p>ニ、ソノ他 【講習會】</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
日本語教育振興會第四十 回常任理事會 (昭和十八年)四月三十日 (金) 於文部省圖書局長應接室	一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 村松大東亞省一等通譯官 村田大東亞屬 大塚大東亞屬 長沼總主事 鹿島主事 上村主事
	一、配布書類 第三十九回常任理事會協議要録 第四十回常任理事會報告及議題
	一、議題決定事項
	イ、顧問委囑ノ件 前會長ヲ追加ノ上原案通り決定
	ロ、前會長ニ對スル慰勞ノ件 記念品代トシテ金五百圓 贈與ニ決定【。】慰勞ノ日取り場所ハ總主事ヨリ連絡ノ 上決定スルコト
	ハ、東京府協和會ヨリ申出ノ件 東京府協和會主催ノ朝鮮人専門學校卒業生以上ノ鍊成講習會ニ於テ日本語指導ニ關 スル講師派遣方依頼アリタル件ハ長沼總主事ヲ派遣スルコトニ決定
	別紙「第四十回常任理事會報告及議題」
	一、報告 イ、文部大臣更迭ニヨリ會長橋田邦彦氏ハ退任セラレ新大臣岡部長景氏會長ニ就任セラ レタリ
	二、議題 イ、顧問委囑ノ件 軍政顧問 兒玉秀雄 砂田重政 【橋田邦彦】 帝國教育會長 永井柳太郎 情報局次長 村田五郎
	ロ、前會長ニ對スル慰勞ノ件 【五〇〇圓】 ハ、東京府協和會ヨリ申出ノ件 【總主事】
日本語教育振興會第四十 一回常任理事會 (昭和十八年)五月七日午 前十一時半ヨリ 於文部省第參會議室	一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 關野常任理事 村松一等通譯官 村田大東亞省屬 大塚大東亞屬 長沼總主事 鹿島主事 上村主事
	一、配布書類 第四十一回常任理事會報告及議題、昭和十八年度實施豫算
	一、協議事項
	イ、昭和十八年度實施豫算ノ件 原案通り提出スルコトニ決定
	ロ、役員ノ件 大使館參事官 花輪義敬 顧問評議員何レニスルカ再考スルコト 滿洲國教務部長田中義男 外國官吏ヲ加フルヤ否ヤ再考スルコト
	ハ、ソノ他 次回理事會ハ關野常任理事南方視察ヨリ歸任歡迎ノ意ヲカネテ開催スルコトニ決定
	別紙「第四十一回常任理事會報告及議題」
	一、報告 イ、陸軍需品工廠ヨリ注文ノ書籍代金金六万三千六百九拾圓也四月二十八日受領セリ ロ、五月三日 上村主事 大東亞省支那事務局ニ赴キ豫算内示ヲ受ケタリ
	一、議題 イ、昭和十八年度實施豫算ノ件 ロ、役員ノ件 【梅津大使ハ顧問就任ヲ辭退シタキニヨリ大使館參事官花輪義敬滿洲國文教部次長 田中義男(再考)】
	別紙「昭和十八年度實施豫算」

會議名・年月日・時・場所 (本文)

収入			
科目	金額		
一、國庫補助金	80,000		
二、出版物賣上代	15,000		
三、雜誌賣上代	1,800		
四、前年度繰越金	10,000		
五、雜收入	180		
計	106,980		
支出			
科目	金額		
一、人件費	12,180		
總主事俸給	5,000	一人月250圓	
主事俸給	5,480	一人月150圓 月140圓	
書記俸給	1,200	一人月100圓	
諸手當	4,500		
二、事務費	4,800		
備品費	200		
消耗品費	1,200		
通信交通費	400		
雜給及雜費	5,000	臨時家族手當ヲ含ム	
三、出版費	80,000		
		成人用日本語教科書一、二卷 各三万部(60錢)	36,000
		日本語讀本學習指導書卷三、四各 四千部(1圓)	8,000
		日本語文法五万部(50錢)	5,400
		雜誌日本語一萬八千部(30錢)	5,400
		荷造運賃	5,600
四、日華辭典編纂費	10,000		
計	106,980		
日本語教育振興會第四十二回常任理事會			
(昭和十八年)五月十四日			
金曜午前十一時ヨリ			
於平河町寶亭			
一、出席者			
松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 關野常任理事			
長沼總主事 鹿島主事 上村主事			
一、配布書類			
第四十一回常任理事會協議要録 第四十二回常任理事會報告及議題			
一、協議要録			
イ、役員ノ件			
大使館參事官 花輪義敬(滿洲)評議員ニ委嘱スルコトニ決定			
滿洲國文教部【次】長 田中義男 官職ニアル個人トシテ顧問ニ委嘱スルコトニ決定			
ロ、講習會ノ件			
原案通り實施スルコトニ決定			
ハ、栃木師範男子部附屬國民學校國井氏ヨリ申出ノ件			
講師派遣ノ費用(旅費【汽車賃】謝禮)ハ本會ニ於テ負擔本會後援トシテ應ズルコトニ決定			
ニ、講演會開催ノ件			
講師謝禮ヲ考慮スルコトトシテ原案通り開催スルコトニ決定			
ホ、第一部會研究會			
具體案ヲ立案ノ上次ノ理事會ニ提出ノコト			
別紙「第四十二回常任理事會報告及議題」			
一、報告			
イ、五月七日第三回實際家懇談會總會ヲ法曹會館ニ於テ開催山口喜一郎氏ノ日【本】語教授法意見ヲ中心トシテ懇談セリ			
ロ、五月十日陸軍省、大東亞省關係官ヲ招待連絡懇談會ヲ開催シ山口喜一郎氏ノ日本語			

會議名・年月日・時・場所	(本文)														
	<p>教育ニ關スル意見ヲ聽取セリ</p> <p>ハ、五月十一日長沼總主事特別行為税ニ關シ大藏省司【主】税局吉田事務官ト折衝セリ</p>														
	<p>二、議題</p> <p>イ、役員ノ件 (前回再考ノ分)</p> <p>ロ、講習會ノ件 (【別紙】)</p>														
	<p>ハ、栃木師範男子【部】附屬國民學校國井氏ヨリ申出ノ件</p> <p>京都ニ於ケル講演會ノ如キモノヲ開催スルタメ</p> <p>第一案 (縣教育會ノ事業トシテ)</p> <p>二學期以後ニ於テ日曜日一日</p> <p>縣下各學校教員一般希望者ヲ對象トシテ</p> <p>第二案 (第一案不可能ノ場合)</p> <p>栃木師範報國團講演會</p> <p>右ヲ具体化スルタメ費用概算通報アリタキ旨申出アリタリ</p>														
	<p>二、講演會開催ノ件</p> <p>案一 東京</p> <p>一、目的 大東亞共榮圈ニ對スル日本語普及ノ問題ニツキ一般ノ關心ヲ昂メルタメ</p> <p>一、日時 昭和十八年十月中旬</p> <p>一、會場 日比谷公會堂、共立講堂、一ツ橋講堂</p> <p>一、次第 一部 講演 未定</p> <p>二部 映畫 未定</p>														
	<p>一、費用概算</p> <table border="0"> <tr><td>會場費</td><td>300,00</td></tr> <tr><td>宣傳費</td><td>350,00</td></tr> <tr><td>上映料</td><td>150,00</td></tr> <tr><td>講師謝禮</td><td>100,00</td></tr> <tr><td>雜費</td><td>100,00</td></tr> <tr><td>合計</td><td>1000,00</td></tr> </table>	會場費	300,00	宣傳費	350,00	上映料	150,00	講師謝禮	100,00	雜費	100,00	合計	1000,00		
會場費	300,00														
宣傳費	350,00														
上映料	150,00														
講師謝禮	100,00														
雜費	100,00														
合計	1000,00														
	<p>案二 仙台</p> <p>一、目的 前ニ同ジ</p> <p>一、日時 昭和十八年十月下旬</p> <p>一、會場 公會堂</p> <p>一、次第 一部 講演 未定</p> <p>二部 映畫 未定</p>														
	<p>一、費用概算</p> <table border="0"> <tr><td>會場費</td><td>100,00</td></tr> <tr><td>宣傳費</td><td>150,00</td></tr> <tr><td>上映料</td><td>50,00</td></tr> <tr><td>講師謝禮</td><td>100,00</td></tr> <tr><td>旅費</td><td>300,00 (二名)</td></tr> <tr><td>雜費</td><td>100,00</td></tr> <tr><td>合計</td><td>800,00</td></tr> </table> <p>【ホ、其ノ他】</p>	會場費	100,00	宣傳費	150,00	上映料	50,00	講師謝禮	100,00	旅費	300,00 (二名)	雜費	100,00	合計	800,00
會場費	100,00														
宣傳費	150,00														
上映料	50,00														
講師謝禮	100,00														
旅費	300,00 (二名)														
雜費	100,00														
合計	800,00														
	<p>別紙「第三回日本語教育講座 (實施計畫)」</p> <p>期日 前半 六月一日 (火) - 六月二十八日 (月) 四週間 (月火木金) 十六日 四十八時間</p> <p>後半 九月六日 (水) - 九月二十三日 (木) 三週間 (月火木金) 十一日 三十三時間</p> <p>會場 神田區一ツ橋 日本語教育要員養成所 (第二案) 神田區神保町 東亞學校</p>														
	<p>題目及ビ演題 (案) (一單位一時間半)</p> <p>第一部</p>														

會議名・年月日・時・場所	(本文)	
	大東亞文化ト日本語 三時間 (二單位) 松尾長造 南方國ノ文化事情 三〃 (二〃) 關野房夫 支那ノ文化事情 三〃 (二〃) 相良惟一 軍統治下ノ文化事情 三〃 (二〃) 郡司喜一	
	第二部 言語學、音聲學 十二〃 (八〃) 神保 格 日本語概説 二十一〃 (十四〃) 湯澤幸吉郎 日本語ノ諸問題 六〃 (四〃) 大岡保三 日本語普及史 六〃 (四〃) 釘本久春 日本語教師論、教材論 六〃 (四〃) 西尾 實 日本語教授法 十二〃 (八〃) 長沼直見	
	第三部 歸還報道班員講演 (比島) 一・五〃 (一〃) 三木 清 〃 (ジャバ) 一・五〃 (一〃) 富津有為男 〃 (マライ) 一・五〃 (一〃) 中島健藏 〃 (ビルマ) 一・五〃 (一〃) 高見 順	
	聽講料 金五圓 經費 1380,00圓 講師謝禮 1080,00 (一單位20,00) 會場費ソノ他 200,00 事務費 100,00	
	日本語教育振興會第四十三回常任理事會 昭和十八年五月二十一日 金曜午前十一時ヨリ 於文部省第三會議室	一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事・釘本常任理事・西尾常任理事 關野常任理事 長沼總主事 鹿島主事
		一、配布書類 第四十二回常任理事會協議要録 第四十三回常任理事會報告及議題
		一、協議事項 イ、講演會日時場所ノ件 日本語普及問題講演會 (東京會場) 八十月十六日 (土曜) 午後一時—五時共立講堂 ニテ開催スルコトニ決定
		ロ、日本語教育叢書定價ノ件 「日本語教授法原理」 一八六頁 「日常生活ノ敬語法」 三三〇頁 「現代語ノ諸問題」 未定 右叢書ノ定價ノ基準トシテ 二〇〇頁 一・五〇以下 (税金ヲ含ム) 三〇〇頁 二・二五以下 (〃) 四〇〇頁 三・〇〇以下 (〃) トスルコトニ決定
		ハ、日本語普及問題調査委員會第一部會提出審議案ノ件 約六ヶ月ノ豫定ニテ一應マトメルコトトシテ原案ノ通り決定
		ニ、ソノ他 ○地圖作製上ノ參考ノ件 地圖ノ作製ニ關シテハ地圖研究所及統圖會社 (詳細ハ圖書局總務課ニ照會ノコト) ト連絡スレバ地圖作製上ノ參考トナラシ【ン】又陸軍陸地測量部ニ於テモ同部發行 地圖ヲ學校ノ教育參考資料トシテ實費ニテ頒布スル【トノ】コトナリ ○日本語教授研究會ノ件 大東亞省文部省情報局ノ日本語連絡會議ニ於テ國際學友會ノ日本語教員ノ斡旋、教 授法ノ研究教材ノ改善等ノ問題ニツキ日本語教授研究會ヲ組織シ毎月第一第三水曜 日ノ午後委員會ヲ開催スルコトニ決定シタルニ付協力サレタキ旨關野常任理事ヨリ 發言アリ、本會トシテハ協力スルコトニ決定。
日本語教育振興會第四十	一、出席者	

會議名・年月日・時・場所	(本文)
四回常任理事會 昭和十八年五月二十八日 金曜午前十一時ヨリ 於文部省第三會議室	松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 關野常任理事 相良常任理事 長沼總主事 鹿島主事 上村主事
	一、配布書類
	第四十三回常任理事會協議要録、第四十四回常任理事會報告及議題 (日本語教育振興會特別會計規定案—日本語教育振興會事業概要案)
	一、協議事項
	イ、講演會日時場所ノ件 日本語普及問題講演會 (仙台會場) ハ十月二十四日 (日曜) 午後一時ヨリ五時仙台市公會堂ニテ開催スルコトニ決定
	ロ、本會事業概要ノ件 關野常任理事指導ノ下ニ記載洩事項ヲ加ヘ全般的ニ開示的項目的ニ訂正スルコト
	ハ、特別會計ノ件 第一條中「圖書ノ刊行販賣事業ヲ經營スル為」ヲ「圖書ノ刊行頒布ノ為」ニ改ム 第三條中「圖書刊行特別會計部主事」ヲ「圖書刊行特別會計部擔當ノ主事」ニ改ム 第七條 削除 以上ノ件ヲ更ニ會計部主任ト連絡懇談ノ上更ニ審議スルコト
	ニ、其ノ他 ○次回常任理事會ハ相良常任理事南支視察ヨリ歸任歓迎ノ意ヲカネテ開催スルコト
	別紙「第四十四回常任理事會報告及議題」
	一、報告
	イ、五月二十日釘本常任理事 長沼總主事 陸軍軍政顧問 永田秀次郎氏ヲ訪問本會ノ事業ソノ他ニツキ連絡懇談セリ
	二、議題
	イ、講演會 (仙台會場) 日時場所ノ件 一、期日 十月二十四日 (日曜) 午後一時ヨリ五時 一、場所 仙台市公會堂 収容人員 約一千五百名 使用量 二〇、〇〇 【(前納)】 他ニ器具借用料ヲ要ス
	ロ、本會事業概要ノ件 (別紙)
	ハ、特別會計ノ件 (別紙)
	【二、其ノ他】
	別紙「日本語教育振興會圖書刊行特別會計規定案」
	第一條 本會ノ事業中助成金ニヨラザル圖書ノ刊行販賣【頒布】事業ヲ經營スル為運轉資金ヲ置キ圖書刊行特別會計ヲ設置ス
	第二條 本特別會計ハ事業ニ關スル収入及運轉資金ニ關スル収入ヲ以テ歳入ト為シ事業ニ關スル支出ヲ以テ歳出ト為ス 前項ノ運轉資金ハ【惟】名義雄ヨリ寄付ヲ受ケタル金一萬圓及之ヨリ生ズル収入竝ニ事業上生ジタル益金トス
	第三條 収入及支出ハ總テ總主事ノ決裁ヲ經、圖書刊行特別會計部【擔當ノ】主事之ヲ執行スルモノトス
	第四條 總主事ハ毎月末日ニ於ケル資産及負債ノ状態ヲ示スベキ試算表ヲ作製スベシ
	第五條 理事長ハ毎年三月三十一日現在ニ於ケル損益ヲ明ニスルタメ期末ニ於ケル財産目録、貸借對照表及損益計算書ヲ作製シ監事及會長ノ承認ヲ經ベシ
	第六條 本規程施行上必要ナル細則及諸帳簿ノ様式並ニ勘定科目ハ理事長之ヲ定ム
	第七條 本規程ニ規定セザルモノハ日本語教育振興會會計規程ヲ準用ス
	附則 本要綱【規程】ハ昭和十八年 月 日ヨリ之ヲ施行ス
	備考 帳簿組織 仕譯日記帳、總勘定元帳、現金出納帳、補助簿 勘定科目 資金 積立金

會議名・年月日・時・場所

(本文)

	退職手當積立金 貸倒準備金 繰越金 土地建物 保證金 什器 備付圖書 賣上勘定 寄贈圖書 製品勘定 棚卸勘定 委託勘定 仕掛品勘定 材料勘定 紙型勘定 賣掛勘定 假拂金 受取手形 賣掛勘定 著作権勘定 支拂手形 假受金 未拂金 借入金
	廣告費 寄贈献本 送料 荷造費 家賃地代 俸給手當 税金公課 利息割引料 消耗品 旅費 保険料 編輯費 通信費 雜費 貸倒金 雜収入
	當座預金 振替貯金 現金 總主事委任事項追加 (七) (マ) 圖書刊行特別會計ニ關スル會計事務
	別紙「日本語教育振興會事業概要案」
	一、本會の創立
	本會は昭和十六年八月二十五日に創立せられたり。本會の創立せられたる所以は當時日本語の國外に於ける普及とその教育の振興を圖ることの急務なるを認識して、その事業に着手しつゝありたる團體からざりしかども、個別的局部的施設に止まりてはその成果の大を期待し得ざるを以て、此の事業の組織的發展を圖るが為に興亞院並に文部省の意によりて創設せられたるものなり。創立の當初に於ては本會の活動目標は主として支那大陸に向けられたりしが、同年十二月八日大【詔】の【澳】發をみるや雄大なる大東亞共榮圈の構想は確立し、本會の活動範圍もまた従つて大東亞共榮圈の全般に拡大せられ、こゝに本會の使命は愈々重大性を加ふるに至れり。
	二、本會の組織
	本會は「日本語教育振興會規則」第二條及び第三條に 本會ハ東亞ニ於ケル日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ヲ圖ルヲ以テ目的トス 本會ハ前條ノ目的ヲ達成スル為政府ノ方針ニ基キ左ノ事業ヲ行フ 一、日本語ノ普及ニ關スル諸般ノ調査及研究 二、日本語教科用圖書ノ刊行及頒布 三、日本語教育資料ノ作成及頒布 四、日本語教師ノ養成及指導 五、日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ニ關スル各種會合ノ開催 六、日本語ノ普及並日本語教育ニ關スル雜誌ノ發行 七、日本語ノ普及又ハ日本語教育ノ振興ニ關係アル内外諸團體トノ連絡及之等團體ノ行フ諸事業ノ調整 八、其ノ他日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ニ關シ必要ナル事項 と規定せる所によりて
	研究部 (擔當事項) イ、日本語教育に必要な研究及び調査 ロ、日本語教育に必要な資料の研究及び調査

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	ハ、日本語の普及に必要な研究及び調査												
	指導部 (擔當事項) イ、日本語教師の養成並に再教育 ロ、日本語教師の指導 ハ、外地並に現地との連絡												
	圖書部 (擔當事項) 日本語教科用圖書の刊行及び頒布												
	雑誌部 (擔當事項) 雑誌の編輯刊行及び頒布												
	普及部 (擔當事項) イ、日本語教育資料の作成並に頒布 ロ、各種研究及び調査の刊行並に頒布												
	を置きてその事業の遂行を圖り、更に會の人事其他の事務を處理する為の庶務部、會計經理事務を管掌する會計部を置きて事務体系【系】を整ふ。												
	本會の役員は左表の如くにして <div style="text-align: center;"> <table border="0"> <tr> <td>副會長 (二名)</td> <td>理事長</td> <td>監事 (二名以内)</td> </tr> <tr> <td>會長</td> <td>顧問 (若干名)</td> <td>理事 (三十名以内)</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>中ニ常任理事若干名ヲ置ク</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td>評議員 (若干名)</td> </tr> </table> </div>	副會長 (二名)	理事長	監事 (二名以内)	會長	顧問 (若干名)	理事 (三十名以内)			中ニ常任理事若干名ヲ置ク			評議員 (若干名)
副會長 (二名)	理事長	監事 (二名以内)											
會長	顧問 (若干名)	理事 (三十名以内)											
		中ニ常任理事若干名ヲ置ク											
		評議員 (若干名)											
	會長は文部大臣、副會長は現在大東亞次官及び文部次官の就任を煩はせり。また本會の職員組織は左表の如くにして <div style="text-align: center;"> <table border="0"> <tr> <td>總主事 (一名)</td> <td>主事 (若干名)</td> </tr> <tr> <td></td> <td>書記 (若干名)</td> </tr> <tr> <td></td> <td>研究員 (若干名)</td> </tr> </table> 總主事は理事長の命を受けて會務を掌れり。 </div>	總主事 (一名)	主事 (若干名)		書記 (若干名)		研究員 (若干名)						
總主事 (一名)	主事 (若干名)												
	書記 (若干名)												
	研究員 (若干名)												
	三、他團體の事業の繼承												
	本會は(昭和十六年八月二十五日に)創立をみるや、直に事業を開始し當時財團法人東亞同文會に於て行ひつゝありし蒙疆及び支那に對する日本語教科書の刊行及び頒布に關する事業を本會に移管し、右事業關係の財産及び權利義務の一切を昭和十六年九月二十日現在を以て十月二日に繼承したり。更に十月六日には財團法人日語文化協會より同じく九月二十日現在を以て同會に於ける支那人に對する日本語の普及振興に關する事業並に右事業關係の財産及び權利義務の一切の繼承手續を完了したり。												
	四、本會各部に於ける事業の概要												
	本會の事業遂行の為に設けられたる各部の今日迄の活動狀況概要を述べれば 研究部は右【左】の諸項目の調査研究を行へり。 1、各種教授法の研究 (語學教授上の各種教授法の研究) 擔當者 東京高等師範學校教授 黒田【魏】氏 2、東亞の言語地理 (東亞に於ける諸民族語及び西歐語の分領並に普及に關する鳥【瞰】圖的研究) 擔當者 東京帝國大學教授 小倉 進平 氏 外十八名												
	3、日文標準音の研究 (日文音【韻】の比較並に口形圖作成) 擔當者 東京外國語學校教授 千葉 勉 氏												
	4、日本語教授法の理論 擔當者 語學教育研究所長 市河 三喜 氏 東京文理科大學教授 檜崎 淺太郎 氏 東京文理科大學教授 神保 格 氏												
	5、中國人學習者の誤り易き發音語法 擔當者 東京文理科大學教授 田中【寛】一 氏 東京文理科大學教授 武政 太郎 氏 東亞學校教授 有賀 憲三 氏												

會議名・年月日・時・場所

(本文)

	東亞學校教授	鈴木 正藏 氏
	【語彙調査】	
6、教科圖書に収録すべき單語連語成句表	擔當者 本會研究員	淺野 鶴子 氏
7、入門期並に初學年の指導法 聽方及び話方指導法	擔當者 日本語教授研究所長	松宮 彌平 氏
8、留學生に對する日本語教授法	擔當者 青年文化協會 國際學友會教授	岡本 千萬太郎 氏
9、蒙人に對する日本語教授法	擔當者 善隣協會	
10、漢字音訓の調査	擔當者 本會研究員	伊藤 彌太郎 氏
11、口語讀辭及び慣用音の調査	擔當者 文部省圖書監修官	各務 虎雄 氏
12、現代語法の諸問題	擔當者 文部省囑託 (現圖書監修官)	湯澤 幸吉郎 氏
13、日常生活の敬語法	擔當者 文部省囑託	三宅 武郎 氏
14、日蒙標準音の比較	擔當者 東京外國語學校教授	千葉 勉 氏
15、意義上より見たる日支同一漢字の研究	【擔當者 華北日本語教育研究所】	
16、中級の日本語指導法 讀方及綴方指導法	擔當者 日本語教授研究所	松宮 彌平 氏
17、簡易日本語學習辭典	擔當者 語學教育研究所	比屋根 【安雄】 氏
而して研究部自體の仕事としては會設立の當初より 日華辭典の編纂 に着手し、それに収録すべき語彙調査を進行しつつあり、現在に於ては青少年用讀物語彙の調査を終了し、一般青年用讀物語彙の調査を進めをれり。指導部に於ては日本語教師養成の為に「日本語教育講座」を左の如く開催して幸に熱心なる聽講希望者を得、所期の成果を挙げたり。		
日本語教育講座 第一回 (1) 會期 昭和十七年一月十九日—三月七日 (每週月水金の三夜 毎夜午後六時—九時) (2) 會場 神田區神保町 東亞學校 (3) 題目及講師		
	大東亞の建設と文化	興亞院文化部長 松村 肅 氏
	大東亞文化と日本語	文部省圖書局長 松尾 長造 氏
	大東亞戦争の意義	興亞院調査官 堂脇 光雄 氏
	大東亞の經濟事情	興亞院調査官 久保 文藏 氏
	大東亞に於ける宗教事情	
	大東亞に於ける教育事情	興亞院調査官 關野 房夫 氏
	國語の表記について	文部省圖書監修官 倉野 憲司 氏
	國語の構造	東京帝國大學教授 金田一 京助 氏
	國語の特質	東京帝國大學教授 橋本 進吉 氏
	國語の歴史	文部省囑託 湯澤 幸吉郎 氏
	國語問題の所在と方向	文部省國語課長 大岡 保三 氏
	國語教育と日本語教育	東京女子大學教授 西尾 實 氏
	日本語教授法概説	文部省囑託 長沼 直兄 氏
	日本語教授の實際	日本語教授研究所長 松宮 彌平 氏

會議名・年月日・時・場所

(本文)

	<p>日本語教科書編 文部省圖書監修官 各務 虎雄 氏 日本語の海外進出 法政大學教授 石黒 修 氏 文化工作としての日本語 文部省圖書監修官 釘本 久春 氏 言語政策 東京文理科大學名譽教授 保科 孝一 氏 中國人に對する日本語教授 東亞學校教授 鈴木 正藏 氏 (4) 聽講者數 百二名 (申込者百四十八名) (5) 聽講料 金參圓</p>
	<p>第二回 (1) 會期 昭和十七年七月二十六日—三十一日 (六日間午前八時—十二時) (2) 會場 小石川區大塚窪町東京文理科大學 (3) 題目及講師 標準日本語について 東京文理科大學教授 神保 格 氏 日本語の構造 東京帝國大學教授 金田一 京助氏 日本語の音声 東京外國語大學教授 千葉 勉 氏 日本語普及の理念及び東亞に於ける日本語教育の現狀 文部省圖書監修官 釘本 久春 氏 現代語法の諸問題 文部省圖書監修官 湯澤 幸吉郎氏 國語問題について 文部省國語課長 大岡 保三 氏 國語教育の諸問題 東京女子大學教授 西尾 實 氏 日本語と外國語 東京帝國大學教授 市河 三喜 氏 表現の問題より見た語學と文學 東京帝國大學教授 佐々木 達 氏 ヨーロッパ人を對象とする日本語教育 東北帝國大學教授 土居 光知 氏 英語で書かれた日本語の研究書 文部省囑託 長沼 直兄 氏 (4) 聽講者數 六十四名 (申込者七十八名) (5) 聽講料 金參圓 備考 右第二回日本語教育講座は聽講者を中等學校以上の英語科教員に限定し、従つて語學教育研究所の援助を仰ぎて諸般の準備を整へ實施せり。</p>
	<p>第三回 (1) 會期 前期 昭和十八年六月三日—二十九日 (每週月火木金の四夜、毎夜午後六時—九時) 後期 同十八年九月六日—二十三日 (同前) (2) 會場 神田區神保町 東亞學校 (3) 題目及講師 大東亞文化建設の問題 文部省圖書局長 松尾 長造 氏 タイ、佛印の文化事情 大使館調査官 關野 房夫 氏 支那の文化事情 大東亞事務官 相良 惟一 氏 軍政治下の文化事情 陸軍司政長官 郡司 喜一 氏 言語學、音聲學 東京文理科大學教授 神保 格 氏 日本語の歴史 文部省圖書監修官 湯澤 幸吉郎氏 日本語要設 第一高等學校教授 岩淵 悦太郎氏 日本語の諸問題 文部省圖書局國語課長 大岡 保三 氏 日本語普及史 文部省圖書監修官 釘本 久春 氏 日本語教師論・教材論 東京女子大學教授 西尾 實 氏 日本語教授法 本會總主事 長沼 直兄 氏 フィリッピン事情 歸還報道班員 尾崎 士郎 氏 マ【ライ】事情 歸還報道班員 中島 建藏 氏 ジャバ事情 (交渉中) ビルマ事情 (交渉中) (4) 聽講者 名 (申込 名) (5) 聽講料 金五圓</p>

會議名・年月日・時・場所

(本文)

また現に東京に於て外國人に對する日本語教育に活動する教授者間の連絡を圖る目的を以て「日本語教授者懇談會」を計畫し、昭和十六年十二月十五日に第一回を開催したるに參會者四十七名を得て、在京日本語教授者の殆ど全部を網羅するを得たり。

而して第一回日本語教授者懇談會に於ける協議の結果、此の教授者懇談會を本會が幹旋者となりて繼續開催して日本語教授法研究に努力することとし、その為に委員會を設置して協議することとなれり。

諸日本語教授者懇談會委員會は第一回を昭和十七年の二月十二日に開催し、各団体より選定の委員十七名の參會を見たり。

第二回日本語教授者懇談會は昭和十七年九月十八日に開催、出席者は四十三名
第三回は昭和十八年五月七日に開催し、出席者三十四名を得、恰も日本學術振興會に研究發表の為來京せる北支の山口喜一郎氏を來賓に迎へて同氏の日本語教育回顧談を聴取せり。

委員會は昭和十八年二月二十七日に第二回、同三月十七日に第三回を開催したり。

更に一般に對して日本語教育の意義と重要性を認識せしむる為に日本語普及問題講演會を計畫し、その第一回を京都市に於て次の如く實施せり。

「大東亞共榮圈の日本語」講演會

昭和十八年二月二十七日 京都市新聞會館に於て

講演題目及講師

日本語教育の諸問題	東京女子大學教授	西尾 實 氏
日本語普及と國語の反省	京都帝國大學教授	澤瀉 久孝 氏
フィリッピンより歸りて	歸還報道班員	三木 清 氏

他に映畫「英國崩るゝの日」

右講演會は京都市教育局、毎日新聞社京都支局及び京都新聞社の後援を得て聴衆六百餘名、京都に於ける講演會としては成功の部なりと稱せられたり。

支那派遣教員の練成

なほ本會に於ては同じく指導部の事業として大東亞省（前興亞院）の命を承け、大東亞省より支那大陸に派遣せらるゝ教員の練成を行ひ、既に左のごとく四回に互りて之を實施せり。

(1) 支那派遣教員第六回練成

昭和十七年五月十三日より同三十日に至る十八日間

府下小金井町浴恩館に於て

(2) 支那派遣教員第七回練成

昭和十七年九月二十一日より同三十日に至る十日間

澁谷區原宿東亞報德會東京會堂に於て

(3) 支那派遣教員第八回練成

昭和十七年十月十日より同二十日に至る十一日間

澁谷區原宿東亞報德會東京會堂に於て

(4) 支那派遣教員第九回練成

昭和十八年四月十日より同二十日に至る十一日間

府下中仙川興亞練成所仙川道場に於て

圖書部に於ては文部省編纂になる日本語教科用圖書の刊行に當り、既に左の各種の出版を完了したり。

ハナシコトバ	上
ハナシコトバ	中
ハナシコトバ	下
ハナシコトバ學習指導書	上
ハナシコトバ學習指導書	中
ハナシコトバ學習指導書	下
日本語讀本	卷一
日本語讀本	卷二
日本語讀本	卷三
日本語讀本	卷四

會議名・年月日・時・場所	(本文)																
	<p>日本語讀本 卷五 日本語讀本學習指導書 卷一 中、十八萬部 下、十六萬部</p> <p>日本文化讀本 「さくら」 「大學の學生生活」</p> <p>而して右教科書は現在迄に支那大陸に對してはハナシコトバ各卷【夫々】約十八萬部、日本語讀本各卷夫々約六萬部を頒布し、また南方方面には南方向日本語教科書の編纂までの補足教材として</p> <p>ハナシコトバ 各卷夫々約十五萬部 日本語讀本 各卷夫々約四萬部 を頒布したり。</p>																
	<p>雜誌部にては月刊雜誌「日本語」を編纂發行し、現地日本語教授者に頒布してその参考にしつゝあり。</p> <p>右「日本語」は昭和十六年四月に日語文化協會内に事務所を置きし舊「日本語教育振興會」の編集發行しつゝありし同名の雜誌「日本語」を昭和十六年十月より本會に於て繼承し、その編輯に大刷新を加へ、専ら日本語教育に關する政府の方針に基づき日本語の普及並に日本語教育に關する研究發表及び連絡機關として刊行さるゝものにして、日本語教育に關する我國唯一の専門雜誌なり。</p>																
	<p>普及部に於ては先づ支那學童に與ふべき教育資料の作成を計畫し、その第一着手として文部省囑託三輪和敏氏及び水船六州畫伯監修の下に左の絵本を完成頒布したり。</p> <p>支那學童用絵本 八種</p> <table border="0"> <tr> <td>一、ガクカウ</td> <td>山本日子士郎 畫</td> </tr> <tr> <td>二、オホゾラ</td> <td>芦名 芳夫 畫</td> </tr> <tr> <td>三、ハナ、ヤサイ、クダモノ</td> <td>長原 垣 畫</td> </tr> <tr> <td>四、ヨイコドモたち</td> <td>渡邊 武夫 畫</td> </tr> <tr> <td>五、ドウブツ</td> <td>宮河 久 畫</td> </tr> <tr> <td>六、コドモノセカイ</td> <td>黒崎 義介 畫</td> </tr> <tr> <td>七、ニツボンノタテモノ</td> <td>鈴木 壽雄 畫</td> </tr> <tr> <td>八、ノリモノ</td> <td>秋保 正三 畫</td> </tr> </table>	一、ガクカウ	山本日子士郎 畫	二、オホゾラ	芦名 芳夫 畫	三、ハナ、ヤサイ、クダモノ	長原 垣 畫	四、ヨイコドモたち	渡邊 武夫 畫	五、ドウブツ	宮河 久 畫	六、コドモノセカイ	黒崎 義介 畫	七、ニツボンノタテモノ	鈴木 壽雄 畫	八、ノリモノ	秋保 正三 畫
一、ガクカウ	山本日子士郎 畫																
二、オホゾラ	芦名 芳夫 畫																
三、ハナ、ヤサイ、クダモノ	長原 垣 畫																
四、ヨイコドモたち	渡邊 武夫 畫																
五、ドウブツ	宮河 久 畫																
六、コドモノセカイ	黒崎 義介 畫																
七、ニツボンノタテモノ	鈴木 壽雄 畫																
八、ノリモノ	秋保 正三 畫																
	<p>また「ハナシコトバ」上中下巻の教授に用ふる【為】にその教授用の掛圖を水船三洋畫伯（ハナシコトバ挿絵擔當者）に委囑し、B列二號（舊四六全紙半裁）判三十六枚の華麗なる掛圖を製作し、これまた現地に向け發送頒布したり。</p> <p>なほ研究部に委囑せる研究調査の既に完成せるものは普及部に於て「日本語普及叢書」として左記の如く着【々】刊行の運びとなれり。</p>																
	<p>日本語教授法の原理 日常生活ニ於ケル敬語法 現代語ノ諸問題 東亞ニ於ケル西歐語ノ普及 東亞ニ於ケル諸民族語 各種教授法ノ研究 日支標準音ノ比較及口型圖</p>																
	<p>以上各部の事業概況を略述したるも、なほ會全体の關與せる事業としては此の他に情報局に於て企畫せる南方向簡易對譯日本語手引書「ニツボンゴ」の編纂に參畫して該書を完成、大東亞出版株式會社より發行し、文部省に於て發行せる</p> <p>南方派遣日本語教育要員養成所の事業に對しては講師を派遣して協力し、國際學友會にも亦本會より日本語教師を派遣してその事業に協力しつゝあり。</p>																
<p>日本語教育振興會第四十五回常任理事會 昭和十八年六月四日午前十一時ヨリ 於平河町宝亭</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 相良常任理事 村田大東亞属 長沼總主事 鹿島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 第四十四回常任理事會協議要録、第四十五回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議</p>																

會議名・年月日・時・場所	(本文)												
	<p>イ、特別會計ノ件 前回ニ於テ訂正シタル原案通り決定。ソノ手續ヲトルコト</p> <p>ロ、役員異動ノ件 原案通り委囑スルコトニ決定。ソノ手續ヲトルコト。</p> <p>ハ、相良常任理事ヨリ中南支ニ於ケル日本語教育ノ現況並ニ本會ニ對スル現地側要望 ニツキ別紙ノ通り報告アリタリ</p>												
	<p>別紙「第四十五回常任理事會報告及議題」 * 原本はこちらにも「第四十五回常任理事會協議要録」とあり)</p>												
	<p>一、報告</p> <p>イ、五月二十九日午後、釘本常任理事・長沼總主事、前會長橋田邦彦氏ヲ訪問會長在任中ノ謝辭ヲ述ベ記念品料ヲ贈呈セリ</p> <p>ロ、六月二日午後西尾常任理事、長沼總主事國際學友會第一回日本語教授研究會ニ本會ヲ代表シテ出席セリ</p>												
	<p>一、議題</p> <p>イ、特別會計ノ件</p> <p>ロ、役員異動ノ件</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%;"></td> <td style="text-align: center;">舊</td> <td style="text-align: center;">新</td> </tr> <tr> <td>顧問 日本放送協會々長</td> <td>小森七郎</td> <td>下村 宏</td> </tr> <tr> <td>顧問</td> <td></td> <td>特命全權大使 谷 正之</td> </tr> <tr> <td>顧問</td> <td></td> <td>日本出版會々長 久富 達夫</td> </tr> </table>		舊	新	顧問 日本放送協會々長	小森七郎	下村 宏	顧問		特命全權大使 谷 正之	顧問		日本出版會々長 久富 達夫
	舊	新											
顧問 日本放送協會々長	小森七郎	下村 宏											
顧問		特命全權大使 谷 正之											
顧問		日本出版會々長 久富 達夫											
	<p>別紙「中・南支各地に於ける日本語教育及び日本語普及の狀態並に日本語教育振興會に對する希望意見」相良惟一</p>												
	<p>昭和拾八年六月四日</p> <p>日本語教育並に日本語普及の狀態は四月二十六日より約一ヶ月に渉る中南支出張の際觀察したる結果を簡單に取纏めたるものにして意見にわたる部分は筆者の意見なり</p> <p>日本語教育振興會に對する希望意見は現地當局並び各地にて開催せる日本語教授擔當者より聽取せるものなり。</p>												
	<p>日本語教育振興會に對する希望意見</p>												
	<p>上海</p> <p>ハナシコトバの内容誠に適切にして注文殺到する實情なり是非増刷を希望す 差當り上中巻を各々三千部必要とす 有料にても可なれば至急送付方取計はれたし ハナシコトバの内容に關し歴史的假名遣を使用してほしい、日本語讀本は卷一より正式の假名遣を使用し居るを以てハナシコトバを終了し讀本に移行するに當り相違點の強調に骨折れる即ち發音記號より正式の假名遣に移る場合教師として非常に努力を要する 又ハナシコトバと日本語讀本に教材の重複多し 以上の點改訂の際注意ありたし 又ハナシコトバの内容につき口型に齒を見せてほしい。</p> <p>日本語讀本に於て童謠、民謠等に省略法を使用して居るも理解に困難ならずやと思はる。</p> <p>一般は振興會の出版物配布が圓滑に行き居らず、文化讀本サクラ及び掛圖の如き未入手の實情なり指導書につきても少數入手せしのみなり 大使館事務所に「日本語」が山積し居り十六年七月迄配布濟なり かゝる月遅れのものの頒價は如何すべきや日本語の頒布は可成無料とせられたし 文化讀本として日本の歴史、思想、風俗、習慣等を記したるものを希望す</p> <p>又振興會にて假名習字帳を是非發行せられたし</p> <p>すべて振興會の刊行物は領事館又は個人宛 (可成前者) とせられたし</p>												
	<p>杭州</p> <p>振興會の出版物が餘り當地には來ない ハナシコトバも結構なるがもつと高級的なものがほしい 振興會の刊行物は【是非】領事館宛送付する様考慮を乞ふ</p>												
	<p>蘇州</p> <p>日本語讀本は支那人が使用するは聊か難澁なり現在支那人日語□□□□て此の教科書を使用し得るものは尠い。されば日本語讀本使用の場合支那語の注釈を附する様に考慮せられたし</p> <p>あまり日本的なものばかりに過ぎはせぬか支那に取材せし教材にも興亞的なもの</p>												

會議名・年月日・時・場所

(本文)

	<p>な(マ)り、例へば「中國の宣戰布告文」「曾仲鳴夫人曾仲鳴を思ふの文」の如き、日本から見たもののみではなく中國的な日本語教科書を必要とす 支那事變の勃發原因等支那人をして納得せしめる書方が望まし</p>
	<p>江蘇省では英語教授を全廃し、日本語教授の重要性が愈々重□□を加へ來つゝあり學校で大東亞史を教へて居るも日本的なもの□し、殊に中國語で書いた大東亞史が必要、日本語讀本の中に東亞史的な教材を入れてほしい。江蘇省では國民政府編纂の初級日語が正讀本下(マ)日本語讀本が副讀本である。日華辭典の出版を是非【希】望す。</p>
南京	<p>振興會の刊行物は上海で停滯する故か南京迄あまり來ない。自分の原稿を掲載して貰った雑誌すら手許に來ぬ實情なり 刊行物は上海大使館事務所或は個人宛を避け南京總領事館宛は【に】せられたし 掛圖の如きも南京に殆んどなし、教材の取扱方に關し文化讀本等に日本の國民性が【單】に模倣性のみならず創造性に富むといふ點を強調せられたし ハナシコトバに關しては歴史的假名遣を使用してほしい、中支に於ては小學校に於ける日本語教科書がなくハナシコトバを使用し居る實情なり</p>
	<p>ハナシコトバの指導書を讀みこなす華人は餘り多くなからん 又後の方にある華文は北京童【官】話にして南京附近では諒解し難き處なり 日本語讀本には絵が少な過ぎると思はる 尚四ヶ月で一冊終了する位のものに必要なり 値段も出来るだけ低廉にされたし ハナシコトバ指導書は日本人の教師が内地で日語を教へる教科書の感あり。</p>
香港	<p>日語普及、日語教育の教材に相當困窮し居るを以て振興會刊行物を可成利用したし、掛圖如きは是非必要にして取敢ず振興會刊行物を一揃【送】付せられたし。</p>
廣東	<p>日本語振興會の刊行物あまり入手出來得ない實情にあり 特に日本語、ハナシコトバ、指導書等必要なり 振興會の御考慮を乞ふ</p>
中、南支各地の日本語教育及び日本語普及狀況	
上海	<p>最近日本語専門學校を設置し派遣教員五名を以て教授に當り居れり現在日支何れもの法令に依らざる學校なるも將來は華中に於ける日本語教育の専門的中央機關として整備せしむる要あらんと思はる。 派遣教員は現在上海に六十八名あり昨年末激増したり 上海には上海日本語教育研究會を組織し事務所を日本語専門學校内に設置す、事業として日語の普及、教材の研究、日本語大會の開催、華人日語教師の再教育をなす。會員は派遣教員の外華人日語教師を含めて約八十名あり 相當活發なる活動をなし居れり。 當地には内地より進出せし宗教團體經營の日語學校あり、稍々濫立の傾向あり、之が指導監督に留意を要し殊に助成に關しては重點的になす要あらんと思はる。 一般に日本語研究及び習學(マ)熱は旺盛なるも其の反面支那人經營になる内容いかゞはしき日語學校も相當あり且つ日語教授の内容に關しみだれ相當あるものの如し、かゝるみだれを矯正する任務は派遣教員にあるものと思はる。</p>
杭州	<p>派遣教員は正式のもの十二名、現地採用者十一名 現地採用者中非常に優秀なる者あると同時に舊特務機關で採用せし者の中に自動車運轉手出身の如きものである 日語教育の中央機關として省立日文專科學校あり目下省内に於ける唯一の高等専門學校なり。 校長は舊藏前高工卒業の留學生出身者、主任教授は日系教員なり 本校は日語教員の養成機關として且つ唯一の高等教育機關として、名士の子弟多く在學し【浙】東作戦にも多數通譯として従【軍】し軍側【より】多大の感謝を得たる由なり。 尚杭州には我方の經營になる學校として東亞日語學校(佛教系)及【私立興亞中學</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>附設日專科學校あり後者の如きは相當成績を【あ】げ居るものの如く見受けられたり。</p>
	<p>蘇州</p>
	<p>派遣教員は十數名 江蘇省全体の日語教育關係者で江蘇省日語研究會を組織し各般の事業をなし居れり蘇州には現在江蘇省唯一の大學たる蘇州教育學院あり學校中樞部には日系職員あり實質的に把握し蘇州に於ける日本語教育の中心機關の如き感あり但し校舎設備教員等は貧弱にして程【度】は専門學校位のものなり</p>
	<p>南京</p>
	<p>首都の【故】を以て政策轉換の影響を受くる事甚だしく具体的のあらはれとしては學校に於ける派遣教員の取扱い急変したるを【訴】ふる者ある實情なり、然りと雖も大東亞戦争の勃發殊に國府參戰、我が對支政策の【進】展により支那側要人、知識階級等に於て急速に日本語熱が勃興せしもの如し、これを偏に親日的空氣の【充】滿に起因すと解するは聊か早計に失せんか、かゝる日本語研究熱に對應する日語教育擔當者の【用】意は未だ充分ならずの感あり。派遣教員の精進を望むこと切なるを覺えたり。</p>
	<p>派遣教員側に於ては南京に日語教育の中心機關たる【日語専門學校の如きも】の設置を熱望致し居れり南京に於て著しく看取したることは派遣教員と我方教育行政擔當者との關係調整の要なり從來即ち興亞院連絡部の存したる【時】は派遣教員事務及び日語普及の事業等は地方にありては概ね軍特務機關に於て取扱いたり然るに政策轉換以來此等の業務は大東亞省出先機關たる領事館に移管せらるるに至りたるも未だ其の引繼狀態必ずしも良好と認め難し、かゝる現象は独り南京のみならず蘇州(清郷地區なる關係上事務移【管】は未了の状態)杭州、廣東等に於ても見受けられたり</p>
	<p>香港</p>
	<p>一般に日語熱著しく旺盛にして總督部認可の日語講習所のみにも三百六【十】、其の生徒數四千二百餘名、修了生九千餘名、に達すといふ。 總督部に於ては日語教育施設につき嚴重なる認可制を設け近く其の優秀なるものにつき助成する意向ありといふ。 日語教授の専門機關として最近、官立東亞學院なるもの設置せられ教【員】はすべて臺灣より仰ぎたるも日本語教授には必ずしも適格者とと(マ)言ひ難く感ぜられたり。</p>
	<p>廣東</p>
	<p>廣東語【(粵語)】が北京官話より發音讀方等に於て日本語に近き故か日本語熱當地に於ても旺盛なり。日語教育の中心施設として廣州日語學校あり校長以下全職【員】は關東日本【國民】學校の職【員】にして身分は何れも臺灣公立【國民】學校訓導にして總督府廣東出張所の監督を受け居れり。</p>
<p>日本語教育振興會第四十六回常任理事會 (昭和十八年)六月十一日 午前十一時ヨリ 於文部省第二會議室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事、釘本常任理事、西尾常任理事、相良常任理事 長沼總主事、鹿島主事、上村主事</p>
	<p>一、配布書類 第四十五回常任理事會協議要録、第四十六回常任理事會報告及議題</p>
	<p>一、協議事項</p>
	<p>イ、役員ノ件 第一高等學校教授岩淵悦太郎氏ヲ評議員ニ委嘱スルコトニ決定。 ロ、昭和十八年度研究部事業ノ件 原案ノ趣旨ニハ賛成ナルモ實行豫算ヲ考慮シソノ範圍内ニテ立案ノコト。 ハ、興亞教育會創設ノ經緯ニツキ相良常任理事ヨリ中間報告アリ。</p>
	<p>別紙「第四十六回常任理事會報告及議題」</p>
	<p>一、報告</p>
	<p>イ、第三回日本語教育講座ハ六月三日ヨリ開講セリ 講習四十九名 熱心ニ聽講シツツアリ ロ、豫テ大藏省ト折衝中ノ特別行為税ノ件ハ日本語普及用ノ圖書ニシテ主トシテ原住民ノ使用スルモノニツキテハ免税トナリタリ【課税セザルコトナレリ】</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)																								
	<p>【ハ、ハナシコトバ代 田尻公使ヨリ電報】</p> <p>二、議題</p> <p>イ、役員ノ件 評議員 第一高等學校教授 岩淵 悦太郎</p> <p>ロ、昭和十八年度研究部事業計畫ノ件 (別紙)</p> <p>別紙「昭和十八年度研究部事業計畫案」</p> <p>【日本語普及問題】調査委員會</p> <table border="0"> <tr> <td>第一部會</td> <td>2,450圓</td> </tr> <tr> <td>第二部會</td> <td>4,000圓</td> </tr> </table> <p>○長音、連母音ノ調査</p> <p>○カ行(マ)鼻濁音ノ分布調査</p> <p>○漢字音訓ノ調査</p> <p>○讀癖、慣用音ノ調査</p> <p>○動搖シツ、アル語法ノ調査</p> <p>右ニ關スル費用 (原案作製整理費共各件500圓)</p> <p>右ニ關スル委員會會費 十回 500圓</p> <p>部外委員ニ對スル手當 1,000圓</p> <table border="0"> <tr> <td>○學習者ノ誤リ易キ語音調査 (五〇箇所 各10圓)</td> <td>500圓</td> </tr> <tr> <td>○學習者ノ誤リ易キ語法ノ調査 (")</td> <td>500圓</td> </tr> <tr> <td>○ 右二項ニ關スル準備費用其他</td> <td>500圓</td> </tr> <tr> <td>○日本語マライ語ノ發音ノ比較 (千葉 勉氏)</td> <td>1,000圓</td> </tr> </table> <table border="0"> <tr> <td>○日支源字ノ異義調査 (華北日本語教育研究所)</td> <td>2,700圓</td> </tr> <tr> <td>○文法教授法</td> <td></td> </tr> <tr> <td>○高學年ノ指導法 (松宮 彌平氏)</td> <td>2,000圓</td> </tr> <tr> <td>○直接法ニヨル教材研究 (山口 喜一郎氏)</td> <td>500圓</td> </tr> <tr> <td>○資料作製ノタメノ專門家會合費及手當</td> <td>2,000圓</td> </tr> <tr> <td>拾回 一回 200圓</td> <td></td> </tr> </table> <p style="text-align: right;">總計 16,150圓</p> <p>【○興亞教育會設立ノコト 相良事務官ヨリ中間報告アリ】</p>	第一部會	2,450圓	第二部會	4,000圓	○學習者ノ誤リ易キ語音調査 (五〇箇所 各10圓)	500圓	○學習者ノ誤リ易キ語法ノ調査 (")	500圓	○ 右二項ニ關スル準備費用其他	500圓	○日本語マライ語ノ發音ノ比較 (千葉 勉氏)	1,000圓	○日支源字ノ異義調査 (華北日本語教育研究所)	2,700圓	○文法教授法		○高學年ノ指導法 (松宮 彌平氏)	2,000圓	○直接法ニヨル教材研究 (山口 喜一郎氏)	500圓	○資料作製ノタメノ專門家會合費及手當	2,000圓	拾回 一回 200圓	
第一部會	2,450圓																								
第二部會	4,000圓																								
○學習者ノ誤リ易キ語音調査 (五〇箇所 各10圓)	500圓																								
○學習者ノ誤リ易キ語法ノ調査 (")	500圓																								
○ 右二項ニ關スル準備費用其他	500圓																								
○日本語マライ語ノ發音ノ比較 (千葉 勉氏)	1,000圓																								
○日支源字ノ異義調査 (華北日本語教育研究所)	2,700圓																								
○文法教授法																									
○高學年ノ指導法 (松宮 彌平氏)	2,000圓																								
○直接法ニヨル教材研究 (山口 喜一郎氏)	500圓																								
○資料作製ノタメノ專門家會合費及手當	2,000圓																								
拾回 一回 200圓																									
<p>日本語教育振興會第四十七回常任理事會 (昭和十八年)六月十八日 午前十一時ヨリ於文部省 第參會議室</p>	<p>一、出席者</p> <p>松尾理事長 大岡常任理事、釘本常任理事、西尾常任理事 相良常任理事 長沼總主事、鹿島主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第四十六回常任理事會協議要録、相良常任理事中南支視察報告 (日本語教育及日本語普及狀況) 第四十七回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、日本語普及叢書凡例ノ件 右ハ原案ヲ撤回シ次回ニ改メテ提出ノコト</p> <p>ロ、昭和十八年實行豫算ノ件 (削除)</p> <p>附記 本件ハ事務ノ都合上議題トシテ上程ヲ取消シ次回ニ延期シタルモ、急ヲ要シ且ツ大東亞【省】指示ニヨルモノナル為次回理事會ニ於ケル協議ヲ經ズ速ニ提出スルコト</p> <p>ハ、表記法ノ件 朝日新聞社發行「ウタノエホン」ニ用ヒラレタル發音符號ヲ以テ【加筆 スル】表記法並ニ北京鹽澤公使ヨリ照會ノ發音符號使用ノ件ハ本會ニ於テ決定スベキ問題ニアラザルモ發音符號ニヨリ表記スルコトハ原則トシテ差支ナカルベシトノ意見ノ一致ヲ見タリ</p> <p>ニ、濟南ニ於ケル座談會記錄ノ件 濟南男子師範ヲ中心トシタル座談會記錄ヲ「日本語」誌上ニ掲載ノ件ハ政治ニ關スル部分ニツキ大東亞省ノ檢閲ヲ乞ヒ之ヲ掲載スルコト</p> <p>別紙「第四十七回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ、本會使用出版用紙ノ件ニ關シ六月十五日長沼總主事情報局ニ井澤情報官ヲ訪問懇</p>																								

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>談セリ</p> <p>ロ、六月十六日西尾常任理事及ビ長沼總主事國際學友會第二回教授法研究會ニ出席セリ。</p> <p>ハ、六月十六日海軍省ト連絡ノタメ軍務局々員 (南方政務部所属) 小關中佐ト懇談セリ。</p> <hr/> <p>一、議題</p> <p>イ、日本語普及叢書凡例ノ件 日本語教授法【ノ原理】 (案) 日本語普及【教育】 叢書</p> <p>一、本叢書ハ、日本語教育ノ普及振興ニ資スルタメニ、日本語教育上ノ諸問題ニ關スル解説闡明及ビ日本語教育ト關連アル各種知識ノ涵養ヲ目的トシテ編纂スルモノデアル。</p> <p>一、本篇ハ、東京文理科大學教授神保格氏ニ委囑シ、執筆ヲ煩シタモノデアル。 日本語教育振興會</p> <p>ロ、昭和十八年度實行豫算ノ件 (別紙)</p> <p>ハ、表記法ノ件</p> <p>ニ、濟南市ニ於ケル座談會記錄ノ件</p>
<p>日本語教育振興會第四十八回常任理事會 (昭和十八年)六月二十五日 (金) 午前十一時ヨリ於文部省圖書局長應接室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 相良常任理事 長沼總主事 鹿島主事 上村主事</p> <hr/> <p>一、配布書類 第四十七回常任理事會協議要録 第四十八回常任理事會報告及議題</p> <hr/> <p>一、協議事項</p> <p>イ、日本語教育叢書 (假稱) 「日本語教授法ノ原理」凡例ノ件叢書トシテ刊行スルコトニシ凡例ハ總主事ニ於テ文案ヲ練ルコト 尚叢書名ハ日本語教育叢書トスルコト</p> <hr/> <p>ロ、佛教興亞讀本ノ件 大東亞省ヲ通ジテ依頼アリタル日【蓮】宗務院興亞局ヨリ支那現地同宗經營ノ日本語學校ニ使用ノ佛教興亞讀本校閱ノ件ハ本會ニ於テ文字假名遣等ニツキ校閱スルコト</p> <hr/> <p>ハ、ソノ他 南方派遣日本語教育要員養成所第三回修了者ニ對スル壯行會ヲ七月十九日晝 修了【式】後開催ノ件【コト】</p> <p>本會今後ノ方針ニ關スル協議ヲ來週中適當ナル日ニ開催ノコト 【講習繼續ニツキ 文書課ニ願出ゾルコト】</p> <hr/> <p>別紙「第四十八回常任理事會報告及議題」</p> <hr/> <p>一、報告 イ、六月二十四日午後五時半ヨリ芝公園浪華家ニ於テビルマ訪日視察團ヲ招待懇談會ヲ開催セリ</p> <hr/> <p>一、議題</p> <p>イ、日本語教育叢書 (假稱) 並ニ「日本語教授法ノ原理」凡例ノ件</p> <p>一、本叢書ハ日本語教育及ビ之ト關連アル各種ノ問題ニ關スル研究、解説ヲ目的トシテ編纂シ以テ日本語教育ノ振興ニ資セントスルモノデアル</p> <p>一、本篇ハ本會ヨリ語學教育研究所ニ委囑シ (同所ニ於テ) 左【記】三氏ノ執筆ヲ煩シタモノデアル</p> <p>東京帝國大學教授 市河 三喜 東京文理科大學教授 神保 格 東京文理科大學教授 榎崎 淺太郎</p> <hr/> <p>ロ、佛教興亞讀本ノ件 【副讀本トシテ 用語 用字】</p>

會議名・年月日・時・場所

(本文)

日本語教育振興會第四十九回常任理事會

(昭和十八年)七月二日
(金)午前十一時ヨリ
於文部省第三會議室

一、出席者

松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事
相良常任理事 村田大東亞省屬【省通譯官】 長沼總主事 鹿島主事

一、配布書類

第四十八回常任理事會協議要録 第四十九回常任理事會報告及議題

一、協議事項

イ、役員異動ノ件

大東亞省ヨリ申出ノ役員ノ件原案通り決定ソノ手續ヲトルコト

ロ、其ノ他

○南方特別留學生引率司政官ヲ招待懇談スルコト

○上海、南京、廣東、青島等大東亞省出先文化部(課)長豫算會議ノタメ上京中ニツキ招待懇談會ヲ開催スルコト

別紙「第四十九回常任理事會報告及議題」

一、報告

イ、第三【回】日本語教育講座前半ハ六月三十日ヲ以テ前半ヲ終講セリ

【全部で十六回】

皆出席 五名 三回缺席 六名

一回缺席 八名 四回缺席 三名

二回缺席 六名 五回缺席 三名

ロ、六月二十八日附ヲ以テ本會使用々紙ノ件ニ關シ大東亞省ニ配給要望書提出方願出デタリ尚本件ニ關シ總主事ヨリ圖書局總務課長及ビ情報局關係官ニ連絡セリ

一、議題

イ、役員移動ノ件

評議員 河内駐在總領事 小川 昇(舊箕輪領事)

〃 西貢駐在領事 佐藤【醇】造

〃 泰國駐在大使館參事官 石井 康

日本語教育振興會第五十回常任理事會

(昭和十八年)七月九日
(金)午前十一時ヨリ
文部省圖書局長應接室

一、出席者

松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 藤井常任理事 相良常任理事
村田大東亞省通譯官 曾我大使館調査官 長沼總主事 鹿島主事 上村主事

一、配布書類

第四十九回常任理事會協議要録 第五十回常任理事會報告及議題

一、協議事項

イ、昭和十九年度支那事務局助成出版物ノ件

昭和十九年度本會豫算ヲ大東亞省支那事務局及南方事務局宛提出ノ必要上文部省ニ於ケル昭和十八年度支那向教科書編纂計畫並ニ大東亞省ニ於ケル編纂上ノ希望等參考トシタキ件ハ大東亞省トシテ相良常任理事ヨリ今後師範教育ニ重點ヲ置ク關係上師範學校ニ用ヒ得ル教科書及ビ日本語教授者ノ手引トナルベキモノ等ヲ編纂サレタキ旨申出アリタルモ、本件ハ別個ニ文部省、大東亞省相互ニ連絡シテ決定スルコトトナレリ

ロ、其ノ他

○現地トノ編纂協力ニ關スル件

蒙疆ヨリ本會ニ對シ教科書編纂ヲ委囑スル場合受諾可能ナリヤ否ヤニツキ曾我大使官(マ)調査官ヨリ發言アリタルガ右ハ外國政府ノ委囑ナルニヨリ本會ニテ委囑ヲ受クルコトハ差支ナシトノ意見一致ヲ見タリ

○蒙疆ニ於ケル日本語普及ニツイテ(曾我文化局長談)

蒙疆ニ於テハ今後益々日本語ノ普及徹底ニ力ヲ致シ日本語ヲ國語トシテ取扱ハントノ考ヨリ師範教育ニ特ニ重點ヲ置ク意向ナリ。師範學校ハ目下四校アルモ將來ハ二校トシ内容ヲ改善スル豫定ナリ 鐵道沿線主要都市、盟公署ノ所在地ニハ日本語學校ヲ設立シ社會教育トシテノ日本語教育ヲ施サントシ張家口ニハカ、ル學校ノ外日本語普及及研究所ヲ作り日系教員ノ中心トセントス之ヲ日本語教育振興會ノ支部トセバ何かニツケ便宜多カルベシ

【○前項支部設置ニツキテハ大東亞省ト打合ノ上急速ニ取運ブコトニ意見一致セリ】

別紙「第五十回常任理事會報告及議題」

一、報告

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	<p>イ、七月八日特別會計運轉資金 (十八、九八一【圓】・九〇)ヲ帝國銀行田村町支店ニ預入セリ</p> <p>ロ、日本語讀本卷四・五印刷 (各四万部宛)ニ關シ大東亞省ヨリ指令アリタリ 【曾我文化部長希望 蒙疆學制 「國語として」 現地人日本語教師 師範學校用讀本 日語學校 (主要都市) 標準日語學校 日本語普及研究會】</p> <p>二、議題 イ、昭和十九年度支那事務局助成出版物ノ件 【一 師範學校用教科書 二 日本語教授法序説 三 成人用教科書 (十八年度)】</p>
<p>日本語教育振興會第五十一回常任理事會 (昭和十八年)七月十六日 (金)午前十一時ヨリ 於文部省第二會議室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 關野常任理事 相良常任理事 長沼總主事 鹿島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 第五十回常任理事會協議要録 第五十一回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項 イ、研究室借入ノ件 在外邦人子弟教育協會ノ一部ヲ借入、研究室ヲ移轉シタキ件ハ久保田渉外課長ヲ通シテ具体的ナル交渉ヲ進ムルコトニ決定</p> <p>ロ、ハナシコトバ増刷ノ件 ハナシコトバ上中下各三万部宛上海大使館事務所ヲ通シテ注文アリタル為増刷シタキ件ハ大東亞省側ヨリ「ハナシコトバ」ニ對スル改訂要望アリタル為増刷ハ見合【ハ】スルコトトシ現在在庫部數一万五千部ヲ供給スルコトニ決定</p> <p>ハ、其ノ他 ○南方派遣教員壯行會開催ニ關スル件 在外【邦人】子弟教育協會トノ關係モアリ今後ハ南方派遣教員講習修了直後ノ壯行會ハ本會ニテ又發令後ノ懇談協議會ハ在外邦人子弟教育協會ニオイテ開催スルコトニシテハ如何トノ久保田渉外課長ヨリ申出ノ件ハ毎回義務ニ行フコトニハ同意シ得ザルモノノ趣旨ハ可ナ【ル】ヲ以テ出來得ル限り本會ガ自主的ニカ、ル會合ヲ催スコトハ望マシキコトナリトノ意見ノ一致ヲ見タリ</p> <p>○杭州田中領事ヨリ申出ノ件 杭州田中領事ヨリ大東亞省ヲ通ジテ本會會則各種出版物等送附サレタシトノ件ハ杭州【領事館】ハ從來外務省出先【機關】ナラ【リシ】為本會ノ内容ニツキ承知シテラザル故速ニ無料ニテ送附スルコトニ決定 尚相良常任理事ヨリ香港ニ對シテモ右同様ノ希望アル故便宜取計ハレタキ旨發言アリ 尚「ハナシコトバ」ハ爾後絶版トナルモ從來頒布シタルモノナレバ送附スルコト</p> <p>○常任理事増員ニ關スル件 從來ノ常任理事ハ舊興亞院ト文部省圖書局トニヨリテ構成サレタルガ如キ印象ヲ與フル所ナシトセズ、加之創立以來二年本會【ノ】規【模】ヲ擴大スル時期ニ到達セルモノト思料セラルル故、此ノ際日本語普及協議會等ニテ日本語問題ニ關係アル文部省總務局渉外課長並ニ大東亞ニ對スル宣傳啓發ニ關スル事項等ニヨリ日本語問題ニ關係アル大東亞省【總務局】總務課宇山事務官ヲ常任理事ニ推薦シタキ件ニ關シ相良常任理事ヨリ發言アリ。之ニ對シ本會ヲ強化スル上ニオキテ二氏ノ常任理事就任ノ【趣旨ハ】結構ナルモ本年八月ヲ以テ一應本會役員ノ任期滿了トナル關係上次回理事會ニ於テ現任理事ノ氏名ヲ印刷ノ上審議スルコトナレリ</p> <p>○第五十回常任理事會協議要録ニ追加ノ件 前回協議要録中蒙疆ニ於ケル日本語普及ニツイテ (曾我文化局長談)ノ次ニ「前項ノ支部設置ニツキテハ大東亞省ト打合ノ上急速ニ取運ブコトニ意見一致セリ」ト追加セラ</p> <p>別紙「第五十一回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p>

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	<p>イ、七月九日晚【翠】軒ニ於テ日本語普及問題調査委員會第一部會ヲ開催セリ今後毎週開催ノ豫定</p> <p>ロ、文部省編【纂】南方諸地域向日本語教科用圖書發行ニ關シ文部大臣ヨリ本會々長宛委囑アリタリ</p>
	<p>一、議題</p>
	<p>イ、研究室借入ノ件</p> <p>ロ、ハナシコトバ増刊ノ件 【上中下各三萬 (上海大使館)】</p> <p>ハ、其他</p>
	<p>【相良常任理事より支那學務局トシテ「ハナシコトバ」を改訂せられたき意向アリ】</p>
	<p>【現在理事ノ氏名ヲ印刷配布ノコト】</p>
<p>日本語教育振興會第五十二回常任理事會 (昭和十八年)七月二十三日(金)午前十一時ヨリ於文部省圖書局長應接室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 西尾常任理事 相良常任理事 松村大東亞省通譯官 長沼總主事 鹿島主事</p>
	<p>一、配布書類</p>
	<p>第五十一回常任理事會協議要録 第五十二回常任理事會報告及議題</p>
	<p>一、協議事項</p>
	<p>イ、上海大使館事務所ヨリ注文ノ日本語讀本賣價ノ件 上海大使館事務所ヨリ注文ノ日本語讀本卷一卷二各三千部宛ニ對スル賣價ノ件ハ今回ニ限り從來通り二十錢ニテ頒布スルコトトシ今後ハ特別會計ニヨル出版物トナルベキ關係モアリ定價通り五十錢トスル旨大東亞省ヨリ通牒スルコトトナレリ</p>
	<p>ロ、役員(理事)ノ件</p>
	<p>八月二十五日役員任期滿了ト同時ニ次ノ如ク異動スルコトニ決定ス</p>
	<p>陸軍省軍務局軍務課 陸軍少佐 松尾次郎ヲ理事ニ 赤池春夫ハ任期滿了ト</p>
	<p>共ニ解囑</p>
	<p>大東亞省總務局總務課 大東亞事務官 宇山厚ヲ // 松【杉】原荒太ハ評議員</p>
	<p>情報局第三部對外事業課 情報局情報官 井澤實ヲ // 田付景一ハ //</p>
	<p>大東亞省支那事務局總【政】務課 夫東亞事務官中川—ヲ // 堂ノ脇光雄ハ //</p>
	<p>大東亞省南方事務局總【政】務課 夫東亞事務官關野常任理事ト相談ノ上決定</p>
	<p>萩原 徹ハ //</p>
	<p>東亞同文會常務理事一宮房治郎ハ理事ノ任期滿了ト共ニ解囑シ教育部長決定次第教育部長ヲ評議員ニソノ他ハ重任スルコトトナレリ</p>
	<p>右理事原案ニ對シ</p>
	<p>(イ) 理事會ヲ月一回開催スルトシテモ理事ノ顔觸多種多樣ナルヲ以テ缺席モ多カルベク從ツテ結局常任理事ヲ増員スル方ガ效課(マ)的ナラズヤ</p>
	<p>(ロ) 理事ノ顔觸ヲ見ルト官廳關係ト團體關係トヨリ成ル故之ヲ別々ニシテ連絡會議ヲナスモ一案ナラン等ノ所見開陳アリタルモ時間ノ關係上次回ニ於テ更ニ審議スルコトトナレリ</p>
	<p>ハ、其ノ他</p>
	<p>○柳澤健氏招待懇談會開催ノ件</p>
	<p>理事長ノ都合ニヨリ決定スルコト</p>
	<p>○國際學友會派遣講師ノ件</p>
	<p>國際學友會派遣中ノ山口主事、鶴川研究員所定ノ期間滿了セルヲ以テ今後更ニ繼續派遣スルヤ否ヤノ問題ニ關シテハ理事長關野常任理事ノ了解ヲ求メテ速ニ解決スルコト</p>
	<p>別紙「第五十二回常任理事會報告及議題」</p>
	<p>一、報告</p>
	<p>イ、七月十九日文部省南方派遣日本語教育要員養成所第三回修了生ニ對スル招待懇談會ヲ開催セリ</p>
	<p>ロ、七月二十日午後三時大東亞省南方事務局主催比島留學生ニ關スル引率司政官ノ報告懇談會ヲ外務省儀典課長官舎ニ於テ開催セラレ長沼總主事本會側トシテ列席セリ</p>
	<p>ハ、七月二十日午後五時半文部省涉外課主催南方派遣教員代表者懇談會在外邦人子弟教育協會ニ於テ開催セラレ長沼主事本會側トシテ列席セリ</p>

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	<p>一、議題</p> <p>イ、上海大使館事務所ヨリ注文ノ日本語讀本賣價ノ件【20錢 今後ハ50錢】</p> <p>ロ、役員(理事)ノ件</p> <p>ハ、其ノ他</p>
	<p>日本語教育振興會役員【理事】名簿 (五十音順)</p> <p>昭和十八年六月二十日現在【(除常任理事)】</p>
	<p>一、理事</p> <p>陸軍省軍務課員陸軍大尉 赤池 春夫</p> <p>東亞同文會常務理事 一宮 房治郎</p> <p>文部省圖書監修官 井上 赳</p> <p>大東亞省囑託 大志万 準治</p> <p>善隣協會理事長 大島 豊</p> <p>海軍省教育局海軍中佐 鹿江 隆</p> <p>文部書記官 久保田 藤麿</p> <p>國際文化振興會專任常務理事 黒田 清</p>
	<p>大東亞事務官 腰原 仁</p> <p>文部省圖書監修官 鹽野 直道</p> <p>大東亞書記【事務】官 杉原 荒太 【○ 宇山 厚】</p> <p>文部省書記官 高瀬 五郎</p> <p>情報局情報官 田付 景一 【井澤 實】</p> <p>文部事務官 田中 彰</p> <p>大東亞省囑託 田中末雄</p>
	<p>日華學會理事 近澤 道元</p> <p>大東亞省調査【事務】官 堂脇光雄 【○中川】</p> <p>青年文化協會常務理事 豊田 久二</p> <p>文化省囑託 長沼 直兄</p> <p>大東亞書記【事務】官 【荻】原 徹 【○】</p> <p>日語文化協會主事 松宮 一也</p> <p>國際學友會事務理事 矢田部 保吉</p>
日本語教育振興會第五十三回常任理事會 (昭和十八年)七月三十日 午前十一時ヨリ 於文部省第三會議室	<p>一、出席者</p> <p>松尾理事長 大岡常任理事 關野常任理事 相良常任理事 長沼總主事 鹿島主事 上村主事</p>
	<p>一、配布書類</p> <p>第五十二回常任理事會協議要録 第五十三回常任理事會報告及議題</p>
	<p>一、協議事項</p> <p>イ、國際學友會派遣講師ノ件</p> <p>國際學友會ニ對シ講師トシテ山口主事鶴川研究員派遣中ノ所定ノ期間滿了ニツキ辭任シ今後ノ協力【ニツキテハ】方國際學友學(マ)關係者ト協議スルコトトナレリ</p>
	<p>ロ、青島總領事館ヨリ教科書配給申出ノ件</p> <p>青島ヨリハナシコトバ日本語讀本注文ノ件ハ「ハナシコトバ」ハ今後印刷セザル方針ナル故日本語讀本ノミ注文ニ應ズルコトトシ賣價ハ助成出版物ナルヲ以テ從來通り二十錢ニテ頒布スルコトトナレリ</p>
	<p>ハ、其ノ他</p> <p>第五十二回常任理事會協議事項士【中】役員ノ件ノウチ、南方事務局政務課、支那事務局總務課ノ事務官ヲ理事ニ委囑スルコトハ見合ハスコトトナレリ</p> <p>尚關係團體中主要ナル團體例ハバビルマ協會、フイリツピン協會、在盤谷日本【泰】文化會館、在佛印日本文化會館ソノ他等ニハ新ニ評議員ヲ委囑スルコトトナレリ</p>
	<p>○雜誌頒布ニ關スル件</p> <p>雜誌「日本語」ヲ軍ノ要求モテヲ泰佛印及ビ軍政治下諸地域ニ頒布方希望ノ旨關野常任理事ヨリ發言アリタル件ニ關シテハ發送ノ方法ハ關係官廳ト協議ノ上決定シ代金ノ件ハ大東亞省ト協議ノ上決定スルコト</p>
	<p>○理事會ノ件</p> <p>理事會常任理事會ニツキ今後如何ニ運營スルカニ關シ各常任理事ヨリ左ノ所見ノ開陳アリタリ</p>

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	<p>イ、常任理事ハ從來ノママトシテ理事會ヲ月一回開催シ關係官廳團體ト連絡調整スルコトトセバヨカラシ</p> <p>ロ、常任理事會ガ執行機關ナル故理事會ハ結局報告程度ニテ存在ノ理由ガ薄弱トナル故ニ毎月開催スルトシテモ次第ニ出席者減少シ有名無實ノ存在トナル恐アリ</p> <p>ハ、常任理事ヲ一名又ハ二名トシテソノ他ハ適任者中ヨリ理事ヲ選定シテ理事會ヲ構成シ、他ノ一方ニ於テ擔當官連絡會議トシテ週一回開催スル如クセバ如何</p> <p>右ノ如キ所見ノ開陳アリタルモ今後更ニ熟考スルコトトナレリ</p> <hr/> <p>○支部ノ件</p> <p>蒙疆ニ於ケル本會支部設置ノ問題ニ關シテ大東亞省側ノ意見トシテ相良常任理事ヨリ左ノ如キ説明アリタリ</p> <p>大東亞省ノ方針トシテ現地ニ於ケル諸機關トノ關係上内地團體ノ支部ヲ現地ニ設置セシメザル意向ニシテ又現在迄蒙疆ニ支部ヲ持タザリシモ振興會ノ運営上支障ナカリシ故ニ特ニ支部開設ノ必要ナカラシ</p> <hr/> <p>別紙「第五十三回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ、大宮島(舊グアム島)海軍民政部需品トシテ同部ヘノ物品納入者望月正次ヨリ左記ノ品供給方希望アリタルニヨリ大東亞省支那事務局ノ了解ヲ得テ有償頒布セリ</p> <p>ハナシコトバ上中下各二千部 日本語讀本一、二、三各二千部</p> <p>ハナシコトバ掛圖二十部 絵本八種各六百部(内ハナヤサイ四百部)</p> <hr/> <p>二、議題</p> <p>イ、國際學友會派遣講師ノ件</p> <p>ロ、青島總領事ヨリ教科書配給申出ノ件</p> <p>ハナシコトバ上 六千部 中 六千五百部 下 五千二百部</p> <p>日本語讀本卷一 二百五十部 卷二 千五百部 卷三 八百五十部</p>
<p>日本語教育振興會第五十四回常任理事會 (昭和十八年)八月六日午前十一時ヨリ 於文部省第三會議室</p>	<p>一、出席者</p> <p>松尾理事長 大岡常任理事 西尾常任理事 關野常任理事 相良常任理事 長沼總主事 上村主事</p> <hr/> <p>一、配布書類</p> <p>第五十四回常任理事會報告及議題</p> <hr/> <p>一、協議事項</p> <p>イ、海外向日本語普及用圖書中他ノ團體ノ分擔ニ委スベキ發行物ニ關スル件</p> <p>海外向日本語普及用圖書中ニハ日本語教育用及ビ對外宣傳用圖書アリテソノ限界必ズシモ分明ナラズ。之ガ分擔ヲ明確ナラシムルコトハ諸團體トノ連絡及ビ事業ノ調整上必要ナルニヨリ本會ニ於テ發行スベキ圖書ニ關シ左ノ如キ方針ヲ以テ進ムコトニ意見一致セリ。</p> <p>文部省編纂日本語教科用圖書及ビ大東亞省ノ委囑ニヨルモノハ總テ本會ニ於テ發行スベク又異民族ノ日本語教育ニ關スル部門ハ原則トシテ本會ニテ擔當スベキモノナルモ一般ノ啓發宣傳ニ關スル部門ハ他團體ニ委スコト。</p> <hr/> <p>ロ、日本語自習書編纂ノ件</p> <p>大東亞省南方事務局ヨリノ指示ニヨル泰、佛印向日本語自習書編纂ノ件ハ成人用教科書ヲ中心トシタル内容ヲ以テ適宜ノ方法ニテ速ニ編纂ニ着手スルコト</p> <hr/> <p>ハ、其他</p> <p>支部設置ノ件</p> <p>蒙疆ニ於ケル支部設置ノ件ハ大東亞省トシテ一括シテ考慮スル必要モアリ暫ク保留スルコトトナレル旨相良常任理事ヨリ説明アリタリ</p> <p>日本語學習用雜誌發行ノ件</p> <p>日本語學習用雜誌ハトシテ大東亞各地域ノ日本語學習者ヲ對象トスル雜誌發行ノ件ハ内容其他具體的計畫ヲ立テ次回理事會ニテ審議スルコト</p> <hr/> <p>別紙「第五十四回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ、主事鹿島豐ハ北部佛印日本語普及會ニ研究員谷口陸男ハ在バンコック日本【泰】文化會館日本語普及會【附屬日本語學校】ニ轉任スルコトトナリ七月三十一日ソレゾレ主事及研究員ヲ免ジタリ尚兩氏ハ今後兩國ニ於ケル日本語普及ニ關シテ本會ト</p>

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	<p>密接ナル連絡ヲ保持スル豫定ナリ。 ロ、八月四日關野常任理事ヨリ長沼總主事ニ對シ本會ヨリ國際學友會ヘノ派遣講師引上 【任期滿了】ニツキ國際學友會ニテ了承ノ旨電話ヲ以テ通報アリタリ。</p>										
<p>日本語教育振興會第五十五 回常任理事會 (昭和十八年)八月十三日 (金)午前十一時ヨリ 於文部省第三會議室</p>	<p>ニ、議題 イ、海外向日本語普及用圖書中他ノ団体ノ分擔ニ委スベキ發行者ニ關スル件 ロ、日本語獨習書編纂ノ件 【ハ、其他】</p>										
	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 關野常任理事 相良常任理事 長沼總主事 上村主事 福田主事</p>										
	<p>一、配布書類 第五十四回常任理事會協議要録 第五十五回常任理事會報告及議題</p>										
	<p>一、協議事項 イ、日本語學習雜誌ノ件 本年度ニ於テ日本語學習者ヲ對象トスル雜誌發行ニ關シテハソノ必要ハ十分認メラ ル、モ大東亞省支那事務局ニ於テハ本會申請豫算ニ對スル査定ニ於テハ【決定後ナルタ メ】實行豫算ノ際ニ考慮ストノ相良常任理事ノ配慮モアリ、目下紙不足ノ際發行シ得ル ヤ否ヤ不明ナルモ原案通り準備ヲ進ムルコトニ決定 但シ誌名ハ支那人ヨリ見テ妥當ナル如ク決定スル必要モアリ一應調査スルコトトス</p>										
	<p>ロ、日本語自習書原案作製ノ件 泰語、安南語ニヨル日本語自習書原案作製ノ件ハ原案通り決定</p>										
	<p>ハ、其ノ他 ○語學教育研究所ヨリ協力方希望申出ノ件 語學教育研究所ニ於テ教室作業ノ諸練習ニ關スル參考書ヲ編纂スル意向アリソノ中ニ ハ自然日本語教授法ニ觸ル、部分モ多キヲ以テ協力方ノ希望申出ノ件ハ適宜協力スル コトトス</p>										
	<p>別紙「第五十五回常任理事會報告及議題」</p>										
	<p>一、報告 イ、八月十一日「標準漢字便覽」發行許可方ヲ文部省圖書局長宛申請セリ 【三、一〇四圓(一萬部) p. 130 菊半裁】</p>										
	<p>二、議題 イ、日本語學習雜誌ノ件 一、誌名 「學習日本語」 「日本語學習の友」 「日本のことば」 一、体裁 【B】5判 三十二頁 寫真入 グラビキ 着色 一、發行 月刊 毎月一日 一、創刊 豫定日 昭和十九年四月一日 一、定價 金三十錢 一、部數 毎月約一萬部 一、編輯費 責任編輯者 一名 一三〇圓 補助員 二名 一〇〇圓</p>										
	<p>ロ、日本語自習書原案作製ノ件 【(タイ、安南)】 原案作製料 五〇〇圓 【南方事務局 豫算 五、〇〇〇部 六、〇〇〇圓】 期 日 拾月末日マデ 翻譯料 各【各】五〇〇圓</p>										
	<p>ハ、其 他</p>										
	<p>別紙 「日本語」九月號決定目次</p> <table border="0"> <tr> <td>卷頭言</td> <td>長沼直兄</td> </tr> <tr> <td>異民族教育論</td> <td>玉井 茂</td> </tr> <tr> <td>滿蒙留學生と古典教育</td> <td>五味智英</td> </tr> <tr> <td>中國の學生に俳【諧】史を教へてみて</td> <td>上甲幹一</td> </tr> <tr> <td>泰・佛印に於ける日本語教育の現況ニ</td> <td>關野房夫</td> </tr> </table>	卷頭言	長沼直兄	異民族教育論	玉井 茂	滿蒙留學生と古典教育	五味智英	中國の學生に俳【諧】史を教へてみて	上甲幹一	泰・佛印に於ける日本語教育の現況ニ	關野房夫
卷頭言	長沼直兄										
異民族教育論	玉井 茂										
滿蒙留學生と古典教育	五味智英										
中國の學生に俳【諧】史を教へてみて	上甲幹一										
泰・佛印に於ける日本語教育の現況ニ	關野房夫										
	<p>日本語教育</p>										

會議名・年月日・時・場所

(本文)

	反省すべきこと 話方指導について 三 現代日本語の用例研究一 現代日本語の辭書的研究 フランス語史概説 (五)	日野成美 前田【熙胤】 【榎】垣 實 白石大二 エミールリツトレ 田島讓次
	合本總目次 讀物 東洋最古の貴賓— 石鼓について	八幡關太郎
	別紙 「日本語」十月號決定目次	
	卷頭言 民族共榮について 日本文化の浸透 對支文化政策の新課題 對南方文化政策の諸問題 日本人の南方發展	釘本久春 岡 正雄 宇野□□ 相良惟一 中島健藏 入江寅次
	現代語の用例研究 (二) 題未定 作文【教室】 安南 臺灣 ビルマ 滿洲 朝鮮 北支 中支	【榎】垣 實 篠原利逸 林 和比古 金丸四郎 (井澤實氏紹介) 岩佐 正 (森田【梧】郎氏紹介) 林 克馬 林 米子
	大東亞共榮圈の友へ (讀物・手紙の形式) 神保光太郎 富澤有為男 豊田三郎 櫻田當久【尾】 座談會 藤村作 片岡良一 篠原利逸 佐藤幹二 上甲幹一	
日本語教育振興會第五十六回常任理事會 (昭和十八年)八月二十日 午前十一時ヨリ 於文部省局長應接室	一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 相良常任理事 長沼總主事 上村主事 山口主事	
	一、配布書類 第五十五回常任理事會協議要録、第五十六回常任理事會報告及議題、日本語教育振興會役員名簿 (昭和十八年六月二十日現在)	
	一、協議事項 イ、役員任期滿了ノ件 小委員會ヲ作り、本會ヲ財團法人ニスルタメノ機構整備、改正ニ關スル諸調査ヲナシ、ソノ成案ニ基ツキ役員整備案ヲ作ルコトト決シ、小委員會ニハ相良、釘本兩常任理事及長沼總主事ノ三名ヲ委囑アリタリ。	
	ロ、前回ノ議題、日本語學習雜誌ノ【誌】名ノ件ニ關シテハ大東亞省側トシテハ「日【本】語指南」ヲ可トストノ相良常任理事ヨリノ見解披披瀝アリ。 【學習日本語】	
	別紙「第五十六回常任理事會報告及議題」	
	一、報告 イ、八月十八日滿洲事務局腰原事務官ト同道新京特別市所在滿日文化協會理事杉村勇造氏來訪、滿洲國ニ於ケル日本語教育振興ニ關シ今後緊密ナル連絡及ビ協力ヲ希望ノ旨申出アリタリ ロ、八月十八日午後五時半文部大臣官邸ニ於テ本會々長主催ニカ、ル菊池副會長、理事長、常任理事、總主事及主事等ノ會合アリ 出席者十九名	
	二、議題 イ、役員任期滿了ノ件 ロ、其他	

會議名・年月日・時・場所

(本文)

日本語教育振興會役員名簿 (五十音順) (昭和十八年 六月二十日現在)	別紙 「日本語教育振興會役員名簿 (五十音順) (昭和十八年六月二十日現在)」
一、會長	文部大臣 子爵 岡部長景
一、副會長	文部次官 菊池豐三郎
	大東亞次官 山本熊一
一、理事長	文部省圖書局長 松尾長造
一、常任理事	文部省圖書局國語課長
	文部省國語調查官 大岡保三
	文部省圖書局國語課
	文部省圖書監修官 釘本久春
	大東亞省支那事務局
	文化課大東亞事務官 相良惟一
	大東亞省南方事務局
	文化課大使館調查官 關野房夫
	大東亞省南方事務局
	文化課長大東亞書記官 東光武三
	文部省圖書局
	文部省囑託 西尾實
	大東亞省支那事務局
	文化課長大東亞書記官 藤井重雄
一、理事	陸軍省軍務局軍務課員 【杉尾少佐】
	陸軍大尉 赤池春夫
	東亞同文會常務理事 一官房治郎
	文部省圖書局第一編修
	課長文部省圖書監修官 【井上起】
	大東亞省支那事務局
	文化課大東亞省囑託 大志萬準治
	善隣協會理事長 大島豐
	大東亞省南方事務局總務
	課長大東亞書記官 荻原徹
	海軍省教育局海軍中佐 鹿江隆
	文部省總務局涉外課長
	文部書記官 久保田藤磨
	國際文化振興會專任常務理事 伯爵 黒田清
	大東亞省滿洲事務局
	總務課大東亞事務官 腰原 【仁】
	文部省圖書局第二編修課長 文部省圖書監修官 鹽野直道
	大東亞省總務局總務課長 大東亞書記官 杉原荒太
	文部省圖書局總務課長 文部書記官 高瀬五郎
	情報局第三部對外事業 課長情報局情報官 田付景一
	文部大臣官房會計課 文部事務官 田中彰
	大東亞省支那事務局 文化課大東亞省囑託 田中末雄
	日華學會理事 近澤道元
	大東亞省支那事務局總務 課長大東亞省調查官 堂ノ脇光雄
	青年文化協會常務理事 豐田久二
	文部省圖書局文部省囑託 長沼直兄
	日語文化協會主事 松宮一也 【宇山井沢】
	國際學友會專務理事 矢田部保吉
	國語協會理事長 梁田欽次郎
一、監事	文部大臣官房會計課長 文部書記官 柴沼直義
	大東亞大臣官房會計課長 大東亞書記官 華山親
一、顧問	企畫院次長 阿部源基
	台北帝國大學總長 安藤正次
	國民精神文化研究所長 伊藤延吉

會議名・年月日・時・場所 (本文)

大東亞省滿洲事務局長		今 吉 敏 雄
特命全權公使		岩 崎 民 男
大東亞省支那事務局長		宇佐美 珍 彦
東京帝國大學名譽教授		宇 野 哲 人
東亞研究所副總裁	男爵	大 藏 公 望
每日新聞社長		大 奧 村 信太郎
九州帝國大學名譽教授		春 日 政 治
青年文化協會理事長		河 原 春 作
陸軍軍政顧問	伯爵	兒 玉 秀 雄
海軍次官海軍中將		澤 本 賴 雄
特命全權公使		鹽 澤 清 宜
東京帝國大學名譽教授		鹽 谷 温 宏
日本放送協會會長		下 村 松 太郎
讀賣新聞社社長		正 力 村 出
京都帝國大學名譽教授		新 村 美 通
善隣協會理事長		鈴 木 重 政
陸軍軍政顧問		砂 田 新 平
大東亞省總務局長		竹 內 愛 義
特命全權公使		田 尻 中 義 男
滿洲國文教部次長		田 中 田 静 枝
東亞同文會理事長		津 田 上 貞 二
特命全權大使		坪 鶴 見 祐 輔
衆議院議員		德 川 川 義 親
陸軍軍政顧問	侯爵	德 川 川 賴 貞
陸軍軍政顧問	侯爵	富 永 永 恭 治
陸軍次官陸軍中將		永 井 井 柳 太郎
國際文化振興會理事長		永 井 井 柳 太郎
帝國教育會會長		永 井 井 柳 太郎
陸軍軍政顧問		永 田 秀 次郎
教科用圖書調查會第三部長	子爵	野 村 益 三
		橋 田 邦 彦
教科用圖書調查會第二部長	伯爵	林 博 太 郎
日本出版會會長		久 富 達 夫
文部省總務局長		藤 野 村 作
國語教育學會會長		藤 野 村 伊之助
同盟通信社社長		古 野 孝 一
東京文理科學大學名譽教授		保 科 孝 一
國語審議會副會長	男爵	穗 積 重 遠
國民鍊成所長		松 岡 忠 一
大東亞省參事官		松 村 隼 一
外務次官		松 本 俊 一
大東亞省南方事務局長		水 野 伊 太郎
國語協會副會長		南 弘 次郎
國際學友會理事長		宮 川 米 次郎
情報局次長		村 田 五 郎
朝日新聞社社長		村 山 長 舉
神宮皇學館大學長		山 田 孝 雄
帝國藝術院會員		山 本 勇 造
特命全權大使		芳 澤 謙 吉
京都帝國大學名譽教授		吉 澤 義 則

會議名・年月日・時・場所 (本文)

一、評議員	東亞學校教授 支部書記官 國語審議會委員 早稻田大學教授 臺灣總督府編輯官	有賀憲三 有光次郎 安藤正純 五十嵐力 石井權三 石黒修平 石黒魯平
	文部省圖書監修官 東京帝國大學教授 國民鍊成所指導官 京都帝國大學助教授 大使館參事官 教科用圖書調查會委員 國學院大學教授 教科用圖書調查會委員 第一高等學校教授	石森延男 市河三喜 市谷信義 泉井久之助 伊東隆治 男爵 稲田昌植 今泉忠義 入江俊郎 岩淵悦太郎
	カナモジ會理事 朝鮮總督府學務局長 同盟通信社社會部長 國語協會理事	上野陽一 大出正篤 大西雅雄 大野謙一 大屋久壽雄 岡崎常太郎
	國語審議會委員 東京高等師範學校教授 東京帝國大學教授 京都帝國大學教授 慶應義塾大學教授	緒方竹虎 魚返善雄 岡本千萬太郎 小倉進平 尾崎士郎 小幡重一 澤瀉久孝 折口信夫
	東京高等師範學校教授 教科用圖書調查會委員 東亞研究所常務理事 奈良女子高等師範學校教授 總領事 法政大學教授 在滿教務部編修官	垣内松三 龜山孝一 唐澤俊樹 木枝增一 喜多長雄 城戸幡太郎 金田一京助 久世誠一
	東京高等師範學校教授 京都帝國大學教授 每日新聞社文化部長 京城帝國大學助教授 東北帝國大學教授 東亞同文書院大學教授 九州帝國大學教授	熊澤龍 倉石武四郎 【黒崎貞次郎】 黒野政市 輿水實 小林英夫 小林好日 坂本一郎 佐久間賢了 佐藤春夫
	國民精神文化研究所員 國語審議會委員 朝鮮總督府編修官 東京帝國大學教授 大東亞書記官	志田延義 幣原【坦】 島田牛稚 島津久基 島津久大

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	讀賣新聞社文化部長 大東亞省調查官兼興亞鍊成所鍊成官	清 水 彌太郎 白木 【喬】 一
	東京文理科大學教授 大使館調查官 朝日新聞社學藝部長 九州帝國大學教授 東京帝國大學教授 大政翼贊會文化部長 國學院大學教授 國語審議會委員	神 保 格 曾 我 孝之 多 賀 博 高 木 市之助 高 田 眞 治 高 橋 健 三 武 田 祐 吉 竹 越 與三郎
	帝國教育會專務理事 國語審議會委員 國語審議會委員 國語審議會委員 東京外國語學校教授 大使館調查官 拓殖大學教授 學習院教授	武 部 欽 一 【山川】 竹 村 勘 【悉】 田 澤 義 【鋪】 田 中 齊 谷 川 徹 三 千 葉 勉 丁 字 尚 土 屋 申 一 東 條 操 土 岐 善 磨
	東京帝國大學教授 廣島文理大學教授 東北帝國大學教授 南洋廳內務部長 日本出版會業務局長 臺灣總督府文教局長 大使館調查官	時 枝 誠 記 土 井 忠 生 土 居 光 知 堂 本 貞 一 永 井 茂 彌 西 村 高 兄 野 尻 清 彦 野 村 市治郎 橋 本 進 吉 長谷川 萬次郎
	東京文理科大學講師 東京帝國大學助教授 東京帝國大學教授 文部省國語調查官 大使館調查官	波多野 完 治 服 部 四 郎 林 フミコ 久 松 潛 一 廣 田 榮太郎 深 田 久 彌 【麓】 保 孝
	大使館一等書記官 國語審議會委員 情報局部長 在滿教務部長 國語審議會委員 大使館參事官 國語審議會委員 國學院大學教授	別 所 孝太郎 星 野 行 則 堀 公 一 堀 池 英 一 牧 野 良 三 榊 谷 秀 夫 增 田 義 一 松 尾 捨治郎
	文部省圖書監修官 教科用圖書調查會委員 國語審議會委員 國語審議會委員 東京外國語學校教授 興蒙學院教授 拓殖大學教授 國語審議會委員	松 田 武 夫 松 宮 彌 平 三 木 武 吉 三 宅 正太郎 宮 越 健太郎 宮 島 英 男 宮 原 民 平 盛 岡 常 藏

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	文部省圖書監修官 森 下 眞 男
	在磐谷日本文化會館長 柳 澤 健
	海軍省教育局長海軍少將 柳 田 國 男
	東京文理科大學教授 矢 野 志加三
	新民學院教授 山 岸 德 平
	大東亞書記官 山 口 喜一郎
	文部省圖書監修官 山 中 德 二
	東京高等農林學校講師 山 根 藤 七
	日本放送協會報道部長 湯 澤 幸吉郎
	興亞鍊成所鍊成官 湯 山 清
	文部省國語調査官 横 山 重 遠
	【文部省監修官 吉 田 三 郎
	【同上 吉 田 澄 夫
	【同上 關 宦 一】
	【同上 藤 井 信 男】
日本語教育振興會第五十七回常任理事會 昭和十八年九月三日(金)午 前十一半ヨリ 於圖書局長應接室	一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 相良常任理事 關野常任理事 東光常任理事 藤井常任理事 長沼總主事 上村主事 伊藤主事
	一、配布書類 第五十六回常任理事會協議要録、第五十七回常任理事會報告及議題
	一、協議事項
	イ、役員改選ノ件 右ニ關シ相良常任理事ヨリ小委員會ノ中間報告アリ。東光常任理事ヨリ本會ガ獨立シテ自主的ニ活動シ得ル為ニハ財團法人組織トスル方可ナルベク、官廳ガ外部ヨリ監督指導ニ當ルヲ適當ト信ズトノ意見ノ開陳アリ。小委員會今後ノ方針ハ本會ヲ財團法人トスル方向ニ向ツテ本會役員組織ヲ考慮スルコトト決定。前回委嘱ノ小委員會委員ノ他ニ更ニ關野常任理事、西尾常任理事ニ小委員會委員ヲ委嘱スルコトナレリ。
	ロ、「日本語指南」發行ニ關スル件 日本語學習雜誌「日本語指南」ノ名稱ハ支那ニ於テハ「學習日本語」ヲ用フルモ差支ナキ旨相良常任理事ヨリ發言アリ。ソレニ關シ情報局ト連絡ノ要アリ且ツ「光」其他ノ對外宣傳雜誌使用ノ假名遣問題ニ關シ考慮ヲ要スル旨東光常任理事ヨリ注意アリ。
	ハ、興亞教育會ノ件 相良常任理事ヨリ今回新ニ設立セラレタル興亞教育會ノ性質ノ説明アリ支那派遣教師ノ鍊成ハ單ニ日本語教師トシテノミナラズ一般ニ亘リ鍊成スルモノナルヲ以テ今後ハ同會ヲシテ鍊成會ヲ主催セシムル方針ナルモ日本語教育ニ關スル部面ハ本會ヲシテ擔當セシムル旨説明アリタリ
	附記 本理事會中本會人事ニ關シ秘密會ヲ開キタリ。
	別紙「第五十七回常任理事會報告及議題」
	一、報告 イ、八月十九日附指令南文第四〇二號ヲ以テ大東亞省(南方事務局)ヨリ昭和十八年度本會補助金六万圓ヲ四回ニ分割シ交付スベキ旨指令アリタリ 右ニ對シ八月二十五日付日振第三十號ヲ以テ第一回分補助金請書ヲ提出セリ
	ロ、七【八】月二十七日午後五時半ヨリ芝公園浪華家ニ於テマライ・スマトラ訪日視察團ヲ招待懇談會ヲ開催セリ。
	ハ、七【八】月二十七日長沼總主事母堂葬儀ニ際シ山口主事ヲ派遣參列セシメタリ。
	ニ、サイゴン大使府支部領事兼情報部長佐藤藤醇造氏ノ歸朝ヲ機トシ八月三十一日午後五時半ヨリ芝公園浪華家ニ於テ連絡懇談會ヲ開催セリ。
	二、議題 イ、役員改選ノ件 ロ、其他
日本語教育振興會第五十八回常任理事會 (昭和十八年)九月十七日	一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 東光常任理事 關野常任理事 長沼總主事 上村主事 山口主事

會議名・年月日・時・場所

(本文)

<p>(金)午前十一時半ヨリ 於第二會議室</p>	<p>一、配布書類 第五十七回常任理事會協議要録、第五十八回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、本會改組ニ關スル件(秘密會ニテ協議)</p> <p>ロ、日本語讀本卷四、卷五ノ定價ニツキテハ本會ノ計算ニ於テ出版スル際ノ採算ヲ考慮ニ入レ七十錢ヲ可トスベク同指導書ハ各二圓ヲ適當トス 右ヲ以テ大東亞省ニ伺ヒヲ出スコト</p> <p>ハ、倉野憲司氏ヨリ育英書院ニ申出アリタル日本語選書ニツキテハ契約書ヲ再吟味シテ本會ヨリ倉野氏ニ照會狀ヲ送り本會ノ公明ナル態度ヲ確認セシムルコト 右ノ回答アリ次第理事會ニカクルコト 日本語選書全版ニツキテハ、編者トシテ手落ナキヤウ育英書院トノ話合ヲ嚴重ニナスコト</p> <p>別紙「第五十八回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ、九月六日ヨリ第三回日本語教育講座後期ヲ続開セリ</p> <p>ロ、九月十一日午後五時半ヨリ芝公園浪華家ニ於テジャワ訪日視察團ヲ招待懇談會ヲ開催セリ</p> <p>ハ、上海田尻公使ヨリ掛圖百部代金壹千圓ヲ送付アリタリ</p> <p>二、議題</p> <p>イ、本會改組ニ關スル件</p> <p>ロ、日本語讀本卷四、卷五、同學習指導書卷一、二、定價ニ關スル件</p> <p>ハ、倉野氏ヨリ申出ノ件</p> <p>【二、南方向 奥付】</p>
<p>日本語教育振興會改組要綱 (極秘) 昭和十八年九月十七日</p>	<p>第一 方 針</p> <p>日本語教育振興會ハ設立以來滿二ヶ年ヲ闋シ役員ハ茲ニ全部任期滿了ヲ見ルニ至リタルヲ機トシ會今後ノ十全ナル發展振興ニ具ヘンガタメ法人格ヲ附與シ併セテ人的物的兩方面ニ於ケル刷新充實ヲ期スルモノトス</p> <p>第二 要 領</p> <p>一、日本語教育振興會ハ之ヲ財團法人組織トナスコト</p> <p>二、財團法人日本語教育振興會ハ大東亞、文部兩省ノ共管トナスコト</p> <p>三、會ハ爾今獨立ノ人格ヲ有スル團體タルニ鑑ミ可及の速ニ會自體ノ事務所ヲ有スル如ク措置スルコト</p> <p>四、會ノ財政的基礎ヲ鞏固ナラシメンガタメ速ニ寄附募集等適當ノ方途ヲ講ズルコト</p> <p>五、會ノ役職員ノ構成並ニ事務機構ノ整備ニ當リテハ左ノ諸點ヲ考慮スルコト</p> <p>(一) 官吏若ハ民間關係團體役職員ガ當然其ノ資格ニ於テ會ノ役職員タルコトハ爾今可成之ヲ避ケ適格者ナリヤ否ヤノ見地ニ立チテ役職員ヲ銓衡スルモノトス</p> <p>(二) 顧問、評議員ハ略々現在ノ尽トスルモ理事ハ少數精銳主義ニ依リ現在ノ約半数【十名以内】トナシ、常任理事ハ之ヲ廢シ新シク専務理事一名【常務理事若干名及參與若干名】ヲ置クモノトス</p> <p>(三) 總主事以下ノ職員組織ハ事務簡素化、能率増進ノ見地ヨリ根本的ノ刷新充實ヲ圖リ且ツ部組織等ニ關シテモ再検討ヲ加フルモノトス</p> <p>六、以上ノ諸點ヲ勘案シ寄附行為ヲ作成スルコト</p> <p>七、改組ノ期日ハ別途考究スルモ可及の速ニ實施スルコト</p>
<p>日本語教育振興會第五十九回常任理事會 (昭和十八年)十月一日 (金)午前十一時半ヨリ 於第二會議室</p>	<p>一、出席者</p> <p>松尾常任理事 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 關野常任理事 大志萬理事 長沼總主事 上村主事 山口主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第五十八回常任理事會協議要録 第五十九回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、講演會ノ件</p> <p>原案ニツキ審議ノ結果開會閉會ノ辭トスル代リニ適當ナル題名ヲ附シ東京ニ於ケル講演會ニ於テハ東光常任理事及ビ大岡常任理事ニ依頼スルコトトシ 其他ノ講演者ニツ</p>

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	<p>キテハ西尾常任理事ヲ除キ原案ヲ基礎トシソレゾレ交渉スルコト 仙台ニ於ケル講演會ニ於テモ開會閉會ノ件ハ同様ニ取扱ヒ長沼總主事及ビ相良常任理事ニ依頼シ高見順氏ヲ講師ニ加フルコト</p> <p>ロ、ソノ他</p> <p>別紙「第五十九回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告 イ、九月二十三日午前十一時半ヨリ文部省南方派遣日本語教育要員養成所第四回修了生六十四名ヲ上野靜養軒ニ招待懇談セリ ロ、九月二十三日第三回日本語教育講座終了式ヲ挙行シ受講者四十九名中二十九名ニ對シ修了證ヲ授與セリ</p> <p>ハ、九月二十七日マカツサル軍政監部文教課員三浦勇助氏ノ歸朝ヲ機トシ午後五時半ヨリ永田町瓢亭ニ於テ連絡懇談會ヲ開催セリ ニ、九月三十日青島總領事館文化課長【栢】原依郎氏ヨリ日本語讀本卷一、二、三（昭和十八年一月十一日附注文分）三千五百部【（内百部無料）】賣上代金金六百八拾圓ノ送付アリタリ 【ホ、第一回補助金一萬五千圓也（南方事務局）】</p> <p>二、議題 イ、講演會ノ件 東京ニ於ケル講演會（案） 第一部【二時間】 ○開會の辭 松尾理事長 ○題未定 西尾常任理事 ○日本語の美しさの根柢 【○】佐藤春夫 ○話言葉の論理 長谷川如是閑 ○南方文化事情【○】東光常任理事 （又ハ）中島建【藏】 ○閉會の辭 【○】大岡常任理事</p> <p>仙台ニ於ケル講演會（案） 第一部【（二時間）】 ○開會の辭【挨拶】 長沼總主事 ○日本語普及の過去【現在】及將來 【○】釘本常任理事 ○題未定 土居光知 （又ハ）岡崎義恵 （又ハ）小林好日 ○閉會の辭 長沼總主事 【○ 相良】</p> <p>第二部【（一・五時間）】 法隆寺 基地（マ） 【ロ、其他】</p> <p>第二部【（一・五時間）】 法隆寺 基地（マ）</p>
<p>日本語教育振興會第六十回 常任理事會 昭和十八年十月八日(金)午 前十一時半ヨリ 於局長應接室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 相良常任理事 關野常任理事 渡邊 太郎氏（南方事務局日本語【擔】當者） 長沼總主事 上村主事 山口主事</p> <p>一、配布書類 第五十九回常任理事會協議要錄 第六十回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項 イ、本會事務所及倉庫ノ件 本會事務所並倉庫用トシテ日緬文【化】會館ノ移轉問題未【未】解決ノタメ行キナヤミノ状態ニアリトノ關野常任理事ヨリノ報告アリ。 依ツテ高瀬總務課長ヲ通ジテ中等教科書株式會社ノ空室借用ヲ申込ムコト。 倉庫トシテハ出版社ノ空倉庫等ヲ【搜】シ見ルコト。</p> <p>ロ、用紙ノ件 釘本常任理事ヨリ本會用紙【獲】得ニツキ曩ニ商工省ニ申請セル所要量ニツキテハ未確定ナルモ陸軍關係ノ分ニツキテハ陸軍省關係ニ於テ斡旋スルコトトナリタル旨説明アリ尚右代金ハ現物引渡ト同時ニ支拂フベキ旨内示アリタルヲ以テ現物到着ニ先【立】チ代金調達ヲ考慮スル要アルヲ以テ審議ノ決（マ）果年度内ニ於テ決濟シ事業運行ニ支【障】ナキ限リ助成金ヲ一時流用スルモ差支ナシトノ意見ノ一致ヲ見タリ</p> <p>ハ、研【究】員採用ノ件 目下履歷書提出中ノ就職希望者五名ニツキテハ國語課ノ費用ニ於テ採用スベキ者モアリ今後ノ必要ニ具フルタメ採用ト決定</p>

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	<p>別紙「第六十回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ、九月三十日大東亞省(南方事務局)ヨリ本年度補助金第一回分金壹万五千圓ヲ受領セリ</p> <p>ロ、十月二日附指令支文第八六九號ヲ以テ大東亞省(支那事務局)ヨリ昭和十八年度本會事業補助金第一回分金四万圓ヲ交付スベキ旨指令アリタリ 右ニ對シ日振發第三五號ヲ以テ第一回分補助金請書ヲ提出セリ</p> <p>ハ、東京及仙台ニ於ケル講演會ニ文部省、大東亞省後援名議(マ)使用方ソレゾレ願出テ、新聞社ハ讀賣新聞社ニ後援ヲ依頼セリ。 讀賣報知社ニ後援ヲ依頼セリ。 講演者ハ佐藤、長谷川兩氏トモ差支アリシタメ豊島與志雄氏ニ依頼セリ</p> <p>二、議題</p> <p>イ、本會事務所及倉庫ノ件 【(中教ニ交渉ノコト 高瀬課長ヲヘテ)】</p> <p>ロ、用紙ノ件 【(用紙代支出方法)】</p> <p>ハ、其他 【(研究員採用ノ件)】</p>
<p>日本語教育振興會第六十一回常任理事會 (昭和十八年)十月十五日(金)午前十一時半ヨリ於文部省第二會議室</p>	<p>一、出席者</p> <p>松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 相良常任理事 關野常任理事 渡邊龜太郎氏(南方事務局日本語【擔】當者) 長沼總主事 上村主事 福田主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第六十回常任理事會協議要録 第六十一回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、仙台ニ於ケル講演者ノ件 仙台ニ於ケル講演者ハ原案中相良常任理事ハ同理事ニ於テ差支アルタメ關野常任理事ニ變更スルコト</p> <p>ロ、語學教育【研究】所申出ノ件 昭和十八年十月十三日附ヲ以テ語學教育研究所長ヨリ同所ニ於テ企畫中ノ日英現代語辭典(現代日本語ノ語彙及語法ヲ異民族ニ對シ英語ヲ以テ説明セルモノ)ノ編纂ニ關シ日本語關係書ニツキテ本會ノ方針並ニ計畫ト【抵】觸ナキヤウ致シタキニツキ豫メ諒解ヲ求メタシトノ申出ノ件ハ本會ニ於テハ差支ナキモ語彙選定其他ノ編纂方針ニツキ本會編纂ノモノト背【馳】セザルヤウセヨ【ラ】レタキヲ以テ今後緊密ナル連絡方ヲ【懇】請スルコトトシテ可決</p> <p>ハ、「日本語」十二月號企畫ノ件 長沼總主事ヨリ今後「日本語」ノ企畫ハ毎號理事會ニ議題トシテ提出スルコトトナス旨ノ説明アリ。尚雜誌ハソノ性質上執筆依頼者ノ變更其他即決ヲ要スルコト尠カラザル事實ニ鑑ミ多少ノ變更アルモ【ヤ】モ圖ラレザル旨モ諒解ヲ得タリ。後十二月號ノ企畫ニツキテ説明アリ。該企畫承認セラル</p> <p>別紙「第六十一回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ、十月十四日倉野憲司ヨリ來信アリ「日本語選書」ニツキテハ本會ノ借置ニ異議ナキ旨通報アリ</p> <p>ロ、仙台ニ於ケル講演會準備ノタメ十月十四日山口主事ニ仙台出張ヲ命ジタリ。同主事ハ十月十四日歸京、土居氏ハ出講承諾、又又市公會堂ハ位置、設備其ノ他ヨリ不適當ナル為、【齋】藤報恩會講堂ニ變更セル旨報告アリ</p> <p>一、議題</p> <p>イ、仙台ニ於ケル講演者ノ件</p> <p>ロ、語學教育研究所申出ノ件</p> <p>ハ、「日本語」十二月號企畫ノ件</p>
<p>日本語教育振興會第六十二回常任理事會 (昭和十八年)十月二十二日(金)午前十一時半ヨリ於文部省第二會議室</p>	<p>一、出席者</p> <p>松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 相良常任理事 關野常任理事 長沼總主事 中島主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第六十一回常任理事會協議要録 第六十二回常任理事會報告及議題</p>

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	<p>一、協議事項</p> <p>イ、事務所移轉ノ件 神田區岩本町中等【學校】教科書株式會社中ノ二室(約三十五坪強)ヲ借用方交渉ノ顛末ヲ長沼總主事ヨリ説明アリ、右借用ノ方針ニハ全會ノ【意】見一致ヲ【セ】リ 尚總主事ニ於テ借家【室】料其ノ他具体的ノ交渉ヲ進ムルコトナレリ</p> <p>ロ、研究委囑ノ件 華北日本語教育研究所ニ委囑セル「意義上ヨリ見タル日支同一漢字ノ研究」ノ研究狀況報告アリ。尚同上昭和十八年度研究費金壹千七百圓也ノ交付及ビ神保格氏ニ委囑セル「日華辭典編纂資料蒐【集】」ノ昭和十八年度研究費金壹千圓也ノ交付方ハ承認セラレタリ</p> <p>ハ、標準漢字便覽寄贈ノ件 文部省編纂本會發行ノ標準漢字便覽ハ十月三十日發行セラル、ヲ以テ發行ノ上ハ文部省ハ五百部寄贈スルノ件ハ承認セラレタリ</p> <p>別紙「第六十二回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告 イ、十月十六日午後一時半ヨリ開催セル共立講堂ニ於ケル講演會ハ豫定ノ通り之ヲ行ヒ、來聽者約八百名ニ及ベリ。 ロ、日本語讀本學習指導書卷一印刷製本出來ニツキ十月二十一日出版届【出】ヲ完了セリ。 ハ、仙台市ニ於ケル講演會ノ講師中關野常任理事ハ(演題「南方の文化事情」)ハ(マ)同氏ニ於テ差支アルタメ之ヲ省略スルコトナレリ</p> <p>二、議題 イ、事務所移轉ノ件【二室(三五坪強)三〇〇圓】 ロ、研究委囑ノ件 イ、神保格氏(日華辭典編纂資料蒐集) 一、〇〇〇圓 ロ、華北日本語教育研究所(意義上ヨリ見タル日支同一漢字ノ研究) 一、七〇〇圓 【ハ、其ノ他 標示漢字便覽(文部省)五〇錢 十月三十日完了】</p>
<p>日本語教育振興會第六十三回常任理事會 (昭和十八年)十月二十九日(金)午前十一時半ヨリ於文部省第二會議室</p>	<p>一、出席者 松尾理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 藤井常任理事 相良常任理事 關野常任理事 渡邊龜太郎氏 長沼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 第六十二回常任理事會協議要録 第六十三回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、事務所移轉ノ件 神田區岩本町中等學校教科書株式會社中ノ二室(約參十五坪)借用方ノ件ハ總主事ニ於テ交渉ノ結果該會社ニ於テ二室ヲ提供シソノ一部ヲ倉庫替リトナスモ可ナリ。借室料ハ月額金參百圓ナリ。但シ該會社ノ都合ニヨリ長期間ノ使用ハ困難ナル事情アルコトヲ諒承アリタシトノ申出アリタル旨長沼總主事ヨリ報告アリ。右ノ條件ニテ借用スルコトニ全會ノ意見ノ一致ヲ見タリ。 尚文部省【内】ノ事務所ハ從前通り存置シ、他ニ東方文法研究所【學院】ノ一室ヲモ借用ス(但シ借用料不用【要】)スルコトニ意見ノ一致ヲ見タリ</p> <p>ロ、本會事業現況報告 長沼總主事ヨリ本會ノ【事業】現狀ニ就テ説明アリタリ</p> <p>別紙「第六十三回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告 イ、十月二十四日午後一時ヨリ開催セル仙台市【齋】藤報恩會【講堂】ニ於ケル講演會ハ豫定ノ通り之ヲ行ヒ、來聽者約百五十名ニ及ベリ ロ、日本語讀本卷四印刷製本出來ニツキ十一月二十六日出版届【出】ヲ完了セリ ハ、日本文法教本【及】標準漢字便覽印刷製本出來ニツキ十月二十七日出版届出ヲ完了セリ</p> <p>二、議題 イ、事務所移轉ノ件</p>

會議名・年月日・時・場所

(本文)

日本語教育振興會第六十四回常任理事會
昭和十八年十一月十二日
(金) 午前十一時半ヨリ
於外務省儀典課長官舎

一、出席者
大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 相良常任理事 關野常任理事 大塚書記 長沼總主事 上村主事 山口主事
一、配布書類
第六十三回常任理事會協議要録 第六十四回常任理事會報告及議題 成人用速成日本語讀本卷上定價算定基礎 地域別補習教材企畫案
一、協議事項
イ、成人用日本語讀本卷上定價ノ件 一冊ニ就イテノ實費ハ五千部印刷ノ場合一圓六十四錢、【五萬部印刷ノ場合八十五錢二厘。定價一圓二十錢トスレバ】五千部印刷ノ場合三千七百圓ノ缺損トナリ、五萬部増刷ノ際二千五百圓ノ純益ヲ得ル見込故、將來重版ノ場合ヲモ考慮シ當初ノ缺損ヲ認メテ一冊一圓二十錢ト決定スルコトニ意見ノ一致ヲ見タリ
ロ、藤井常任理事ニ對スル謝儀ノ件 先例ヲ參考シ任期・年末謝禮等ヲ考慮ニ入レテ總主事ニ於テ適宜決定ノ上記念品目錄ヲ進呈スルコトニ意見一致セリ
ハ、地域別補習教材ノ件 陸軍省ヨリ文部省ニ對シ依頼内達アリタル月刊補習教材ニ就キ長沼總主事ヨリ實施案(配布書類)ノ説明アリ、定價十錢トシ本會ニ於テ文部省國語課ヨサ【ノ】編纂費ヲ【ニ】協力シ、費用ノ一部ヲ【受入レテ運用スルコトニ意見一致シ、其他原案ノ通り可決シタリ
ニ、役員改選、組織改革ノ件 標題ノ件ニ關シ相良常任理事ヨリソノ後ノ經過如何トノ發問アリ新理事長決定ノ上理事長ニ於テ役員改選、改組ノコトヲ決定スルコトトシ、事務簡素化ノコトハ總主事ニ於テ立案ノ上次回常任理事會ニハカルコトトナレリ
ホ、用紙確保ノ件 釘本常任理事ヨリ發言アリテ現在ニ於ケル本年度用々紙配給狀態ノ説明アリ。用紙入手ニツキテハ實際ニ即スルコト緊要ナルト陸海軍用々紙ハ別扱トナスベキニヨリ入手々續ヲ一元化スルニハ文部省ヲ通ズルヲ【便トスベキヲ】以テ一旦大東亞省ニ移管セル用紙取扱ノ件ハ文部省ニ還元スルヲ可トスルニ意見ノ一致ヲ見タリ。尚昭和十九年度用紙ニツキテハ近ク各關係官廳ト連絡ノ要アルニヨリ文部省大東亞省ノ關係官事務【擔】當者ト特ニ緊密ナル連絡ヲトルコトノ要アルコトハ全員ノ意【一】致セル意見ナリ
別紙「第六十四回常任理事會報告及議題」
一、報告
イ、在外邦人子弟教育協會主催ニカ、ル第六回南方派遣日本語教育要員養成所修了生六十六名ニ對スル壯行會十一月十八日午前十一時ヨリ軍人會館ニ於テ開催セラレ本會側ヨリ長沼總主事出席セリ
ロ、標準漢字便覽出來ニツキ十一月八日文部省ニ五百部ヲ寄贈セリ
一、議題
イ、成人用日本語讀本卷上定價ノ件 ロ、藤井常任理事ニ對スル謝儀ノ件
別紙「成人用速成日本語讀本卷上定價算定基礎」
一 五千部印刷ノ場合
印刷代 紙代 製本代 8 2 0 6 圓【- 3 7 0 6】 一冊當リ原價 1 6 4 錢【1 2 0 錢】
一 五萬部印刷ノ場合
印刷代 紙代 製本代 4 2, 6 0 0 圓 一冊當リ原價 8 5, 2 錢【+ 2 5 0 0 圓】
日配渡價格 定價ノ七五掛 原價ヲ回収スルニ必要ナル定價 1 1 4 錢【1 2 0 錢】
別紙「地域別補習教材企畫(案)」
一 規格 【A】 5 版 十二ポイント活字使用・寫眞入 表紙共二十四頁

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	<p>二 種類 四種 (フィリッピン・マライ・ビルマ・ジャワ)</p> <p>三 発行回数 毎月 一回 一種</p> <p>四 編輯委員 松尾少佐・井澤情報官・關野大使館調査官・釘本圖書監修官</p> <p>執筆 者 今日出海 (フィリッピン) 神保光太郎 (マライ)</p> <p>豊田三郎 (ビルマ) 高見順 (ジャワ)</p> <p>編輯責任者 福田恆存・森山重雄</p> <hr/> <p>五 編輯費用 國語課・日本語教育振興會負擔</p> <p>六 編輯者 文部省國語課</p> <p>發行者 日本語教育振興會</p> <hr/> <p>七 【趣】旨</p> <p>南方共榮圈諸地域ニ於ケル日本語學習熱ノ【熾】ナルニ鑑ミ、日本語ヲ通ジテ現代日本ノ動態ヲ、引イテハ大東亞戰爭ノ眞意ヲ現地住民ニ理解セシメルコトノ急務ハ更メテ論ズルマデモナイ。</p> <p>シカシナガラ教科書ハソノ性質上教材ニ【或】ル種ノ制限ト固定化トヲ免レヌ。茲ニ於テ、一ニハ各地ノ實情ニ即應シ一ニハ時局【ソ】ノ推移ニ歩調ヲ合せ、新鮮適切ナル教材ヲ以テ絶エズ學習者ノ關心ニ諒ヘツツ日本ヲ理解シ日本語ヲ習得セントスル彼等ノ意【欲】ニ應ヘネバナラナイ。斯クシテ【吾】々ハ日本語普及ヲ廣ク大東亞共榮圈建設ノ大業ト合致セシメントノ抱負ノ下ニ、新タニ地域別補習教材ヲ編輯シ、遂次コレガ刊行ヲ計ラントスルモノデアル</p> <p>八 内容</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 國內戰時態勢ヲ認識セシメ、銃後ノ志氣ヲ傳フルニ足ル報道資料 (例 大東亞會議・學徒出【陣】) 2 南方共榮圈各地ノ實情ニ【即】應セル記事 (例 大東亞會議各地代表挨拶) 3 日本の性格ヲ【窺】ハシムルニ足ル話題隨筆 (例 日本ノ着物 四期 (マ)・遊戯) <p>附 發音符號・譯注ヲ附シテ學習ノ便ヲ計ルコト</p>
<p>日本語教育振興會第六十五回常任理事會 昭和十八年十一月十九日 (金) 午前十一時半ヨリ於外務省儀典課長官舎</p>	<p>一、出席者</p> <p>大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 田中 (彰) 理事 東光常任理事 相良常任理事 關野常任理事 長沼總主事 上村主事 山口主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第六十四回常任理事會協議要録、第六十五回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、會計理事主事トノ懇談ノ結完【果】田中理事ヨリ本理事會ニ於テ意見開【陳】スルコトトナレリ。</p> <p>田中理事ノ意見左ノ如シ</p> <p>本會創立當時ノ事情ト松尾理事長ノ配慮トニヨリ會計事務ヲ文部省會計課ニ委嘱ナシ來リタルモ、【本會ノ基礎漸ク定マリ本會自體ニ於テ會計事務擔當可能ノ時期ニ達シ居リ□】現在會計課トシテハ商人トノ取引、書類ノ決裁、傳票ノ作製ヲナスノミトナリ居ル状態ナレバ、コノ際本會ノ専任職員ヲシテ會計ノコトニ當ラシメ、一切會ニ於テ處理スルヲ可トス。事務【簡】素化ノ上ヨリ見ルモ妥當ナリト認ム。機構改革後ト雖モ【物】品購買ノ斡旋ソノ他用度關係ノ事項【等】ニツキテハ今後トモ斡旋盡力スルコト勿論ナリ。</p> <p>一同右ノ意見ヲ諒トシナホ正式ニ決定スルコト【書類手續等】ハ後日ニ延期シ、【整ウルコトトシ】、實質的ニ右ノ方面【向】ニ進ムコトニ決定セリ</p> <p>ロ、本會編纂圖書ノ發行ニ關スル件 次回ニ持【越】</p> <p>ハ、秘密會</p> <p>別紙「第六十五回常任理事會報告及議題」</p> <p>二【一】、報告</p> <p>イ、十一月五日大東亞省 (支那事務局) ヨリ本年度補助金第一回分金四万圓ヲ受領セリ</p> <p>ロ、藤井常任理事ハ今般【廣】島縣副參事官ニ轉任セラレタルヲ以テ十一月十三日午前十一時半ヨリレインボウグリルニ於テ送別會ヲ催シ【記念品目録ヲ贈呈シ】タリ</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>二、議題</p> <p>イ、會計事務ニ關スル件【(田中理事出席)】</p> <p>【一 全部會計事務独立案</p> <p style="text-align: right;">但 便宜ヲ計ル程度ノ關係ハ維持ス。】</p> <p>ロ、本會編纂圖書ノ發行ニ關スル件</p> <p>1、日本語教授法の原理 (近日出來)</p> <p>2、現代語法の諸問題 (組版完了)</p> <p>3、敬語法概説 (組版完了)</p> <p>4、東亞【に】於ける歐米語の普及</p> <p>5、東亞の諸言語</p> <p>6、日支標準音の【比】較</p> <p>7、語彙調査報告</p> <p>8、日本語普及叢書 (七冊)</p>
<p>日本語教育振興會第六十六回常任理事會</p> <p>昭和十八年十一月二十六日 (金) 午前十一時半ヨリ</p> <p>於外務省儀典課長官舎</p>	<p>一、出席者</p> <p>大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 東光常任理事 相良常任理事</p> <p>關野常任理事 長沼總主事 中島主事 上村主事 大塚書記</p> <p>一、配布書類</p> <p>第六十五回常任理事會協議要録、第六十六回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、本會編纂圖書ノ發行ニ關スル件</p> <p>長沼總主事ヨリ本會編纂圖書ノ發行ノ現況ニツキ説明アリタリ</p> <p>本會編纂ノ圖書中ノ一部分ノ發行ヲ書肆ニ委託スルコトノ可否ニツキテ各常任理事ヨリ意見開【陳】アリ、ソノ結果教科書ハ必ズ本會ニ於テ發行スルコト、教科書以外ノ圖書ハ書肆ニ委託スルモ差支ナシ、ソノ際委託スベキ圖書ノ送金【種類】及書肆【ノ選擇】等ハ總主事ニ一任スルコトニ意見ノ一致ヲ見タリ</p> <p>ロ、總主事タル【理事】長沼直兄氏ヲ常任理事ニ【ト】ナスヤウ全員ノ希望アリ【全員意見ノ一致ヲ見、之ニ要スル手續ヲトルコトトセリ】</p> <p>ハ、大東亞省支那【事務】局及南方【事務】局長ト本會トノ連絡ヲ緊密ニシ援助ヲ懇請スルコト【タメ】毎月一回常任理事會ニ出席方ヲ懇請スルコト。【適宜懇談ノ機會ヲ設ケルコト】長沼理事常任理事ニ就任ノ際懇請ニ行クコト</p> <p>ニ、【新】理事長就任ノ際ハ【ニ】右【兩】局長トノ懇談會ヲ開催スルコト</p> <p>ホ、秘密會</p> <p>別紙「第六十六回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ 本會事務所ノ一部ハ十一月二十二日神田區岩本町三番地中等學校教科書株式會社内ニ移轉セリ</p> <p>ソノ結果本會本部【四名】及ビ雜誌部ハ文部省内ニ残留シ他ノ諸部ハ神田事務所【一八名】ニ於テ執務スルコトナレリ</p> <p>ロ 日本語教育叢書「日本語教授法ノ原理」(三千部)ハ十一月二十五日發行セリ</p> <p>ハ 日本語讀本卷五(四萬部)ハ印刷ヲ完了シ十一月三十日附發行ノ運ビトナリタリ</p> <p>二、議題</p> <p>イ 本會編纂圖書ノ發行ニ關スル件</p> <p>ロ 其他</p>
<p>日本語教育振興會第六十七回常任理事會</p> <p>昭和十八年十二月三日 (金)</p> <p>午前十一時半ヨリ</p> <p>於外務省儀典課長官舎</p>	<p>一、出席者</p> <p>大岡常任理事 釘本常任理事 西尾常任理事 東光常任理事 相良常任理事</p> <p>關野常任理事 長沼總主事 中島主事 上村主事 大塚書記</p> <p>一、配布書類</p> <p>第六十六回常任理事會協議要録、第六十七回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、役員異動ノ件</p> <p>役員任期滿了ニツキ新ニ委嘱セラルベキ常任理事、理事、監事、顧問及評議員ニツキ原案作製ノタメ審議ス</p> <p>ソノ結果常任理事ハ</p>

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	<p>文部省圖書調査官 (教學局國語課長) 大岡保三氏 文部省圖書監修官 釘本久春氏 大東亞事務官 相良【惟】一氏 大使館調査官 關野【房】夫氏 大東亞書記官 (南方事務局政務課長) 東光武三氏 長沼直兄氏 西尾 實氏 大東亞書記官【(支那事務局司政課長)】 【根】道廣吉氏 (以上五十音順)</p> <p>以上ノ八【名】ニ決定ス 理事、監事、及評議員ニツキテハ審議未了ニツキ【次】回ニ【續】行スルコトナレリ</p>
	<p>ロ、秘密會</p> <p>附記 尚相良常任理事ヨリ左記ノ三件ニツキ報告アリタリ 一、本會用紙配給ニ關シ農商省ヨリ十一月分ヨリ毎月二万封度宛(合計十萬封度)ノ配給【豫】定ノ【旨】通報アリタルコト 二、本會用紙【入】手ニ關シテハ爾今文部省ニ【於】テ斡旋セラレタキ【旨】大東亞次官ヨリ文部次官宛ニ發信セルコト 各官廳外【廓】團體ノ整備統合ニ關シ大東亞省支那事務局ヨリ本會ハ現状ノ儘トシ何等變更ノ要ナキ【旨】通報セルコト</p>
	<p>別紙「第六十七回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告 イ、十一月二十七日日本語讀本卷五出版届【出】ヲ完了セリ ロ、十一月二十七日大東亞省支那事務局長ヨリ日本語讀本卷五配送方ニ關シ指令アリタルヲ以テ直ニ手配ヲ完了セリ ハ、十一月二十七日大東亞大臣ヨリ指令支文第九八三號ヲ以テ大東亞地圖作成費補助金七萬五千圓也ノ交【附】方ノ指令アリタリ二十九日右補助金交【附】方ノ請求書ヲ提出ス ニ、十一月三十日正午ヨリ南方派遣日本語教育要員【養】【成】所第六回修了生ニ對シ青山日本青年【會】館ニ於テ壯行會ヲ開催セリ</p> <p>二、議題 イ、役員異動ノ件 ロ、秘密會</p>
<p>日本語教育振興會第六十八回常任理事會 昭和十八年十二月十日(金) 午前十一時半ヨリ 於外務省儀典課長官舎</p>	<p>一、出席者 近藤理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 相良常任理事 關野常任理事 根道支那事務局司政課長 長沼常任理事兼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 第六十七回常任理事會協議要録、第六十八回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項 イ、役員異動ノ件 前回ニ引續キ新ニ委囑セラルベキ監事、理事、顧問及評議員ニツキ原案作成ノタメ審議ス 其結果監事、理事及顧問ニツキテハ別表ノ如ク決定ス 評議員ニツキテハ審議未(ママ)了ニツキ次回ニ續行スルコトナレリ ロ、松尾前理事長ニ對スル謝儀ノ件 松尾前理事長ノ功勞ニ對スル謝儀ハ金壹千也ヲ標準トシテ、會ノ經理ヲ參【酌】ノ上總主事ニ於テ決定スルコトナレリ 但シ右金壹千【圓】也ハノ中ニハ年末賞與ヲ含ムモノナリ ハ、本會ト中等學校教科書株式會社トノ間ニ於ケル室貸借契約書ニ關シテハ原案通り決定セリ</p> <p>別紙「第六十八回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告 イ、十一月二十七日付ヲ以テ長沼直兄氏ニ常任理事ヲ委囑セラル</p>

會議名・年月日・時・場所

(本文)

	<p>ロ、十二月三日付ヲ以テ近藤壽治氏ニ理事長ヲ委嘱セラル</p> <p>ハ、十二月六日付大東亞大臣ヨリ本會ニ大東亞地圖作製費補助金トシテ金七萬五千【圓】也ヲ交【附】セラル</p> <p>ニ、十二月五日大東亞省支那事務局長ヨリ支司第七七八號以テ本會用紙配給方ニ關シ農商省ヨリ日本洋紙統制株式會社社長宛通牒濟ノ【旨】申【越】アリタル【旨】ノ通牒アリタリ</p>																																																								
	<p>一、議題</p> <p>イ、役員異動ノ件</p> <p>ロ、本會ト中等學校教科書株式會社トノ間ニ【於】ケル室【貸】借契約書ノ件</p> <p>ハ、前理事長松尾長造氏ニ對スル謝儀ノ件</p>																																																								
日本語教育振興會要覽 (昭和十八年十二月八日現在とみられる)	<p>別紙「日本語教育振興會要覽」</p> <p>一、所在</p> <p>本部事務所 麴町區霞ヶ關參丁目四番地 文部省新館九號室 電話 銀座(57)5771-8 (内線□67)</p> <p>神田事務所 神田區岩本町參番地 中等學校教科書株式會社内 電話 浪花(67)5901-9 (内線□9)</p> <p>二、設立</p> <p>昭和十六年八月二十五日</p> <p>三、目的</p> <p>東亞ニ於ケル日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ヲ圖ルコト</p> <p>四、連絡關係官廳</p> <p>大東亞省支那事務局司政課 大東亞省南方事務局行政課 文部省事務局國語課 陸軍省事務局軍務課 海軍省南方政務局</p> <p>五、役員 (五十音順)</p> <table border="0"> <tr> <td>會長</td> <td>文部大臣</td> <td>子爵</td> <td>岡部長景</td> </tr> <tr> <td>副會長</td> <td>文部次官</td> <td></td> <td>菊地豐三郎</td> </tr> <tr> <td></td> <td>大東亞次官</td> <td></td> <td>山本熊一</td> </tr> <tr> <td>理事長</td> <td>文部省教學局長</td> <td></td> <td>近藤壽治</td> </tr> <tr> <td>常任理事</td> <td>教學局□事務長</td> <td></td> <td>大岡保三</td> </tr> <tr> <td></td> <td>文部省圖書監修官</td> <td></td> <td>釘本久春</td> </tr> <tr> <td></td> <td>大東亞事務官</td> <td></td> <td>相良惟一</td> </tr> <tr> <td></td> <td>大使館調査官</td> <td></td> <td>關野房夫</td> </tr> <tr> <td></td> <td>南方事務局政務課長</td> <td></td> <td>東光武三</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td>長沼直兄</td> </tr> <tr> <td></td> <td></td> <td></td> <td>西尾 實</td> </tr> <tr> <td></td> <td>支那事務局司政課長</td> <td></td> <td>根道廣吉</td> </tr> <tr> <td></td> <td>幹事 文部省會計課長</td> <td></td> <td>柴沼 恒</td> </tr> <tr> <td></td> <td>大東亞省會計課長</td> <td></td> <td>華山親義</td> </tr> </table> <p>理事 (別表) 顧問 (別表) 評議員 (別表)</p> <p>六、事業</p> <p>一、日本語ノ普及ニ關スル諸般ノ調査及研究</p> <p>二、日本語教科用圖書ノ刊行及頒布</p> <p>三、日本語教育資料ノ作成及頒布</p> <p>四、日本語教師ノ養成及指導</p> <p>五、日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ニ關スル各種會合ノ開催</p> <p>六、日本語ノ普及並日本語教育ニ關スル雜誌ノ發行</p> <p>七、日本語ノ普及又ハ日本語教育ノ振興ニ關係アル内外諸團體トノ連絡及之等團體ノ行フ諸事業ノ調整</p>	會長	文部大臣	子爵	岡部長景	副會長	文部次官		菊地豐三郎		大東亞次官		山本熊一	理事長	文部省教學局長		近藤壽治	常任理事	教學局□事務長		大岡保三		文部省圖書監修官		釘本久春		大東亞事務官		相良惟一		大使館調査官		關野房夫		南方事務局政務課長		東光武三				長沼直兄				西尾 實		支那事務局司政課長		根道廣吉		幹事 文部省會計課長		柴沼 恒		大東亞省會計課長		華山親義
會長	文部大臣	子爵	岡部長景																																																						
副會長	文部次官		菊地豐三郎																																																						
	大東亞次官		山本熊一																																																						
理事長	文部省教學局長		近藤壽治																																																						
常任理事	教學局□事務長		大岡保三																																																						
	文部省圖書監修官		釘本久春																																																						
	大東亞事務官		相良惟一																																																						
	大使館調査官		關野房夫																																																						
	南方事務局政務課長		東光武三																																																						
			長沼直兄																																																						
			西尾 實																																																						
	支那事務局司政課長		根道廣吉																																																						
	幹事 文部省會計課長		柴沼 恒																																																						
	大東亞省會計課長		華山親義																																																						

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	八、其ノ他日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ニ關シ必要ナル事項 以上ノ諸事業中既ニ完了セルモノ及ビ目下着手中ノモノ左ノ如シ
	一、調査及研究
	日支標準音の實驗音聲學的研究 日蒙標準音 “ ” 誤り易き語音語法の地域別調査 初學年の教授法 中級の教授法 聽方及話方の教授法 讀方及綴方の教授法 留學生の日本語指導法
	「てにをは」の研究 意義上より見た日支漢字の研究 慣用音讀癖の研究 語彙調査 兒童語彙(十五万語) 成人語彙(百万語) 日本語學習辭典の編纂 日華辭典の編纂 日本語普及問題調査委員會第一部會
	二、日本語教科用圖書
	(1) 文部省著作支那向日本語教科用圖書 ハナシコトバ上(昭和十六年二月) 同 中(昭和十六年三月) 同 下(昭和十六年三月) ハナシコトバ學習指導書 上(昭和十六年三月) 同 中(昭和十六年三月) 同 下(昭和十七年二月) 日本語讀本 卷一(昭和十六年十月) 同 卷二(昭和十七年四月) 同 卷三(昭和十七年八月) 同 卷四(昭和十八年十一月) 同 卷五(昭和十八年十一月) 日本語讀本學習者指導書卷一(昭和十八年十月) 同 卷二(印刷中) 同 卷參(印刷中) 日本文化讀本「大學の學生生活」(昭和十七年四月) 同「さくら」 (昭和十七年四月) 同「日本の年中行事」(印刷中) 同「日本の女性」 (印刷中) 同「日本の紡織」 (印刷中)
	(2) 文部省著作南方向日本語教科用圖書
	初等學校用日本語教本 卷一(昭和十八年十二月) 同 卷二(印刷中) 同 卷三(印刷中) 同學習指導書 卷一(印刷中) 同 卷二(印刷中) 同 卷三(印刷中) 中等學校用日本語教本 卷一(印刷中) 同 卷二(“) 同 卷三(“) 同學習指導書 卷一(“) 同 同 卷二(“)

會議名・年月日・時・場所 (本文)

同 同	卷三 (")
成人用速成日本語教本	卷上 (昭和十八年十二月)
同	卷下 (印刷中)
同學習指導書	卷上 (")
同 同	卷下 (")
日本文法教本 (昭和十八年九月)	
日本語會話書 (印刷中)	
(泰。安南。馬來。タガログ。英語版)	
三、日本語教育資料	
(1) 文部省著作ノモノ	
標準漢字便覽 (昭和十八年十月)	
(2) 大東亞省ノ指令ニヨルモノ	
支那學童用繪本	
オホゾラ	(昭和十七年三月)
ガクカウ	(")
ヨイコドモタチ	(")
ハナ ヤサイ クダモノ	(")
コドモノセカイ	(昭和十七年四月)
ニツボンノタテモノ	(")
ノリモノ	(")
ドウブツ	(")
ハナシコトバ教授用掛圖	(昭和十七年五月)
タイ語版日本語自習書	(編纂中)
安南語版日本語自習書	(")
大東亞地圖	(印刷中)
(3) 本會編纂ノモノ	
日本語教授法の原理	(昭和十八年十月)
現代語法の諸問題	(印刷中)
敬語法概説	(")
日本語普及叢書	
1 大東亞と日本語	
2 日本語の指導者	
3 日本語要説	
4 日本の文字	
5 日本語の發音	
6 日本語の教へ方	
7 現地事情	
東亞の諸言語	
東亞に於ける西歐語の普及	
四、日本語教師ノ養成及指導	
第一回日本語教育講座	(昭和十七年一月)
第二回日本語教育講座	(昭和十七年七月)
第三回日本語教育講座	(昭和十八年六月)
支那派遣教員鍊成	
第六回	(昭和十七年五月 於浴恩館)
第七回	(昭和十七年九月 於東亞報德會)
第八回	(昭和十七年十月 於東亞報德會)
第九回	(昭和十八年四月 於仙川道場)
五、日本語ノ普及並ニ日本語教育ノ振興ニ關スル各種會合	
日本語教授者懇談會	
日本語普及問題講演會	
第一回	(昭和十八年二月於京都)
第二回	(昭和十八年十月於東京)

會議名・年月日・時・場所

(本文)

	第三回 (昭和十八年十月於仙臺)
	六、雜誌ノ發行
	機關紙「日本語」
	七、諸團體トノ連絡協力
	南方派遣日本語教育要員養成所トノ協力 國際學友會ニ日本語教師ヲ派遣 タイ向放送ニ用フル資料作成 東京都協和會及中央協和會ニ對スル協力
日本語教育振興會職員名簿 (昭和十八年十二月八日現在)	別紙「日本語教育振興會職員名簿 (昭和十八年十二月八日現在)」
	總主事 長沼直兄
	主事 中島唯一
	同 伊藤彌太郎
	同 山口 正
	同 福田恒存
	同 上村茂次郎
	書記 (文部屬) 神谷誠之
	同 (大東亞屬) 大塚秀夫
	研究員 淺野鶴子
	同 森山重雄
	同 鶴川義之助
	同 西尾みち
	同 久保田幸
	同 志村慶子
	同 伊丹美和子
	同 安達ミヲ
	同 清水喜美子
	同 木村常子
	同 種村澄子
	同 田尾 歌
	同 池尾スミ
	同 猪【俣】幸子
	同 大【槻】久子
	同 白崎秀雄
	事務員 井上とみ
	同 栗原由枝
	同 黄地節子
	同 鈴木房代
	同 岡村通之
	同 小林 雪
	同 三浦弘江
	一、理事
	一、新理事トスルモノ
	陸軍省軍務局軍務課員陸軍少佐 松尾次郎
	一宮房次郎
	海軍省教育局海軍大佐 鹿江 隆
	文部省教學官 高木 覺
	國際文化振興會專任常務理事 黒田 清
	松尾長造
	大東亞事務官 腰原 仁
	大東亞事務官 宇山 厚
	文部省教學官 原 元助
	情報局情報官 根岸國義
	文部事務官 田中 彰

會議名・年月日・時・場所 (本文)

日華學會主事	近澤道元		
大東亞調查官	堂脇光雄		
國際學友會常務理事	渡邊知雄		
文部事務官	山崎 高		
二、前理事ニシテ顧問トスルモノ			
國際學友會事務理事	矢田部保吉		
三、前理事ニシテ評議員トスルモノ			
文部省圖書監修官	井上【昶】		
大東亞【省】囑託	大志万準治		
善隣協會理事長	大島 覺		
文部事務官	久保田藤【磨】		
文部省圖書監修官	【鹽】野直道		
青年文化協會常務理事	豐田久二		
日語文化協會主事	松宮一也		
國語協會理事	梁田欽次郎		
四、前理事ニシテ主事トスルモノ			
大東亞省囑託	田中末雄		
二、監事			
文部書記官	柴沼 直		
大東亞書記官	華山親義		
三、顧問			
顧問中變更スベキモノ	()	ハ舊ヲ示ス。	
(企畫院次長)	(阿部源基)		削除
(國民精神文化研究所長) 教學鍊成所長		伊藤【東】 延吉	
情報局次長	(奧村喜和男)	村田五郎	
日本放送協會會長	(小森七郎)	下村 宏	
特命全權大使	(重光 葵)	谷 正之	
日本出版會會長	(鷹司信輔)	久富達夫	
(軍政顧問)		徳川頼貞	
帝國教育會會長		永井柳太郎	新任
(軍政顧問)	(永田秀次郎)		削除
(國民鍊成所長)	(松岡忠一)		削除
(大東亞省參事官) 大使館參事官		松村【叅】	
軍政顧問		村田省三	新任
特命全權大使		澤田廉三	同
南洋協會會長		兒玉秀雄	同
ビルマ協會會長		井上三郎	同
東亞同文會會長		近衛文【磨】	同
同 副會長		阿部信行	同
四、評議員			
情報局情報官		井澤 實	新任
農商事務官		今村 等	同
(國民鍊成所指導官)	(市谷信義)		削除
(大使館參事官)		伊藤隆治	同
教科用圖書調查會委員	(稲田昌植)	今園國貞	
(カナモジ會理事)	(上野陽一)		削除
(國語協會理事)	(岡崎常太郎)		同
(國語審議會委員)	(緒方竹虎)		同
(同)	(岡部長景)		同
臺灣總督府編修官	(加藤春城)	石井權三	
教科用圖書調查會委員會	(龜山孝一)		
(東亞研究所常務理事)	(唐澤俊樹)		削除
(總領事)	(喜多長雄)		同

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	(文部省教學官並國民鍊成所指導官)	(木下一雄)	同
	(國語審查會委員)	(輿水 實) (下村 宏)	同 同
	(大東亞事務官)	(島津久大)	同
	(大東亞調查官兼興亞鍊成所鍊成官)	(白木【喬】一)	同
	日本放送協會事務局長	(關 正雄)	削除
	(國語審議會委員)	(竹藏與三郎)	削除
	(國語審議會委員)	(竹村勘吉)	同
	(同)	(田澤義輔)	同
	日本出版會專務理事	(田中四郎) 留岡清男	
	關東局在滿教務部長	(田中義男) 堀池英一	
	大使館 (一等書記官) 調査官	丁字 尚	
	南洋廳內政部長	(堂本貞一)	
	大使館 (參事官) 調査官	野村市次郎	
	(京城) 東京帝國大學教授	時枝誠記	
	(文部省教學官)	(長岡彌一郎)	削除
	日本放送協會國際部長	(中郷幸之助)	
	臺灣總督府文教局長	(西村高兄)	
	大使館 (參事官) 調査官	野村市次郎	
	(東京帝國大學教授)	橋本進吉	
	(國語審議會委員) 大東亞鍊成院長	幣原坦	
	(大使館一等事務官)	(別所孝太郎)	削除
	(國語審議會委員)	(星野行則)	同
	大使館 (一等通譯官) 調査官	【麓】保孝	
	情報局部長	(堀 公一) 井口貞夫	
	(國語審議會委員)	(牧野良三)	削除
	(同)	(増田義一)	削除
	(大東亞書記官)	【榎】谷秀夫	
	(國語審議會委員)	(三木武吉)	削除
	(同)	(三宅正太郎)	同
	教育總署 (マ) 總編審	加藤詢次郎	新任
	(國語審議會委員)	(森岡常藏)	削除
	(興亞鍊成所鍊成官)	(山根籐七)	同
	文部省國語調査官	吉田三郎	
		關【宦】	新任
		横山正幸	同
	上海大使館文化課長		同
	北京大使館文化課長		同
日本語教育振興會第六十九回常任理事會	一、出席者		
昭和十八年十二月十七日 (金) 午前十一時半ヨリ於外務省儀典課長官舎	近藤理事長 大岡常任理事 釘本常任理事 關野常任理事 西尾常任理事 大志万大東亞省囑託 長沼常任理事兼總主事 中島主事 上村主事		
	一、配布書類		
	第六十八回常任理事會協議要録 第六十九回常任理事會報告及議題		
	一、協議事項		
	イ 役員異動ノ件 前回ニ引續キ新ニ委囑セラルベキ評議員ニ附原案作製ノタメ審議ス其ノ結果別表ノ通り舊評議員 (一二六名) 中削除スベキモノ (三十五名)、舊評議員以外ノモノニシテ新ニ委囑スベキモノ (二十五名) ヲ決定シ、其ノ他ノ現【舊】評議員ハスベテ重任ヲ委囑スルモノト決定ス。但シ報導班員、從軍作家ニツキテハ更ニ審議スルモノトス。 (備考) 舊評議員中報導班員又ハ從軍作家ハ左ノ如シ 尾崎士郎 佐藤春夫 林フミコ 深田久彌 野尻清【彦】		
	ロ 研究部事業ノ件 研究部ノ事業ノ一部トシテ職員ヲシテ本會ノ事業ニ對シ一層認識ヲ深メ識見ヲ長ゼシ		

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	メンタメ主事ヲ主ナル對象トシテ支那語マライ語ノ講習會ヲ開ク。但シ該講習會ニハ能フ限り實際教育家等ノ參加ヲ【慫慂】スルモノトス尚該講習會ハ漸次他ノ南方諸民族ノ言語ノ講習ニ及バントスルモノナリ。右ニ關シ長沼總主事ヨリ説明アリ。全員異議ナク決定ス。
	別紙「第六十九回常任理事會報告及議題」
	一、報告 イ、曩ニ報告セル本年度本會用紙配給ニ關シ十二月十三日長沼總主事大日本印刷株式會社尾城氏同道用紙統制株式會社並ニ中井商店ニ連絡至急實物借【供】給方依頼セリ
	一、議題 イ、役員異動ノ件 ロ、研究會ノ件 ハ、【其ノ他】
日本語教育振興會役員名簿	別紙「日本語教育振興會役員名簿」
	一、會長 文部大臣 子爵 岡部長景
	一、副會長 文部次官 菊地豐三郎 大東亞次官 山本熊一
	一、理事長 文部省教學官(教學局長) 近藤壽治
	一、常任理事 文部省國語調査官(教學局國語課長) 大岡保三 文部省圖書監修官 釘本久春 大東亞事務官 相良一 大使館調査官 關野房夫 大東亞書記官(南方事務局政務課長) 東光武三 長沼直兄 西尾實 大東亞書記官(支那事務局司政課長) 【根】道廣吉
	一、監事 文部書記官 柴沼直 大東亞書記官 華山親義
	一、理事 一宮房次郎 大東亞事務官(總務局總務課□務) 宇山厚 海軍省教育局海軍大佐 鹿江隆 國際文化振興會常務理事 黒田清 大東亞事務官(滿洲事務局□務) 腰原仁 文部省教學官(總務局涉外課) 高木覺 文部事務官(會計課□務) 田中彰 日華學會主事 近澤道元 大東亞調査官陸軍大佐(支那事務局總務課長) 堂脇光雄 情報局情報官(對外事業課長) 根岸國義 文部省教學官(教學局教學課長) 原元助 陸軍省軍務局軍務課陸軍少佐 松尾次郎 松尾長造 文部事務官(□□資材課長) 山崎高 國際學友會常務理事 渡【辺】知雄
	一、顧問 亞同文會副會長 阿部【信】行 臺北帝國大學總長 安藤正次 教學鍊成所長 伊東延吉 ビルマ協會會長 井上三郎 大東亞省滿洲事務局長 今吉【敏】雄 特命全權公使 岩崎清宣

會議名・年月日・時・場所 (本文)

大東亞省支那事務局長		宇佐美珍彦
東京帝國大學【名譽】教授		宇野哲人
特命全權大使		梅津美治朗
毎日新聞社長		奧村信太郎
東亞研究所副總□		大倉公望
九州帝國大學名譽教授		春日政治
年文化協會理事長		河原春作
南洋協會會長		兒玉秀雄
東亞同文會會長		近藤文麿
特命全權大使		澤田【廉】三
海軍次官		澤本頼雄
特命全權公使		鹽澤澄宜
東京帝國大學【名譽】教授		鹽谷温
日本放送協會會長		下村【宏】
讀賣新聞社長		正力松太郎
京都帝國大學【名譽】教授		新村 出
大東亞省總務局長		竹内新平
特命全權公使		田【尻】愛義
特命全權大使		谷 正之
東亞同文會理事長		津田【靜枝】
特命全權大使		坪上貞二
衆議院議員		鶴【見裕補】
軍政顧問		徳川義親
陸軍次官		徳川頼貞
國際文化振興會理事長		富永恭治
帝國教育會會長		永井松三
教科用圖書調查會第三部長	子爵	永井柳太郎
教科用圖書調查會第二部長		野村益三
日本出版會長		林博太郎
國語教育學會會長		久富達夫
總務局長		藤村 作
同盟通信社社長		藤野【恵】
東京文理科大學名譽教授		古野伊之助
國語審議會副會長	男爵	保科孝一
大東亞參事官		穂【積】恵道
外務次官		松村 隼
大東亞省南方事務局長		松本俊一
國語協會副會長		水野伊太郎
國際學友會理事長		南 弘
情報局次長		宮川米次
特命全權大使		村田五郎
朝日新聞社社長		村田省三
國際學友會常務理事		村山長□
神宮皇學會大學長		矢田部保吉
帝國藝術院會員		山田孝雄
特命全權大使		山本勇造
京都帝國大學【名譽】教授		芳□兼吉
		吉田義則
評議員 (原案)		
舊		新
東亞學校教授		有賀憲三
文部書記官		有光次郎
國語審議會委員會		安藤正純

會議名・年月日・時・場所 (本文)

早稲田大學教授	五十嵐力 【石黒】修 【石黒魯】平 【石森延】男 市【川三】喜	
文部省圖書監修官 東京帝國大學教授	市谷信義 泉井久之助 伊東隆治 稲田昌植 【今泉】忠義 入【江】俊郎 上野陽一	【削除】 【削除】 【今園國貞】 【削除】
國民鍊成所指導官 京都帝國大學助教授 參事官 教科用圖書調查會委員男爵 國學院大學教授 教科用圖書調查會委員 カナモジ會理事	魚返善雄 大出正篤 大西雅雄 大野謙一 【大屋】久壽雄 岡【崎】常太郎 緒方竹虎 岡部長影【景】	【削除】 【削除】 【今園國貞】 【削除】 【削除】 【削除】
東京帝國大學教授	岡本千万太郎 小倉進平 尾崎四【士】郎 小幡重一 折口信夫 澤瀉久孝 【垣内松三】	
臺灣總督府編修官 教科用圖書調查會委員 東亞研究所常務理事 總領事 文部省教學官並 國民鍊成所指導官 奈良女子高等師範學校教授 東京帝國大學教授	加藤春【城】 龜山考一 唐澤俊樹 喜多長雄 木下一男 木枝増一 金田一京助	【石井權人】 (調查中) 【削除】 【削除】 【削除】 【削除】 【帝國大學教授ヲ トル】
東京高等師範學校教授 毎日新聞社文化部長	熊澤【龍】 黑澤貞次郎 黑野政市 輿水 實 小林英夫 小林好日	【削除】
京城帝國大學助教授 東北帝國大學教授	坂本一【郎】 佐久間【鼎】 佐藤賢了 佐藤春夫 志田延義 下【村】宏	【削除】
東亞同文書院教授 九州帝國大學教授 陸軍省軍務局長陸軍少將	島田牛雅 島津久大 島津久基 清水彌太郎 白木喬一	【削除】 【削除】 【削除】
文部省教學官 國語審議會委員		
朝鮮總督府編修官 大東亞事務官 東京帝國大學講師 讀賣新聞社文化部長 大東亞省調查官		

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	大東亞書記官 國學院大學校 教科用圖書調查委員會 文部省圖書監修官	榎谷秀夫 松尾 郎 松宮彌平 松田武夫	
	國語審議會委員 領事 東京外國語學校教 (マ) 興蒙學院教 (マ) 拓殖大學教 (マ) 國語審議會委員 文部省圖書監修官	三木武吉 【箕輪】三郎 宮【越健】太郎 宮島英男 宮原民平 三宅正太郎 森下眞男	【削除】 【削除】 【削除】
	國語審議會委員 在磐谷日本文化會館長 東京理科大学教 (マ) 新民國學院教【授】 大東亞書記官 海軍省教育局海軍少尉	森岡常藏 柳澤【健】 柳田國男 山【岸】德【平】 山口喜一郎 山中德二 山根藤七 矢田部志加三	 【削除】
	文部省圖書監修官 東京高等農林學校講師 日本放送協會報道部長 興亞鍊成所鍊成官 文部省國語調查官 【情報局情報官 農商事務官 教育總署總編審 國語調查官 在佛印日本文化會座長 上海大使館文化課長 北京 同	湯澤幸吉郎 湯山 清 横山重【遠】 吉田三郎 吉田澄夫 井澤實 今村 等 加藤詢次郎 關 宦一 横山正幸	【削除】 新任
	文部省圖書監修官 大東亞省囑託 善隣協會理事長 文部事務官 文部省圖書監修官 青年文化協會常任理事 日語文化協會常任理事 國語協會理事長	井上 赳 大志萬準治 大島 豊 久保田藤磨 鹽野直道 豐田久二 松宮一也 梁田玖次郎	前理事 " " " " " " "
日本語教育振興會第七十回 常任理事會 昭和十八年十二月二十四日 午前十一時半ヨリ 於外務省儀典課長官舎	一、出席者 關野常任理事 相良常任理事 西尾常任理事 長沼常任理事兼總主事 中島主事 一、配布書類 第六十九回常任理事會協議要錄 第七十回常任理事會報告及議題 一、協議事項 イ、日本語讀本卷一、卷二増刷ノ件 日本語讀本卷一及卷二ノ在庫品僅少トナリタルタメ各貳万部印刷ノ件ハ川口印刷所ニ 用紙立替依【ヲ】乞ヒ印刷依頼ニ決ス但シ川口印刷所ノ見積價格(卷一、二九・九九錢、 卷二、參〇・五錢)ニ用紙代(約七・五錢)ヲ加ヘ日配ヲ通ジテ販賣スル時ハ手數【取】 單價三十六・五錢トナリ損失ヲ來スベキヲ以テ停止價【値段】變更ニツキ農商省ト折【衝】 ノ上シ【ノ上】定價ヲ大体六十錢トスルコトトス ロ、其他 日本語【普】及用圖書ニ關スル文部省及情報局ノ分【擔】ニ關シ原案ニツキ意見交【換】 セリ		

會議名・年月日・時・場所 (本文)

別紙「第七十回常任理事會報告及議題」	
一、報告	
イ、十二月十七日日本會會計事務ニ關シ前任者田中會計理事ト後任者長沼總主事間ニ經理關係業務並資産目錄ノ引繼ヲ了セリ。	
ロ、釘本常任理事ハ佛印、泰及南方占領地域ニ於ケル日本語普及狀況視察並ニ連絡ノタメ十二月二十一日午後二時半東京駅發ニテ出發セラレタリ。	
ハ、十二月十七日大東亞省南方事務局關係補助金金壹万五千圓ヲ受領セリ	
一、議題	
イ、日本語讀本卷一卷ニ増刷ノ件	
ロ、【其ノ他】	
別表	
一、現評議員ニシテ削除スベキモノ (三十五名)	
國語審議會委員	安藤正純
同	緒方竹虎
同	岡部長景
同	下村 宏
同	竹越與三郎
同	竹村勘吉
同	田澤義舖
同	田中 齋
同	星野行則
同	牧野良三
同	増田義一
同	三木武吉
同	三宅正太郎
同	森岡常藏
國民鍊成所指導官	市谷信義
文部省教學官兼國民鍊成所指導官	木下一男
大東亞調査官兼興亞鍊成所鍊成官	白木喬一
教科用圖書調査會委員	龜山孝一
總領事	喜多長雄
大東亞事務官	島津久大
文部省教學官	長岡彌一郎
大東亞書記官	【榘】谷秀夫
カナモジ會理事	上野陽一
國語協會理事	岡崎常太郎
帝國教育會專務理事	武部欽一
	輿水 實
	城戸幡太郎
	山根藤七
教科用圖書調査會委員	稻田昌植
臺灣總督府編修官	加藤春城
日本放送協會業務局長	關 正雄
日本出版會業務局長	田中四郎
關東局在滿教務部長	田中義男
日本放送協會國際部長	中郷孝之介
情報局部長	堀 公一
一、新ニ評議員トスベキモノ (二十五名)	
情報局情報官	井澤 實
農商事務官	今村 等
北京教育總署總□審	加藤洵次郎
文部省國語調査官	關 臣一
在佛印日本文化會館長	横山正幸

會議名・年月日・時・場所

(本文)

	文部省圖書監修官	井上 起
	大東亞省囑託	大志萬準治
	善隣協會理事長	大島 豊
	文部省事務官	久保田藤麿
	文部省圖書監修官	鹽野直道
	青年文化協會常務理事	豊田久二
	日語文化協會常務理事	松宮一也
	國語協會理事長	梁田【欽】次郎
	在泰大使館參事官	
	在ビルマ 同 上	
	在比 同 上	
	在西貢 情報部長	【河野 達一】
	教科用圖書調查會委員	今園國貞
	臺灣總督府編修官	石井權三
	日本放送協會業務局長	矢野謙次郎
	日本出版會書籍部長	齋藤【暁】
	關東局在滿教務部長	堀池英一
	日本放送協會國際局長	武藤義雄
	情報局部長	井口貞夫
	帝國教育會專務理事	大村清一

會議名・年月日・時・場所	(本文)
日本語教育振興會第七十一回常任理事會 昭和十九年一月七日(金) 午前十一時半ヨリ 於外務省儀典課長官舎	一、出席者 大岡常任理事 西尾常任理事 相良常任理事 關野常任理事 長沼常任理事兼總主事 中島主事 上村主事 山口主事
	一、配布書類 第七十回常任理事會協議要録 第七十一回常任理事會報告及議題
	一、協議事項 イ、滿洲事務局希望ノ件 腰原事務官ヨリ左ノ希望アリ (一) 日滿文化協會ニ於ケル「日華辭典」編纂ノ計畫其他文部省又ハ日本語教育振興會企畫ノモノト重複セル諸企畫アルヲ以テ今後連絡ヲ緊密ニシ重複ヲ避クルト共ニ日本語普及ニ關シ本會ノ協力ヲ希望ス (二) 滿洲事務局ニ於テ滿洲國ニ於ケル日本語普及ノ問題ニ關シ再檢討ヲナス必要【更ニ研究ヲ進メタキ意向】アリ。以テ本會ニ於テ該調査ノ委囑ヲ受クル用意アラバ昭和十八年度ニ於ケル豫算中ヨリ費用ヲ支出シ委囑スルモ可ナリ。
	右ニ對シ長沼總主事ヨリ左ノ返答ヲナシタル旨ノ説明アリ。 (一) 滿洲國ニ於ケル日本語普及ニ關シ協力スルハ本會ノ望ム所ナリ。 尚「日華辭典」ハ目下本會ニ於テ編纂中ナリ。刊行ノ上ハソレヲ使【利】用セラレテハ如何ト答ヘシ所腰原事務官ハ之ヲ諒承セラレタリ。 (二) 該調査ニツキテハ本會ニ於テ之ニ應ズベキ用意アルモ常任理事會ニ諮リタル上確答シタシト答ヘ更ニ詳細ノ打合ヲナスコトナレリ。 右處置ニ對シ全員之ヲ認メ特ニ(二)ニ關シテハ大東亞全域ノ大局の見地ヨリ能フ限リ善處スベキコトニ意見ノ一致ヲ見タリ。
	ロ、久保田研究動員課長ヨリ本會ニ於テ【日本語及日本語教育ニ關シ】科學的研究ヲ行フ場合ニハ研究助成ヲ考慮スルコト可能ナリトノ談アリタル旨長沼總主事ヨリ説明アリタリ。 ハ、山口主事ヨリ現在在庫出版物數ノ報告アリタリ。 ニ、關野、相良兩常任理事ヨリ大東亞省側ノ意見トシテ官廳ニ準ジ本會ニ於テモ機構ヲ改革シテ簡素ナラシメ職員數ヲ肅減シ速ニ決戰態勢ヲトルベキ要アル旨ノ意見開陳アリ。依リテ總主事ニ於テ原案ヲ作製スルコトナレリ。
	別紙「第七十一回常任理事會報告及議題」
	一、報告 イ、【昭】和十八年十二月二十七日用紙共販株式會社ヨリ十二月二十日附ヲ以テ十一月、十二月分用紙四万封度配給方ノ通知アリ、十二月二十八日特使ヲ以テ一月六日マデニ中井商店扱トシテ大日本印刷株式會社ニ右納入方要望書ヲ差出セリ ロ、十二月三十【一】日軍政地域用教科書用紙配給ニ關シ長沼總主事陸軍省軍務局松尾少佐ト連絡、一月四日及一月六日大日本再生製紙株式會社ト折【衝】大体一月中ニ約三万封度入手ノ運ビトナリタリ【(秘)】
	ハ、在佛印【芳】澤大使ヨリ青木大東亞大臣宛公電ヲ以テ釘本監修官【携】行ノ成人用速成日本語教本卷上【下各】二、五〇〇部 日本文法教本五〇部ノ送附方希望アリタリ
	一、議題 イ、滿洲事務局希望ノ件 ロ、其他
	【腰原事務官 日滿文化協會「日華辭典」日語普及狀況調査】 (イ) 科學的研究助成(久保田動員課長談)基礎調査】 (ロ) 圖書在庫品調査 上一万、中六千、下二万八千
日本語教育振興會第七十二回常任理事會 昭和十九年一月十四日(金) 午前十一時半ヨリ 於外務省儀典課長官舎	一、出席者 近藤理事長 大岡常任理事 西尾常任理事 根道常任理事 長沼常任理事兼總主事
	一、配布書類 第七十一回常任理事會協議要録 第七十二回常任理事會報告及議題
	一、協議事項
	イ、日語文化協會ヨリ申出ノ件

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>日本語文化協會松宮彌平氏ヨリ昭和十六年度ニ於テ本會ヨリ「初學年ノ教【授】法ノ研究」其他ニ對スル研究費金貳千【圓】也ヲ受ケシガ、本年【本】度モ補助【研究委囑】ヲ受ケタキ【旨】ノ希望申出アリ。本會トシテ【ハ】同協會ニ於テ積極的ニ本會事業ニ協力スルナラバ常任理事會ニ【諮】ルベシト答ヘタリトノ長沼總主事ノ説明アリ、協議ノ結果出來【得】ル限リ先方ノ希望ニ應ズル用意ノモトニ交渉ヲ繼續スルコトニ決定セリ</p> <p>ロ、本會機構【簡】素化ノ件 從來ノ庶務部、【會計部】、研究部、指導部、圖書部、雜誌部、【普】及部ノ七部ヲ廢シ新シク總務部、事業部、研究部ノ三部ヲ設クルコトニ決定ス。人事ニ關シテハ秘【密】會ヲ開ク。</p> <p>別紙「第七十二回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ 日本語讀本學習指導書卷二及成人用速成日本語教本上卷出來ニ附キ昭和十八年十二月二十七日出版届出ヲ完了セリ</p> <p>ロ 昭和十八年十二月二十八日付ヲ以テ大東亞大臣ヨリ大東亞書記官根道廣吉氏ノ本會常任理事就任方許可相成リタルニツキ同日理事及常任理事委囑方發令セラレタリ。</p> <p>ハ 一月七日大東亞省南方事務局關係補助金第三回分金壹万五千圓ヲ受領セリ。</p> <p>一、議題</p> <p>イ 日本語文化協會ヨリ申出ノ件【一月十二日松宮氏父子面談】</p> <p>ロ 本會機構簡素化ノ件 【三部カ四部カ 一 總務 二 事業(圖書部 雜誌) 三 研究】</p> <p>ハ 其他</p>
<p>日本語教育振興會第七十三回常任理事會 昭和十九年一月二十一日 (金) 午前十一時半ヨリ 於外務省儀典課長官舎</p>	<p>一、出席者 近藤理事長 大岡常任理事 西尾常任理事 相良常任理事 關野常任理事 長沼常任理事兼總主事 中島主事</p> <p>一、配布書類 第七十二回常任理事會協議要録 第七十三回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、處務規程ノ件 處務規程ニツキテハ原案通り決定シ、人事ニ關シテ秘密會ヲ開ク</p> <p>ロ、本會編【纂】圖書ノ發行ヲ書【肆】ニ委託スルノ件 第六十六回常任理事會(昭和十八年十一月二十六日)ニ於テ決定セル本會編【纂】ノ「東亞ニ於ケル緒【諸】言語」其他ノ發行ヲ三省堂ニ委託スルノ件ハ今後ノ出版【界】ノ情勢ヲ見テ善處スルコトニ決定セリ</p> <p>ハ、興亞總本部ト本會トノ連絡ニ關スル件 相良常任理事ヨリ御子【柴】興亞總本部【宣傳】部副部長ヨリ同部ト本會トノ連絡ヲ一【層緊密】ニシ【タ】シトノ希望申出アリ【タ】ル旨ノ説明アリ。本會トシテモ固ヨリ希望スル處ナレバ、今後一【層】連絡ヲ【緊】密ニスルコトトナレリ</p> <p>別紙「第七十三回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ 【昭】和十九年一月十九日大日本再生製紙株式會社ニ對シ模造一號六〇【听三十萬】封度(但毎月三萬封度宛分納)ヲ納期【昭】和十九年十月末日限リトシテ封度當リ二八錢一厘也(但税込)ヲ以テ發注シ、第一回分三萬封度ヲ一月十九日大日本印刷株式會社ニ渡シタリ 【ロ兩方 文化讀本~二萬冊 初一~一萬冊ハ興亞院本部宣傳部副長】</p> <p>一、議題</p> <p>イ、處務規程ノ件</p> <p>ロ、其他 【三省堂トノ交渉(靜觀)】</p>
<p>日本語教育振興會處務規程 (昭和十九年一月二十一日)</p>	<p>別紙「日本語教育振興會處務規程」</p> <p>第一条 規則三條ニ依ル事業ヲ遂行スル為本會ニ左ノ部ヲ置ク</p> <p>一、總務部</p> <p>二、事業部</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	三、研究部
	第二條 總務部ニ於テハ左ノ事業ヲ【掌】ル
	一、 人事ニ關スル事項 二、 印及【鍵】ノ保管ニ關スル事項 三、 文書ノ接受、發送及保管ニ關スル事項 四、 關係官廳及各種團體トノ折【衝】ニ關スル事項 五、 會計經理ニ關スル事項 六、 資産及物品ニ關スル事項 七、 日本語教師ノ養成並再教育ニ關スル事項 八、 日本語教師ノ指導ニ關スル事項 九、 外地並ニ現地トノ連絡ニ關スル事項 十、 其他他部ノ所管ニ屬セザル事項
	第三條 事業部ニ於テハ左ノ事業ヲ【掌】ル
	一、 日本語教科用圖書ノ刊行及頒布ニ關スル事項 二、 雜誌ノ編輯、刊行及頒布ニ關スル事項 三、 日本語教育資料ノ作成並頒布ニ關スル事項 四、 各種研究【物】及調査【物】ノ刊行並ニ頒布ニ關スル事項
	第四條 研究部ニ於テハ左ノ事務【業】ヲ【掌】ル
	一、 日本語教育ニ必要ナル研究及調査ニ關スル事項 二、 日本語教育ニ必要ナル資料ノ研究及調査ニ關スル事項 三、 其他日本語ノ普及ニ必要ナル研究及調査ニ關スル事項
	第五條 各部ニ部長一名ヲ置ク、部長ハ本會役員及職員ノ中ヨリ理事長【之】ヲ命ズ
	第六條 各部ノ細則ハ別ニ【之】ヲ定ム
日本語教育振興會第七十四回常任理事會 昭和十九年一月廿八日(金) * 原本では廿一日 午前十一時半ヨリ 於外務省儀典課長官舎	一、 出席者 大岡常任理事 西尾常任理事 根道常任理事 關野常任理事 大志摩(マ)大東亞省囑託 長沼常任理事兼總主事 中島主事 上村主事
	一、 配布書類 第七十三回常任理事會協議要録 第七十四回常任理事會報告及議題
	一、 協議事項 イ、 通信院官【吏】練習所ヨリ講師派遣方依頼ノ件 通信院官【吏】練習所教授官崎【寛】氏ヨリ本年三月同所ヲ卒【業】スベキ生徒中 南方派遣ノモノニ日本語普及ニ關スル講義ヲ二月中ニ二日間開キタキニ付キ講師 ヲ派遣方依頼アリタリ。總主事ニ於テ適當ナル講師ヲ選定シ依頼ニ應ズベキコトニ 決定シ、【具】体的ノ打合ヲナスコトナレリ。
	別紙「第七十四回常任理事會報告及議題」
	一、 報告 イ、 一月二十二日午後三時ヨリ本會神田事務所ニ於テ「慣用讀方」ニツキテノ研究會 ヲ開ク ロ、 一月二十六日大東亞省ニ於テ相良事務官、長沼總主事ト日本統制地圖株式會社代 表者【植】野録夫氏トノ間ニ大東亞地圖出版ニ關シ打合會ヲ開キタリ 【北田駒大教授 飯本女高師教授ニ委囑 四六全紙四枚掛】
	一、 議題 イ、 通信院官【吏】練習所ヨリ講師派遣方依頼ノ件 ロ、 其ノ他 【中教トノ契約書】
日本語教育振興會第七十五回常任理事會 昭和十九年二月四日(金) 午前十一時半ヨリ 於外務省儀典課長官舎	一、 出席者 近藤理事長 【大岡常任理事】 西尾常任理事 根道常任理事 相良常任理事 村松大東亞通譯官 長沼常任理事兼總主事 中島主事 上村主事
	一、 配布書類 第七十四回常任理事會協議要録 第七十五回常任理事會報告及議題
	一、 協議事項 イ 長野縣上田小縣教育舎【會】中等部會ヨリ講師派遣依頼ノ件 第四十二回理事會ノ決定通り講師派遣ノ費用中汽車賃及謝禮ハ本會ニ於テ負【擔】

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>シ会場ノ諸設備其他ノ準備費及講師ノ宿泊費ハ先方ニ於テ負【擔】スルコトナレリ</p> <p>ロ 日語文化協會松宮彌平氏ニ研究委囑ノ件 昭和十八年度ニ於テ高學年ノ教授法及文法教授法ノ研究ヲ委囑シ研究費金貳千圓ヲ交附スルコトニ決定ス。尚十九年度以降ハ本會ガ同協會事【業】計畫ニ參【畫】スルコトトナシテ援助ヲ續ケラレタシトノ松宮氏ヨリ希望アリタル旨長沼總主事ヨリ説明アリタリ。</p> <p>ハ 大東亞鍊成院ニ對シ希望ノ件 大東亞鍊成院ニ於テ日本語普及並日本語教育振興ニ關スル講義等ヲ加ヘラレタシトノ希望申入ヲナシタキ旨長沼總主事ヨリ説明アリ。全員異議ナク決定セリ。</p> <p>別紙「第七十五回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ、一月三十一日支司第四二號ヲ以テ大東亞省支那事務局長ヨリ本年度支那事務局關係本會事【業】補助金第二回分金四萬圓也交附スベキ旨指令アリタリ</p> <p>ロ、議題 一月三十一日支司第五九號ヲ以テ支那事務局派遣教員【鍊】成事【業】及同事【業】所屬ノ資産ヲ本會ヨリ興亞教員會ニ引繼ノ件承認セラ【ル】</p> <p>ハ、日泰學習辭典(一万圓) 【二、派遣教員 七八百人 再教育 二月十五日】</p> <p>一、議題</p> <p>イ、長野縣上田小縣教育會中等部會ヨリ【講師】派遣依頼ノ件</p> <p>ロ、其ノ他 日語文化協會松宮彌平氏ニ研究委囑ノ件【(高級 文法)本會參畫希望】</p> <p>ハ、其ノ他</p>
<p>日本語教育振興會第七十六回常任理事會 昭和十九年二月十八日(金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第三會議室 *「報告及議題」には、文部省第二一會議室</p>	<p>一、出席者 大岡常任理事 西尾常任理事 相良常任理事 關野常任理事 長沼常任理事兼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 第七十五回常任理事會協議要録 第七十六回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、本會ヲシテ財團法人タラシムルノ件 將來本會ガ不動産ヲ所有スル等ノタメ本會ヲシテ財團法人トナシタキ旨長沼總主事ヨリ説明アリ。協議ノ結果全會意見ノ一致ヲ見、草案ヲ相良常任理事ニ於テ作製スルコトナレリ。</p> <p>別紙「第七十六回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ 戒大用、初等學(マ)使用日本語教本卷一出來ニ附二月十二日出版届出ヲ完了セリ</p> <p>ロ 長野縣上田小縣教育會中等部會ニ於テ長沼總主事大東亞共榮圈ニ於ケル講演會ハ「日本語普及ノ現状」ナル演題ヲ以テ約二時間之ヲ行【ヒ】、聽衆七十餘名並ニ同校【上田高等女學】專攻科生徒等約二百名</p> <p>ハ 厚生省外廓團體中央協會ヨリ同會編【纂】協和【國】語讀本改【訂】ノ件ニ關シ協議會開催シタキニヨリ出席方招請アリ二月十五日午後一時長沼總主事出席セリ</p> <p>一、議題</p> <p>イ 本會ヲシテ財團法人タラシムルノ件</p> <p>ロ ソノ他</p>
<p>日本語教育振興會第七十七回常任理事會 昭和十九年二月二十五日(金)午前十一時半ヨリ 於文部省國語課長室</p>	<p>一、出席者 西尾常任理事 相良常任理事 松村一等通譯官 長沼常任理事兼總主事 山口主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 第七十六回常任理事會協議要録 第七十七回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、特別會計ニ新勘定科目設定ノ件 昭和十八年度以降特別會計勘定科目ニ總主事接待費ヲ設クルノ要アル旨長沼總主</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)												
	<p>事ヨリ説明アリ。全員異議ナク決定ス。</p> <p>別紙「第七十七回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ 二月二十二日午後四時ヨリ二時間通信院官吏練習所ノ依頼ニヨリ同所ニ於テ長沼總主事「日本語普及ノ諸問題」ノ演題ノ下ニ講演ヲ行フ。聴衆同所職員生徒六十餘名ナリ。</p> <p>ロ 二月十五日 日振發第八七號ヲ以テ本會會長ヨリ大東亞大臣宛テ日泰語學習辭典編纂費補助金交附方ノ申請ヲナセリ。事業豫算額金壹萬圓ニシテ大東亞省南方事務局ノ助成金ニ依ルモノナリ。</p> <p>一、議題</p> <p>イ 特別會計ニ新勘定科目設定ノ件</p> <p>ロ 其他</p>												
<p>日本語教育振興會第七十八回常任理事會 昭和十九年三月三日(金) 午前十一時半ヨリ 於文部省元會計課長室</p>	<p>一、出席者</p> <p>近藤理事長 大岡常任理事 西尾常任理事 根道常任理事 相良常任理事 關野常任理事 長沼常任理事兼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第七十七回常任理事會協議要録 第七十八回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ 文部省著「發音符號」(假稱)印刷發行ノ件 文部省著「發音符號」(假稱)ヲ本會ニ於テ印刷發行セントメ 同省教學局長宛發行方許可ヲ願出ゾルノ件ハ全員異議ナク決定セリ</p> <p>「備考」</p> <table border="0" data-bbox="606 1008 1085 1209"> <tr> <td>一、書名</td> <td>發音符號(假稱)</td> </tr> <tr> <td>一、体裁</td> <td>B6判紙裝約二十四頁</td> </tr> <tr> <td>一、期限</td> <td>向フ三ケ年</td> </tr> <tr> <td>一、發行部數</td> <td>第一刷一萬部</td> </tr> <tr> <td>一、定價</td> <td>二十錢</td> </tr> <tr> <td>一、印刷所</td> <td>大日本印刷株式會社</td> </tr> </table> <p>別紙「第七十八回常任理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ 二月二十三日支那派遣教員歸國訓練講習會受講者ニ對シ午前文部省教學局國語課長主催ノ發音符號ニ關スル懇談會ニ長沼總主事本會ヲ代表シテ出席セリ</p> <p>ロ 二月二十七日支那派遣教員歸國【再】訓練講習會受講者ニ對シ午前中西尾長沼兩常任理事ノ講義アリ午後一時半ヨリ五時迄座談會ヲ催シ五時半ヨリ七時迄上野精養軒ニ於テ招待會ヲ開催ス 出席者受講者二十四名並ニ本會側七名</p> <p>一、議題</p> <p>イ 文部省著「發音符號」印刷發行ノ件 【情報局ト連絡 大日本印刷會社】</p> <p>ロ 其他</p>	一、書名	發音符號(假稱)	一、体裁	B6判紙裝約二十四頁	一、期限	向フ三ケ年	一、發行部數	第一刷一萬部	一、定價	二十錢	一、印刷所	大日本印刷株式會社
一、書名	發音符號(假稱)												
一、体裁	B6判紙裝約二十四頁												
一、期限	向フ三ケ年												
一、發行部數	第一刷一萬部												
一、定價	二十錢												
一、印刷所	大日本印刷株式會社												
<p>日本語教育振興會第七十九回常任理事會 昭和十九年三月十日(金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第三會議室</p>	<p>一、出席者</p> <p>近藤理事長 大岡常任理事 相良常任理事 關野常任理事 長沼常任理事兼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第七十八回常任理事會協議要録 第七十九回常任理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ 財團法人日本語教育振興會寄附行為ノ件 相良常任理事作成ノ原案ニヨリ逐次審議ヲナスソノ結果尚檢討ヲ要スベシトセラレタル條々大略左ノ如シ</p> <p>第二條 本會ノ事務所ノ所在地ヲ神田區三崎町一丁目二番地三トナスコト</p> <p>第四條 項目ヲ少クシ簡潔ナラシムルコト</p> <p>第九條 參與若干名ノ項ヲ加フルコト</p> <p>第十六條 參與ニ關スル規定ヲ設クルコト</p> <p>第十六條 原案第十六條ヲ第十七條トナスコト</p> <p>第十七條 原案第十七條ヲ省略スルコト</p>												

會議名・年月日・時・場所	(本文)
財團法人日本語教育振興會 寄附行為(案)	別紙「第七十九回常任理事會報告及議題」
	一、報告
	イ 二月二十六日大東亞省支那事務局第二回補助金四萬圓也ヲ受領セリ
	ロ 三月三日大東亞大臣ヨリ指令南行第四八六號ヲ以テ日泰語學習辭典編纂費補助金金壹萬圓也交附方ノ指令アリタリ。
	ハ 二月二十五日日振發第八十八號ヲ以テ本會會館及附屬土地購入方交渉ノ文書費助成(總額四捨六萬一千圓也)【ヲ】大東亞大臣宛申請セリ
	ニ 三月六日日振發第八十九號ヲ以テ本會會館及附屬土地購入方交渉ノ文書ヲ本會會長ヨリ基督教新生社團理事千葉勇五郎氏宛ニ送附セリ。
	二、議題
	イ 財團法人日本語教育振興會寄附行【為】ノ件
	別紙「財團法人日本語教育振興會寄附行為(案)」
	第一條 本會ハ財團法人日本語教育振興會ト稱ス
	第二條 本會ノ事務所ハ之ヲ東京都麹町區文部省内ニ置ク
	第三條 本會ハ大東亞圈内ニ於ケル日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ヲ圖ルヲ以テ目的トス
第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達成スル為政府ノ方針ニ基キ左ノ事業ヲ行フ	
一、日本語ノ普及ニ關スル諸般ノ調査及研究	
二、日本語教科用圖書ノ刊行及頒布	
三、日本語教育資料ノ作成及頒布	
四、日本語教師ノ養成及指導	
五、日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ニ關スル各種會合ノ開催	
六、日本語ノ普及並日本語教育ニ關スル雜誌ノ發行	
七、日本語ノ普及又は日本語教育ノ振興ニ關係アル内外諸團體トノ連絡及之等團體ノ行フ諸事業ノ調査	
八、其ノ他日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ニ關シ必要ナル事項	
第五條 本會ノ資金ハ左ニ記載シタルモノヨリナル	
一、設立當初ノ資産(別紙目錄一ヨル(マ))	
二、政府補助金	
三、寄附金品	
四、事業収入	
五、其他ノ収入	
第六條 本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル	
第七條 資産ハ之ヲ郵便官署銀行若ハ信託會社ニ預入レ又ハ有價證券トシテ保有スベシ	
前項ノ銀行、信託會社及有價證券ニ附テハ理事會ノ承認定ムル適營【承認ヲ經ベシ】金錢以外ノ資産ハ理事長ノ定ムル適當ナル方法ニ依リ之ヲ保管利殖シ又換價ス	
第八條 本會ノ事業運営ニ關シ必要アルトキハ理事會ノ議決ヲ經テ特別會計ヲ置クコトヲ得	
第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク 其任期ハ二年トス但シ重任ヲ妨ゲズ	
一、會長 一名	
二、副會長 二名	
三、理事長 一名	
四、理事【若干名】(内一名ヲ常務理事トス)	
五、監事 二名以内	
六、顧問 若干名	
七、評議員 若干名	
第十條 會長ハ理事ノ中ヨリ理事會ノ決議ニ依リ大東亞大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム 會長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統裁ス	
第十一條 副會長ハ理事ノ中ヨリ會長之ヲ委囑ス 副會長ハ會長ヲ補佐シ、會長事故アルトキハ其職務ヲ代行ス	
第十二條 理事長ハ理事ノ中ヨリ會長之ヲ委囑ス 理事長ハ會長ノ命ヲ承ケ本會事業ノ企畫立案並會務ノ遂行ヲ掌ル	

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	第十三條 會長、副會長、理事長タル理事ヲ除キ理事ハ會長之ヲ委囑ス 理事ハ理事會ヲ組織ス 理事會ハ理事長之ヲ招集シ本會ノ事業ノ企畫立案並會務ノ遂行ニ付審議ス 理事會ノ議長ハ理事長之ニ當ル 理事會ハ理事半數以上出席スルニ非レバ開會スルコトヲ得ス 議事ハ出席理事ノ過半數ニ依リ之ヲ決ス 可否同數ナルトキハ議長之ヲ決 ス 常務理事ハ理事ノ中ヨリ會長之ヲ委囑ス 常務理事ハ理事長ヲ補佐シ専ラ會ノ常務ヲ執行ス
	第十四條 監事ハ會長之ヲ委囑ス 監事ハ會長ノ命ヲ承ケ本會ノ經理ニ關シ其ノ監査ニ當ル
	第十五條 顧問ハ會長之ヲ委囑ス 顧問ハ會長ノ諮問ニ應フ
	第十六條 評議員ハ會長之ヲ委囑ス 評議員ハ評議員會ヲ組織ス 評議員會ハ會長之ヲ招集シ會長ノ諮問ニ應ジ意見ヲ開申ス
	第十七條 本會ハ左ノ職員ヲ置キ理事長之ヲ命ズ 一、總主事 一名 二、主 事 若干名 三、書 記 若干名 四、研究員 若干名
	第十八條 本寄附行為ノ施行ニ關シ必要ナル細則ハ理事會ノ議決ヲ經テ別ニ之ヲ定ム
	第十九條 本寄附行為ノ規定ハ理事ノ發議ニ基キ理事三分ノ二以上ノ同意アルトキハ 之ヲ變更スルコトヲ得
	第二十條 本會設立當初ノ役員左ノ如シ
日本語教育振興會第八十回 常任理事會 昭和十九年三月十七日(金) 午前十一時半ヨリ 於外務省儀典課長官舎	一、出席者 近藤理事長 大岡常任理事 西尾常任理事 根道常任理事 相良常任理事 長沼常任理事兼總主事 中島主事 上村主事
	一、配布書類 第七十九回常任理事會協議要録 第八十回常任理事會報告及議題
	一、協議事項 イ 財團法人日本語教育振興會寄附行為ノ件 前回審議ノ結果補正セル原案ニヨリ更ニ審議シ原案通り可決シ、直ニ手續ヲナスコ トナレリ。 ロ 研究委囑ノ件 審議ニ至ラズ
	別紙「第八十回常任理事會報告及議題」
	一、報告 三月九日本會書記大塚秀夫ノ葬儀參列ノタメ上村主事ヲ逗子ニ出張セシメ香【奠】及花 環料ヲ供シタリ。
	一、議題 イ 財團法人日本語教育振興會寄附行為ノ件 ロ 研究委囑ノ件 ハ 其ノ他
	財團法人日本語教育振興會寄附行為
	第一條 本會ハ財團法人日本語教育振興會ト稱ス
	第二條 本會ノ事務所ハ之ヲ東京都神田區三崎町一丁目二番地ニ置ク
	第三條 本會ハ政府ノ方針ニ基キ大東亞圏内ニ於ケル日本語ノ普及並【ニ】日本語教育 振興ニ關スル諸事業ヲ行フヲ以テ目的トス

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達成スルタメ左ノ事業ヲ行フ</p> <p>一、日本語ノ普及並【ニ】日本語教育ノ振興ニ關スル諸般ノ調査・研究及ソノ推進</p> <p>二、日本語教科用圖書・教育資料ノ刊行又ハ作成頒布並日本語ニ關スル雜誌ノ發行</p> <p>三、日本語指導者ノ養成・指導並【ニ】之ニ必要ナル施設ノ設置運営</p> <p>四、日本語ノ普及並日本語教育ノ振興ニ關スル各種會合ノ開催、關係諸団体トノ連絡・調整</p> <p>五、ソノ他理事會ニ於テ必要ト認メタル事項</p>
	<p>第五條 本會ノ資産ハ左ニ記載シタルモノヨリナル</p> <p>一、設立當初ノ資産(別紙目錄ニヨル)</p> <p>二、政府補助金</p> <p>三、寄附金品</p> <p>四、事業収入</p> <p>五、其他ノ収入</p>
	<p>第六條 本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始マリ翌年三月三十一日ニ終ル</p>
	<p>第七條 資産ハ之ヲ郵便官署、銀行若ハ信託會社ニ預入レ又ハ有價證券トシテ保有スベシ</p> <p>前項ノ銀行・信託會社及有價證券ニ附テハ理事會ノ承認ヲ經ベシ</p> <p>金錢以外ノ資産ハ理事會ノ定ムル適當ナル方法ニ依リ之ヲ保管利殖シ又換價ス</p>
	<p>第八條 本會ノ事業運営ニ關シ必要アルトキハ理事會ノ議決ヲ經テ特別會計ヲ置クコトヲ得</p>
	<p>第九條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク</p> <p>其任期ハ二年トス但シ重任ヲ妨ゲズ</p> <p>一、會長 一名</p> <p>二、副會長 二名</p> <p>三、理事長 一名</p> <p>四、理事 若干名(内一名ヲ常務理事トス)</p> <p>五、監事 二名</p>
	<p>第十條 本會ニ顧問・參與・評議員各若干名ヲ置クコトヲ得ソノ任期ハ二年トス但シ重任ヲ妨ゲズ</p>
	<p>第十一條 會長ハ理事ノ中ヨリ理事會ノ決議ニ依リ大東亞大臣ノ認可ヲ經テ之ヲ定ム</p> <p>會長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統裁ス</p>
	<p>第十二條 副會長ハ理事ノ中ヨリ會長之ヲ委囑ス</p> <p>副會長ハ會長ヲ補佐シ、會長事故アルトキハ其ノ職務ヲ代行ス</p>
	<p>第十三條 理事長ハ理事ノ中ヨリ會長之ヲ委囑ス</p> <p>理事長ハ會長ノ命ヲ承ケ本會議事業ノ企畫立案並會務ノ遂行ヲ掌ル</p>
	<p>第十四條 會長、副會長、理事長タル理事ヲ除キ理事ハ會長之ヲ委囑ス</p> <p>理事ハ理事會ヲ組織ス</p> <p>理事會ハ理事長之ヲ招集シ本會ノ事業ノ企畫立案並會務ノ遂行ニ附審議ス</p> <p>理事會ノ議長ハ理事長之ニ當ル</p> <p>理事會ハ理事半數以上出席スルニ非レバ開會スルコトヲ得ス</p> <p>議事ハ出席理事ノ過半數ニ依リ之ヲ決ス 可否同數ナルトキハ議長之ヲ決ス</p> <p>常務理事ハ理事ノ中ヨリ會長之ヲ委囑ス</p> <p>常務理事ハ理事長ヲ補佐シ専ラ會ノ常務ヲ執行ス</p>
	<p>第十五條 監事ハ會長之ヲ委囑ス</p> <p>監事ハ民法第五十九條ノ職務ヲ行フ</p>
	<p>第十六條 顧問ハ會長之ヲ委囑ス</p> <p>顧問ハ會長ノ諮問ニ應フ</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)																																										
	<p>第十七條 參與ハ會長之ヲ委囑ス 參與ハ參與會ヲ組織ス 參與會ハ理事長之ヲ招集シ重要ナル會務ニ參與ス</p>																																										
	<p>第十八條 評議員ハ會長之ヲ委囑ス 評議員ハ評議員會ヲ組織ス 評議員【會】ハ理事【會】長之ヲ招集シ會長ノ諮問ニ應ジ意見ヲ開申ス</p>																																										
	<p>第十九條 本寄附行為ノ施行ニ關シ必要ナル細則ハ理事會ノ議決ヲ經テ別ニ之ヲ定ム</p>																																										
	<p>第二十條 本寄附行為ハ理事ノ發議ニ基キ理事三分ノ二以上ノ同意アルトキ之ヲ變更スルコトヲ得</p>																																										
	<p>第二十一條 本會設立當初ノ役員左ノ如シ</p> <table border="0" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 70%;">東京都赤坂區丹後町十番地</td> <td style="width: 10%; text-align: center;">子爵</td> <td style="width: 20%;">岡部 長景</td> </tr> <tr> <td>東京都中野區櫻山町二十一番地</td> <td></td> <td>菊池 豐三郎</td> </tr> <tr> <td>東京都世田ヶ谷區下馬町三丁目七百四十番地</td> <td></td> <td>山本 熊一</td> </tr> <tr> <td>東京都小石川區久堅町五十八番地</td> <td></td> <td>近籐 壽治</td> </tr> <tr> <td>東京都王子區王子町千三百十三番地</td> <td></td> <td>大岡 保三</td> </tr> <tr> <td>東京都目黒區中目黒三丁目九百九十番地</td> <td></td> <td>釘本 久春</td> </tr> <tr> <td>東京都目黒區平町二番地</td> <td></td> <td>相良 惟一</td> </tr> <tr> <td>東京都北多摩郡多摩村車返三百五十八番地</td> <td></td> <td>關野 房夫</td> </tr> <tr> <td>東京都小石川區雜司ヶ谷百三十二番地</td> <td></td> <td>東光 武三</td> </tr> <tr> <td>東京都目黒區下目黒三丁目五百二十一番地</td> <td></td> <td>長沼 直兄</td> </tr> <tr> <td>東京都杉並區和泉町八百十五番地</td> <td></td> <td>西尾 實</td> </tr> <tr> <td>東京都目黒區芳窪町九百十八番地</td> <td></td> <td>根道 廣吉</td> </tr> <tr> <td>東京都小石川區小日向□町三丁目九十八番地</td> <td></td> <td>柴沼 直</td> </tr> <tr> <td>東京都中野區櫻山町十六番地</td> <td></td> <td>華山 親義</td> </tr> </table>	東京都赤坂區丹後町十番地	子爵	岡部 長景	東京都中野區櫻山町二十一番地		菊池 豐三郎	東京都世田ヶ谷區下馬町三丁目七百四十番地		山本 熊一	東京都小石川區久堅町五十八番地		近籐 壽治	東京都王子區王子町千三百十三番地		大岡 保三	東京都目黒區中目黒三丁目九百九十番地		釘本 久春	東京都目黒區平町二番地		相良 惟一	東京都北多摩郡多摩村車返三百五十八番地		關野 房夫	東京都小石川區雜司ヶ谷百三十二番地		東光 武三	東京都目黒區下目黒三丁目五百二十一番地		長沼 直兄	東京都杉並區和泉町八百十五番地		西尾 實	東京都目黒區芳窪町九百十八番地		根道 廣吉	東京都小石川區小日向□町三丁目九十八番地		柴沼 直	東京都中野區櫻山町十六番地		華山 親義
東京都赤坂區丹後町十番地	子爵	岡部 長景																																									
東京都中野區櫻山町二十一番地		菊池 豐三郎																																									
東京都世田ヶ谷區下馬町三丁目七百四十番地		山本 熊一																																									
東京都小石川區久堅町五十八番地		近籐 壽治																																									
東京都王子區王子町千三百十三番地		大岡 保三																																									
東京都目黒區中目黒三丁目九百九十番地		釘本 久春																																									
東京都目黒區平町二番地		相良 惟一																																									
東京都北多摩郡多摩村車返三百五十八番地		關野 房夫																																									
東京都小石川區雜司ヶ谷百三十二番地		東光 武三																																									
東京都目黒區下目黒三丁目五百二十一番地		長沼 直兄																																									
東京都杉並區和泉町八百十五番地		西尾 實																																									
東京都目黒區芳窪町九百十八番地		根道 廣吉																																									
東京都小石川區小日向□町三丁目九十八番地		柴沼 直																																									
東京都中野區櫻山町十六番地		華山 親義																																									

會議名・年月日・時・場所	(本文)
財團法人 日本語教育振興會第一回理事會 昭和十九年三月二十四日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省國語課長室	一、出席者 近藤理事 大岡理事 根道理事 相良理事 長沼理事兼總主事 外ニ委任狀三通 山口主事 上村主事
	一、配布書類 第八十回常任理事會協議要録 第一回理事會報告及議題
	一、協議事項 イ 財團法人日本語教育振興會會長副會長理事長常務理事選任ノ件 會長ハ岡部長景子ヲ推薦スルコトニ決定 副會長理事長常務理事ニツキテハ次回理事會ニ於イテ協議スルコトトナレリ ロ 研究委囑ノ件 安南語及タイ語ト日本語トノ發音上ノ比較研究ヲ東京外國語學校ニ委囑スルコトニ決定
	別紙 議題及報告
	一、報告 一、昭和十九年三月二十二日附支司第三三二五號ヲ以テ大東亞大臣ヨリ財團法人日本語教育振興會設立ノ件認可セラレタリ。 一、三月廿三日大東亞省南方事務局第四回補助金壹萬五千圓也及ビ日泰語學習辭典編纂費補助金壹萬圓也ヲ受領セリ。
	一、議題 イ 財團法人日本語教育振興會會長副會長【理事長】常務理事選任ノ件 ロ 研究委囑ノ件 ハ 其ノ他
	一、出席者 近藤理事 大岡理事 西尾理事 根道理事 相良理事 關野理事 長沼理事兼總主事 山口主事 上村主事
	一、配布書類 第一回理事會協議要録 第二回理事會報告及議題 處務規程案 特別會計規程案 委任事項案
	一、協議事項 一、副會長理事長常務理事選任ノ件 副會長理事長ハ原案通り決定常務理事ニハ理事兼總主事長沼直兄氏ヲ推薦スルコトニ意見一致セリ。 二、處務規程ノ件 第一條ノ「規則」ヲ「寄附行為」ト訂正シ第二條ノ(七)(八)(九)ヲ一括シテ「(七)日本語教育關係者ノ指導育成及其ノ連絡ニ關スル事項」トシ(一〇)ヲ(八)トスソノ他原案通り決定セリ 第四條(三)「並ニ」ヲ「及」トシ(四)「各種研究」ヲ「各種ノ研究物」トス 三、特別會計設定及特別會計規程ノ件 原案通り決定セリ 四、總主事委任事項ノ件 常務理事ト總主事ト別人ナル場合ヲ考慮シ更ニ研究ノ上再審議スルコト 五、秘密會(人事及建物購入ニ關スル件)
	別紙 議題及報告
一、報告 昭和十九年三月二十三日附ヲ以テ財團法人日本語教育振興會ノ設立登記申請ヲナシタリ【二十二日設立】	
一、議題 一、副會長 理事長 常務理事選任ノ件 (イ) 副會長 文部次官 大東亞次官 (ロ) 理事長 現理事長	

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>(ハ) 常務理事 二、處務規程ノ件 三、特別會計設定及特別會計規定【程】ノ件 四、總主事委任事項ノ件</p>
	<p>別紙 日本語教育振興會處務規程 (昭和十九. 三. 三一)</p>
	<p>第一條 規則【寄附行為】第三條ニ依ル事業ヲ遂行スル為本會ニ左ノ部ヲ置ク 一、總務部 二、研究部 三、事業部</p>
	<p>第二條 總務部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル 一、人事ニ關スル事項 二、印及鍵ノ保管ニ關スル事項 三、文書ノ授受・發送及保管ニ關スル事項 四、關係官廳及各種團體トノ折衝ニ關スル事項 五、會計經理ニ關スル事項 六、資産及物品ニ關スル事項 七、日本語教師ノ養成及一再教育ニ關スル事項【育關係者】 八、日本語指導者ノ指導育成【及】ニ關スル事項 九、【日本語教育關係者】外地並ニ現地トノ連絡ニ關スル事項 一〇八、其他他部ノ所管ニ屬セザル事項</p>
	<p>第三條 研究部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル 一、日本語教育ニ必要ナル研究及調査ニ關スル事項 二、日本語教育ニ必要ナル資料ノ研究及調査ニ關スル事項 三、其他日本語ノ普及ニ必要ナル研究及調査ニ關スル事項</p>
	<p>第四條 事業部ニ於テハ左ノ事務ヲ掌ル 一、日本語教科用圖書ノ刊行及頒布ニ關スル事項 二、雜誌ノ編輯、刊行及頒布ニ關スル事項 三、日本語教育資料ノ作成並ニ【及】頒布ニ關スル事項 四、各種研究及調査物ノ刊行並ニ頒布ニ關スル事項</p>
	<p>第五條 各部ニ部長一名ヲ置ク 部長ハ本會役員及職員ノ中ヨリ理事長之ヲ命ズ</p>
	<p>第六條 各部ノ細則ハ別ニ之ヲ定ム 【附則 昭和十九年 三月三十三日—四月四月一日ヨリコレヲ施行ス】</p>
	<p>別紙 財團法人日本語教育振興會會計規程 (昭和十九. 三. 三一)</p>
	<p>第一章 總則</p>
	<p>第一條 本會ノ會計事務ニ關シテハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外本規程ノ定ムル所ニ依ル</p>
	<p>第二條 本會ノ會計年度ハ毎年四月一日ニ始リ翌年三月三十一日ニ終ル</p>
	<p>第三條 歳入及歳出ノ年度所屬區分ハ政府ノ歳入及歳出ノ年度所屬區分ニ依ル</p>
	<p>第四條 政府助成金、寄附金又資産ヨリ生ズル収入其ノ他一切ノ収入ヲ歳入トシ一切ノ經費ヲ歳出トス</p>
	<p>第五條 每會計年度ニ於ケル經費ノ定額ハ其ノ年度ノ歳入ヲ以テ支辯スベシ</p>
	<p>第六條 每年度所屬ノ収入及支出ノ出納ハ翌年度四月三十日限トス</p>
	<p>第二章 資産</p>
	<p>第七條 本會ノ資産ハ寄附金品竝ニ物件及其ノ他ノ収入ヨリ成ル</p>
	<p>第八條 資産ハ帳簿ヲ備ヘ其ノ現狀ヲ明瞭ナラシムベシ</p>
	<p>第九條 資産中其ノ一部ヲ基本財産ト為スコトヲ得</p>
	<p>第十條 資産ハ常務理事管理ノ下ニ總務部主事之ヲ保管ス現金ハ郵便官署若ハ確實ナル銀行ニ預ケ入レ、信託會社ニ信託シ又ハ國債若ハ確實ナル有價證券ヲ買入ルモノトス 前項ノ國債、有價證券ハ郵便官署又ハ確實ナル銀行ニ保護預ト為スベシ</p>
	<p>第三章 豫算及決算</p>
	<p>第十一條 理事長ハ毎年二月末日迄ニ次年度ノ歳入歳出豫算ヲ編成シ會長ノ裁定ヲ受</p>

會議名・年月日・時・場所 (本文)

クベシ

臨時必要アルトキハ理事長會長ノ裁定ヲ經テ豫算ノ追加又ハ更正ヲ為スコトヲ得

第十二條 歳入歳出豫算ハ款項目ニ區分シ成ルベク經費ノ性質目的ヲ明ニスベシ

第十三條 經費ハ豫算ノ款項ニ定メタル目的以外ニ之ヲ使用スルコトヲ得ズ但シ理事長ニ於テ必要アリト認ムル場合ニ限り各項目ノ金額ヲ彼此流用スルコトヲ得

第十四條 避クベカラザル事情ノ為當該年度内ニ支出ヲ了セザル費用ニ附テハ其ノ經費ヲ次年度ニ繰越使用スルコトヲ得

前項ノ繰越ヲ必要トスルトキハ次年度五月末日迄ニ繰越ヲ要スル項目ノ豫算額、支出済額及不用額、繰越使用額ヲ記載シタル繰越計算書ヲ作成シ監事ノ承認ヲ受クベシ

第十五條 豫算ノ不足ヲ補フ為又ハ豫算外ニ生ジタル必要ノ費途ニ充ツル為豫備費ヲ設クベシ

第十六條 數年ニ亘ルベキ經費ノ支出ハ繼續費ト為スコトヲ得

第十七條 理事長ハ毎年六月末日迄ニ豫算ノ様式ニ從ヒ前年度ノ決算ヲ調製 (ママ) シ基本財産其ノ他ノ資産ノ計算ト共ニ監事及會長ノ承認ヲ經ベシ 第十二條ノ規定ハ決算ニ之ヲ準用ス

第十八條 決算ノ結果歳計剩餘アル場合ハ翌年度ノ經費ニ之ヲ繰越スベシ但シ會長ノ裁定ヲ經テ臨時事業ノ財源又ハ歳入不足ノ補填ニ充用スル為其ノ一部ヲ積立ツルコトヲ得 前項ノ積立金ハ一般資金ト區分經理シ之ガ處分ヲ為サントスルトキハ會長ノ裁定ヲ經ルコトヲ要ス

第四章 収入及支出

第十九條 収入支出ハ總テ常務理事ノ決裁ヲ經、總務部主事之ヲ執行スルモノトス

第二十條 収入金アルトキハ直ニ収入伝票ヲ作成シ手續ヲ了シタル後銀行又ハ郵便官署ニ預入スベシ

第二十一條 支拂ヲ要スルトキハ支拂伝票ヲ作成シ手續ヲ了シタル後之ガ支拂ヲ為スベシ

第二十二條 經費ノ支拂ハ銀行小切手振出ノ方法ニ依リ常務理事ノ名儀ヲ以テ執行スルモノトス但シ俸給給料手當其ノ他現金ヲ以テ交附スルヲ便宜トスルモノハ此ノ限ニ在ラズ

第二十三條 隔地ノ債主ニ支拂ヲ要スルトキハ支拂場所ヲ指定シ當該銀行ヲシテ送金セシメ其ノ旨ヲ債主ニ通知スベシ但シ郵便為替又ハ振替貯金ノ方法ニ依ルコトヲ得

第二十四條 各種ノ講演會講習會打合會若ハ懇談會等ノ諸經費諸謝金ノ額又ハ其ノ都度支拂ヲ為スヲ便宜トスル經費ニ關スル資金ハ之ヲ前渡スルコトヲ得

第二十五條 前條ノ前渡ヲ受ケタル役員職員ハ事項終了後七日以内ニ支拂精算書ヲ提出スベシ

第二十六條 左ノ經費ハ概算拂ヲ為スコトヲ得

一、旅費

前項ノ概算拂ヲ受ケタル者ハ歸着後一週間以内ニ精算書ヲ提出スベシ

第二十七條 前渡金精算ノ為又ハ誤拂若ハ過拂金ノ返還金アリタルトキハ其ノ金額ハ之ヲ支拂ヒタル經費ノ定額ニ戻入スベシ但シ當該年度出納閉鎖期限迄ニ戻入ヲ了ラザルモノハ翌年度ノ歳入ニ受入ルベシ

第二十八條 収入金又ハ支拂金ニシテ一錢未滿ノ端數アルトキハ其ノ端數ハ之ヲ切捨ツ其ノ全額一錢未滿ナルトキハ之ヲ一錢トス

第二十九條 毎月分ノ収入支出ハ翌月十五日迄ニ其ノ計算書ヲ作成シ理事長ノ査閲ニ供スベシ

第三十條 収入支出ニ關スル書類ハ領収證其ノ他ノ證憑書類ヲ附シ決算ノ款項目ノ區分ニ從ヒ編纂保管スベシ

第三十一條 収入支出ハ何レモ帳簿ヲ備ヘ其ノ出納ヲ記帳スベシ

第五章 契約

第三十二條 賣買、貸借、請負其ノ他ノ契約ニシテ特ニ重要ナルモノニ附テハ總テ指名競争ニ附スベシ

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>前項以外ノモノニ附テハ隨意契約ニ依ルコトヲ得</p> <p>第三十三條 契約ヲ為サントスルトキハ契約ノ目的、履行期限、契約條項其ノ他必要事項ヲ記載シタル契約書ヲ作成シ理事長又ハ其ノ委任ヲ受ケタル者之ニ記名捺印スベシ但シ輕易ナルモノニ關シテハ之ガ作成ヲ省略スルコトヲ得</p> <p>第三十四條 指名競争ニ附セントスルトキハ成ルベク五人以上ノ入札者ヲ指定シ隨意契約ニ依ラントスルトキハ成ルベク二人以上ヨリ見積書ヲ徴スベシ</p>
	<p>第六章 物品</p> <p>第三十五條 圖書出版物ヲ除ク物品ノ保管ハ總主事管理ノ下ニ總務部主事之ガ事務ヲ執行スルモノトス</p> <p>第三十六條 圖書出版物ヲ除ク物品ノ出納ハ總テ總主事ノ決裁ヲ經總務部主事之ヲ執行スルモノトス</p> <p>第三十七條 圖書出版物ノ保管ハ總主事管理ノ下ニ事業部主事之ガ事務ヲ執行スルモノトス</p> <p>第三十八條 圖書出版物ノ出納ハ總テ總主事ノ決裁ヲ經事業部主事之ヲ執行スルモノトス</p>
	<p>別紙 財團法人日本語教育振興會給與規程 (昭和十九. 三. 三一)</p>
	<p>第一章 總則</p> <p>第一條 財團法人日本語教育振興會職員ノ俸給給料手當並ニ役員及職員ノ旅費ハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外本規程ノ定ムル所ニ依リ之ヲ支給ス</p> <p>第二條 本規程ニ於テ職員トハ總主事、主事、書記、研究員、事務員及傭人ヲ謂フ</p> <p>第三條 本規程ニ定ムルモノノ外理事長ハ必要アル場合給與ニ關スル内規ヲ定メ豫算ノ範圍内ニ於テ之ヲ支給スルコトヲ得</p>
	<p>第二章 俸給、給料、手當</p> <p>第四條 職員ノ俸給ハ別表第一號ニ依ル但シ研究員、事務員及傭人ノ給料手當ハ理事長別ニ之ヲ定ム</p> <p>第五條 職員ニシテ五年以上一級俸ヲ受ケ在職シ成績顯著ナル者ニハ特ニ別表第一號上欄ノ加俸ヲ給スルコトヲ得</p> <p>第六條 俸給給料手當ハ發令ノ翌日ヨリ之ヲ計算ス但シ日給者ニシテ新ニ採用セラレタルトキハ發令ノ當日ヨリ之ヲ計算ス</p> <p>第七條 年俸 (十二分ノ一) 及月俸ノ支給日ハ毎月下旬トス 日給者ニ在リテハ前月十六日ヨリ當月十五日迄ノ分ニ附前項ノ規定ヲ適用ス但シ三月十六日ヨリ同月末日迄ノ分ノ給料ニ附テハ適宜之ヲ支給ス</p> <p>第八條 年俸又ハ月俸ヲ受クル者退職又ハ死亡シタルトキハ當月分俸給給料又ハ手當ノ全額ヲ支給ス</p> <p>第九條 年俸又ハ月俸ヲ受クル者病氣ノ為出勤セザルコト九十日ヲ超ユルトキ及私事ノ故障ニ依リ出勤セザルコト三十日ヲ超ユルトキハ俸給給料又ハ手當ノ半額ヲ減ズ但シ職務ノ為傷【痍】ヲ受ケ若ハ疾病ニ罹リ又ハ理事長ニ於テ事情已ムヲ得ザルモノト認メタルトキハ此ノ限ニ在ラズ</p> <p>第十條 日給ヲ受クル者ノ給料手當ハ休日、忌引及父母ノ祭日ハ之ヲ支給シ病氣及私事ノ故障ニ依リ出勤セザルトキハ其ノ期間中之ヲ支給セス</p> <p>第十一條 俸給給料及手當ノ日割計算ハ其ノ月ノ現日數ニ依ル</p>
	<p>第三章 旅費</p> <p>第十二條 役員及職員會務ニ依リ本邦内ヲ旅行スルトキハ別表第二號ノ定額ニ依リ、本邦及外國、南洋諸島、關東州又ハ滿洲間ヲ旅行スルトキハ別表第三號ノ定額ニ依リ旅費ヲ支給ス</p> <p>第十三條 顧問、參與、評議員及事項囑託員ノ旅費額ニ關シテハ前條ノ定額ノ範圍内ニ於テ理事長別ニ之ヲ定ム</p> <p>第十四條 鉄道旅行ニハ鉄道賃、水路旅行ニハ船賃、陸路旅行ニハ車馬賃ヲ支給ス但シ會務ノ都合ニ依リ航空機ニ搭乘シタルトキハ其ノ賃金ノ實費ヲ支給ス</p> <p>第十五條 宿泊料ハ夜數ニ應ジ日當ハ日數ニ應ジテ之ヲ支給ス 水路旅行ニハ宿泊料ヲ支給セス但シ天災其ノ他已ムヲ得ザル事故ノ為上陸宿泊ヲ要シタル場合ハ此ノ限ニ在ラズ 食卓料ハ船賃ノ外別ニ食料ヲ要スル場合又ハ船賃ヲ要セザルモ食料ヲ要ス</p>

會議名・年月日・時・場所 (本文)

- ル場合ニ於テ夜數ニ應ジテ之ヲ支給ス
- 第十六條 會用ノ船車馬等に依リテ旅行スルトキハ鉄道賃、船賃、車馬賃ヲ支給セズ
- 第十七條 特別ノ事情ニ依リ定額ノ車馬賃ヲ以テ其ノ實費ヲ支辯シ難キ場合ニ於テハ實費額ヲ支給スルコトヲ得
- 第十八條 東京都内ノ出張ニ對シテハ鉄道賃及車馬賃ノ實費ヲ支給ス但シ特別ノ事由アルトキハ日當定額ノ半額及宿泊料ヲ支給スルコトヲ得
- 第十九條 赴任ノ場合ハ別ニ家族移轉旅費及移轉料其ノ他之ニ伴フ諸費ノ實費ヲ支給ス
- 第二十條 外國、南洋群島、關東州、滿洲國ニ赴任又ハ出張ヲ命ゼラレタル者ニハ別表第三號ノ支度料ヲ支給スルコトヲ得
前項ノ者ニシテ特別ノ事由アル場合ハ特ニ手當ヲ支給スルコトヲ得但シ手當ノ額ハ理事長其ノ都度之ヲ定ム
- 第二十一條 本邦ト外國、南洋群島、關東州又ハ滿洲國間トノ旅行ノ為ノ通過地ノ旅行ニ附テハ其ノ地域ニ於ケル旅行ニ附定メラレタル旅費ヲ支給ス
- 第二十二條 外國、南洋群島、關東州、滿洲國ヘノ赴任又ハ出張ニ關シ命ヲ受ケタル者其ノ出發前死亡シ又ハ旅行ノ必要ナキニ至リタルトキハ其ノ費消シタル移轉料其ノ他ノ諸費及支度料ノ全額以内ヲ支給スルコトヲ得
- 第二十三條 在勤又ハ旅行中死亡シタル場合ハ本邦内ニ在リテハ其ノ歸還旅費ニ相當スル金額ヲ外國、南洋群島、關東州、滿洲國ニ在リテハ別表第三號ノ死亡手當ヲ遺族ニ支給ス
- 第二十四條 年又ハ日ニ依リテ旅費ヲ區分計算スルノ必要アル場合ニ於テ其ノ區分判明ナラザルトキハ最近ノ到達地ニ達シタル日ヲ以テ其ノ路程ヲ區別シ計算ス
- 第二十五條 理事長必要アリト認ムルトキハ旅費ノ定額ヲ減ジ若ハ一定ノ渡切旅費ヲ支給シ又ハ旅費ノ一部若ハ全部ヲ支給セザルコトヲ得

附則

本規程ハ昭和十九年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

(別表)

第一號

區分	加俸	一級	二級	三級	四級	五級	六級	七級	八級	九級	十級
總主事	年1,200圓 以内	4,200圓	3,840圓	3,480圓	3,240圓	3,000圓	2,760圓	2,000圓			
主事 (年俸)	年900 以内	3,360	3,000	2,760	2,400	2,160	1,920	1,740	1,560	1,440	1,320
書記 (月俸)	月60 以内	160	135	115	100	90	80	70	60	55	50

備考 本表ハ職員ニシテ別ニ官職ヲ有スル者ニ附テハ之ヲ適用セズ

第二號

略 (*河路 注)

*區分(會長、副會長、理事・監事・總主事・主事、研究員、書記、事務員、備人)別に以下のそれぞれを定めたものだが、表が複雑でエクセルに移行するのが困難であるため。本資料では省略。

内地旅行ニ對スル鉄道賃、船賃、車馬賃、日當、宿泊料及食卓料
朝鮮、臺灣、樺太内旅行ニ對スル鉄道賃、船賃、車馬賃、日當、宿泊料及食卓料
朝鮮、臺灣、樺太内旅行ニ對スル支度料

第三號

略 (*河路 注)

*區分別に、

外國旅行ニ對スル鉄道賃、船賃、車場(ママ)賃、日當、宿泊料、食卓料、支度料及死亡手當、南洋群島、關東州、滿洲旅行ニ對スル鉄道賃、船賃、車馬賃、日當、宿泊料、食卓料、支度料及死亡手當、を定めたものだが、上記同様の理由で本資料では省略。

別紙 戰時勤勉手當支給内規

第一條 本會職員、事務員及備人ニシテ毎月一定ノ俸給、給料又ハ手當ヲ受ケ且常時勤務ニ服スル者ニハ時局ノ影響ニ依ル特別ノ事情存スル間俸給、給料又ハ手當ノ

會議名・年月日・時・場所 (本文)

一割ニ相當スル金額ノ戰時勤勉手當ヲ支給ス
 第二條 年俸又ハ月俸ヲ受クル者ニシテ私事ノ故障又ハ病氣等ノ為缺勤中ノ者ニ對シテハ其ノ俸給全額ノ支給ヲ受ケ得ル期間ニ限り戰時勤勉手當ヲ支給ス
 第參條 退職又ハ死亡シタルトキハ其ノ月分ノ戰時勤勉手當ハ其ノ全額ヲ支給ス
 第四條 本内規ニ定ムルモノノ外戰時勤勉手當ノ支給ニ附テハ俸給、給料又ハ手當支給ノ例ニ依ル
 附則
 本内規ハ昭和十九年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

別紙 日本語教育振興會臨時家族手當支給内規

第一條 本會職員及囑託ニシテ毎月一定ノ俸給給料又ハ手當ヲ受ケ且常時勤務ニ服スル者、事務員及傭人ニシテ左ニ掲グル扶養家族 (同一戸籍内ニ在リ主トシテ本人ノ収入ニ依リ生計ヲ維持スル者) ヲ有スル者ニハ當分ノ内其家族一人ニ附月額五圓ノ割合ヲ以テ臨時家族手當ヲ支給ス
 一、配偶者 (内縁關係ニ在ル者ヲ含ム)
 二、滿六十歳以上ノ直系尊族
 三、滿十八歳未滿ノ直系卑屬 (養子縁組ニ因ル者ニ附テハ法定推定家督相續人ニ限ル)
 四、滿十八歳未滿ノ弟妹 (弟妹ノ生計費ノ概ネ全額ガ當該職員ノ収入ニ依リ維持セラレ居ル場合ニ限ル)
 五、不具癱疾者

第二條 臨時家族手當ヲ受ケントスル者ハ臨時家族手當ニ關スル扶養家族届ヲ理事長ニ提出スベシ 扶養家族ニ異動ヲ生ジタルトキ亦同ジ
 第三條 臨時家族手當ノ支給ヲ受クベキ要件ヲ具備スルニ至リタル場合ハ届出ノ翌月ヨリソノ支給ヲ開始シ之ヲ缺クニ至リタル場合ハ事實發生ノ翌月ヨリ其ノ支給ヲ廢止ス
 第四條 退職若ハ死亡ノトキ又ハ私事ノ故障等ニ依リ俸給給料又ハ手當ノ支給ヲ受ケザルニ至リタルトキハ其ノ翌月ヨリ臨時家族手當ハ之ヲ支給セス

附則
 第五條 本内規ハ昭和十九年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
 第六條 本内規ニ依リ臨時家族手當ヲ受クベキ者ハ四月一日現在ニ依リ臨時家族手當ニ關スル扶養家族届ヲ四月三十日迄ニ理事長ニ提出スベシ
 前項ニ依リ届出ヲ為シタル者ニ對スル臨時家族手當ハ第三條ニ拘ラズ昭和十九年四月分ヨリ之ヲ支給ス

別紙 臨時家族手當ニ關スル扶養家族 (異動) 届

昭和 年 月 日

日本語教育振興會理事長 殿

扶養家族ノ氏名	生年月日	職業	續柄	不具癱疾ノ事實	扶養家族ノ収入		備考 (異動事由等)
					種類	月収額 (圓)	

別紙 財團法人日本語教育振興會圖書刊行特別會計規程 (昭和十九. 三. 三一)

第一條 本會ノ事業中【政府】助成金ニヨラザル圖書ノ刊行頒布ノ為運轉資金ヲ置キ圖書刊行特別會計ヲ設置ス
 第二條 本特別會計ハ事業ニ關スル収入及運轉資金ニ關スル収入ヲ以テ歳入トナシ事業ニ關スル支出ヲ以テ歳出トナス
 前項ノ運轉資金ハ【椎】名義雄ヨリ受ケタル金壹萬圓及之ヨリ生ズル収入並ニ事業上生ジタル益金トス
 第三條 収入及支出ハ總テ常務理事ノ決裁ヲ經ベシ
 第四條 總主事ハ毎月末日ニ於ケル資産及負債ノ状態ヲ示スベキ試算表ヲ作製スベシ
 第五條 理事長ハ毎年三月三十一日現在ニ於ケル損益ヲ明ニスルタメ期末ニ於ケル財

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>産目録、貸借對照表及損益計算書ヲ作製シ會長及監事ノ承認ヲ經ベシ 第六條 本規程施行上必要ナル細則及諸帳簿ノ様式並ニ勘定科目ハ理事長之ヲ定ム 附則 本規程ハ昭和十九年四月一日ヨリ之ヲ施行ス</p> <p>別紙 財團法人日本語教育振興會委任事項 (昭和十九. 三. 三一)</p> <p>左ニ掲グル事項ハ總主事【常務理事】ニ之ヲ委任ス 一、書記及事務員ノ事務分擔ニ關スルコト 二、事務員備人ノ進退身分並ニ服務ニ關スルコト 三、書記以下ノ休暇諸届ニ關スルコト 四、書記以下ノ出張ニ關スルコト 五、現金及有價證券ノ管理ニ關スルコト 六、物品及不動産ノ管理ニ關スルコト 七、圖書及出版物ノ管理ニ關スルコト 八、一件五百圓以下ノ營繕並ニ物品ノ購入修理及賣却ニ關スルコト 九、支拂義務確定經費ノ支出ニ關スルコト 十、收入事務ニ關スルコト 十一、其ノ他各部ニ屬スル輕易ナル事務ニ關スルコト</p>
財團法人 日本語教育振興會第三回理事會 昭和十九年四月七日(金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室	<p>一、出席者 近藤理事長 大岡理事 西尾理事 相良理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 第二回理事會協議要録 第三回理事會報告及議題</p>
	<p>一、協議事項</p> <p>イ 寄附行為改正ニ關スル件 本會ノ設立許可ニ關シ大東亞省ヨリ文部省教學局長宛照會セル所教學局中ニハ本會寄附行為第十一條ヲ改正シ「大東亞大臣」ノ次ニ「及文部大臣」ヲ加ヘテ兩省共管ナルコトヲ明カニスルヲ可トストノ意見アリ。本會理事會トシテハ財團法人設立後日尚淺キト兩省共管ノ事實ハ本會ノ機構ニ□シ明白ナルコト故コノ際トシテハ教學局ヨリノ回答中ニ右ノ趣旨ヲ記載スルニ留メ寄附行為ハ當分ソノママトナスコトニ意見一致シコノ旨教學局側ノ諒解ヲ得ルコトニ決定セリ</p> <p>ロ 常務理事及總主事委任事項ノ件 財團法人日本語教育振興會職制ヲ制定シタル上審議ヲナスコトトナレリ。</p> <p>ハ 會計規程ノ件 原案通り決定ス ニ 給與規程ノ件 原案通り決定ス ホ 戰時勤勉手當支給内規ノ件 原案通り決定ス ヘ 臨時家族手當支給内規ノ件 原案通り決定ス ト 明治大學豫科ヨリ講師派遣方依頼ノ件 明治大學豫科小林豫科長ヨリ本會宛ニ今秋卒業スベキ生徒ニ對シ毎週一回「大東亞ニ於ケル日本語教育」ノ講義ヲ行フタメ講師派遣方ノ依頼アリ。山口主事ヲ派遣スルコトニ決定セリ。</p>
	別紙 報告及議題
	<p>一、報告</p> <p>イ 三月二十三日附ヲ以テ申請セル本會財團法人設立登記ノ件ハ同日附ヲ以テ登記完了セリ ロ 【二月】二十五日附日振發【第】八八號ニヨル土地建物購入助成金下附申請書ハ却下セラレ更メテ四月一日附日振發第九三號ヲ以テ同文申請書ヲ大東亞省支那事務局ニ提出セリ</p>
	<p>一、議題</p> <p>イ 寄附行為改正ニ關スル件【(必要ノ生ジタル場合ニ行フ)】 ロ 常務理事【及總主事】委任事項ノ件 【職制ヲツクルコト(委任事項ヲ入ル)】 ハ 會計規程ノ件 ニ 給與規程ノ件 ホ 戰時勤勉手當支給内規ノ件</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>へ 臨時家族手当支給内規ノ件 ト 明治大學豫科ヨリ講師派遣方依頼ノ件 【山口主事】</p> <p>別紙 財團法人日本語教育振興會委任事項 (昭和十九、四、七)</p> <p>左ニ掲グル事項ハ常務理事ニ之ヲ委任ス</p> <p>一、事務員、傭人ノ進退身分ニ關スルコト 二、現金及有價證券ノ管理ニ關スルコト 三、一件五百圓以下ノ營繕、購入、賣却及經常費ノ支出ニ關スルコト 四、支拂義務確定經費ノ支出ニ關スルコト 五、收入事務ニ關スルコト 左ニ掲グル事項ハ總主事ニ之ヲ委任ス</p> <p>一、書記、事務員、傭人ノ事務分擔及服務ニ關スルコト 二、書記以下ノ休暇諸届ニ關スルコト 三、書記以下ノ出張ニ關スルコト 四、物品及不動産ノ管理ニ關スルコト 五、圖書及出版物ノ管理ニ關スルコト 六、其他各部ニ屬スル輕易ナル事務ニ關スルコト</p>
財團法人 日本語教育振興會第四回理事會 昭和十九年四月十四日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省教學局長室	<p>一、出席者 近藤理事長 大岡理事 西尾理事 相良理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事</p> <p>一、配布書類 第三回理事會協議要録 第四回理事會報告及議題 (附財團法人日本語教育振興會職制)</p>
	<p>一、協議事項</p> <p>イ 本會役職員職制ノ件 原案中左ノ條項ヲ訂正ノ上可決ス。 第四條 「職員ヲ指揮シテ」ヲ削除ス。 (二)ヲ削除シ (三)乃至 (七)ヲ (二)乃至 (六)ト改ム。 第五條 (一)「書記・事務員」ヲ「職員及」ト改ム (四)「輕易ナル常務」ヲ「事務」ト改ム</p> <p>ロ 役員詮衡ニ關スル件 次回詮衡ヲナスコトナレリ</p>
	<p>別紙 報告及議題</p> <p>一、報告 イ 四月十日午後二時國語課長室ニテ在佛印特派大使府勤務渡邊領事ノ佛印ニ於ケル日本語普及問題ニ關スル連絡懇談會アリ長沼總主事出席セリ 【ロ、サイゴンヨリ註文 (關野理事)】</p>
	<p>一、議題 イ 本會【役】職員職制ノ件 ロ 役員詮衡ニ關スル件</p>
	<p>別紙 財團法人日本語教育振興會職制 (昭和十九、四、一三)</p> <p>第一條 本會ニハ左ノ職員ヲ置ク 總主事 一名 主事 若干名 書記 若干名 研究員 若干名 事務員 若干名</p> <p>第二條 必要ニ應ジ囑託ヲ置ク 囑託ハ理事長之ヲ委囑ス 第三條 理事長ハ會長ノ命ヲ承ケ會務ヲ統轄シ左ノ事務ヲ掌理ス 一、事業ノ企畫立案ニ關スル事項 二、經理ニ關スル事項 三、理事長名ヲ以テスル【文】書ニ關スル事項 四、職員ノ身分ニ關スル事項 五、其他ノ會務</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>第四條 常務理事ハ理事長ヲ輔佐シ職員ヲ指揮シテ【ヲ】専ラ會ノ常務【ヲ】執行シ左ノ事務ヲ處理ス</p> <p>一、事務員・傭人ノ【進】退身分ニ關スル事項</p> <p>二、主事・研究員・囑託ノ服務ニ關スル事項</p> <p>三、現金及有價證券ノ管理ニ關【ス】ル事項</p> <p>四、一件五百圓以下ノ營繕・購入・賣却及經常費ノ支出ニ關スル事項</p> <p>五、支拂義務確定經費ノ支出ニ關スル事項</p> <p>六、收入事務ニ關スル事項</p> <p>七、其他ノ常務</p> <hr/> <p>第五條 總主事ハ會長之ヲ命ズ</p> <p>總主事ハ理事長ノ命ヲ承ケ職員ヲ指揮シ左ノ事務ヲ處理ス</p> <p>一、書記・事務員【職員及】・傭人ノ服務ニ關スル事項</p> <p>二、物品及不動産ノ管理ニ關スル事項</p> <p>三、圖書・出版物ノ管理ニ關スル事項</p> <p>四、其他各部ニ屬スル輕易ナル常【事】務</p> <p>第六條 主事ハ會長之ヲ命ズ</p> <p>主事ハ上司ノ指揮ヲ承ケ所管係員ヲ指【揮】シ事務ヲ分擔ス</p> <p>第七條 研究員ハ理事長之ヲ命ズ</p> <p>研究員ハ常務理事ノ指揮ヲ承ケ研究・調査ニ從事ス</p> <p>第八條 書記ハ理事長之命【ヲ】命ジ事務員ハ常務理事之ヲ命ズ</p> <p>書記・事務員ハ上司ノ命ヲ承ケ庶務ニ從事ス</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第五回理事會</p> <p>昭和十九年四月二十一日</p> <p>(金) 午前十一時ヨリ</p> <p>於文部省第五會議室</p>	<p>一、出席者</p> <p>大岡理事 西尾理事 相良理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事</p> <p>中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第四回理事會協議要録 第五回理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ 本會役員詮衡ニ關スル件</p> <p>審議未了ニツキ次回ニ引續キ行フコトナレリ</p> <p>ロ 比島警察隊ニ對スル文化講義ノ件</p> <p>大東亞省輔導室鈴木書記官ヨリ相良理事ヲ通ジ五月一日ヨリ開催セラルベキ比島警察隊ニ對スル文化講義ノ講師斡旋方依頼アリ協議ノ結果西尾、秋山、丸尾、三氏ノ候補者ヲ擧ゲ長沼常務理事ヨリ鈴木書記官ニ連絡スルコトナレリ</p> <p>別紙 報告及議題</p> <p>一、報告</p> <p>イ 四月十三日大政翼贊會興亞總本部主催【ノ】興亞教育輔導事業協議會ニ長沼常務理事出席ス</p> <p>ロ 四月十八日四月十六日附支司第四二五號ヲ以テ大東亞省支那事務局ヨリ本會會長宛會館及附屬土地購入費補助トシテ金貳十五萬圓交附方ノ指令ヲ【四月十八日】受ケタリ。</p> <p>【ハ 用紙 農商省今村事務官 指令十萬ポンド近着 陸軍ヨリ六萬ポンド既着】</p> <p>一、議題</p> <p>イ 本會役員詮衡ニ關スル件</p> <p>ロ 其ノ他</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第六回理事會</p> <p>昭和十九年四月廿八日</p> <p>(金) 午前十一時ヨリ</p> <p>於文部省第二會議室</p>	<p>一、出席者</p> <p>大岡理事 釘本理事 西尾理事 相良理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事</p> <p>中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第五回理事會協議要録 第六回理事會報告及議題 (附日本語教育振興會役員名簿原案)</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ 本會役員詮【衡】ニ關スル件</p> <p>審議未了ニツキ【次回】引續キ行フコトナレリ</p> <p>ロ 學習日本語定價ニ關スル件</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	印刷原價ノ昂【騰】ニヨリ學習日本語四種各一万部ノ單價ハ約七錢三厘トナリ定價十錢トシ日配ヲ通ジテ配給スル時ニハ每號約三百五十圓ノ缺損トナルモ南方地域ニ於ケル經【濟】事情ハ價格ノ低廉ナルヲ必要トスルヲ以テ缺損ノ填補ハ【助成金ニヨリタシ】別途考慮スルコトトシ定價金十錢ト決定ス
	別紙 議題及報告
	一、報告
	一、四月二十二日財團法人日本語教育振興會設立登記届書(登記謄本添附)ヲ東京都長官經由ノ上大東亞大臣宛提出セリ 一、豫テ南方諸地域ニ出張中ナリシ理事釘本久春氏ハ四月二十二日歸京セラル 一、四月二十日、二十一日ノ兩日午後一時半ヨリ文部省第二、第四會議室ニ於テ教科書調査會第四部會開催セラレ支那向日本語入門、成人用速成日本語讀本上、下及南方向日本語教本卷四、五、六、中等學校用日本語教本卷四合計六【七】冊ヲ審議、全部可決セラレタリ
	一、議題
	イ 本會役員詮衡ニ關スル件 ロ 其他 【學習日本語定價ノ件 雜誌】
	(注：以下名簿原案は手書き、謄写版印刷)
	別紙 日本語教育振興會役員名簿 原案 ○顧問 ○評議員 ●監事
	會長 文部大臣 子爵 岡部長景 副會長 文部次官 菊池豊三郎 大東亞次官 山本熊一 理事長 文部省 教學局長 近藤壽治 常任理事 文部省 國語調査官(國語課長) 大岡保三 文部省 圖書監修官 釘本久春 大東亞事務官 相良惟一 大使館東亞省調査官 關野房夫 大東亞書記官(南方事務局政務課長) 東光武三 長沼直兄 西尾 實 大東亞書記官(支那事務局司政課長) 根道廣吉
	理事 ○陸軍省軍務局軍務課員陸軍少佐 松尾次郎 一宮房治郎 ○海軍省教育局海軍大佐 鹿江 隆 ○文部省教學官(總務局涉外課長) 高木 覺 ○國際文化振興會常任常務理事 黒田 清 ○大東亞事務官(滿洲事務局勤務) 腰原 仁 ○ 松尾長造 ○大東亞事務官(總務局總務課勤務) 宇山 厚 ○文部省教學官(教學局教學課長) 原 元助 ○情報局情報官(對外事業課長) 根岸 國義 ○文部事務官(會計課勤務) 田中 彰 ○日華學會理事 近澤道元 ○大東亞調査官陸軍大佐(支那事務局總務課長) 堂脇光雄 ○國際學友會常【專】務理事 渡辺知雄【竹内寛】 ○文部事務官(總務局資材課長) 山崎 高 監事 ●文部書記官(會計課長) 柴沼 直 ●大東亞書記官(會計課長) 華山親義
	顧問 東亞同文會副會長 阿部信行 ○臺北帝國大學總長 安藤正次 ○大東亞省滿洲事務局局長 今吉敏雄 ○特命全權公使 岩崎清宜 ○大東亞省支那事務局局長 杉原荒太

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	東京帝國大學名譽教授	宇野哲人
	○特命全權大使	梅津美治朗
	每日新聞社長	奥村信太郎
	東亞研究所副總裁	大藏公望
	九州帝國大學名譽教授	春日政治
	○青年文化協會理事長	河原春作
	○南洋協會會長	兒玉秀雄
	東亞同文會會長	近衛文麿
	○特命全權大使	澤田廉三
	○海軍次官	澤本頼雄
	○日本放送協會會長	下村 宏
	○特命全權公使	鹽澤清宜
	東京帝國大學名譽教授	鹽谷 温
	讀賣新聞社長	正力松太郎
	京都帝國大學名譽教授	新村 出
	○大東亞省總務局長	竹内新平
	○特命全權大使	田尻愛義 宇佐美珍彦
	○特命全權大使	谷 正之
	○東亞同文會理事長	津田靜枝
	○特命全權大使	坪上貞二
	衆議院議員	鶴見祐輔
	○	徳川義親
	○陸軍次官	富永恭治
	○大日本帝國教育會會長	永井柳太郎
	○國際文化振興會理事長	永井松三
	○教科用圖書調查會第參部長 子爵	野村益三
	○教學練成所長	橋田邦彦
	教科用圖書調查會第二部長	林博太郎
	○日本出版文化協會會長	久富達夫
	○國語教育學會會長	藤村 作
	○文部省總務局長	藤野 惠
	同盟通信社社長	古野伊之助
	東京文理科大學名譽教授	保科孝一
	國語審議會副會長男爵	穂積重遠
	○大使館參事官	松村 隼
	外務次官	松本俊一
	○大東亞省南方事務局長	水野伊太郎
	○國語協會副會長	南 弘
	○國際學友會理事長	宮川米次
	○特命全權大使	村田省三
	○情報局次長	村田五郎
	朝日新聞社長	村山長舉
	神宮皇學館大學長	山田孝雄
	帝國美術院會員	山本勇造
	○特命全權大使	芳澤謙吉
	京都帝國大學名譽教授	吉澤義則
	ビルマ協會々長	井上三郎
	國際學友會事務理事	矢田部保吉
	東亞學校教授	有賀憲三
	文部書記官	有光次郎
	早稻田大學教授	五十嵐力
	○情報局情報官	井澤 實
		石黒 修

評議員

會議名・年月日・時・場所 (本文)

文部省圖書監修官	石黑魯平
東京帝國大學教授	石森延男
京都帝國大學助教授	市河三喜
國學院大學教授	泉井久之助
教科用圖書調查會委員	今泉忠義
東京高等師範學校教授	入江俊郎
	魚返善雄
	大出正篤
	大西雅雄
朝鮮總督府學務局長	大野謙一
同盟通信社社會部長	大屋久壽雄
	岡本千万太郎
	尾崎士郎
東京帝國大學教授	小幡重一
慶應義塾大學教授	折口信夫
京都帝國大學教授	澤瀉久孝
東京高等師範學校教授	垣内松三
北京教育總署總編審	冊藤詢次朗
臺灣總督府編修官	石井權三
○教科用圖書調查會委員	今園國貞
○農商事務官	今村 等
奈良女子高等師範學校教授	木枝増一
	金田一京助
東京高等師範學校校長	熊澤 龍
毎日新聞社文化部長	黑崎貞次郎
	黑野政市
京城帝國大學助教授	小林英夫
東北帝國大學教授	小林好日
東亞同文書院教授	坂本一郎
九州帝國大學教授	佐久間鼎
陸軍省軍務局長陸軍少將	佐藤賢了
	佐藤春夫
文部省教學官	志田延義
朝鮮總督府編輯官	島田牛雅
東京帝國大學教授	島津久基
讀賣新聞社文化部長	清水彌太郎
○東京文理科大學教授	神保 格
日本放送協會業務局長	矢野謙次郎
夫使館調查官	曾我孝之
朝日新聞社學藝部長	多賀 博
九州帝國大學教授	高木市之助
東京帝國大學教授	高田眞治
○大政翼贊會文化部長	高橋健二
國學院大學教授	武田祐吉
	谷川徹三
○文部省圖書監修官	鹽野直道
青年文化協會事務理事	豐田久二
日語文化協會常務理事	松宮一也
國語協會理事長	梁田欽次郎
○日本出版會書籍部長	齋藤 暁
	野尻清彦
○大日本□□教育會總務部長	別所孝太郎
○東京放送協會亞州部長	澤田進之丞

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	(順不同)
財團法人 日本語教育振興會第七回理事會 昭和十九年五月五日(金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室	一、出席者
	近藤理事長 大岡理事 釘本理事 西尾理事 相良理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事
	一、配布書類
	第六回理事會協議要録 第七回理事會報告及議題
	一、協議事項
	イ、役員詮衡ニ關スル件 本會役員及顧問評議員詮衡ノ結果別紙ノ如ク決定シ。 夫々手續ヲトルコトニ決定セリ。
	ロ、研究委囑ノ件 左ノ研究委囑ヲナスコトニ決定セリ 一、題目「漢字ノ訓讀ノ研究」 一、要項 漢字約四千字ニツキテ夫々ノ訓讀ヲ研究シ例證ヲ附スルコト。 一、研究者 伊藤彌太郎氏 一、期間 本年度中ニ完了ノコト但シ大体四期ニ分チ研究結果ノ報告ヲナスコト。 一、手當 金壹千圓也(一字二十五錢ノ割) 研究完成ノ際之ヲ給與ス但シ報告毎ニ分割給與ヲナスモ差支ナシ
	ハ、南方諸地域ニ於ケル日本語教育ノ状態ニツキテ 釘本理事ヨリ南方【諸】地域ニ於ケル日本語教育ノ状態ニツキテ報告アリ。現地ノ要望トシテノ重ナルモノ左ノ如シ 一、教科書ノ定價ヲ低廉ナラシムルコト 一、陸軍軍政地區海軍軍政地區ニ於テ使用スル教科書ハ教科書ノ表題又ハ適當ノ【個】所ニソノ旨ノ【明】記ヲナスコト 一、教科書ヲ多量ニ送附スルコトニ極力努ムルコト 一、尚海軍分ノ輸送ニ關シテハ海軍省南方政務部ト打合スコト 一、本會ヨリ研究者ヲ現地ニ派遣シ、現地人ノ研究者ヲ招致シ優秀ナル指導【者】ヲ養成スルコト
	別紙 報告及議題
	一、報告
	イ 四月二十日附官文第一二三一號ヲ以テ大東亞省文書課長ヨリ本會會長宛抗日教科書及教育關係圖書一部(約三千三百冊)ノ寄附【方】通牒アリ。四月三十日整理ニ着手シ目下整理中ナリ ロ 四月廿八日日振發第九五號ヲ以テ本會理事長ヨリ大東亞大臣宛財團法人日本語教育振興會會長認可申請書ヲ東京都長官經由ノ上提出セリ 【經由ハ重要書類ノミ】
	一、議題
	イ 役員詮【衡】ニ關スル件 ロ 研究委囑ノ件【一伊藤彌太郎氏一漢字訓讀研究(普通・特殊文例四〇〇〇字)一千圓(四期ニ分ツテ)】 ハ 其他【一大東亞地圖地名記入(表記)ジャワ 小學校三〇〇万部イル。ヤスクホシイ】 【◎釘本氏 報告 ○教科書定價ニ關スルコト ○指導者養成ト派遣 日本人⇔現地人】
	(注：以下名簿原案は手書きの謄写版)
	別紙 日本語教育振興會役員詮衡原案 (顧問二十八名評議員三十九名) (備考 ○を附したるは顧問、其他は評議員なり)
○文部省總務局長 藤野 惠 文部省教學官(教學局教學課長) 原 元助 文部省教學官(總務局涉外課長) 高木 覺 文部事務官(總務局資材課長) 山崎 高 文部書記官 久保田藤磨 文部事務官(會計課勤務) 田中 彰 文部省圖書監修官(第一編輯課長) 井上 昶 文部省圖書監修官(第二編輯課長) 鹽野直道	

會議名・年月日・時・場所 (本文)

文部省圖書監修官	湯澤幸吉郎
○教學練成所長	橋田邦彦
○教科用圖書調查會第參部長子爵	野村益三
教科用圖書調查會委員	今園國貞
教科用圖書調查會委員	松宮彌平
○大東亞省總務局長	竹内新平
○大東亞省支那事務局長	杉原荒太
○大東亞省南方事務局長	水野伊太郎
○大使館參事官	松村 隼
夫東亞調查官陸軍大佐 (支那事務局總務課長)	堂脇 光雄
大東亞事務官 (總務局總務課勤務)	宇山 厚
大東亞事務官 (滿洲事務局勤務)	腰原 仁
夫使官 調查官	丁字 尚
夫使官 調查官	麓 保孝
夫使官 調查官	高山行勇
夫東亞省練成官	吉田三郎
○陸軍次官	富永恭治
陸軍省軍務局軍務課員陸軍少佐	松尾次郎
○軍政顧問	砂田重政
○海軍次官南方政策部長	澤本頼雄
海軍省教育局海軍大佐	鹿江 隆
情報局部長	井口貞夫
情報局情報官 (對外事業課長)	根岸國義
情報局情報官	井澤 實
關東局在滿教務部編修官	久世誠一
農商事務官	今村 等
○特命全權大使	坪上貞二
○特命全權大使	村田省三
○特命全權大使	谷 正一
○特命全權大使	芳澤謙吉
○特命全權大使	澤田廉三
○特命全權公使	岩崎清宜
○特命全權公使	宇佐美珍彦
○特命全權公使	鹽澤清宜
大政翼贊會文化部長	高橋健二
在盤谷日本文化會館長	柳澤 健
在佛印日本文化會館長	橫山正幸
○東亞同文會理事長	津田靜枝
○ビルマ協會會長	井上三郎
○南洋協會會長	兒玉秀雄
國際學友會專務理事	竹内 寛
日華學會理事	近藤道元
○青年文化協會理事長	河原春作
善隣協會理事長	大島 豊
國際文化振興會專任常務理事	黒田清
大日本育英會專務理事	松尾長造
大日本教育會總務部長	別所孝太郎
○國語協會副會長	南 弘
○國語教育學會會長	藤村 作
臺北帝國大學總長	安藤正次
東京文理科大學教授	神保 格
日本放送協會會長	下村 宏
日本放送協會教養部長	水川清一

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>日本放送協會報道部長 横山重遠 日本放送協會亞州部長 澤田道長 ○日本出版會會長 久富達夫 日本出版會專務理事 留岡清男 日本出版會業務課長 永井茂弥 日本出版會書籍部長 齋藤喃 ○ 侯爵 德川義親 大政翼贊會興亞總本部 山口喜一郎</p> <p>追記 軍需省軍需官 森崎 尙一顧問中に軍需省關係者一名を増加する豫定ナリ (評議員追加三名) 日本放送協會國際局長 武藤義雄 國語學會長 橋本進吉 興亞同學院 專務理事 大屋 源幸</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第八回理事會 昭和十九年五月十二日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省教學局長室</p>	<p>一、出席者 近藤理事長 大岡理事 西尾理事 相良理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事</p>
	<p>一、配布書類</p>
	<p>第七回理事會協議要録 第八回理事會報告及議題</p>
	<p>一、協議事項</p>
	<p>イ 日本語讀本増刷ノ件 日本語讀本卷一、二、三、各二万冊宛増刷スルコトニ決定ス。</p>
	<p>ロ 雜誌日本語印刷代ノ件 出版整備ノタメ【ニヨリ】從來契約セル教化(ママ)圖書株式會社ハ株式會社有朋堂ニ合同ノ【セル】タメ雜誌日本語印刷ノ事ハ川口印刷株式會社ニ引繼ガルコトトナレリ、改メテ川口印刷株式會社ト契約ヲナスコトトナレリ。而シテ現下ノ物價狀態ニ基キ印刷代一冊分三十一錢三厘(一冊八十四頁トシテ)トナリ。定價三十錢ニテハ缺損トナルモ同誌ノ使命ニ鑑ミ、ソノ必要度益々増加スル現狀ニツキ敍上三十一錢三厘ヲ以テ契約スルコトニ決定セリ。</p>
	<p>ハ 大東亞地圖挿入地名ノ件 小委員會ヲ設置シ別紙原案ノ審議ヲナスコトトナレリ。</p>
	<p>ニ 本會役員及顧問評議員ニ關スル件 左ノ如ク變更ヲナスコトニ決定ス イ 國語學會長 橋本進吉氏ヲ顧問ニ追加ス ロ 評議員中 臺北帝國大學總長安藤正次氏及國語學會長橋本進吉氏ヲ削除シ、大東亞書記官鈴木【政】勝氏、東京帝國大學教授時枝誠記氏、國語審議會幹事長保科孝一氏ヲ追加ス。 尙前役員ニ對シテハ相當ノ禮ヲ盡シ、前會長及理事長ノ肖像ヲ額ニシナシテ之ヲ會館中ニ掲グルコト。</p>
	<p>別紙 報告及議題</p>
	<p>一、報告</p>
	<p>イ 大政翼贊會興亞總本部ニ於テハ「興亞教育補導講【演】會講演內容研究會」ヲ開催スルコトトナリソノ第一回研究會ヲ五月五日午後一時半ヨリ開會。本會ヨリ中島主事出席セリ尙右研究會ハ今後續開ノ豫定ナリ</p>
	<p>一、議題</p>
	<p>イ 日本語讀本増刷ノ件</p>
	<p>ロ 雜誌日本語印刷代ノ件</p>
	<p>ハ 其他 大東亞地圖挿入地名ノ件</p>
	<p>ニ 其他 【①昭和通商會社 小委員會借款十五萬圓(一ヵ年) 84頁一冊31.3 二万増刷セシモ日配註文 一、二、三「二万宛」 ②興亞教育會會報發行ト助成】</p>
	<p>別紙 財團法人日本語教育振興會役員名簿 (昭和十九年五月五日現在、五十音順)</p>
<p>會長 文部大臣 子爵 岡部長景</p>	

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	副會長 文部次官 菊池豐三郎 大東亞次官 山本熊一 理事長 文部省教學局長 近藤壽治 理事 文部省國語調查官(國語課長) 大岡保三 文部省圖書監修官 釘本久春 大東亞事務官 相良惟一 大東亞省調查官 關野房夫 大東亞書記官(南方事務局政務課長) 東光武三 〔常務理事〕 長沼直兄 西尾 實 大東亞書記官(文部事務局司政課長) 根道廣吉
	監事 文部書記官(會計課長) 柴沼 直 大東亞書記官(會計課長) 華山親義
	別紙 財團法人日本語教育振興會顧問及評議員名簿(昭和十九年五月五日現在、五十音順)
	顧問 特命全權公使 岩崎清宣 特命全權公使 宇佐美珍彦 南洋協會々長 兒玉秀雄 特命全權大使 澤田廉三 海軍次官 澤本頼雄 特命全權公使 鹽澤清宜 日本放送協會會長 下村 宏 大東亞省支那事務局長 杉原荒太 軍政顧問 砂田重政 特命全權大使 谷 正之 特命全權大使 坪上貞二 陸軍軍政顧問 侯爵 徳川義親 陸軍次官 富永恭治 教科用圖書調查會第三部長 子爵 野村益三
	教學練成所長 橋田邦彦 日本出版會々長 久富達夫 文部省總務局長 藤野 惠 國語教育學會會長 藤村 作 大使館參事官 松村素一(ママ) 大東亞省南方事務局長 水野伊太郎 國語協會副會長 南 弘 特命全權大使 村田省三 特命全權大使 芳澤謙吉 ビルマ協會々長 井上三郎
	評議員 臺北帝國大學總長 安藤正次 教科用圖書調查會委員 男爵 今園國貞 農商事務官 今村 等 大東亞事務官(總務局總務課勤務) 宇山 厚 善隣協會理事長 大島 豊 興亞同學院專務理事 大屋源幸
	海軍省教育局海軍大佐 鹿江 隆 文部書記官 久保田藤麿 國際文化振興會專任常務理事 黒田 清 大東亞事務官(滿洲事務局勤務) 腰原 仁 文部省圖書監修官(第二編修課長) 鹽野直道 東京文理科大學教授 神保 格 文部省教學局(總務局涉外課長) 高木覺

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>大政翼贊會文化部長 高橋健二 國際學友會專務理事 竹内 寛 文部事務官(會計課勤務) 田中 彰 日華學會理事 近澤道元 日本出版會業務局長 永井茂弥 情報局情報官(對外事業課長) 根岸國義 國語學會長 橋本進吉 文部省教學官(教學局教學課長) 原 元助 大政翼贊會興亞總本部實踐局長 藤田 進 大日本教育會總務部長 別所孝太郎 教科用圖書調查會委員 松宮彌平 陸軍省軍務局軍務課員陸軍少佐 松尾次郎 大日本育英會專務理事 松尾長造 日本放送協會國際局長 武藤義雄 軍需省軍需官 森崎(ママ) 文部事務官(總務局資材課長) 山崎 高 山口喜一郎 在盤谷日本文化會館長 柳澤 健 在佛印日本文化會館長 横山正幸 情報局部長 井口貞夫 情報局情報官 井澤 實 文部省圖書監修官(第一編修課長) 井上越 海軍省南方政務部長 東亞同文會教務部長</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第九回理事會 昭和十九年五月十九日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室</p>	<p>一、出席者 近藤理事長 大岡理事 釘本理事 西尾理事 相良理事 村松一等通譯官 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 一、第七回理事會協議要録 一、第八回理事會報告及議題</p> <p>一、大東亞協議事項 イ、大東亞省補導室トノ連絡懇談會ノ件 大東亞省補導室神吉參事官及鈴木書記官ト本會理事長並ニ理事トノ連絡懇談會開催ノコトハ留學生補導及日本語教育振興上甚ダ緊要ニツキ開催スルコトニ決定ス。</p> <p>別紙 報告及議題 一、報告 イ、五月十三日午後一時半ヨリ大政翼贊會興亞總本部ニ於ケル第二回興亞教育補導講演會内容研究會ニ中島主事出席ス ロ、五月十五日大東亞省ヨリ本會會館及附屬土地購入費補助金貳拾五萬圓ノ交附アリ。同日之ヲ受領ス。</p> <p>一、議題 イ、大東亞省補導室トノ連絡懇談會ノ件 ロ、其他 【神吉參事官 鈴木書記官 寺川調査官 並木調査官】</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第十回理事會 昭和十九年五月二十六日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省教學局長室</p>	<p>一、出席者 大岡理事 釘本理事 西尾理事 相良理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 第九回理事會協議要録 第十回理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項 イ、日語文化協會トノ協力ノ件 本會事業ノ性質上實驗學校ノ設置ハ豫テヨリノ要望ナリシガ、今般日語文化協會松宮彌平氏ヨリ本會トノ緊密ナル協力方希望シ來リシニヨリ、同協會所屬日語文化學校ニ</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>於テ實驗教授ヲナスコトトシ、本會ノ企畫指導ノ下ニ實驗學級ヲ編制シ實驗教授ヲ施行シ、ソレニ従事スル教師ノ俸給等(年額約二千圓)ヲ本會ヨリ支出スルコトニ致シタキ旨常務理事ヨリ説明アリ。協議ノ結果右ニ決定シ長沼常務理事ヨリ具体的交渉ヲ進ムルコトトス。</p> <p>ロ、日本出版協會ト本會トノ連絡懇談會ノ件 日本出版會ト本會トノ連絡懇談會ハ必要ニツキ開催スルコトニ決定ス。</p> <p>ハ、實際教授者懇談會及移動講演會ノ件 實際教授者懇談會ハ可成早ク之ヲ行フコトナレリ。 尚釘本理事ヨリ提案サレタル各學校等ニ於テ開催スル移動講演會ノ件ハ學校授業ノ現狀等ヲ調査ノ上總主事ニ於テ立案企劃ヲナスコトナレリ。</p> <p>別紙 報告及議題</p> <p>一、報告</p> <p>イ、本會研究部ニ於テ左記ノ講演會ヲ神田事務所ニ於テ行ヒ、職員及實際教育家ノ有志之ヲ聴講ス 五月八日 南方諸地域ニ於ケル日本語普及 釘本久春氏 午後一時ヨリ 五月二十五日 泰國ニ於ケル日本語問題 鈴木 忍氏 午後一時半ヨリ 同 佛印ニ於ケル日本語問題 □原英了氏</p> <p>ロ、昭和十九年五月十九日附一九織局第三六〇三號ヲ以テ農商省織維局長篠山千氏ヨリ本會會長宛昭和十九年度第一・四半期分海外向教科向教科書用紙二十一萬封度割當ノ通知アリタリ。</p> <p>一、議題</p> <p>イ、 日語文化協會トノ協力ノ件 ロ、 其他</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第十一回理事會 昭和十九年六月二日(金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第三會議室</p>	<p>一、出席者 近藤理事長 大岡理事 釘本理事 西尾理事 相良理事 村松一等通譯官 長沼常務理事兼總主事 中島主事 山口主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 第十回理事會協議要録 第十一回理事會報告及議題 (附昭和十九年度研究部第一次事業計畫。學習日本語一 フィリピン マライ ジャワ ビルマ各篇一部宛</p> <p>一、協議事項</p> <p>(イ) 昭和十九年度研究部事業ノ件 昭和十九年度研究部第一次事業計畫ニツキ長沼總主事ヨリ説明アリ。 審議ノ結果原案通り決定ス。</p> <p>(ロ) 書記採用ノ件 安野愛亮ヲ本會書記ニ採用スルノ件ハ決定ス</p> <p>(ハ) 比島軍政【司令】監部ヘ送附ノ教科書謄寫ノ件 比島伊東司政官ヨリ依頼ノ教科書中未刊ノモノハ成案決定次第本會ニテ經費負擔ノ上謄寫版トナシテ之ヲ送附スルコトニ決定ス</p> <p>(ニ) 雜誌日本語編輯者兼發行者名儀變更ノ件 福田主事退職ニ伴ヒ雜誌日本語編輯者兼發行者名儀ヲ變更スルノ必要アリ。長沼直兄ニ變更スルコトニ決定ス。 【在 フィリピン日本文化協會館設立ノ筈。】</p> <p>別紙 報告及議題</p> <p>一、報告</p> <p>イ 「學習日本語一」ハ フィリピン マライ ビルマ ジャワ各篇各一万冊印刷出來ニツキ五月二十七日出版届出ヲ完了セリ。</p> <p>ロ 文部省南方派遣日本語教育要員養成所第十一次講習會ハ五月三十日ヨリ千葉市浪花町東京帝大運動場寄宿舎ニ於テ開催シ【セラレ】本會役員中ヨリハ大岡 釘本 西尾 相良各理事及ビ長沼常務理事出講ノ筈ナリ</p> <p>一、議題</p> <p>イ 昭和十九年度研究部事業ノ件 ロ 其他</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
財團法人 日本語教育振興會第十二回理事會 昭和十九年六月九日(金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室	一、出席者 近藤理事長 大岡理事 釘本理事 西尾理事 相良理事 岡野理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事
	一、配布書類 第十一回理事會協議要録 第十二回理事會報告及議題
	一、協議事項 イ 理事及監事更迭ノ件 理事根道廣吉ノ理事委囑ヲ解キ監事ヲ委囑ス 監事華山親義ノ委囑ヲ解ク 大東亞省支那事務局司政課長大澤長俊ニ理事ヲ委囑ス 文部省【大臣】秘書官村上俊亮ニ理事ヲ委囑ス 右ハ本人ノ同意ヲ得テ手續ヲナスコトニ決定ス 【大臣ノ意向ヲ尋ネタ上回答】
	別紙 報告及議題
	一、報告 (イ) 六月六日長沼常務理事ハ基督教新生社團菅谷常務理事及三崎會館事務取扱山北三崎教會牧師ト會見敷地及家具ノ價格登記手續其他ニツキ懇談シ六月八日大詔奉戴式ヲ新會館ニ於テ舉行シ爾後本會ニ於テ使用スルコトトセリ 【家具付トス。地面狭小ノタメ。登記一大減省ノ許可不要。】
	一、議題 (イ) 理事及監事更迭ノ件 (ロ) 其他
財團法人 日本語教育振興會第十三回理事會 昭和十九年六月十六日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省教學局長室	一、出席者 大岡理事 釘本理事 西尾理事 相良理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事
	一、配布書類 第十二回理事會協議要録 第十三回理事會報告及議題
	一、協議事項 イ 組置原版保管料ノ件 大日本印刷株式會社ヨリ組置原版ガ相當期間ニ及ブ時ハ將來保管料ノ支拂ヲ要求スルコトモアルベケレバ豫メ諒解ヲ得タシトノ申入アリタル旨總主事ヨリ説明アリ。總主事ニ於テ適當ニ善處スルコトニ決定ス ロ 國民學校教科書殘本ノ利用ノ件 國民學校教科書中爾後使用セザル「カズノホン」「コトバノオケイコ」ハ相當量ノ殘本アリ。之ガ利用方ニツキ國民教育局水平局ヨリ提案アリタルトノ總主事ノ説明アリ。協議ノ結果直ニ之ヲ利用スルコトハ出來ザルモ可成利用スルヤウ考究スルコトトナレリ。 ハ 職員ノ給與方法ニ關スル件 諸物價騰貴ノ時下下級職員ニ對シ年末等ニ一時ニ手當ヲ支給スルヨリハソノ中ノ一部ヲ月々【二分ケテ】支給スル方【ガ】却ツテ本人等ノ生活實狀ニ即スルヲ以テ給與方法ヲカクノ如ク改メテハ如何トノ長沼常務理事ノ提言アリ。常務理事ニ於テ適當ニ處理スルコトニ決定ス。 【月額ヲ増シ 年末手當等ヲ減額ス】
	別紙 報告及議題
	一、報告 イ 昭和十九年六月七日附資總一四五號ヲ以テ文部省總務局長ヨリ本會長宛昭和十九年度第一・四半期分海外向日本語教科書用紙トシテ210,000封度割當ノ通牒アリ ロ 昭和十九年六月十日附支司第六四〇號ヲ以テ大東亞省支那事務局局長ヨリ本會理事長宛財團法人認可日本語教育振興會長ニ子爵岡部長景就任ノ件認可相成リタル旨ノ通牒アリ ハ 滿洲國ニ於ケル日本語普及ノ強化問題ニ關シ上京セル滿日文化協會理事杉村勇造氏ト懇談ノタメ大東亞省滿洲事務局ノ主唱ニヨリ連絡會ヲ六月十三日正午華族會館ニ

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>於テ開催シ大岡國語課長及長沼常務理事出席セリ 【日滿辭典】</p> <p>一、議題</p> <p>イ 組置原版保管料ノ件 【大日本印刷會社ヨリ要求】</p> <p>ロ 其ノ他 (イ) カズノホン 一 コトバノオケイコ 残本 處理</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第十四回理事會 昭和十九年六月二十三日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室</p>	<p>一、出席者 近藤理事長 大岡理事 西尾理事 相良理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 第十三回理事會協議要録 第十四回理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ 會館使用ニ關スル基督教新生社團ヨリ希望ノ件 三崎教會信徒總代四名ヨリ新生社團理事長宛概要左ノ如キ希望ヲ提出セル旨該理事長ヨリ申出アリ 1 禮拜堂ハ永久無償貸與セラレタシ 2 牧師室一、青年部室一、常時使用ヲ許可セラレタシ 3 日曜學校用トシテ教室ヲ貸與セラレタシ 4 禮拜堂ニ於テハ禁酒禁煙ヲ行ハレタシ 右ニ對シテハ【本會ニ支障ナキ限り】可成ソノ趣旨ニ副フヨウ考慮スルコト【トシコレラノ點ニツキテハ他ニ適當ナル方策ヲ講ズルコト】ニ決定ス</p> <p>ロ 出版廢止ニ關スル出版會通牒ノ件 ○常務理事 善處ノコト 出版會ヨリ本會ノ出版事業ノ廢止ヲ希望ノ旨スル旨ノ通牒アリ 本會トシテハソノ必要ヲ認メザルモ尚常務理事ニ於テ具體的折衝ヲナスコトニ決定ス</p> <p>ハ 秘密會 (人事ニ關スル事項) ヲ開ク</p> <p>別紙 報告及議題</p> <p>一、報告</p> <p>イ 六月十七日相良理事ヲ通シ昭和通商株式會社專務取締役堀内三也ヨリ本會基金トシテ金拾五萬圓也ノ寄附ヲ受ケタリ、依テ長沼常務理事ハ同日午後同社ヲ訪問シ不取敢謝意ヲ表シ六月十九日近藤理事長ハ相良理事、長沼常務理事ヲ帶同、堀氏ヲ訪問、謝意ヲ表シタリ</p> <p>ロ 六月二十一日長沼常務理事ハ海外同胞中央鍊會附屬海外【同胞】中央鍊成所ニ於テ日本語普及ニ關スル講演ノ後同會今村常務理事ト今後ノ提携方ニツキ協議セリ</p> <p>一、議題</p> <p>イ 出會館使用ニ關スル基督教新生社團ヨリ希望ノ件</p> <p>ロ 出版廢止ニ關スル出版會通牒ノ件 【別ニ覺書アリ。解決ノ方法有望】</p> <p>ハ ソノ他</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第十五回理事會 昭和十九年六月三十日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室</p>	<p>一、出席者 近藤理事長 大岡理事 釘本理事 西尾理事 相良理事 上杉大東亞局 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類 第十四回理事會協議要録 第十五回理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ 出版事業ニ關スル件 出版會ヨリ本會ヘノ出版事業廢止希望通牒ニ對シテハ前回理事會ノ決議ノ通り處置スルヤウ運ビツ、アルモ本會ノ事業ノ性質上文部省大東亞省及情報局間ニ於テ本會ノ出版事業ニ關シ明確ナル取極メヲナサル、ヤウ希望シタキ旨長沼常務理事ヨリ提言アリ全員ソノ必要ヲ認メカ、ル希望ヲナスコトニ意見ノ一致ヲ見タリ</p> <p>別紙 報告及議題</p> <p>一、報告</p> <p>イ、 本會理事關野房夫氏ハ公務ヲ以テ比島ニ向ケ六月二十日出發セリ</p> <p>ロ、 六月二十日附指令南行第一四五七號ヲ以テ大東亞大臣ヨリ本會會長宛昭和十九年度</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>南方補助金拾四萬圓也ノ内金參萬五千圓也交附ノ指令アリタリ。二十三日日振發第一〇七號ヲ以テ右請書及請求書ヲ提出セリ。</p> <p>ハ、「現代語法ノ諸問題」出來ニツキ六月十九日出版届出ヲ完了セリ。「現代敬語法」出來ニツキ六月二十七日出版届出ヲ完了セリ。</p> <p>ニ、本會會館及土地売買登記ハ豫テ下谷登記所ニ申請中ノ處六月二十二日附ヲ以テ完了シ六月二十七日長沼常務理事ハ新生社團代表者白鳥氏ト立會ノ上右書類ヲ受領セリ。</p> <p>ホ、昭和十九年度ニ印刷發行スベキ圖書ノ表紙用紙配給斡旋方ヲ六月二十三日附日振發第一〇五號ヲ以テ文部省教學局長宛申請セリ。</p> <p>一、議題</p> <p>イ、出版事業ニ關スル件</p> <p>ロ、其他</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第十六回理事會 昭和十九年七月七日(金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室</p>	<p>一、出席者</p> <p>近藤理事長 大岡理事 釘本理事 西尾理事 相良理事 上杉大東亞局 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第十五回理事會協議要録 第十六回理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、秘密會 基督教新生社團菅谷理事ヨリ申出ノ件ニツキ審議シ長沼常務理事ニ一任スルコトニ決定ス 【當分 見送り(謝禮)】</p> <p>ロ、評議員委囑ノ件 中野好夫氏ニ評議員ヲ委囑スルノ件ハ囑託スルコトニ決定セリ</p> <p>別紙 報告及議題</p> <p>一、報告</p> <p>イ、六月二十九日長沼常務理事ハ日本拓殖協會(近ク大東亞協會ト改稱ノ筈)ノ招待會ニ出席シ大東亞會館使用狀況ノ報告ヲ受ケタリ</p> <p>一、議題</p> <p>イ、新生社團菅谷理事申出ノ件 【白鳥氏ノ盡カニ對スル謝意表明ノ方法】 【ロ、會館 登録不要ヲ條件トシテ助成ヲ受ケタルモ、電話電燈線調査ノ要アリ。水道栓、水製ペンキ洗ヒオトシテペンキヲ塗ル要アリ。】</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第十七回理事會 昭和十九年七月十四日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室</p>	<p>一、出席者</p> <p>大岡理事 釘本理事 西尾理事 相良理事 上杉大東亞局 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第十六回理事會協議要録 第十七回理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ 研究費及事務員待遇ニ關スル件 今般文部省ニ於テ改正セラレタル俸給表ニ準ジテ夫々昇給ヲ計ルコトトシ長沼常務理事ニ一任セラレタリ</p> <p>別紙 報告及議題</p> <p>一、報告</p> <p>イ、七月七日昭和十九年度南方事務局關係本會補助金、金拾四萬圓也ノ第一回分交附金、金參萬五千圓也ヲ大東亞省ヨリ受領セリ。</p> <p>一、議題</p> <p>イ、 研究員及事務員ノ待遇ニ關スル件</p> <p>ロ、 其他 【文部省俸給表ニ準ジテ昇給を計ルコト。】</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第十八回理事會 昭和十九年七月二十一日</p>	<p>一、出席者</p> <p>近藤理事長 釘本理事 西尾理事 相良理事 上杉大東亞局 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
(金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室	一、配布書類 第十七回理事會協議要録 第十八回理事會報告及議題
	一、協議事項
	イ、日本出版會ニ提出スベキ書類ニ關スル件 日本出版會ヨリ本會ヘノ出版事業廢止希望通牒ニ對シスル回答原案ニツイテ審議シ 左ノ諸點ヲ特ニ明記スルヤウニトノ意見アリ。 他ハ原案通り決定シ長沼常務理事ニ一任シ回答ヲナスコトトナレリ。 記 (一) 日本語普及事業ノ實施ハ政府ト表裏一體ノ關係ニ立チ之ヲ統一ニ行フコトガ絶 對ニ必要ナルコト。 (二) 學習者ノ教科書、參考資料ハモトヨリ教授者ノ參考資料ヲモ包含セシムルコト。
	ロ、評議員委囑ノ件 ビルマ政府教育顧問小山隆氏及新任文部省教學局教學課長羽田隆雄氏ニ評議員ヲ委 囑スルコトニ決定ス。
	別紙 報告及議題
	一、報告
	イ 七月二十日午前十一時ヨリ本會研究部主催ニテ佛印文化會館員小關藤一郎氏ヲ中心 トシテ佛印ニ於ケル日本語教育ノ現状ニツキ研究會ヲ開催セリ ロ 七月二十日學習日本語ニ(マライ・フィリピン・ビルマ・ジャワ各篇)出來ニツキ出 版届出ヲ完了セリ。 【ハ ユニオン教會ニ關スル件 日本キリスト教團ニ無償提供方申請アリシモノノ如シ】
	一、議題
	イ 日本出版會ニ提出スベキ書類ニ關スル件 【ロ其他】
	別紙(太字のペン書き)
	拜啓時下益々御清祥之段奉賀候。陳者昭和十九年六月十九日附 貴輪業室發第四六號ヲ以テ御申越相成候 本會出版事業廢止方御希望ノ件ニツキ篤ト考 量相加へ候モ本會出版活動ハ全ク他ニ類例ナキ特殊使命ヲ有スルモノニ有之、 一、大東亞諸地域ニ日本語ヲ普及スルハ大東亞建設ノ基本的施策タルベキ事實ニ鑑ミソノ 實施ハ政府ト表裏一體ノ關係ニ立チ活動スルコトヲ絕對必要トスルコト、 二、大東亞諸地域ニ可及的迅速ニ日本語ノ普及セシムルハ現下ノ急務ナルト共ニ之ガ實施 ニ當リテハ國家ノ要請ヲ充分ニ考慮シ語彙語法、用字文体其他ニ於テ醇正ナル日本語 ヲ採擇シ悔ヲ將來ニ貽サザルヤウ周到ナル注意ノ必要トスルコト 殊ニ學習者ガ教科書ト併用スベキ參考資料ハ常ニ教科書ト緊密ナル連繫ヲ保チツツ 編纂スルヲ要スルコト。 三、異民族ニ普及セシムベキ日本語ニ關シテハ從來本部ニ於ケル研究極メテ尠ク從ツテ各 分野ニ互リ専門的研究ヲナシソノ成果ヲ直チニ應用實施スル必要アルコト 從ツテ 研究ト出版活動トハ分離スベカザルコト。 四、日本語普及ニ當リテハ各地域ノ狀況並ニ諸般ノ情勢ヲ考慮シ國策の見地ヨリ採算ヲ度 外視シ、企書之案並ニ配給ヲ考慮スルヲ要シ營利的の見地ヨリ之ヲナスベカラザルコト 從ツテ營利ヲ原則トスル民間業者ニ長期ニ亘リ依存スルハ不適當ナルコト。 五、本會ハ公益法人トシテ非營利的の見地ヨリ日本語普及事業ヲ遂行シ得ル狀況ニ在リ既ニ 文部大臣ノ指令ニヨリ文部省編纂日本語普及用圖書ノ一元的發行機關ナルト共ニ大 東亞省日本語普及用圖書ノ發行機關ナルコト 六 假ニ出版業者ニ委託スルモ現在以上ニ本會目的達成ニ寄與スル可能性尠ナルコト 尚本會出版物ハ從來ノ出版業者ノ活動範圍ト異ルヲ以テ之ヲ出版会社ニ委讓セザル モ民間業者ノ事業ヲ圧迫スル處尠キコト 等ノ理由ニヨリ本會出版事業ヲ廢止スルハ本會ノ目的達成ニ重大ナル支障ヲ來ス處可有 之ニツキ何卒別途御考慮相煩ハシ度此段御回答旁々得貴意候 敬具
財團法人 日本語教育振 興會第十九回理事會 昭和十九年七月二十八日	一、出席者 近藤理事長 大岡理事 釘本理事 西尾理事 相良理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事

會議名・年月日・時・場所	(本文)
(金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室	一、配布書類 第十八回理事會協議要録 第十九回理事會報告及議題
	一、協議事項
	イ 本會會館名稱ノ件 本會會館ノ名稱ニツキ協議シ「日本語會館」ト決定ス。 ロ 本會會館諸設備ノ件 本會會館ニ設置スルヲ要スル電話二本、交換臺及ビツノ他ノ諸設備並ニ文部省内事務室ニ電話一本設置其他必要【ナル】營繕【ハ其ノ】要アリト認メ常務理事ニ一任スルコトトナレリ ハ 日本語學振興會委員會ヨリノ研究委囑ノ件 長沼總主事ヨリ提出セル原案ニツキ審議シ可決ス。尚右研究ト並行シテ本會トシテ臺灣朝鮮等ニ於ケル國語政策【及中華民國ノ國語政策】等ノ研究ヲナスコトトナレリ。
	別紙 報告及議題
	一、報告
	イ 七月十四日附官人第二六九四號ヲ以テ大東亞大臣ヨリ本會會長宛大東亞省書記官大澤長俊ノ本會理事委囑ノ件許可セラル。 ロ 七月二十五日日本出版會ニ於ケル語學教育雜誌分科會ニ長沼總主事及齋藤主事出席セリ。
	一、議題
	イ 本會會館名稱ノ件 ロ 本會會館諸設備ノ件 ハ 日本語學振興委員會ヨリノ研究委囑ノ件
	別紙 日本語學振興委員會ヨリノ研究
	一、各國言語政策ノ研究 第一年度 ○ 佛印ニ於ケル佛國ノ國語政策 ○ 比島ニ於ケル【米】國ノ言語政策 第二年度 ○ 蘭印ニ於ケル和蘭ノ言語政策 ○ 馬來ニ於ケル英國ノ言語政策 第三年度 ○ 各國言語政策ノ總合的研究 二、日本語ト各異民族語トノ關係 (三ケ年繼續) ○ 學習者ノ母國語ノ日本語學習ニ及ボス影響 イ 學習者ノ誤リ易キ語音ノ地域別調査 ロ 學習者ノ誤リ易キ語法ノ地域別調査 三、日本語ノ發音 第一年度 ○ 日本語標準音ノ實驗音聲學及生理學的研究 第二年度 ○ 日本語標準音ト異民族語音トノ比較研究 第三年度 ○ 學習者ノ陥リ易キ訛音矯正法ノ研究
財團法人 日本語教育振興會第二十回理事會 昭和十九年八月四日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室	一、出席者
	大岡理事 大澤理事 相良理事 長沼常務理事兼總主事 上村主事
	一、配布書類
	第十九回理事會協議要録 第二十回理事會報告及議題
	一、協議要録
	イ、役員選任ノ件 菊池副會長ハ文部次官ヲ退任セラレ柴沼監事ハ文部省會計課長ヨリ轉任セラレタルヲ以テ新文部次官藤野惠氏及新會計課長伊藤日出登氏ヲソレゾレ理事及監事ニ推薦

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>シ藤野氏ニハ副會長ヲ委囑スルコトニ決定セリ。</p> <p>ロ、前役員ニ對スル謝意表明ノ件 菊池副會長及柴沼監事退任ニ際シテハ十分ナル謝意ヲ表明スルコトニ決シ實行方法ハ理事長及常務理事ニ一任スルコトナレリ。</p>
	別紙 報告及議題
	一、報告
	<p>イ 神田區三崎町日本語會館ヘノ移轉ハ七月三十一日ヨリ着手シ現在進行中ナリ。</p> <p>ロ 本會南方部昭和二十年度豫算ヲ八月一日大東亞省南方事務局ニ提出セリ。</p>
	一、議題
	<p>イ 役員選任ノ件</p> <p>ロ 前役員ニ關スル謝意表明ノ件</p> <p>ハ 其ノ他</p>
財團法人 日本語教育振興會第二十一回理事會 昭和十九年八月十一日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室	<p>別紙 報告及議題 (要録なし)</p> <p>一、報告</p> <p>イ、八月五日神田區岩本町ノ本會神田事務所ハ神田區三崎町日本語會館ニ移轉完了セリ。</p> <p>ロ、八月五日日本諸學振興委員會研究助成金請書ヲ文部省教學局教學課ニ提出セリ。</p> <p>【ハ、神田一六二八 (當分)</p> <p>二、學習日本語 2 配布</p> <p>【二 議題 ナシ】</p>
財團法人 日本語教育振興會第二十二回理事會 昭和十九年八月十八日 (金) 午後五時ヨリ 於日本語會館	<p>一、出席者</p> <p>近藤理事長 大岡理事 釘本理事 西尾理事 大澤理事 相良理事 關野理事 根道監事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第二十一回理事會協議要録 第二十二回理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>ナシ</p>
財團法人 日本語教育振興會第二十三回理事會 昭和十九年八月二十五日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第五會議室	<p>一、出席者</p> <p>近藤理事長 大岡理事 釘本理事 西尾理事 大澤理事 相良理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事</p> <p>一、配布書類</p> <p>第二十二回理事會協議要録 第二十三回理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、役員及顧問委囑ノ件 特命全權大使山本熊一氏ニ對シ本會副會長ノ委囑ヲ解キ顧問ヲ委囑シ、大東亞次官竹内新平氏ニ對シ本會副會長ヲ委囑スルコトニ決定ス。</p> <p>ロ、支那派遣教員ノ鍊成ニ關スル件 九月中旬施行豫定ノ支那派遣教員【鍊】成會ニ關【シ】本會ト興亞教育會ト連携協力セラレタ【シ】トノ相良大東亞事務官ヨリ申出アリ。 本會トシテハ之ヲ受諾シ本會所屬日本【語】會館ノ講堂及教室ヲ使用シテ講習鍊成ヲナシ、尚具體的事項ニ關シテハ長沼常務理事ト興亞教育會小倉主事トノ間ニ於テ連絡協議ヲナスコトニ決定ス。</p>
	別紙 報告及議題
	一、報告
	<p>イ 八月七日附十九織局第五六一三號を以テ農商省織維局長ヨリ本會會長宛昭和十九年度第二一四半期分海外向教科書用洋紙割當通牒アリタリ数量 (210,000封度) 決定ノ通牒アリタリ。</p> <p>ロ 八月二十二日附ヲ以テ本會事業補助金昭和十九年度第二回分支那部參萬五千圓及南方部參萬五千圓ノ各請求書ヲ本會會長ヨリ大東亞省支出官【宛】提出セリ。</p>
財團法人 日本語教育振興會第二十三回理事會 昭和十九年九月一日 (金)	<p>一、出席者</p> <p>近藤理事長 大岡理事 釘本理事 西尾理事 相良理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
午前十一時半ヨリ 於文部省教學局長室 * 順に通し番号をつけて ゆくと第24回。原本では 「第二十三回」となっていて、 以下通し番号がずれて いく。)	一、配布書類
	第二十二回理事會協議要録 第二十三回理事會報告及議題
	一、協議事項
	ナシ
	別紙 「第二十三回理事會報告及議題」
財團法人 日本語教育振興會第二十四回理事會 昭和十九年九月八日 (金) 午前十一時半ヨリ 於大東亞會館 * 通し番号では第25回	一、報告
	イ、八月二十三日附一九紙配一第一七二號ヲ以テ紙統制株式會社ヨリ四-六期分本會用々紙ノ扱洋紙店及數量ノ指定アリ。 大倉洋紙店 八四、〇〇〇封度 岡本商店 六三、〇〇〇封度 朝日紙業 六三、〇〇〇封度 合 計 二一〇、〇〇〇封度 【前年度分八一〇、〇〇〇封度】
	一、議題
	別紙 「第二十四回理事會報告及議題」 (要録なし)
	一、報告
財團法人 日本語教育振興會第二十五回理事會 昭和十九年九月十五日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省教學局長室 * 通し番号では第26回	イ、九月七日正午日本拓殖協會主催ニテ大東亞會館ニ於テ開催セル大東亞集會例會ニ長沼常務理事出席ス。
	一、議題
	イ、厦門總領事館ヨリ本會出版物【鱒】刻希望ノ件
	一、出席者
	大岡理事 釘本理事 西尾理事 大澤理事 相良理事 村松一等通譯官 長沼常務理事兼總主事 中島主事
財團法人 日本語教育振興會第二十六回理事會 昭和十九年九月二十二日 (金) 午前十一時半ヨリ 於第四會議室 * 通し番号では第27回	一、配布書類
	第二十四回理事會協議要録 第二十五回理事會報告及議題
	一、協議事項
	ナシ
	一、出席者
財團法人 日本語教育振興會第二十七回理事會 昭和十九年九月二十九日	近藤理事長 大岡理事 釘本理事 西尾理事 相良理事 村松一等通譯官 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事
	一、配布書類
	第二十五回理事會協議要録 第二十六回理事會報告及議題
	一、協議事項
	イ、日本語會館披露ノ件 十月十六日 (月) ヲ會館披露ノ豫定日トシテ諸準備ヲナスコトニ決定ス。(警戒警報發令中ニテモ行フコト) ロ、年末手當繰上支給ノ件 文部省及大東亞省ノ支給ニ準ジテ繰上支給ヲナスコトニ決定ス。
財團法人 日本語教育振興會第二十六回理事會報告及議題	別紙 「第二十六回理事會報告及議題」
	一、報告
	イ 九月十四日大東亞省ヨリ本會事業ニ對スル補助金第二回分 (南方部) 金參萬五千圓也ヲ受領ス。 【ロ 修了式一副會長 (文部次官) 出席 ハ 海軍省註文】
	一、議題
	イ、日本語會館披露ノ件 【臨時賞與支給ノ件 十月十六日頃 大東亞省 文部省ニ準ズ】
財團法人 日本語教育振興會第二十七回理事會報告及議題 (要録なし)	別紙 「第二十七回理事會報告及議題」 (要録なし)
	一、報告
昭和十九年九月二十九日	イ、九月二十三日午前十時ヨリ支那派遣教員第十一回鍊成修了式ヲ舉行シ、同日午後五時

會議名・年月日・時・場所	(本文)
(金) 午前十一時半ヨリ 於第三會議室 * 通し番号では第28回	ヨリ日比谷山水樓ニ於テ壯行會ヲ開催セリ。 一、議題 イ、 興亞造形文化聯盟ニ對スル日本語會館貸室料ノ件 【關野氏ト】 ロ、 語學教育研究所ヨリ申出ノ件
財團法人 日本語教育振興會第二十八回理事會 昭和十九年十月十三日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通し番号では第29回	一、出席者 大岡理事 釘本理事 村上理事 相良理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事 上村主事 一、配布書類 第二十七回理事會協議要録 第二十八回理事會報告及議題 一、協議事項 イ 興亞造形文化聯盟ニ對スル日本語會館貸室料ノ件 次回ニ引續キ協議ヲナスコトナレリ
財團法人 日本語教育振興會第二十九回理事會 昭和十九年十月二十日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省教學局長室 * 通し番号では第30回	一、出席者 近藤理事長 大岡理事 釘本理事 關野理事 西尾理事 村上理事 大澤理事 相良理事 村松一等通譯官 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事 一、配布書類 第二十八回理事會協議要録 第二十九回理事會報告及議題 一、協議事項 イ 役員選任及ビ顧問評議員變更ノ件 大東亞省南方事務局行政課長多田仁己氏ニ理事委囑方決定ス。國際學友會理事長 西春【彦】氏滿洲國公使ニ任官ニツキ評議員ヲ辭退セラレシヲ以テ、ソノ後任決定ヲ俟ツテ評議員委囑ノコトヲ決定スルコトナリ西氏ニハ顧問委囑ヲナスコトナレリ。海軍省南方政務部長海軍中將多田武雄氏ニ評議員委囑ノコトハ海軍側ノ意向ニヨリ、南方政務部員海軍大佐林孝善氏ニ變更方決定ス。大政翼贊會文化部長高橋健二氏ハ同會文化部ノ廢止ニヨリ評議員委囑ヲ取止ムルコトニ決定ス ロ 興亞造形文化聯盟ニ對スル貸室料ノ件 貸室料ヲ百五十圓トシ。其中百圓ハ當分同聯盟ニ寄附スルコトニ決定ス。 ハ 總主事南方出張ノ件 九月二十二日山本大使ヨリ大東亞省宛長沼總主事ヲ泰國ニ出張セシメラレタキ【旨】電報アリ。 協議ノ結果。情勢其他ノ事情ヲ研究ノ上決定スルコトナレリ。 別紙 「第二十九回理事會報告及議題」 一、報告 イ 昭和十九年十月十二日附支司第一〇九號ヲ【以】テ大東亞大臣ヨリ本會會長【宛】昭和十九年度第三回分【支那部】補助【金】(金參萬五千圓也)交附ノ件指令アリタリ ロ 十月十八日午前十時ヨリ本會ノ財團法人設立及ビ事務所移轉披露會ヲ本部事務所講堂ニ於テ開催シ國民儀禮後開會、開會ノ辭(理事長)事業報告(常務理事)會長挨拶、來賓祝辭(【永井造氏】)萬歲三唱(菊池【豐】三郎氏發聲)閉會ノ辭(常務理事)ノ順序ヲ以テ舉行シ、會後晝【餐】ヲ【供】セリ。來賓約八十名。 一、議題 イ 【役員選任ノ件及ビ】 評議員變更ノ件 ロ 興亞造形文化聯盟ニ對スル貸室料ノ件 【月一二〇圓(但 寄附)三〇圓(實費)】 ハ 總主事南方出張ノ件 【九一二二】
財團法人 日本語教育振興會第三十回理事會 昭和十九年十月二十七日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第四會議室 * 通し番号では第31回	一、出席者 近藤理事長 大岡理事 釘本理事 西尾理事 多田理事 關野理事 中島主事 上村主事 一、配布書類 第二十九回理事會協議要録 第三十回理事會報告及議題 一、協議事項 ナシ 別紙 「第三十回理事會報告及議題」

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	イ 十月二十六日午後一時ヨリ文部大臣官邸ニ於テ教學局主催國體護持ニ關スル國民教化方策懇談會開催セラレシニヨリ會長代理トシテ中島主事出席ス。
	一、議題
	ナシ
財團法人 日本語教育振興會第三十一回理事會 昭和十九年十一月十日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通し番号では第32回	一、出席者
	近藤理事長 大岡理事 釘本理事 關野理事 西尾理事 大澤理事 相良理事 村松一等通譯官 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事
	一、配布書類
	第三十回理事會協議要録 第三十一回理事會報告及議題
	一、協議事項
	イ 留學生教科書編纂ニ關スル件 大東亞省補導室寺川調査官ヨリ長沼常務理事ニ對シ留學生(滿支・蒙南方諸地域)教科書ヲ編纂スル件ニツキ内交渉アリタル經過ニツキ常務理事ヨリ報告アリ。協議ノ結果本會ニ於テハ該事業ニ協力スルコトニ決シ、正式ノ交渉ナリタル際更ニ協議ヲナスコトトナレリ。
	別紙 「第三十一回理事會報告及議題」
	一、報告
	イ 昭和十九年十月二十七日【(金)】午後五時ヨリ日本語會館ニ於テ海軍省南方政策部、文部省教學局、及本會間(マ)ニ於テ海軍主擔任地域用日本語教科用圖書ニ關スル打合せヲ開催セリ。 ロ 昭和十九年度本會事業補助金支那部第三回分金參萬五千圓也ヲ大東亞省ヨリ交附セラレ十月三十一日之ヲ受領セリ。
	一、議題
【留學生教科書編纂ニ關スル件】	
財團法人 日本語教育振興會第三十二回理事會 昭和十九年十二月一日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通し番号では第33回	一、出席者
	近藤理事長 大岡理事 釘本理事 關野理事 西尾理事 相良理事 多田理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事
	一、配布書類
	第三十一回理事會協議要録 第三十二回理事會報告及議題
	一、協議事項
	イ 本會事務部及研究部ノ事業進度ニ關スル件 長沼總主事ヨリ【別】紙報告書ニツキテ説明アリ、全員之ヲ諒會(マ)セリ ロ 評議員【及顧問】委囑及變更ノ件 國際學友會理事長武當【敏】彦氏ニ評議員委囑ヲナスコトニ決定ス。海軍省南方政務部海軍大佐林孝善氏ノ評議員委囑ノ件ハ海軍側ヨリ教育局【鹿】江大佐ガ評議員タレバ林氏ノ評議員タルノ要ナシトノ解答アリタレバ之ヲ中止スルコトトナレリ。評議員松尾長造氏ノ評議員【委囑】ヲ解キ顧問委囑ヲナスコトニ決定ス。 ハ出版會ヨリノ通牒ノ件 日本出版會ヨリ本會ノ出版權ハ之ヲ認ムルモ用紙ノ通常割當ハナサズ但シ出版毎ニ審査ノ上用紙ノ割當ヲナストノ通牒アリタル旨長【沼】總主事ヨリ報告アリ。全員之ヲ諒會(マ)セリ。
	別紙 「第三十二回理事會報告及議題」
	一、報告
	イ 昭和十九年度十一月八日附十九□局第七九四〇號ヲ以テ農商省【纖維】局長ヨリ本會會長宛昭和十九年度第三、四半期分海外向教科書用紙ノ割當數量147,000【封】度ニ決定相成リタル旨ノ通牒アリタリ。 ロ 十一月二十一日午後一時ヨリ文部省國語課長室ニ於テ大東亞掛地圖ニ記載スル地名ノ呼稱、表記等ニ關スル第一回委員會ヲ開催ス出席委員左ノ如シ 外務省 米内山書記官 文部省 大岡國語課長 渡邊監修官 松尾監修官 白石監修官 【補文】理大 内田教授 東大 多田助教 女高師 【釘】本教授 慶大 松本教授 (大東亞省相良事務官缺席)
	ハ 民國三十三年十一月六日附山東日研發第二十八號ヲ以テ華北日本語教育研究所山東

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	<p>支部長【兪】康德氏ヨリ本會宛左記山東支部總會ニ於ケル決議文ヲ送付シ來リタリ 決議文 日本語教育ノ重要ナルコト今日ヨリ大ナルハナキコノ決戦下大東亞ニ於ケル關係者 一同盟邦日本ノ首都東京ニ會シテ大東亞日本語教育者大會ヲ開催シ真摯ナル研究ノ 成果ヲ發表シ切【礎琢】磨ノ實ヲ舉グルハ最モ時宜ニ適シタル企ナリト思料ス依テ可 及的速カニ其ノ開催方促進サレタシ右決議ス 民國三十三年十一月四日 華北日本語教育研究所山東支部總會</p>																																																																																				
	<p>一、議題 イ 本會事業部及研究部ノ事業進度ニ關スル件 ロ 評議員委嘱及變更ノ件 ハ 出版會ヨリノ通牒ノ件 【理事長宛】 【ニ 日泰會話書出版助成 (南方事務局) 】</p>																																																																																				
<p>財團法人 日本語教育振興會第三十三回理事會 昭和十九年十二月十五日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第四會議室 * 通し番号では第34回</p>	<p>一、出席者 近藤理事長 大岡理事 釘本理事 關野理事 相良理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事</p> <p>一、配布書類 第三十三回(マ) 理事會協議要録 第三十四回(マ) 理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項 イ 新生社團事務室管理ノ件 新生社團ヨリ同團所有ノ事務室ヲ本會ニテ幹施セル佛印文化會館及興亞造形文化聯盟へ賃貸セラレタキ旨ノ希望アリタリトノ長【沼】常務理事ヨリ報告アリ協議ノ結果全員異議ナク決定セリ。 ロ 華北日本語【教育】研究所ヨリ研究期間延長申出ノ件 華北日本語教育研究所ヨリ本會ヨリ委嘱ノ研究期間ヲ更ニ一ヶ年延長方申出アリ協議ノ結果之ヲ許可スルコトナレリ。 ハ 研究部事業ノ件 原案通り可決ス ニ 日本語教育功勞者表彰ノ件 第一回ハ出口喜一郎氏ヲ本會ニ於テ表彰シ表彰狀及記念品(豫算五〇〇圓)ヲ贈與スルコトナシソノ實行ニ關シテハ長【沼】常務理事ニ於テ原案ヲ作成スルコトナレリ。</p>																																																																																				
	<p>別紙 日本語教育振興會 出版物 進度調査 (十九、一一、一五)</p>																																																																																				
	<table border="1"> <thead> <tr> <th>年度</th> <th>書名</th> <th>部数</th> <th>單價</th> <th>全額</th> <th></th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>十七(支)</td> <td>日本の年中行事</td> <td>10,000</td> <td>1</td> <td>1,500</td> <td>校了 目下印刷中</td> </tr> <tr> <td>〃(支)</td> <td>日本の紡織</td> <td>10,000</td> <td>15</td> <td>1,500</td> <td>校了 目下印刷中</td> </tr> <tr> <td>〃(支)</td> <td>日本の女性</td> <td>10,000</td> <td>15</td> <td>1,500</td> <td>原稿修正中(國語課)</td> </tr> <tr> <td>十八(支)</td> <td>成人用速成日本語読本 上</td> <td>20,000</td> <td>60</td> <td>18,000</td> <td>印刷準備中</td> </tr> <tr> <td>〃(支)</td> <td>同 下</td> <td>20,000</td> <td>60</td> <td>18,000</td> <td>同</td> </tr> <tr> <td>〃(支)</td> <td>日本語読本學習指導書卷三</td> <td>4,000</td> <td>100</td> <td>4,000</td> <td>同</td> </tr> <tr> <td>〃(支)</td> <td>同 卷四</td> <td>4,000</td> <td>100</td> <td>4,000</td> <td>同</td> </tr> <tr> <td>〃(支)</td> <td>日本文法教科書</td> <td>50,000</td> <td>50</td> <td>25,000</td> <td>發行済 (18, 10, 25)</td> </tr> <tr> <td>〃(支)</td> <td>大東亞地圖</td> <td>5,000</td> <td>15,000</td> <td>75,000</td> <td>下圖完了 地名確定 次第印刷</td> </tr> <tr> <td>〃(南)</td> <td>成人用速成日本語教本 上</td> <td>10,000</td> <td>80</td> <td>8,000</td> <td>發行済 (18, 12, 5)</td> </tr> <tr> <td>〃(南)</td> <td>同 下</td> <td>10,000</td> <td>80</td> <td>8,000</td> <td>刷上リ表紙未定</td> </tr> <tr> <td>〃(南)</td> <td>成人用速成日本語教本學習指導書 上</td> <td>3,000</td> <td>120</td> <td>3,600</td> <td>校了 印刷手配中</td> </tr> <tr> <td>〃(南)</td> <td>成人用速成日本語教本學習指</td> <td>3,000</td> <td>120</td> <td>3,600</td> <td>印刷準備中</td> </tr> </tbody> </table>	年度	書名	部数	單價	全額		十七(支)	日本の年中行事	10,000	1	1,500	校了 目下印刷中	〃(支)	日本の紡織	10,000	15	1,500	校了 目下印刷中	〃(支)	日本の女性	10,000	15	1,500	原稿修正中(國語課)	十八(支)	成人用速成日本語読本 上	20,000	60	18,000	印刷準備中	〃(支)	同 下	20,000	60	18,000	同	〃(支)	日本語読本學習指導書卷三	4,000	100	4,000	同	〃(支)	同 卷四	4,000	100	4,000	同	〃(支)	日本文法教科書	50,000	50	25,000	發行済 (18, 10, 25)	〃(支)	大東亞地圖	5,000	15,000	75,000	下圖完了 地名確定 次第印刷	〃(南)	成人用速成日本語教本 上	10,000	80	8,000	發行済 (18, 12, 5)	〃(南)	同 下	10,000	80	8,000	刷上リ表紙未定	〃(南)	成人用速成日本語教本學習指導書 上	3,000	120	3,600	校了 印刷手配中	〃(南)	成人用速成日本語教本學習指	3,000	120	3,600	印刷準備中
年度	書名	部数	單價	全額																																																																																	
十七(支)	日本の年中行事	10,000	1	1,500	校了 目下印刷中																																																																																
〃(支)	日本の紡織	10,000	15	1,500	校了 目下印刷中																																																																																
〃(支)	日本の女性	10,000	15	1,500	原稿修正中(國語課)																																																																																
十八(支)	成人用速成日本語読本 上	20,000	60	18,000	印刷準備中																																																																																
〃(支)	同 下	20,000	60	18,000	同																																																																																
〃(支)	日本語読本學習指導書卷三	4,000	100	4,000	同																																																																																
〃(支)	同 卷四	4,000	100	4,000	同																																																																																
〃(支)	日本文法教科書	50,000	50	25,000	發行済 (18, 10, 25)																																																																																
〃(支)	大東亞地圖	5,000	15,000	75,000	下圖完了 地名確定 次第印刷																																																																																
〃(南)	成人用速成日本語教本 上	10,000	80	8,000	發行済 (18, 12, 5)																																																																																
〃(南)	同 下	10,000	80	8,000	刷上リ表紙未定																																																																																
〃(南)	成人用速成日本語教本學習指導書 上	3,000	120	3,600	校了 印刷手配中																																																																																
〃(南)	成人用速成日本語教本學習指	3,000	120	3,600	印刷準備中																																																																																

會議名・年月日・時・場所 (本文)

	導書 下				
〃 (南)	日泰會話書	5,000	50	2,500	同
〃 (南)	日安南會話書	5,000	50	2,500	同
〃 (南)	日本語自習書 (泰語) 卷一	5,000	60	3,000	原稿翻譯準備中
〃 (南)	同 (安南語) 卷二	5,000	60	3,000	同
十九 (支)	中等日本語讀本卷一	10,000	70	7,000	原稿作成中
〃 (支)	同 卷二	10,000	70	7,000	同
〃 (支)	中等日本語讀本學習指導書 卷一	3,000	120	3,600	未着手
〃 (支)	日本語入門	30,000	100	30,000	挿畫出來次第印刷
〃 (支)	日本文化讀本 (日本の家)	10,000	60	6,000	原稿作製中
〃 (支)	同 (日本の科学)	10,000	60	6,000	同
〃 (支)	同 (日本の演劇)	10,000	60	6,000	同
一九 (支)	日本語會話書	20,000	75	15,000	未着手
〃 (支)	日本語教師必携	4,000	200	8,000	同
〃 (支)	日華學習辭典	20,000	120	24,000	原稿修正中 (11月末完了豫定)
十九 (南)	初等日本語教本 卷一	20,000	70	14,000	發行済 (18
〃 (南)	同 卷二	20,000	70	14,000	製本中
〃 (南)	同 卷三	20,000	70	14,000	同
〃 (南)	初等日本語教本學習指導書 卷一	5,000	100	5,000	印刷中
〃 (南)	同 卷二	5,000	100	5,000	同
〃 (南)	同 卷三	5,000	100	5,000	同
〃 (南)	中等日本語教本卷一	10,000	80	8,000	同
〃 (南)	同 卷二	10,000	80	8,000	同
〃 (南)	中等日本語教本學習指導書卷一	3,000	100	3,000	同
〃 (南)	同 卷二	3,000	100	3,000	同
〃 (南)	學習日本語 四十冊	1,000	15	6,000	二回發行済
	二回準備中 (八冊)				
〃 (南)	日泰學習辭典	10,000	120	12,000	泰語翻譯中
財團法人 日本語教育振興會第三十四回理事會					
昭和十九年十二月二十二日 (金) 午前十一時半ヨリ於文部省第三會議室 * 通し番号では第35回					
一、出席者					
近藤理事長 大岡理事 釘本理事 關野理事 大澤理事 相良理事 多田理事 西尾理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事					
一、配布書類					
第三十四回 (マ) 理事會協議要録 第三十五回 (マ) 理事會報告及議題					
一、協議事項					
イ 寄附金募集ノ件 本會事業【遂】行上寄附金募集ノ必要アル旨長【沼】總主事ヨリ説明アリ全員ソノ趣旨ニ賛成シ具体的計畫ニツイテハ【遂】ツテ協議スルコトナレリ					
別紙 「第三十四回理事會報告及議題」					
一、報告					
イ 十二月六日附東亞青協發第七號大東亞青少年團協力會事務局長ヨリ本會理事長宛ヲ以テ中華民國留學生日本語教授ノタメ十二月六日ヨリ十九日マデ本會教室借用方申請アリタリ。					
ロ 岡部會長ハ十二月十九日相良理事長【沼】常務理事ヲ帶同、昭和通商株式會社ニ同社社長堀三也氏ヲ訪問シ豫テ受領セル寄附金ニツキ謝意ヲ表シタリ。					
一、議題					
イ 寄附金募集ノ件					
財團法人 日本語教育振					
一、出席者					

會議名・年月日・時・場所	(本文)
興會第三十四回理事會 昭和十九年十二月二十九日(金)午前十一時半ヨリ於文部省第三會議室 *通し番号では第36回要録は「三十四回」、「報告及び議題」は「三十五回」とある。	近藤理事長 大岡理事 關野理事 村上理事 相良理事 西尾理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 上村主事
	一、配布書類
	第三十四回理事會協議要録 第三十五回理事會報告及議題
	一、協議事項
	イ 銀行預金口座設置ノ件 住友銀行神田支店ニ本會銀行預金口座ヲ新ニ開キタシトノ長【沼】總主事ヨリ提案アリ。開設スルコトニ決定ス。
	ロ 日語文化協會ニ研究委囑ノ件 1 日本文法教本ヲ用ヒテ實驗教授ヲナスコト 2 生徒ノ作文等ヲ材料トシテ文章作法ノ資料蒐集ヲナスコト 3 生徒ノ生活(政、經、文、理、工、醫、等)ニ即スルシタル日本語教材ノ研究併セテ右ニ關スル特殊語彙ノ研究 右三項目ニヨリ本年度本會支出金貳千圓(第十回【理事會】ニ於テ決定)ノ範圍内ニ於テ日語文化協會ニ研究委囑ヲナスコトニ決定ス
	ハ 人事ノ件 次回ニ協議スルコトトナレリ。
	別紙 「第三十五回理事會報告及議題」
	一、報告
	十二月二十六日日振發第一二三號ヲ以テ本會會長ヨリ文部大臣宛昭和十九年度事業「外國語トシテ觀タル日本語ノ研究」奨励金交附方ノ申請ヲナセリ。
一、議題	
イ 銀行預金口座設置ノ件 ロ 日語文化協會ニ研究委囑ノ件 ハ 人事ノ件	

會議名・年月日・時・場所	(本文)
財團法人 日本語教育振興會第三十六回理事會 昭和二十年一月十二日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通して番號をふると第37回に当たるが、原本では第三十六回と記されており、以下番號がひとつずつずれている。	一、出席者 近藤理事長 大岡理事 釘本理事 關野理事 村上理事 多田理事 相良理事 西尾理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事
	一、配布書類 第三十五回理事會協議要録 第三十六回理事會報告及議題
	一、協議要録事項 イ 人事ノ件 (秘密會) ロ 細江囑託ニ委囑スベキ研究課題ノ件 長沼總主事ヨリ先般細江囑託上京ノ節懇談セル内容ニツキ説明アリ右ニ基キ「日本語動詞ノ研究」ヲ委囑スルコトニ決定ス
	ハ 國語課ヨリ委囑事業ノ件 1 學習日本語 (1,450圓) 主任 福田囑託 (毎年繼續) 2 文化百科辭典 (十九年度1,700圓) 主任玉井茂氏 (十九年度ヨリ三年) 3 日本語教授便覽 (1,000圓) 主任中島研究部長 (十九年度) 4 日本語學習辭典 (十九年度4,500圓) 主任長沼常務理事 (十八年度ヨリ三年) 右ノ原案通り決定シ可及的速カニ着手スルコトトス
	ニ 日本語自習書ノ件 豫テ長沼總主事が「ニツボンタイムスウイークリー」ニ連載セル英文「日本語ノ初歩」ヲ泰語譯トシテ大阪某書店ヨリ出版頒布ノ許可方申込アリタル件ニツキ長沼總主事ヨリ説明アリ。右ハ本會ガ編纂發行スベキ泰語譯及安南語譯日本語自習書ニ重大ナル關聯アルヲ以テ寧ロ本會ニ於テ翻譯發行シ本會企畫ノ日本語自習書ニ代ラシムルコトニ決定ス
	ホ 大東亞地圖増刷ノ件 本會ニテ作成中ノ大東亞地圖ヲ文部省關係諸學校其他ニテ使用セシムルコトニ關シ近藤理事長ヨリ發言アリ。用紙ノ許ス範圍ニ於テ増刷スルコトニ決定ス。
	別紙 「第三十六回理事會報告及議題」
	一、報告 イ 昭和十九年十二月三十日文部省ヨリ昭和十九年度事業奨励金 金參千圓也交附セラレ、之ヲ受領ス
	一、議題 イ 人事ノ件 ロ 細江囑託ニ委囑スベキ研究課題ノ件 ハ 國語課ヨリノ委囑事業ノ件 1 學習日本語 2 文化百科辭典 3 日本語教授便覽 4 日本語學習辭典 ニ 日本語自習書ノ件
	財團法人 日本語教育振興會第三十七回理事會 昭和二十年一月十九日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通し番號では第38回
一、配布書類 第三十六回理事會協議要録 第三十七回理事會報告及議題	
一、協議事項 ナシ	
別紙 「第三十七回理事會報告及議題」	
一、報告 イ 昭和二十年一月十七日午後二時文部大臣官【邸】ニ於テ大日本戰時國民教化報國會第二回懇談會開催セラレ本會ヨリ長【沼】常務理事出席セリ	
二、議題 ナシ	
財團法人 日本語教育振興會第三十八回理事會	一、出席者 近藤理事長 大岡理事 釘本理事 相良理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事 今井研究員

會議名・年月日・時・場所	(本文)
昭和二十年一月二十六日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通し番号では第39回	一、配布書類 第三十七回理事會協議要録 第三十八回理事會報告及議題
	一、協議事項
	イ 理事選任ノ件 大東亞事務官久保田【義】膺氏ニ理事委囑ノ件ハ全員異議ナク決定セリ。
	別紙 「第三十八回理事會報告及議題」
	一、報告
	イ 一月二十一日上村主事死去同二十三日告別式執行セラル。
	一、議題
財團法人 日本語教育振興會第三十九回理事會 昭和二十年二月二日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通し番号では第40回	イ 理事選任ノ件
	一、出席者
	近藤理事長 大岡理事 關野理事 相良理事 釘本理事 西尾理事 多田理事 久保田理事長【沼】 常務理事兼總主事 今井研究員
	一、配布書類 第三十九(マ) 回理事會協議要録 第四十回(マ) 理事會報告及議題
	一、協議事項
	イ 職員勤勞奉仕ノ件 時局ニ鑑ミ本會職員各々分擔事項ノ簡捷ヲ圖リ能率ヲ高ムルコトニ努メ以テ製本作業ニ關シ勤勞奉仕ヲナシタキ旨長沼總主事ヨリ提議セントコロ、全員贊同、之ヲ實施セシムルコトニ決定ス 尚右作業ニヨル収益ハ職員ノ福利施設ニ充當スルモノトス。
	別紙 「第三十九回理事會報告及議題」
財團法人 日本語教育振興會第四十回理事會 昭和二十年二月九日 (金) 午前十一時半ヨリ 於文部省教學局長室 * 原本には九月二日とあり。通し番号では第41回	一、報告
	イ 本會顧問橋本進吉氏逝去ニツキ【二月二日】本會ヨリ香奠ヲ供シ長沼常務理事告別式ニ參列セリ。 【ロ 新生社團】
	一、議題
	イ 本會職員ノ勤勞奉仕ノ件 【製本 折本作業】
	一、出席者
	近藤理事長 大岡理事 關野理事 釘本理事 西尾理事 多田理事 久保田理事 長沼常務理事兼總主事 今井研究員
	一、配布書類 第四十回(マ) 理事會協議要録 第四十一回(マ) 理事會報告及議題
一、協議事項	
イ 國語辭典編纂ノ件 文部省委囑ニ係ル國語辭典編纂ノ件ハ原案審議之ヲ可決ス。 國語課委囑ニヨル辭書編纂(二〇, 二, 九)	
一. 規格 B判六號 約一, 二〇〇頁	
二. 収録工數 約三萬項	
三. 編纂期間 自昭和二十年二月至昭和二十一年三月 第一期(二月—八月) 第一□□□ 第二期(九月—三月) 再検討及□□	
四 編纂方法 第一期(主査一名、辭書委員七名及外部協力者若干名) 編纂員一名責任量毎月七百項 外部協力者ニ委囑分 約一萬項 第二期(主査一名、辭書委員三名) 編纂員一名責任量毎月一五〇〇項	
五 覺 書 本會研究員俸給(手當共) 14, 370圓 外部協力者分一項約三〇錢 3, 000圓	

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>辭書委員手當 (七名一人平均二〇〇圓) 1,400圓</p> <p>カード其他 1,500圓</p> <p>挿絵1,000 一箇三圓 3,000圓</p> <p>合計 22,270圓</p> <p>内. 國語課ヨリ助成 十八年度 1,400圓</p> <p>十九年度 4,500圓</p> <p>二十年度 未定</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第四十一回理事會</p> <p>昭和二十年二月二十三日 (金) 午前十一時半ヨリ</p> <p>於文部省教學局長室</p> <p>* 通し番号では第42回</p>	<p>一、出席者</p> <p>近藤理事長 相良理事 釘本理事 西尾理事 多田理事 久保田理事</p> <p>長沼常務理事兼總主事 今井研究員</p>
	<p>一、配布書類</p> <p>第四十一回 (マ) 理事會協議要録 第四十二回 (マ) 理事會報告及議題</p>
	<p>一、協議事項</p> <p>イ、言語理論研究委囑ノ件</p> <p>本件ハ佐久間九州帝大教授指導ノ下ニ同校言語學研究室和田助手ニ一ケ年ノ期間ヲ以テ委囑シ之ガ研究費八百圓ヲ給スルコトニ決定セリ。</p>
	<p>ロ、大東亞地圖作製ノ件</p> <p>大東亞地圖作製費用不足分ニ就キ大東亞省ノ助成金ヲ仰ギ之ガ刊行細目ニ就キテハ常務理事ニ一任スルコトトセリ。</p>
	<p>ハ、本會疎開ノ件</p> <p>本會ハ群馬縣佐渡郡采女村上淵名ニ分室ヲ設ケ戦局ノ推移ニ鑑ミ必要ニ應ジテ之ヲ實行スルコトニ決定ス。</p>
	<p>ニ、常務理事委任事項ノ件</p> <p>現下ノ實狀ニ即シ特別會計ニ屬スル常務理事委任金額ヲ一件二千圓圓ニ引上グルコトニ決定ス。</p> <p>「備考」</p> <p>財團法人日本語教育振興會委任事項 (抜粋)</p> <p>左ニ掲グル事項ハ常務理事ニ之ヲ委任ス</p> <p>三、一件五百圓以下ノ營繕、購入、売却及經常費ノ支出ニ關スルコト</p>
	<p>別紙 「第四十一回理事會報告及議題」</p>
	<p>一、報告</p> <p>イ、二月九日附日振發第一二六號及第一二七號ヲ以テ本會昭和二十年度使用紙量 (1,420,800封度) 並ニ□材 (五八〇疋) 配給配意方ヲ文部省教學局長宛申請セリ。</p> <p>ロ、二月十日大日本教化報國會參加承諾書ヲ同會宛提出ス。</p> <p>ハ、二月十三日昭和十九年度支那學務局本會補助金拾四萬圓ノ中第四回交附金參萬五千圓也ヲ受領ス。</p> <p>ニ、二月十五日第一回大日本教化報國會中央當會ガ文部省第一會議室ニ開催セラレ長沼常務理事出席セリ。</p>
	<p>一、議題</p> <p>イ、言語理論研究委囑ノ件【佐久間鼎博士門下】</p> <p>ロ、其他【大東亞地圖 單價 28圓 (見積)】</p>
	<p>財團法人 日本語教育振興會第四十二回理事會</p> <p>昭和二十年三月九日 (金) 午前十一時半ヨリ</p> <p>於文部省第三會議室</p> <p>* 通し番号では第43回</p>
<p>一、配布書類</p> <p>第四十二回 (マ) 理事會協議要録 第四十三回 (マ) 理事會報告及議題</p>	
<p>一、協議事項</p> <p>イ 絵本増刷ノ件</p> <p>本件ハ本會刊行ニ係ル繪本八種ノ中差當リ左記ノ五種ニツキ日本語文面ヲ増加シ入手紙量ニ照シ増刷 (約三十萬冊) スルコトニ決定セリ</p> <p>コドモノセカイ、ガクカウ、アヲゾラ、ニッポンノタテモノ、ヨイコドモたち、</p> <p>ロ 其他</p>	
<p>別紙 「第四十二回理事會報告及議題」</p>	

會議名・年月日・時・場所	(本文)
財團法人 日本語教育振興會第四十三回理事會 昭和二十年三月十六日十一時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通し番号では第44回	一、報告 イ、 二月二十二日附日振發第一二八號ヲ以テ昭和十九年度南方部補助金第三回及第四回分(七萬圓)請求書ヲ大東亞省支出官宛提出セリ。 ロ、 二月二十五日初等學校用日本語教本卷二、成人用速成日本語教本下卷及成人用速成日本語學習指導書上卷ノ出版届出ヲ完了セリ。 ハ、 二月二十七日附日振發第一二九號ヲ以テ日本出版會會長宛用紙割當ニ關スル通牒ニ對シ請書ヲ提出セリ
	一、議題 イ、 絵本増刷ノ件 ロ、 ナシ其他
	一、出席者 近藤理事長 關野理事 釘本理事 西尾理事 久保田理事 長沼常務理事兼總主事 今井研究員
	一、配布書類 第四十二回理事會協議要録 第四十三回理事會報告及議題
	一、協議事項 イ 華北日本語教育研究所委囑事業ニ對スル第三年度分支拂ノ件 「日支同一漢字ノ異議研究」ハ昭和十七年度以降三ヶ年繼續事業トシテ委囑シアリ昭和十九年度ヲ以テ完了ノ筈ナリシモ十八年度ニ於テ同所研究擔当者ノ移動其他ノ事由ニヨリ研究ノ遲延ヲ見ルニ至リタルヲ以テ十八年度分以降ノ支拂ヲ留保シ來リタリ。然ルニ今般同所佐藤研究部長ヨリ右研究ヲ續行シタキニヨリ十八年度留保分(一、七〇〇圓)ノ外十九年度分トシテ殘額(一、〇〇〇圓)ノ支給方希望申出アリ。審議ノ結果右ノ希望ヲ容レ十九年度分トシテ金壹千圓也ヲ支給スルコトニ決定ス。
	別紙「第四十三回理事會報告及議題」
	一、報告 イ 三月八日日本出版會會長挾間茂氏ヨリ會員番號三二五六六六ヲ以テ會員タルコトヲ證シ書籍(對外向教科書)及び雜誌(日本語)ノ出版權ヲ承認シ來レリ ロ 三月九日附二〇織局第一二二七號ヲ以テ農商省織維局長ヨリ昭和十九年度第四・四半期分トシテ左記ノ通り洋紙割當ノ通牒アリタリ 教科書本文用 洋紙 50,000封度 〃 表紙用 板紙 25,000封度
	一、議題 イ 華北日本語教育研究所委囑事業ニ對スル第三年度分支拂ノ件 ロ 其他
	一、出席者 近藤理事長 大岡理事 關野理事 相良理事 西尾理事 久保田理事 長沼常務理事兼總主事 中島主事
	一、配布書類 第四十四回(マ)理事會協議要録 第四十五回(マ)理事會報告及議題
一、協議事項 イ、 山口氏表彰方法ノ件 山口喜一郎氏表彰ノ件ハ同氏代理者ノ出席ヲ請ヒ東京ニ於テ舉式シ表彰狀及岡部會長揮毫ノ書等ヲ贈呈シ尚「日本語」ニ於テ之ガ記念號ヲ出スコトニ決定シ其ノ具体案ハ長沼常務理事之ヲ立案スルコトトセリ。 ロ、 日本語會館管理ノ件 事務室研究室等ヲ縮小シテ簡素ナル宿舍ニ設備シ本會職員及ビ本會關係者ノ中希望者ヲ住居セシメントスル案ニ就キ長沼常務理事ヨリ説明アリ全員ノ同意ヲ得タリ。	
別紙「第四十四回理事會報告及議題報告及議題」	
一、報告 イ、 三月十九日附日振發第一三一號ヲ以テ大東【亞】大臣宛大東【亞】地圖補助金追加金六萬五千圓也ノ交附方申請セリ ロ、 昭和二十年三月十五日附二〇織局第一三四四號ヲ以テ農商省織維局長ヨリ本會會長宛昭和二十年第一・四半期ノ紙ノ配給ニツキテハ昭和十九年度同期ノ八割ヲ□□	

會議名・年月日・時・場所

(本文)

	スル旨ノ通牒アリタリ。			
	一、議題			
	イ、山口氏表彰方法ノ件			
	ロ、日本語會館管理ノ件			
財團法人 日本語教育振興會 第四十五回理事會 昭和二十年三月三十日零時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通し番号では第46回	「第四十五回理事會報告及議題報告及議題」 (要録なし)			
	一、報告			
	ナシ			
	一、議題			
	イ、南方事務局關係二十年度豫算編成ノ件			
	ロ、主事任命ノ件			
	別紙 日本語教育振興會南方部昭和二十年度實施豫算案 (二〇、三、三〇)			
	一、収入之部			
		科目	豫算額	備考
		第一款 日本語教育振興會費	140. 000 00	
		第一項 政府助成金	100. 000 00	
		第一目 大東亞省南方事務局助成金	100. 000 00	
		第二項 売上収入	35. 000 00	
		第一目 教科書売上代	30. 000 00	成人用速成日本語教本・初等學校用日本語教本・其他三萬五千部売上代
	第二目 教育資料売上代	4. 000 00	會話書 自習書 其他	
	第三目 雜誌売上代	1. 000 00	「日本語」定期並ニ臨時購読者毎月四百名 (一名年二五〇錢)	
	第三項 雜収入	500 00		
	第一目 雜収入	500 00	預金利子其他	
	第四項 前年度繰越金	4. 500 00		
	第一目 前年度繰越金	4. 500 00		
	一、支出之部			
	科目	豫算額	備考	
	第一款 日本語教育振興會費	140. 000 00		
	第一項 俸給	14. 080 00		
	第一目 總主事俸給	4. 200 00	一人 月350圓	
	第二目 主事俸給	3. 840 00	一人 月180圓	
	第三目 書記俸給	1. 440 00	一人 月120圓	
	第四目 諸手當	4. 600 00	囑託手當賞與其他	
	第二項 事務費	9. 200 00		
	第一目 事務所費	3. 000 00		
	第二目 交通々信費	1. 500 00		
	第三目 會議費	1. 200 00	顧問會、理事會、委員會等	
	第四目 雜給及雜費	3. 500 00	事務員給、速記、謄写料等	
	第三項 研究調査費	8. 500 00		
	第一目 日本語教育研究費	8. 500 00	日本語卜南方諸語トノ比較、日本語教育振興ノ具体案研究等	
	第四項 指導養成費	4. 150 00		
	第一目 教育要員養成費	3. 150 00	講習會、研究會、個人指導等ニヨル要員養成	
	第二目 實際家指導費	1. 000 00	實際家懇談會 其他	
	第五項 出版費	102. 600 00		
	第一目 教科書出版費	64. 000 00	□編纂發行諸費 4. 000	

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>圓</p> <p><input type="checkbox"/>初等學校用日本語本卷 四、五、六一冊180頁 各五 千部整版印刷代(一部一 圓) 15.000圓</p> <p><input type="checkbox"/>同學習指導書卷四、五、 六一冊二五〇頁 各二千部 整版印刷代(一部二圓)</p> <p><input type="checkbox"/>中等學校用日本語教本卷 三、四 一冊180頁 各五千 部整版印刷代(一部一圓) 10.000圓</p> <p><input type="checkbox"/>同學習指導書卷三、四 一冊 250頁 各二千部印 刷製本代(一部二圓) 8.000圓</p> <p><input type="checkbox"/>「學習日本語」五種各一 千部 印刷製本代年十冊宛 (一部30錢) 15.000圓</p> <p><input type="checkbox"/>資料作製諸費 6.000圓 一冊250頁 各二千部印刷 製本代</p> <p><input type="checkbox"/>獨習用日本語副読本三種 各五千部印刷製本代(一部 一圓) 15.000圓</p> <p><input type="checkbox"/>教育資料三種各一千部 6.000圓 (一部二圓) 8.000 圓</p> <p>第二目 教育資料出版費 21.000 00</p> <p>第三目 雜誌費 13.100 00</p> <p>第四目 發送頒布費 4.500 00</p> <p><input type="checkbox"/>編輯諸費 3.500圓</p> <p><input type="checkbox"/>「日本語」一ヶ月二千部 印刷製本代(一部40錢) 9. 600圓</p> <p>包裝、保管、運賃、保険料 其他</p> <p>第六項 豫備費 1.470 00</p> <p>第一目 豫備費 1.470 00</p>
<p>財團法人 日本語教育振 興會第四十五回理事會 昭和二十年四月十三日 (金) 十二時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通し番号では第47回だ が、原本はここからまたひ とつ番号戻り「第四十五 回」と書かれている。</p>	<p>一、出席者 近藤理事長 大岡理事 關野理事 相良理事 西尾理事 久保田理事 長沼常務理事兼總主事 今井研究員</p> <p>一、配布書類 第四十五回理事會協議要録 第四十六回理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ 主事任命ノ件 安野愛亮ノ書記ヲ免ジ主事トシテ事業部長心得ニ補スルコトニ決定ス</p> <p>ロ 南方事務局ニ對スル回答ノ件 南方事務局長ヨリ要望アリタル事務簡素化並ニ減員ノ件ニツキテハ本會ガ從來ノ庶 務、會計、研究指導、圖書、雜誌、普及ノ七部ヲ廢合シ總務、研究、事業ノ三部トシ テ既ニ實施中ナルコト及ビ本會有給職員三十三名(應召者二名ヲ除ク)中疎開其他一 身上ノ都合ニヨリ最近退職セル者九名ノ補充ヲ行ハザルコトニヨリ右要望ニ應スル 旨回答スルコトニ決定ス</p> <p>別紙 「第四十五回理事會報告及議題報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ、三月三十一日大日本教化報【國】會第二回中央常會ニ中島主事出席シ同日本會昭和</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>十九年度事業補助金トシテ金壹千五百圓受領セリ</p> <p>ロ、四月五日文部省新館建物緊急取壊ノ為本會分室ヲ本部ニ合併セリ</p> <p>ハ、四月六日午後三時大東亞大臣官邸ニ於テ南方事務局長ヨリ關係外廓團(マ) 對シ事務ノ簡素化並ニ職員ニ關シ懇談アリ長沼常務理事出席セリ</p> <p>ニ、四月十一日指令兩行第一四七七號ニ依ル本會昭和十九年度補助金拾四萬圓ノ中第三回及第四回分金七萬圓也ヲ受領セリ</p> <p>ホ、四月十二日指令支司第二〇五號ニ依ル大東亞地圖製作昭和十九年度追加補助金六萬五千圓也ヲ受領セリ</p> <p>へ、近藤理事長左記ニ移転セラレタリ 板橋區上右神井町二丁目一九二五ノ二</p> <p>一、議題</p> <p>イ、主事任命ノ件 【安野氏ヲ主事ニ。事業部長心得ニ。現在書記一二・五圓 人的資源ノ戦力ニ。】</p> <p>ロ、南方事務局ニ對スル回答ノ件</p> <p>ハ、其他 【毎週金(五月末マデ)】</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第四十六回理事會 昭和二十年四月二十日 (金) 十二時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通し番号では第48回</p>	<p>一、出席者 近藤理事長 釘本理事 西尾理事 村上理事 長沼常務理事兼總主事 今井研究員</p> <p>一、配布書類 第四十六回(マ) 理事會協議要録 第四十七回(マ) 理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、同仁會ヨリ倉庫用トシテ貸室申込ノ件 大東亞省根道會計課長ノ紹介ニヨリ同省ノ仁平技師來館同仁會ヨリ支那ニ送附スベキ醫藥品ノ委託所罹災セルニツキ本會館内ニ一室貸與方申込アリタル旨長沼常務理事ヨリ説明アリ右ニツキ審議ノ結果同會事業ノ重要性並ニ本會ノ事業トノ關係ニ鑑ミ快諾スベキモ目下右ニ充當シ得ベキ部屋ハ興亞造形文化連盟使用中ナレバ同連盟ト交渉ノ上同仁會側ニ正式回答スルコトニ決定ス</p> <p>ロ、戰災救恤資金設定ノ件 過日ノ夜間爆撃ニヨリ本會職員中ニモ既ニ罹災セルモノアリ空襲ハ今後モ必至ノ狀況ナルニ鑑ニ罹災者ノ救恤ノタメ特別會計中ニ戰災救恤資金ヲ【設】定スベキ件ハ異議ナク可決セラレタルモ當日ハ大東亞省側理事出席セラレザリシヲ以テ長沼常務理事ヨリ連絡シ賛成ヲ得タル上實施スルコトニ決定セリ</p> <p>別紙 「第四十六回 理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ、四月十四日ノ空襲ニ際シ四〇ノ災害甚大ナリシニモ拘ラズ本會事務所ガ無事ナルヲ得タルハ天與ノ幸ナリ</p> <p>ロ、本會職員ニシテ罹災セル者次ノ如シ 主事 中島唯一(四谷區三榮町) 事務員 山内登美江(牛込區西五軒町)</p> <p>ハ、四月十四日ノ空襲ニ際シ大岡理事ヲ罹災セラレタリ</p> <p>一、議題</p> <p>イ、同仁會ヨリ倉庫用トシテ貸室申込ノ件</p> <p>ロ、戰災救恤資金設定ノ件</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第四十七回理事會 昭和二十年四月二十七日 (金) 十二時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通し番号では第49回</p>	<p>一、出席者 近藤理事長 大岡理事 西尾理事 村上理事 久保田理事 長沼常務理事兼總主事 今井研究員</p> <p>一、配布書類 第四十七回(マ) 理事會協議要録 第四十八回(マ) 理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、東部第二部隊本部ヨリ貸室申込ノ件 東部第二部隊ヨリ本館ノ一部ヲ倉庫用トシテ借用シ度シトノ申込アリタル【旨】長沼常務理事ヨリ説明アリ審議ノ結果既ニ本館ハ大東亞ニ於テ非常ノ際使用スベク豫定シアリタルニ就キ一應大東亞省官房會計課長ト協議ノ上回答スルコトニ決定セリ 【根道課長ヨリ辭退ノ希望アリ。】</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>ロ、大日本印刷株式会社ヨリ申出ノ件 大日本印刷株式会社ヨリ本會出版物ニ就キ其ノ製作過程ニ應ジテ費用ノ分割支拂ヒ方懇請スルトコロアリ右ハ現下ノ實情ニ鑑ミ止ムヲ得ザルモノト認メ之ヲ受【諾】スルコトニ決定セリ</p> <p>別紙 「第四十七回理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ、四月二十二日教報總第三號及第四號ニ基キ大日本教化報國會會員負擔金壹千圓並ニ昭和十九年度會費二百圓也ヲ同會事務總長宛納付セリ</p> <p>ロ、四月十三日ノ災害ニ依リ焼失セル用紙並ニ製本左ノ如シ</p> <p>○用紙 模造一號六十斤 147連ト250枚 マニラボール 33連ト380枚</p> <p>○製本 初等學校用日本語教本卷三 20000冊 初等學校日本語教本學習指導書卷二及卷三 紙 5000冊分</p> <p>○其他 「日本語」二月號表紙</p> <p>一、議題</p> <p>イ、東部第二部隊本部ヨリ貸室申込ノ件</p> <p>ロ、大日本印刷株式会社ヨリ申出ノ件</p> <p>ハ、其他</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第四十八回理事會 昭和二十年五月四日(金) 十二時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通し番号では第50回</p>	<p>一、出席者 近藤理事長 大岡理事 釘本理事 西尾理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事 今井研究員</p> <p>一、配布書類 第四十八回(マ) 理事會協議要録 第四十九回(マ) 理事會報告及議題</p> <p>一、協議事項</p> <p>イ、帝國印刷株式会社委囑出版物ノ件 本件ハ同社愛宕工場ノ戰災ニ件ヒ今後印刷ヲ續行スルコト不可能トナリタルヲ以テ目下引受中ノ印刷物ニ就キテモ此際一應辭退スルノ止ムナキ旨申出アリタルモ右ハ文部省及大東亞省ノ方針ト重大ナル關係アルヲ以テ尚今後ノ推移ニ□應シ再審議ヲナスコトトス</p> <p>ロ、山口氏表彰文ノ件 山口氏ノ不屈不撓ノ研究心コソハ今日ノ氏ヲアラシメタル所以ナルニ鑑ミ表彰文中ニ該當語ヲ搜入スル事トシ原案通り之ヲ決定セリ</p> <p>別紙 「第四十八回理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ、四月廿五日付ヲ以テ學習日本語第三輯ノ出版届提出ヲ完了セリ</p> <p>ロ、四月廿七日大日本教化報國會第三回中央常會開催セラレ長沼常務理事出席セリ</p> <p>ハ、四月廿八日大東亞省指令支司第二〇五號ヲ以テ昭和十九年度大東亞地圖作成追加補助金六萬五千圓ノ交附指令書ヲ受領セリ</p> <p>ニ、四月三十日興亞造形文化聯盟移轉セルニヨリ其ノ中一室ヲ同仁會ニ貸與スルコトトス</p> <p>ホ、五月一日國語科ヨリ委囑ヲ受ケタル本會ノ諸事業費合計一萬一千九百九十五圓ヲ受領セリ</p> <p>ヘ、帝國印刷株式会社愛宕工場ノ災害ニ際シ燒失セル本會出版物左ノ如シ 日本語入門ノ製版 日本語三月號及四月號組版 【五萬□□組版燒失 二月號表紙燒失】 日本語讀本學習指導書卷三、卷四、卷五ノ組版 日本語讀本卷一ノ製版及卷二ノ製版若干 成人用速成日本語讀本上卷ノ挿畫約二十枚 學習日本語第四輯ノ組版</p> <p>一、議題</p> <p>イ、帝國印刷株式会社委囑出版物ノ件</p> <p>ロ、山口氏表彰文ノ件</p> <p>財團法人 日本語教育振興會</p> <p>一、出席者</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
興會第四十九回理事會 昭和二十年五月十一日 (金) 十二時半ヨリ 於文部省第三會議室 * 通し番号では第51回	大岡理事 相良理事 西尾理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事 今井研究員
	一、配布書類
	第四十九回(マ) 理事會協議要録 第五十回(マ) 理事會報告及議題
	一、協議事項
	ナシ
	別紙 「第四十九回理事會報告及議題」
	一、報告
	イ、帝國印刷株式會社愛宕工場ノ災害ニ因リ文化読本「日本の紡織」(五〇〇〇冊)全部燒失セシ事其後判明セリ
	一、議題
	イ、ナシ
別紙 表彰狀	表彰狀 山口喜一郎殿 君ハ明治三十年以來四十有餘年ノ長キ或ハ臺灣ニ於テ或ハ朝鮮及關東州ニ於テ高邁ナル識見ト卓越セル經驗トヲ以テ専心國語教育ニ盡瘁シ其ノ功績極メテ顕著ナリ後更ニ中華民國ニ於ケル日本語教育ニ碎身シ同國ニ於ケル日本語教育ノ振興ヲ見タルハ實ニ君ノ貢獻ニ負フ所多大ナリ、是職トシテ君ガ熱誠ナル努力ト孜々トシテ撓マザル研究ニ因ルモノナリ、依ツテ茲ニ君ガ功績ヲ録シ以テ之ヲ表彰ス 昭和二十年 月 日 財團法人日本語教育振興會 會長 子爵 岡部長景
財團法人 日本語教育振興會第五十回理事會 昭和二十年六月一日(金) 十二時半ヨリ 於文部省教學局長室 * 通し番号では第52回	一、出席者
	近藤理事長 大岡理事 釘本理事 相良理事 關野理事 西尾理事 長沼常務理事兼總主事 今井研究員
	一、配布書類
	第五十回(マ) 理事會協議要録 第五十一回(マ) 理事會報告及議題
	一、協議事項
	ナシ
	別紙 「第五十回 理事會報告及議題」
	一、報告
	イ、五月五日附二〇號織局第一九七號ヲ以テ昭和二十年度第一四半期分海外向教科書關東州向教科書及國定教科書用洋紙一萬五千封度ノ割當數量ニ關スル通牒ヲ受領セリ
	ロ、五月二十四日及同二十五、六日ノ爆撃ニ際シ罹災セラレタル本會關係【役】職員次ノ如シ 會長 子爵岡部長景氏(赤坂區丹後町) 理事 相良惟一 【監】事 伊藤日出登氏(目黒區下目黒) 主事 中島唯一(杉並區和田本町) 安野愛亮(四谷區左門町) 研究員 伊丹美和子(淀橋區戸塚町) 猪【俣】幸子(世田谷區松原町) 八卷澄江(小石川區林町) 事務員 白石輝子(目黒區【鷹】番町) 研究助手 内田良治 佐藤敬太郎
ハ、五月三十一日長沼常務理事兼總主事教化報國會總務局長羽田雄隆氏ノ告別式ニ參列セリ	
一、議題	
ナシ	
財團法人 日本語教育振興會第五十一回理事會 昭和二十年六月八日(金) 十二時半ヨリ 於文部省教學局長室	一、出席者
	近藤理事長 大岡理事 釘本理事 關野理事 長沼常務理事兼總主事 今井研究員
	一、配布書類
	第五十一回(マ) 理事會協議要録 第五十二回(マ) 理事會報告及議題
一、協議事項	

會議名・年月日・時・場所	(本文)
* 通し番号では第53回	ナシ
	別紙 「第五十一回理事會報告及議題」
	一、報告
	イ、 五月二十四日及二十五、六日ニ罹災セラレタル本會役職員ニシテ其後判明セルモノ次ノ如シ 理事長 近藤壽治氏 宅(小石川區久堅町) 囑託 福田恆存(麴町區二番町) 事務員 福田妙子(")
	ロ、 五月二十六日甲武組倉庫ニ於テ燒失セルモノ左記ノ如シ 成人用日本語教本上巻 15,000部 陸軍軍政地域用教科書用紙【A】版模造二號 40封度ノモノ650連 同 【B】版模造二號 60封度ノモノ50連 本會用 模造三號 60封度ノモノ 35連 同 模造三號 100封度ノモノ 56連 同 印刷三號【A】版 35封度ノモノ 250連 同 印刷三號【B】版 60封度ノモノ 85連
一、議題	
ナシ	
財團法人 日本語教育振興會第五十二回理事會 昭和二十年六月十五日 (金) 十二時半ヨリ 於文部省教學局長室 * 通し番号では第54回	一、出席者 近藤理事長 大岡理事 釘本理事 關野理事 西尾理事 長沼常務理事兼總主事 今井研究員
	一、配布書類 第五十二回(マ) 理事會協議要録 第五十三回(マ) 理事會報告及議題
	一、協議事項 水上製本所機會器具買取ノ件 帝都數次ノ空襲ニ依リ大製本所ハ殆ド燒失シ殘存製本所モ又僅少トナリ其上日本出版會軍關係等ニ徵用サレ或ハ買取セラレントスル現狀ニ鑑ミ本會ハ出版事業ノ一貫作業遂行ノタメ緊急措置トシテ本會南方向出版物ノ製本ヲ現在續行シツツアル本郷區東片町水上製本所ノ機械器具一切ヲ金八萬圓ヲ以テ買取スルコトニ決定セリ
	別紙 「第五十二回 理事會報告及議題」
	一、報告
	イ、 六月六、七兩日諸學振興委員會國語國文學會文部省教學練成所ニ於テ開催セラレ長沼常務理事出席シ昭和十九年度研究課題ニツキ報告セリ ロ、 六月十一日永井茂彌氏ヨリ日本出版會理事辭任ニ伴ヒ本會評議員ヲモ辭任シ度キ旨文書ニ依リ申出アリタリ
	一、議題
	イ、 水上製本所機會器具買取ノ件
	一、出席者 大岡理事 關野理事 西尾理事 長沼常務理事兼總主事 今井研究員
	一、配布書類 第五十三回(マ) 理事會協議要録 第五十四回(マ) 理事會報告及議題
一、協議事項	
イ、 理事長選任ノ件 目下文部省各局編成機構ノ變革期ニ直面シ居ルニ省ミ新理事長ノ選任ハ之ヲ暫ク保留スルコトトセリ。	
ロ、 前理事長ニ對スル謝儀ノ件 本件ハ之カ前【例ニヨリ】得サル時局ニ當面セル狀況ニ鑑ミ【會長ト協議ノ上】常務理事至當ナ規畫ヲ立案シ之ガ具體策ヲ講ズルコトトセリ。	
ハ、 オフセット印刷機買取ノ件 本件ハ井口印刷所従業員幹部ノ熱意ヲ入レ本會事業部ノ飛躍的發展ヲ期シ當印刷所損傷機械ノ被害實況ヲ慎重ニ調査考察シ二三機械ノ復舊使用可能性如何ニ基キ復興許可ノ成否ヲ質シタル上當社社長ト折衝シ之【ヲ】買取スルコトトス。	

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>二、佛印文化會館ヨリ申出ノ件 戦局下海外向輸送ノ極メテ困難ナル【際】佛印文化會館ヨリ本會刊行ニ關ル成人用速成日本語教本(上卷並ニ下卷)ノ良畫ナル所以ノ故ニ複製刊行方申込アリタルニ就キ審議ノ上左記ノ條件ヲ附シ之ガ受諾ノ上ハ之ヲ許可スルコトニ決定セリ。</p> <p>1、【豫メ】部數ヲ明確ニスルコト 2、体裁並ニ定價ヲ變更セサルコト 3、本會名ヲ削除スル等ノコトナキコト</p>
	別紙 「第五十三回 理事會報告及議題」
	一、報告
	<p>イ、本會理事長文部省教學局長文學博士近藤壽治氏六月十三日附ヲ以テ廣島文理科大學學長ニ榮転セラル</p> <p>ロ、右ノ結果近藤理事長ニハ第五十二回理事會ニ於テ辭意ヲ表明セラレタリ</p>
	一、議題
	<p>イ、理事長選任ノ件 ロ、前理事長ニ對スル謝儀ノ件 【會長 總主事一任】 ハ、オフセット印刷機買収ノ件 【實地踏査ノ上】 【ニ、佛印文化會館 速成上下複製 部數 体裁 ヲ備ヘテ許可ヲウルコト】</p>
財團法人 日本語教育振興會第五十四回理事會 昭和二十年六月二十九日(金)十二時半ヨリ於文部省國語課長室* 通し番号では第56回	別紙 「第五十四回理事會報告及議題」(要録なし)
	一、報告
	<p>イ、六月十六日附ヲ以テ本會理事多田仁己氏地方總監府副參事官トシテ九洲地方總監府勤務ヲ命セラレ福岡市ニ就任セラル。</p> <p>ロ、六月十九日附ヲ以テ本會監事根道廣吉氏大使館參事官ニ任セラレ中華民國在勤ヲ命セラレ北京ニ赴カルルコトナレリ。</p> <p>ハ、主事安野愛亮召集ニ應ジ山口中部一一〇部隊ニ入隊スヘク六月二十七日八時三十分東京駅發ノ列車ニテ出立セリ。</p>
	一、議題
	ナシ
財團法人 日本語教育振興會第五十五(57)回理事會	* 資料なし
財團法人 日本語教育振興會第五十六(58)回理事會	* 資料なし
財團法人 日本語教育振興會第五十七(59)回理事會	* 資料なし
財團法人 日本語教育振興會第五十八(60)回理事會	* 資料なし
財團法人 日本語教育振興會第五十九(61)回理事會	* 資料なし
「日本語教授者懇話會」案内及會則案 昭和二十年十一月十日(日本語教育振興會ヨリ發信)	「日本語教授者懇話會 案内及會則案(昭和二十年十一月十日)」
	<p>冠省 来る十一月三十日(金曜日)午後三時から日本語教授者懇話會第一回總會を東京都神田區三崎町一丁目二番地財團法人日本語教育振興會會館で開きたいと存じますご多用中とは存じますが万障御繰り合せご出席下さいますやうご案内申上げます</p> <p>昭和二十年十一月十日</p> <p>日本語教授者懇話會 早々</p> <p>出席の有無折返し御回答下さいませ</p>
	同封の別紙「日本語教授者懇話會會則」
	日本語教授者懇話會會則
	第一條 本會ハ日本語教授者懇話會ト稱す

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>第二條 本會ノ事務所ハ之ヲ東京都神田區三崎町一丁目二番地財團法人日本語教育振興會内ニ置ク</p> <p>第三條 本會ハ會員相互ノ親睦向上ヲ図ルト共ニ日本語教授ノ進歩發展ニ寄與スルヲ以テ目的トス</p> <p>第四條 本會ハ前條ノ目的ヲ達成スルタメ左ノ事業ヲ行フ</p> <ol style="list-style-type: none"> 一 會員相互ノ連絡 二 日本語教授ニ関スル研究調査ノ發表 三 日本語教授資料ノ蒐集及作製 四 日本語教授ニ関スル諸般ノ會合 五 其他委員會ニテ必要ト認メタル事項 <p>第五條 本會ノ會員ハ日本語教授者及日本語教授ニ関心ヲ有スル者ニシテ本會ノ趣旨ニ賛同シタル者トス</p> <p>第六條 入會又ハ退會セントスル者ハ其旨委員長ニ申出ヅベシ</p> <p>第七條 會員ハ會費トシテ毎年一定ノ金額ヲ納ムルモノトス 但當分ノ間之ヲ徵收セズ</p> <p>第八條 本會ニ委員十二名及幹事若干名ヲ置ケ【各地方一名づつ 東京二、三名】【若干名ヲ置ク】</p> <p>第九條 委員ハ總會ニ於テ會員中ヨリ之ヲ選舉ス【會員推薦による】 委員ハ委員會ヲ組織ス</p> <p>第十條 委員ハ互選ヲ以テ委員長一名ヲ定ム【本委員長一名ヲ本部委員中ヨリ選ブ】</p> <p>第十一條 委員長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ統理ス</p> <p>第十二條 委員會ハ委員長之ヲ招集シ重要ナル會務ヲ審議ス</p> <p>第十三條 幹事ハ會員中ヨリ委員長之ヲ指名シ委員長ノ命ヲ受ケテ會務ニ従事ス</p> <p>第十四條 委員及幹事ノ任期ハ三年トス【委員任期ハ一年トス】 但重任ヲ妨ケズ</p> <p>第十五條 本會ノ經費ハ會費寄付金其他ノ諸収入ヲ以テ之ニ充ツ</p> <p>第十六條 本會則ハ委員三分ノ二以上ノ同意ナキトキハ之ヲ變更スルコトヲ得ズ 【十一月三日發會式】</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第六十回理事會 昭和二十年十二月一日 (土)十七時ヨリ 於本會 * 通し番号では第62回か</p>	<p>別紙 「第六十回理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ 大岡理事ハ今般千葉師範學校長ニ榮転セラル</p> <p>ロ 聯合國軍總司令部ノ依囑ニヨリ長沼總主事ハ同部内ノ日本語講習ヲ擔當シアリシガ十一月二十七日終講ス</p> <p>ハ 十月二十五日ヨリ開始セル日本語教授講習會ハ十一月二十四日終了ス 終了生三十五名ナリ</p> <p>一、議題</p> <p>イ 寄附行為變更並ニ役員更選ノ件</p> <p>ロ 語學教育研究會ニ貸室ノ件</p> <p>ハ 日華文藝懇話會主催「最近ノ中國事業並日華親善ニ關スル講習會」ノタメ十二月中旬五日間講堂貸與ノ件</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第六十一回理事會 昭和二十年十二月七日 (金)十七時ヨリ 於本會 * 通し番号では第63回か</p>	<p>別紙 「第六十一回理事會報告及議題」</p> <p>一、報告</p> <p>イ 昭和二十年十一月十日付指令第二十號ニ基ツキ昭和二十年本會支部事業補助金五萬圓也ヲ同十二月一日受領セリ</p> <p>一、議題</p> <p>イ 會長【辭任】ノ件</p> <p>ロ 其他</p> <p>【理事長選任ノ件</p> <ol style="list-style-type: none"> 一、移管 二、理事□□ 三、寄附行為變更 <p>安藤正次</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>藤村 姉崎 菊池 山本】</p>
<p>財團法人 日本語教育振興會第六十四回理事會 昭和二十年十二月二十七日午後五時ヨリ 於:東京都神田區三崎町一丁目二番地本會事務所 * 通し番号では第66回か</p> <p>「財團法人 言語文化研究所 設立趣意書」日付なし (1945年末ごろの草案か) (和文タイプに、ペンで修正が加えられている。用紙は、B4版、枠つき、罫線なし。左下に財團法人 日本語教育振興會 東京都神田區三崎町一丁目二番地」と印字)</p>	<p>「第六拾四回理事會議事録」</p> <p>一、 昭和二十年十二月二十七日午後五時ヨリ東京都神田區三崎町一丁目二番地本會事務所ニ於テ開催ス</p> <p>二、 總數八名中七名本人出席一名委任狀</p> <p>三、 理事 長沼直兄議長トナリ開會ト共ニ理事相良惟一、釘本久春ニ議事録署名人タルコトヲ依囑シ全員異議ナク可決ス 次ニ理事長沼直兄ヨリ 「本會ハソノ目的タル大東亜圈内ニ於ケル日本語ノ普及並ニ日本語教育振興ニ関スル諸事業ヲ行ヒ来タリシガ終戦後諸般ノ情勢ノ變化ニ伴ヒ其ノ目的タル事業ノ成功不能トナリタル為本年度豫定事業ノ終ルヲ俟チ、本會ノ解散方ヲ申請スベキコト並ニ本會ノ財産ハ近く設立セラルベキ財團法人言語文化研究所に譲渡スベキコト」ヲ提案。審議ノ結果全員一致可決シ午後六時散會ス</p> <p style="text-align: right;">議長 長沼直兄 署名人 相良 惟一 署名人 釘本久春</p> <p>別紙1「解散ノ事由」</p> <p>本會ハ其ノ目的タル大東亜圈内ニ於ケル日本語ノ普及並ニ日本語教育振興ニ関スル諸事業ヲ行ヒ来タリシガ終戦後諸般ノ情勢ノ變化ニ伴ヒ其ノ目的タル事業ノ成功不能トナリタル為解散ス</p> <p>「財團法人 言語文化研究所 設立趣意書」</p> <p>未曾有の事態に直面せる【した】わが国を再興し、更に将来世界に誇るべき文化国家を建設することは、われわれに課せられた重大な責務である。およそ文化の發展に對して、言語の担ふところは、實に多大である。けだし文化の發展は、思想の發展に因るものであつて、しかも思想の發展に對して言語の関するところはきはめて大きい。言語は、たゞに思想表現の具であるばかりでなく、思想そのものの基礎をなすものであるからである。</p> <p>されば【故に】言語の研究を等閑視して文化の發展を望むことは、まったく不可能であるといはなければならない。しかるに從來我【わが】国において、言語に関する確乎たる研究機関の存しなかつたことは、まことに遺憾なことであつて、将来文化国家として興隆しなければならぬわが国としては、是非かやうな研究機関の設置を見なければならない。今般財團法人言語文化研究所を設立しようとする趣意も亦實にこゝに存する。すなはち本研究所を設立して【は】、日本語並に世界各言語の研究及び言語に関する文化の研究をなし、學校に於ける言語教育並に一般社會の言語に関する教養を向上させ、且外国人に對する日本語教育を行ひ、内は以てわが国文化の發展に資し、外は國際親善の實を擧げようとするものである。</p> <p>抑々【そもそも】この事たる、国家の隆盛、人類の幸福を内容とする永遠の大事業であつて、その意義の重要なと共に多大の困難の【も】これに伴うことを覚悟しなければならない。【幸にして、從來外国人に對する日本語教育事業を行ひ来つた財團法人日本語教育振興會はその解散に當り資料・研究成果其他の寄附を申出でられて居るので之を譲り受け、本件救助事業の一部である日本語教育研究に資する豫定である。】故に本會【研究所】は国家と國民とを背景とし、大方有力者の助力と後援とを得て、これが實行機関として斯業遂行【この大事】のために努力をなさんと万全の盡卒を期するものである。</p>
<p>「昭和二十年度事業報告書」 昭和二十一年三月八日 財團法人 日本語教育振興會 理事長 長沼直兄より 外務大臣 吉田 茂 殿 あて</p>	<p>昭和二十年度本會事業左ノ如クニ御座候間及御報告候也</p> <p>一、 日本語教育ニ関スル研究 日本語教育振興ノ具体策ニツキテハ夫々ノ分野ニ於ケル専門家ヲ以テ委員會ヲ構成シ多角的ニ研究調査ノ結果一ノ成案ヲ得タリ</p> <p>二、 指導要請 昭和二十年九月及昭和二十一年二月ノ二回ニ亘リ各四週間宛日本語教育ニ関スル講習會ヲ開催シ第一回ニ於テ三十七名、第二回ニ於テ二十八名ノ講習修了者ヲ見タリ 昭和二十年十二月實際家懇談會ヲ本會ニ於テ開催シ五十數名ノ出席者アリ金田一春</p>

會議名・年月日・時・場所	(本文)
	<p>彦氏ノ研究發表ノ外出席者多數アリ日本語教育者ノ今後ニ於ケル活動及ビ責務ニツキ意見ノ開陳アリ本會ガ中心トナリテソノ力ヲ結集スルヤウ希望アリタリ</p> <p>三、教科書及教育資料ノ出版</p> <p>日本語教科用図書ノ印刷ハ組版ヲ終リタルニ終戦ニヨリ之ガ印刷ヲ見合スノ已ムナキニ至レリ雑誌日本語ニツキテハ昭和二十年四月號ノ全部印刷所ニ於テ罹災セルヲ以テソノ後銳意復興ヲ図リタルモ未ダ再發行ノ運ビニ至ラズ</p>
<p>「聯號国将兵ニ對スル日本語教授者講習會」費用支出相成度件</p> <p>昭和二十一年三月二十八日 財團法人 日本語教育振興會理事長より 文部省社會教育局長宛</p>	<p>昭和二十一年三(マ)月二十七日付「聯號国将兵ニ對スル日本語教授者講習會實施ニ関スル件」ニ依リ委託セラレタル事業ヲ實施致候ニ付所要經費ヲ支出相成度、支出決算書並報告相沿へ請求候也</p>
	<p>講習會成果報告</p> <p>記</p> <p>第一、目的</p> <p>文部省ノ委託ヲ受け「聯合國軍将兵ニ對スル日本語教授者講習會要項」ニ基キ聯合國軍将兵ニ對スル日本語教授ノ担任者ノ再教育竝ニ将来日本語教授ニ任スベキ者ノ養成ノ為ノ講習會ヲ實施ス</p> <p>第二、事業内容</p> <p>一、受講人員 四十二名(内七名ハ現ニ聯合國軍側ニ雇用中ノモノナリ)</p> <p>二、期間(時間) 三月七日-三月二十八日 一三八時間</p> <p>三、科目及講師</p> <p>イ 日本語教授法 七二時間</p> <p>教師論 東京女子大學教授 文部省囑託 西尾 實 一二時間</p> <p>日本語教師たる者は、まづ單なる教授技術者でありさへすればいいといふ様な安易な考は絶対に持つてはならぬ。一舉一動その公的私的生活行動そのものが、新日本の代表者たるべきである。軍国主義日本は完敗した。だが、そのために日本民族全体が卑屈になる必要は毫もない。殊に日本語教師たる者は、この敗戦日本を新文化日本として再建し、國際的にこれを公認して貫ふといふ大業の前衛的役割を果すものだ、といふ自覚の下に、希望にもえて真摯且明朗に行動すべきである。それにはまづ安易な腰掛け意識や時局便乗気分を絶対にすて去り、絶えず文化的教養の向上を図ると共に、正しい言語観、新しい国語意識、合理的な教授法体系を体得する様努力しなければならない。</p> <p>方法論 本會理事長 長沼直兄 二〇時間</p> <p>教授法における直接法と對譯法との對比得失の検討は既に解決済みの感がある。が、實際には純粹百パーセントの對譯方もない代りに、純粹百パーセントの直接法も存在しないといつてよからう。といつて、それが直接法の体系をくずすものだと考へて不安がる必要はない。これは、直接法では何故學習者の母語をできるかぎり使用せぬかといふ本旨をよく理解すればすぐわかることである。現下の教授法の問題の焦点は、何をいかに理解させるよりも、何をいかに發表させるかといふ点にある。換言すれば、所謂照合一致の方法よりも結合合体の方法に力をいれるのである。これが本来直接法の根本主旨に外ならない。この意味において、はじめて直接法なるものが言語活動の本質に立脚したものだといへる。かうした方法で日本語教授を行はなければ、正しい言語活動能力は發達し得ないと思ふ。</p> <p>教材論 元北京師範大學助教授 本會主事 上甲幹一 二〇時間</p> <p>言語教授においては、教材と教法とが密接な聯関を持つべきは言ふまでもな</p>

會議名・年月日・時・場所 (本文)

い。どちらか一方を過度に重視すれば必ず破綻を生ずる。したがって、教材の選定は必ず教法を豫定して行はなければならぬが、その際ぜひとも併せ考へなければならないのは、學習者の年齢である。従来はとかく青年又は成人である學習者に少年用甚だしきは幼年用の教材を與へて日本語教授を行つてきたきらひがある。これではかりにいかにかに教法がすぐれてゐたとしても、心理的に學習の興味をそがれる結果、教授効果は案外振はないこととならう。この点大いに反省されなければならない。實際問題としては少くとも幼少年用と青成年用の二種別を考へる必要があると思ふ。而して現在の日本語教授界の状況では、前者よりも後者の教材体系確立が急務だと思ふので、本會では日本語學習第一期用教材として、まづ成人向な「數系列教材」を編纂した。これによれば、青成年にも心理的にさうギャツプを感じさせず、同時に直接法教授の最大眼目たる統一・聯関・反復・漸明等の特色も充分發揮できて、第二期以後の學習の根底を培へると思ふ。

演習

国學院大學講師 鈴木正蔵 二〇時間

進駐軍の日本語教授の見學を手掛りとして演習を行ふ計畫をたてたが、同軍では見學を一切許さぬため、これは出来なくなつた。又折悪しく國際學友會は解散し、日華學院も閉校直前であつたため、いづれも見學不能であつたのは實に残念であつた。止むを得ず、主として導入期の教材を與へて教案を作らせ、それについて相互に批判研究しあつたり、或は一人が教師となり、他は學習者となつて問答したりする形式で模擬的に演習を行つた。

日本語要説

三六時間

概論 本會總主事

中島唯一

一二時間

従来、外国人に對する日本語教授者は教授者自身の母國語である日本語に對するきわめて不正確な知識を以て教授するため被教育者に對して十分の満足と與へられない場合が非常に多い。日本語に関する基礎的知識を修得するため、各論に移る序説として「言語一般」「日本語の構造」「日本語内の言語の相違」等に就き其の要点を説明し又將來各自の研究のため主要な書目の解題を行ひ終りに現在の國語問題の動向を解説した。

音韻論 日華學院教授 實踐女子専門學校講師 金田一春彦 九時間

(一) 日本語の音節 (二) 日本語の音素 (三) 日本語のアクセント

についてその概略をのべた。日本語の音節は、一般日本人にとつて極めて日常茶飯的な事實故、普通閑却されがちのことであるが、英語の音節に比較すると大きな差異があり、米人の日本語發音癖の根底は實に日本語の音節に對する認識不足から來てゐると見られる故、これについては出来る限り詳しく説いた。その特徴は、

(1) 日本人は各音節を、同じ長さに、同じ強さで、而も平らに、發音することを意図してゐること。

(2) 日本語に於ては撥音節・促音節も一個の獨立した音節であり、所謂長母音は二音節であること、などである。

「日本語の音素」「日本語のアクセント」については諸先輩の研究成果を参照し、日本語の各音素、各音調の具体的な發音法、英語におけるそれらとの類似の音素と音調との比較、及び米人の一般に陥りやすい誤つた發音傾向の大体をのべたが、口から耳への實地教授である故、書籍による字から眼への教授とは異なる長所をもつたことと思ふ。

語詞論 元海軍教授

林 大 一二時間

日本語文法を講じたが、限られた時間内のこと故、重点主義をとり、米人に習得困難と思はれる左の項目について解説を試みた。

一、日本語に於ては單語排列の順序、即ち、日本語においては主語一述語、客語一歸著語、修飾語一被修飾語、補足語一形式語の順序が極めて嚴格で、この順序が逆に成ることはない。又獨立詞は付屬辭が逆に成ることはない。又獨立詞は

會議名・年月日・時・場所 (本文)

付屬辭に先行す。
 二、日本語においては待遇関係が嚴格で、話の主題が尊敬すべき人であるか、謙讓すべき人であるか、話の相手が尊敬すべき人であるか、然らざるか、によつて異なる表現法を用ひ、これが動詞をはじめ、助動詞・代名詞・一般名詞・形容詞に廣く関係をもつ。
 三、日本語習得の一つの難関は助詞の使ひ分けにある。で、助詞の中用法の注意すべきものについて解説した。たとへば主語を表す「ガ」と「ハ」に於て「ガ」は文の主語に、又は主語と述語双方に、重点がおかれた場合に用ひる。「ハ」は文の述語に重点がおかれ場合に用ひるなど。
 四、動詞・形容詞・助動詞の活用について。

文字論 本會囑託 齋藤 正 一二時間
 文字の發達について歴史的概観を與へ、日本に於ける文字として漢字の利用、平仮名・片仮名の發生と進化とを説明し特に表記法として「送仮名」「分別書き方」等日本語教授の實際に於いて問題となるべき諸点については外国人の理解し難き項目を實例を擧げて教材に基き説明し、国字問題の所在に言及した。

ハ 英會話 長沼アントネット 一二時間
 講習生の大部分は英語の基礎的知識は持つてゐるが會話の経験が無いのでごく簡単な用事さへ足す事が出来ない状態である。依つて英會話の教材としては、基本的知識の整理と平易な日常用英文の反復練習とを兼ね行ひ得るものとして置換法を用ひた。これによつて學習者は基本的文型を理解すると同時に、自分自身で反復練習の機會を持ち得るのである。教室では教授者の英語を聞き取る練習をし、自宅では自ら發表の練習が出来るので短時間のうちに平易な日常用語を聞き取り、又簡単な意志表示を行ひ得るやうになる。又この方法は同時に日本語教授の一方法をも暗示してゐるものでもある。

ニ 英米ノ作法 本會研究員 浅野鶴子 九時間
 一 日本人との考へ方の相違
 (イ) 社會生活に對する考へ方の相違
 (ロ) 婦人に對する考へ方の相違
 二 英米人との交際上注意すべきこと
 (イ) 服装について(他人に不快感を與へぬことを第一と考へ、清潔なものを身につける。日本流の内容さへあれば外觀はかまはぬといふ考へ方とは違ふ)
 (ロ) 會話の話題について(一身上の事柄を話題にせぬこと。身体に関することはあからさまに言はぬこと)
 (ハ) 訪問についての心得(約束の仕方。紹介に関すること。名刺の使い方)
 (ニ) 食事の心得(食卓に於ての作法。食べ方の注意。食事中慎むべきこと。礼の言ひ方の相違)
 (ホ) 贈答品について(無暗に贈り物をせぬこと。礼の言ひ方の相違)
 (ヘ) 吉凶禍福の挨拶の仕方(考へ方の相違)

第三 所要経費
 別紙支出決算書の如し

新旧字体対照表

ア	亜	亞
アツ	圧	壓
イ	囲	圍
イ	医	醫
エイ	営	營
エイ	栄	榮
エイ	衛	衛
エン	円	圓
エン (シオ)	塩	鹽
オウ	欧	歐
オウ	応	應
オウ (サクラ)	桜	櫻
カ	価	價
カ	仮	假
カイ	絵	繪
カイ	回	回
カイ (エ)	会	會
カク	覚	覺
カク	画	畫
カク	拡	擴
ガク	学	學
カン	歓	歡
カン	観	觀
カン	関	關
カン	巻	卷
キ	帰	歸
キ	気	氣
キ (カメ)	亀	龜
キュウ	旧	舊
キョ	拠	據
キョ	挙	舉
キョウ	挟	挾
キョウ	教	教
ギョウ (アカツキ)	暁	曉
ク	区	區
ケイ	軽	輕
ケイ	徑	徑
ケイ	繼	繼
ケイ	経	經
ゲイ	芸	藝
ケツ	欠	缺
ケン	剣	劍
ケン	検	檢
ケン	献	獻
ケン	顕	顯
ケン	験	驗
ケン	権	權
ケン	県	縣
コウ	広	廣
コウ	鉞	鑕
コウ	高	高

コウ	恒	恆
ゴウ	号	號
コク	国	國
コク	黒	黑
サイ	濟	濟
ザツ	雑	雜
サン	賛	贊
サン	参	參
サン	算	纂
ザン	残	殘
ジ	児	兒
ジ	辞	辭
シ (ハ)	歯	齒
ジツ	実	實
シャ	写	寫
シャク	釈	釋
ジュ	寿	壽
ジュウ	従	從
ジュウ (シブ)	渋	澁
ショ	処	處
ショウ	将	將
ショウ	称	稱
ショウ	証	證
ショウ	焼	燒
ジョウ	条	條
ジョウ	状	狀
ショク	嘱	囑
ショク	触	觸
シン	真	眞
シン	慎	慎
ジン	尽	盡
スウ	数	數
スウ	枢	樞
セイ	清	清
セイ	静	靜
セイ	精	精
セイ (アオ)	青	青
セイ (コエ)	声	聲
セン	専	專
セン	戦	戰
セン	銭	錢
セン (アサい)	浅	淺
ソウ	壮	壯
ソウ	争	爭
ソウ	総	總
ゾウ	蔵	藏
ゾク	属	屬
ゾク	続	續
タイ	体	體
タイ	台	臺
タイ	対	對

タク	沢	澤
タク	択	擇
タン	単	單
タン	担	擔
ダン	団	團
チュウ (ヒル)	昼	晝
チョウ	聴	聽
チョウ	庁	廳
チン	鎮	鎮
テン	転	轉
テン	転	轉
テン	点	點
ト	凶	圖
トウ	党	黨
トウ	当	當
トウ	祷	禱
トク	徳	德
ドク	独	獨
ドク	読	讀
ハイ	廃	廢
バイ	売	賣
ハツ	澆	撥
ハツ	発	發
バン	蛮	蠻
フ	付	附
フツ	払	拂
フツ	仏	佛
ヘン	変	變
ベン	弁	辯
ホウ	宝	寶
ホウ	豊	豐
マン	万	萬
マン	満	滿
ヤク	訳	譯
ヨ	余	餘
ヨ	予	豫
ヨ	与	與
ヨ	誉	譽
ヨウ	謡	謠
ヨウ	様	樣
ヨウ	揺	搖
ライ	来	來
ラン	乱	亂
リョウ	両	兩
レイ	励	勵
レイ	礼	禮
ロウ	劳	勞
ロウ	楼	樓
ロク	録	錄
ワン	湾	灣

3. 1940年代の日本語教育史研究の意義——「あとがき」に代えて

本報告は、日本語教育史研究のこれからは生かされることを願って刊行される。そしてその日本語教育史研究が、今後の日本語教育に貢献することを願う。資料のみに終始した「報告2」の終わりにあたって、その活用法を示唆するという意味を込めて、1940年代の日本語教育史研究の意義と有用性について記してみようと思う。

1. 1940年代という時代

日本語教育史のみならず、日本の社会や文化を考えるに当たって、第一次大戦後から五五年体制成立まで¹とか、1935年から1955年まで²といった、敗戦をはさんだ前後をまとめて捉える研究が、近年盛んである。総力戦体制における社会変容に注目した研究成果も多く生まれている。山之内靖(2003)は、今日の「グローバリゼーションの時代」と言われる状況は、総力戦時代を脱却しようとする動向をはらみつつ、総力戦時代に達成された社会変容を前提として踏まえることなしには出現できなかった、と分析している³。

日本語の「国際化」もまた、交通・情報手段の発達に伴い、国境を越えた人や物、情報の移動が量的に拡大してゆく中、今日の「グローバリゼーション」へとつながる一連の世界的な動きの中の必然であった。総力戦体制下の社会変容の中に日本語の「国際化」はあったのであり、それが戦後の日本語教育の基礎を築いたことに疑いの余地はない。

戦時中満洲鉄道にかかわった優秀な技術者が、戦後その技能を生かして日本の新幹線を作り上げたとか、戦争中に軍用機の製作にかかわっていた技術者たちが、戦後日本の優れた小型自動車の開発を成し遂げたというような話はよく耳にする。戦争中にそれまでになかった規模で実施された非日本語母語話者の日本語学習のための調査・研究は、その残された成果や資料のみならず、かかわった人物の内部に蓄積され、その人物を通して戦後に生かされている。人間の一生は大抵、戦争の時期より長いのだ。

1940年代というのは、その前半は1930年代に動き始めた状況に加速度のついた時期であり、後半は1950年代への展開の準備期間でもあった。1940年代というのは、まさに日本語教育の戦時と戦後をつなぐ要の時期である。

1940年代の研究の意義はまずここにある。この時期の資料を詳しくみてゆくことで、日本語教育の戦時と戦後のつながりを解明することができる。残念ながら従来、このことが十分になされないまま、憶測に基づく記述がなされることがあり、それが事実を正しく語っていない場合がある。

当時を知る世代の人々が高齢に達している今、そしてまた「日本語教育の推進」の声が高まりつつある今、この時期に関する調査・研究は喫緊の課題であると言ってもいい。

¹ 伊藤之雄・川田稔編(1999)『環太平洋の国際秩序の模索と日本——第一次世界大戦後から五五年体制成立——』(山川出版社)など。

² 『岩波講座 近代日本の文化史7 総力戦下の知と制度 1935-55年 1』(岩波書店、2002)、『岩波講座 近代日本の文化史8 感情・記憶・戦争 1935-55年 2』(岩波書店、2002)など。

³ 山之内靖・酒井直樹編(2003)『総力戦体制からグローバリゼーションへ』平凡社、p.12

2. 日本語教育の戦時と戦後のつながりを解明する

1930年代から拍車のかかる世界情勢の大きな変化の中で、日本語教育は各方面から注目され、大きな役割が期待された。いよいよ時局がさし迫ってくる1945年8月の敗戦までの1940年代前半ほど官民挙げて日本語教育が推進された時期はない。

文部省・興亜院に関わる「日本語教育振興会」のみならず、外務省の国際文化事業としての「国際文化振興会」「国際学友会」など、この時期に国策として力を入れてとりくまれた日本語普及事業、また日本語教育活動は、特に1941年12月の開戦以降は「大東亜共栄圏構想」を推進理念とするものに集約され、その展開に加速度がついた。

1940年8月の敗戦という国家の大事を貫いて、日本語教育はその前後の歴史を如何に刻んできたのか。その事実を明らかにすることが1940年代の日本語教育史研究の基礎作業である。膨大な地域で多様に展開されたそれぞれの実態を明らかにしてゆく作業は、地道に進められなければならない。そしてまた、戦中戦後を貫いた日本語教育推進母体の理念や活動の推移を辿ることも大切である。

本研究でとりあげた「日本語教育振興会」は今日の「学校法人長沼スクール」(2008年度末までは「財団法人言語文化研究所」)に、「国際文化振興会」は今日の「独立行政法人国際交流基金」に発展的に引き継がれ、最近まで同じ名称で存続していた「国際学友会」も2004年3月に解散して「独立行政法人日本学生支援機構」の中にその一部として吸収されたが、いずれも戦後の日本語教育に重要な役割を果たしてきた。「財団法人言語文化研究所附属東京日本語学校」の長沼直兄の著作と、「国際学友会」の教科書は1970年代まで国内外で最もよく利用された日本語学習書であった。海外の日本語教育への支援事業は、今日も「独立行政法人国際交流基金」の重要な事業の一つである。

これらの組織の日本語普及事業また日本語教育活動の1940年代の経験を辿ると、日本の国の在り方、外交政策や教育政策、文化政策と、それに深く関わって存在する日本のそして世界の社会環境(特に非日本語母語話者と日本語との接触の場のあり方)、文化環境、言語環境の変化と日本語教育の関わりが炙り出される。国際関係が緊張したとき、文化外交や言語教育が注目され予算が傾けられることは珍しいことではないが⁴、この時期の日本語教育の歴史に分け入ると、歴史のダイナミズムの中に言語教育、日本語教育が如何に翻弄されながら展開を遂げたのか、何を達成し何に挫折したのかが浮き彫りになる。

1945年8月の敗戦でその推進理念が潰えた後、いわゆる「外地」での日本語教育こそ消滅したものの、日本語教育に関する調査・研究等にかかわる遺産は継承され、戦後の日本における日本語教育を牽引する役割を果たした。日本語教育が推進されるべきものとして奨励されること自体、近代以降の日本においてこれが否定されたことは一度もない。

3. 埋もれていた事実を明らかにし、誤った記述を正す

残念ながら1940年代の日本語教育史については、一部に事実と異なる言説が流通している。その典型は、1945年の敗戦をもって「侵略のための日本語教育」が「国際交流のため

⁴ 最近では、オイルショックをきっかけに1974年、アラブ世界初の大学の日本語専攻コースとして、国際交流基金の支援によりカイロ大学文学部日本語日本文学科が開設されたことが想起される。

の日本語教育」へと全く新しく生まれ変わった（傍点は河路による）という物語の中に描かれるものである⁵。

「日本語教育振興会」が敗戦後 GHQ に解散を命じられたとする例が、最近も見られた。『月刊 日本語』（アルク）の「まんがで覚える日本語の歴史」という連載の 9 回目⁶、2006 年 5 月号の「戦後の日本語教育事情」である。戦後 GHQ の米人が日本語教育など必要ないと解散を命じ（長沼直兄は泣く泣く去り）、1947 年にようやく日本語学習の必要性を認め、「アメリカ大使館」に長沼直兄を呼んで日本語を学んだと、漫画を使って説明している。

実際には、日本語教育振興会が敗戦後 GHQ によって解散させられたという事実もなければ、GHQ が 1947 年になるまで日本語教育の必要性を認めなかったという事実もない。それどころか、彼らは敗戦直後の 10 月、「日本語教育振興会」に日本語講習を依頼し、長沼直兄らはこれに応えた。解散の申請を決定したのは、1945 年 12 月 27 日、長沼直兄が議長をつとめた日本語教育振興会の理事会の議決によってであり、外務・文部両大臣より解散が正式に許可されたのは翌年 5 月のことであった。その間、「日本語教育振興会」は事業を継続し、連合国軍将兵のための日本語教員養成講座も実施していた。そしてこの活動は、そのまま、「財団法人言語文化研究所」の設立準備活動と位置づけられ、その新しい名称の組織に引き継がれた。「解散」の判断は、引き継ぐべき事業を継承するための手続きであった。

この報告書に収めた会議録は、長沼直兄が理事長として財団法人日本語教育振興会の解散を決定する 1945 年 12 月 27 日の第六十四回理事会で終わりであるが、関連資料として、同年 11 月 10 日付で日本語教育振興会より発信された「日本語教授者懇話会」の開催案内状と、その封筒に同封されていた同会会則案、また、1946 年 3 月 8 日付の財団法人日本語教育振興会理事長長沼直兄より外務大臣宛の「昭和二十年度事業報告書」、同年 3 月 28 日付の財団法人 日本語教育振興会理事長より文部省社会教育局長宛の「聯号国将兵ニ対スル日本語教授者講習会」の報告等も載せておいた。実際にはこれらの文書が作成されている同時期に、同時進行で財団法人言語文化研究所の設立準備が行われ、長沼直兄は両組織の責任者としてその事務手続きを中心になって進めていたことを示す文書が残されている。本報告書では、設立準備関係の文書は最小限にとどめたが、河路（2007・2008・2009）⁷で

⁵ 関正昭（1997）『日本語教育史研究序説』（スリーエーネットワーク）など。

⁶ 「まんがで覚える日本語の歴史 9 戦後の日本語教育事情」（『月刊 日本語』（アルク）2006 年 5 月号, pp.48-51）。参考文献として日本語教育学会編（2005）『新版 日本語教育事典』（大修館書店）ほか、木村宗男編（1991）『講座日本語と日本語教育 第 15 巻 日本語教育の歴史』、関正昭・平高史也編（1997）『NAFL 選書 日本語教育史』（アルク）など、日本語教育史に関して関心を持つ人が紐解くであろう代表的なものが挙げられている。

⁷ 河路由佳（2007）「長沼直兄による敗戦直後の日本語教師養成講座——1945 年度後半・「日本語教育振興会」から「言語文化研究所」へ——」（『日本語教育研究』第 52 号）財団法人言語文化研究所 pp.1-33, 2007）
河路由佳（2008）「長沼直兄らによる戦後早期の日本語教育のための調査研究——1945-46 「日本語教育振興会」から「言語文化研究所」へ（その 2）——」（『日本語教育研究』第 53 号）財団法人言語文化研究所 pp.1-43, 2008）

河路由佳（2009）「1945 年・1946 年「日本語教育振興会」から「言語文化研究所」へ——附属東京日本語学校設立前史の「通説」再考——」（『東京日本語学校 開校 60 周年記念誌』東京日本語学校開校 60 周年記念誌編集委員会, pp.71-96）* 本報告書の 3 冊目「報告 3」にほぼ同内容のものを掲載予定。

は、これらの文書に触れて、財団法人日本語教育振興会から財団法人言語文化研究所への移行の時期の事実関係を明らかにしている。

1940年代に「日本語教育振興会」に象徴される統制によっておよそ日本語教育にかかわるすべての現場、機関や人々が戦時の国家目的のために統合され、日本語教育にかかわる調査・研究・実践が未曾有の規模で推進され、さまざまな議論を重ね、1945年8月の敗戦で、戦時にかかわる目的が失せた後に、その遺産を土台に戦後の日本語教育が築かれていったという事実は忘れるべきではない。

資料に即して事実を知り、先人のなした仕事をその膨大な資料を通して追体験し、その達成に敬意を払いつつ、その失敗を繰り返さない智恵を、私たちはここから学ばなければならない。

4. 現代のそして未来の日本語教育のために

文化外交や言語教育の必要性が特に声高に叫ばれるのは国際関係の緊張の高まった時期だと述べたが、現代もその時期であるに違いない。現在、独立行政法人国際交流基金の「海外における日本語教育」のページには「支援から推進へ」というキャッチフレーズが掲げられている⁸。量的な需要拡大に対応する「支援型」から質的な変化も捉えながら需要を発掘していく「推進型」へ、徐々にそ事業の重点をシフトしていくと説明され、「国際社会へ向けて、文化資源としての日本語を打ち出して行くことが、ジャパンファウンデーションに課せられた使命である」としている。

ほんの60-70年ほど遡った時代に未曾有の規模で「日本語教育の推進」が図られた事実を今こそ思い起こす必要がある。それが何を目的に如何に展開され、敗戦を経て何を失い何を残したのか。現場のそれぞれの学習者の人生にとってその学習は価値あるものであり得たのかどうか。また、それぞれの教師の人生にとって、その経験は何であったのか。

1940年代の日本語教育史研究が、今日のそして今後の日本語教育を担う者にとって如何に大切な認識をもたらすかについての実感は増すばかりである。

「文化交流」と「文化侵略」は決して対立するものではなく、両者は常に表裏一体であり、およそ言語教育はこれらを本質的に内在させている。「文化侵略」性の強い現場にも「文化交流」は生まれるし、「文化交流」を目的とする善意の現場にも「文化侵略」性は潜んでいる。その本質を見極めてこそ、私たちは未来の日本語教育に夢を描くこともできるのではないだろうか。

思い込みが激しく傲慢な教師、研究不足で軽率な教師は、残念ながらいつの世にもいる。教育、言葉の諸問題について真剣に考え誠意を尽くす教師も、また、いつの世にもいる。私たちがもし、戦時の日本語教員であったなら、何を考え何に悩み、何に感動しただろう。何に驚き、何に涙しただろう。自分の生きる時代を、多面的に客観的に見ることはいつ誰にとっても難しい。どれほど善意にあふれ誠を尽くしたつもりでも、気づかずに誤りを犯

⁸ http://www.jpf.go.jp/j/japan_j/about.html 2007年1月15日確認。なお、2005年8月付のパンフレットにも表紙に「海外における日本語教育事業について——支援から推進へ——」と同じ文言が書かれている。

していることがある。時を隔てて、残されたさまざまな資料をつきあわせてみることで、ようやくその姿が見えてくる。それが、歴史研究の醍醐味である。

現代を生きる私たちに現代を見極めることは至難である。しかしながら、ある現象が、過去のある時期の現象に極めて似ているとしたら、私たちはその時のことを参照することで、起こりうるマイナスの事態を予測し、これを回避しようと努力することができる。もしその完全な回避が無理でも、それによってひきおこされる弊害を最少にすることはできる。過去に選べばよかったのに選べなかったもうひとつの道を、模索してみることもできる。

1940年代の研究は、おそらく日本語教育史研究の中でも、最も現代に有用な示唆をもたらす研究となるはずで、その第一級の資料たる日本語教育振興会の活動資料をここにまとめることができたのは、感慨深いものがある。活用していただきたいと願っている。

この研究は、財団法人言語文化研究の堀道雄理事長、鈴木潤吉校長、また、前校長の長沼美奈子先生はじめ財団法人言語文化研究所の全面的なご協力によって実現した。そして、研究代表者の長谷川恒雄先生が3年間の研究期間、我々を指導しつつ中心になって研究を進めてくださった。よい機会をいただけたことに感謝している。

また、(株)国際文献印刷社の笠井健さんには、複雑な作業をお願いすることになってしまったが、煩をいとわず実にきれいに仕上げてくださいました。深く感謝の意を表します。

2010年3月 「報告2」編集責任者 河路 由佳